

柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 9

— 柏市大松遺跡 —
縄文時代以降編 2

平成 28 年 3 月

独立行政法人 都市再生機構
公益財團法人 千葉県教育振興財團

柏北部東地区 埋蔵文化財発掘調査報告書 9

— かしわ おおまつ
柏市大松遺跡 —

縄文時代以降編 2



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第754集として、独立行政法人都市再生機構の柏北部東地区土地区画整理事業に伴って実施した柏市大松遺跡の3冊目の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回報告するのは大松遺跡北部の縄文時代以降の調査成果です。すでに報告した南部では縄文時代中期中葉の環状集落を発見しました。一方北部は、隣接する富士見遺跡や駒形遺跡とつながる縄文時代前期前葉から前期中葉の集落を形成していたことがわかり、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 堀 田 弘 文

凡　　例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による柏北部東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県柏市小青田字大松334-1ほかに所在する大松遺跡(8)～(18)(遺跡コード217-031)の上層の調査成果分である。
- 3 大松遺跡(1)～(7)の調査成果については千葉県教育振興財団報告第589集『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書1－柏市大松遺跡－旧石器時代編』、同第666集『柏北部東地区埋蔵文化財調査報告書4－柏市大松遺跡－縄文時代以降編1』としてすでに報告済である。
- 4 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 5 本書の執筆分担は下記のとおりである。

第1章	主任上席文化財主事 森本和男・山口典子
第2章第5節以外	遺構 上席文化財主事 小高春雄、遺物 森本・山口
第5節	上席文化財主事 橋本勝雄
第3章第1節	遺構 小高、遺物 山口
第2節	小高
第4章第1節	山口
第2節	橋本

編集は山口が行った。

なお、縄文土器について上守秀明氏、貝製品について西野雅人氏の御指導、御協力を得た。

- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構および柏市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院1/25,000地形図「流山」(N1-54-25-1-2)・「守谷」(N1-54-25-1-1)
 - 8 図版1の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和48年撮影のものを使用した。
 - 9 本書で使用した座標は日本測地系に基づく平面直角座標(国家標準直角座標第IX系)で、図面の方位はすべて座標北である。
 - 10 整理作業にあたり遺構番号を振りなおし、第2表に調査時の遺構番号との対照表を示した。
 - 11 遺物に付した番号は、平面図・写真図版に共通して使用した。土器は遺構ごとの通し番号、土製品類、石器・石製品類は縄文時代、中・近世の時代ごとにそれぞれ通し番号を付している。
 - 主要な遺物の出土位置は平面図・断面図に示した。図中では土器は「・」、土器以外の遺物は「□」で示し、土製品に「D」、石器・石製品に「S」をそれぞれの番号に冠して土器と区別した。
 - 縄文時代の織維土器は、土器断面に「・」を付した。

本文目次

序文

凡例

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査・整理の方法と概要	4
第2節 遺跡の位置と環境	10
1 遺跡の位置と地理的環境	10
2 周辺の遺跡	11
第2章 縄文時代の遺構と遺物	19
第1節 壴穴住居	19
第2節 土坑類	115
第3節 遺構外出土縄文土器	145
第4節 土製品	151
第5節 石器	154
第6節 貝層出土の動物遺体	206
1 貝層サンプルの分析資料と分析方法	206
2 脊椎動物遺体の分析資料と分析方法	207
3 脊椎動物遺体の分析結果	207
4 貝製品	212
第3章 古墳時代以降の遺構と遺物	215
第1節 古墳時代	215
第2節 中・近世	217
1 概要	217
2 溝群	217
3 土坑群	219
第4章 まとめ	225
第1節 大松遺跡の縄文時代集落について	225
第2節 縄文時代の石器と生産活動	229
1 石器群の様相	229
2 生産活動	230
報告書抄録	卷末

挿 図 目 次

第1図 大松遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第35図 SI-146 (3)、SI-138 (1)	62
第2図 柏北部東地区遺跡群位置図	3	第36図 SI-138 (2)、SI-139	63
第3図 グリッド分割図	4	第37図 SI-140	65
第4図 周辺の地形と調査範囲	5	第38図 SI-141 (1)	67
第5図 大松遺跡全体図	8	第39図 SI-141 (2)	68
第6図 大松遺跡遺構分布図	9	第40図 SI-142、SI-143	69
第7図 繩文時代遺構分布図	18	第41図 SI-144 (1)	71
第8図 SI-003、SI-112	20	第42図 SI-144 (2)、SI-147	73
第9図 SI-113	21	第43図 SI-148	74
第10図 SI-114 (1)	23	第44図 SI-149 (1)、SI-175 (1)	76
第11図 SI-114 (2)	24	第45図 SI-149 (2)	77
第12図 SI-115・SI-145 (1)	25	第46図 SI-149 (3)、SI-175 (2)	78
第13図 SI-115・SI-145 (2)	27	第47図 SI-150	80
第14図 SI-145 (3)、SI-116 (1)	29	第48図 SI-151・SI-152 (1)	82
第15図 SI-116 (2)、SI-117	30	第49図 SI-151・SI-152 (2)	83
第16図 SI-118、SI-119	32	第50図 SI-153・SI-154 (1)	85
第17図 SI-120	33	第51図 SI-153・SI-154 (2)、SI-155	87
第18図 SI-121・SI-122・SI-123 (1)	35	第52図 SI-156、SI-157	88
第19図 SI-121・SI-122・SI-123 (2)	36	第53図 SI-158・SI-159 (1)	90
第20図 SI-124・SI-128 (1)	37	第54図 SI-158・SI-159 (2)	91
第21図 SI-124・SI-128 (2)	38	第55図 SI-160・SI-167 (1)	92
第22図 SI-125	40	第56図 SI-160・SI-167 (2)	94
第23図 SI-126・SI-127	42	第57図 SI-167 (3)、SI-161	96
第24図 SI-129、SI-130 (1)	44	第58図 SI-162・SI-163 (1)	98
第25図 SI-130 (2)	45	第59図 SI-162・SI-163 (2)	99
第26図 SI-131、SI-132 (1)	48	第60図 SI-163 (3)、SI-164	101
第27図 SI-132 (2)	49	第61図 SI-165	103
第28図 SI-133 (1)	51	第62図 SI-166、SI-168	104
第29図 SI-133 (2)、SI-134	53	第63図 SI-169、SI-170 (1)	106
第30図 SI-135	54	第64図 SI-170 (2)、SI-171、SI-172	108
第31図 SI-136 (1)	56	第65図 SI-173・SI-174 (1)	110
第32図 SI-136 (2)	57	第66図 SI-173・SI-174 (2)	111
第33図 SI-137、SI-146 (1)	58	第67図 SI-176	113
第34図 SI-146 (2)	59	第68図 SI-177、SI-178、SI-179	114

第69図	SI-180	115	第101図 繩文時代石器（12）	174
第70図	縄文時代土坑（1）	118	第102図 繩文時代石器（13）	175
第71図	縄文時代土坑（2）	119	第103図 繩文時代石器（14）	176
第72図	縄文時代土坑（3）	121	第104図 繩文時代石器（15）	177
第73図	縄文時代土坑（4）	124	第105図 繩文時代石器（16）	178
第74図	縄文時代土坑（5）	126	第106図 繩文時代石器（17）	179
第75図	縄文時代土坑（6）	128	第107図 繩文時代石器（18）	180
第76図	縄文時代土坑（7）	130	第108図 繩文時代石器（19）	181
第77図	縄文時代土坑（8）	133	第109図 繩文時代石器（20）	182
第78図	縄文時代土坑（9）	135	第110図 繩文時代石器（21）	183
第79図	縄文時代土坑（10）	138	第111図 繩文時代石器（22）	184
第80図	縄文時代土坑（11）	140	第112図 繩文時代石器（23）	185
第81図	縄文時代土坑出土土器（1）	141	第113図 繩文時代石器（24）	186
第82図	縄文時代土坑出土土器（2）	142	第114図 繩文時代石器（25）	187
第83図	縄文時代土坑出土土器（3）	143	第115図 繩文時代石器（26）	188
第84図	縄文時代土坑出土土器（4）	144	第116図 繩文時代石器（27）	189
第85図	縄文時代土坑出土土器（5）	145	第117図 繩文時代石器（28）	190
第86図	遺構外出土縄文土器（1）	147	第118図 繩文時代石器（29）	191
第87図	遺構外出土縄文土器（2）	149	第119図 繩文時代石器（30）	192
第88図	遺構外出土縄文土器（3）	150	第120図 繩文時代石器（31）	193
第89図	縄文時代土製品	152	第121図 貝層サンプルから採集された魚類遺体	
第90図	縄文時代石器（1）	163	のメッシュ別組成と遺構別組成	
第91図	縄文時代石器（2）	164	(NISP比)	208
第92図	縄文時代石器（3）	165	第122図 SI-141出土貝製品	213
第93図	縄文時代石器（4）	166	第123図 古墳時代、中・近世遺構分布図	214
第94図	縄文時代石器（5）	167	第124図 SI-181	216
第95図	縄文時代石器（6）	168	第125図 中・近世遺構分布図	218
第96図	縄文時代石器（7）	169	第126図 中・近世土坑（1）	220
第97図	縄文時代石器（8）	170	第127図 中・近世土坑（2）	221
第98図	縄文時代石器（9）	171	第128図 中・近世出土遺物	224
第99図	縄文時代石器（10）	172	第129図 大松遺跡周辺の縄文時代遺構分布図	227
第100図	縄文時代石器（11）	173	第130図 大松遺跡時期別遺構分布図	228

表 目 次

第1表 大松遺跡発掘調査歴(第8次～第18次)…	6	第12表 大松遺跡の貝層サンプルから検出された	
第2表 大松遺跡遺構一覧(第8次～第18次)…	6	脊椎動物遺体の組成(NISP・MNI)…	211
第3表 周辺の主な遺跡…	11	第13表 大松遺跡から検出された現地採集の脊	
第4表 縄文時代土製品計測表…	153	椎動物遺体の同定結果…	212
第5表 縄文時代石器遺構別器種組成表…	155	第14表 中・近世陶磁器、土器、土製品一覧…	222
第6表 縄文時代石器石材別器種組成表…	156	第15表 板碑・砥石一覧…	223
第7表 縄文時代石器属性表…	194	第16表 錢貨一覧…	223
第8表 貝層出土遺構一覧と貝種組成表…	206	第17表 大松遺跡縄文前期石器の機能・用途別	
第9表 貝類計測値分布…	207	組成…	231
第10表 大松遺跡から採集された脊椎動物遺体 の種名一覧…	208	第18表 飯積原山遺跡縄文中期石器の機能・用	
第11表 大松遺跡の貝層サンプルから検出された 脊椎動物遺体の同定結果…	209	途別組成…	231

図 版 目 次

図版1 遺跡周辺航空写真	図版17 縄文土器(2)
図版2 縄文時代竪穴住居(1)	図版18 縄文土器(3)
図版3 縄文時代竪穴住居(2)	図版19 縄文土器(4)
図版4 縄文時代竪穴住居(3)	図版20 縄文土器(5)
図版5 縄文時代竪穴住居(4)	図版21 縄文土器(6)
図版6 縄文時代竪穴住居(5)	図版22 縄文土器(7)
図版7 縄文時代竪穴住居(6)	図版23 縄文土器(8)
図版8 縄文時代竪穴住居(7)	図版24 縄文土器(9)
図版9 縄文時代竪穴住居(8)	図版25 縄文土器(10)
図版10 縄文時代竪穴住居(9)	図版26 縄文土器(11)
図版11 縄文時代土坑(1)	図版27 縄文土器(12)
図版12 縄文時代土坑(2)	図版28 縄文土器(13)
図版13 縄文時代土坑(3)	図版29 縄文土器(14)
図版14 縄文時代土坑(4)	図版30 縄文土器(15)
図版15 古墳時代～中・近世遺構	図版31 縄文土器(16)
図版16 縄文土器(1)	図版32 縄文土器(17)

- 図版33 繩文土器（18）
図版34 繩文土器（19）
図版35 繩文土器（20）
図版36 繩文土器（21）
図版37 繩文土器（22）
図版38 繩文土器（23）
図版39 繩文土器（24）
図版40 繩文土器（25）
図版41 繩文土器（26）
図版42 繩文土器（27）
図版43 繩文土器（28）
図版44 繩文土器（29）
図版45 繩文土器（30）
図版46 繩文土器（31）
図版47 繩文土器（32）
図版48 繩文土器（33）
図版49 繩文土器（34）
図版50 繩文土器（35）
図版51 繩文土器（36）
図版52 繩文土器（37）
図版53 繩文土器（38）
図版54 繩文土器（39）
図版55 繩文土器（40）
図版56 繩文時代土製品
図版57 繩文時代石器（1）
図版58 繩文時代石器（2）
図版59 繩文時代石器（3）
図版60 繩文時代石器（4）
図版61 繩文時代石器（5）
図版62 繩文時代石器（6）
図版63 繩文時代石器（7）
図版64 繩文時代石器（8）
図版65 繩文時代石器（9）
図版66 繩文時代石器（10）
図版67 繩文時代石器（11）
図版68 繩文・古墳時代遺物、中・近世遺物（1）
図版69 中・近世遺物（2）

第1章 はじめに

第1節 調査の概要（第1～6図、第1・2表）

1 調査の経緯と経過

東京都心の秋葉原から北東に向かって茨城県つくば市までを走る常磐新線（つくばエクスプレス）が、平成17年8月24日に開業した。常磐新線は常磐線の混雑緩和、都心と筑波研究学園都市とを結ぶ路線として計画された。また平成元年に制定された「大都市地域における宅地開発及び鉄道整備の一体的推進に関する特別措置法」により、鉄道建設と沿線の宅地開発が一体化して進められることになった。鉄道整備と一体となって実施された沿線開発は、1都3県全体で13重点地域、17地区、約3,000haの土地区画整理事業である⁽¹⁾。バブル経済で地価が高騰し、東京近郊にさらなる宅地供給を目指んだ開発計画だった。

常磐新線に関する千葉県内の開発は、南流山駅の本地区68ha（千葉県）と西平井・鰐ヶ崎地区52ha（流山市）、流山セントラルパーク駅の運動公園周辺地区232ha（千葉県）、流山おおたかの森駅の流山新市街地地区286ha（都市再生機構）、柏の葉キャンパス駅の柏北部中央地区273ha（千葉県）、柏たなか駅の柏北部東地区170ha（都市再生機構）の6か所で、合計1,081haの広さに及ぶ。

鉄道沿線で開発の対象となった地域は、東京湾沿岸から約20km北上した江戸川と利根川の流れが大きく分離し始める地点にある。付近一帯には、旧石器時代から近世に至るまでの遺跡が豊富に分布している。とくに縄文時代前期の貝塚が多く分布していることから、氷河期終結後の温暖化による約6,000年前の縄文海進で、内陸のこの周辺近くにまで海が浸食していたと予測されている。

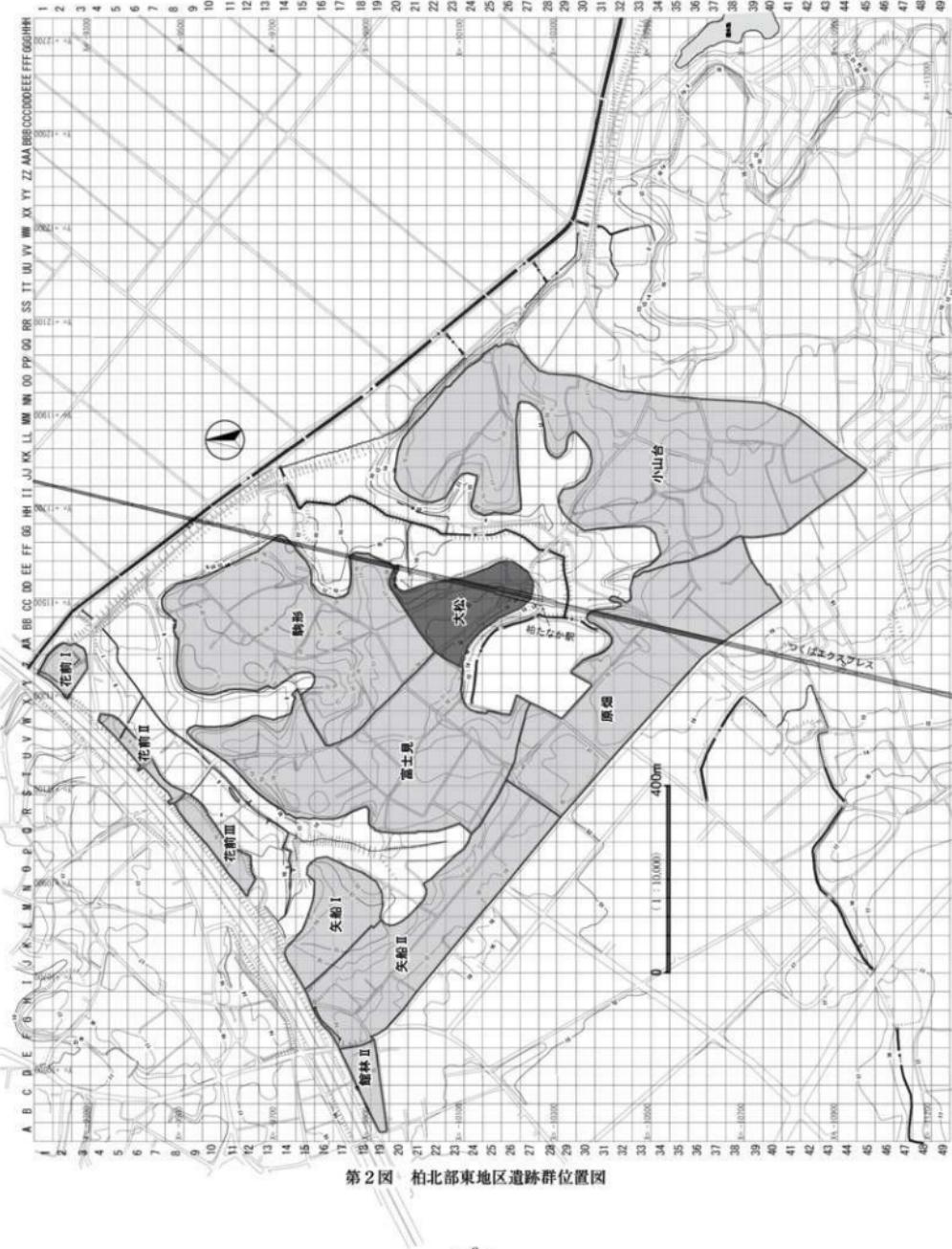
独立行政法人都市再生機構は常磐新線建設に関連して、茨城県との県境に近い柏たなか駅周辺で、面積169.9ha、計画人口17,000人、事業費501億円の「柏北部東地区土地区画整理事業」を計画した。その後事業の見直しが行われ、東側の区域を事業区域から除外することになった。

開発事業の実施にあたり、千葉県教育委員会へ事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した結果、予定地内には花前Ⅰ遺跡・花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・船林Ⅱ遺跡・駒形遺跡・富士見遺跡・大松遺跡・原畠遺跡・小山台遺跡・寺下前遺跡・宮前遺跡・八反目台遺跡の合計14遺跡（以下、柏北部東遺跡群とする）が所在する旨、回答があった（第2図）。千葉県教育委員会は都市再生機構とその取扱いについて協議した結果、現状換地等により現状保存が可能な部分を除き記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を公益財團法人千葉県教育振興財團に委託することになった。しかし、平成27年度以降は寺下前遺跡・宮前遺跡・八反目台遺跡は事業地外となった。

柏北部東地区的発掘調査は平成11年2月1日から開始され、調査の成果は、大松遺跡・駒形遺跡・原畠遺跡・富士見遺跡について、これまで8冊の調査報告書として刊行された。

大松遺跡は柏北部東地区的中央、つくばエクスプレス柏たなか駅の北西側に位置する。発掘調査は平成13年度からはじまり、平成22年度までの10年間で18次に及んだ。整理作業は平成15年度からはじまり、平成27年度まで行われた。大松遺跡の調査成果については、平成19年度に『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書1－柏市大松遺跡－旧石器時代編』、平成23年度に調査区南部にあたる第1次調査～第7次調査の縄文時代以降を収載した『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4－柏市大松遺跡－縄文時代以降編1』の2冊の報告書が刊行された。本書には調査区北部にあたる第8次調査～第18次調査の縄文時代以降





第2図 柏北部東地区遺跡群位置図

の成果が収録される。

第8次から第18次までの調査対象面積は15,757m²で、調査期間、調査面積、調査担当者を第1表に示した。また、出土遺物の水洗・注記の基礎整理作業は発掘調査と併行して行われている。

整理作業は、平成26年4月1日から平成28年3月31日まで行った。担当者および作業内容は以下のとおりである。

平成26年度

期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

調査部長 伊藤智樹

整理課長 今泉 潔

担当者 主任上席文化財主事 森本和男・山口典子 上席文化財主事 小高春雄・橋本勝雄

主任主事 平井真紀子

内容 記録整理～原稿執筆の一部

平成27年度

期間 平成27年4月1日～平成28年3月31日

整理課長 岸本雅人

担当者 主任上席文化財主事 山口典子

内容 原稿執筆の一部～報告書編集・刊行

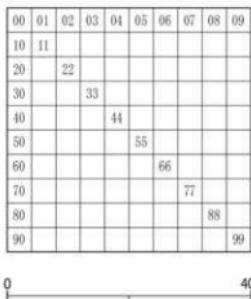
2 調査・整理の方法と概要

発掘調査の開始に当たり、柏北部東地区の調査対象区域全体に公共座標（旧座標 国家標準直角座標第IX系）を基準とした方眼網を設定した（第2図）。方眼は40m×40mの区画を大グリッドとし、さらにその大グリッド内を4m×4mに分割して、100個の小グリッドに細分した。大グリッドは西から東へA、B、C、…、北から南へ1、2、3、…と記号を付け、両者を組み合わせてA1、B2、…と呼称した。小グリッドは北西隅を起点として西から東へ00、01、02、…、北から南へ00、10、20、…と番号をつけ、南東隅が99となる（第3図）。これを大グリッドの呼称と組み合わせ、例えばBB19-24のような表記になる。遺構・遺物の位置はこの方眼網に基づいて記録した。大松遺跡は東西がZ～EE、南北が20～27の南北に長い範囲にある。

発掘調査はまず上層の確認調査・本調査を行い、続けて下層の確認調査・本調査を実施した。

上層の調査は対象面積の10%を原則にトレチを設定し、確認調査を行って遺構および遺物の分布状況を調べた上で、本調査範囲を決定して本調査を実施した。遺構の調査は表土除去後、覆土の土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、土層断面図や平面図などの記録を作成した。上層の本調査終了後、調査対象面積の2%を原則にグリッドを設定して下層の確認調査を実施した。その結果、一定の石器の分布状況が認められたものについては、本調査範囲を決定して本調査を実施し、発掘調査を完了した。

上層本調査にあたっては、調査次ごとに遺構番号を付した。遺構



第3図 グリッド分割図



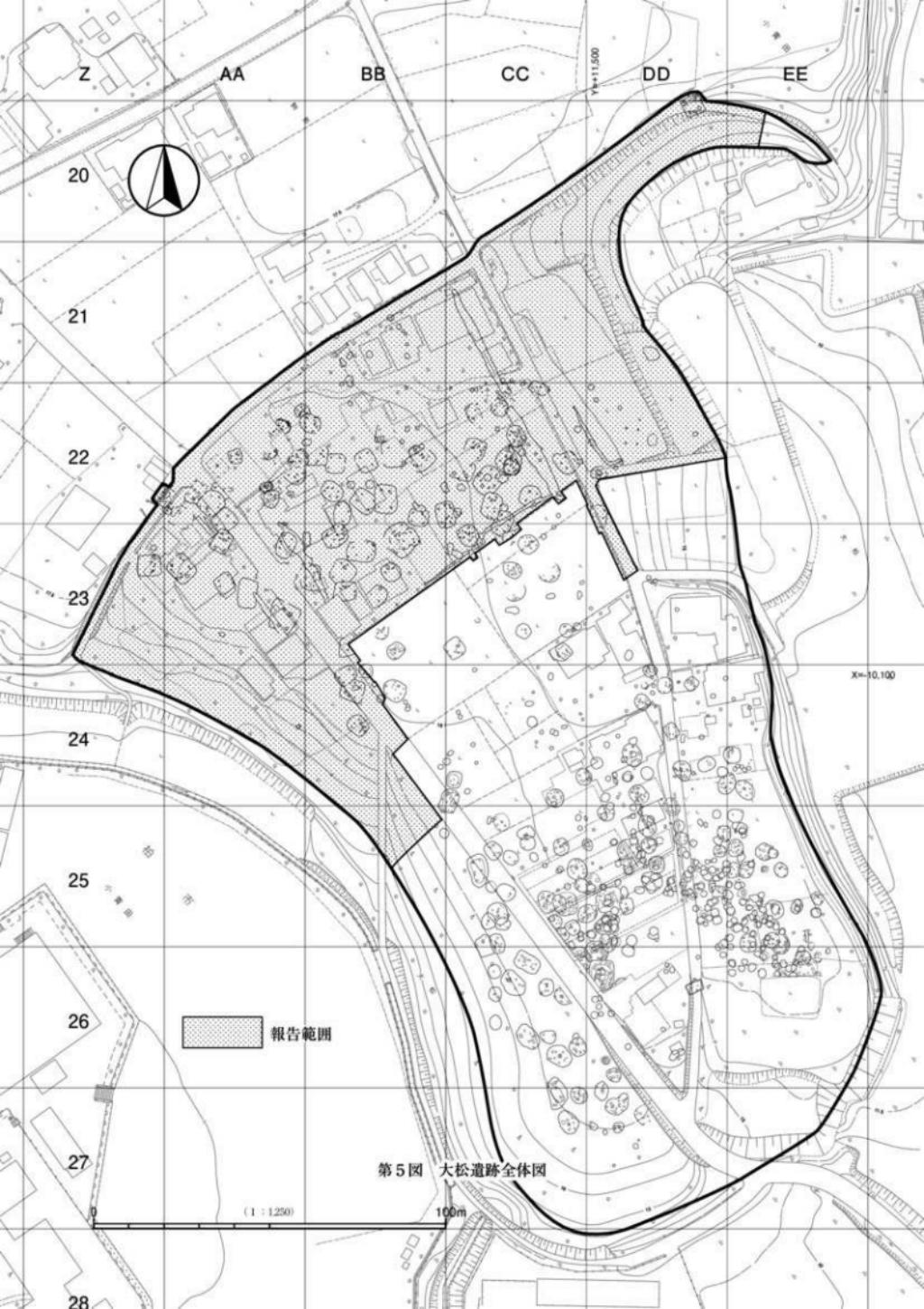
第1表 大松遺跡発掘調査歴（第8次～第18次）

調査年度	調査年次	調査期間	調査研究部長	所長（課長）	担当者	住 所	調査対象面積m ²	確認調査面積m ²		本調査面積m ²	
								上層	下層	上層	下層
平成15年度	8	15.06.23～15.07.24	森木 邦	田坂 勝		柏市小菅田字大船334-114号	2,590	320	108	410	0
	9	16.03.01～16.03.12				柏市小菅田字大船276-114号	610	610	24	0	0
平成16年度	10	16.07.15～17.08.31	矢川三男	田坂 勝	藤合卓雄 柏田 誠	柏市小菅田字大船285-112号	738	738	32	476	0
	11	16.09.01～16.09.10			藤合卓雄	柏市小菅田字大船279-214号	327	327	16	0	0
	12	17.01.19～17.03.29			藤合卓雄	柏市小菅田字大船279-214号	3,119	310	124	1,900	0
	13	17.02.21～17.03.07			藤合卓雄	柏市小菅田字大船288-214号	280	280	16	120	0
	14	17.03.08～17.03.29			岡田光志 藤合卓雄	柏市小菅田字大船285-112号	3,180	320	0	900	0
	15	17.04.04～17.07.29	矢戸三男	田坂 勝	岡田光志 藤合卓雄	柏市小菅田字大船285-112号	0	0	148	2,280	64
平成17年度	15	18.12.05～18.12.20	矢戸三男	田坂 勝	渡邊高志	柏市小菅田字大船328-1地先	580	580	12	0	0
平成18年度	16	20.04.28～20.05.27	大原正義 及川淳一	西野真人		柏市小菅田字大船328-112号	831	720	48	463	83
平成20年度	17	22.05.06～22.07.09	及川淳一	森本勝雄	宮 重行	柏市小菅田字形町282-1地先付近	1,552	174	84	1,352	0
	18	22.10.19～22.11.29			宮 重行	柏市小菅田字形町283の一部112号	1,959	1,959	81	846	0
							15,757	6,338	903	8,947	147

第2表 大松遺跡遺構一覧（第8次～第18次）

遺構名	II遺構名	遺構種別	位置	時期	遺構名	II遺構名	遺構種別	位置	時期				
SI-0003	13	SI-001	壁穴住居	BB24	純文前期	黒浜	SI-142	14	SI-010	壁穴住居	CC22	純文前期	黒浜
SI-112	10	SI-001	壁穴住居	BB23	純文前期	黒浜	SI-143	14	SI-011	壁穴住居	CC23	純文前期	黒浜
SI-113	10	SI-002	壁穴住居	BB23	純文前期	黒浜	SI-144	14	SI-012	壁穴住居	BB23	純文前期	黒浜
SI-114	30	SI-003	壁穴住居	BB24	純文前期	黒浜	SI-145	14	SI-013	壁穴住居	BB23	純文前期	黒浜
SI-115	30	SI-004	壁穴住居	BB23	純文前期	黒浜	SI-146	14	SI-015	壁穴住居	CC22	純文前期	黒浜
	14	SI-014					SI-147	14	SI-017	壁穴住居	CC23	純文	
SI-116	12	SI-001	壁穴住居	Z23	純文前期		SI-148	14	SI-018	壁穴住居	BB22	純文前期	黒浜
SI-117	12	SI-002	壁穴住居	A23	純文前期		SI-149	14	SI-019	壁穴住居	BB22	純文前期	黒浜
SI-118	12	SI-003	壁穴住居	A23	純文前期		SI-150	14	SI-020	壁穴住居	BB22	純文	
SI-119	12	SI-004	壁穴住居	A23	純文前期		SI-151	14	SI-021	壁穴住居	BB22	純文	
SI-120	12	SI-005	壁穴住居	A22	純文前期		SI-152	14	SI-022	壁穴住居	BB22	純文前期	花桔下層
SI-121	12	SI-006A	壁穴住居	A22	純文前期		SI-153	14	SI-023A	壁穴住居	BB23	純文前期	花桔下層
SI-122	12	SI-006B	壁穴住居	A22	純文前期	花桔下層	SI-154	14	SI-023B	壁穴住居	BB23	純文前期	花桔下層
SI-123	12	SI-006C	壁穴住居	A22	純文前期	花桔下層	SI-155	14	SI-024B	壁穴住居	BB23	純文前期	花桔下層
SI-124	12	SI-007	壁穴住居	A23	純文前期	花桔下層	SI-155	14	SI-024	壁穴住居	BB22	純文前期	黒浜
SI-125	12	SI-008	壁穴住居	A23	純文前期	謎轟b・浮島Ⅲ	SI-156	14	SI-025	壁穴住居	BB22	純文前期	津洋
SI-126	12	SI-010	壁穴住居	A22	純文前期	花桔下層	SI-157	14	SI-026	壁穴住居	BB22	純文前期	
SI-127	12	SI-011	壁穴住居	A22	純文前期		SI-158	14	SI-027	壁穴住居	BB22	純文前期	花桔下層
SI-128	12	SI-012	壁穴住居	A23	純文前期		SI-159	14	SI-028	壁穴住居	BB22	純文前期	黒浜
SI-129	12	SI-013	壁穴住居	BB23	純文		SI-160	14	SI-029	壁穴住居	AA22	純文前期	花桔下層
SI-130	13	SI-001	壁穴住居	D22	純文前期	黒浜	SI-161	14	SI-030	壁穴住居	BB22	純文前期	花桔下層
SI-131	13	SI-002	壁穴住居	BB24	純文前期	黒浜	SI-162	14	SI-031	壁穴住居	BB22	純文前期	
SI-132	13	SI-003	壁穴住居	BB24	純文前期	黒浜	SI-163	14	SI-032	壁穴住居	BB23	純文前期	
SI-133	14	SI-001	壁穴住居	C22	純文前期	黒浜	SI-164	14	SI-033	壁穴住居	AA22	純文前期	花桔下層
	18	SI-016					SI-165	14	SI-034	壁穴住居	AA23	純文前期	花桔下層
SI-134	14	SI-002	壁穴住居	C22	純文前期		SI-166	14	SI-035	壁穴住居	BB23	純文前期	黒浜
	17	SI-012											
SI-135	14	SI-003	壁穴住居	C22	純文中期	中崎	SI-167	14	SI-036	壁穴住居	AA22	純文前期	花桔下層
SI-136	14	SI-004	壁穴住居	C22	純文前期	黒浜	SI-168	16	SI-005	壁穴住居			
SI-137	14	SI-006	壁穴住居	C22	純文中期	中崎	SI-169	16	SI-006	壁穴住居	DD22	純文中期	
SI-138	14	SI-007	壁穴住居	C22	純文前期	黒浜	SI-170	17	SI-002	壁穴住居	AA22	純文中期	加賀利村
SI-139	14	SI-007	壁穴住居	C22	純文前期		SI-171	17	SI-003	壁穴住居	AA22	純文前期	黒浜
SI-140	14	SI-008	壁穴住居	C22	純文前期	黒浜	SI-172	17	SI-004	壁穴住居	AA22	純文前期	黒浜
SI-141	14	SI-009	壁穴住居	C22	純文前期	黒浜							

遺構名	旧遺構名	遺構種別	位置	時期	遺構名	旧遺構名	遺構種別	位置	時期			
SI-173	SI-007	壁穴住居	AA22	純文前期	花積下層	SK-324	17 SK-010	土坑	BH22	純文前期	花積下層	
SI-174	SI-006	壁穴住居	BH22	純文前期	花積下層	SK-325	17 SK-011	土坑	CC22	純文前期	閑山Ⅲ	
SI-175	SI-010	壁穴住居	BH22	純文前期	黑浜	SK-326	18 SK-012	土坑	BH21	純文前期	花積下層	
SI-176	SI-011	壁穴住居	CC22	純文前期	黑浜	SK-327	18 SK-013	土坑	BH21	純文前期	花積下層	
SI-177	SI-013	壁穴住居	AA22	純文前期	花積下層	SK-328	18 SK-014	土坑	BH21	純文前期	花積下層	
SI-178	SI-001	壁穴住居	AA21	純文前期		SK-329	18 SK-015	土坑	BH21	純文前期	花積下層	
SI-179	SI-014	壁穴住居	CC22	純文前期	黑浜	SK-330	18 SK-016	土坑	BH21	純文前期	黑浜	
SI-180	SI-015	壁穴住居	DD22	純文前期	黑浜	SK-331	18 SK-017	土坑	BH21	純文前期	花積下層	
SI-181	SI-001	壁穴住居	DD20	古墳後期		SK-332	18 SK-018	土坑	BH21	近世		
SK-281	SK-001	土坑	AA24	純文		SK-333	18 SK-019	土坑	DD22	純文中期	中集	
SK-282	SK-001	土坑	AA23	純文前期	諸磯	SK-334	18 SK-020	土坑	CC22	純文中期	中集～加曾利E	
SK-283	SK-002	土坑	Z33	純文		SK-335	18 SK-021	土坑	BH21	近世		
SK-284	SK-003	土坑	Z33	近世		SK-336	18 SK-022	土坑	BH21	近世		
SK-285	SK-004	土坑	AA23	純文		SK-337	18 SK-023	土坑	BH21	近世		
SK-286	SK-001	土坑	BB24	純文		SK-338	18 SK-024	土坑	BH21	近世		
SK-287	SK-002	土坑	BB24	純文前期	黒浜	SK-339	18 SK-025	土坑	BH21	近世		
SK-288	SK-001	土坑	CC22	純文		SK-340	18 SK-026	土坑	BH21	近世		
SK-289	SK-002	土坑	CC22	純文前期	黒浜	SK-341	18 SK-027	土坑	BH21	近世		
SK-290	SK-003	土坑	CC22	純文中期	加曾利E	SK-342	18 SK-028	土坑	BH22	近世		
SK-291	SK-004	土坑	CC22	純文前期	黒浜	SK-343	18 SK-029	土坑	CC22	近世		
SK-292	SK-005	土坑	CC22	純文中期		SK-344	18 SK-030	土坑	CC22	近世		
SK-293	SK-006	土坑	CC22	純文中期		SK-345	18 SK-031	土坑	DD22	純文後期	移名寺～細之内	
SK-294	SK-008	土坑	CC22	純文前期	諸磯	SK-346	18 SK-032	土坑	DD22	純文中期	中集	
SK-295	SK-009	土坑	CC22	純文		SK-347	18 SK-033	土坑	DD22	純文		
SK-296	SK-010	土坑	CC22	純文前期	黒浜	SK-348	18 SK-034	土坑	CC22	純文		
SK-297	SK-011	土坑	CC22	純文		SK-349	18 SK-035	土坑	CC21	純文前	黒浜	
SK-298	SK-012	土坑	CC22	純文中期	中崎	SK-350	18 SK-036	土坑	CC21	純文前期	黒浜	
SK-299	SK-013	土坑	BB22	純文前期	黒浜	SK-351	18 SK-037	土坑	DD22	純文		
SK-300	SK-014	土坑	CC23	純文		SK-352	18 SK-038	土坑	DD22	純文		
SK-301	SK-015	土坑	CC23	純文		SK-353	18 SK-039	土坑	CC22	純文		
SK-302	SK-016	土坑	CC23	純文		SK-354	17 SK-040	土坑	BH22	純文中期	黒浜	
SK-303	SK-017	土坑	CC23	純文		SK-355	18 SK-041	土坑	CC22	近世		
SK-304	SK-018	土坑	CC23	純文		SK-356	14 SD-001	18 SX-003	ビット群	CC22	近世	
SK-305	SK-019	土坑	BB22	純文		SK-357	14 SD-002					
SK-306	SK-020	土坑	BB22	純文		SD-001	17 SD-001	18 SD-001	溝状遺構	CC22	近世	
SK-307	SK-021	土坑	BB22	純文		SD-002	18 SD-004	18 SD-001	溝状遺構	DD22	近世	
SK-308	SK-024	土坑	BB23	純文前期	花積下層～二ヶ木	SD-003	14 SD-003	14 SD-003	溝状遺構	AA23	近世	
SK-309	SK-025	土坑	BB22	純文前期	青津	SD-004	12 SD-002	18 SD-001	溝状遺構	AA23	近世	
SK-310	SK-026	土坑	BB22	純文		SD-005	18 SD-003	18 SD-001	溝状遺構	BH21	近世	
SK-311	SK-002	土坑	DD22	純文		SD-006	14 SD-002	14 SD-002	溝状遺構	CC22	近世	
SK-312	SK-001	土坑	DD22	純文中期	中崎	9	—	—	—	—	—	
SK-313	SK-002	土坑	DD22	純文中期	中崎	8	SK-001	欠番	—	—	—	
SK-314	SK-003	土坑	DD22	純文中期	加曾利E	12	SI-009	欠番	—	—	—	
SK-315	SK-002	伽室	CC22	純文早期		14	SI-016	欠番	—	—	—	
SK-316	SK-001	伽室	AA22	純文		14	SK-007	欠番	—	—	—	
SK-317	SK-002	伽室	BB22	純文中期		14	SK-022	欠番	AA22	—	—	
SK-318	SK-004	土坑	BB22	純文		14	SK-023	欠番	AA22	—	—	
SK-319	SK-005	土坑	BB22	純文		15	SK-001	欠番	DD20	—	—	
SK-320	SK-006	土坑	BB22	純文前期	黒浜	17	SI-001	欠番	—	—	—	
SK-321	SK-007	土坑	BB22	純文		17	SK-003	欠番	BB22	—	—	
SK-322	SK-008	土坑	BB22	純文		18	SD-002	欠番	BH21	—	—	
SK-323	SK-009	土坑	BB22	純文								



400m
(1:900)

第6図 大松遺跡遺構分布図



番号は遺構の種別ごとの通し番号とし、竪穴住居にSI、土坑等にはSK、溝状遺構などにはSD、その他の遺構（遺物集中地点や地点貝塚）にはSXを付すことを原則とし、調査次数と組み合わせて表記した。たとえば第10次調査の竪穴住居001は（10）SI-001、第11次調査の土坑002は（11）SK-002のように表記される。

遺構番号は調査次ごとに付したため、整理作業の段階で全体を通じた遺構番号をそれぞれ新しく付すことにして、前回の報告の続き番号を使用することにした。この際同一遺構を別々に調査したためにそれぞれに遺構番号を付した場合があり、これらはひとつの遺構番号に改めた。竪穴住居はSI-112～、土坑はSK-281～となる。遺物の注記は調査時の遺構番号で行っており、新旧の遺構番号の対照は、第2表の遺構一覧を参照されたい。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境（第1図、第3表）

柏市は、江戸川と利根川が大きく分岐はじめる下総台地の北西端に位置する。柏北部東地区の宅地造成地は、利根川南岸の河岸台地先端にあり、標高は16m～18m、河川周辺の低地との比高は8m～10mで、付近の利根川の標高は約5mである。縄文海進の頃は、東から広がる古鬼怒湾に接近できる一方、西へ約7km行くと南から続く東京湾が見渡せたはずである。

柏北部東地区の河岸台地縁辺は、小支谷があり組む複雑な地形となっていて、小支谷で分離された台地上には約10か所の遺跡が分布していた。そのうち大松遺跡は、事業地内の中央やや北側の、南へ島状に突出した台地に位置している。同じ台地上で大松遺跡の北西側に富士見遺跡、北側に胸形遺跡があり、3遺跡が隣接している。ともに大松遺跡と同様に縄文時代前期の集落跡が確認された。

縄文時代前期を過ぎて中期、後期になると、周辺一帯に貝塚の分布は見られなくなり、また遺跡の数も減少した。稲作を取り入れたとされる弥生時代の遺跡も、少しだけ分布していない。古墳時代後期になると下総台地西北端でも、古墳や集落が増加し、古代律令制の成立する時期にはさらに集落が発展した。

平安時代前期（9世紀後半）に東海道の経路が換わり、市川の下総国府から手賀沼の西岸そして北岸を通って、霞ヶ浦北西の常陸国府へと向かうようになった。東国および東北蝦夷地の経営にこの幹線は不可欠となり、手賀沼の西と北に位置する柏、我孫子は幹線の要衝として、地理的重要性が増した。

平将門は鬼怒川水系沼沢地帯の北西に位置する下総国農田郡、猿島郡を基盤にしていた。また将門の遺領を継いだ千葉氏や相馬氏が鎌倉幕府の有力御家人になったように、平安時代から鎌倉時代に、鬼怒川水系から霞ヶ浦の一帯は東日本でも有力な勢力となった。

近世初頭に、東京湾に流入していた利根川に流路変更の大工事が施工された。利根川は現在の千葉県と茨城県の県境にそって東へ流れようになり、河口は太平洋側の銚子となった。この利根川東遷事業は、関東地方の水運ルートを整備するのが大きな目的だったといわれている。利根川東遷により、東北から江戸へ向かう物流輸送、とくに米の輸送は房総半島を大回りせずに、銚子から利根川をさかのぼって関宿、逆川を通って江戸川を下る内陸ルートへと変わった。水運ルートの拡充により、江戸の周縁地帯だった柏周辺では、大消費地へ生活物資を供給する近郊農業が興隆した。

近代になって、物流が水運から鉄道主体の陸運に代わっても、大都市近郊の性格に変化はなかった。昭和29年に柏市が誕生して高度経済成長の時代となると、大都会東京の近郊都市として人口が激増した。

2 周辺の遺跡

大松遺跡は利根川の河岸台地に位置し、周辺には旧石器時代から現代に至るまで、多数の遺跡が分布している。高度経済成長のはじまる1960年代後半から、開発とともに発掘調査が増加していった。常磐自動車道、つくばエクスプレス、および鉄道沿線の宅地開発である柏北部東地区、柏北部中央地区などの公共事業にともない大規模な発掘調査が実施された。その他に市街地では小規模な調査が毎年行われている。この半世紀あまりの発掘調査の結果、多くの知見が得られた。

旧石器時代の比較的古い遺跡として、立川ローム層最下層のX層ないし武藏野ローム層最上層のXI層付近から石器群が出土し、この地方で最古の人間活動の痕跡をとどめている。中山新田Ⅱ遺跡（29）の第11ユニット、聖人塚遺跡（31）の第5文化層、原山遺跡（23）の第1文化層がこの時期に相当する。

第3表 周辺の主な遺跡

番号は第1図・文中と対応

番号	遺 跡 名	文 紙	番号	遺 跡 名	文 紙
1	大松遺跡	5・8	34	山神宮裏遺跡	62
2	花前Ⅰ遺跡	2	35	原遺跡	32・35
3	花前Ⅱ遺跡（花前Ⅱ-2遺跡）	3	36	田中小道跡	33・37・43・46・54
4	花前Ⅲ遺跡（花前Ⅱ-1遺跡）	3	37	上前留遺跡	23・28・40
5	矢船Ⅰ遺跡	3	38	香取神社遺跡	39
6	矢船Ⅱ遺跡		39	宿連寺遺跡	44
7	船林Ⅱ遺跡	1	40	北柏遺跡	57
8	駒形遺跡	6・9	41	松ヶ崎Ⅱ遺跡	63
9	富士見遺跡	10・11・12・52	42	寺前遺跡	20
10	原畠遺跡	7・55・56	43	高砂遺跡	64
11	小山台遺跡	54	44	呼塚遺跡	21・27・31・34・41・45・51・56
12	寺下前遺跡		45	八幡遺跡	60
13	宮前遺跡		46	田中中学校敷地遺跡	25
14	八反日台遺跡		47	尾井戸遺跡	59
15	大室字大木戸1152-5先野馬塚	42	48	殿内遺跡	61
16	農協前遺跡	15	49	松ヶ崎見崎遺跡	19
17	北花崎遺跡		50	塚原古墳群	25
18	星戻内遺跡			花野井庄左衛門鶴荷古墳 やまと古墳・大塚古墳	
19	内山遺跡				
20	大削遺跡	16	51	腰巻古墳群	48
21	須賀井遺跡	16	52	松ヶ崎泉遺跡	19・50
22	濯井台遺跡	13	53	松ヶ崎城跡	29・47・48
23	原山遺跡	14・17	54	大室城跡	59
24	翁原遺跡		55	かたぎ山古墳	22
25	船林遺跡	1	56	西下ノ台塚	45
26	水沢Ⅱ遺跡	1・24・36	57	花野井字上前留626-16地先野馬除土手	54
27	水沢Ⅰ遺跡		58	花野井字丸山1041地先野馬土手	38
28	中山新田Ⅰ遺跡	4・37	59	十余二鴻ノ裏・字庚塚野馬土手	23・45・49・51・52
29	中山新田Ⅱ遺跡	2	60	松ヶ崎字香取野馬土手	51・52
30	中山新田Ⅲ遺跡	2	61	高田三勢遺跡	18
31	聖人塚遺跡	4	62	十余二字下大塚380-153地先野馬除土手	38
32	元削遺跡	4	63	十余二字下大塚380-153地先野馬除土手	50
33	浦ノ果遺跡	58			

その次に古い遺跡として、X層～IX層付近から石器の出土した遺跡があげられる。中山新田Ⅰ遺跡(28)下層の環状ブロックの石器群、聖人塚遺跡(31)の第4文化層の環状ブロック、原山遺跡(23)の第Ⅱ文化層の環状ブロック、大松遺跡(1)の第1文化層の環状ブロック、農協前遺跡(16)の第1文化層の環状ブロック、大割遺跡(20)の第1文化層、須賀井遺跡(21)の第1文化層である。Ⅶ～VI層付近から石器が出土した遺跡には、水砂Ⅱ遺跡(26)のA～Cブロック、聖人塚遺跡(31)の第3文化層、原山遺跡(23)の第Ⅲ文化層があり、ナイフ形石器をともなう例が多い。

硬質のハード・ローム層であるIV層から石器が出土した遺跡は、溜井台遺跡(22)の第3、4文化層、原山遺跡(23)の第Ⅳ文化層、元削遺跡(32)の第2文化層、矢船Ⅰ遺跡(27)の第3文化層、館林遺跡(25)のC・Dブロック、須賀井遺跡(21)の第2文化層がある。軟質のソフト・ローム層であるⅢ層から石器の出土した遺跡は、氷河期末期の時期に相当し、しばしば細石刃が出土する。この時期の遺跡には花前Ⅲ遺跡(4)のA～Dブロック、水砂Ⅱ遺跡(26)のDブロック、中山新田Ⅰ遺跡(28)の上層、鴻ノ巣遺跡(33)のB～4区がある。

旧石器時代の遺跡は河岸台地のやや縁辺寄りに比較的多く点在し、台地内部にさほど分布は見られない。氷河期の冷温な厳しい環境の下で、常陸川および周辺の小河川で開析が進んでいたと考えられる。

氷河期の終結とともに旧石器時代から縄文時代となり、遺跡の数量は増加し、分布範囲も拡大した。縄文時代早期の遺跡については、中山新田Ⅲ遺跡(30)、花前Ⅱ遺跡(3)、駒形遺跡(8)のA～E地区から炉穴が確認され、花前Ⅲ遺跡では撫糸文系縄文土器の包含層、炉穴、水砂Ⅱ遺跡では土坑が確認された。早期後半の条痕文系縄文土器の時期になると、山神宮裏遺跡(34)で住居跡が確認され、また駒形遺跡のF～J地区では集石土坑と、複数の住居からなる集落が確認されて、定住化に向けて住居の出現が見受けられた。聖人塚遺跡、中山新田Ⅰ遺跡、原遺跡(35)、小山台遺跡(11)、田中小遺跡(36)でも、同じく条痕文系の時期と見られる炉穴、野外炉、土坑、ピット群などが確認された。

縄文時代前期になると、周辺一帯に集落が激増し、なかには土坑や住居に貝殻が投棄されて地点貝塚となっている遺跡もある。とくに黒浜式期の遺跡が多い。後氷期の温暖化により海進が進み、柏市付近にまで南から東京湾、東から古鬼怒湾が深入した。良好な住環境の下で人間活動も活発になったと考えられる。縄文時代前期の遺跡分布および生産活動が、「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2」の最終章で詳述された。また「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3」の第1章でも、黒浜式期に限定した周辺の遺跡分布が示されているので、ここでは概略を記しておく。

河岸台地縁辺に位置する柏北部東地区では、駒形遺跡、富士見遺跡、大松遺跡、原畑遺跡、小山台遺跡で黒浜式期前後の集落が確認された。駒形遺跡、原畑遺跡では貝層の分析が行われ、マガキ、オキシジミ、ハマグリ、ハイガイ、アサリなどの貝種や、スズキ属、マダイなどの魚骨が確認された。柏北部東地区で実施された広範囲な発掘調査の結果、集落変遷、貝塚分析による生産活動の動態など、多くの新しい知見がもたらされている。

柏北部東地区的北側に隣接する花前Ⅰ遺跡で黒浜式期および浮島式期の住居跡、花前Ⅱ遺跡と花前Ⅲ遺跡で諸磯式期の住居跡、さらに少し北側に離れた山神宮裏遺跡で黒浜式期の住居跡、そして西側に位置する中山新田Ⅲ遺跡で黒浜式期の土坑が確認された。

柏北部東地区的南側に位置する原山遺跡で黒浜式期の住居跡、田中小遺跡で縄文時代前期の住居跡、土坑および貝塚、寺前遺跡(42)で黒浜式期の住居跡と貝塚、上前留遺跡(37)で黒浜式期の住居跡、香取

神社遺跡（38）で黒浜式期の住居跡、原遺跡で黒浜式期～浮島式期の土坑群、鴻ノ巣遺跡で黒浜式期の住居跡と貝塚、北柏遺跡（40）で前期の住居跡と貝塚、宿連寺遺跡（39）で前期の住居跡と貝塚、松ヶ崎Ⅱ遺跡（41）で黒浜式期の住居跡と貝塚が確認された。これらの遺跡は、河岸台地の縁辺から台地やや内側の支谷に位置し、台地の内奥には分布していなかった。貝塚をともなう事例も多いことから、海生資源の活用に適した場所を選んで、人々が居住していたといえるだろう。

縄文時代中期の遺跡は、前期に比べて減少する。柏北部東地区の大松遺跡では、阿玉台式期～加曾利E式期の住居と土坑からなる集落、原畠遺跡では加曾利E式期の住居と土坑からなる集落、小山台遺跡で中期の住居、土坑が確認された。小山台遺跡では現在でも発掘調査が行われ、住居・土坑からなる環状集落が確認されている。

柏北部東地区の北側に隣接する水紗Ⅱ遺跡で阿玉台式期の住居跡と土坑、中山新田Ⅰ遺跡で阿玉台式期の住居跡と土坑、中山新田Ⅱ遺跡でも阿玉台式期の住居跡が確認された。聖人塚遺跡では阿玉台式期と、勝坂式期～中畔式期^{なかばひ}の2時期の住居跡が確認された。北側にやや離れて位置する高砂遺跡（43）では、五領ヶ台式期もしくは阿玉台式期の陥穴が確認された。柏北部東地区の南側にある田中小遺跡で阿玉台式期の住居跡、原遺跡で加曾利E式期の住居跡と土坑が確認された。

縄文時代後期の遺跡はさらに減少する。すでに刊行された柏北部東地区の遺跡報告書では、出土した後期の土器について報告されているのだが、遺構についての明確な報告はない。今後も、縄文時代後期に属する遺構が確認される確率は低いと思われる。周辺の遺跡を見ると、柏北部東地区の北側に隣接する花前Ⅰ遺跡で堀之内式期の住居跡、花前Ⅱ遺跡でも堀之内式期の住居跡と土坑、中山新田Ⅰ遺跡で堀之内式期の住居跡が確認された。これ以外に、周辺遺跡から縄文時代後期の遺構確認を伝える報告例は、見当たらぬ。

このように縄文時代前期の海進の時期に、河岸台地の縁辺周辺を基盤とする人間活動が盛況となり、多数の遺跡が形成された。その後中期に環状集落が出現するものの、総じて人間活動は希薄になっていき、縄文時代後期になると遺跡数はかなり減少してしまった。

弥生時代については、後期の遺跡が少数知られている。柏北部東地区の南側にある田中小遺跡で北関東系の長岡式期の住居跡が確認された。さらに南側に位置する鴻ノ巣遺跡で同じく長岡式期の住居跡、北柏遺跡で後期の住居跡、西から東へ手賀沼にそそぐ大堀川流域の呼塚遺跡^{よづか}（44）で後期の住居跡が確認された。柏北部東地区周辺では、縄文時代後期以降ほとんど人跡は途絶えてしまい、弥生時代後期になって、ふたたびわずかながらも人煙がもどったのである。

古墳時代前期になると、柏北部東地区の駒形遺跡・富士見遺跡・小山台遺跡でわずかながら住居が確認された。南側に位置する田中小遺跡、原遺跡、八幡遺跡（45）でも住居が確認された。大堀川流域の呼塚遺跡では、大型住居をふくむ多くの住居からなる集落を溝が開いており、溝内には儀礼用土器が多数廃棄されていた。また前期の住居跡から製鉄関連の遺物が出土して注目されている。この遺跡は、手賀沼に流入する水上交通の要所に出現した首長居館（宅）の萌芽的なものと解釈された。

古墳時代中期の遺跡として柏北部東地区の原畠遺跡、富士見遺跡で住居跡が確認された。北側の花前Ⅲ遺跡と矢船Ⅰ遺跡でも、住居跡が確認されている。南側に隣接する田中小遺跡と田中中学校敷地遺跡（46）で住居跡、南東側の河岸台地縁辺に近い尾井戸遺跡（47）で住居跡が確認された。さらに南側に位置する鴻ノ巣遺跡で住居跡が確認された。南側の大堀川流域では、呼塚遺跡の集落が、弥生時代後期から古墳時

代中期になっても絶えることなく存続していた。大堀川の対岸にある松ヶ崎見崎遺跡（49）、およびやや上流の戸内遺跡（48）で住居跡が確認された。

古墳時代後期の遺跡は少ない。柏北部東地区では駒形遺跡、北側の花前Ⅱ遺跡、花前Ⅲ遺跡、水砂Ⅱ遺跡、南側にある田中小遺跡、南東側にある尾井戸遺跡で住居跡が確認されたが、尾井戸遺跡を除いて、確認された古墳時代後期の住居跡は単独ないしは少数で、大きな集落を形成するほどではなかった。遺跡自体の数も少ないとから、この時期に人間の活動はさほど活況ではなかったのだろう。

古墳は、おもに利根川に面する河岸台地縁辺と、手賀沼に流入する大堀川流域に少数分布している。柏北部東地区的南東側の尾井戸遺跡には、台地先端に墳丘を削平された円墳があった。

さらに南東の河岸台地縁辺の先端に数基の古墳からなる塙原古墳群（50）があった。そのうち北から南へと花野井庄左衛門稲荷古墳、花野井やまと古墳、花野井大塚古墳群が並んでいた。北に位置する花野井庄左衛門稲荷古墳は方墳で、ほぼ中央に割竹形木棺が埋葬されていた。時期は6世紀初頭とされた。中央に位置するやまと古墳（塙原古墳）は、墳形は不明だが、横穴式石室が残存していた。南側の大塚古墳群は2基の円墳からなり、そのうち、1号墳の主体部は木棺直葬で、直刀・短甲・胡錘などが副葬され、鳥形埴輪なども出土した。塙原古墳群に近い遺跡は河岸台地縁辺の支谷に位置し、円墳もしくは帆立貝式前方後円墳の周溝が確認された。馬形埴輪、羽茎埴輪が出土し、6世紀後半の古墳とされた。

大堀川流域には台地先端に位置する腰巻古墳群（51）があり、3基の円墳が確認されている。

奈良時代の遺跡は、柏北部東地区的北側に隣接する花前Ⅰ遺跡が奈良時代から平安時代にかけての堅穴住居と掘立柱建物からなる集落である。さらに北西側に隣接する館林遺跡、水砂Ⅱ遺跡、中山新田Ⅱ遺跡、中山新田Ⅲ遺跡で堅穴住居および掘立柱建物が確認された。水砂Ⅱ遺跡では小鍛冶跡も見つかった。このうち中山新田Ⅲ遺跡を除いて、他の3遺跡は奈良時代にとどまらず、平安時代になんでも存続した。柏北部東地区的南東側にある尾井戸遺跡、北柏遺跡で堅穴住居が確認された。

平安時代の遺跡は、奈良時代から継続する遺跡も含めると、やや増加したように見受けられる。北側に隣接する花前Ⅰ遺跡、館林遺跡、水砂Ⅱ遺跡、中山新田Ⅱ遺跡、中山新田Ⅲ遺跡では、奈良時代からの集落が続いていた。花前Ⅱ遺跡では製鉄工房を含む新しい集落が形成された。柏北部東地区的駒形遺跡、および北西側に隣接する中山新田Ⅰ遺跡、聖人塚遺跡では、単独もしくは数軒の住居跡が確認された。その他、南側の鴻ノ巣遺跡で、製鉄関連の住居跡が確認された。

南側の大堀川流域では、呼塙遺跡で堅穴住居に似た特殊遺構、対岸の台地上に位置する松ヶ崎泉遺跡（52）では、鍛冶炉のある住居跡が確認された。平安時代の遺跡には、製鉄関連の遺構をふくむ事例が多い。東海道が手賀沼西岸と北岸を通過するようになり、流通経路の変動とともに、柏北部東地区周辺も鉄製品を供給する生産過程に組み込まれたのかもしれない。

中世には、柏北部東地区周辺は相馬郡であったと思われる。「香取の海」と呼ばれた手賀沼周辺が引き続いて幹線の要衝として活況を帶びていただろう。手賀沼西端地域には、柏市中馬場遺跡をはじめ、中世の遺跡が多い。柏北部東地区周辺は幹線経路から外れ、その後背地に相当して人煙も少なかったと予測される。近年になって少数の中世遺跡が報告された。

柏北部東地区的駒形遺跡と富士見遺跡で、中世の地下式坑、土坑、溝状遺構・道路状遺構が確認された。南東側の寺前遺跡で、台地整形区画、堀・溝、土坑、火葬跡、地下式坑が確認された。3遺跡は利根川に面した河岸台地の縁辺付近に位置し、墓域があった。小山台遺跡で確認した地下式坑、土坑墓は中世～近

世にあたる時期のものと考えられる。

手賀沼に流入する大堀川の流域に松ヶ崎城（53）があり、主郭、土塁、堀、虎口などが現存している。この城は、15世紀後半から16世紀前半には築造されていたと考えられているが、築造の開始時期や城主の実態などは不明である。柏北部東地区の南東側、利根川の河岸台地縁辺に大室城（54）があったという伝承が残っているが、真偽は不明である。その伝承地付近から土師器や埴輪が出土したので、古墳が存在したことは明らかだろう。柏市域の城館跡については、その名を記した古文書・古記録などが存在しないため、いついかなる人物・勢力によって、何を目的に築かれたのか、まったく不明とされている⁽²⁾。

近世になると、柏周辺には関宿のほか大名の居城はなく、布施、花野井、大室、正連寺、小青田、船戸、山高野、松ヶ崎、篠籠田、藤心、増尾、逆井の各村、あるいはその一部は、駿河田中藩本多氏の飛地領となり、若柴、宿連寺は旗本大沢氏、戸張に三橋氏の知行地があり、柏、根戸は代官支配地、豊四季、十余二は幕府直轄地小金牧となつた⁽³⁾。

近世の遺跡として、柏北部東地区の北側に隣接する花前Ⅲ遺跡で、田中藩領邑8ヶ村（花野井、大室、正連寺、小青田、船戸、山高野、若柴、大青田）の第25代代官だった増田半兵衛の本屋敷跡が確認された。母屋、土蔵、溝、流し溜、井戸などが確認され、当時の富農の生活を彷彿とさせるものだった。柏北部東地区の南東側にある寺前遺跡で、掘立柱建物、井戸跡からなる屋敷跡が確認された。この遺跡から南西約50m離れた地点を、南東から北西へ古くからの街道と思われる県道我孫子・関宿線が通っていて、街道筋にそった居住空間の一部だったかもしれない。

生活遺跡のはかに、塚と野馬除土手・堀が挙げられる。塚は、柏北部東地区から南側の離れた地点に、かたぎ山古墳（55）と西下ノ台塚（56）があった。塚は邪氣や悪霊の追い払いを意図して村境に築造されることもある。市街化の進んだ柏周辺で昔日の村落の面影を見出すのは困難であるが、これらの塚も村境内に相当する場所だった可能性があるだろう。

近世の牧について柏周辺には、上野牧と高田台牧が広がっていた。千葉県教育委員会編『房総の近世牧跡』によると⁽⁴⁾、高田台牧の捕込は、柏市十余二工業団地付近に古込、柏市伊勢原に新込があったとしている。高田台牧の北東辺に沿う成田街道（県道我孫子・関宿線）には、柏市の大室村に大木戸（現大室の柏市立田中小学校付近）という小字がみられ、木戸が設けられていたとの伝承がある。柏市域の野馬水呑場は、こんぶくろ池（正連寺）、高田字三勢、十余二字鴻ノ巣の他、南柏駅付近の流山と柏の市境の「ゴテンの湧き水」と呼ばれたという場所に伝承が残るという。そして高田台牧・上野牧の復元地図によると、柏北部東地区は高田台牧の北端に相当する。

柏北部東地区的富士見遺跡南端（9）にそって野馬堀が確認された。この野馬堀は高田台牧・上野牧の復元図から、高田台牧の北端を区画する堀の可能性が考えられる。柏北部東地区に隣接する水砂遺跡、中山新田Ⅱ遺跡、元割遺跡で確認された野馬除土手・堀も、同じように高田台牧北端付近を区画する野馬除土手・堀であろう。柏北部東地区的南側にある大室字大木戸1152-5先野馬堀（15）は、木戸推定付近の堀である。周辺では市街化が進み、野馬堀と共に伴する土手は、ほとんどの場所で削平されてしまった。

野馬除土手・堀は県道我孫子・関宿線にそって南東に伸び、花野井字上前留626-16地先野馬除土手（57）で高田台牧の東端付近の堀が確認されている。街道にそって花野井字丸山1041地先野馬土手（58）で野馬堀が確認されている。この地点は高田台牧の外側になり、牧に伴うものではなく害獣除であろう。

南側に離れて位置する十余二字鴻ノ巣・宇庚塚の野馬土手（59）は、高田台牧の南東端のやや北側の土手

に、また松ヶ崎字香取野馬土手（60）は高田台牧の南東端の土手に相当する。

台地奥地にある高田三勢遺跡（61）、十余二字下大塚380-153地先野馬除土手（62）、十余二字赤坂台418-38地先野馬除土手（63）周辺は高田台牧の南西部に位置する。高田三勢遺跡では鍵型状の野馬土手が確認され、古絵図との照合で、その西に休息用御林、南に溜池があったと推測された。高田三勢遺跡から西側、十余二字下大塚380-153地先野馬除土手から南側へ交わる付近に捕込があったと考えられている。

その他に近世の遺構として、花前Ⅱ遺跡で炭窯が確認された。隣接する花前Ⅲ遺跡で代官屋敷跡が確認されたので、富農経営に関連する炭窯と示唆されたが、炭窯の年代は近代以降に下る可能性もあるだろう。

近代になると、柏北部東地区の南西側に首都防衛用の柏飛行場が昭和13年に建設され、陸軍東部第105部隊が駐屯した。現在の柏の葉公園、東京大学柏キャンパス、千葉大学柏の葉キャンパス、国立がん研究センター東病院などに、飛行場の滑走路があった。付近には105部隊營門、掩体壕、建物の一部が現存し、營門などの戦跡には、恒久平和の願いを込めて柏市教育委員会の看板が立てられている。

柏北部東地区は、総じて原始・古代から現代にいたるまで利根川河岸台地の特性を受けている。縄文時代前期の縄文海進の時期に、台地縁辺を主体にきわめて濃密に遺跡が分布した以外、常にこの周辺地域は、「香取の海」と称された手賀沼の後背地として、さほど人跡の目立たない場所だったといえるだろう。戦後の高度経済成長で郊外型ベッドタウンとなって人口が急増しはじめてから、人間活動が顕著となったのである。

注

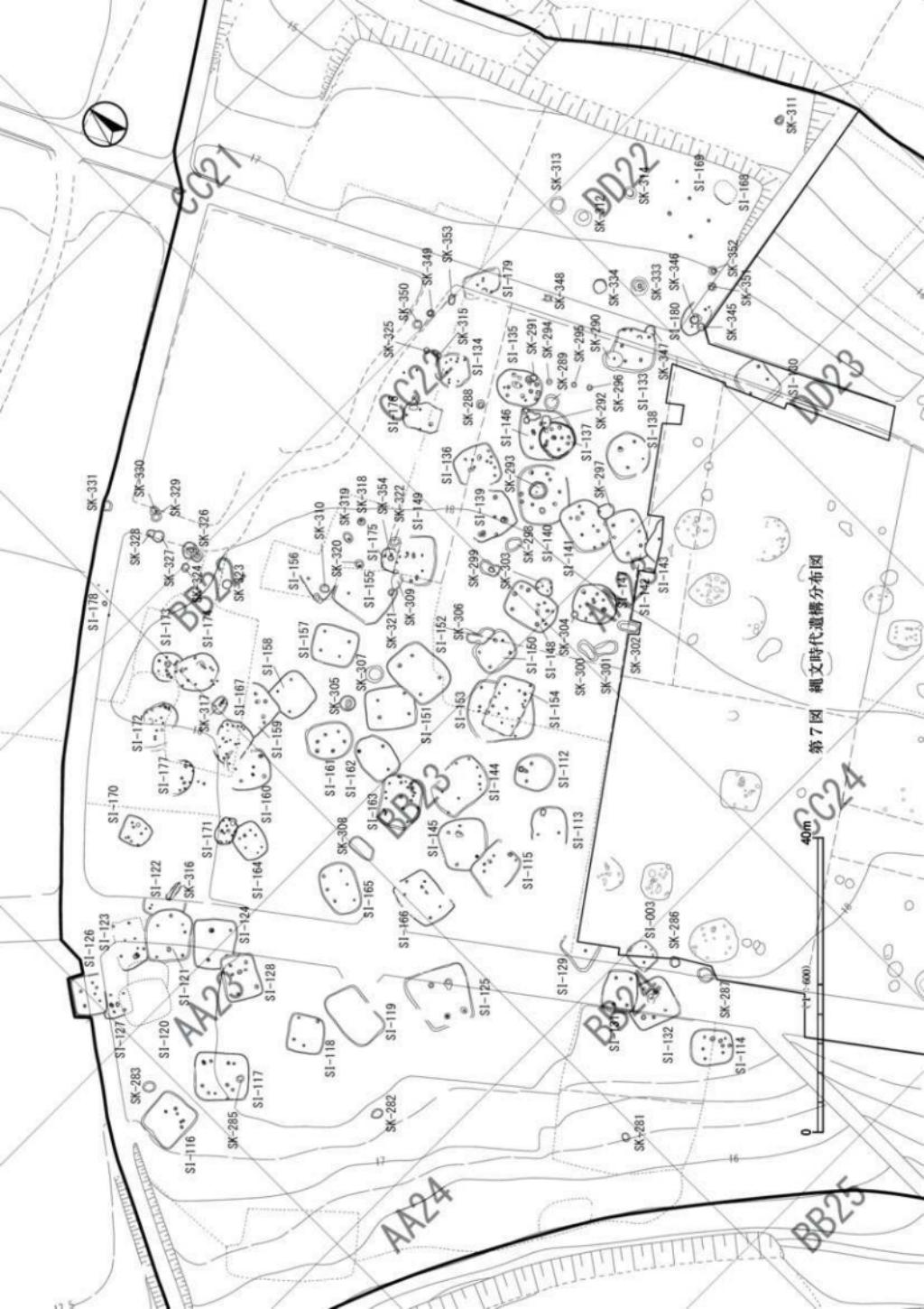
- (1) 高津俊司・堀川 淳・橋本浩史・佐藤馨一 2005「つくばエクスプレス線の建設における鉄道と都市との一体整備に関する考察」『第32回土木計画学研究発表会・講演集』(318) 土木学会
- (2) 柏市教育委員会 1997『柏市史』原始・古代・中世編 pp.841 柏市史編さん委員会
- (3) 柏市役所 1980『柏市史年表』 pp.12 柏市史編さん委員会
- (4) 千葉県教育委員会 2006『房総の近世牧跡』

第3表 周辺の主な遺跡 参考文献

- 1 (財) 千葉県文化財センター 1982『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
- 2 (財) 千葉県文化財センター 1984『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- 3 (財) 千葉県文化財センター 1985『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- 4 (財) 千葉県文化財センター 1986『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
- 5 (財) 千葉県教育振興財團 2008『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 6 (財) 千葉県教育振興財團 2009『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 7 (財) 千葉県教育振興財團 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3』
- 8 (財) 千葉県教育振興財團 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4』
- 9 (公財) 千葉県教育振興財團 2013『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書5』
- 10 (公財) 千葉県教育振興財團 2014『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6』
- 11 (公財) 千葉県教育振興財團 2015『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書7』
- 12 (公財) 千葉県教育振興財團 2015『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書8』
- 13 (財) 千葉県教育振興財團 2007『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 14 (財) 千葉県教育振興財團 2009『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 15 (財) 千葉県教育振興財團 2011『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書3』
- 16 (財) 千葉県教育振興財團 2012『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書4』
- 17 (公財) 千葉県教育振興財團 2013『柏北部中央地区埋蔵文化財発掘調査報告書5』
- 18 柏市教育委員会 1986『柏市埋蔵文化財調査報告書12』

- 19 柏市教育委員会 1992『柏市埋蔵文化財調査報告書20』
- 20 柏市教育委員会 1992『柏市埋蔵文化財調査報告書22』
- 21 柏市教育委員会 1995『柏市埋蔵文化財調査報告書29』
- 22 柏市教育委員会 1995『柏市埋蔵文化財調査報告書30』
- 23 柏市教育委員会 1996『柏市埋蔵文化財調査報告書31』
- 24 柏市教育委員会 1997『柏市埋蔵文化財調査報告書33』
- 25 柏市教育委員会 2001『柏市埋蔵文化財調査報告書44』
- 26 柏市教育委員会 2002『柏市埋蔵文化財調査報告書48』
- 27 柏市教育委員会 2003『柏市埋蔵文化財調査報告書50』
- 28 柏市教育委員会 2006『柏市埋蔵文化財調査報告書54』
- 29 柏市教育委員会 2007『柏市埋蔵文化財調査報告書59』
- 30 柏市教育委員会 2007『柏市埋蔵文化財調査報告書61』
- 31 柏市教育委員会 2008『柏市埋蔵文化財調査報告書62』
- 32 柏市教育委員会 2010『柏市埋蔵文化財調査報告書67』
- 33 柏市教育委員会 2011『柏市埋蔵文化財調査報告書68』
- 34 柏市教育委員会 2012『柏市埋蔵文化財調査報告書71』
- 35 柏市教育委員会 2013『柏市埋蔵文化財調査報告書74』
- 36 柏市教育委員会 1988『昭和62年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 37 柏市教育委員会 1989『昭和63年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 38 柏市教育委員会 1990『平成元年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 39 柏市教育委員会 1991『平成2年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 40 柏市教育委員会 1992『平成3年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 41 柏市教育委員会 1994『平成5年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 42 柏市教育委員会 1997『平成7年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 43 柏市教育委員会 1998『平成8年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 44 柏市教育委員会 1998『平成9年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 45 柏市教育委員会 2002『平成12年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 46 柏市教育委員会 2003『平成13年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 47 柏市教育委員会 2004『平成14年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 48 柏市教育委員会 2005『平成14・15年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 49 柏市教育委員会 2005『平成15年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 50 柏市教育委員会 2007『平成17年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 51 柏市教育委員会 2008『平成18年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 52 柏市教育委員会 2009『平成19年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 53 柏市教育委員会 2010『平成20年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 54 柏市教育委員会 2011『平成21年度 市内遺跡群発掘調査報告書』
- 55 柏市教育委員会 2011『平成22年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 56 柏市教育委員会 2012『平成23年度 市内遺跡発掘調査報告書』
- 57 北柏遺跡発掘調査団 1973『北柏遺跡』
- 58 千葉県都市公社 1974『柏市鴻ノ巣遺跡』
- 59 尾井戸遺跡調査団 1980『尾井戸遺跡』
- 60 柏市教育委員会 1980『柏市埋蔵文化財調査報告書』
- 61 肝内遺跡調査団 1981『肝内遺跡調査報告書』
- 62 柏市教育委員会 1983『山神宮裏遺跡・高野台遺跡』
- 63 松ヶ崎(Ⅱ)遺跡調査会 1983『松ヶ崎(Ⅱ)遺跡発掘調査報告』
- 64 柏市教育委員会 1983『高砂遺跡・林台遺跡』
- 65 手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 2000『手賀沼が海だった頃』たけしま出版

第7図 細文時代遺構分布図



第2章 繩文時代の遺構と遺物

第1節 壁穴住居

SI-003 (13) SI-004 (第8図、図版2・20)

台地北西寄りのBB24-04グリッドに位置する。調査区の境界に位置するため、2度に分けて調査を行っており、北側についてはすでに報告されている。形状は隅丸方形であり、規模は径3.5m～3.7m、深さは15cmである。方位はほぼ真北である。中央に径60cmほどの薄い焼土域とその周囲約1mに硬化面がみられる事から、この部分が炉に該当するのであろう。柱穴は6本確認され、東側は壁に沿って3本が等間隔に並ぶことから柱穴の可能性が高いが、それに対応するビット群は西側では確認されていない。しかし、東側のビット群がいずれも深さ10cm台であることや、調査年度の境界になっていることなど、同一の基準で判断しかねる要素もある。径3mほどの小形住居の特性であろう。なお、炉と硬化面の関係が確認された点は特筆される。覆土は厚さ約10cmで、中央部に褐色土、周縁部は明褐色土が堆積するという状況であった。調査記録によれば、確認面に細かい焼土粒子が認められたとある。

遺物は硬化面南西端に集中するように出土した。1/2の調査で出土量は少ない。土器のはか磨石類1点(第102図237)を西壁際から出土した。

土器は破片4点を図示した。いずれも口縁部片である。1は附加条1種、2は口縁端部にコンバス文、以下に単節RLが施される。3は横位2条の結節沈線文以下に葉脈文が施文される。4は口縁端部に刻み目を施し、横位に平行沈線文が連続する。

以上は黒浜式で、既報告分の内容とも矛盾しないため本遺構の帰属時期としたい。

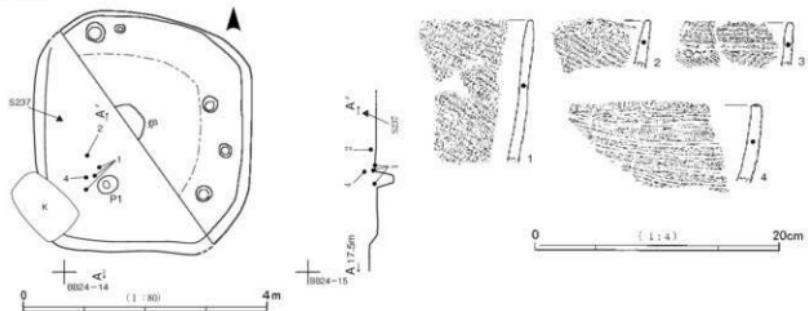
SI-112 (10) SI-001 (第8図、図版2・20)

台地北西寄りのBB23-35・36グリッドに位置する。形状は楕円形で、北側は幾分隅丸となる。規模は長径5.4m、短径5.0m、深さは最大で25cmである。方位は炉の位置からして北西になろう。炉は中央北壁寄りに位置する。南北に細長い形状をなすが、北側の掘形内に明瞭な焼土が存在するので、本来は円形となるのであろう。規模は長径150cm、短径80cmと大きなものである。確認されたビットは2本のみだが、深さもありかつ対称的な位置関係から柱穴とみてよいだろう。南側には対応するビットを確認できなかつた。床面は全面にわたって多少の凹凸が認められ、南側中央壁寄りはわずかな高まりとなっている。出入口となっていた結果であろうか。覆土は上下2層の水平堆積である。

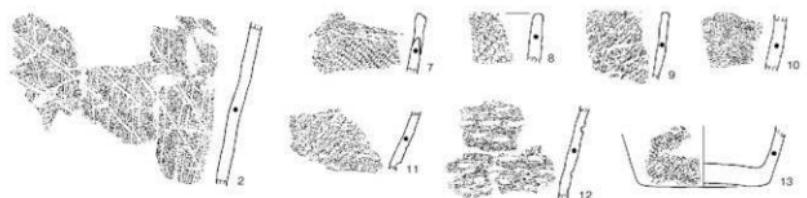
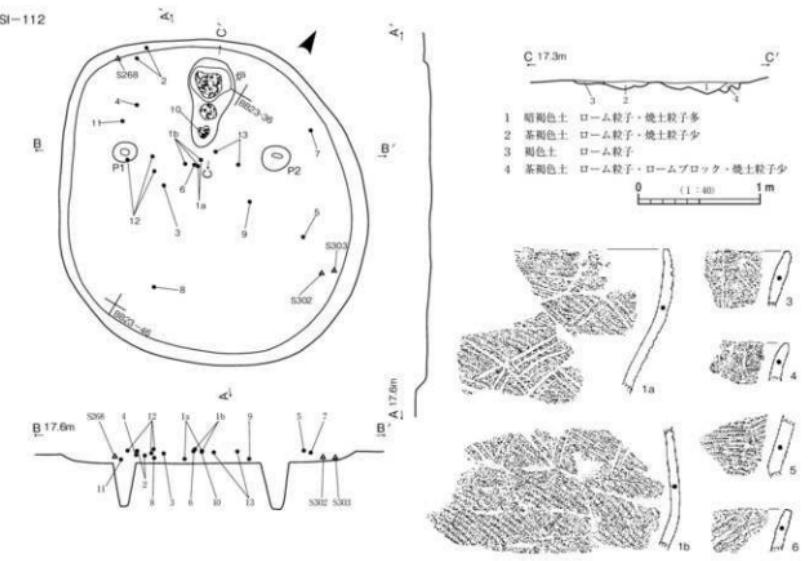
遺物は覆土内から疎らに出土したが、中央部に多少の集中域がある。土器のはか敲石1点(第110図268)、側面調整櫛2点(第117図302・303)を覆土下層から出土している。

土器は13点を図示した。1a～5は沈線文が施されるものである。1a・1bは口縁部を半截竹管による平行沈線文で区画し、区画内に同様の施文具で入組鋸歯状のモチーフを描出す。下端の区画線に付随して口頭部にも鋸歯状モチーフが描出される。地文は0段多条RLが施される。5は横位展開する集合沈線文以下にコンバス文が巡らされる。6～11は縄文が施される。6・8は単節RL、7は単節LRが施され、9・11は無節Lが施される。10はL2本を用いた撚糸文が施される。条間が広いので附加条縄文の可能性は少ないとと思われる。12は横位に連続して列点文が施される。13は底部で還付末端RL・LRの羽状縄文が施される。

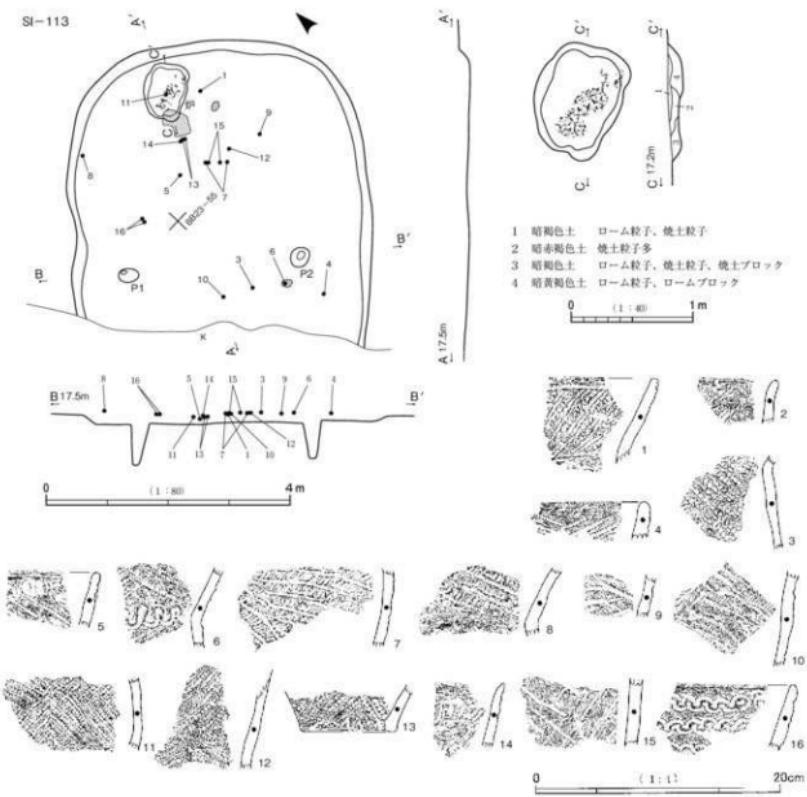
SI-003



SI-112



第8図 SI-003, SI-112



第9図 SI-113

以上は黒浜式で本遺構の帰属時期となるが、1a・1bの口頸部文様、13の底部下端には関山Ⅱ式の遺制が認められる。

SI-113 (10) SI-002 (第9図、図版2・20)

台地北西寄りのBB23-45・55グリッドに位置する。南端を擾乱溝によって壊されているものの、その間に収まることが明瞭であり、その点から隅丸方形と推測される。規模は長軸長5.0m～5.6m、短軸長5m、深さは最大で15cmである。出入口は炉の位置からして南西になろうか。炉は北壁寄りに位置し、規模は90cm×70cmである。ピットは南側で2本確認された。対称的な位置にあることや、深さが60cmと揃っていることから柱穴としてよいだろうが、北側に対応するピットが認められなかった。床面は壁際の幅約1mが内部より若干高めである。覆土は遺存状況の悪さに擾乱も加わって不明瞭ながら、上層にブロック状の破碎貝層があり、また部分的に差があるなど、人為的な堆積要素も取看される。

遺物は覆土内から疎らに出土したが、炉周辺に多少の集中域がある。土器のはか石錆(第90図2)・石核・両極剥片・碎片を各1点出土した。

土器は破片16点を図示した。1~13は縄文が施されるもので、3が単節RL、1・11~13が附加条1種、2・6~10が附加条2種、4・5が附加条軸縄不明である。1は口縁上下端を平行沈線文で区画する。5は平行沈線により口縁端部に狭小な区画文を形成し、6は胴括れ部にコンパス文が巡らされる。14~16は沈線文が施される。16は口縁端部以下に数段コンパス文が巡らされよう。

以上は黒浜式で、本遺構の帰属時期とした。

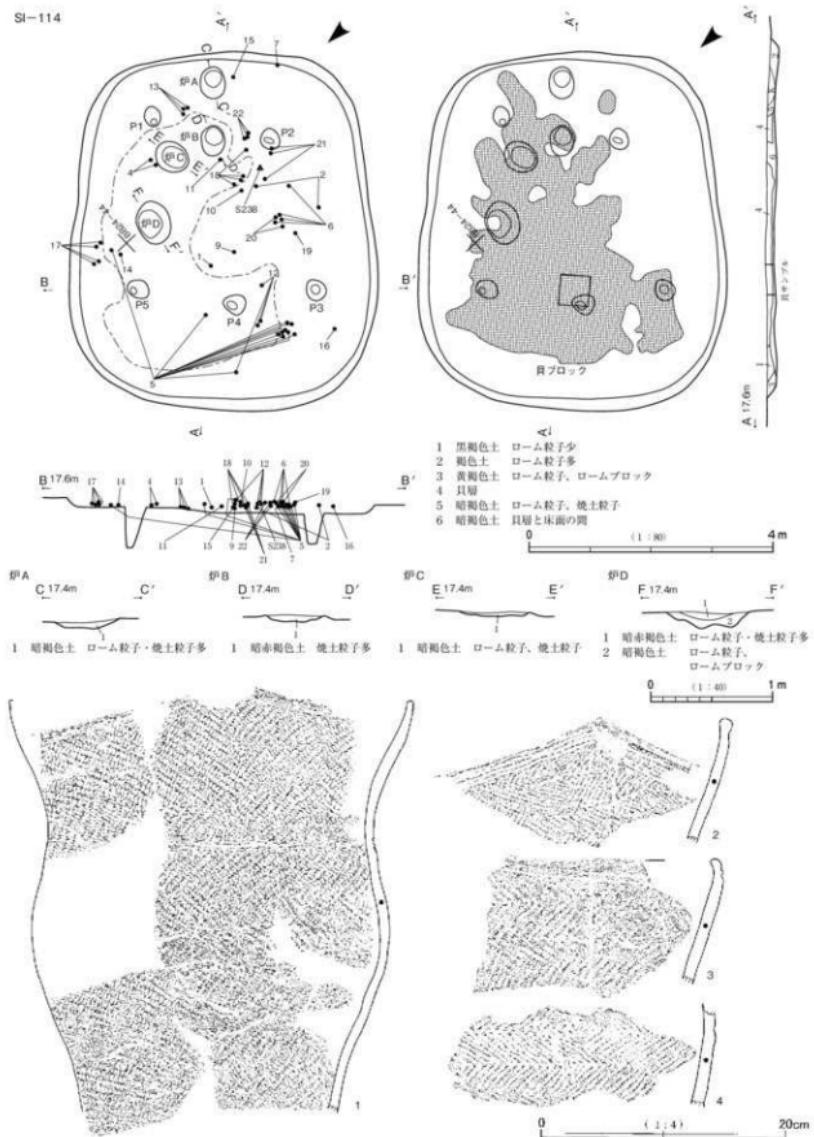
SI-114 (10) SI-003 (第10・11図、図版2・16・20・21)

台地北西寄りのBB24-43・44グリッドに位置する。形状は北側が多少横広がりの隅丸方形であり、規模は長軸5.8m、短軸5.0m、深さは最大で15cmである。出入口は炉の位置や後述する硬化面の様相からして西側になろう。炉は東側から南東壁寄りに計4か所認められ、東側中央に位置する炉Dが大きく、焼土層の形成もよいので、おそらく当初の炉であろう。それ以外の炉Bはピット間の中央、また、炉Aもその延長にあるので時期差の可能性もある。いずれにせよ当遺跡では希な例である。規模は炉Dが径約70cm、他は径50cmほどである。ピットは北側にP3~P5、南側にP1・P2が位置し、住居北の広がりに合わせた配置と考えられ、深さも30cm台後半~約80cmであることから柱穴としてよいだろう。床面は炉の周囲から中央部を除く東側に硬化面が広がっており、家屋内の利用状況を示す好例といえる。中央部から西側が開いているのはそちらが出入口となっていたからであろう。床面も硬化面は多少低い。覆土は壁近くに黄褐色土、次いで暗褐色土の堆積が始まった後に貝のまとまった投棄がなされたと思われ、全体に北東寄りに遺存しているのは、こちらが台地中央に向いていることと関連するのであろう。なお、貝層はハマグリを主体とする混土貝層である。

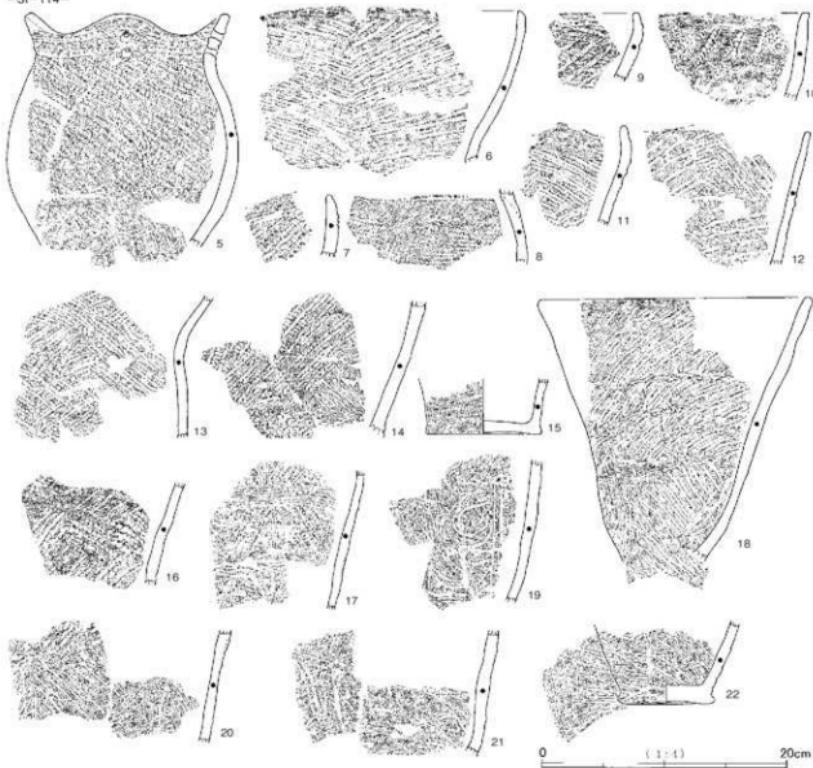
遺物は貝層の西縁に当たる住居南西部からまとまって出土した。出土量は多く、土器は22点を図示した。このほかに磨石類(第103図238)・石皿・両極剥片・碎片を出土している。

土器の1~18は縄文が施されるものである。1~3・17は単節RL・LRの羽状縄文、4は還付末端0段多条RL・LRの羽状縄文が施される。7・15は単節LR、8は単節RLが施される。1は底部を欠損するが、口縁部から胴下半部の1/2が遺存する深鉢で推定口径33.2cm、現高33.7cmである。口縁端部に平行沈線文、胴括れ部に結節沈線文が施される。2も口縁端部に2条の平行沈線文が施される。3・7は口縁端部に結節沈線文が施されるもので、7は斜位にも2条認められる。8は胴括れ部に結節沈線文が施される。17は平行沈線文で描出された文様帯をもつもので、横位磨消帶に分割された幅狭な米字文が複数形成される。5・6・9~14・16・18は附加条縄文が施されるもので、5・6・13・16・18は附加条1種、11・14は附加条2種である。5は短頸で胴部に膨らみのある器形で、底部を欠損するが、口縁部から胴部の2/3が遺存している。貝サンプル中に混入していた破片が接合した。口径は15.8cm、現高は20.1cmである。波状口縁に沿って2条の結節沈線文が施されるが、それぞれに接して焼成前の穿孔が認められる。14は胴括れ部に2条の結節沈線文が施される。18は底部が欠損するが、口縁部から胴部の4/5が遺存する。推定口径21.8cm、現高21.5cmである。胴部下半で縄文から斜沈線になる2带構成となる。附加条の末端は閉じる処理がされており、軌跡は結節回転状となる。9・10・12は附加条軸縄不明で、10は撫糸文の可能性もある。12は平行沈線により菱形文を描出している。19~22は沈線文のみが描出されるものである。20は葉脈文が施され、19は粗雑ながら縦横の区画と充填された蕨手状のモチーフが認められる。22は斜格子文が施され

SI-114



第10図 SI-114 (1)



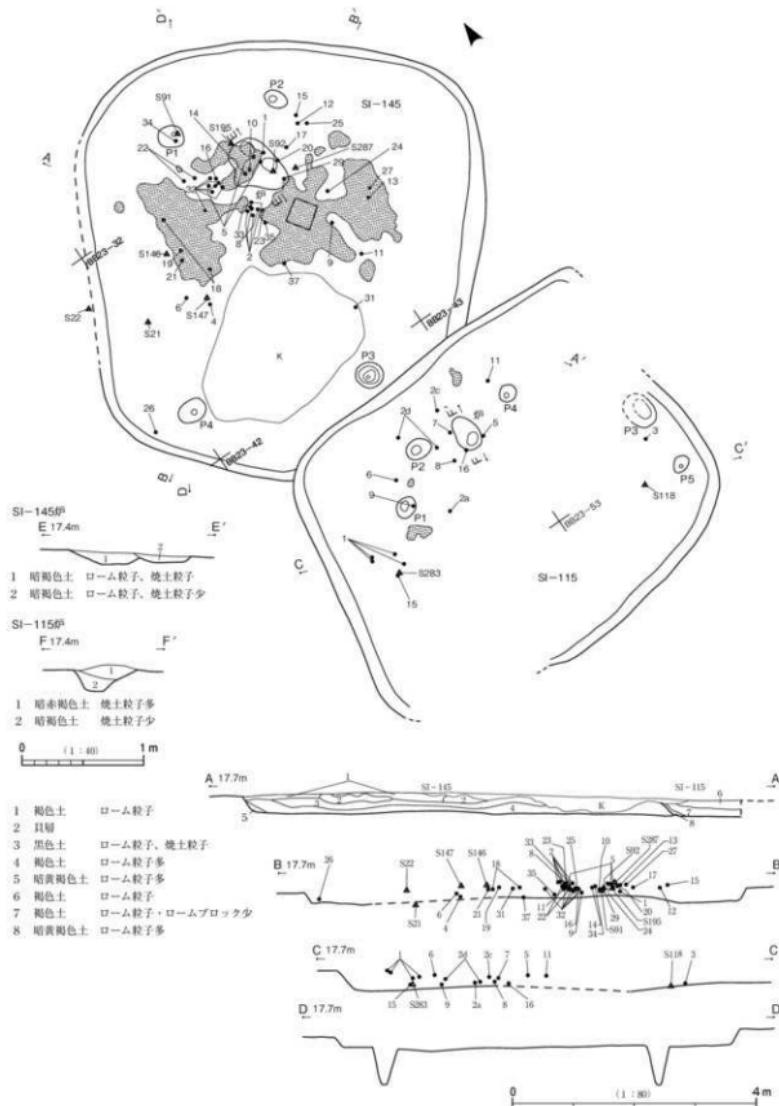
第11図 SI-114 (2)

るもので、底面外周が突出する。底径は8.0cmである。

以上は黒浜式で本遺構の帰属時期としたい。図示しなかった土器も黒浜式が主体で混入品はほとんどなかった。

SI-115 (10) SI-004・(14) SI-014 (第12・13図、図版2・6・21・22)

台地北西寄りのBB23-42・43グリッドに位置する。調査区の境界に所在し、2度にわたって調査を行っている。北西部がSI-145と重複しており、本住居が新しいと思われる。形状は歪な隅丸方形になろうか。規模は縦横4.3m、深さは最大で10数cmである。方位は不明である。炉は北東隅寄りにあり、小さいながらも焼土層は明瞭であった。規模は60cm×40cmである。確認されたピット5本に規則性が見られず、しかも炉の周囲に偏在しており、深さも7cm～82cmで、柱穴として使用されたものもあったかもしれないが、具体的に指摘し得ない。床面は南東壁寄りが若干高いほかはほぼ平坦であった。覆土は上下2層の褐色土



が水平に堆積し、自然堆積であろう。貝層は上層で、SI-145から流れ込んだものであろう。

住居北側で形状を窺える遺物を出土したが、概して希薄である。土器のほか石鏃未成品1点、楔形石器4点（第93図118・119）、磨製石斧1点、石皿1点（第115図283）、剥片4点が出土した。

土器は16点を図示した。1～9・15・16は縄文が施されるものである。1は推定口径25cmで、口縁部～胴部上半に緩んだ附加条2種が、胴部下半に単節RLが施され2带構成となる。2a～2dは同一個体で、胴括れ部にコンパス文が粗雑化した波状沈線文が巡らされよう。3～9には附加条縄文が施されるが、3が附加条1種であるほかは2種である。15・16は胎土中に纖維は含まれず、単節RLが施される。10～14は沈線文が施されるもので、10は菱形文、11は葉脈文が描出される。

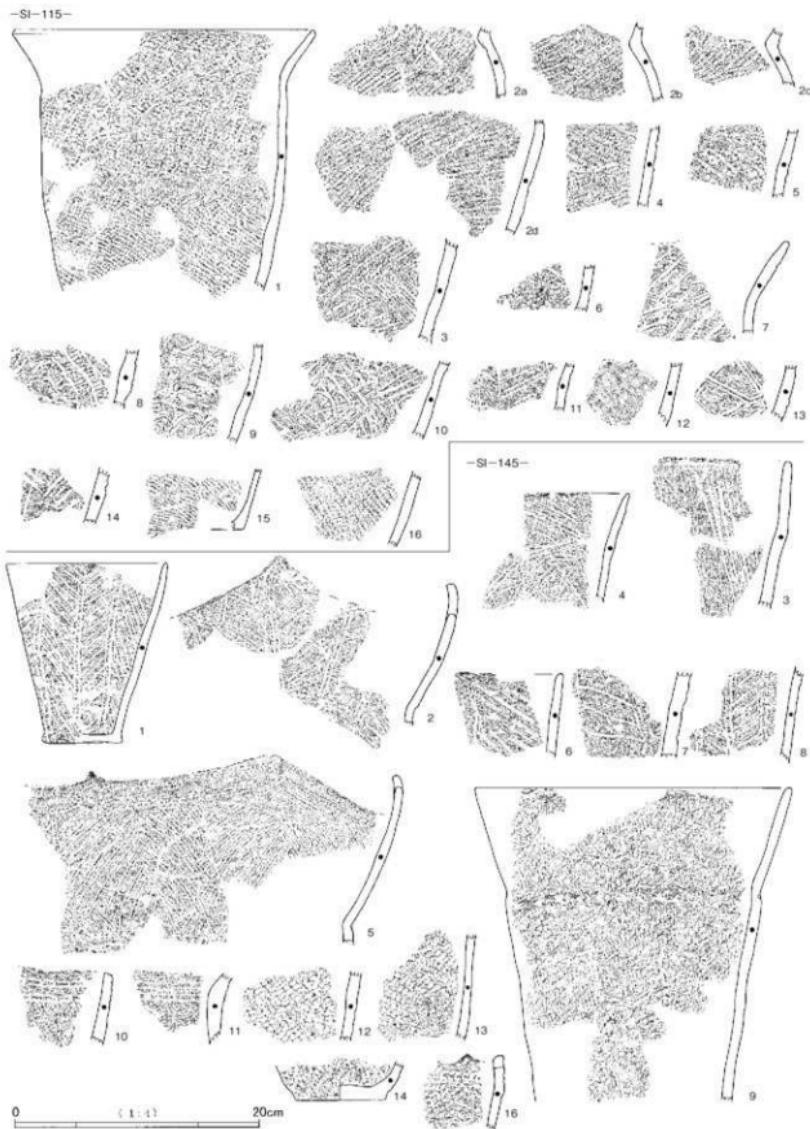
以上は黒浜式で本遺構の帰属時期としたい。

SI-145 (14) SI-013 (第12・13図、図版6・17・34・35)

台地北西寄りのBB23-32・33グリッドに位置する。南東部でSI-115と重複しており、本住居が古いと思われる。形状は多少北側が開く寸詰まりの撥形である。規模は長軸長7.2m、短軸長は北側6.6m・南側5.6m、深さは最大で30cmである。方位は北東である。炉は北側中央にあり、規模は長軸長1m、短軸長7.5cmで、焼土層の形成は不十分であった。ピットは4本確認され、位置からしてP1・P4が柱穴に該当すると思われるが、P2も深さ43cmで柱穴の可能性がある。しかし、北東や南東の対応する位置には確認できなかつた。なお、南東部のP3は深さ不明である。床面は南側が入口部に相当するためか幅約2mに渡って5cm前後低くなっていた。覆土は上から褐色土、黒色土、褐色土が水平に堆積し、中層の上に貝層が形成されていた。貝層は炉の南西がブロック状、北東が不定形であり、南西部は2m×1mほどの大きさであった。ハマグリを主体とし、サルボウ・アサリなども含む。

遺物はこの貝層一帯から密に出土した。石器類は石鏃2点（第90図21・22）、石鏃未成品5点（第92図91・92）、楔形石器6点（第94図146・147）、異形石器1点（第96図195）、磨石類3点、石皿2点（第115図283）、台石1点（第112図287）、剥片・両極剥片・碎片各3点、原石2点を出土した。

土器は37点を図示できた。1～32は黒浜式である。1～8・30・31は沈線文が施されるもので、1・2・6～8は葉脈文が描出される。1は小形深鉢で、口径13.1cm、底径6.6cm、器高14.7cmを測る。2は波状口縁端部に沿って大振りの波状沈線文が施され、胴括れ部に結節沈線文が巡らされよう。5は波状口縁で、緩やかな波状部と小突起が付く部分が認められる。端部に沿って結節沈線文による幅狭な楕円区画文が設けられ、小突起直下には凹文が配される。胴括れ部には結節沈線文が巡らされ、区画文との間は重疊する大柄な網目文が施される。8は葉脈文の基幹線である綫維の沈線が結節沈線文となる。30・31は結節沈線文が施される。9～29・32は縄文が施されるものである。9・32は無節Lが施される。9は硬く粗い纖維を用いた撚糸の回転施文で、口縁部と胴部の境に連続刺突文が巡らされる。32は浅鉢で全体の1/3が遺存している。推定口径24.2cm、底径9.6cm、器高12.7cmを測る。10～13は単節RL、14は単節LRが施される。18は単節RL・LRの羽状縄文が施される。10・11・16には結節沈線文も施される。15・17・19～26は附加条縄文が施されるものである。26は附加条1種、15・17・19・20・24・25は附加条2種、21～23・29は附加条軸縄不明である。15・25は附加縄が緩んでいる。15は口縁端部に突苔により無文部が設けられ、以下に纖細な平行沈線文間に結節を加えた幅狭な区画帯が形成されよう。26は附加条の末端を閉じる処理による軌跡が認められる。27は撚糸LとRを一組にして軸に巻いた撚糸文あるいは附加条軸縄不明であろう。28は撚糸文Lが施される。



第13図 SI-115・SI-145 (2)

33～37は花積下層式である。33はL+R+Lの異方向の3本を一組とした側面圧痕文により蕨手状のモチーフを描出し、モチーフ間に刺切文を充填する。34・35は肥厚した折り返し口縁端部から単節RL・LRの羽状繩文が施される。36も単節RL・LRの羽状繩文が施される。37は底部下端までと底部外面に貝殻背压痕文が施される。

以上のうち質量とも安定し、かつ時期的に新しい黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-116 (12) SI-001 (第14・15図、図版2・22)

台地北西基部に当たるZ23・28・29・38・39グリッドに位置し、富士見遺跡と近接する。形状は横長の隅丸方形で、南辺が広い台形状となる。規模は長軸長6.5m、短軸長5.9m、確認面からの深さは28cmである。方位はほぼ真北を示している。炉は北側のやや東寄りにあり、浅い覆土に焼土がわずかに混じるのみであった。その範囲は径42cm×23cmと住居規模からすると小形である。ピットは5本あるが、南東部に集中し、規則性に欠けることなどから、柱穴とは見なしがたい。深さはいずれも20cm台である。なお、北側のSK-284は近世の土坑により新しい所産である。床面は多少の凹凸が認められ、概して壁寄りの周縁部が2cm～6cm高いという特徴がある。覆土は上下2層の水平堆積であり、多少焼土粒子を含むという共通性がある。

遺物は覆土内から出土し、中央部に集中していた。土器は破片が多数出土したが、被熱により遺存状態が悪く復元が困難で、図示できたのはわずかであった。一方石器類は、石錐4点（第90図3～6）、石錐未成品9点（第91図69～77）、楔形石器26点（第93図120～132）、石錐2点（第96図184・185）、二次加工ある剥片3点、打製石斧1点（第97図196）、磨製石斧2点、磨石類5点、敲石2点（第110図269）、剥片43点、両極剥片26点、碎片90点、原石6点と多種類出土している。石錐未成品、楔形石器、剥片類を含んでおり、石錐製作跡であったと考えられる。

図示できた土器片は9点であった。1～3は花積下層式で、単節RL・LRの羽状繩文が施される。

4・5は黒浜式である。4は単節RL・LRが施され、5は縦位に沈線文が施される。

6～9は諸磯式・浮島式である。6は地文単節RL上に幾何学文を磨消文によって作出する。7・8は地文単節RL上に横位の平行沈線文が複数条巡らされよう。7・8とも諸磯式であろう。9は波状貝殻文が施される浮島II式あるいはIII式であろう。

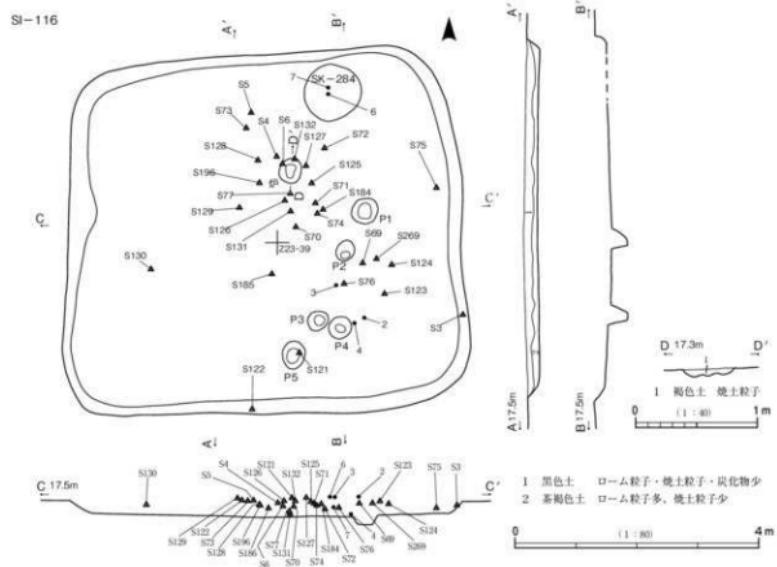
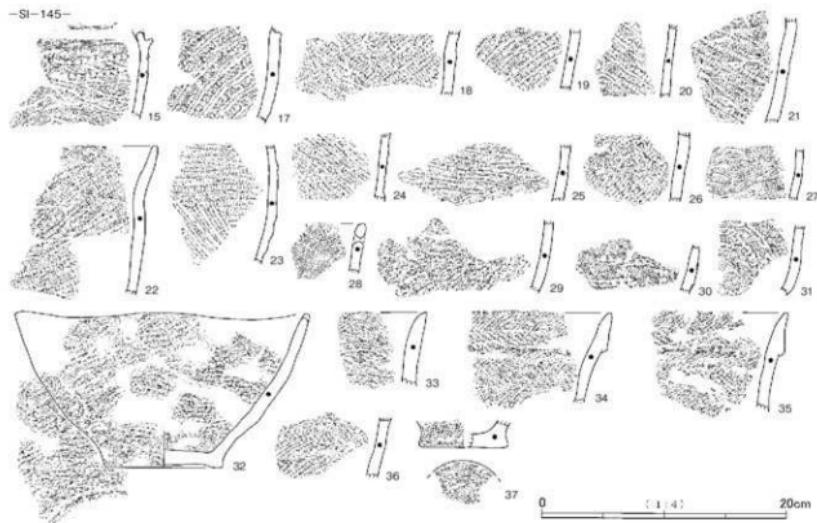
以上の内容は時期決定要素に乏しく、本遺構の帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

SI-117 (12) SI-002 (第15図、図版3・22)

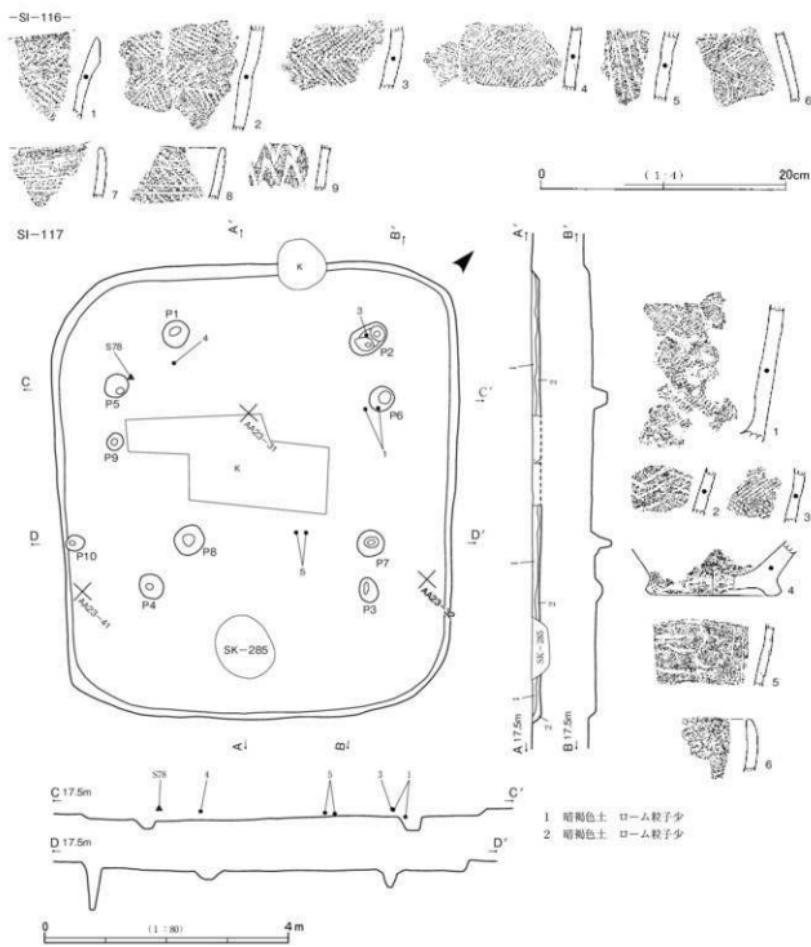
台地北西基部に当たるAA23・20・21・30・31グリッドに位置し、富士見遺跡と近接する。形状は隅丸長方形であり、中央部はイモ穴による攪乱を受けている。また、SK-285が重複する。規模は長軸長7.4m、短軸長6.6m、確認面からの深さは14cmである。方位は北西と思われる。炉は確認できなかったが、攪乱により壊された可能性もある。ピットは10本あり、明瞭な対応関係にあるP1～P4は柱穴としてよいが、残りについては不明である。床面は中央部に比して、周縁部の1.0m～1.5mの範囲が2cm～7cm高くなっている。覆土は上下2層の暗褐色土が水平堆積し、下層がより明るい。

遺物は覆土内に緩慢な分布を示し、わずかに北側それも北西隅寄りに多少の集中箇所を認めるものである。土器は小破片が多かった。石器類は石錐未成品（第91図78）、剥片、両極剥片、碎片を出土しており、石錐製作跡であった可能性がある。

図示できた土器片は6点であった。1～4は花積下層式である。1は底部に続く胴部破片で単節LRが



第14図 SI-145 (3)、SI-116 (1)



第15図 SI-116 (2)、SI-117

施される。2は貝殻背圧痕文と貝殻腹縁刺突文が施される。3は単節RL・LRの羽状繩文が施され、結節状の回転軌跡が認められる。4は上げ底の底部である。

5・6は浮島式で、いずれも無文であるが、5には輪積調整痕が認められる。

以上の内容は時期決定要素に乏しいので、本遺構の帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

SI-118 (12) SI-003 (第16図、図版3・22)

台地北西基部に当たるAA23-34・43・44グリッドに位置する。形状は隅丸方形であるが、南辺両隅とりわけ南東は丸みをなしている。規模は長軸長5.2m、短軸長5.0m、確認面からの深さは15cmである。方

位は北西であろう。炉は確認できなかった。ピットは4本あるが、対応するのは北側のP1・P2のみで、南東部壁際のP3は周囲から遺物が出土している。これらは深さもまちまちである。床面は中央から西側寄りがやや低く、南東寄りが高い。その差は数cm～7cmである。覆土は上下2層の水平堆積であり、下層はローム粒子主体である。

遺物は少なく、しかもほとんどが小破片であった。石器は石鎚1点（第90図7）、石鎚未成品2点（第91図79）のほか碎片を出土した。

図示できた土器片は2点で、どちらも黒浜式である。1は附加条軸縄不明が施され、2は附加条1種が施される。2には纖維が含まれず、砂礫が少量含まれる。

以上の内容は時期決定要素に乏しいので、本遺構の帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

SI-119 (12) SI-004 (第16図、図版3・22)

台地北西基部に当たるAA23-45・46・55・56グリッドに位置する。形状は隅丸長方形であり、西辺が多少外へ出張っている。規模は長軸長8.1m、短軸長約5.3m、確認面からの深さは15cmである。西側に大きく攪乱がはいるためか炉・ピットを確認できず、方位は決め手に欠くが長軸は南北を向いている。全体に南側から北側へ若干傾斜し、比高約5cmである。覆土は上下2層の水平堆積であり、下層はローム粒子主体で粘性に富む。なお、南東～北西へ交差するようにSD-004が重複しており、その覆土中に貝層が存在する。土層断面の観察から溝は住居覆土を切っており、この貝層は溝に伴うといえる。

遺物は、攪乱周辺から出土している土器片と石鎚2点（第90図8・9）、石鎚未成品1点、剥片・碎片である。図示できた土器片は9点で、1・2は花積下層式である。1は口縁部下に突帯状の隆起線が巡らされ、貝殻背圧痕文が施される。2は単節RL・LRの羽状縄文が等間隔施文される。

3～5は関山式で、いずれも内面のミガキが顕著である。3は単節RL、4は単節LR、5は単節RL・LRの羽状縄文が施される。

6～8は黒浜式で、6は附加条軸縄不明、7a・7bは附加条2種である。8は平行沈線文が施される。

9は前期末葉の土器で、口縁部に工具による押捺、以下に単節縄文RLを施す。胎土に纖維を含まない。

遺物の多くが攪乱周辺から出土しており、本遺構の帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

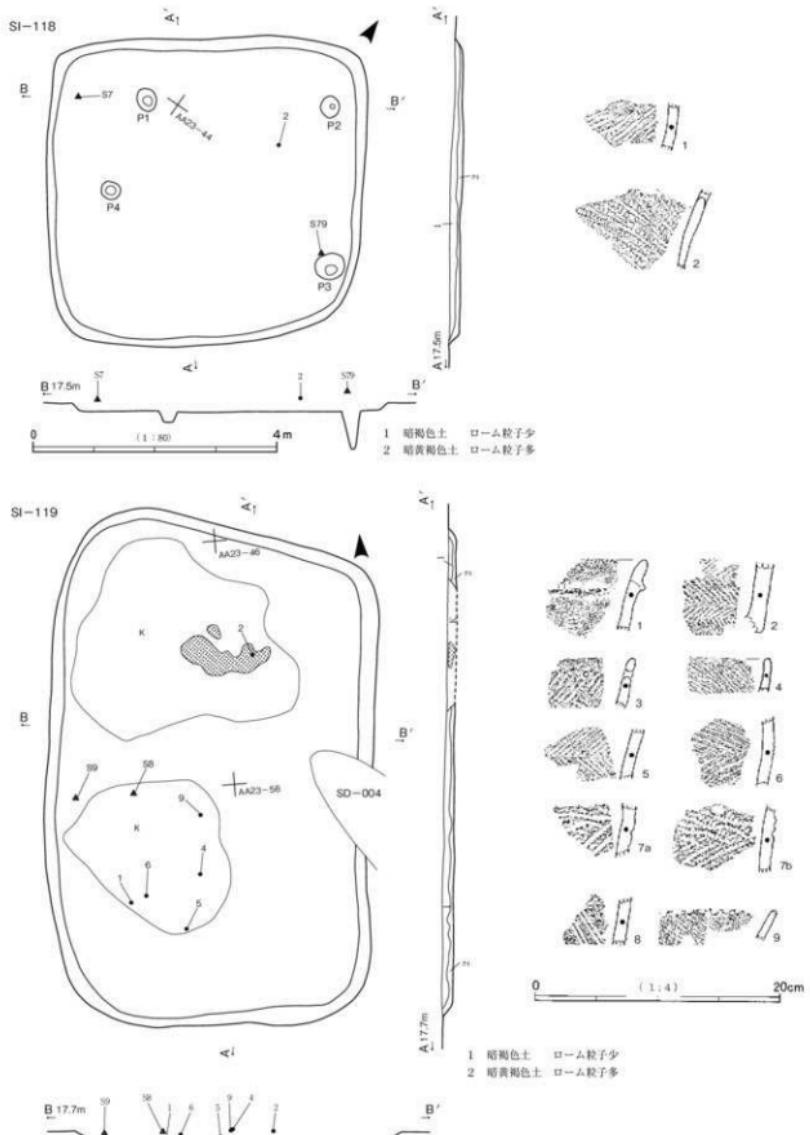
SI-120 (12) SI-005 (第17図、図版23)

台地北西基部に当たるAA22-91グリッドに位置する。掘り込みや炉・柱穴などの施設は確認されなかつたが、ほぼ同じ高さから遺物がまとまって出土したため、竪穴住居の可能性が高いと判断した。土層断面の観察によると2軒の住居が重複していた可能性が考えられ、図は土層断面と遺物の分布範囲、床面の状態などをもとに推定復元したものである。遺物はまとめて取り上げており、時期的にも分別できなかつた。

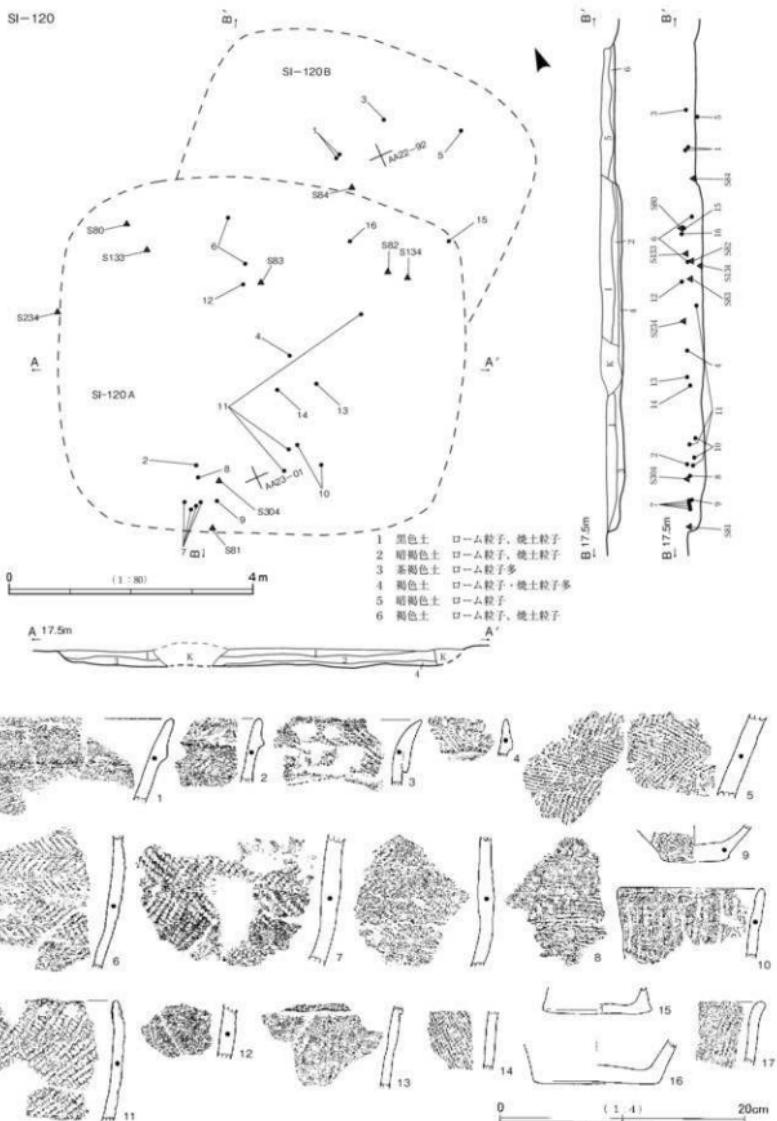
遺物は覆土内から多く出土し、とくに中央部に集中していた。土器のほか石鎚未成品6点（第91図80～84）、楔形石器4点（第93図133・134）、礫器1点（第102図234）、磨石類4点、敲石1点、側面調整礫2点（第117図304）、剥片7点、両極剥片1点、碎片12点を出土した。

土器は17点を図示した。1～9は花積下層式である。1～4は肥厚する口縁端部を呈するもので、3は折り返し口縁となる。1は貝殻背圧痕文、2は単節LR、3は単節RLが施される。4は鋸歯状に沈線文が施され、刺切文が空白部に充填される。5～8は単節RL・LRの羽状縄文が施されるもので、8の内面には貝殻条痕文が施される。9は被熱のため不明瞭だが縄文が施されていると思われる。

10～12は黒浜式である。10は口縁端部から縦位に沈線文が施される。11は口縁端部に半截竹管による列



第16図 SI-118、SI-119



第17図 SI-120

点状の刺突文が巡らされよう。12は先端に抉りを入れた半截竹管による列点状の刺突文を縦位に施している。

13～16は浮島式・諸磯式と考えられる。13は無文の浮島式、14は単節RLが施される諸磯式である。

17は早期撫糸文系夏島式で、外反する口縁端部から単節RLが施される。

以上の内容は時期決定要素に乏しいので、本遺構の帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

SI-121 (12) SI-006A (第18・19図、図版3・22)

台地北西基部に当たるAA22-82・83グリッドに位置し、富士見遺跡に近接する。SI-122・SI-123と重複し、土層断面から本跡が新しいと考えられる。形状は南側が隅丸長方形、北側が梢円形という珍しい例である。規模は長軸長7.2m、短軸長6.3m、確認面からの深さは18cmである。方位は炉の位置からして、南西と判断される。炉は南寄り中央にあり、規模は約60cm×50cmである。火床面はよく焼けており、縁に石皿片が意図的に置かれている。ピットはほぼ対称的な位置にP1～P4が確認され、柱穴としてよいであろう。また、東壁際にP6がある。北側のP5は、SI-122に所属する可能性が高い。床面は多少の凹凸が見られるが、周縁部の高まり等は認められない。覆土は大きく上下2層の水平堆積であり、いずれも焼土を含んでいる。

遺物は住居内覆土中に緩慢な分布を示す。土器のほかに石器未成品1点、楔形石器2点（第93図135・136）、打製石斧1点（第97図197）、磨製石斧1点（第100図219）、磨石類2点、石皿2点、剥片3点、碎片2点を出土した。

図示した土器は8点で、1～5は花積下層式である。1は単節LR、2～4は単節RL・LRの羽状繩文が施される。5は器面が荒れているため不明瞭だが、単節RL・LRの羽状繩文が施されていると思われる。

6は黒浜式で、葉脈文が施される。

7・8は沈線文が施される諸磯式で、8は結節沈線文が施される諸磯式である。

以上の内容は時期決定要素に乏しいので、本遺構の帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

SI-122 (12) SI-006B (第18・19図、図版3・22)

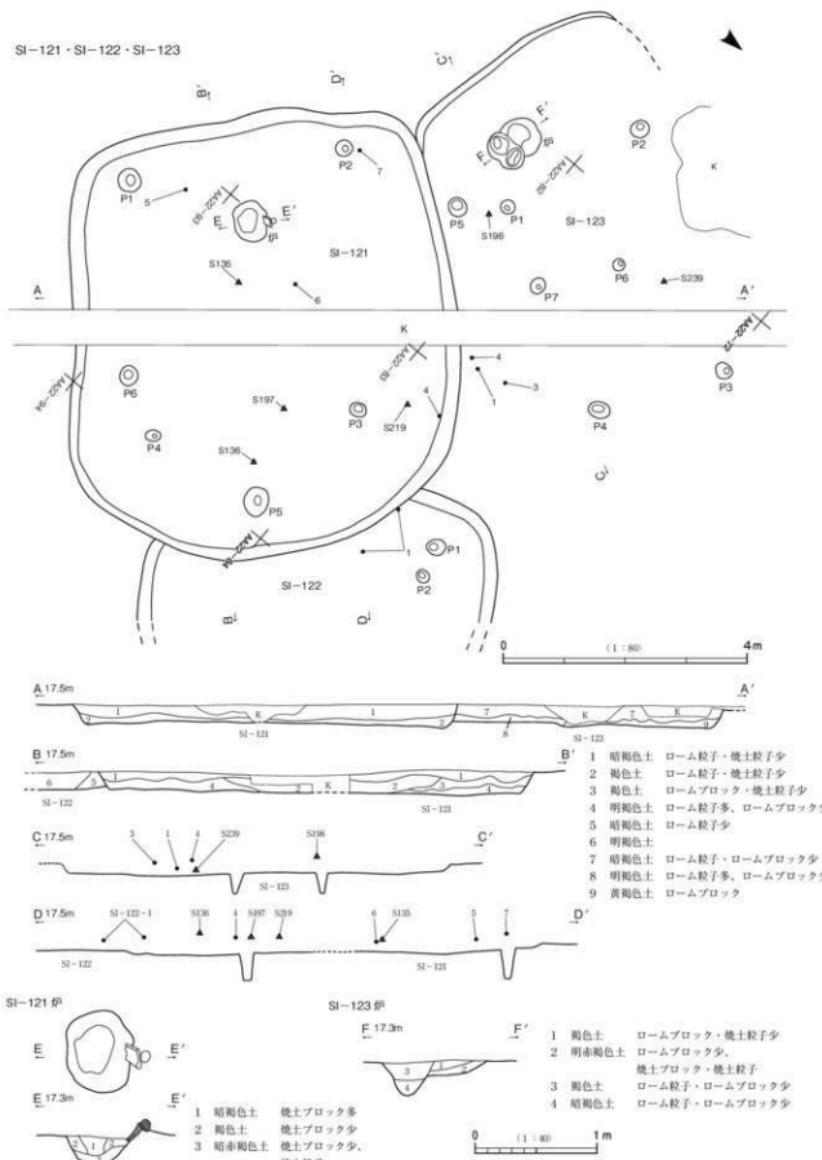
台地北西基部に当たるAA22-73・74グリッドに位置し、富士見遺跡と近接する。SI-121と重複し、本住居が古い。調査区端に当たり、その半分が記録されたに留まっている。これに加えSI-121によって南西部が大きく壊されていることもあり、隅丸方形ないし長方形かと推測される。規模は短軸になるとみられる遺存部で5.8mである。なお、確認面からの深さは約50cmである。方位は不明である。炉は確認できた範囲内では見出せなかった。ピットはSI-121のP5を含めればほぼ対称的な位置にP2が確認され、柱穴になろうか。また、西壁寄りにP1がある。床面は取り立てて特記事項はない。覆土は部分的な観察に留まるが、ローム土、ロームブロックを多く含むという特徴がある。

土器は床面ないし床面より多少上から8点の土器片が出土しており、そのうち1点を図示した。土器のほか磨石類1点、石皿3点を出土したが遺存状態が悪く図示しなかった。

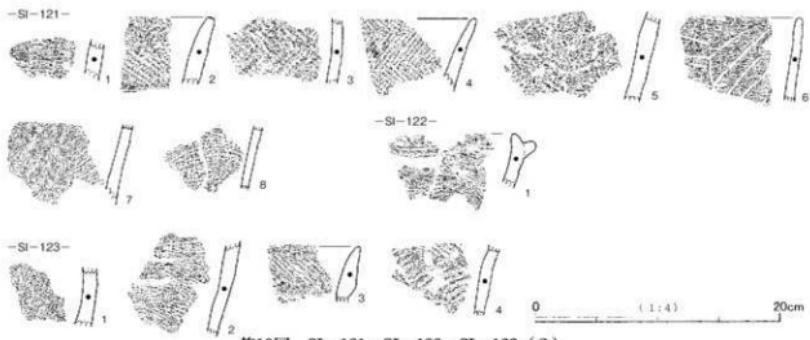
図示した土器は壁際から出土した1の口縁部片1点で、口縁部下に突帯状の隆起線が巡らされ、以下には単節LRが施される。花積下層式で、時期決定の資料としてはわずかだが本遺構の帰属時期としたい。

SI-123 (12) SI-006C (第18・19図、図版3・22)

台地北西基部に当たるAA22-71・72・82グリッドに位置し、富士見遺跡と近接する。SI-121と重複し、全体に遺存が悪く、壁は南側のみ遺存するに過ぎない。形状は炉・柱穴の遺存状況から隅丸長方形と思わ



第18図 SI-121 · SI-122 · SI-123 (1)



第19図 SI-121・SI-122・SI-123 (2)

れる。規模は現状で長軸長6.3m、短軸長4.1m、深さ35cmである。方位は南西である。炉は北側壁寄り中央に位置するが、明瞭なものではなく、北東寄りにも焼土層といつてよい炉状の範囲が確認された。ビットはほぼ対称的な位置にP1～P4が確認されたが、この他に深さ30cm台のP5～P7が中央から南東寄りに分布する。床面は南側より北側が高いがとりわけ北西部は約10cm相対的に高くなっている。覆土は上下2層の水平堆積であり、量的には少ないがロームブロックを含んでいる。

遺物は疎らで、数ブロックに分かれるよう偏在する。土器のほか打製石斧1点（第97図198）、磨石類2点（第102図239）、剥片4点、両極剥片1点を出土した。

土器は4点を図示した。1は単節LR、3は単節RL、4は単節RL・LRの羽状縄文が施される。2は貝殻背圧痕文が施される。

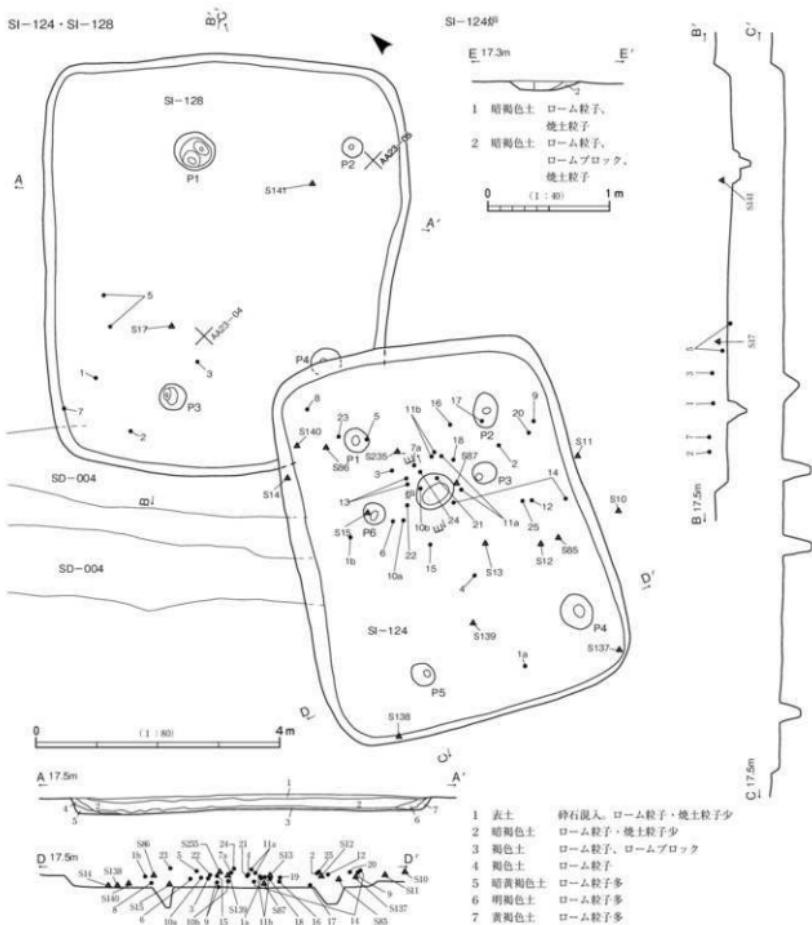
以上は花積下層式で、時期決定の資料としてはわずかではあるが本遺構の帰属時期としたい。

SI-124 (12) SI-007 (第20・21図、図版23・24)

台地北西基部に当たるAA23-04・14グリッドに位置し、富士見遺跡と近接する。SI-128と重複しており、当遺構が古い。また近世の溝SD-004とも一部重複する。形状は隅丸長方形であるが、南側が若干幅広である。規模は長軸長6.3m、短軸長4.9m、確認面からの深さは15cmである。方位は北東である。炉は北寄り中央にあり、規模は64cm×53cmである。明瞭な焼土層は見られない。ビットはほぼ対称的な位置に6本確認された。掘形・深さとともに揃っており、柱穴とみてよいであろう。床面は柱穴を結ぶ内部が数cm低くなっている。覆土は土層断面の記録をとれなかったため不明である。

遺物は中央を走る溝内から多く出土した。この他には北西側に多少の集中域があり、全体的には緩慢な分布であるが遺物量が多い。土器のほか石錐7点（第90図10～15）、石錐未成品12点（第91図85～87）、楔形石器12点（第93図137～140）、礫器1点（第102図235）、磨石類4点、石皿1点、石製品1点（第96図323）、剥片23点、両極剥片19点、削片2点、碎片40点と石錐未成品・剥片類を含む石器類を多数出土しており、石錐製作跡であったとみられる。

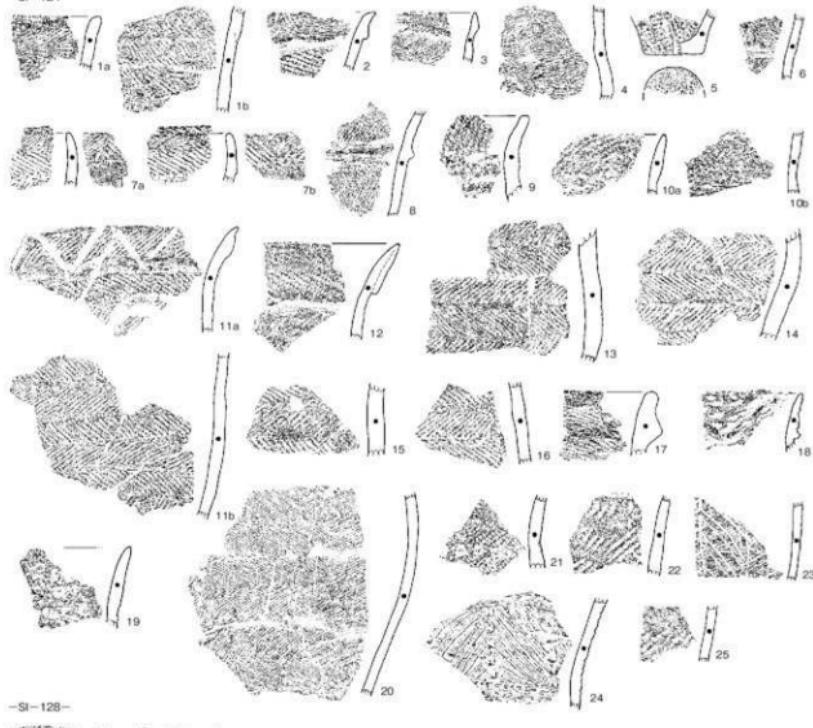
土器は破片ばかりであるが25点を図示した。1～20は花積下層式である。1～5は貝殻背圧痕文が施されるもので、5は底部外面にも施される。1b・4などは擬縄文的に細かな単位で施される。2・3は



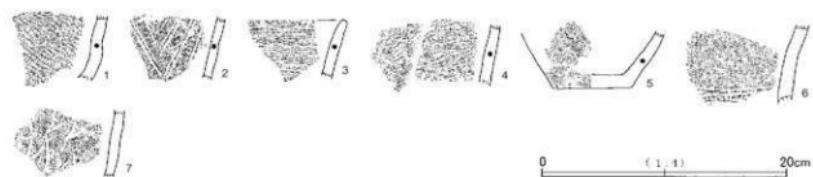
第20図 SI-124・SI-128(1)

口縁部に段を有し、断面形は刃状を呈す。2の口縁端部以下には単節RLが施される。6は無節R+Lの異方向2本を一組とした撚糸側面圧痕が施される。9は撚糸文Rが施される。7a～8・10a～17・20は繩文が施されるものである。7a・7bは同一個体で、口縁部がやや内傾する。無節R・Lが外面と内面端部の一定幅に施される。8・10a・10b・20は単節LRが施されるもので、8は口縁部下端に降起線が巡らされよう。10aの口縁部の断面形は刃状を呈す。11a～16は単節RL・LRの羽状繩文が施されるもの

-SI-124-



-SI-128-



第21図 SI-124・SI-128 (2)

で、11a・11b・13・14の横帶区画法は等間隔施文である。11a・11bは同一個体で、口縁部は折り返し口縁状の幅広な段となり、断面形は刃状を呈す。地文繩文上には幅広で抉りの深い沈線で鋸歯状文を描出する。胴部施文帯の境界には、条の末端を閉じる処理による軌跡が認められる。12は折り返し口縁で、断面形は刃状を呈す。17は無節Rが施されるもので、口縁部下端が段状に肥厚する。20は還付末端無節R・Lの羽状繩文が施され、横帶区画法は等間隔施文である。18は口縁部に鋸歯状に隆起線が付され、刺切文がその内部に充填される。19は口縁端部から細かい斜沈線が施され、その下端に円形竹管刺突文が巡らされ

よう。

21~25は黒浜式である。21・22・25は縄文が施されるものである。21は胴部中位の括れ部に円形竹管刺突文が巡らされよう。22は0段多条LRが施される。25は無節Lの結節縄文が施される。23は平行沈線により葉脈文が施される。24は半截竹管内側を用いて葉脈文が描出されるもので、縦横の基幹線は結節沈線文、枝葉の部分は平行沈線文となる。

以上のうち、花積下層式は床面直上から覆土上層、黒浜式は覆土上層から出土していることから、本遺構の帰属時期は質量とも安定している花積下層式としたい。

SI-128 (12) SI-012 (第20・21図、図版25)

台地北西基部に当たるAA22-94、AA23-04グリッドに位置し、富士見遺跡と近接する。SI-124と重複し、本住居が新しい。また、近世の溝SD-004とも一部重複する。形状は隅丸長方形で、北側が明らかに幅広となっており、重複するSI-124とは対照的である。規模は長軸長6.9m、短軸長5.9m、確認面からの深さは14cmである。方位は北東で、炉は確認できなかった。ピットは4本確認され、位置的には偏りがあるものの、深さが約30cm前後と揃っており、柱穴としてよいかもしれない。床面はほぼ中央南北ラインを境に東側半分が数cm高いが、とりわけ北西隅では7cm~8cmの差がある。覆土は上下2層の水平堆積であるが、ともに暗褐色土で、似通った土層である。

遺物は疎な出土状態で、西側隅付近に偏っている。土器片のはか石錐1点(第90図17)、楔形石器1点(第94図141)、剥片2点、両極剥片1点、削片1点、碎片6点を出土した。

土器片7点を図示した。1~3は黒浜式である。1は単節RLが施される。2は平行沈線により入組鋸歯状文が描出されると思われる。3は櫛歯状工具により条線文が施される。

4・5は花積下層式で、貝殻背圧痕文が施される。4は施文単位が斜位に細かく擬縄文的である。5は推定底径6.4cmである。

6・7は浮島式である。6は半截竹管の先端を挿入させた工具を押し引いた結節沈線文と、平行沈線文が横位に巡らされよう。地文に撚糸文Rが施される。浮島I式である。7は波状貝殻文が施されるもので、浮島II~III式に比定される。

以上の内容は、近世溝と重複することもあり、複数型式を含むもので、時期決定要素に乏しい。したがって本遺構の帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

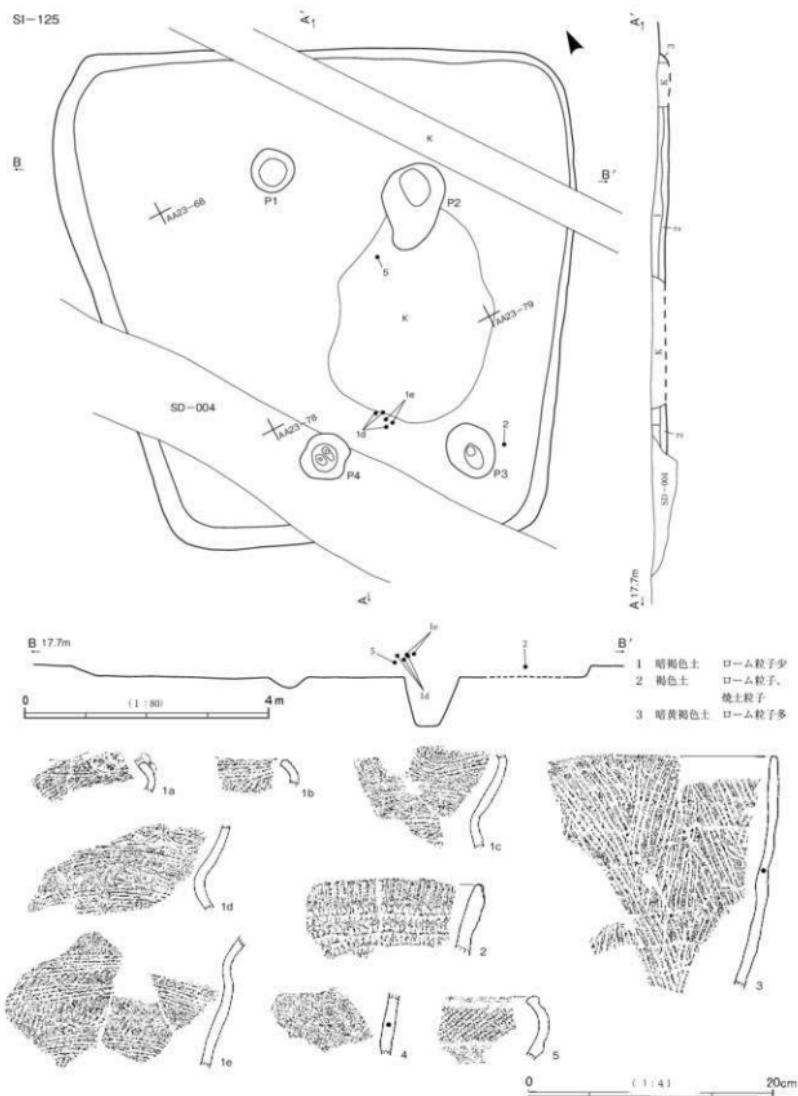
SI-125 (12) SI-008 (第22図、図版3・24)

台地北西基部に当たるAA23-68・78グリッドに位置する。SD-004また近代攪乱溝と重複するほか中央部も攪乱を受け遺存状態は悪い。形状は隅丸長方形であるが、北側が幅広となっており、規模は長軸長8.5m、短軸長7.8m、確認面からの深さは23cmで、方位は北東である。炉は攪乱によって壊された可能性もあるが、確認されなかった。ピットは4本確認され、その位置関係から柱穴と思われる。深さは約20cm、30cm台、50cm台、80cm台と一定しない。覆土はほぼ上下2層の水平堆積であり、下層には焼土が見られた。

遺物は少なく、疎な出土状況であった。石器類も碎片1点を出土したのみである。

土器は5点を図示した。1a~1eは同一個体で諸磽b式である。粒状の突起が付く口縁部が強く内湾した後に膨らみ、頸部以下の括れに統く器形を呈すと思われる。地文の単節LR上に複列の波状、弧状、横位の沈線文が展開する。胎土中に細かな砂砾が多く含まれる。

2は浮島III式である。口縁端部に刷毛目状の単沈線が施され、以下に三角文が横位に連続的に施される。



3・4は黒浜式である。3は口縁端部から平行沈線文が入組鋸歯状に密接して施される。4は単節LRが施される。

5は加曾利EⅡ式のキャリバー形土器で、単節LRが施される。

時期の異なる複数型式が含まれるが、出土位置の記録があり、内容もまとまりのある前期後半諸磯b式・浮島Ⅲ式が本遺構の帰属時期となる可能性が高いとしたい。

SI-126 (12) SI-010 (第23図、図版3・24)

台地北西基部に当たるAA22-70・80グリッドに位置している。SI-127と重複し、本住居が新しい。形状は隅丸長方形である。規模は長軸長5.5m、短軸長4.5m、確認面からの深さは24cmである。方位は北東である。炉は確認できなかったが、中央を走るSD-005内に存在した可能性もある。ピットは計6本確認された。このうちP1～P4は柱穴として問題ないが、その他は不明である。なお、北側のP1・P2は深さ約60cmと70cm、一方南側のP3・P4はともに深さ22cmと揃っている。床面は全体に多少の凹凸が認められ、その差は最大で約10cm以上に及んでいる。覆土は2層の水平堆積で、全体によく締まっている。

遺物は床面では見られず、覆土中層に集中する傾向がある。石鎚（第90図16）・石鎚未成品（第92図88）各1点、楔形石器2点、石錐未成品1点、二次加工ある剥片1点、磨石類2点、剥片14点、両極剥片4点、削片2点、碎片24点、原石1点を出土し、石鎚製作跡の可能性がある。

土器片は11点を図示した。1～6は花積下層式である。1・2は繩文が施されるもので、単節RL・LRの羽状繩文である。横帯区画法は等間隔施文となろう。3は貝殻背压痕文が施されるもので、施文単位は斜位に細かく擬繩文的である。4a・4b・6は撫糸側面圧痕文が施されるものである。4a・4bは同一個体で、R+Lの異方向2本を一組として藤手状に施される。6は太目のR+Lの異方向2本を一組としている。5は焼成前の補修孔が認められる。文様は2次的な被熱により器面が荒れており不明である。

7～9は黒浜式である。7は一本引きの沈線文が横位または斜位に施される。8は平行沈線により葉脈文が施される。9は繩文が施されるもので、附加条軸繩不明である。

10は無文の尖底である。被熱で不明瞭ではあるが胎土中に纖維が含まれていることから、早期条痕文系の時期に比定されよう。

11は諸磯b式である。C字状結節沈線文が直曲線的に施され、胎土中に細かな砂礫が多く含まれる。

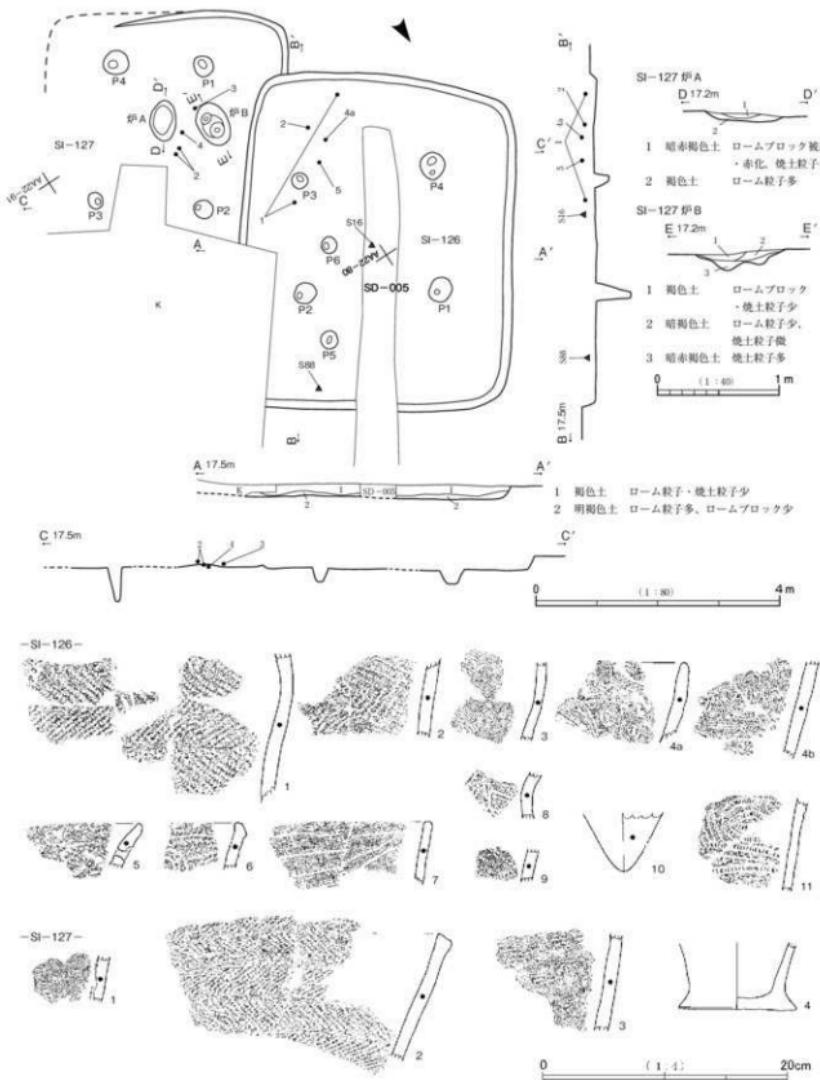
時期の異なる複数型式が含まれるが、出土位置の記録があり、内容もややまとまりのある花積下層式が本遺構の帰属時期となる可能性が高いとしたい。

SI-127 (12) SI-011 (第23図、図版4・24・25)

台地北西基部に当たるAA22-80・90グリッドに位置し、富士見遺跡に近接する。SI-126と重複し、本住居が古い。全体に遺存度が悪いものの、柱穴の位置や残存部から形状は隅丸方形と思われる。規模は長軸長4.2m、短軸長4.0m、確認面からの深さは21cmである。方位は北西である。炉は中央および西側中央の2か所で確認された。規模は炉A 69cm×42cm、炉B 74cm×52cmで、中央の炉Aは地山上に焼土が堆積しているのに対し、西側の炉Bは褐色土を挟んで焼土を含む層が存在する。ピットは4本確認され、その位置関係から柱穴として問題ないだろう。床面はほぼ平らである。覆土は土層断面の記録をとれず不明である。

遺物は住居中央部覆土中に土器片が散在する程度であり、攪乱等の影響を考慮したとしても少ないといえる。土器片のほかに石鎚未成品1点、磨石類1点、剥片6点、碎片1点を出土した。

SI-126・SI-127



第23図 SI-126・SI-127

土器の1～3は花積下層式である。1・3は貝殻背圧痕文が施されるもので、施文単位は斜位に細かく擬繩文的である。2は単節RL・LRの羽状繩文が施されるもので、横帯区画法は等間隔施文である。条の末端は閉じる処理により瘤状となるため、その軌跡が表出される。口縁端部上にも単節LRが施される。

4は底面端部が突出する底部で、浮島式である。

本遺構は遺存状況が悪く、出土土器が少ないが、複数型式が含まれる。花積下層式の可能性のあるSI-126との関係から、帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

SI-129 (12) SI-013 (第24図、図版4・25)

台地北西寄りのBB23-82・83グリッドに位置する。調査年度の境界に当たることもあり、北東側は不明瞭で、形状は隅丸方形ないし長方形と思われる。規模は南北が5.3m、東西については不明で、深さは31cmである。方位は2辺から判断すれば北となるが、あくまでも推測である。炉は確認できなかった。ピットは南側中央部に1本確認されたのみで、深さ27cmである。床面は南側壁寄りがやや高いものの、その差は数cm程度である。覆土は大きく上下3層の水平堆積であるが、下層と壁際付近はローム土主体である。

遺物は極めて乏しく、土器片2点を図示した。また剥片2点を出土している。

1は黒浜式で、無節Lが施される。2は口縁端部が無文で、くの字に屈曲する。以下には交互刺突文が施されると思われる。中辺式に比定されよう。

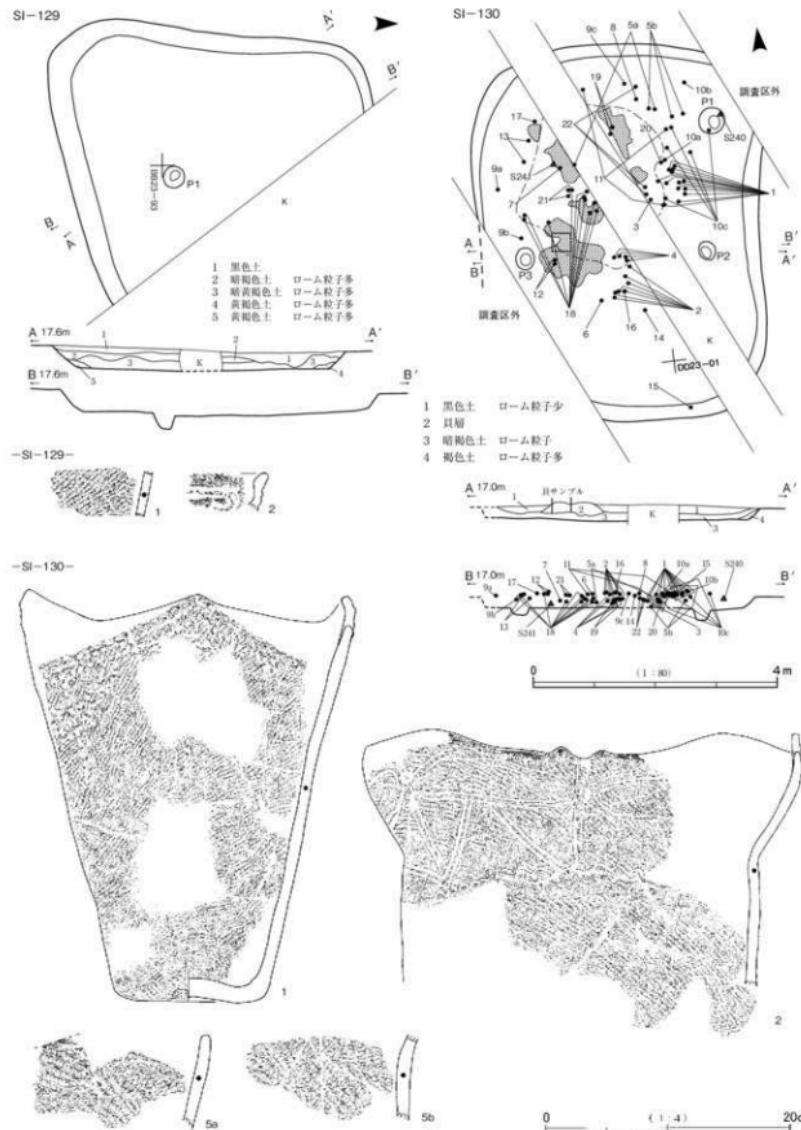
以上の内容は時期決定要素に乏しいので、本遺構の帰属時期は不明としたい。

SI-130 (13) SI-001 (第24・25図、図版4・16・25・26)

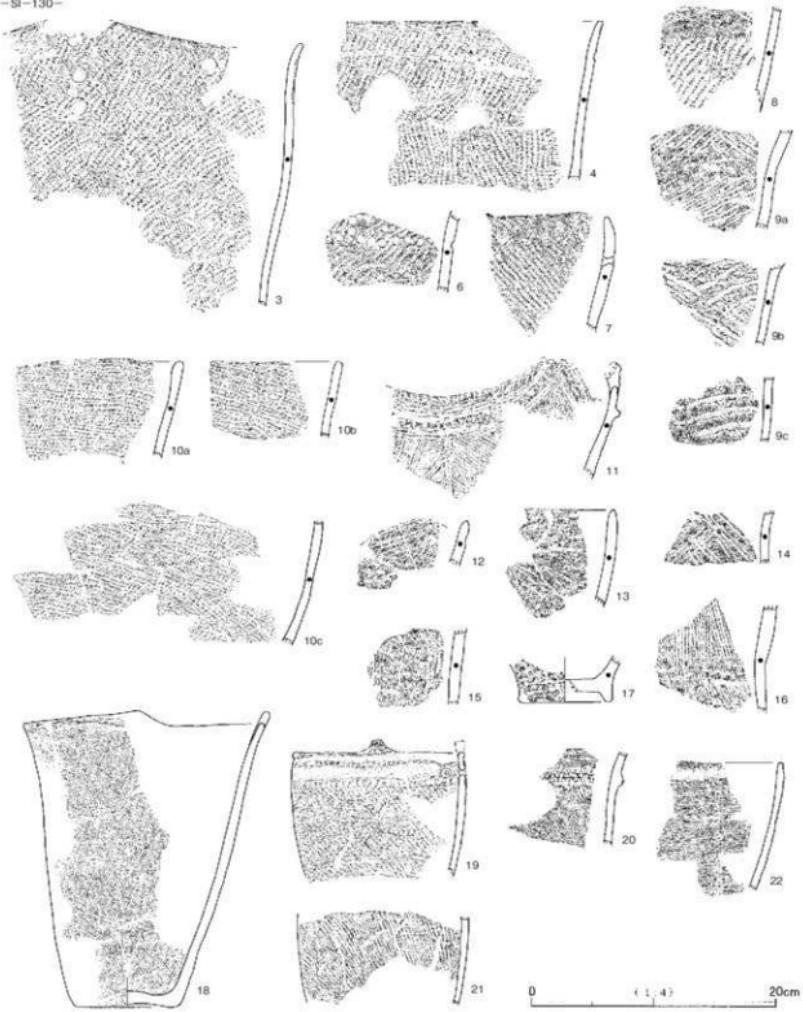
台地北東寄りのDD22-90・91グリッドに位置する。北東部と南西部は調査年度の境界に当たり確認できず、中央部を攪乱溝が縱断している。形状は隅丸方形で、東辺は幾分内側へ湾曲する。規模は長軸長6.1m、短軸長4.7m、深さは17cmである。方位はほぼ真北である。炉は確認できなかったが、攪乱溝によつて消滅した可能性もある。柱穴は北西の1本があれば北側寄りとはいえ配置上問題ないが、その深さはP1が1m、またP2・P3が15cm・11cmとバランスを欠いている。可能性を指摘するに留める。床面は北西寄りに2.0m×2.5mほどの硬化面が見られ、周辺より幾分高くなっている。覆土は上から黒色土、暗褐色土、褐色土の3層が水平堆積するが、壁近くにはローム粒子主体の褐色土の堆積も見られる。なお、北西部3層上面にブロック状の貝層(3m×1m)が形成されていた。ハマグリを主体とし、サルボウ・マガキなども含む。

遺物は住居北半分に偏っており、復元可能な土器が多く出土した。石器類は磨石類2点(第103図240・241)、石皿1点、剥片2点が出土している。

土器は22点を図示した。1～17は黒浜式である。1～10・12は繩文が施されるものである。1・12は無節L、2・5a・5b・7は単節RL、3・4・8は単節LR、6は0段多条LR、9a～9cは附加条軸繩不明、10a～10cは附加条2種である。1は4単位の波状口縁で、端部上に刻み目が付される。半截竹管の先端に抉りを入れた施文具による複列の押引文が口縁端部に巡らされ、波頂部から下がった位置で樹枝状のモチーフが描出されている。全体の2/3が遺存し、破片の一部は貝サンプル中に混入していた。波頂部で推定口径26.4cm、器高は33.4cmを測り、底部は上げ底である。2は緩やかな波状口縁であるが、遺存率が低いため単位は不明である。器形は直立気味の胴部から口縁部に向かって緩やかに開き、口縁端部でやや内傾する。波頂部間にには叉状の突起が配され、口縁部には平行沈線文によって弛緩した楕円区画文が施される。楕円区画文は縦位の平行沈線文によって分割されると思われ、波頂部の中軸上では凹文を伴う。楕円



第24図 SI-129、SI-130(1)



第25図 SI-130 (2)

区画文に接して平行沈線文による幅広な鋸歯状文が施され、さらにその下端には弛緩したコンバス文が施される。上半部の1/3周が遺存し、推定口径35.6cmを測る。3・6は地文縄文上に円形竹管刺突文が施される。3は波状口縁で、波頂部中軸上に複数の円形竹管刺突文が垂下する。7は波状口縁で、地文縄文上の口

縁端部に、コンバス文が弛緩した平行沈線による鋸歯状文が巡らされる。ほぼ同じ高さで2か所、補修孔が認められる。8は縄文帯の上部に細い平行沈線によって葉脈文が描出されており、2帯構成となる。11~17は沈線文が施されるものである。11は波状口縁で、口縁端部に沿ってやや間隔のある隆起線文が2条施される。隆起線上には半截竹管の先端に抉りを入れた施文具により刻み目が付され、隆起線間は条痕状の調整痕が認められる。以下は波頂部ほかを基幹線とする葉脈文が平行沈線により描出される。13は横位の結節沈線文で区画される口縁部は無文で、以下には沈線文が斜位に施される。14・15は粗い斜格子文が施されるもので、14は平行沈線、15は一本引きの沈線で描出される。16は櫛歯状施文具により条線文が施される。17は上げ底の底部で、推定底径7.8cmを測る。胴部下端に結節沈線文が巡らされよう。

18~21は胎土中に纖維は含まれないが、文様等は黒浜式と諸磣a式と共に通する要素をもつものである。22を除いて単節RLの縄文が施されるが、18・20は細い原体を用いている。18は2/3が遺存する。段差のある口縁部で、推定口径19.5cm、器高24.2cmを測る。底部は上げ底で、底径8.4cmを測る。19は口縁端部に突起を有するが、単位数は不明である。また、補修孔が認められる。文様モチーフは、半截竹管内側の複数の微細な痕跡が表出される結節沈線文によって描出されるが、この押引き手法には強弱があるため、櫛歯状の強い刺突と弱い押引きにより平行沈線が断続して描出される場合もある。口縁部は無文地に結節沈線文による狭小かつ横長な格円区画文が形成されており、磨消帶的な効果をもつ。胴部は結節沈線文により2帯の文様帯が形成されており、それらの内側には結節沈線文による対向弧線文が充填される。1/4周が遺存し、推定口径18.8cm、現高10.2cmを測る。接合しないが、SI-149-27が同一個体だとみられる。20は口縁部下端を、C字結節沈線文が両側に付随する刻み目付きの隆起線によって区画する。口縁部には、平行沈線文による狭小かつ横長な格円区画文が数段形成されよう。21は現高7.2cmを測る。22は口縁部の無文地にC字結節沈線文による狭小かつ横長な格円区画文が形成され、磨消帶的な効果を持つと思われる。口縁部下端のC字結節沈線文に付隨して平行沈線文が垂下するが、この上には一定の間隔をおいて円形竹管刺突文が連続的に施される。この基幹線の両側には平行沈線により狭小かつやや横長な格円区画が数段施され、いわゆる木葉肋骨文が描出されよう。

以上の土器の出土位置は床面直上から覆土上層で、胎土に含む纖維の有無によって分別できない。他に事例もあることから、本遺構の帰属時期は黒浜式でも最も新しい段階としたい。

SI-131 (13) SI-002 (第26図、図版4・26)

台地北西寄りのBB24-02・03・12グリッドに位置する。SI-132と重複しており、本住居が新しい。形状は隅丸長方形であるが、北側両端は幾分縮まった形状となる。規模は長軸長5.9m、短軸長4.8m、深さ約15cmである。方位は北東になろうか。炉は確認されなかった。柱穴は規則的に4本配置されており、しかも深さがほぼ20cmと一致する。床面は平らで北側両端寄りに硬化面があった。覆土は上下2層の水平堆積であり、自然堆積と考えられる。

遺物は住居北東覆土内に多少の集中域があるが、全体に希薄であった。土器のはか楔形石器2点（第94図142・143）、磨石類1点（第104図242）、敲石1点、両極剥片1点、碎片1点を出土した。

土器は遺存状態がよくないものが多く、14点を図示した。1は無文の浅鉢で、内外とも横位のミガキによる調整が顕著である。口縁部と底部の破片から図上復元した。いずれも推定で口径38.0cm、底径18.0cm、器高17.4cmを測る。2~11は縄文が施されるもので、2・5は単節RL、3・4b・10は単節LR、6は複節RLR、7・11は附加条軸縄不明、8・9は附加条1種である。2は口縁端部が無文帯となる。3は補修孔

が認められる。4a・4bは同一個体である。口縁部には数条の結節沈線文が横位に施され、胴部には地文繩文上に結節沈線が縦横・斜位に施され、米字文が描出される可能性がある。5は円形竹管刺突文が連続的に垂下しよう。12~14は沈線文が施されるもので、12a・12bは同一個体である。波状口縁で、円形竹管刺突文を伴う平行沈線が基幹線として垂下する。胴部には横位及び複数の斜位沈線が施されることから、米字文が描出される可能性がある。13は深く引かれた平行沈線によって、粗い斜格子文が施されよう。以上は黒浜式である。

14は胎土中に纖維を含まない無文の底部で、推定底径4.5cmを測る。細別時期は不明であるが、前期後半とする。

以上の内容から黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-132 (13) SI-003 (第26・27図、図版4・16・26~28)

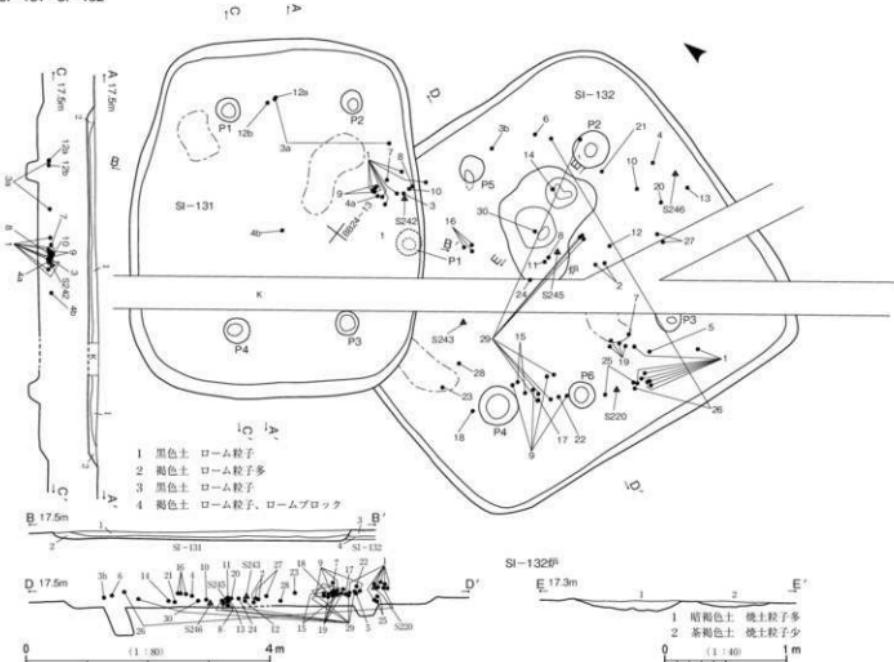
台地北東寄りのBB24-13・23グリッドに位置する。SI-131と重複しており、本住居が古い。形状は隅丸方形で、規模は長軸長6.5m、短軸長6.0m、深さは19cm、方位は北東である。炉は中央北東寄りにある2か所の焼土域が該当するものと思われる。規模はそれぞれ70cmと50cm四方である。柱穴は四隅にP1~P4、南北中央端にP5・P6というように、規則的に配置されているが、深さはまちまちでP3が57cm、P5が47cmだが、残りは15cm~16cmと径に比して浅い。床面は平坦で、部分的に硬化面がみられる。覆土は上下2層の水平堆積で、上層の黒色土中から遺物が多く出土した。

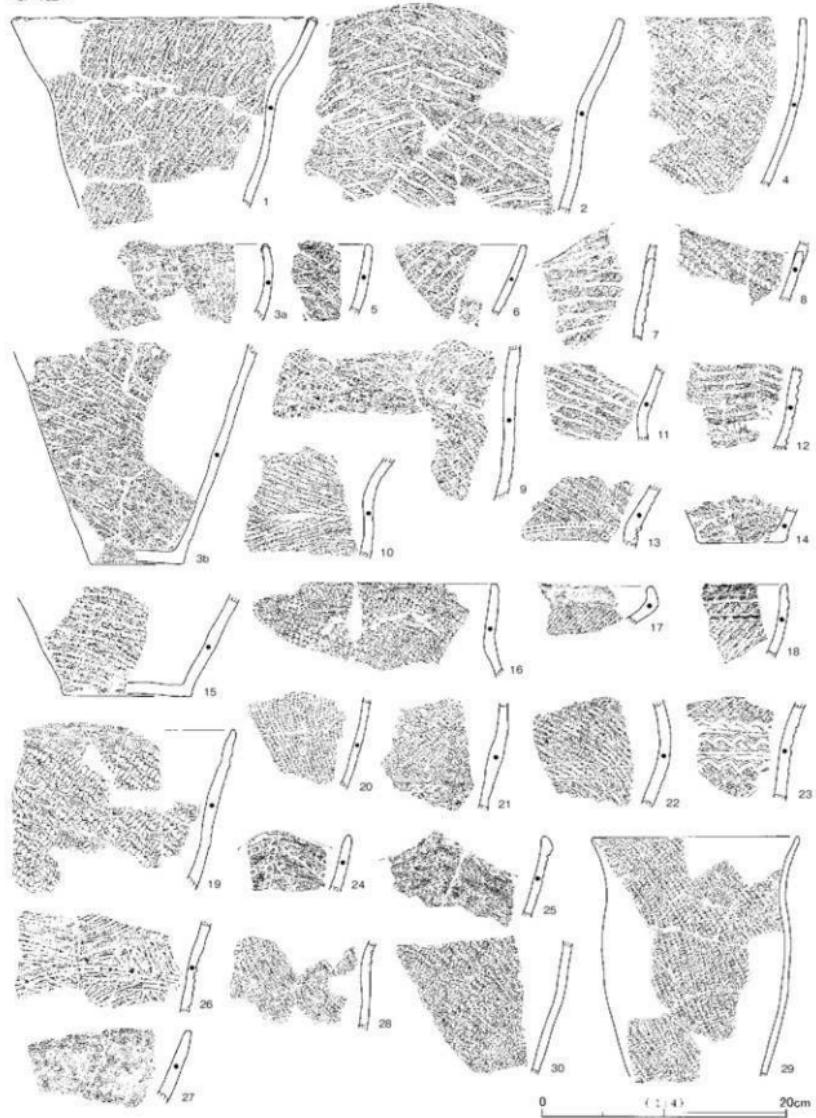
遺物は壁際を除き満遍なく出土し、復元可能な土器は住居東側半分に偏っていた。石器類は石鎌未成品・楔形石器各1点、磨製石斧2点（第100図220）、磨石類5点（第103・104図243~246）が出土している。

土器は29点を図示した。1~23は繩文が施されるもので、1~3b・6~9・11~13は附加条2種、4・5・10・14・15は附加条軸繩不明、16・19・20は単節RL、17・18・21は単節LR、22は無節R、23は単節RL・LRの羽状繩文である。1は口縁端部上に連続的に押捺が加えられている。1/5周が遺存する口縁部から胴部上半で、器形は緩やかなキャリバー形を呈す。推定口径24.0cm、現高15.5cmを測る。2は波状口縁で、口縁端部から施される附加条繩文が菱形構成となる。3a・3bは同一個体で、口縁端部は直な平縁で狭小な無文帯となる。胴下半部は1/3周が遺存し、底部は上げ底で推定底径7.7cmを測る。13は胴部中位に結節沈線文を伴う磨消帶が設けられると思われ、無文部に円形竹管刺突文が認められる。14・15は底部で、推定底径7.4cm、8.4cmを測る。15は若干上げ底である。16は口縁下部でくの字に屈曲し、胴部が膨らむ器形となる。17~19は口縁端部に狭小な無文帯が作出される。17は無文帯で強く逆くの字に屈曲するが、器種については深鉢あるいは浅鉢が不明である。18は無文帯以下の地文繩文上に、2条の結節沈線文が間隔をおいて巡らされよう。22は地文繩文上に縦横および斜位の細い平行沈線文が施されるが、部分的に結節沈線文となる。23は地文繩文上に半截竹管内側を用いて平行沈線文、波状沈線文が横位連続的に施される。波状沈線文は弛緩しているが、コンパス手法により支点を設けて描出している。24~26は沈線文が施されるものである。24は波状口縁で、C字結節沈線文で葉脈文が施される。25は波状口縁で、波頂部から垂下する基幹線は連続する円形竹管刺突文である。基幹線の両側には、葉脈文の枝葉がC字結節沈線で描出される。26は胴部中位の緩やかな括れ部に結節沈線文が巡らされ、その上下には平行沈線により葉脈文が描出されよう。これら沈線文の描出は粘土のはみ出しが各所に認められることから、器面が柔らかい段階で行われたと思われる。27は無文である。

28~30は胎土中に纖維を含まないもので、29・30には細かな砂礫が含まれる。いずれも繩文が施され、

SI-131・SI-132





第27図 SI-132 (2)

28は附加条2種、29・30は単節RLである。29は口縁部に向かって朝顔形に開く器形で、内面調整は口縁部では横位のナデ、胴部は縦位のヘラ削りが残る部分がある。推定口径15.8cm、現高19.6cmを測る。

以上の内容から本遺構の帰属時期は黒浜式としたい。

SI-133 (14) SI-001・(18) SI-016 (第28・29図、図版4・28・29)

台地北東寄りのCC22-58・59グリッドに位置し、SK-290・SK-347と重複する。その新旧関係は住居と比べてSK-290が新しく、SK-347は古いと推定されるが、後者は底面が住居とほぼ同じ高さということもあって、断定できない。全体に耕作による深耕が床面付近まで及んでいた。形状は隅丸方形である。規模は長軸・短軸ともに6m、深さは最大で45cmである。方位は北東になろうか。炉は北東寄りに位置し、規模は径70cmである。厚さ約5cmの焼土層が形成されており、被熱は下のローム面にも及んでいた。ピットは6本確認され、このうちのP2～P4は深さ80cm前後であるのに対し、炉に近いP1・P5・P6は8cm～19cmにすぎない。住居内東側を並行するように走る擾乱溝内に対応する柱穴が存在した可能性がある。床面は北側～東側壁寄りが最大約8cm高めである。覆土は上下3層の水平堆積であり、最下層は焼土を含みかつ粘性に富む。

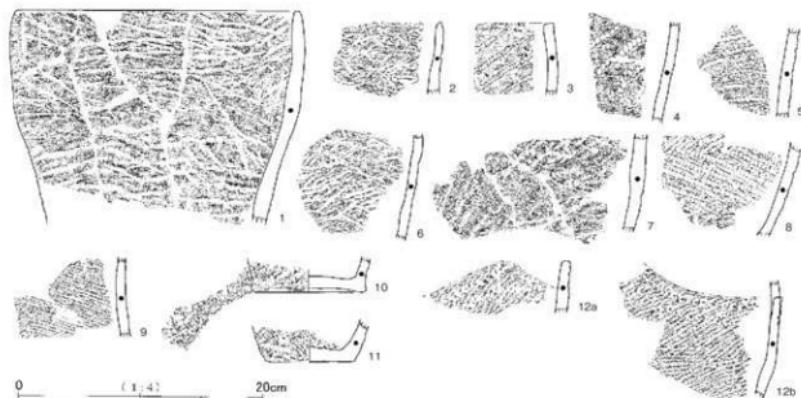
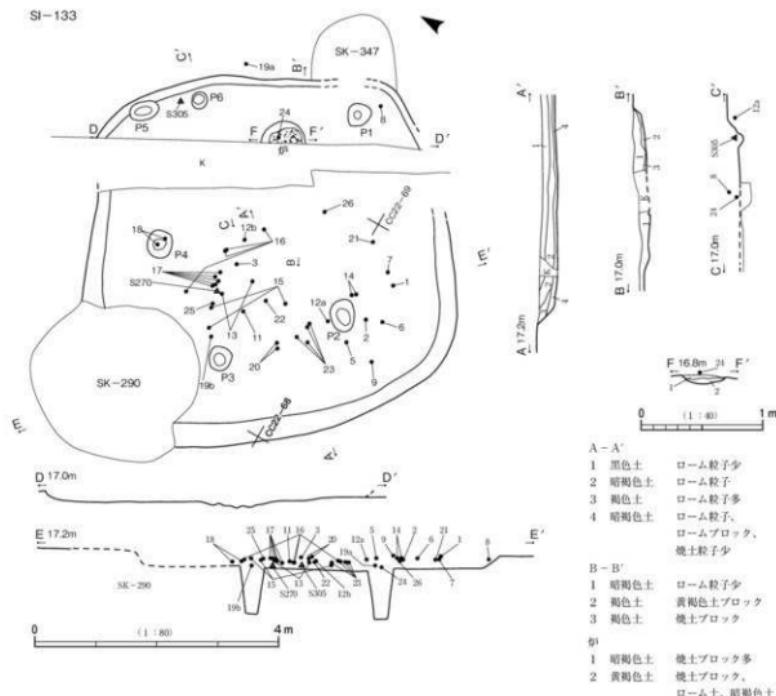
遺物の出土状況は壁寄りを除き全体に密で、しかも形状の窺える土器が多く出土した。土器類のほか中期の土器片を利用した土器片錐3点（第89図12～14）、磨製石斧2点、磨石類1点、敲石1点（第110図270）、剥片1点、側面調整礫1点（第117図305）、碎片24点、原石1点を出土した。

土器は26点を図示した。1～16・19a・19b・20・23・25は縄文が施されるもので、1～9・20は附加条軸縄不明、10・11・25は附加条2種、12a・12b・14は無節L、13は単節RL、15は異節縄文、19a・19b・23・26は単節LR、16は原体不明である。1・6は羽状構成を取らず、異方向2種の附加条縄文が重なって施される。1は器厚1cm内外と比較的厚めで、口縁部から胴部上半の1/3周である。推定口径23.0cm、現高12.5cmを測る。2は緩んだ原体で施文されている。8・9は異方向2種の附加条により羽状構成となろう。10・11は羽状縄文が底面付近まで施されている。10は上げ底で推定底径9.4cm、11は7.4cmを測る。12a・12bは同一個体で、波状口縁に付随して2条のC字状の刺突文が連続的に施される。16～23は沈線文が施されるものである。16は一本引きの斜沈線が密接して施される。縦沈線を境に破断しており、葉脈文が描出されよう。胴部下半は葉脈文と重ねて縄文が施され、2带構成となっているが、器面の荒れにより原体は不明である。推定口径22.0cm、現高22.5cmを測る。17は胴部中位に巡る平行沈線文を中軸として、上下に平行沈線文が重疊する菱形文が描出されよう。19a・19bは同一個体である。口縁端部は内湾し、平行沈線文が縦位に密接して施される。口縁部には幅広な沈線文帯が設けられ、以下に縄文が施されることから、2带構成となろう。20は上部が縄文帯、下部には平行沈線による葉脈文が施されると思われるところから、2带構成となろう。21はC字結節沈線文が施される。22は平行沈線により葉脈文が施される。23は横位に複列の結節沈線文が施される。24は無文である。26は胎土中に纖維を含まず、細かな砂礫を多く含む。単節LRが施される。

以上の内容から本遺構の帰属時期は黒浜式としたい。土器片錐はSK-290からの混入品であろう。

SI-134 (14) SI-002・(17) SI-012 (第29図、図版4・5・29)

台地北東部のCC22-13・14グリッドに位置し、調査区の境界に位置したため2回に分けて調査が行われた。円形の小形住居で、規模は縦横4.8m、深さは最大で30cmである。主軸の方位、炉は不明である。ピットは9本確認された。その多くは壁際近くに並ぶ柱穴群になるのだろうが、内側寄りのものもある。深さ



第28図 SI-133 (1)

はまちまちながら、50cm以上のものはない。床面は中央部がやや堅目であり、わずかではあるが周縁部より高い。覆土は壁近くに暗黄褐色土が堆積後、暗褐色土がわずかに床面全体を覆い、次いで黒色土が上面まで埋積する。壁近く以外では焼土粒子を含むという特徴がある。北西壁近くで貝層を確認した。わずかな量で、北に位置するSK-325からの混入物の可能性も考えられる。

遺物は少なく、多くが14次調査で出土している。石器類は出土しなかった。

土器は破片4点を図示できたのみである。1～3は黒浜式で、いずれも縄文が施される。1は附加条2種の羽状縄文が口縁端部から施される。2は附加条軸縄不明である。3は口縁端部の無文帯が外反し、胴部に向かって膨らむ器形となろう。単節RLが施される。

4は花積下層式で口縁下端が段状になり、刻み目が付される。口縁上端と内部に、組とはせずに間隔をおいたR2本の捺糸側面圧痕文が施される。

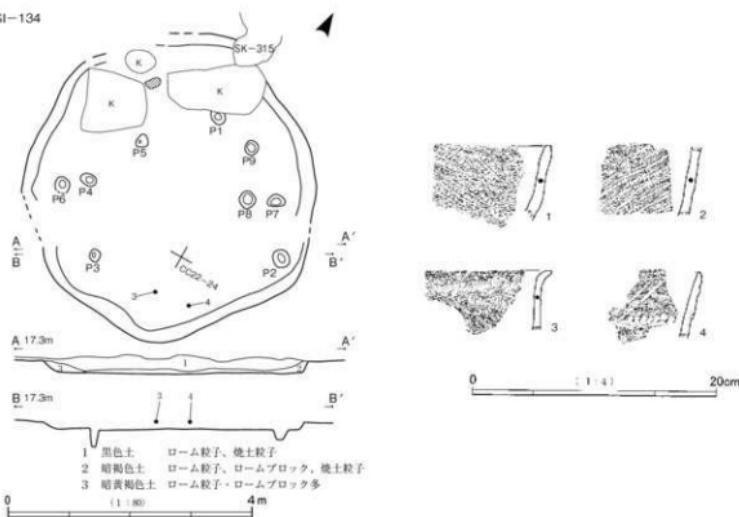
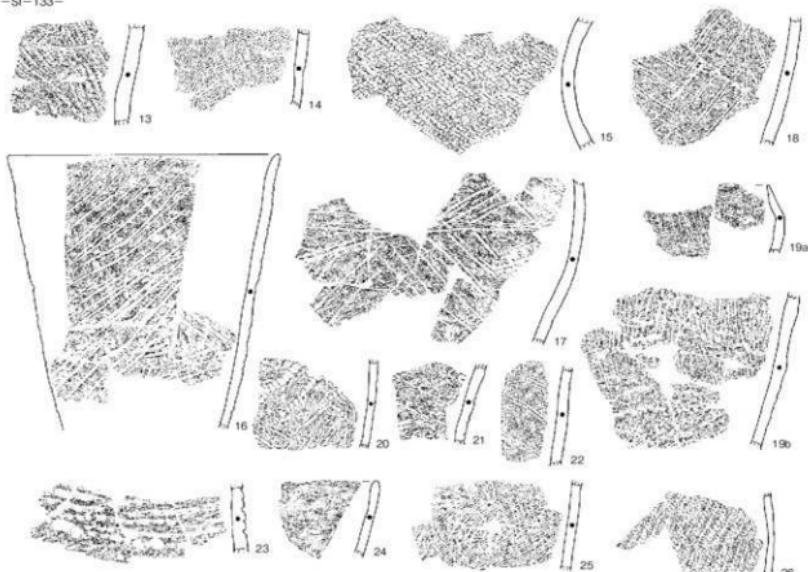
以上の内容は時期決定要素に乏しいので、本遺構の帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

SI-I35 (14) SI-003 (第30図、図版5・29)

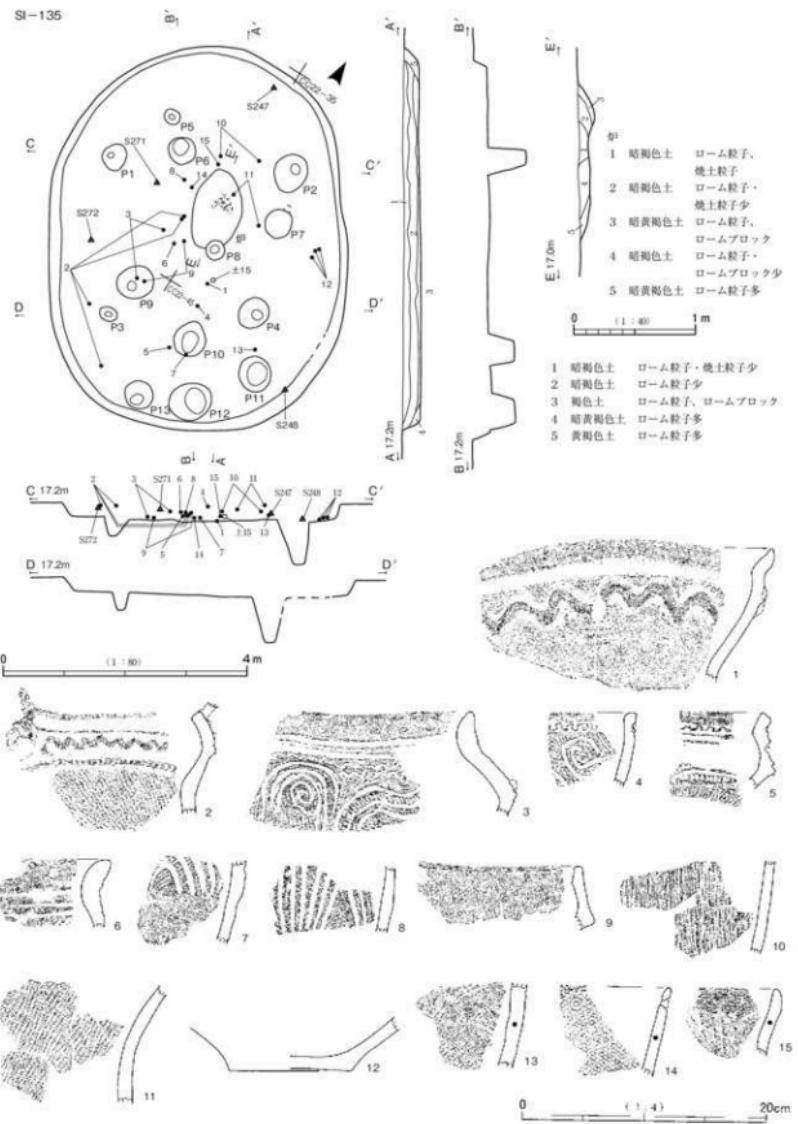
台地北東寄りのCC22-34・35グリッドに位置する。SK-291またSD-001と重複する。SK-291は出土土器から、本跡より古いと考えられる。形状は南側が隅丸、北側が楕円形を呈するやや縦長の住居である。規模は長径6.3m、短径4.9m、深さは最大で30cmである。方位は北西になろう。炉は中央北寄りに位置し、長軸長1.3m、短軸長0.8mの大きなもので、焼土も明瞭であった。柱穴は位置からすればP1～P4が対応するかと思われるが、深さ60cm以上のP2・P4・P6・P9も対応関係にあり、その場合は北西また南側に住居を拡張した可能性がある。この他、南側にいずれも径40cm前後のP10～P13、北側でP5、東側でP7が確認された。P7は深さ65cmで、大きく斜めに掘られ、柱穴のひとつかと想定される。床面は北壁寄りが多少高く、南東隅付近が低い。両者の差は最大で約10cmである。覆土は上下3層の水平堆積であり、最上層には焼土、最下層にロームブロックを含む。

遺物は壁際近くではほとんど出土せず、中央部覆土とりわけ1・2層で均等かつ疎らに出土した。土器類のほかに中期の土器片を利用した土器片錐3点(第89図15～17)、石器類は楔形石器1点、磨石類5点(第105図247・248)、敲石2点(第110図271・272)、石皿1点、剥片6点を出土した。

土器の1は口縁端部がくの字に屈曲する無文の浅鉢で、端部以下はなでられ、内面に稜をもつ。口縁部には太い隆起線文が波状に巡らされている。2は欠損しているが、緩やかな波状口縁の波頂部に楕円形で中央がくぼむ突起が付されよう。器形は浅いキャリバー形を呈すると思われ、狭小な棹状文と刻み目が付される隆起線によって区画された内側には隆起線を細かく波状に貼り付けているが、これは交互刺突文の効果を表すものである。胴部以下には縦位の無節しが施される。3は無文となる口縁端部以下が逆くの字状に屈曲する器形で、区画帶上端には交互刺突文の効果をもつ2条の波状沈線文が巡らされる。区画内には両側に沈線文が付随する刻み目付き隆起線文が曲線的なモチーフを描出しており、さらに沈線による渦巻文が充填される。地文に単節RLが施される。4・5は口縁部下の区画上端に交互刺突文が巡らされる。4は区画内に沈線により蕨手状のモチーフが描出され、地文に単節LRが縦位に施される。5は逆くの字に屈曲する器形で、区画下端に刻み目付き隆起線文が巡らされる。胴部以下に単節RLが縦位に施される。6はくの字に屈曲する器形で、区画内部には横位をはじめ、沈線文で文様が描出されよう。7は肥厚する口縁端部に重疊する弧状沈線文が描出される。地文には単節RLが縦位に施される。8は一本引きの集合沈線が入組状のモチーフを描出しよう。9・10は櫛歯状工具による条線文が施される。9は口縁端部が



第29図 SI-133 (2)、SI-134



第30図 SI-135

内傾した後、逆くの字に屈曲する器形である。11は単節RLが縦位に施される。12は無文の浅鉢の底部で、胎土中に粗い長石等の砂礫が含まれる。底径10.0cmを測る。以上は中期中葉の土器群で、いわゆる中峠式が主体である。

13はR+Lの異方向の2本を一組とした撫糸側面圧痕文と、単節LRが施される。花積下層式である。14は口縁端部から組紐文が施されるもので、補修孔が認められる。関山Ⅱ式である。15は波状口縁の口縁端部は無文で、以下に縦位の条線文が施される。黒浜式である。

以上の内容により、本遺構の帰属時期は中期中葉中峠式としたい。土器片錐も本跡に伴うものであろう。
SI-136 (14) SI-004 (第31・32図、図版5・16・30)

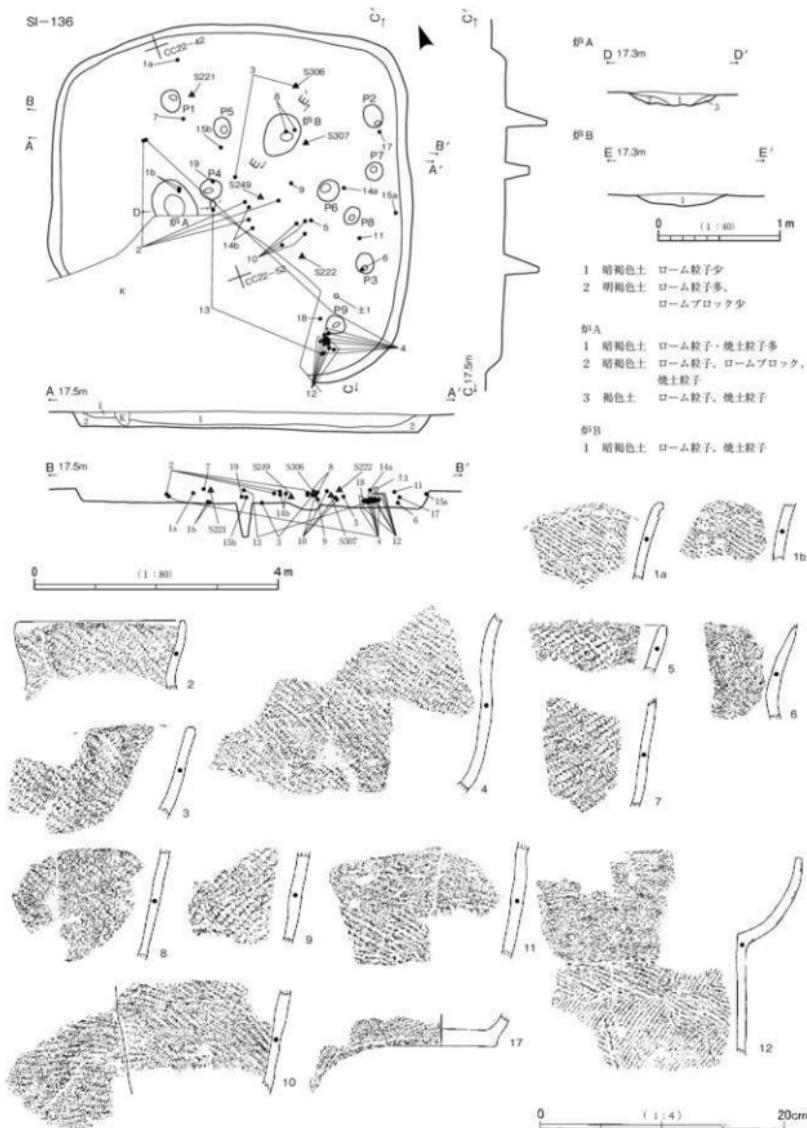
台地北東寄りのCC22-42・52グリッドに位置する。南西部は搅乱により失われている。形状は隅丸方形であり、規模はほぼ6m四方、深さは最大で27cmである。方位は北東また西北西になろうか。炉は西寄り中央に炉A、北東寄りに炉Bが位置し、規模はAが推定80cm×65cm、Bが70cm×50cmである。Aは掘形・焼土ともに明瞭な反面、Bはその逆である。調査時の記録によれば、Aが古く、Bが新しいという。柱穴は住居形態と炉の位置に合致するような配置が見出せない。重複遺構もなく、ピット群も一帯に存在せず、P1・P9以外は深さ40cm以上であることなどから、住居に伴うものではあるが、その機能については判然としない。床面は全体に平坦である。覆土は上下2層の水平堆積であり、自然堆積と思われる。

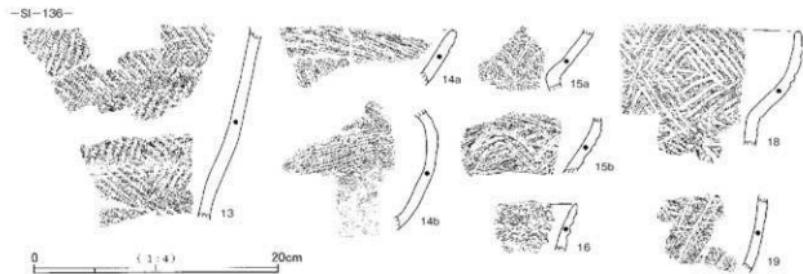
遺物はほとんどが1層内から出土しているが、西～北側壁際約1m内ではほとんど出土せず、中央部～南東隅近くに集中箇所が存在する。土器類のほか土製块状耳飾1点(第89図1)、黒浜式土器の土器片錐2点(第89図18-19)と磨製石斧2点(第100図221-222)、磨石類2点(第105図249)、側面調整蹠2点(第118図306・307)、洞片2点、両極刺片・碎片各1点を出土した。

1a～17は縄文が施されるもので、1a～4・8・10・11は単節RL、5～7・9は単節LR、12は無節L・単節RLの羽状縄文、13は単節RL・LRの羽状縄文、14a～16は附加条縄不明、17は無節R・Lの羽状縄文である。1a・1bは波状口縁で、波頂部から複列の円形竹管刺突文が垂下する。地文縄文にはS字結節縄文が加えられている。2は小形の深鉢で、口縁部の1/3周が遺存し、推定口径13.8cmを測る。3は波状口縁である。10は現存部の胴部最大径14.2cmを測る。11は上部が無文となることから2带構成となる。12は浅く開いて立ち上がった胴部が口縁部に向かって大きく開く朝顔形の器形で、内面の変曲点が鋭い棱となる。波状口縁で大きくとられた口縁部文様帶には、半截竹管の先端に抉りを入れた施文具により、列点状の刺突文が横位連続的に施される。胴部の縄文には、器面が軟らかい段階で施文されたため生じたミズ腫れ状の粘土帶が認められる。13の羽状縄文は菱形構成となる。14a・14bは附加条縄文が無節L2本で、膨らむ胴部付近では羽状構成となり、以下は無文である。15a・15bは口縁部の地文縄文上に平行沈線により連弧文が施され、胴部との区画には横位の平行沈線文が施される。16は口縁部の断面形が刃状を呈し、附加条縄文は緩んで乱れている。17は推定底径2.7cmを測る。18-19は沈線文が施されるものである。18は朝顔形に聞く器形で、半截竹管外側を用いて菱形文を描出す。19は一本引きの沈線で斜格子文が施される。

以上は黒浜式で本遺構の帰属時期としたい。土製块状耳飾、土器片錐も伴うものと考えられる。
SI-137 (14) SI-005 (第33図、図版5・31)

台地北東寄りのCC22-54・64グリッドに位置する。SI-146およびSK-292と重複し、SI-146より新しくSK-292より古い。形状は楕円形で、規模は縦横4.9m、深さは最大で30数cmである。方位はほぼ真





第32図 SI-136 (2)

北である。炉は北寄り中央に位置し、規模は径約60cmである。柱穴は壁寄りに並ぶP1~P6が明瞭である。この他に3本のピットがあるが、重複するSI-146に所属する可能性もある。柱穴の深さは40cm台から80cm台までと一定しない。壁溝は南側一部を除いて全周し、幅はおよそ20cmである。床面は全体に平坦であった。覆土は3層が水平に堆積し、上2層が焼土を含み、最下層はロームブロックを含む。自然堆積であろう。

遺物は全体に疎らな状況であった。土器類のほか中期土器利用の土器片錐2点（第89図20・21）、石鎌1点（第90図18）、石鎌未成品1点（第92図89）、石匙1点（第95図179）、二次加工ある剥片1点、打製石斧1点（第97図199）、磨石類3点、剥片6点を出土した。

1は口縁部文様帶の上端に交互刺突文が施されるもので、四線を伴う刻み目付きの隆起線により曲線的に分割されよう。隆起線に連続爪形文が付随し、内部には三叉状の印刻文が施される。2・3は逆くの字に屈曲する器形である。2は単節RLが横位に施される隆起線で狭小な梢円区画が形成され、内部には複列の交互刺突文が施される。3は口縁端部下に幅広な沈線文が巡らされ、区画内には単節RLが縦位に施される。把手の剥落した痕跡が認められる。4は外耳状に大きく突出した突起の付く環状把手で、突起の周縁には文様が付されるが、外面は刻み目と結節沈線文、内面は沈線による渦巻文である。5は地文繩文として単節RLが縦位施され、横位の沈線文により区画された内部に沈線による渦巻文が施される。6は隆起線が垂下する胴部で、隆起線上も含め単節RLが縦位に施される。7は単節RLが幅が狭い単位で縦位に施されるが、施文単位に細沈線が付隨している。

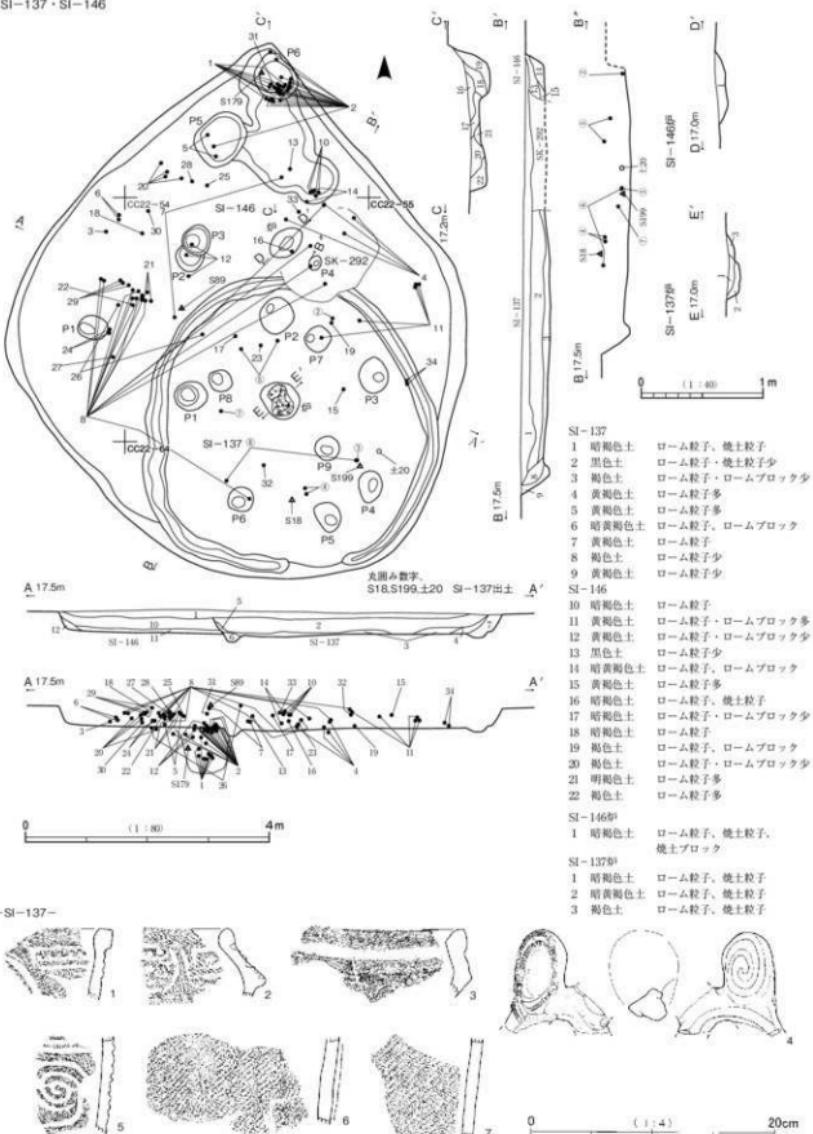
以上はいわゆる中鉢式が主体となる中期中葉の土器群で、本遺構の帰属時期としたい。

SI-146 (14) SI-015 (第33・34図、図版5・17・35・36)

台地北東寄りのCC22-54グリッドに位置する。SI-137・SK-292が重複し、壊されている。形状は多少洋梨形を呈する梢円形である。規模は縦横4.9m、深さは最大で30数cmで、方位はほぼ真北である。炉は北寄り中央に位置し、規模は径約60cmである。ピットはP1~P3が確実なものとしてあげられる。SK-292と重複するP4、SI-137内のピットにはこちらに所属する可能性のあるものが考えられるが、指摘するに留めざるを得ない。床面は全体に平坦であった。覆土は上下3層の水平堆積で、自然堆積であろう。

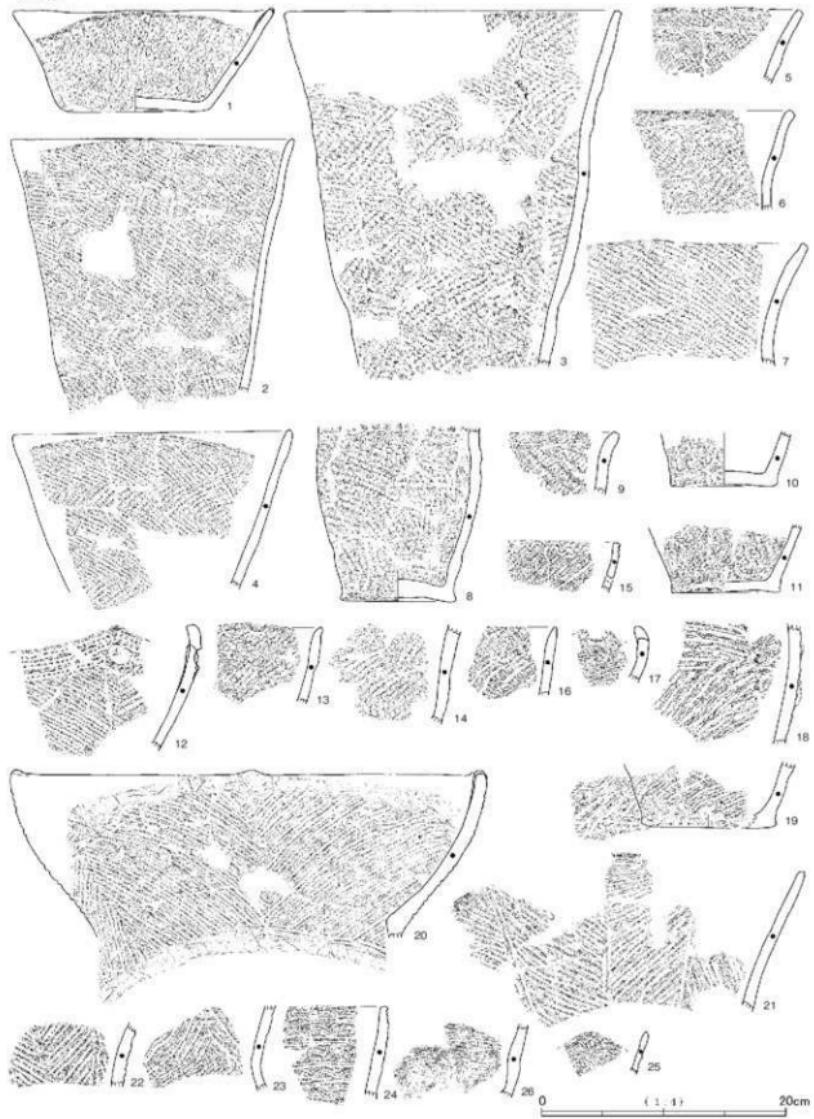
遺物は多数出土し、復元可能な土器が多くあった。石器類は出土していない。

土器の1~30は黒浜式である。1~19は繩文が施されるもので、1・8・10・11・16~18は附加条軸繩不明、2・5・7・9は単節RL、3は無節R・単節LRの羽状繩文、4は単節RL・LRの羽状繩文、6は



第33図 SI-137、SI-146(1)

- SI-146 -



第34図 SI-146 (2)

単節LR、12は無節R・Lの羽状縄文、13・14は無節L、15・19は附加条1種である。1は上げ底の鉢で、口縁の一部を欠損する以外ほぼ完形品である。口径21.4cm、底径12.0cm、器高8.3cmを測る。2・3は口径に比して器高の高い深鉢で、2は底部を欠損するが全体の4/5が遺存し、口径23.0cm、現高20.7cmを測る。1・2ともP6内から出土した。3は器面が軟らかい段階で施文されたため生じたミミズ腫れ状の粘土帯が認められる。1/3周が遺存し、推定口径は27cm、現高29cmを測る。4は口縁端部が横位のナデにより無文となる。口径22.6cm、現高13.0cmを測る。8は現存部上端が胴部中位になると思われ、横位の結節沈線文が巡らされる。底部は上げ底で、底面外周が突出する。4/5周が遺存し、推定底径9.4cm、現高14.2cmを測る。9は口縁端部が横位のナデにより無文となり、この部分に接合痕が認められる。10は底径8.8cm、現高4.5cmを測る。11は推定底径9.0cm、現高5.5cmを測る。12は波状口縁で、波頂部下に凹文が付される。C字結節沈線文による狹小な楕円区画文が、口縁端部の形状に沿い複列施される。楕円区画文、羽状縄文とも波頂部・凹文の延長上を基軸としている。15は口縁端部にコンバス文が弛緩した波状沈線文が施される。17は双頭状の波状口縁である。18は施文単位の境界に、器面が軟らかい段階で施文されたため生じたミミズ腫れ状の粘土帯が認められる。19は推定底径11.0cm、現高5.4cmを測る。20～30は沈線文が施されるものである。20はキャリバー形の器形を呈すると思われ、ヨコナデによる無文の口縁端部に小突起を有す。幅広な口縁部文様帶には重疊する平行沈線による入組鋸歯状のモチーフが描出される。括れた胴部中位にはヨコナデの無文帶と平行沈線文が巡らされる。推定口径38.6cm、現高13.7cmを測る。21～23は平行沈線による葉脈文が施されるものである。24は口縁端部に列点状の刺突文が3条巡らされ、以下は2条の平行沈線文・波状沈線文が交互に施される。25は波状口縁で、波頂部に櫛齒状工具による曲線文が3方向から集約される。26は平行沈線文が連続的に施され、以下の無文部は凹凸が認められる。27・28は疎らな平行沈線文が縦位または斜位に、底部下端まで施される。27は外底面中央にも平行沈線文が施され、推定底径8.0cm、現高5.7cmを測る。28は上げ底で推定底径10.4cm、現高3.0cmを測る。29はやや内傾する器形で、口縁端部から平行沈線文が3条巡らされ、以下には平行沈線文と円形竹管刺突文が交互に施される。30は口縁端部に隆起線が付される波状口縁で、以下には列点状の刺突文が施される。

31・32は浮島II～III式で波状貝殻文が施される。33は諸磯式で単節RLが施される。胎土中には雲母などの砂粒が含まれる。34は中期中葉～後葉の底部で、単節RLが縦位に施される。推定底径8.0cm、現高5.2cmを測る。

以上のうち質量とも安定している黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-138 (14) SI-006 (第35・36図、図版5・16・31・32)

台地北東寄りのCC22-75・76・85・86グリッドに位置する。SD-006が南東部を横断する。形状は楕円形であり、規模は長軸長6.0m、短軸長5.8m、深さは最大で約30cmである。方位は炉が確認されず不明だが、柱穴の配置からすると北西の可能性がある。柱穴はほぼ対応する位置にP1～P4が確認され、深さは20cm台から50cm台までまちまちである。床面は壁寄りが相対的に高く、中央部はそれより5cm～10cm近く低い。覆土は上下3層の水平堆積で、上の2層が焼土を含む一方、最下層はロームブロックを含むという特徴がある。

出土遺物はたいへん多く、中央部の1層～2層に集中していたが復元できた土器は少ない。石器類は打製石斧1点（第97図200）、磨製石斧1点（第100図223）、台石1点（第112図286）、側面調整蹠2点（第118図308）、石核1点、剥片1点、碎片2点、原石4点を出土した。

土器は34点を揭示した。1~28、写真図版32~32~34は黒浜式である。1~18・22・23・27・32は縄文が施されるもので、1は単節RL・無節Lの羽状縄文、2・6は単節LR、3~5・8は単節RL、7・27は単節RL・LRの羽状縄文、9・10は附加条1種、11は撚糸文R、12a・12b・32は無節R・Lと附加条軸縄不明、13~15は無節L、16・18は無節R・Lの羽状縄文、17は無節L、22は網目状撚糸文R、23は附加条軸縄不明、33は附加条2種である。1は胴部が括れ、以下は球形に膨らむ器形を呈する。2/3が遺存し、口径30.2cm、現高31.0cmである。2は推定口径32.6cm、現高8.6cmを測る。5は施文単位の下端の一部に横位のナブリと沈線、結節縄文が認められる。8は補修孔が認められる。16・17は他の条で縄り留めた原体末端の軌跡が認められる。18は結節縄文が認められる。19~21・23~26cは沈線文が施されるものである。19は口縁端部にコンバス文が巡らされ、以下に一本引きの沈線による葉脈文が施される。20・21は斜格子文が施されるもので、20は一本引きの沈線、21は平行沈線により描出される。24は櫛歯状工具による連繫菱形文が施される。25は縱位に一本引きの沈線文が施される。底径6.8cm、現高8.0cmを測る。26a・26bは平行沈線文と先端に抉りを入れた半截竹管内側による列点状刺突文が交互に施される。26cは端に抉りを入れた半截竹管内側による列点状刺突文が密に施される。28は無文の底部で、推定底径6.8cmを測る。

29は早期撚糸文系で撚糸文Rが施される。図版32~31は関山式である。波状口縁で、口縁端部に付随して複列の先端に抉りを入れた半截竹管内側による列点状刺突文が施される。0段多条LRが施される。30は諸磯式で、地文の単節RL上に横位の結節浮線文が施される。

以上のうち質量とも安定している黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-139 (14) SI-007 (第36図、図版5・32)

台地北東寄りのCC22-60・61グリッドに位置する。北西部は攪乱により失われているが、形状は隅丸方形になろう。規模は長軸長6.0m、短軸長5.5m、深さは最大で約30cmである。方位は炉もなく不明ながら、柱穴の配置からすると北西とみられ、炉は攪乱により失われた可能性もある。柱穴はP1・P2が深さ46cm、69cm、P4も深さが89cmであるから問題ないであろう。P3は斜めに掘り込むが深さが78cmで、これも住居に伴う柱穴のひとつであろう。床面は南西部が幾分上がっている他は平坦であった。覆土は上から暗褐色土、褐色土の2層が水平堆積し、自然堆積と思われる。

遺物の分布は希薄で、また高いレベルからの出土であった。石器類は打製石斧2点（第97・98図201・202）、磨石類1点（第105図250）、砥石・剥片各1点、碎片2点を出土した。土器類が西側、石器類が東側にまとまっていた。

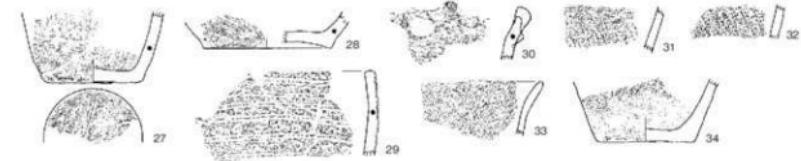
土器片は6点を図示した。いずれも縄文が施されるもので、1は単節RL、2・3・5・6は単節LR、4は無節を用いた撚りの緩んだ結節縄文である。1は波状口縁で、端部下に結節沈線文が施される。波頂部の軸上に円形竹管刺突文が付される。2は口縁端部に結節沈線文で両端を区画された無文帯が作出される。3は地文縄文に平行沈線文と列点状刺突文が横位に施される。

以上は黒浜式で、わずかな資料ではあるが本遺構の帰属時期としたい。

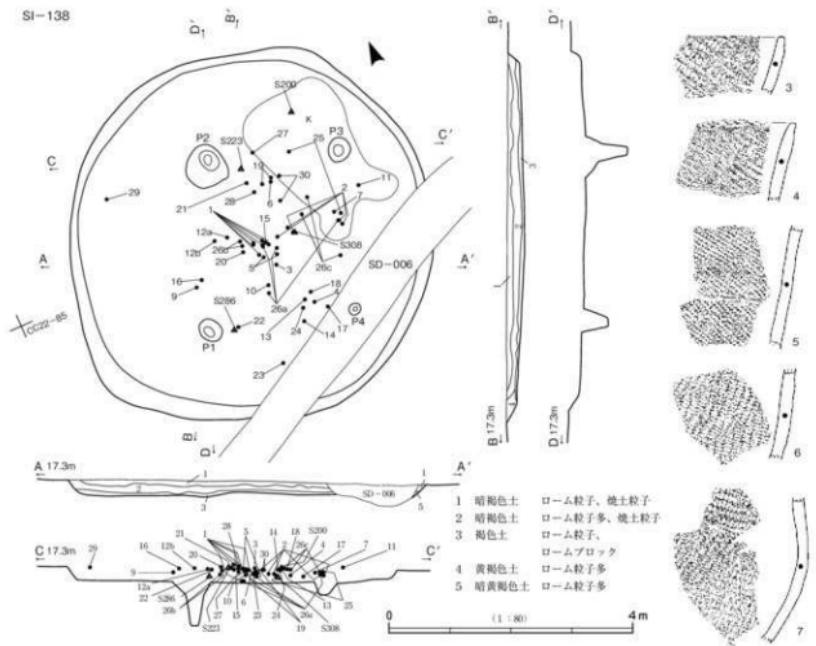
SI-140 (14) SI-008 (第37図、図版5・32)

台地北東寄りのCC22-62・63・72・73グリッドに位置する。南東端でSI-141、中央部でSK-293と重複し、土坑は本住居より新しいものの、SI-141との新旧関係は不明であり、遺物からも判断は困難であった。形状は隅丸長方形であり、規模は長軸長8.3m・短軸長7.0m、深さは最大で約35cmである。方位は北東ないし北西になろうか。炉は確認されなかったがSK-293により攪乱された部分に存在した可能性もある。

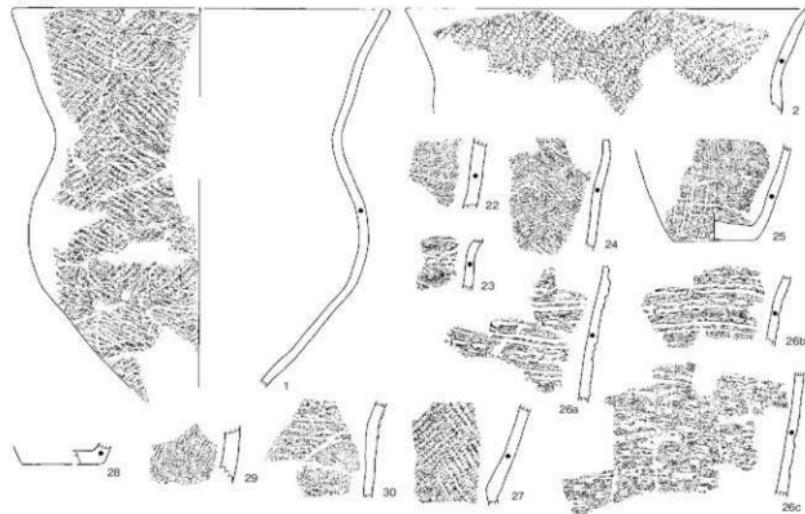
-SI-146-



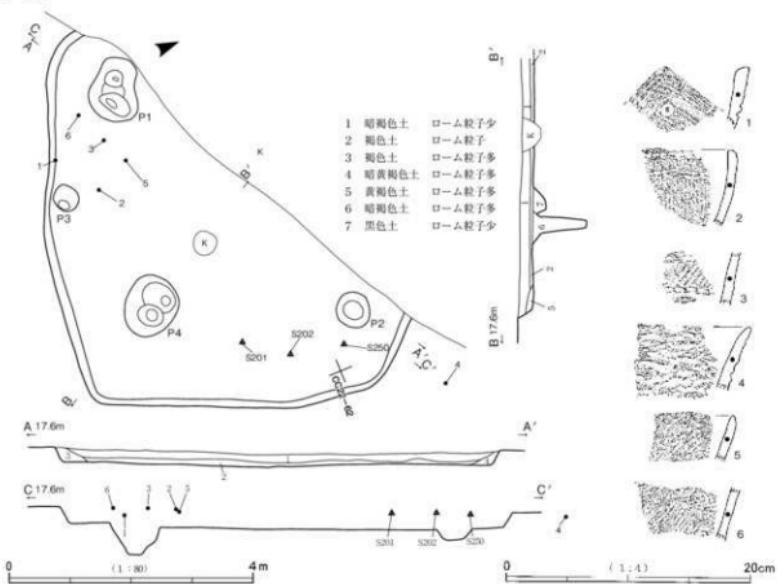
SI-138



第35図 SI-146 (3)、SI-138 (1)



SI-139



第36図 SI-138 (2), SI-139

る。柱穴は9本確認されたが、その配置に規則性がなく、径・深さ(深さ1m以上3本)もまちまちであった。床面は南西部の1.5m×3mほどが5cm~8cm高いほかはほぼ平坦であった。覆土は上から褐色土、暗褐色土、褐色土の3層の水平堆積であり、自然堆積であろう。

遺物はそれほど偏りなく多くは1層中から疎らな状況で出土した。土器類のほか土製块状耳飾1点(第89図2)、黒浜式と阿玉台式の土器片錐2点(第89図22・23)、石器類は石鐵未成品1点、楔形石器1点(第94図144)、磨石類2点(第106図251)、石皿1点、側面調整繰2点(第118図309・310)、剥片1点、碎片1点を出土した。

土器は破片15点を掲示した。1~10、写真図版32~15は黒浜式である。1~7は縄文が施されるもので、1は単節RL・LRの羽状縄文、2・4は単節RL、3は無節L・単節RLの羽状縄文、5は単節LR、6は無節R・Lの羽状縄文、7は附加条2種である。1は口縁端部の断面形が僅かに外削ぎ状となり、微小な突起が付される。菱形構成となる羽状縄文の上端には、結節沈線文が巡らされる。2は波状口縁で、波頂部から円形竹管刺突文が列点状に付される。両側には波状口縁に沿って平行沈線文が区画状に施される。3は口縁端部が無文で、以下の地文縄文上に結節沈線文が区画状に施される。4は波状口縁で、口縁端部に沿って結節沈線文に区画された無文帯が作出される。8~10は沈線文が施されるものである。8はやや斜位だが基軸線となる複列の平行沈線文の両側に、平行沈線文が連続斜位に施される。9a・9bは口縁端部から胴部上半までは一本引きの沈線による粗い斜格子文が施され、胴部下半は縄文が施されるもので、2帯構成となる。10は平行沈線による集合沈線文が入組状の文様モチーフを描出しよう。

11は花積下層式で、単節RL・LRの羽状縄文が等間隔施文される。

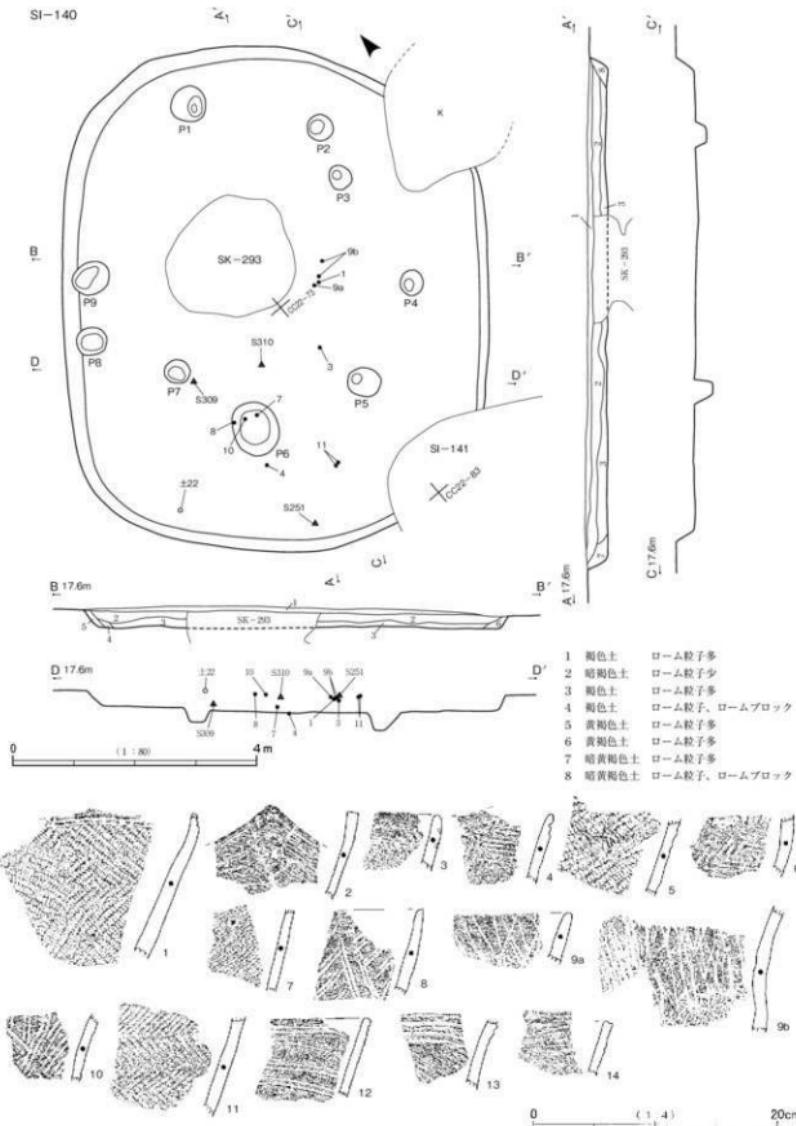
12・13は浮島I式である。12は地文の疎らな撚糸文R上に、口縁端部から横位の平行沈線文が連続的に施される。13は地文の疎らな撚糸文L上に、結節沈線文が連続的に施される。14は浮島III式~興津式に比定されるもので、口縁端部上と外面端部下に撚糸文Rの側面压痕が複列施され、その下に波状貝殻腹縫文を施文する。

SK-293に壊されているため縄文時代前期後半、中期の土器片の混入がほかの遺構に比較して多かったが、図示できなかった土器を含め主体となるのは黒浜式土器であった。床面から覆土上層までの出土位置の記録がある黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-141 (14) SI-009 (第38・39図、図版5・6・16・17・32・33)

台地北東寄りのCC22-83・93グリッドに位置する。北西隅でSI-140、南東部でSI-142、東壁際でSK-297と重複するが、いずれも新旧関係は不明である。形状は隅丸長方形であり、規模は長軸長7.2m、短軸長5.5m、深さは最大で約40cmである。方位は北北東である。炉は中央北側に位置し、70cm×60cmで、住居規模から比較すると小規模であり、焼土層も不明瞭であった。ピットは10本確認され、P1~P4が深さ60cm~90cmで主柱穴と思われ、P5~P9は深さ約30cm~90cmで、補助的なものかもしれない。なお、P10はわずかに重複するSI-142に所属する可能性がある。床面は平坦であるが、一部壁下にわずかに高い箇所が認められる。P7周辺から少量の貝が出土し、貝製品が1点混入していた(第122図)。覆土は上から暗褐色土、暗褐色土、褐色土の水平堆積であり、基本的に自然堆積であろう。

遺物は北側壁寄りと南西部に希薄部があるが、中央部では1~2層中から一定の密度で出土した。土器類のほか石鐵2点(第90図19・20)、石鐵未成品1点(第92図90)、楔形石器2点、石錐1点(第96図186)、磨石類・砥石・石皿各1点、側面調整繰2点(第119図311・312)、剥片4点、削片1点、碎片7点、



第37図 SI-140

原石3点を出土した。

図示できた土器は大型の破片も含み多かった。1~23・28は縄文が施されるもので、1・2・4・7~9は附加条2種、3・11・16・21・22は単節RL、5・6・10・23・28は附加条軸縄不明、12・14・15は単節LR、13は単節RL・LRの羽状縄文、17~20は無節Lである。1は朝顔形に開く器形で、口縁端部に結節沈線文が、胴部中位の括れ部に平行沈線によるコンバス文が弛緩した鋸歯状沈線文が巡り、区画帯を形成する。区画内の附加条縄文は菱形構成となり、菱形の縦軸の一部には凹文が付される。口縁部の1/3周が遺存し、推定口径38cmを測る。2・4は附加条縄文による菱形構成が器面全体に展開しよう。3は口縁部の押し引きに強弱があり、強い部分が列点状刺突文となる。胴部は縄文が施され、2帶構成となる。5は口縁部に先端に抉りを入れた半截竹管内側による結節沈線が狭小な梢円区画文を作出し、以下の縄文は菱形構成となる。10は底面外周がやや突出し、推定底径8.0cm、現高4.9cmを測る。11は波状口縁で、C字結節沈線文による磨消帯が口縁端部に沿って作出される。12は2条の結節沈線文によって口縁部と胴部が区画される。口縁部には平行沈線により鋸歯状文が描出される。17の無節縄文は樹皮など硬い繊維を撫り合わせた可能性が高く、器面に繊維痕が食い込んでいる。19は地文縄文上に結節沈線文が施される。21は推定底径9.0cm、現高3.5cm、28は推定底径6.0cm、現高3.3cmを測る。24~27・29は沈線文が施されるものである。24は口径・底径に比して器高が高い器形で、口縁端部が逆くの字に屈曲し、底面外周が突出する。文様は平行沈線による葉脈文と粗い格子目文が施され、推定口径12.8cm、底径7.8cm、器高27.7cmを測る。25は平行沈線による波状沈線文が斜位に施され、部分的にコンバス手法が認められる。26は一本引き沈線により粗い斜格子文が施される。27は口縁端部下に結節沈線文が巡らされ、以下には一本引き沈線により粗い斜格子文が施される。29は集合する平行沈線文により鋸歯状モチーフを描出するとと思われる。立ち上がりの角度から鉢形土器の可能性が高く、底径は13.4cm、現高6.6cmを測る。30は胎土中に繊維を含まないことから諸磯式とするが、黒浜式の新しい部分に伴うものである。単節RLが施される。

以上の内容から黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

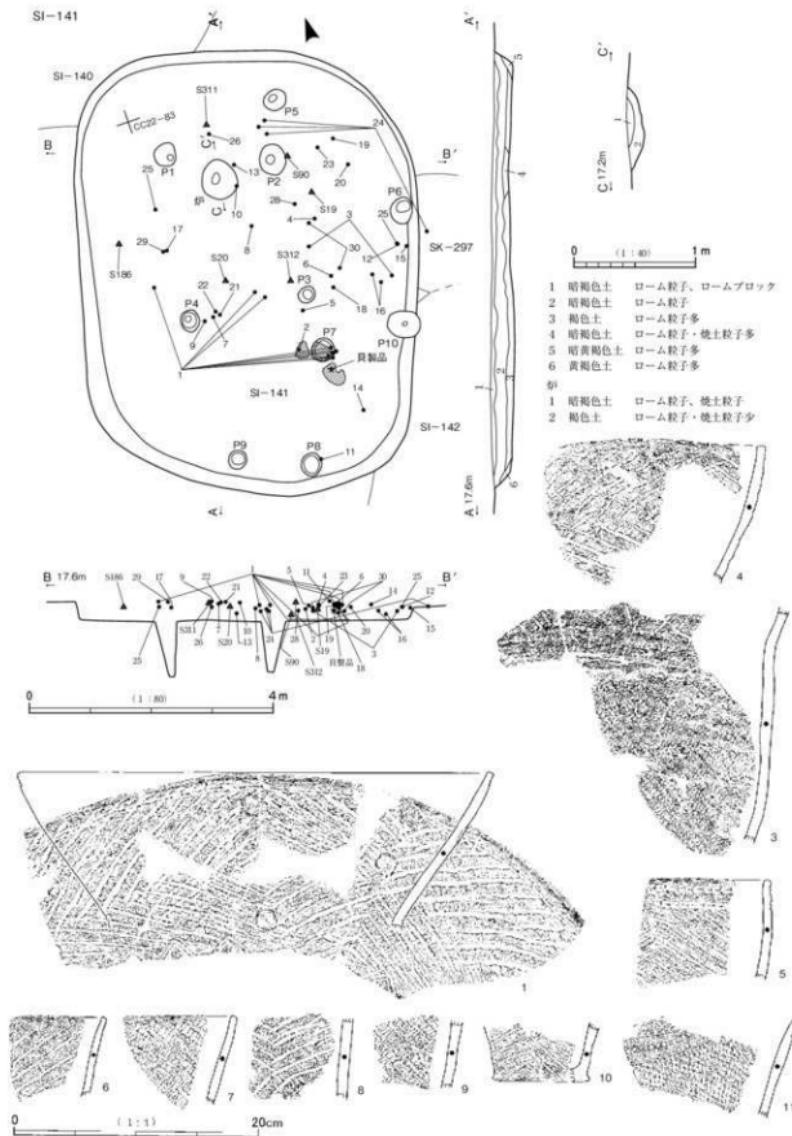
SI-142 (14) SI-010 (第40図、図版6・33)

台地北東寄りのCC22-93・94、CC23-13・14グリッドに位置する。北西部でSI-141、南東隅でSI-143、北西隅でSK-297と重複し、SI-143がより新しいと推定される以外の新旧関係は不明である。このほか、SD-006が東西に走るが床面まで達していない。形状は隅丸長方形であり、規模は長軸長7.2m、短軸長5.1m、深さは最大で37cmである。方位は炉がなく不確定要素もあるが、北北東になろうか。柱穴は6本確認され、P1~P4が四隅の対応する位置にあることから主柱穴と思われ、深さはP2が約40cmのほかは20cm前後で概して浅い。床面は南東部と北側壁寄り中央部にわずかに高い面があるほかはほぼ平坦である。覆土は上から褐色土、暗褐色土、褐色土が水平に堆積しており、自然堆積であろう。

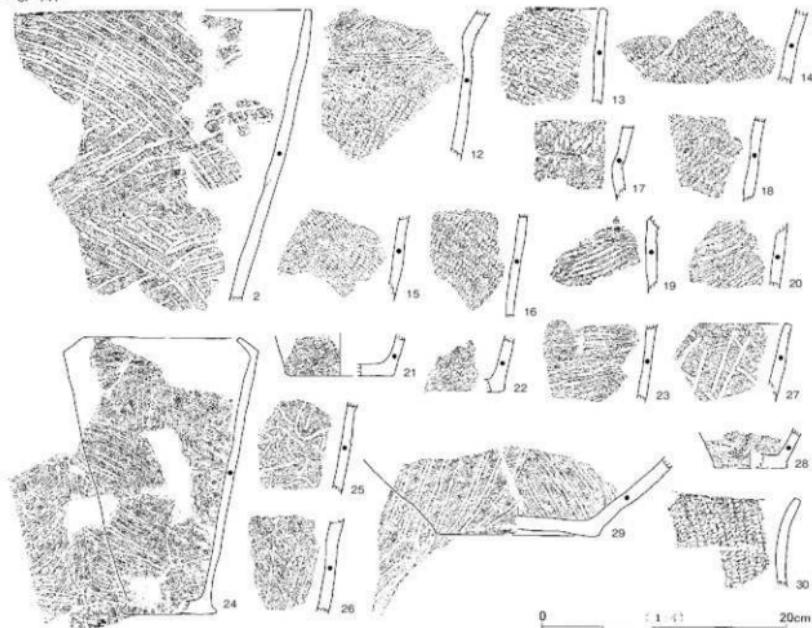
遺物の分布は極めて希薄で、石器類は石錐未成品・磨石類（第106図252）・石皿各1点を出土している。

図示できた土器は5点で、1~4は黒浜式である。1は平行沈線で文様が描出されるものである。口縁端部には縦位の沈線文が、これに付随して葉脈文が施されるが、文様が重複する部分が多い。2~4は縄文が施されるものである。2は無節Lが施される。樹皮など硬い繊維を撫り合わせた可能性が高く、器面に繊維痕が食い込んでいる。3は単節RL、4は附加条2種が施される。5は間山II式で、組紐が施される。

わずかな資料ではあるが、黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。



第38図 SI-141 (1)



第39図 SI-141 (2)

SI-143 (14) SI-011 (第40図、図版33)

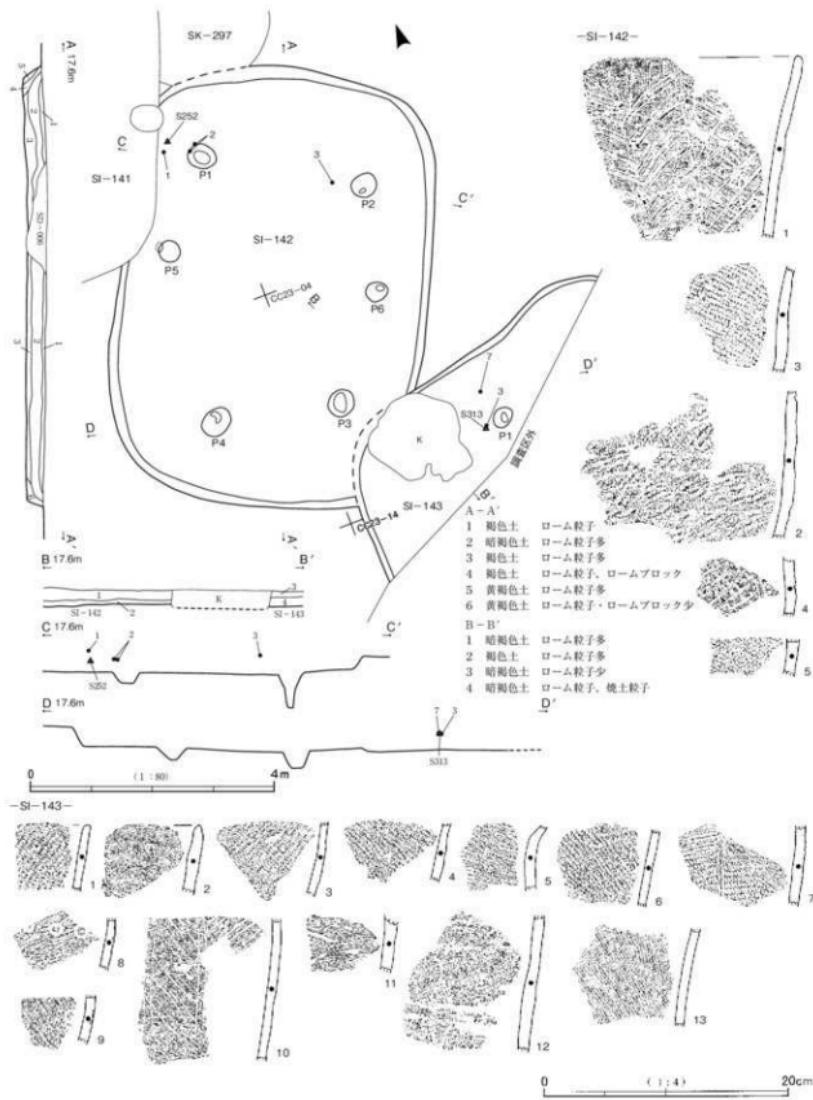
台地北東寄りのCC23-04-14グリッドに位置する。北西隅は擾乱される。またSI-142と重複しており、土層断面の状況から当遺構が新しいと判断する。調査年度の境界に当たり、南東部は確認できなかつた。形状は隅丸方形と思われ、規模は長軸長5.5m～8.0m、短軸長は推定困難で、深さは20cmほどである。方位は未確認部分が多く不明である。柱穴は北側中央部に1本確認し、深さは29cmである。覆土は水平に堆積する暗褐色土で、下層には焼土粒子を含む。

遺物は北西隅周辺に疎らに分布する。石皿・側面調整礫（第118図313）各1点を出土した。

土器は破片13点が図示できた。1～12は黒浜式である。1～10は縄文が施されるもので、1・3は単節LR、2は無節L、4～7・10は単節RL、8・9は附加条軸縄不明である。7の縄文は前期では稀な継位施文で、葉脈文が地文縄文上に施される。8・9は地文縄文上に円形竹管刺突文が施される。10は上部に平行沈線による葉脈文、下部に縄文が施される2带構成となる。11・12は無文である。13は胎土中に纖維を含まないことから諸磯式とするが、黒浜式の新しい部分に伴うものである。単節RLが施され、胎土中に粗い砂粒が多く含まれる。

以上の内容から黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-142 · SI-143



第40図 SI-142、SI-143

SI-144 (14) SI-012 (第41・42図、図版6・17・33・34)

台地北東寄りのBB23-23・24グリッドに位置する大形の住居である。中央に広く擾乱が及んでいた。形状は隅丸長方形であり、規模は長軸長8.2m、短軸長6.1m、深さは最大で50cmである。方位は擾乱に加え、炉も確認できず不明である。柱穴は9本確認されたが、規則的な配置が見られず、東側壁寄りにP2～P7が並ぶが、これらも深さがまちまちである。擾乱部分も多く、不確定要素もある。覆土は残存部では上下2層の水平堆積で上から暗褐色土、褐色土である。自然堆積であろう。

擾乱が大きかったため、遺物はまとめて取り上げている。土器以外に黒浜式土器を利用した土製円板3点（第89図4～6）、楔形石器（第94図145）・磨石類・側面調整礫（第119図314）各1点を出土している。

出土遺物は多く、大きい破片も含まれていた。1～28は黒浜式である。1～19・25は縄文が施されるもので、1・4は単節LR、2・6・29は単節RL、3・5・7～9は単節RL・LRの羽状縄文、10・14は無節R・Lの羽状縄文、11は無節L、12・13は無節R、15は附加条3種、16・17・18a・18bは附加条2種、20はR+L2本を組とした横位の撚糸文、25は無節を用いた撚りの緩んだS字結節縄文である。1は結節沈線文が2条巡らされる口頭部がくの字に括れた器形で、口縁部は無文となる。推定口径18.6cm、現高17.4cmを測る。2は口縁端部に平行沈線文が巡らされる。3は地文縄文上にC字結節沈線文で区画された磨消帯が菱形文を描出しよう。9は羽状縄文が菱形構成となろう。10は上げ底で推定底径6.0cmを測る。11・16は平口縁端部に突起が付される。15は口縁端部に平行沈線文が巡らされる。18a・18bは附加条縄文が菱形構成となる。19は口縁部がやや内傾する器形で、口縁端部に先端に抉りを入れた半截竹管による列点状の刺突文が巡らされる。1/5周が遺存し、推定口径33.8cm、現高15.0cmを測る。20～24・26～28は沈線文が施されるものである。20は平行沈線文により山形モチーフが描出されると思われ、コンバス文も施される。21は口縁端部に結節沈線文が巡らされ、以下に平行沈線文が斜位に施される。22は一本引きの沈線でシャープな斜格子文が施される。23は平行沈線で粗い斜格子文が施される。24は波状口縁で平行沈線文とコンバス文が交互に施される。26は先端が丸ペン状となる結節沈線文が横位連続に施される。27は半截竹管内側を用いた結節沈線文が横位連続に施される。28は底部下端に連続刺突文が巡らされ、推定底径9.2cmを測る。

29は胎土中に纖維を含まないため諸磧式とするが、黒浜式に伴う可能性がある。推定底径7.2cmを測る。

以上の内容から黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

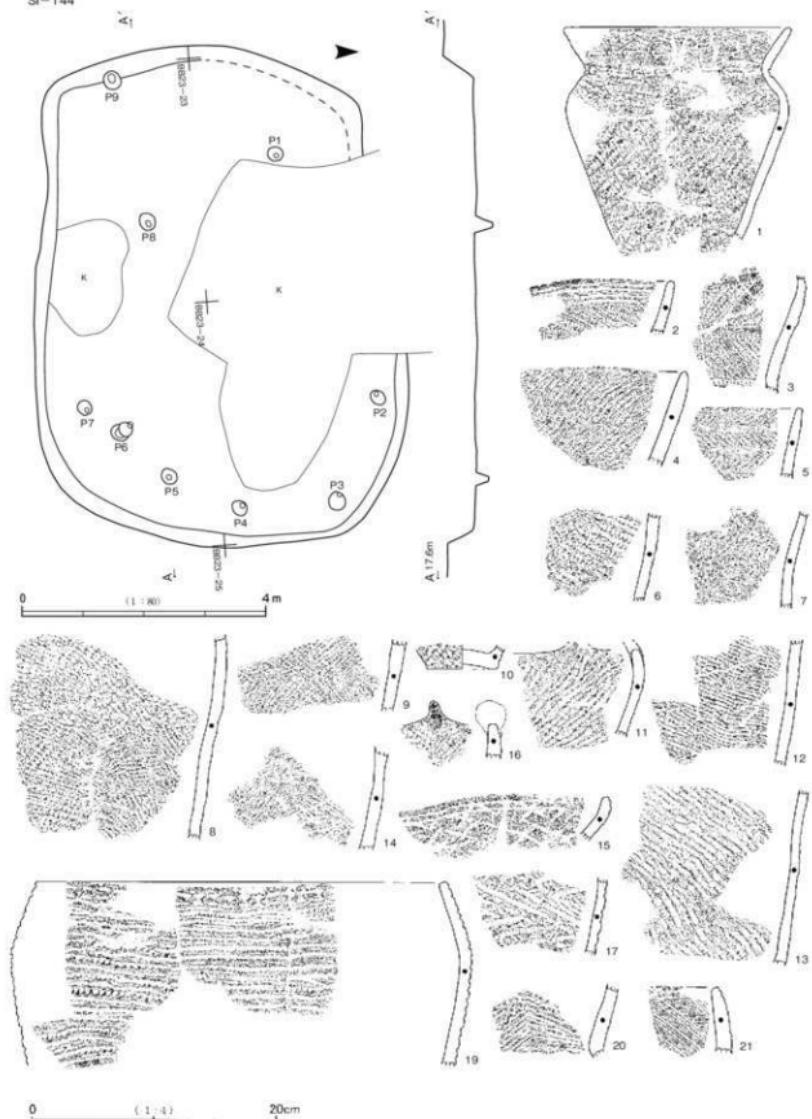
SI-147 (14) SI-017 (第42図、図版6・36)

台地北側寄りのCC23-01・11グリッドに位置し、北西隣にSK-304が重複するが、土層断面の記録がなく、SK-304では遺物が出土していないために新旧関係は不明である。形状は北側が隅丸方形、南側が楕円形となる。規模は長軸長6.0m、短軸長5.5m、深さは最大でP3の38cmである。方位は北西になろうか。炉は確認できなかった。10本のピットの内、住居内を同心円状に並ぶP1～P6が柱穴に該当するのかもしれないが、この他に中央にP7～P9、壁寄りにP10がある。深さは10cm～80cmまでまちまちである。なお、P3は土層断面から埋没途上で掘られていることがわかっているが、他に重複遺構はない。床面は北東～南西にかけて全体に4cm～7cmほど上がっている。覆土は上から暗褐色土、茶褐色土、褐色土の水平堆積であり、自然堆積であろう。

遺物は少なく、しかも覆土上層に偏っている。石器類は出土していない。

土器片6点を揭示した。土器の1・2、写真図版36-5は黒浜式である。1は無節Rを用いたS字結節

SI-144



第41図 SI-144 (1)

縄文、2は無節Rで、樹皮など硬い繊維を摺り合わせた可能性が高く、器面に繊維痕が食い込んでいる。5は平行沈線文が施される。

3a・3bは諸磯b式である。口縁部が内傾し、胴部が膨らむ器形を呈すると思われ、口縁端部に焼成前の穿孔が認められる。C字結節沈線を伴う浮線文、複列の連続刺突文が施される。

4は波状口縁山形突起である。単節LRが縦横に施され、内面には隆起線による渦巻文が貼付される。中期初頭五領ヶ台式末葉～阿玉台式直前に比定される。写真図版36・6は結節を有する無節Rが施されるもので、中期初頭五領ヶ台式に比定される。

以上のうち出土位置の記録のある1・2は覆土上層出土であり、資料としてもわずかであることから、本遺構の帰属時期は不明としておきたい。

SI-148 (14) SI-018 (第43図、図版6・36)

台地北側寄りのBB22-99、CC22-90グリッドに位置し、東側端にSK-303が重複する。土層断面の観察から土坑が新しい。形状は隅丸長方形である。規模は長軸長7.3m、短軸長5.2m、深さは45cmである。方位は炉を確認できず、確証に欠けるが北東になろうか。ピットは12本で、このうち、住居の向きと一致し、対応関係にあるP1～P4が柱穴となろう。P5～P8は南側入口に関係するものかもしれない。P10とP11は中央ライン上にあり、補助柱穴であろうか。P9は住居中心部に向けて斜めに掘られた深さ約110cmの深いもので、これも柱穴の一種と考えられる。P12は用途不明である。P9を除く各ピットの深さは10cm台から70cmまでである。床面は壁直下がわずかに高いが全体に平坦である。覆土は上から暗褐色土、褐色土、褐色土の3層が水平に堆積し、自然堆積であろう。

遺物は住居北東～南西部にかけて疎らに出土し、そのほとんどは覆土上層に含まれるものであった。土器類と中期土器を利用した土製円板1点（第89図7）、石鏃1点（第90図23）、局部磨製石斧1点（第101図230）、側面調整櫛1点のほか剥片・原石を各1点出土した。

土器は破片16点を図示した。1～10は花積下層式である。1は単節LR、2・3は単節RL・LRの羽状縄文、4は無節Rが施される。1は波状口縁を呈す。5は貝殻条痕文と貝殻背圧痕文が施される。6は表面にR4本を一組とした撫糸側面圧痕文、裏面に貝殻条痕文が施される。7a・7bは波状口縁で、隆起線間が凹線状になる。口縁端部から単節RLが施されるが、一部に貝殻背圧痕文が重ねられる。8～10は貝殻背圧痕文が施されるもので、9は擬縄文的に概ね斜位に施文される。

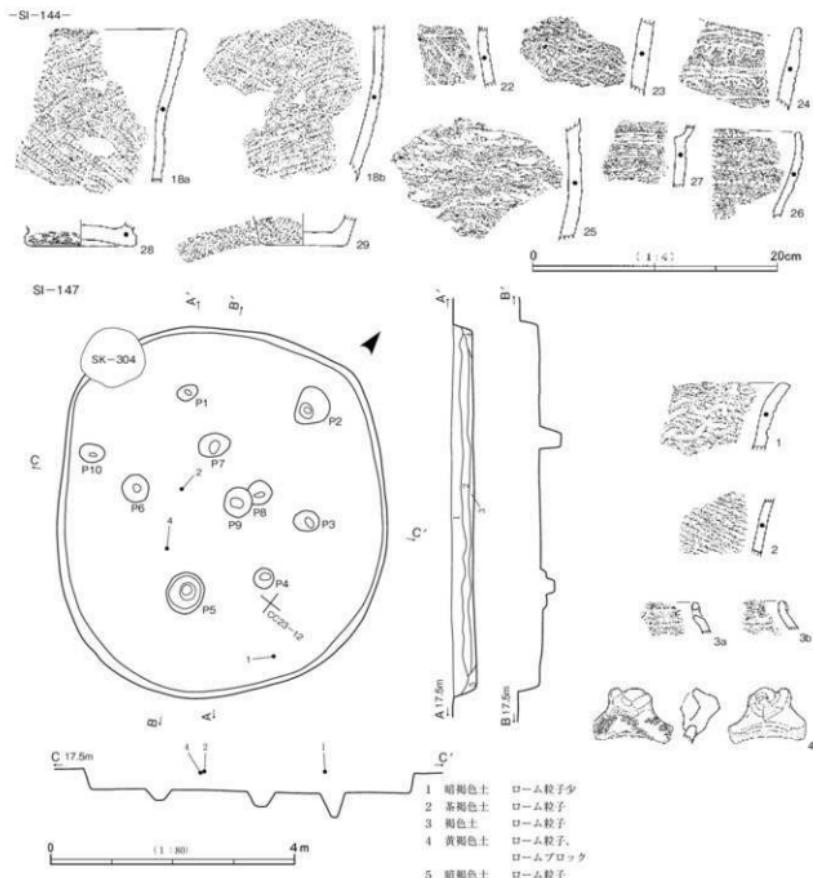
11～15は黒浜式である。11・12は附加条輪縄不明で、12は羽状縄文である。11は胴部中位に弛緩したコシバス文が施されると思われる。13～15は沈線文が施されるものである。13は平行沈線により葉脈文が描出され、基幹線上に瘤状貼付文が認められる。14は一本引きの沈線で粗い斜格子文が施される。15は平行沈線による横位の波状沈線文が密に施されるもので、いわゆる植房式系と思われる。

16は口縁端部から波状貝殻文が密接して施される。波状となる振れ幅が小さいことから、浮島Ⅲ式～興津式に比定される。17・18は単節RLが施されるもので、胎土中に纖維を含まないため諸磯式とする。18は胎土中に粗い砂粒が多く含まれる。

以上のうち出土位置の記録されたものは、ほとんどが覆土上層から出土していることから、より時期が新しく、内容にもまとまりのある黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。土製円板は混入品であろう。

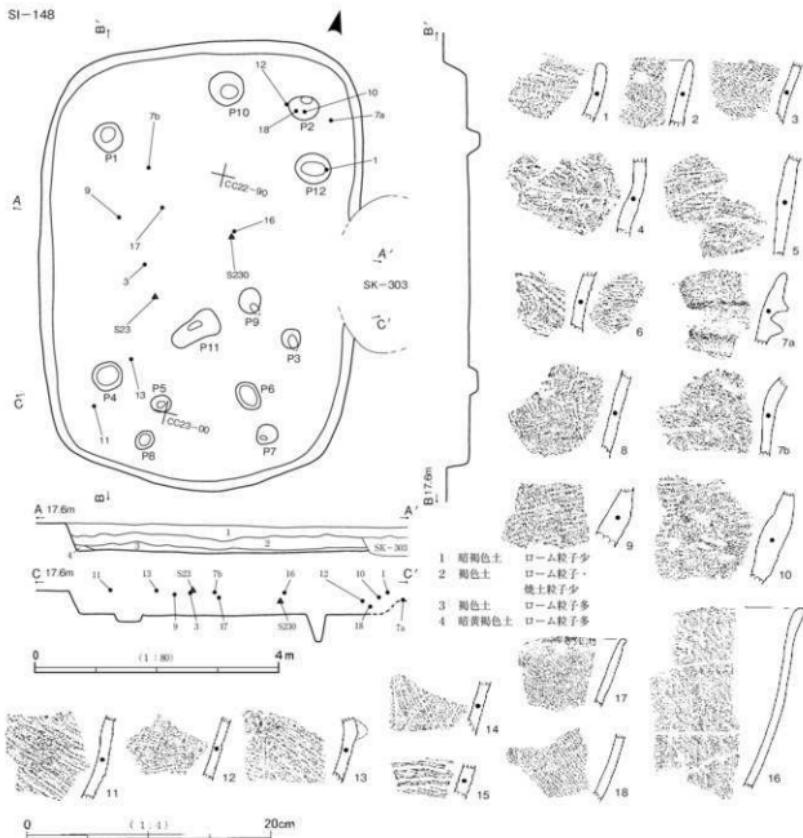
SI-149 (14) SI-019・(17) SI-009 (第44～46図、図版6・7・17・18・36～38)

台地北側寄りのBB22-57・58グリッドに位置し、北西部のSI-175と重複する。出土遺物の様相から当



第42図 SI-144 (2), SI-147

遺構が新しい。攪乱によって北側が大きく損なわれているものの、形状は隅丸方形になろうか。規模は東西6.8m、深さは最大で35cmである。方位は不明である。炉は北と南の2か所に同規模のもの（長軸長1.0～1.3m、短軸長0.7m）が確認された。いずれも焼土層の形成は不良である。ピットは7本確認され、このうち、P1～P3が柱穴と思われるが、4本目の該当場所からは確認されなかった。深さは壁際のP6が最も深く88cmで、ほかは50cmに満たない。P6・P7はSI-175に属する可能性も考えられる。床面は全体に平坦である。覆土は上から暗褐色土、黒色土、黒色土の3層の水平堆積で、壁近くは暗褐色土が斜めに入り込んでいる。中央部3層上面に広く貝殻（厚さ最大30cm）が堆積することや、遺物が密に分布していることなどから人



第43図 SI-148

為堆積と思われる。貝種はハマグリを主体とし、アサリ、サルボウが混入していた。隣接するSI-175を壞すSK-354にも貝殻が廃棄されており、貝種組成が類似していることから同時に廃棄されたものかもしれない。

遺物量は多く、南西部で復元可能な土器がまとまって出土した。土製块状耳飾1点（第89図3）、黒浜式土器利用の土器片錐1点（第89図24）、石器類は楔形石器1点、打製石斧1点（第97図203）、磨石類2点（第106図253）、石皿5点、側面調整礫1点（第119図315）、石核2点、剥片4点、碎片1点、原石3点を出土した。

30点の土器を図示した。1～18は黒浜式である。1～15は縄文が施されるもので、1・6～11は单節

RL、2～5・12・15は単節LR、13・14は無節Lである。1は大形の波状口縁で、複列の結節沈線文によって作出された無文帯が口縁端部に形成される。胴部は波頂部をはじめ縱位の平行沈線文を基軸とし、複列の平行沈線文によって作出された無文帯が米字状に横位連繋している。2は平行沈線文により口縁部に狹小な無文帯を作出し、以下には平行沈線による米字文が描出される。3は複列の結節沈線文によって作出された無文帯が口縁端部に形成され、胴部中位にも結節沈線文が巡らされる。複列の円形竹管刺突文が無文帯から連続的に垂下している。1/4周が遺存し、推定口径23.4cm、現高17.0cmを測る。5は波状口縁で波頂部が欠損する。6は補修孔が認められる。11は上げ底で、推定底径10.5cm、現高7.5cmを測る。12～14は波状口縁である。12は現存部下端に、半截竹管外側を用いた幅広な押引文が断続的に施される。13は1/3が遺存し、推定口径17.7cm、現高16.0cmである。15は器高に比して口径が広い深鉢で、底面を欠損する。1/3が遺存し、推定口径29.0cm、推定底径9.9cm、器高28.1cmを測る。16・17は沈線文が施されるものである。16は平行沈線により葉脈文が描出されるが、基幹線が欠落する箇所が認められる。17は綏やかな波状口縁を呈す鉢形土器で、平行沈線により葉脈文が描出される。2/3が遺存し、推定口径21.1cm、底部は上げ底で、底部径9.9cm、器高11.8cmを測る。18は無文の舟形を呈する浅鉢で、僅かに上げ底となる。長径側で推定口径22.8cm・底径10.0cm、短径側で推定口径15.3cm・底径8.9cm、器高は長径部分が6.9cm、短径部分が6.6cmを測る。

19・27～30は胎土中に纖維が含まれないことから諸磯式とした。19は内傾する無文の小形短頸壺で、口縁端部下に一対の焼成前穿孔が認められる。口径4.8cm、底径5.5cm、器高5.5cmを測る。27は接合しなかつたがSI-130-19と同一個体で、口縁端部に半截竹管の管内痕が表出される結節沈線文、あるいは櫛歯状工具による押引文により作出された無文帯が形成される。胴部は地文に単節RLが施され、結節沈線文により横位に分帶される。分帶内は結節沈線による渦巻文、対向弧線文が充填される。28～30は単節RLが施されるもので、29・30の胎土中に粗い砂粒が多く含まれる。

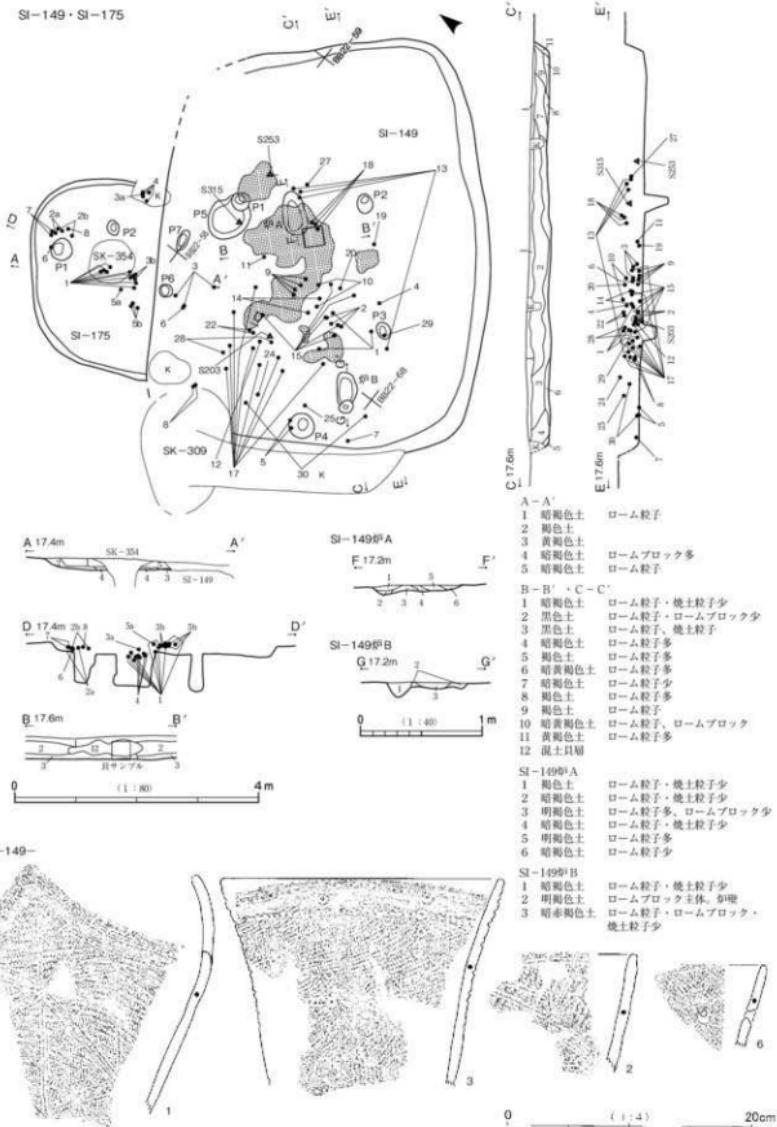
20～25は興津式で、沈線により区画された帯状部に貝殻刺突文を充填する、いわゆる磨消貝殻文が施されるものである。20は波状口縁端部に刷毛目状の単沈線が施され、直下に平行沈線による連弧文が巡らされよう。以下には磨消貝殻文が麻手状モチーフを描出する。21は磨消貝殻文が渦巻など曲線的なモチーフを描出する。22は双頭突起を有す波状口縁で、口縁部以下の文様は20と近似する。突起の裏面には細かい刺突文が施される。23・24は波状口縁で、口縁端部から磨消貝殻文が施される。25は横位3条の連続刺突文が巡らされ、以下に磨消貝殻文が波状モチーフを描出する。26、写真図版38-32は無文で薄手の赤彩土器である。浮島・興津式あるいは諸磯式に比定される。

写真図版38-31は花積下層式である。R+L+R+Lの異方向4本を一組とした撲糸側面圧痕文が施され、細い円形刺突文が刺切文的に充填される。

以上のうち出土位置が記録されているものは、床面～覆土上層から出土している。このうち床面～覆土下層出土のほとんどが黒浜式であることから、本遺構の帰属時期としたい。興津式土器は西10mのところに位置する興津式のSI-156からの混入品であろう。

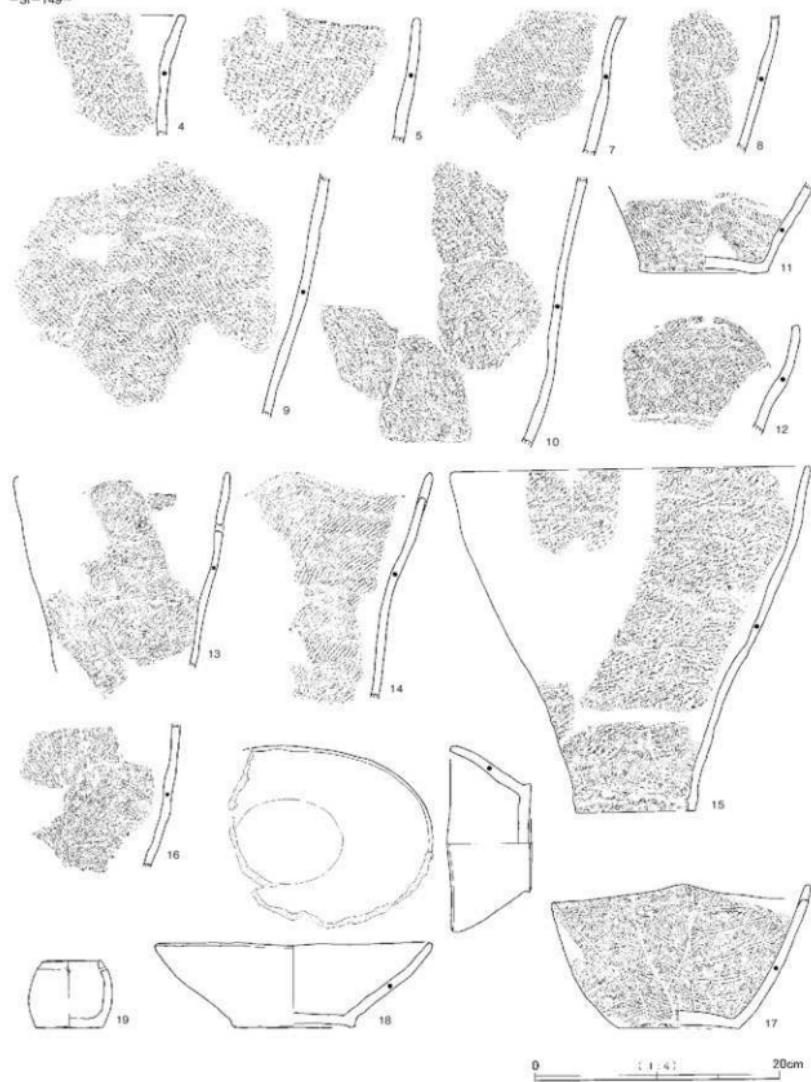
SI-175 (17) SI-010 (第44・46図、図版6・10・18・48)

台地北部のBB22-47・57グリッドに位置する。SI-149・SK-354が重複し、本住居が古い。形状は遺存する北側のみで判断すれば、隅丸方形の可能性が高い。規模は東西3.1m、南北2.2m以上、深さは最大で20cmである。方位、炉は不明である。ピットは確実なものがP1・P2で、SI-149のP6・P7が本跡の柱穴

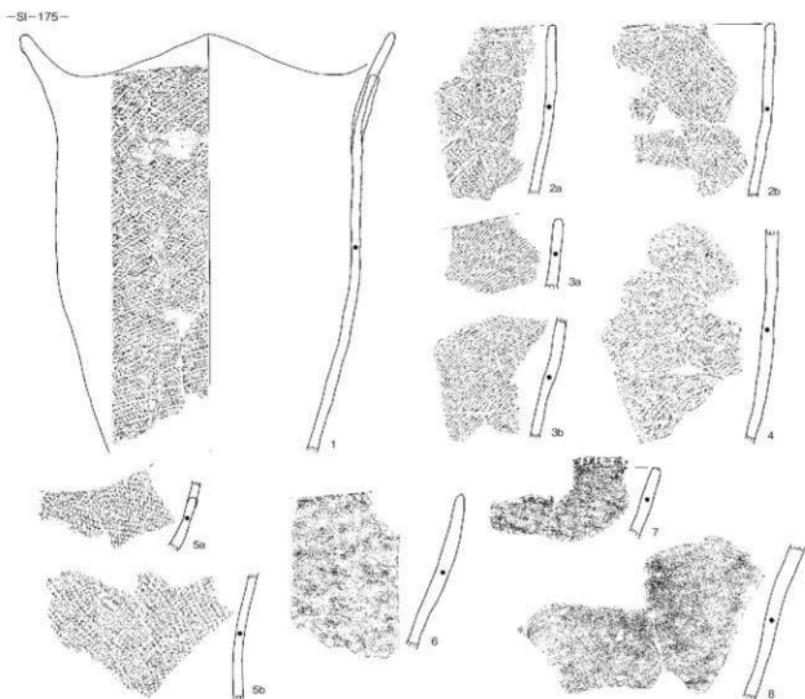
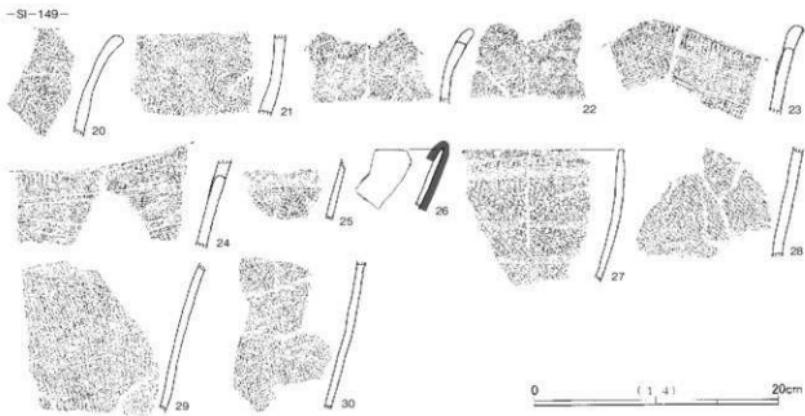


第44図 SI-149 (1)、SI-175 (1)

-SI-149-



第45図 SI-149 (2)



第46図 SI-149 (3)、SI-175 (2)

であった可能性もある。小形ということもあり柱穴の有無を含め検討課題とするしかない。床面は全体的に東半分が幾分高くなっている。覆土は壁際に褐色土が浅く堆積したのち、暗褐色土が全体を覆っている。貝層が確認されたが、重複するSK-354に廃棄されたものであろう。

遺物は北側また東側壁際にまとまっている出土箇所があるが、それ以外は疎らである。土器片錐1点(第89図27)と石器類は剥片1点が出土しているのみである。土器片錐は黒浜式土器を利用した大型品である。

土器8点を図示した。1～5bは縄文が施されるもので、1は附加条2種、2a・2b・5a・5bは単節RL、3a・3bは無節L、4は単節LRである。1は口縁部が緩やかに外反する4単位の波状口縁で、口縁端部から縄文が施される。底部を欠損するものの全体の2/3が遺存し、推定口径30.7cm、現高34.2cmを測る。貝層上面から出土し、外面に貝の付着により白く変色している部分がある。あるいはSK-354に伴う遺物かもしれない。2a・2bは地文縄文上に平行沈線により葉脈文が施されるが、葉脈が重なる部分は斜格子状となる。3a・3b、5a・5bは波状口縁である。4は原体の末端を閉じた瘤状部分の軌跡が、S字結節状に表出される。6～8は無文のものである。6は波状口縁、8は胴下半部で、胎土焼成がよく似ており、同一個体である可能性がある。7は口縁端部上に刻み目が付される。

以上は黒浜式で本跡の帰属時期としたい。

SI-150 (14) SI-020 (第47図、図版7・38)

台地北側寄りのBB22-97・98グリッドに位置し、北側にSK-306が重複する。土層断面の状況から土坑が新しい。形状は隅丸長方形で、規模は東西5.6m、南北4.6m、深さは最大で45cmあり、この遺跡では遺存のよい例である。炉がなく断定はできないが、入口部は南側になろうか。ピットは5本確認され、このうち対応するP1～P4が柱穴として間違いない。また、P5は深さ82cmで、しかも斜めに掘られている。西側のP1・P4が26cmほどの深さなのに対し、東側のP2・P3は1mと1.4mの深さがある点を含め、構造上に反映されたものかもしれない。床面は全体に平坦ではあるが、四方の壁下は数cmほど高い。覆土は壁下に黄褐色土が流れ込んだ後に、褐色土、暗褐色土、褐色土と水平に推移しており、自然堆積と思われる。

遺物は疎らで、小破片で占められることなど、堆積状況と合致するものであろう。出土層位は1層～2層上位である。石器類も剥片・碎片を各1点出土したのみである。

土器は8点を示した。1は花積下層式である。肥厚した口縁端部から単節RL・LRの羽状縄文が施される。2～5、写真図版38-8は黒浜式である。2は貝殻腹縁刺突文が縦位に施されるもので、器厚4mmと薄手である。3は平行沈線により葉脈文が描出される。4は無文の口縁部で、内湾気味に立ち上がる。横方向の整形痕が観察される。5は半截竹管内側を用いて縦位に連続刺突している。8は附加条軸縄不明が施される。

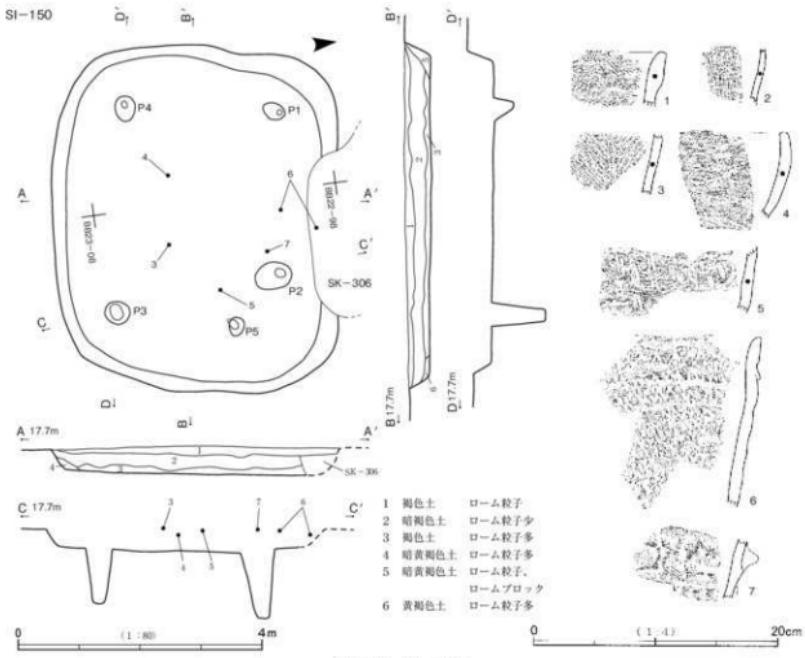
6は浮島Ⅲ式である。折り返しの波状口縁を呈し、波状貝殻文が鋭く施されており、三角文的効果を果たしている。胎土中に砂粒をやや多く含む。

7は阿玉台Ib式である。3連の円形貼付文を囲むように、断面三角形の隆起線による狭小な棒状文が胴部中位に付される。以下にはひだ状文が施される。

出土土器の主体は黒浜式であったが、資料としてはわずかであるため本跡の帰属時期は不明としたい。

SI-151 (14) SI-021 (第48・49図、図版7・38・39)

台地北側のBB22-75・85・86グリッドに位置し、西側はSI-152と重複する。土層断面の状況から本住居が新しい。形状は隅丸長方形であり、規模は東西6.3m、南北8.1m、深さは最大で35cmの大型住居である。



第47図 SI-150

入口部は南側になろうか。ピットは4本確認され、このうち相対するP1～P4が柱穴として間違いないが、住居の大きさからすると径・深さともに貧弱で、とくに西側は深さ約20cmと30cmで上屋を支えられたか疑問である。床面は多少凹凸があり、またその様子も一様でない。覆土は壁近くに褐色土が堆積後、上から褐色土、黒色土、暗褐色土が水平堆積する。自然堆積であろう。

遺物は主に1～2層中から疎らに出土した。土器のほかに黒浜式土器の土器片錘1点（第89図25）、石器類は石錐4点（第90図24～27）、石錐未成品1点（第92図93）、楔形石器3点（第94図148・149）、石錐1点（第96図187）、石錐1点（第96図298）のほか石核2点、剥片13点、碎片14点、原石4点を出土した。

土器の1～8・11・22は花積下層式である。縄文は1が無節R、2が単節RL、3・7・8が単節RL・LRの羽状縄文、5・6が無節R・Lの羽状縄文、11が無節L、22は単節LRである。1は肥厚する口縁端部の断面形が刃状を呈し、端部下に刻み目が付される。表面には貝殻背圧痕文も擬縄文として施され、裏面には貝殻条痕文が施される。2は口縁端部上にも単節RLが施され、表面には貝殻背圧痕文も擬縄文として施文される。3・4は撫糸側面圧痕文を施文するものである。3はR+L+Rの異方向3本を一組として、蘇手状のモチーフを描出する。羽状縄文は等間隔施文である。4は太めのR2本を一組として直線的なモチーフを描出しよう。裏面に貝殻条痕文を施している。8の羽状縄文は等間隔施文で、裏面に貝殻条痕文を施している。11は原体の末端を閉じた瘤状部分の軌跡が、S字結節状に表出される。胎土中に砂粒が多く含まれる。22は口縁端部の断面形が外削ぎ状を呈し、器厚4mmと薄手で器面に凹凸が認められる。

縄文の他に貝殻背压痕文も施されているが、いずれも施文後にナデ消されていて疎らである。

9・10・12~16・18・20は関山式で縄文が施されるものであり、いずれもヨコナデ等の内面調整が丁寧である。9は0段多条RL・LRの羽状縄文、10は無節R・Lの羽状縄文、12~16は単節RL・LRを結束した羽状縄文、18・20は単節LRである。

17・19・21・23は黒浜式である。17は底部付近で、先端をベン先状に丸めた工具により縦位に結節沈線文が施される。21は山形波状口縁の波頂部は欠損するが、肥厚するものであったと推定される。口縁部の形状に沿ってC字結節沈線文が2段巡らされ、波頂部から円形竹管刺突文を連続的に垂下させている。単節RLを地文とする。23は底部付近で、無文である。

24は諸磯c式である。口縁端部に向かって大きく開く器形で、端部上にはハの字状の単沈線文が連続的に施され、ボタン状・長粒状の貼付文が付される。地文は集合沈線文で、口縁部は横位、頸部以下は縦位に施される。口縁端部は内屈し、頸部以下の各所にもボタン状・長粒状の貼付文が付される。その部分にはハの字状に条線を施す。装飾として口端部をまたいで耳状突起と円形突起、口縁部にもまた縦に耳状突起と円形突起を交互に貼付し、頸部にも貼付文を縦位に貼付している。胎土には砂粒が多く含まれる。

以上のうち出土位置の記録があるものは、覆土上層から出土したものがほとんどで花積下層式～黒浜式にわたる。したがって時期決定要素に乏しく、本跡の帰属時期は前期前半としておきたい。

SI-152 (14) SI-022 (第48・49図、図版7・18・39)

台地北側のBB22-83・84グリッドに位置し、東側にSI-151が重複する。土層断面の状況から本住居が古い。形状は長方形であり、規模は東西5.8m、南北6.9m、深さは最大で30cmである。炉がなく断定はできないが、入口部は南東側になろうか。ピットは4本確認され、その位置関係から柱穴と思われるものの、P3以外はいずれも20cm前後の浅いものであり、SI-151と同様、上屋を支えられたか疑問である。床面は北側隅付近が多少低いものの、概して平坦である。覆土は壁下に黄褐色土が流れ込んだ後に、順次暗褐色土、暗褐色土、褐色土と推移しており、遺物の出土状況とも併せ、自然堆積と思われる。

遺物はそのほとんどが覆土最上位から出土した。疎らな出土状況である。土器以外には石鎚未成品・打製石斧各1点、石核2点、剥片9点、両極剥片3点、碎片7点を出土した。

土器13点を示した。1~11、写真図版39-13は花積下層式である。1は波状口縁で、断面形が刃状を呈し、口縁端部が外反する。弧状の隆起線文が口縁端部に付着し、内部に円形竹管刺突文を充填する。横位2条の沈線文下には単節RLが施される。2~4は折り返し部分に集合沈線による鋸歯状文が施されるもので、4は入組状となる。いずれも口縁部下端に、刻み目状の短沈線文や連続刺突文が施される。2・4は刺切文が充填される。3は胴部以下に無節Rが施される。5~7・9~11は単節RL・LRの羽状縄文が施される。5は口縁端部が肥厚し、端部上にも単節RL・LRが回転施文される。口縁部下端には半截竹管の先端に抉りを入れた施文具による連続刺突文が巡らされる。口縁部の1/4周が遺存し、推定口径29.8cm、現高8.8cmを測る。6は口縁端部下に隆起線文が巡らされるが、羽状縄文は端部から施される。8は無節R・Lの羽状縄文が等間隔施文される。13は貝殻背压痕文が施される。

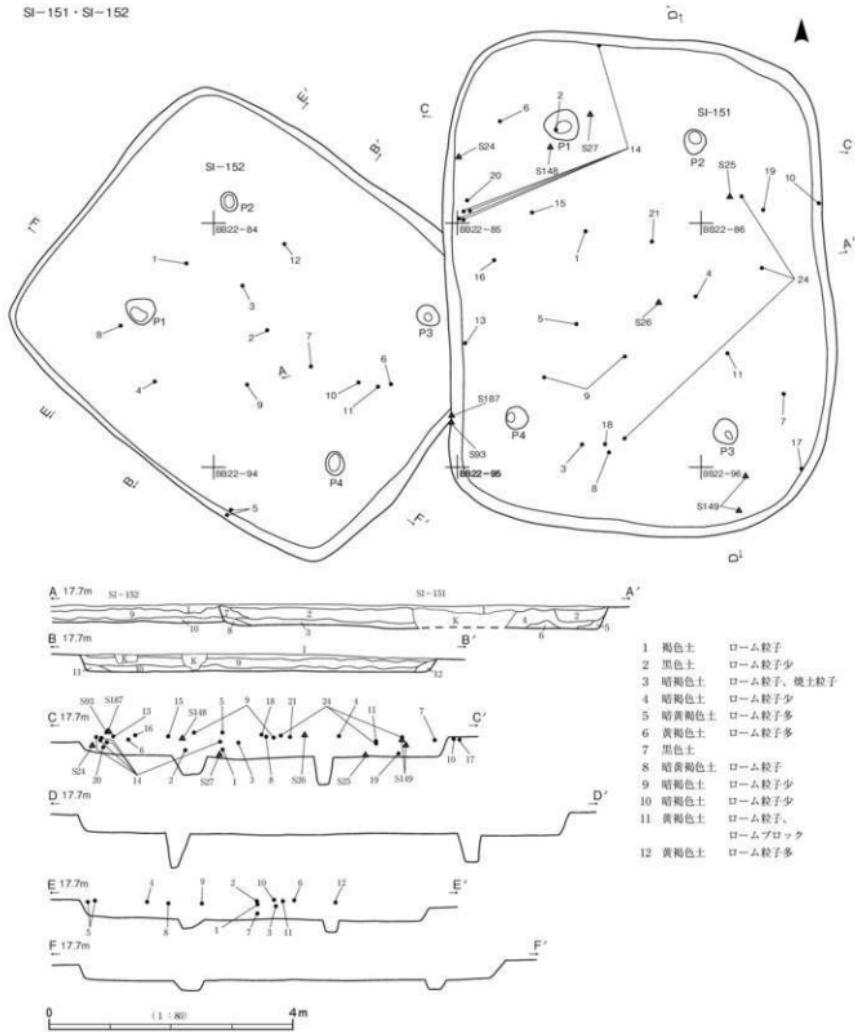
12は浮島式の底部で、底面外周が突出する。底径6.2cm、現高3.3cmを測る。

図示した土器は、12以外は花積下層式で、本跡の帰属時期は花積下層式としたい。

SI-153 (14) SI-023A (第50・51図、図版7・18・39)

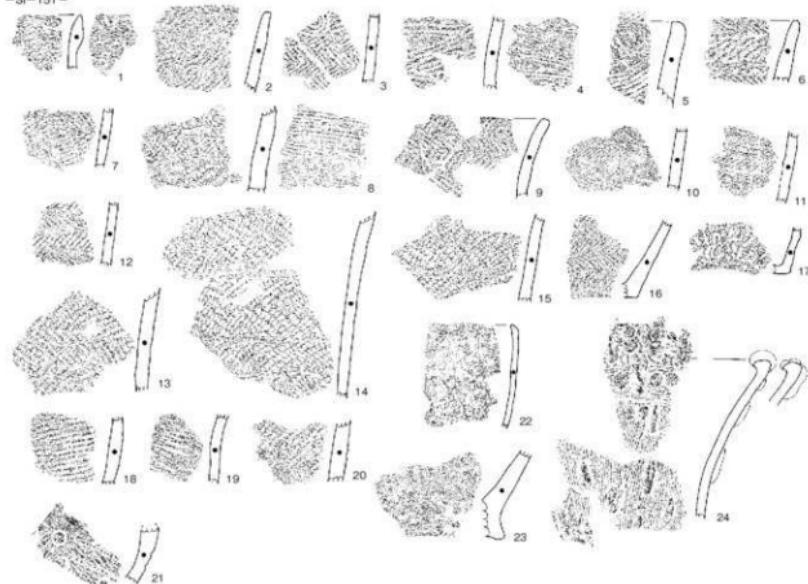
台地北西寄りのBB23-06・16・17グリッドに位置する。SI-154と重複し、土層断面の状況から本住居

SI-151 · SI-152

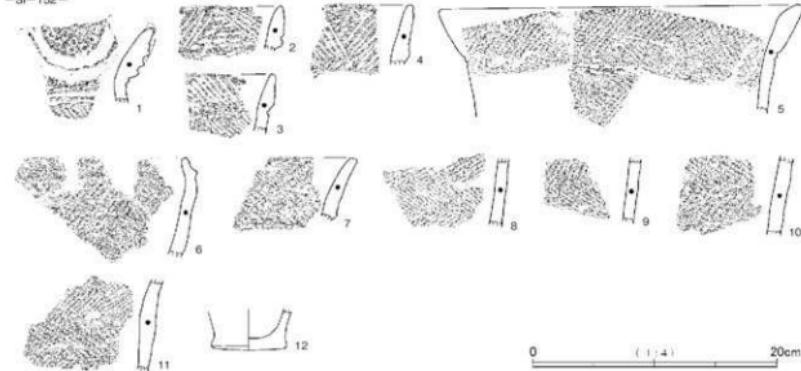


第48図 SI-151 · SI-152 (1)

-SI-151-



-SI-152-



第49図 SI-151・SI-152 (2)

が古い。形状は一部胴張りの隅丸長方形と思われる。規模は長軸長9.0m、短軸長8.2(南側7.2)mで大型の住居である。深さは最大で36cmであり、SI-154よりわずかに深い。重複住居が床面下に達していることもあり、炉は不明というしかない。ピットも北側重複外3本と南西重複外の1本は確実ながらSI-154

内のものは伴うものかどうか判断は困難である。深さはまちまちである。床面は南東部がわずかに低いほかは全体に同一レベルである。覆土は壁下に明褐色土が浅く堆積した後、明褐色土、褐色土、暗褐色土の順にはほぼ水平堆積である。自然堆積であろう。

遺物は疎らな出土状況で、とりわけ周縁部はほとんど空白であった。SI-153・154で遺物を一緒に取り上げているため、出土遺物についてはSI-154の項で合わせて記述する。

SI-154 (14) SI-023B (第50・51図、図版7・39)

台地北西寄りのBB23-16・17グリッドに位置する。SI-153と重複し、土層断面の状況から本住居が新しい。形状は横長の長方形と思われ、規模は長軸長7.6m、短軸長5.2m前後と推測される。深さは最大で45cmである。入口部や炉はともに不明である。ピットは計16本確認されたが、P14を除けば重複住居内にあり、その帰属は明瞭でない。柱穴らしきP4・P6の分布から対応するピットを求めるP2・P11が該当するかと思われる。この他、各柱穴間に位置するピットも深さはまちまちであるが、付属する可能性がある。また、当遺跡で時折みられる斜めに掘り込まれ、かつ深さもあるP15・P16が範囲内にあるが、通常この種のピットは住居に対して方向が一定しないので、所属関係は明確にし難い。床面はともに同一レベルにあり、加えて重複を免れた範囲も少ないことから不明なところが多い。覆土は壁面付近に明褐色土が浅く堆積した後、褐色土次いで暗褐色土が水平に堆積する。自然堆積であろう。

遺物は住居西側に集中し、重複住居の再堆積の可能性が高いと思われる。SI-153・154で遺物を一緒に取り上げているため、本項で合わせて記述する。

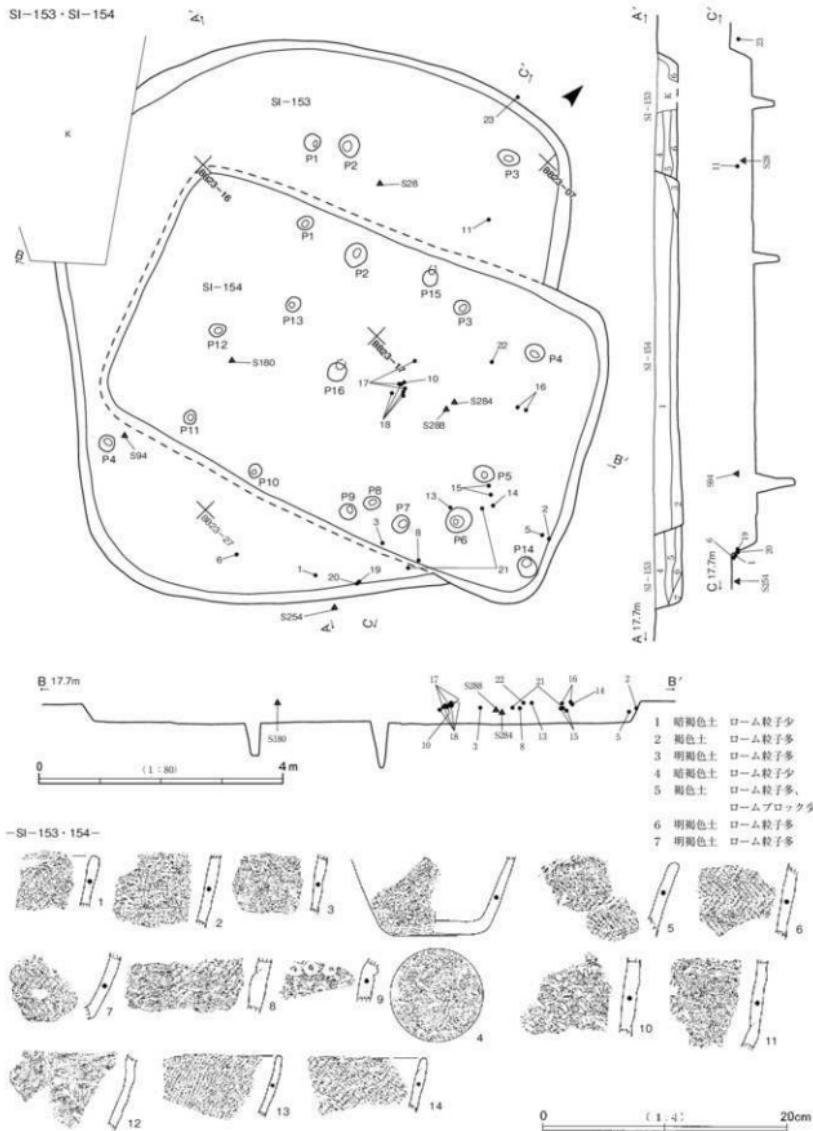
土器のほか、石鎚1点（第90図28）、石鎚未成品1点（第92図94）、石匙1点（第96図180）、磨石類21点（第107図254）、砥石1点、石皿15点（第115図284）、台石2点（第113図288）、剥片3点、削片2点、碎片3点と多種類の石器を出土している。

土器はSI-153・154合わせて23点を図示した。1～12は花積下層式である。1～4は貝殻背圧痕文を施文したものである。1・4は施文単位が斜位で細かく擬繩文的である。3には殻頂部の圧痕も見られ、疎らな施文である。4は底部外面にも施文しており、底径7.4cm、現高6.3cmを測る。5～7は単節RL・LRの羽状繩文を施文している。5は口縁部、7は胴下半部の底部近くにあたる。5は二次的な被熱により淡褐色を呈する。6は等間隔施文である。8は不明瞭だが単節LR、9は円形刺突文を横位に巡らし、その下に撫糸側面圧痕文を施している。10は環付末端無節R・Lの羽状繩文である。11は無文で器面に凹凸がある。12は輪積み痕をなして消している。

13～20は黒浜式である。13・14は無節L、15・16は単節LR、17・18は単節RLが施される。18は深鉢の頸部から胴部上位であろう。19・20は軸繩不明の附加条繩文が施される。

21～23は胎土に纖維を含まない一群である。21は短頸の小型壺の頸部で、肩部に貝殻腹縁文を巡らし、内外面に赤彩を施している。22は浮島II式である。折り返し口縁で、口縁端部に刷毛目状沈線を施している。輪積み痕の上には、貝殻腹縁刺突文を斜位連続に施す。以下には横位沈線文と凹凸文が連続的に施される。23は諸磯a式である。2条一組の平行沈線で肋骨文を施すもので、縦の平行沈線文に付随して円形管刺突文を垂下させる。

他時期の土器の混入があるものの花積下層式と黒浜式土器が主体となって出土しており、各住居の細別時期は確定できないが、いずれも前期前半に當まれたと判断できよう。



第50図 SI-153 + SI-154 (1)

SI-155 (14) SI-024 (第51図、図版40)

台地北側のBB22-45・56グリッドに位置し、東側が調査年度の境界に当たったことや南側の多くのが攪乱範囲に相当したため、不明部分が多い。形状は隅丸長方形と思われ、規模は南北8.0m、東西は6.0m前後かと推測される。深さは最大で40cmであり、壁の立ち上がりは明瞭であった。炉の有無は不明である。ピットはP1のみ確認した。床面は概して平坦であり、比較的堅い。覆土は壁下に黄褐色土の流れ込みがあった後に、暗黄褐色土次いで暗褐色土の順に水平堆積が確認された。自然堆積であろう。

出土遺物は少ない。土器のはかに磨石類1点、二次加工ある碟1点、剥片2点を出土した。

図示できた土器は破片7点である。1・2は花積下層式である。1は貝殻背圧痕文を施文し、2はL+R+Lの異方向3本を一組とした撚糸側面圧痕により渦巻文を描出し、間を刺切文で充填する。

3~6は黒浜式である。3は撚糸文L、4は単節RLを施文している。5・6は平行沈線文が施されるものである。5は葉脈文が描出されると思われる。6は波状口縁で、横位と斜位の平行沈線により文様モチーフが描出されよう。いずれも単節RLを地文繩文としているとみられるが、不明瞭である。

7は中期中葉の土器で、口縁部に単節RLを施文した幅広な隆帯を巡らせ、強く引いた沈線を沿わせている。

図示しなかった土器の主体は黒浜式で、これにほかの時期の土器片が混入しているような状況であったため、本跡の時期は黒浜式と考えるのが妥当であろう。

SI-156 (14) SI-025 (第52図、図版7・40)

台地北側のBB22-35グリッドに位置する。東側は調査年度の境界に当たり、確認できなかった。南西部がSK-310と重複するが、新旧関係は不明である。南北4.5m以上、東西2.5m以上で形状・規模とともに不明で、深さは最大で26cmである。炉は遺存範囲内では確認できなかった。北側のP1は深さ29cmで、本跡に伴うものであろうが、隣部の浅いP2は別遺構の可能性がある。床面は概して平坦である。覆土は一部壁下に暗黄褐色土の流れ込みがあった後に、褐色土次いで暗褐色土の順に水平堆積となる。

遺物は全体に疎らな出土状況である。土器以外に磨石類・両極剥片各1点を出土した。

土器の1a・1bは波状口縁の同一個体で、口縁端部に刷毛目状沈線が2段施される。以下には磨消貝殻文が施文されるが、区画は半截竹管を用いて一本引き沈線と平行沈線を使い分けている。区画内には貝殻腹縁刺突文が充填される。1c・2a・2bは同一個体であろう。1a・1bと同様に磨消貝殻文の区画は、半截竹管を用いて一本引き沈線と平行沈線を使い分けているが、充填される貝殻腹縁刺突文は1a・1bと異なる。図示した以外にも同様の破片が多数出土している。3a・3bは振れ幅の小さい波状貝殻文を密に施文する。口縁部片と胴部片があり、接合しないが同一個体とみられる。

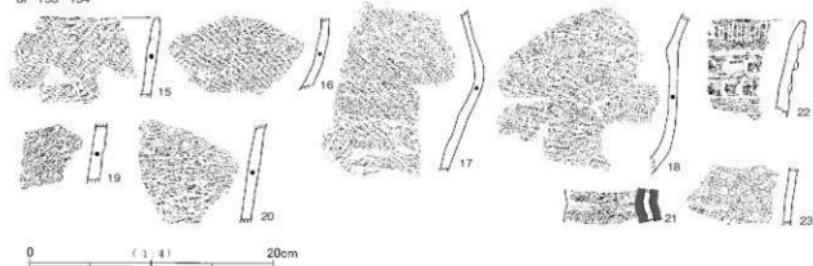
いずれも興津式で、本跡の帰属時期であろう。

SI-157 (14) SI-026 (第52図、図版7・40)

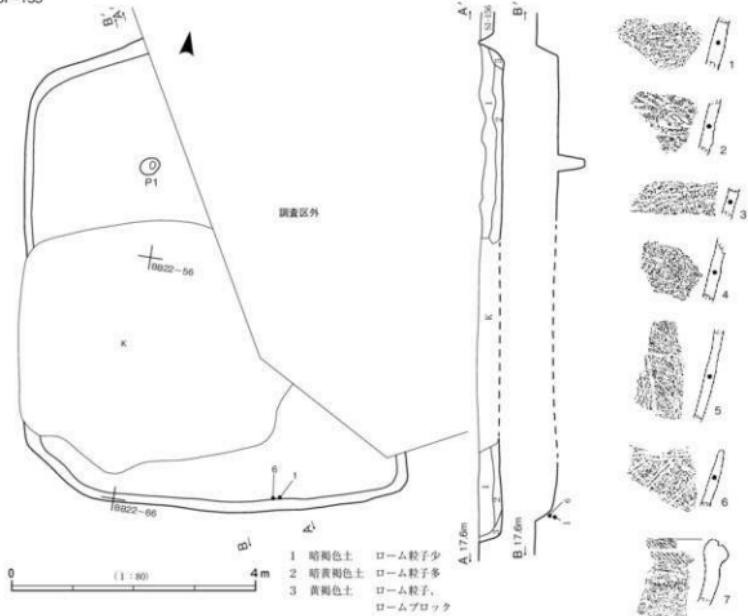
台地北側のBB22-54グリッドに位置する。形状は隅丸長方形であり、規模は南北6.3m、東西は柱穴分布から5.4m、深さは最大で32cmである。炉は確認できなかった。ピットはP1~P4が対応する位置にあり、深さも40cm~60cm台で、これらを柱穴としてよいだろう。床面は多少の凹凸が不規則に認められ、軟質であった。なお、壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は上から、暗褐色土、褐色土、明褐色土の順にはば水平に堆積する。遺物の出土状況とも併せ自然堆積であろう。

遺物は少なく、疎らな出土状況であった。土器以外に石鏃未成品1点（第92図95）を出土した。

-SI-153・154-



SI-155

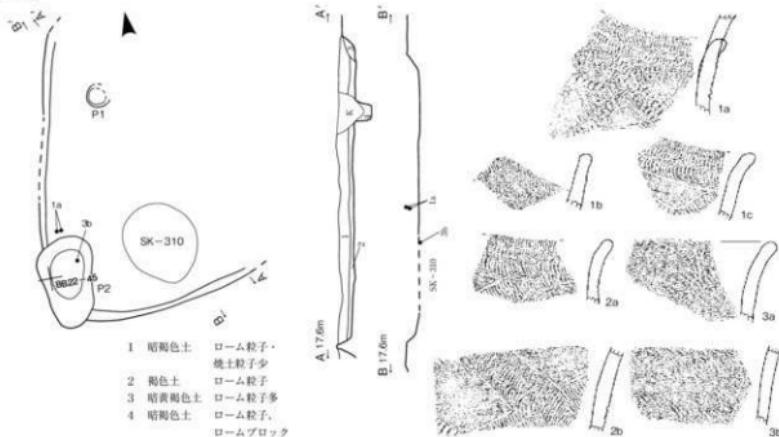


第51図 SI-153・SI-154 (2), SI-155

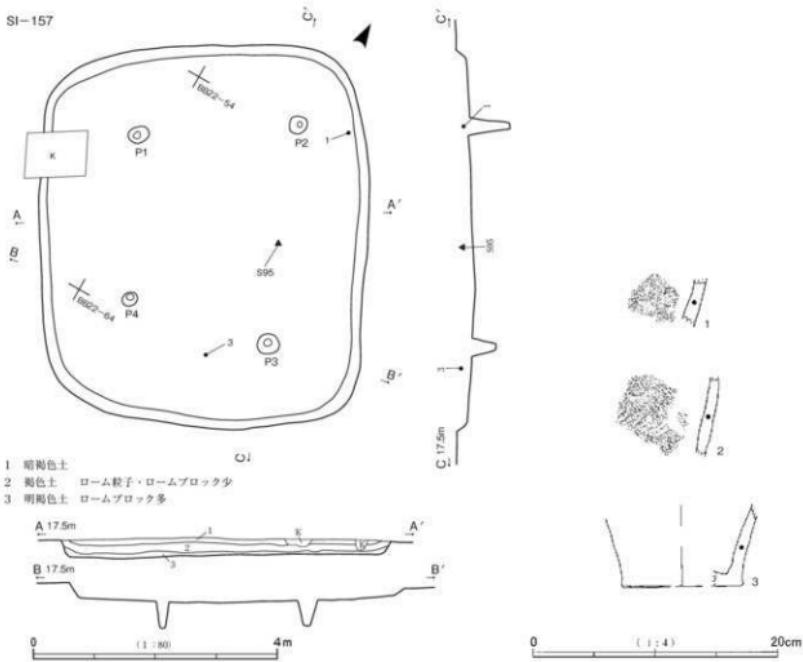
1は貝殻背圧痕文、2は単節RL・LRの羽状縄文、3は底部で、上部には無節縄文を施していると思われるが不明瞭である。

図示した土器は花積下層式、図示できなかった土器は黒浜式土器が主体であったので、本跡の帰属時期は前期前半であるが細別時期は不明である。

SI-156



SI-157



第52図 SI-156, SI-157

SI-158 (14) SI-027 (第53・54図、図版7・18・40)

台地北側のBB22-51・52グリッドに位置する。SI-159と重複し、土層断面の状況から本住居が古い。形状は隅丸方形であり、規模は5.5m四方、深さは最大で44cmである。炉は確認できなかったが、南東部に擾乱が入っているので、もともとなかったかは断定できない。北側のP1・P2は対応する位置にあり、深さはともに52cmであることから柱穴と思われるものの、南西部のP3は深さ24cmと浅く、位置も少しずれている。また、南東部の柱穴は擾乱範囲中にある可能性が考えられる。床面は北東部が全体に3cm～5cm高めである。覆土は壁下に暗黄褐色土がわずかに堆積した後、上から褐色土、暗褐色土、暗褐色土が水平堆積に堆積する。

遺物は全体に疎らな出土状況ながら、北東部で大きな土器片が出土している。石器類は石鏃未成品4点（第92図96～98）、楔形石器3点（第94図150）、磨石類・石皿・石核各1点、剥片11点、両極剥片2点、碎片4点を出土した。

土器の1・2は貝殻背圧痕文が施されるものである。1は小形鉢で1/2周が遺存し、推定口径12.4cm、底径4.6cm、器高9.0cmである。貝殻背圧痕文が外底面にも施されている。P2脇の床面上から出土した。3は断面刃状の口縁部を呈すもので、複数の斜沈線による入組鋸歯状文が施される。4～9は縄文を施文する。4は断面刃状の口縁部を呈すもので、器面が荒れているため不明瞭であるが、無節R・Lが施される。5・6は口縁端部から単節RL・LRによる羽状縄文が施される。8・9も単節RL・LRによる羽状縄文が施される。7は単節RLが施される。10は底面外周が突出し、上げ底になると思われる。以上は花積下層式である。

11は口縁端部上に凹文が巡らされるもので、細沈線が格子目状に施される。器厚が3mmと薄いが堅緻で、細かい砂礫が多く含まれる。花積下層式併行とされる東海地方の木島式である。

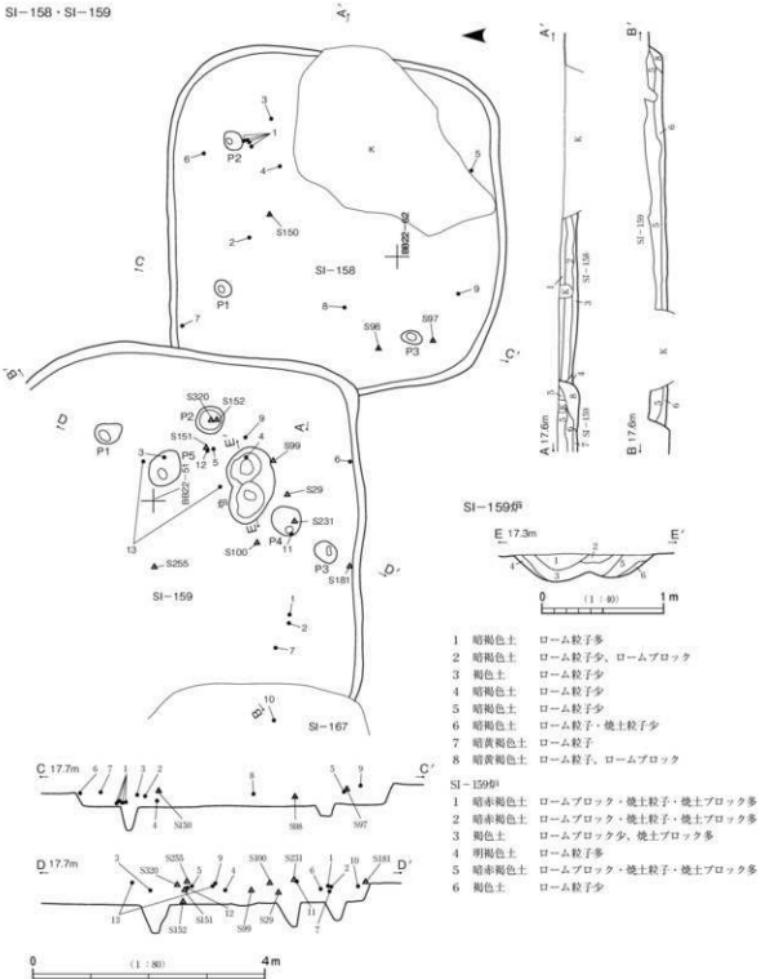
以上の内容から花積下層式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-159 (14) SI-028 (第53・54図、図版7・40)

台地北側のBB22-50・51グリッドに位置する。北西部は調査年度の境界に当たり、不明瞭となっている。南東部でSI-158、南西部でSI-167と重複し、その新旧関係はSI-158→SI-159→SI-167となる。形状は欠いている部分が多いものの、隅丸方形ないし長方形と思われる。規模は東西5.3m以上、南北5.4m以上、深さは最大で42cmである。炉は南東部に位置し、隣接して作り替えたために、掘形はピーナッツ状となる。規模は新旧炉とともに70cm×60cm、深さ40cmである。焼土層も厚く、大松遺跡のなかでは、最も明瞭な炉の1つである。ビットは5本見つかっているが、位置・径・深さ（約30cm～80cm）などに規則性がなく、柱穴かどうか判断し難い。床面はほぼ平坦である。覆土は壁下にロームブロックを含む暗黄褐色土が堆積した後、多少の乱れもあるが暗黄褐色土、暗褐色土、暗褐色土が水平に堆積する。

遺物は南東寄りが幾分密な状況であった。石器類も多器種が出土した。石鏃1点（第90図29）、石鏃未成品4点（第92図99・100）、楔形石器8点（第94図151・152）、石匙1点（第95図181）、局部磨製石斧1点（第101図231）、磨石類2点（第107図255）、石皿1点、側面調整繩1点、剥片10点、両極剥片2点、碎片14点、原石2点を出土したほか、滑石製块状耳飾（第96図320）を出土している。

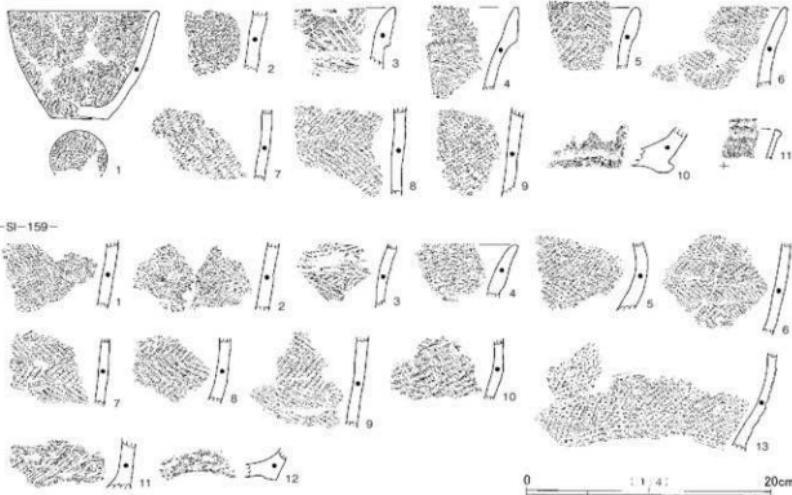
土器の1～12は花積下層式である。1・2は貝殻背圧痕を施す胴部片である。3は異方向2本を一組とした撚糸側面圧痕文を施文する。4～11は縄文が施されるものである。4・10は単節RL、5・6・9は単節RL・LRの羽状縄文、7・8は0段多条RL・LRの羽状縄文、11は無節Lが施される。6・7では他の条を以て縛り留めた原体末端の軌跡が認められる。12は上げ底になると思われる。



第53図 SI-158・SI-159 (1)

13は黒浜式である。胴部が膨らむ器形で、地文単節RL・LR上にC字結節沈線文が複数巡らされ、その内部に円形竹管刺突文により縱位+山形のモチーフを描出している。

以上の土器は全て覆土上層からの出土である。したがって時期的に新しい黒浜式を本造構の帰属時期としたい。



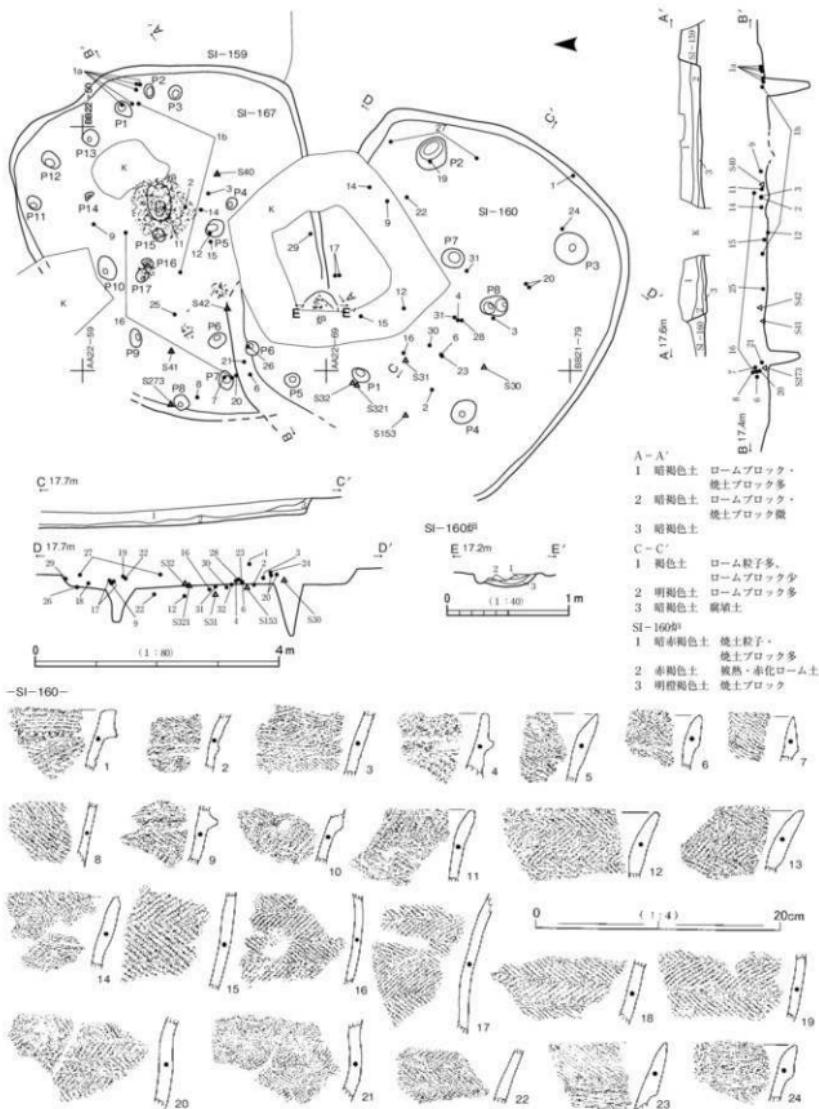
第54図 SI-158・SI-159(2)

SI-160 (14) SI-029・(17) SI-006 (第55・56図、図版7・8・41)

台地北西寄りのAA22-69グリッドに位置する。SI-167と重複し、本住居が新しい。形状は多少歪な隅丸方形である。規模は長軸長6.0m、短軸長5.3m、深さは最大で35cmである。方位は北西になろうか。炉は北側隅寄りにあり、約半分ほどが遺存する。形状は梢円形と思われ、径は遺存部から判断すると40cmである。浅い窪みの底面に焼上面が形成され、焼土ブロックを多く含む暗赤褐色土が覆っていた。ピットは8本確認され、南壁寄りの深いP3・P4と北西のP1はその位置関係から柱穴になろう。これと対応する可能性のあるピットは、炉の付近に求められるが、確認されなかった。床面は南東壁寄り約1m前後が西側と比べて約10cm高いが、段はない。覆土は底面に明褐色土が浅く堆積した後、壁近くに腐植土を含む褐色ないし暗褐色土が流れ込み、その後は褐色土が一面に覆っている。上面の褐色土に人為的な要素が見られるが、それ以外は自然堆積であろう。

遺物は大きな集中地点もなく、主に土器片が不均等に出土した。このほかに石錐3点（第90図30～32）、石錐未成品2点、楔形石器3点（第94図153）、磨製石斧1点、石核2点、剥片18点、両極剥片5点、削片1点、碎片25点、原石3点、滑石製块状耳飾1点（第96図321）を出土した。

土器32点を図示し、いずれも花積下層式である。このほかに小片3点を写真図版に掲載した。1～3は燃糸側面圧痕文が施されるものである。1は肥厚する口縁端部に無節RとLを5条交互に組み合わせて施される。段以下には2本の側面圧痕文が鋸歯状に施され、空白には刺切文が充填される。4～25は繩文が施されるものである。4～8は単節RLが施される。4は口縁端部以下に突帯が巡らされよう。5の口縁部は断面刃状を呈す。9～22は単節RL・LRの羽状繩文が施されるもので、基本的に等間隔文となる。9は無文の口縁端部との間に突帯が巡らされる。23・24は無節Rが施されるもので、23の口縁部は断面



第55図 SI-160・SI-167 (1)

刃状を呈す。25は無節Rと単節LRによる羽状縄文が施される。26~32は貝殻背圧痕文が施されるもので、縄文の細かな施文単位を意識した斜位または横位の施文が多く、いわゆる擬縄文と考えられる。28・29は指頭による凹凸が著しい。

写真図版41~33は無文で、指頭圧痕による凹凸が認められる。器厚は薄く堅緻で、細かい砂礫が含まれる。花積下層式併行とされる東海地方の木島式である。写真図版41~34・35は網目状燃糸文が施され、胎土中に白色鉱物粒子が含まれるもので、3の内面調整は丁寧である。黒浜式併行とされる大木2a式である。

以上の内容から、質量とも安定している花積下層式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-167 (14) SI-036・(17) SI-005 (第55~57図、図版7・8・18・45)

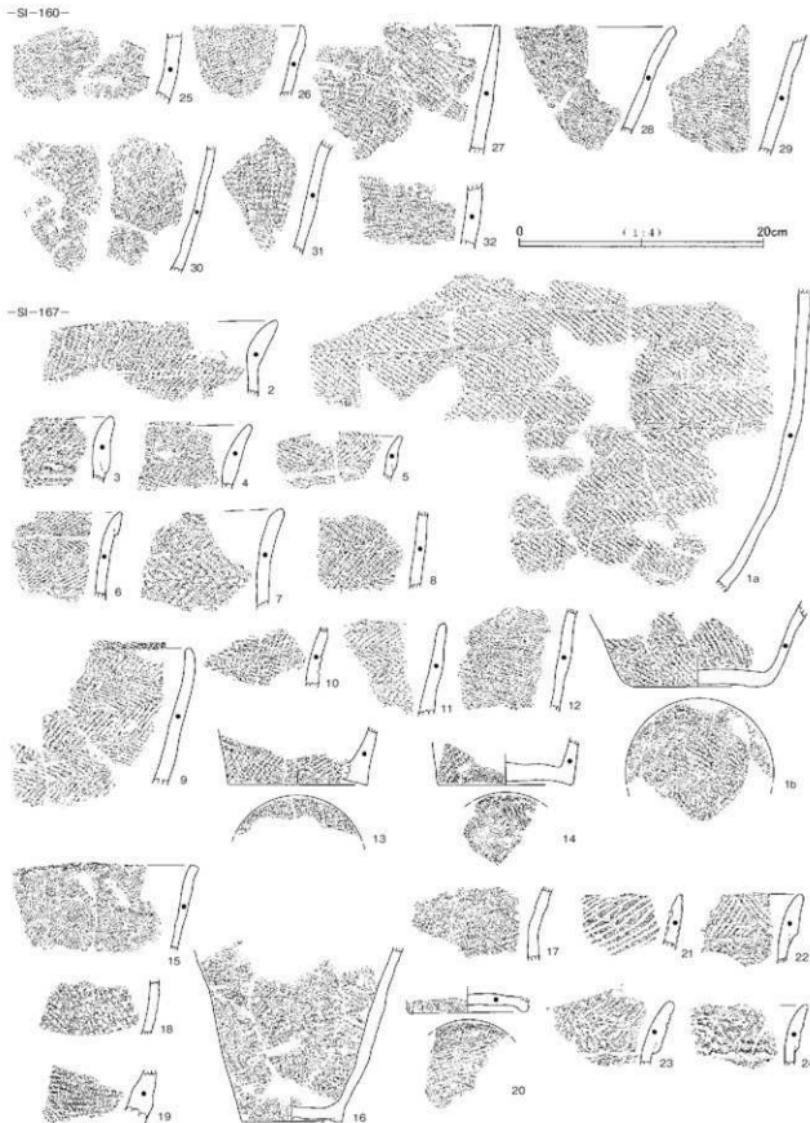
台地北部のAA22~49・59グリッドに位置する。SI-160と重複し、本住居が古いと思われる。形状は西側が不明瞭のため、不確実ではあるが、隅丸の長方形かと思われ、全体に歪なプランとなろう。規模は長軸長6mと推定され、短軸長は最大で4.8mである。方位は不明である。炉は東壁寄り中央にあり、規模は長径1.2m、短径1mである。約10cmの掘り込みがあり、底面はよく焼けており、覆土は焼土ブロックを多く含む暗赤褐色土であった。ピットは17本確認され、東西の壁近くに並ぶ群は柱穴と思われるものの、このほか炉の辺りを南北に連なるピット群の一部もその可能性があろう。おそらく南側擾乱部分にも存在したのではなかろうか。そうすると、東西に細長い住居構造に対応するために中央にも柱を設けたのかもしれない。床面は遺存不良ではあるが、凹凸は少ないようである。覆土は暗褐色土が浅く堆積した後に焼土粒子を含む暗褐色土が全体を覆っている。

遺物の出土状況は炉の近くと東側壁寄りで形状の窺える土器が出土したほかは中央にまとまりがあった。図示できた土器は17次調査で出土したものである。石器類は石鎚4点（第90図39~42）、石鎚未成品7点、楔形石器6点、二次加工ある剥片1点、敲石1点（第110図273）、剥片40点、両極剥片5点、削片5点、碎片33点、原石3点と多数出土し、石鎚製作跡であった可能性がある。

土器は28点を図示した。1a~24は花積下層式である。1~15は縄文が施されるものである。1a・1bは単節RLを等間隔施文したもので、他の条を以て縛り留めた原体末端の軌跡が認められる。底部外面にも施文している。2・3は単節LRが施されるもので、3は折り返し口縁となる。4~11・13・14は単節RL・LRの羽状縄文が施されるもので、7・8は0段多条である。4は口縁端部上に刻み目が付され、5・6は折り返し口縁となる。7には他の条で縛り留めた原体末端の軌跡が認められる。9は口縁端部上に無節Rが施され、以下には無節R・Lの羽状縄文が施される。10は羽状縄文間にR+Lの異方向2本を一組とした側面圧痕文が施される。11は幅狭等間隔施文が明瞭である。13は底部外面にも単節RLが施される。14は胴部下端では単節RLが施され、底部外面では単節LRが施されていることから、羽状縄文が施されると推察する。12は無節Rが施される。15は無節しが貝殻背圧痕文を擬して短い単位で施される。16~20は擬縄文と考えられる細かな斜位または横位の貝殻背圧痕文が施されるもので、20では底部外面にも施される。21は集合沈線文が斜位に施されるもので、口縁部の断面形が刃状を呈す。22は折り返し口縁で、集合沈線による鋸歯状文が施される。23・24は稚拙な沈線で入組鋸歯状を描出し、その空間に刺切文を充填する。23は波状口縁である。

25~28は黒浜式である。25・26は無文である。27・28は平行沈線で文様を描出するもので、27は葉脈文が施されると思われる。

以上の内容から時期の異なる複数型式が含まれてはいるが、本遺構の帰属時期はまとまりのある花積下



第56図 SI-160・SI-167 (2)

層式としたい。

SI-161 (14) SI-030 (第57図、図版8・42)

台地北西寄りのBB22-71・72グリッドに位置する。形状は一隅が隅丸をなすほかは楕円形である。規模は長径6.4m、短径5.0m、深さは最大で55cmあり、遺跡内で最も遺存のよい例である。入口部は不明である。炉は当初からなかったものであろう。ピットはP1～P6が確認され、P2が内側に寄ってはいるが、ほぼ等間隔に配置され、柱穴と思われる。深さはP1が23cm、P6が47cmであったほかは70cm台であった。床面はほぼ平坦である。覆土は壁下に黄褐色土、中央部に暗黄褐色土が堆積した後、暗褐色土次いで褐色土と堆積するも、西側では黄褐色土が厚く入っていることなど、人為堆積の要素が強いと思われる。

遺物の出土もそれに対応するように北西部で密である。土器のほかに石鎚7点（第90図33～35）、石鎚未成品11点、楔形石器8点、打製石斧1点、磨石類5点、石皿・石核各1点、剥片25点、両極剥片5点、削片1点、碎片40点、原石3点を出土し、石鎚製作跡であった可能性がある。

土器は23点を図示した。1a～19は花積下層式である。1a～4は撚糸側面圧痕文が施されるものである。1a・1bは同一個体で、口縁端部に周縁に刻み目を有す円環状の貼付文が付され、鋸歯状文が施される。L+R+Lの異方向3本を一組とした側面圧痕文により巻手状のモチーフを描出し、モチーフ間に刺切文を充填する。2は刻み目付きの隆起線により区画された口縁部内に、やや太いL3本を一組とした側面圧痕文により巻手状のモチーフを描出す。以下には単節LRが施される。3はR+L+Rの異方向3本を一組とした側面圧痕文を横位に、以下にはL3本を一組とした側面圧痕文により巻手状のモチーフを描出す。4は刻み目付きの隆起線により区画された口縁部内に、L+R+Lの異方向3本を一組とした側面圧痕文が直線的に施される。隆起線以下には単節RL・LRの羽状縄文が施される。5～7は貝殻背圧痕文が施される。5は折り返し口縁で、口縁端部から貝殻背圧痕文が羽状縄文を擬して施されている。8～19は縄文が施されるものである。8～16は単節RL・LRの羽状縄文が施されるもので、8・15は0段多条である。14は施文帯の境界に末端を閉じるために処理をした軌跡が表出されている。17は無節しが施される。18は細めの原体を用いた単節LRが施される。19は口縁端部が無文で、以下に単節RLが施される。

20～22は黒浜式で、20は単節LRが施される。21は斜位の単沈線が疎らに施される。22は無文である。

23は無文の尖底部で、早期撚糸文から沈線文の所産と思われる。

以上の内容から主体となる花積下層式を本遺構の帰属時期としたい。

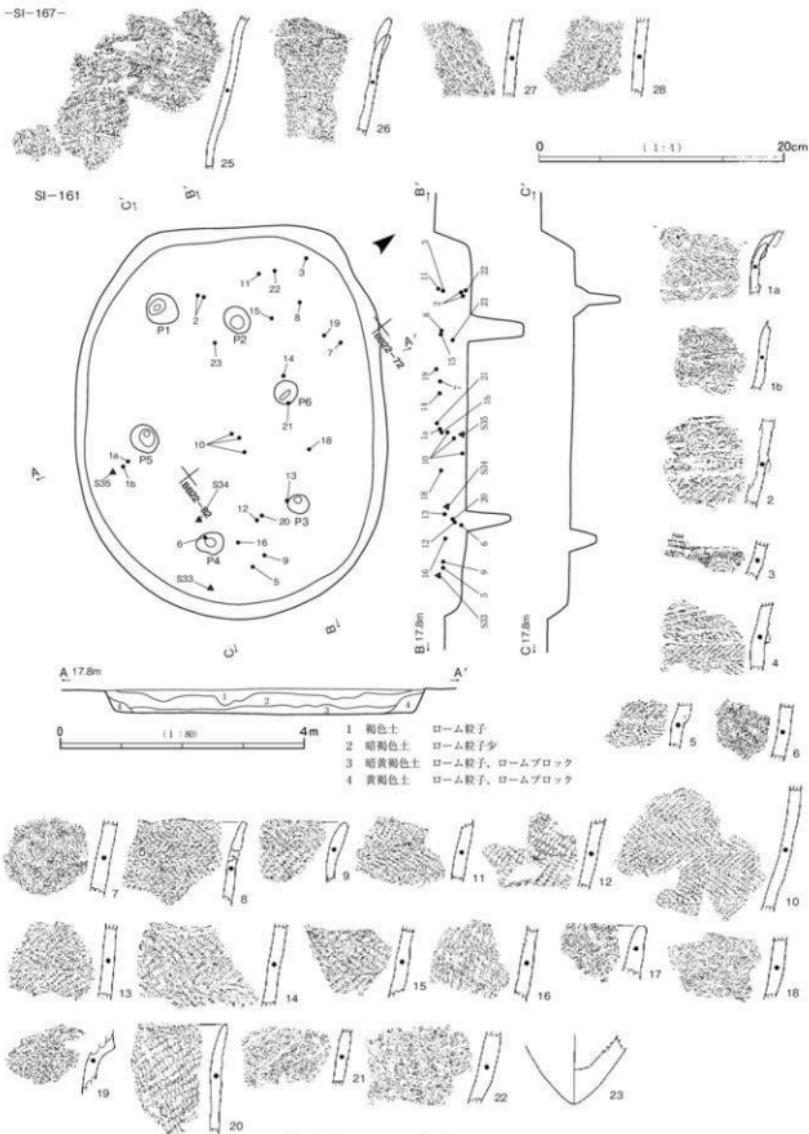
SI-162 (14) SI-031 (第58・59図、図版8・42)

台地北西寄りのBB22-82・92グリッドに位置する。南端でSI-163と重複し、土層断面の状況から本住居が古い。形状は細長い楕円形であり、規模は長径6.3m、短径4.9m、深さは最大で38cmである。入口部は不明である。炉は当初からなかったものと思われる。ピットは3本見つかったが、深さ20cm～60cmで、位置等にも規則性がなく、柱穴かどうか不明である。床面はほぼ平坦である。覆土は壁下にロームブロックを含む暗黄褐色土が堆積した後、褐色土、暗褐色土が水平に堆積し、自然堆積と思われる。

遺物の出土状況は疎らであった。石器は遺存状態が悪くいずれも図示していないが、石鎚未成品3点、楔形石器・磨石類各1点、剥片4点、両極剥片2点、削片1点、碎片5点を出土した。

土器は9点を図示した。1～6は花積下層式で、いずれも単節RL・LRの羽状縄文が施されるものである。1は口縁端部上に単節R、口縁部を区画する隆起線上に単節LRが施される。羽状縄文の横帯区画法は等間隔施文で、末端を閉じるために開いた2本の条を折り曲げ瘤状となった部分の軌跡が認められる。SI-

-SI-167-



第57図 SI-167 (3)、SI-161

163出土の破片が接合した。2は肥厚した端部下にL+Rの撚糸側面圧痕文が施される。断面形刃状の口縁部が肥厚するが、その内面にも単節RLが施される。6は上部に無文部が認められる。

7は関山式で0段多条LRが施される。内面のミガキが顕著である。

8・9は黒浜式である。8は無文で、器面に斜位のナデ付けによる稜線と補修孔が認められる。9は軸縄不明の附加条縄文である。

本跡では花積下層式がまとまって出土しているといえる。しかしながら、5が覆土中層から出土したほかは上層から出土したものであり、9の黒浜式が床面直上から出土している。このように時期決定要素に乏しいので、本遺構の帰属時期は前期ながら細別時期は不明としたい。

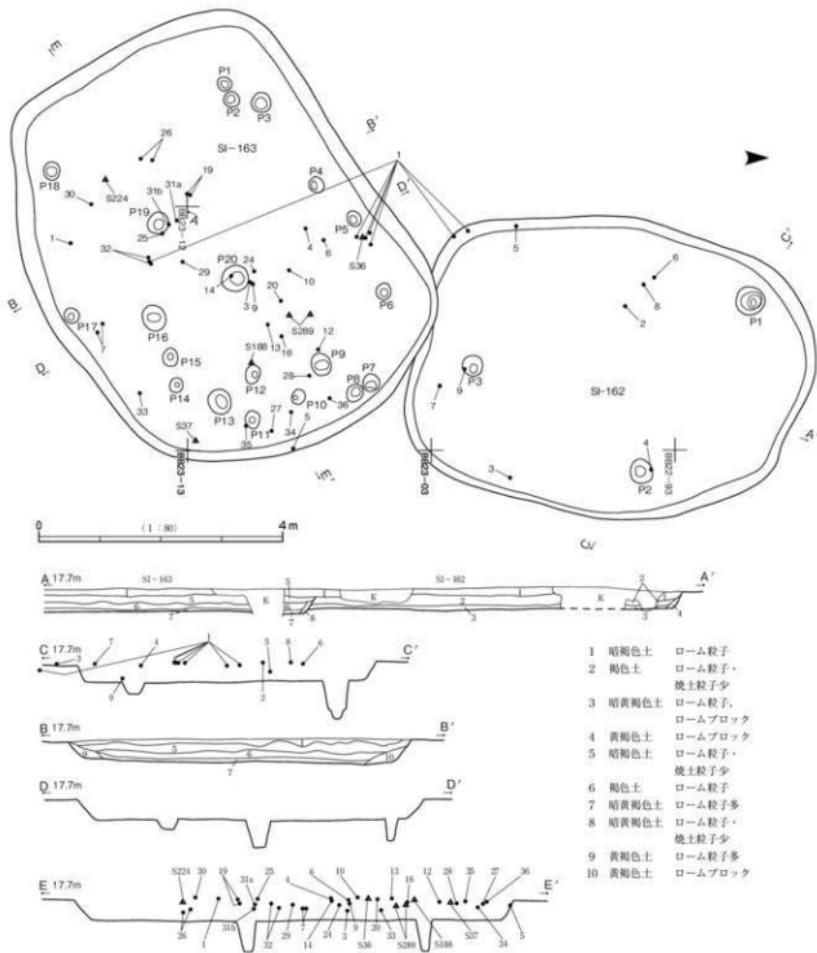
SI-163 (14) SI-032 (第58~60図、図版8・18・42・43)

台地北西寄りのBB23-02・12グリッドに位置する。北東端でSI-162と重複し、先に述べた通り、本跡がより新しいと判断される。形状は一辺が多少内窪みとなる隅丸長方形であり、規模は長軸長7.3m、短軸長5.7m、深さは最大で38cmである。入口部は不明である。炉は確認できなかった。ピットは20本見つかったが、径・深さ等まちまちで、位置関係にも規則性がない。深さ40cm~52cmの9本(P2・P8~P10・P12・P14・P15・P19・P20)は中央~東側に偏っており、柱穴と断定できない。これ以外は深さ20cm程度である。床面は北西部が多少高いもののその他は平坦である。覆土は壁下に黄褐色土が堆積した後、明瞭な水平堆積で上から暗褐色土、褐色土、暗黄褐色土となる。主に自然堆積であろう。

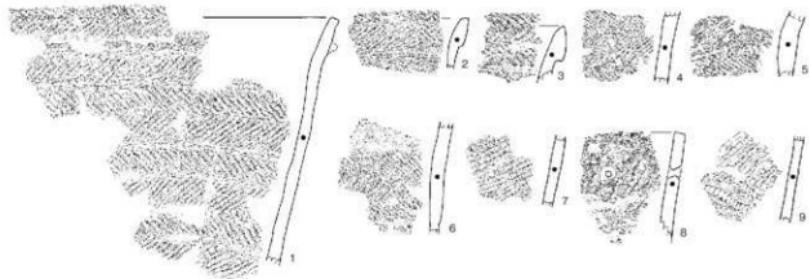
遺物は空白地もあり疎らな出土状況で、上層の1・2層に偏っていた。石器は石錐3点(第90図36・37)、石錐未成品5点、楔形石器7点、石錐1点(第96図188)、二次加工ある剥片1点、磨製石斧1点(第100図224)、台石2点(第112図289)、石核1点、剥片9点、両極剥片3点、碎片10点、原石2点を出土した。

土器は36点を図示し、小片1点は写真図版を掲載した。1~17、写真図版43~37は花積下層式である。1~12・37は縄文が施されるものである。1は地縄文上にL+R+L+Rの異方向4本を1組とした撚糸側面圧痕文が直曲線的に施され、空白部には刺突文が刺切文的效果を以て施される。2は地縄文上にL4本を1組とした撚糸側面圧痕文と、半截竹管の一方を支点としコンパス手法で描出した円文が施される。3・4は単節RL、1・2・5・6は単節LR、7は無節R・Lの羽状縄文、8~12は単節RL・LRの羽状縄文、37は無節Lが施される。3・4は口縁部に段が設けられるもので、口縁端部上にも単節RLが施される。5は口縁端部に幅狭な区画文状の貼付文が付される。6は上げ底の底部で、外面にも単節LRが施される。8は口縁部に設けられた段以下に連続刺突文が巡らされよう。10は斜位の刻み目を有す隆起線が認められる。13は羽状縄文にはならないが無節R・Lが施されるもので、末端を折り曲げ縮状となった部分の軌跡が還付末端に近似している。37は口縁端部が刃状を呈し、外反する。口縁部にはやや湾曲した集合沈線文が施される。14~17は貝殻背圧痕文が施されるものである。14は緩やかな双頭状の波状口縁で、外面に貝殻背圧痕文、内面に貝殻条痕文が施される。17は底部外面にも貝殻背圧痕文が施される。

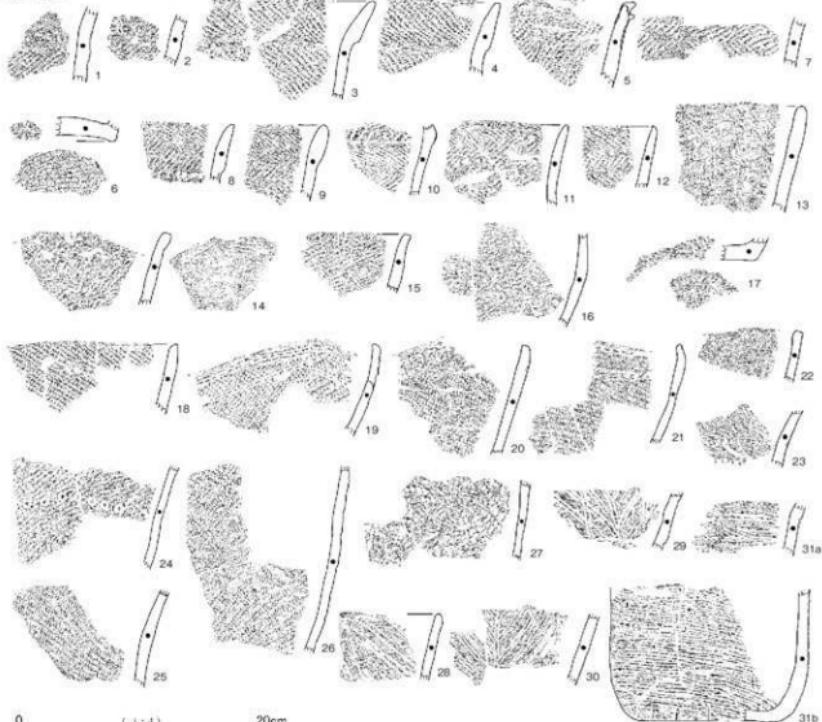
18~33は黒浜式である。18~27は縄文が施されるもので、18・25・26は単節RL、21・23は0段多条RL、22・24はLRである。19・20・27は附加条縄文で、19・20は附加条2種、27は附加条軸縄不明の羽状縄文である。19~21は波状口縁で、19・20は地縄文上、21は磨消帶を伴って2条の結節沈線文が口縁端部に沿った形で施される。23は胴部中位にC字結節沈線文で区画された磨消帶が巡らされる。24は地縄文上に円形竹管刺突文が巡らされる。28~31bは沈線文が施されるもので、28~30は平行沈線文で葉脈文が描出される。31a・31bは同一個体で、口縁部を無文とし、以下に密に重なった平行沈線文が横位に施される。



-SI-162-



-SI-163-



第59図 SI-162・SI-163 (2)

以上の土器は覆土中層～上層で出土したものである。このうち花積下層式と黒浜式が質量とも拮抗しているが、より新しい黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-164 (14) SI-033 (第60図、図版8・18・44)

台地北西端寄りのAA22-87グリッドに位置する。北西端でSI-171と重複するが、新旧関係は不明である。形状は楕円形であり、規模は南北5.1m、東西4.2m、深さは最大で36cmである。入口部は南側であろう。炉は中央北側のP1とP2の間にあり、焼土範囲は55cm×50cmに及ぶが、屑が薄く掘り込みもない。ピットは6本確認され、南端中央のP5を除けば東西に分かれるように分布し、南西端のピットが確認でききないがこれらは柱穴としてよいだろう。P5は出入口に伴うものであろうか。深さは炉の両脇P1・P2が80cm台、その南のP3・P6が約50cmと揃っており、意図的な所産であろう。またP4は64cm、P5は40cmである。床面全域がほぼ平坦である。覆土は壁下に明褐色土が流れ込んだ後、褐色土、暗褐色土と水平に堆積し、多少波打った状況である。

遺物量は中程度で、中央部に偏っていた。土器以外には石鏃未成品2点、楔形石器、打製石斧（第97図204）、磨製石斧（第101図225）各1点、磨石類2点、台石2点（第113図290・291）、剥片7点、両極剥片5点、碎片6点を出土した。

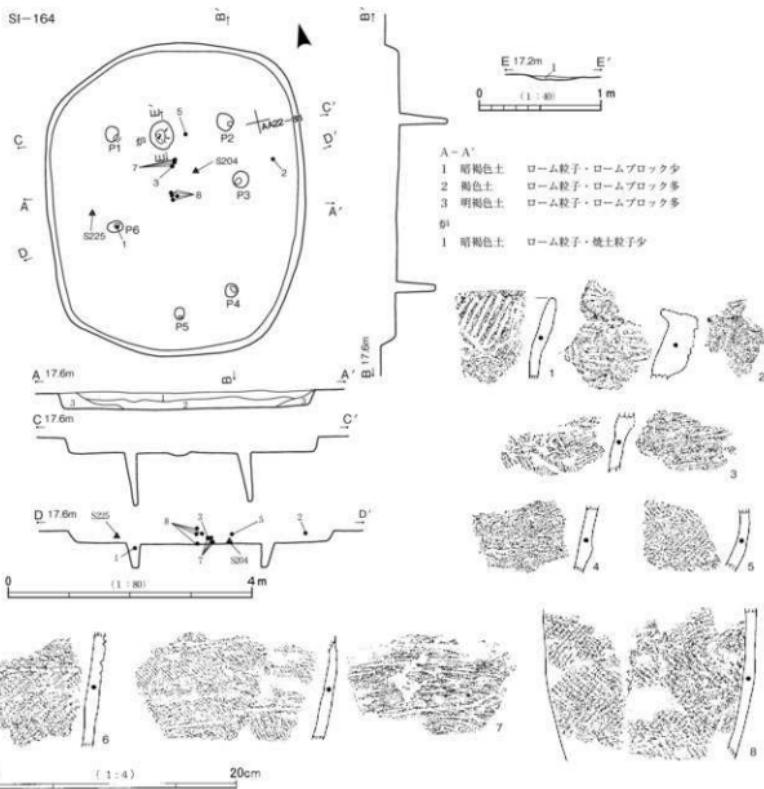
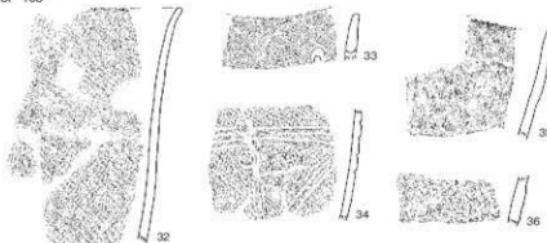
土器は8点を図示した。1は口縁部に集合沈線による鋸歯状文が施され、以下に単節LRが施される。P6上面から出土している。2は欠損しているが、口縁部の波頂部に中心から放射状に沈線文が施される円盤が付されよう。中軸には刻み目が付される隆起線が垂下し、両側には横位に沈線文が施されるが、残存部から察するとさらに鋸歯状文が施されると思われる。3は無節L・Rによる羽状縄文が施される。2・3の内面には条痕文が施される。4は単節LRが施され、下半は無文である。5は単節RL・LRの羽状縄文が施される。6は口縁部にL+L+R+Rの4本を一組とした撚糸側面圧痕文が、口縁部下端には連続刺突文が巡らされよう。以下には単節RL・LRの羽状縄文が施される。7は細かな無節Rが施されるが、末端の変化により軌跡がS字状結節となっている。施文の重なりがないところで観察すると、施文帯は概ね3cm程度となる。内面に条痕文が施される。8は単節RL・LRの羽状縄文が施されるもので、推定最大径17.2cm、現高12.4cmを測る。

以上は花積下層式で本遺構の帰属時期としたい。

SI-165 (14) SI-034 (第61図、図版8・44)

台地北西端寄りのAA23-18グリッドに位置する。形状は多少南西部が狭まる小判形であり、規模は南北7.2m、東西5.2m、深さは最大で35cmである。入口部・炉とともに不明である。ピットは6本確認され、P3が深さ25cmであるほかは深さ40cm～70cmで、左右に対応するような配置状況からいはずれも柱穴としてよいのではなかろうか。床面は南側壁から1mほどが3cm～5cm高めではあるが、それ以外はほぼ平坦である。覆土は壁下に黄褐色土が堆積した後は、褐色土、暗褐色土、暗褐色土が水平に堆積する。南西部の約1.2mの範囲に、ハイガイ・ハマグリなどからなる厚さ約20cmの貝層が見られる。なお、貝層の形成は床面から約15cm上の暗褐色土内である。

遺物は北西部壁寄りに集中箇所がみられるほかは、疎らな分布状況で、中央～南東部のようにまったく無遺物の範囲もあり、この遺跡内では最も不規則な様相といえる。土器のほか土製円板（第89図8）、土器片錐（第89図26）各1点、石器は石鏃1点（第90図38）、石鏃未成品8点（第92図101）、楔形石器6点（第94図154）、貝サンプル中から出土した石匙1点（第95図182）、磨石類・側面調整礫各2点、剥片13点、両



第60図 SI-163 (3)、SI-164

極剥片3点、碎片36点を出土した。土製円板は阿玉台式、土器片錐は黒浜式土器を利用している。

図示できた土器は7点である。1a・1bは同一個体で、口縁端部上に単節LRが施される。以下は単節RL・LRの羽状繩文が施されるもので、横帶区画法は等間隔施文である。底部付近は被熱により脆弱化している。2は無節R・Lが施されるが、無節Lでは末端の変化により軌跡がS字状結節となっており、施文の重なりがないところで観察すると、施文帯は4cm程度となる。3・4は単節RL・LRの羽状繩文が施される。3は貝サンプル中から出土したものである。5は底面付近では単節RLが施され、上げ底の底部外面には単節RL・LRの羽状繩文が施される。6は貝殻背圧痕文が施される。以上は花積下層式である。

7は細沈線が斜格子状に施される。器厚が5mmと薄いが堅緻で、細かい砂礫が多く含まれる。花積下層式併行とされる東海地方の木島式である。

以上の内容から花積下層式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-166 (14) SI-035 (第62図、図版8・44)

台地北西端寄りのBB23-30・40グリッドに位置する。形状は多少歪んだ長方形であり、規模は南北7.4m、東西5.7m、深さは最大で30cmである。入口部は不明である。炉は中央やや北東寄りに2か所(炉A50cm×35cm、炉B55cm×35cm)あるが、床面が焼けている状況であり、掘り込みはほとんど認められない。なお、調査記録では南側の炉Bの被熱が強いという。ピットは5本確認され、中央北端のP1を除けば、四隅近くの対応する位置にあり柱穴と考えられる。深さはまちまちで、20cm~40cmである。床面は南西部一帯が6cm~7cmほど高めであった。覆土は壁下から周縁にかけて明褐色土が堆積した後、ほぼ水平に褐色土、暗褐色土、褐色土が堆積する。南東部約40cm四方の範囲で、ハマグリ、サルボウなどからなる貝層の堆積が見られる。

遺物は全体に疎らな出土状況であった。土器以外に磨石類1点(第107図256)、石皿1点、台石2点、側面調整礫1点(第119図316)、剥片3点、両極剥片1点、碎片4点、原石1点を出土した。

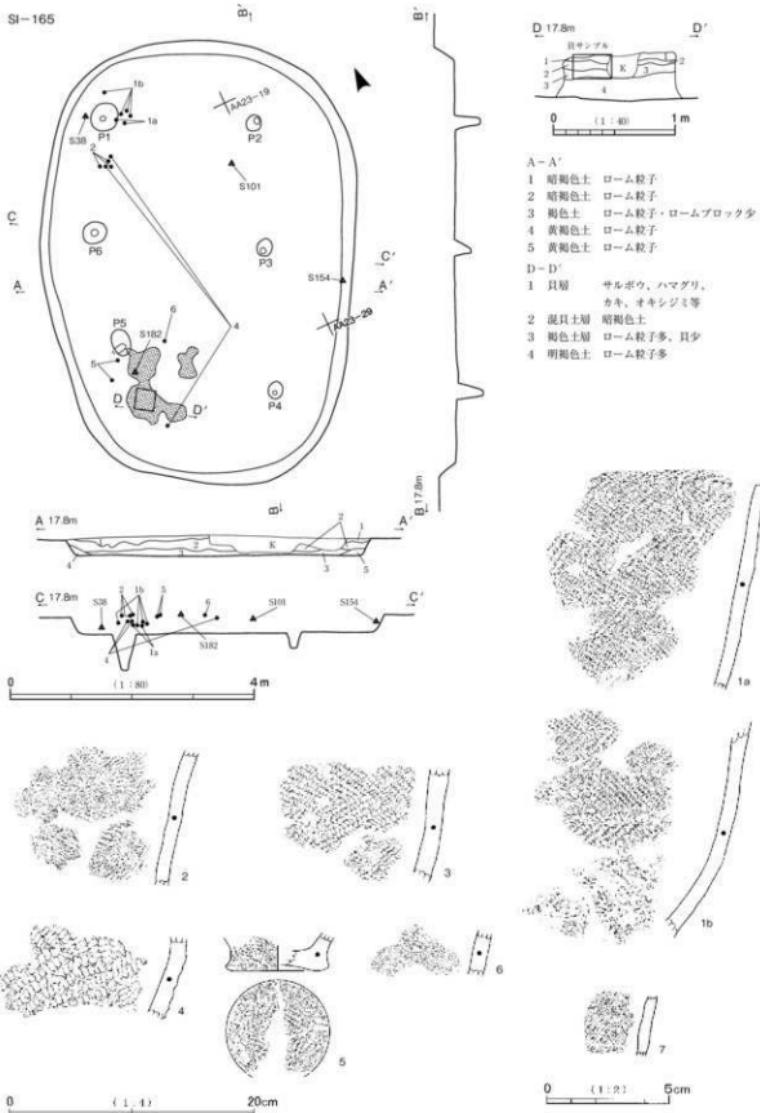
土器は18点を図示した。1~16は黒浜式で、1~12は繩文が施されるものである。1~8は附加条繩文が施され、1・2・8は附加条軸繩不明、3・4は附加条1種、5~7は附加条2種である。9・10は無節L、11・12は単節RLが施され、11では末端の変化により軌跡がS字状結節となっており、施文の重なりがない。9は地文の無節L上に連続刺突文が巡らされよう。1・2は波状口縁で端部にそれぞれ無文帯を設けるが、1は1条の平行沈線文、2は2条の平行沈線文+円形竹管刺突文で区画している。13~15は沈線文が施されるものである。13は平行沈線文が斜格子に施される。14は横位沈線文間に大形の波状沈線文が複列充填されるので、いずれも平行沈線で描出している。黒浜式併行のいわゆる植房式に比定されよう。15は胴部中位の平行沈線文が2条施される。16は無文である。

17・18は花積下層式である。中央が窪む突岸状の隆起線の上部は無文、下部にはR+L+Rの3本を一組とした撚糸側面圧痕文が曲線的に施される。

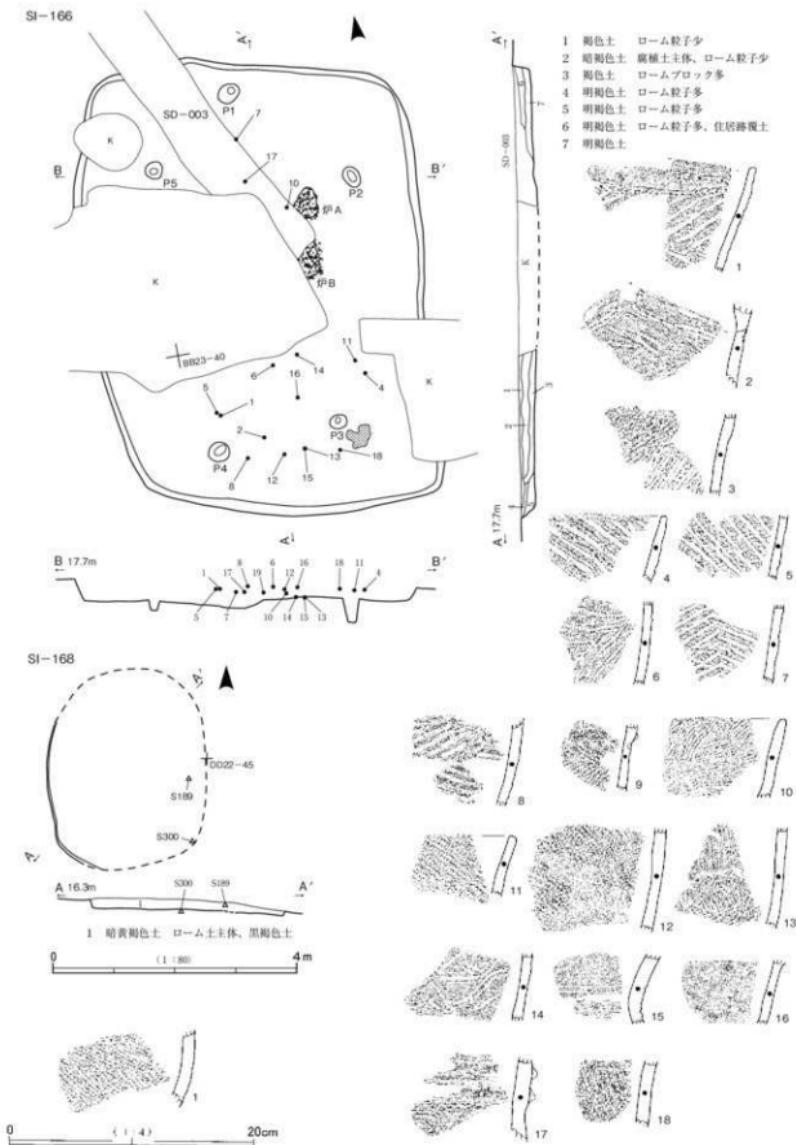
以上のうち質量とも安定し、かつ時期的にも新しい黒浜式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-168 (16) SI-001 (第62図、図版9・45)

台地北西部のDD22-44グリッドに位置する。平面形状は梢円ないし小判形であり、規模は推定で、長径3.4m、短径2.7m辺りになろうか。方位はほぼ南北で、炉・柱穴は確認できなかった。深さは最も遺存のよいところでおよそ15cmであった。覆土は暗黄褐色土の單一層である。掘り込みが浅く、しかも皿状であり、柱穴や炉も当初から設けられない、集落の外れに位置する仮設的な住居といえよう。



第61図 SI-165



第62図 SI-166、SI-168

出土遺物はわずかで、土器のほか石錐（第96図189）・石錐未成品各1点、スタンプ形石器1点（第116図300）、二次加工ある碟・剥片・削片各1点である。このほかに旧石器時代石器が混入していた。

図示できた土器片は1点である。1は諸縄式で胎土中に纖維は含まれないが、細かい砂礫を多く含む。単節RL・LRの羽状縄文が施される。

以上の内容は時期決定要素に乏しく、本遺構の帰属時期は不明とせざるを得ない。

SI-169 (16) SI-002 (第63図、図版9・18・45)

台地北東部のDD22-23・33グリッドに位置する。5本の柱穴を確認し、このうち4本が長方形に配置され、P1から土器が出土したため、竪穴住居と判断した。平面形状は不明である。柱穴間は長軸長4.0m～4.3m、短軸長3.3m～3.4m、規模は他の類例から長軸長7.0m、短軸長5.5m辺りになろうか。方位は炉の位置が不明ではあるが、南北方向と思われる。柱穴内の覆土は共通しており、黄褐色土が主体で、上層は縮まり、下層は縮まりを欠く。中から土器を出土したことと合わせて、住居廃絶後に抜柱していたと考えられる。

遺物は土器のほか石錐未成品1点（第96図194）が出土した。

図示できたのは柱穴から出土した1のキャリバー形の深鉢の口縁部1点で、1/3周が遺存する。推定口径14.2cm、現高12.4cmである。口縁部の下端区画線は不明瞭である。口縁部には凹線を伴う隆起線により大形渦巻文、曲線文が巡らされよう。胴部は単節LRが縦縞に施される。加曾利E I式である。

本跡の帰属時期は加曾利E式とみられる。

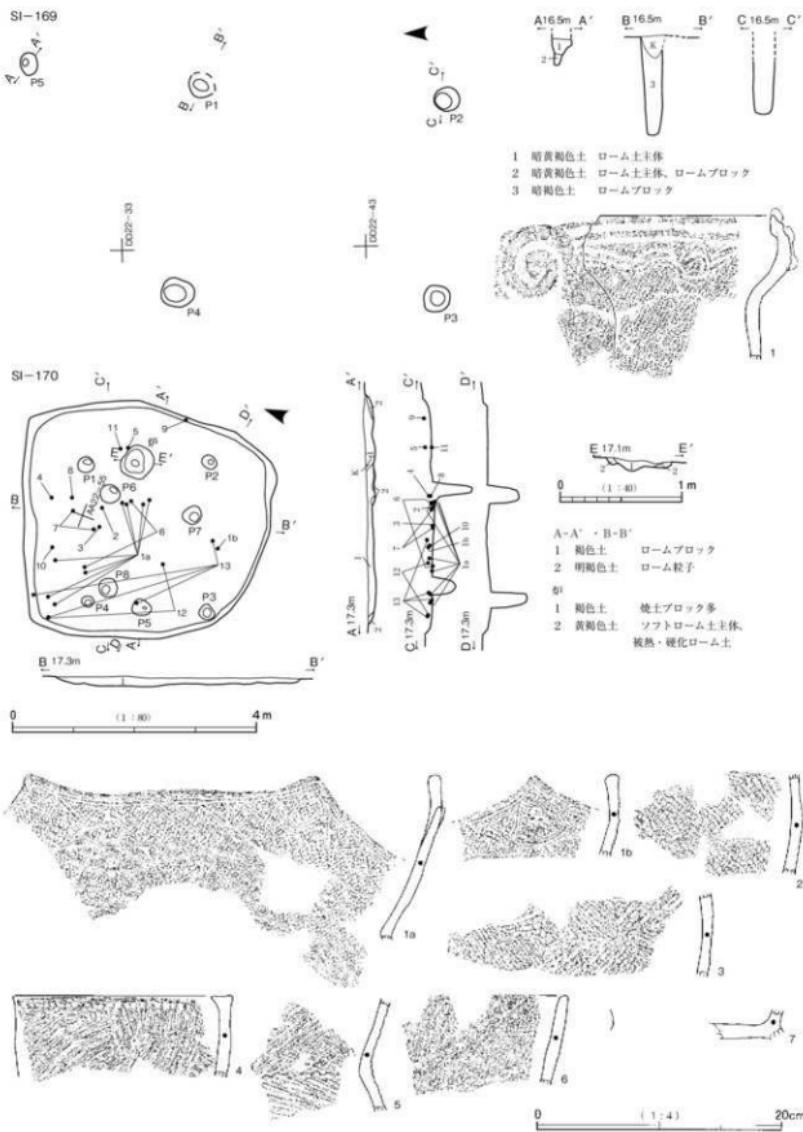
SI-170 (17) SI-002 (第63・64図、図版9・18・45・46)

台地北西部のAA22-54・55グリッドに位置する。形状は南側半分が楕円形、北側半分が矩形となる変形型であり、壁の遺存は不良であった。規模は東西3.9m、南北4.0mであり、方位は北東である。炉は東側中央壁寄りにあり、規模は径約1mである。ピットは8本確認されたが、その位置関係や深さから深さ20cm前後のP1～P4が柱穴、深さ57cmのP5が出入口施設に相当するかと思われる。このほか内側に深さ30cm～50cmのP6～P8があるが、柱穴かどうか特定はできない。床面は多少の凹凸がある。覆土は床面近くの褐色土を記録するのみである。

遺物は覆土が薄いということもあり、疎らな状況であった。両極剥片1点、碎片5点を含んでいた。

土器片13点を図示した。土器の1a～6・13は縄文が施されるもので、1a～2は単節RL、3は単節RL・LRの羽状縄文、4・13は附加条軸縄不明、5は附加条1種と附加条軸縄不明の羽状縄文、6は無節Lである。1a・1bは同一個体で、波状口縁を呈す。口縁端部に沿って半截竹管内側による平行沈線文が巡らされ、この平行沈線文に同一施文具で表出した大振りの鋸歯状沈線文が付着する。1bの波頂部下は弧状附加となる。3では折り曲げ瘤状となった部分の軌跡が還付末端に近似している。4は口縁端部上が幅広く平坦で、やや内傾する。端部下には連続刺突文が巡らされる。5は羽状縄文の軸上、くの字状の屈曲部にコンバス文が巡らされる。7は無文で、台付鉢の底部である。13はやや内傾する器形で、口縁端部に平行沈線を用いた幅広な刷毛目状沈線が施される。8～12は沈線文が施されるもので、8・11は一本引き沈線、他は平行沈線である。8～10は葉脈文が描出される。11・12はやや崩れた箇所もあるが、斜格子文が施される。

以上は黒浜式で本遺構の帰属時期を示すものであるが、1a・1b・13の文様には岡山II式の遺物が認められる。



第63図 SI-169、SI-170 (1)

SI-171 (17) SI-003 (第64図、図版9)

台地北部のAA22-77グリッドに位置する。南隅がSI-164と一部重複するが覆土の遺存が悪く新旧関係は不明である。形状は隅丸長方形であり、壁の遺存は不良であった。規模は長軸長3.7m、短軸長2.8mであり、方位は北東である。炉は北東壁寄りにあり、掘り込みはなく、ロームの床面がそのまま赤化している状態であった。規模は長径65cm、短径55cmである。ピットは11本確認されたが、規則性はなく、深さも20cm~50cm台とまちまちである。床面は多少の凹凸があるがほぼ平坦であった。覆土は壁付近に褐色土、中央部に暗褐色土の堆積が見られた。

遺物は少量で、石器は楔形石器1点、打製石斧1点（第98図205）、剥片6点、碎片3点を出土した。

出土遺物が少なく図示可能な土器がなかったため、本遺構の帰属時期は確定できないものの前期に属する可能性が高い。

SI-172 (17) SI-004 (第64図、図版9・46・47)

台地北部のAA22-37・38グリッドに位置する。形状は小判形といってよく、壁の立ち上がりは緩やかである。擾乱部分はあるが、規模は長軸長4.6m、短軸長3.7mと推定され、方位は北西である。南東に壁の立ち上がりが一部確認され、拡張の可能性があるとしているが、擾乱もあり断定できない。炉は北西壁寄り中央にあり、約10cmのローム土の床面がそのまま赤化している状態であった。赤化範囲は長径90cm、短径50cmほどである。ピットは12本確認され、P1~P3が位置や深さが40cm半ば~50cmであることから柱穴になるかと思われるが、対応する南東隅には該当するようなピットはない。また、P4・P5も対応する位置にあり、柱穴の可能性があろう。床面は擾乱の及んだ箇所が多く特記し得ない。覆土は黄褐色土が壁際を浅く埋めた後、褐色土が中央部付近まで緩やかに堆積し、最後に暗褐色土が一面に堆積するという状況であった。遺物量は少ないが、石器は石錐未成品2点、楔形石器2点、打製石斧1点（第98図206）、敲石1点、台石1点、剥片4点、両極剥片2点、碎片4点、原石3点を出土した。

土器は9点を図示し、小破片3点を写真図版に掲載した。1~6、写真図版47-10・11は黒浜式である。1~4は沈線文が施されるもので、1が半截竹管内側を用いた平行沈線であるほかは、ヘラ状工具による一本引き沈線である。1は葉脈文が施され、2~4は斜沈線文が施される。5・6は同一個体で、半截竹管内側を用いた連続刺突文が密に施される。5は波状口縁を呈すと思われ、波頂部下に焼成前の穿孔が認められる。孔の周縁には穿孔時に生じた粘土のはみ出しが残る。10・11は附加条2種が施される。

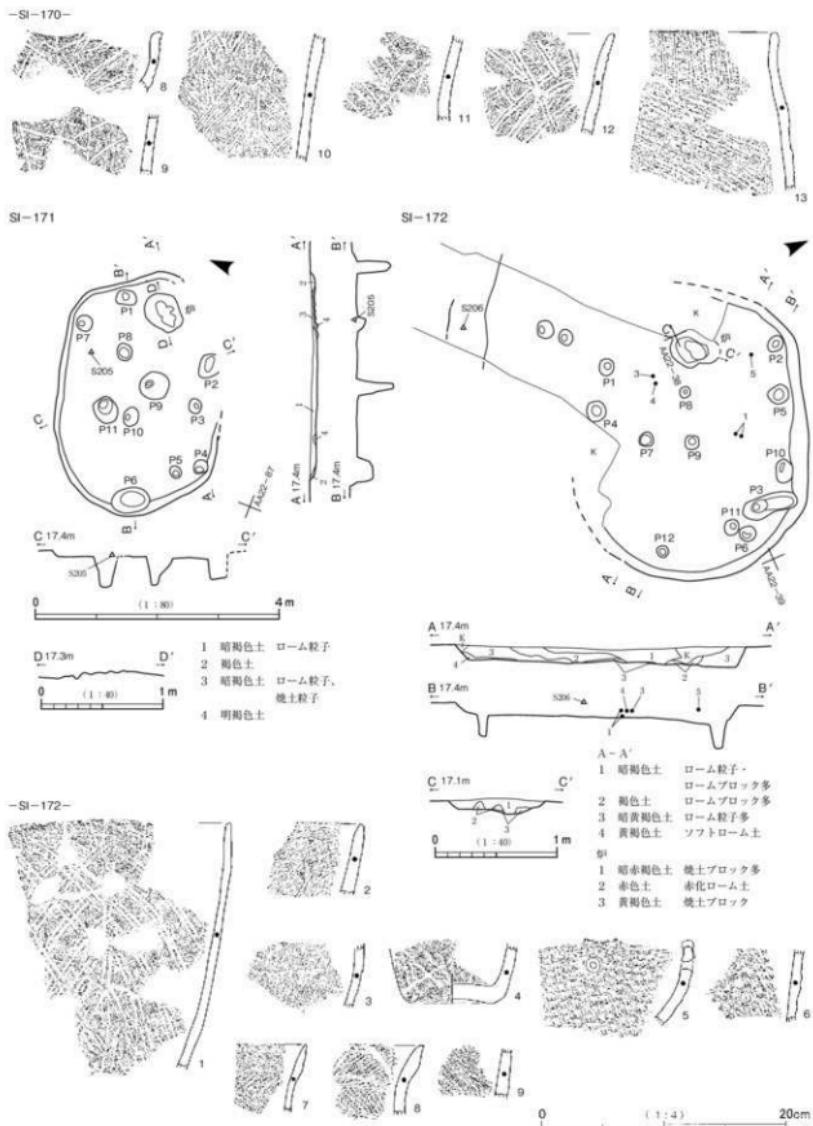
写真図版47-12は黒浜式併行とされる大木2a式で、網目状撚糸文が施される。

7~9は花積下層式である。7・8は口縁部に段を有し、端部の断面形が刃状を呈すもので、8はやや太い沈線が鋸歯状文を描出すると思われる。いずれも単節RL・LRの羽状繩文が施される。9は貝殻背压痕文が施される。

出土量は少ないと出土位置を記録したものでは、1が床面直上から覆土中層の出土、他の黒浜式も覆土中層出土である。本遺構の帰属時期は黒浜式としておきたい。

SI-173 (17) SI-007 (第65・66図、図版9・47・48)

台地北東部のAA22-09・19グリッドに位置する。SI-174と重複するが、新旧関係は不明である。形状は隅丸方形であり、規模は縦横ほぼ4m、深さ約10cmの小形住居である。方位は不明であるが、炉の位置からして北東になろうか。炉は北寄り中央にあり、規模は径約80cmほどであるが、底面は浅い赤化面にピット状の箇所など一様ではない。中央と南側縁に土器が遺存し、とりわけ南側は据え付けたような状態



第64図 SI-170 (2), SI-171, SI-172

であった。ピットは8本確認され、P1～P6がほぼ等間隔に壁寄りに配置されることから、柱穴と考えられる。深さは20cm～50cm台である。床面は軟弱であり、ほぼ平坦であった。覆土の状況は不明である。

遺物量は中程度で、土器のほかに石錐（第90図43～45）・石錐未成品・楔形石器各3点、磨石類1点、台石1点（第113図292）、剥片29点、削片2点、碎片58点、原石1点を出土しており、石器製作跡の可能性がある。

土器は15点を図示した。1・2は断面形が刃状を呈し、やや外反する口縁部に、重疊する沈線による入組繩齒状文が施される。1は突起状の刻み目付き隆起線が垂下し、2は段以下に単節RLが施される。3～5は貝殻背圧痕文が施されるものである。3は突帯状の隆起線で区画された狭小な口縁部が無文となり、胴部以下には単位の短い無節R・Lが施される。貝殻背圧痕文はその下端に擬繩文として斜位に施される。5は胴部に単節RL・LRの羽状繩文が施され、上げ底の底部付近には貝殻背圧痕文が擬繩文として斜位に施される。6～15は単節RL・LRの羽状繩文が施されるもので、6～11では羽状繩文の横帯区画法が等間隔施文となる。6～8は口縁端部が肥厚または段状に形成されるものである。6は1/4周が遺存し、推定口径27.0cmを測る。9では他の条を以て縛り留めた原体末端の軌跡が認められる。13は胎土中に纖維以外に雲母などの細かな砂礫を含む。14a・14bは炉の南側から出土した。胴部が一周していたが火熱を受け遺存状態が悪く、一部の破片を図示した。15は底部外面にも単節RL・LRが施される。

以上は花積下層式で本遺構の帰属時期としたい。

SI-174 (17) SI-008 (第65・66図、図版9・48)

台地北東部のBB22-20・30グリッドに位置する。SI-173と重複するが、新旧関係は不明である。形状は南側が膨らむ梢円形である。規模は長径約5.8m、短径は最大で5m、深さは10cm前後で、方位は不明である。炉は不定形ながら、その最大範囲は1.4m×0.7mほどである。中央部と南側一部がよく焼けており、掘り込みはほとんどない。ピットは9本確認され、P1～P6が配置や深さが18cm～40cmであることから柱穴と思われる。床面はほぼ平坦であった。覆土は壁寄りに黄褐色土が堆積した後に遺物を多く含む暗褐色土が埋積する。南側から北側に行くに従い薄くなるので、南側からの投棄を示すものであろうか。

遺物量は中程度で、土器のほか石錐8点（第91図46～51）、石錐未成品9点、楔形石器13点、二次加工ある剥片3点、磨石類2点、台石1点（第114図293）、石錐1点（第96図299）、側面調整蹠1点、石核1点、剥片54点、両極剥片11点、削片4点、碎片104点、原石3点を出土し、石器製作跡の可能性がある。

土器は9点を図示した。1～6は花積下層式である。1～4・6は繩文が施されるもので、1～3は単節RL・LRの羽状繩文、4・6は単節LRである。1は折り返し口縁で、突起が付される。列点状の刺突文が羽状繩文の中軸上に巡らされる。5は貝殻背圧痕文が施される。

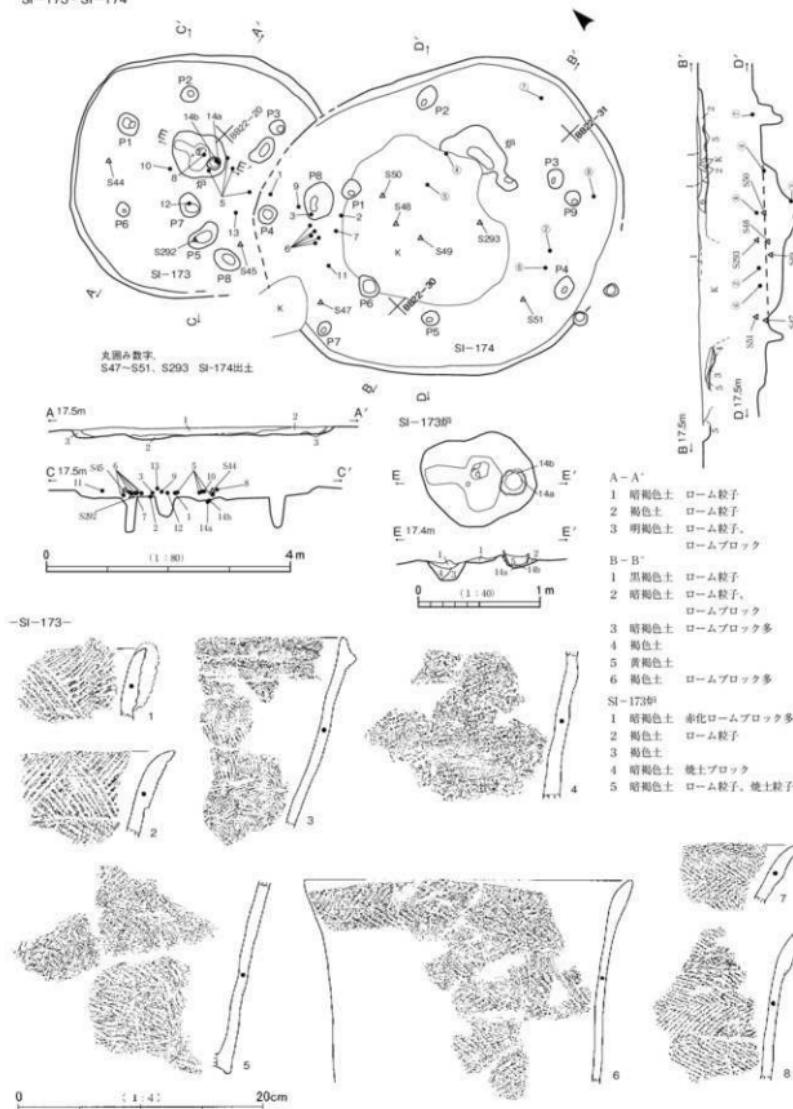
9は花積下層式併行とされる東海地方の木島式である。条線文が施され、器厚は薄く堅緻である。

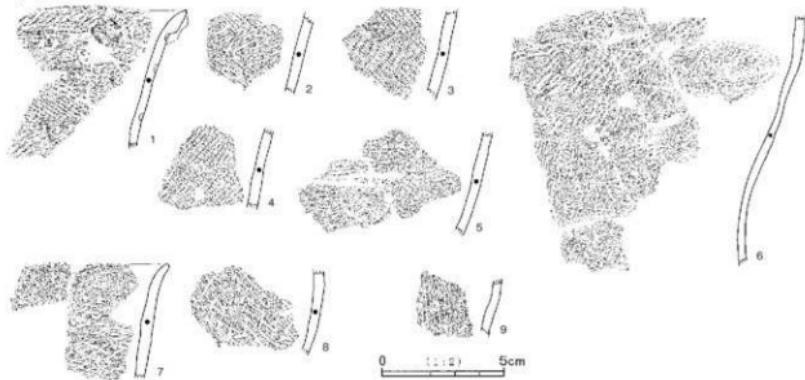
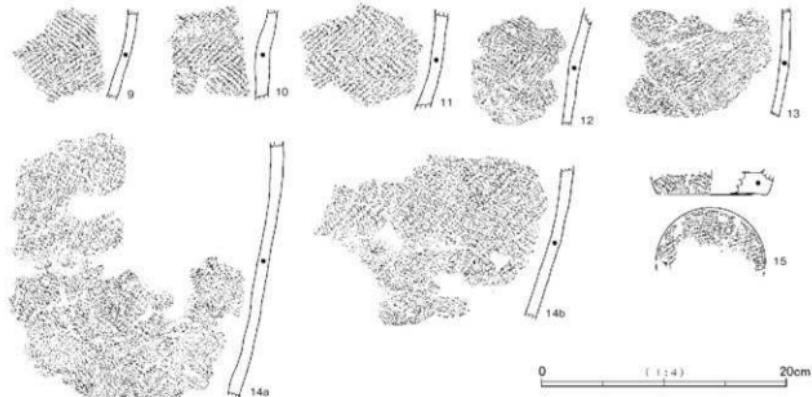
7・8は黒浜式併行とされる大木2a式で、網目状撲糸文が施される。7の口縁端部には不明瞭であるが単節LRが施されよう。

本遺構は中央部に倒木痕による搅乱があり、立ち上がりも浅く遺存状況は不良であるが、質量ともやや安定している花積下層式を本遺構の帰属時期としたい。

SI-176 (17) SI-011 (第67図、図版10・18・49)

台地北部のCC22-11・12・21・22グリッドに位置する。遺存状況は不良であり、わずかに覆土範囲と炉を確認したにすぎず、形状等は不明である。規模は最大で長軸長5.0m、短軸長4.1mまでは確認できたが、





第66図 SI-173・SI-174 (2)

さらに広がるかもしれない。炉は多少細長い楕円形であり、規模は長径1.15m、短径70cmである。浅い皿状の窓み内に焼土を多量に含む暗赤褐色土が堆積しており、底面に約10cmの厚い被熱層が形成されていた。ピットは4本確認されたが柱穴かどうか断定できない。床面の状況等も不明である。覆土は暗褐色土と黄褐色土が確認され、ブロック状の混土貝層も2か所あるが、小規模であった。ハマグリを主体とする。

遺物は南側で大形の土器片が出土した。このほか黒浜式土器の土器片錐1点(第89図28)、石器類は打製石斧1点(第98図207)、石皿1点(第115図285)、剥片1点を出土した。また、図示しなかったが貝化石(図版68-68)が混入していた。

土器は9点を図示した。1~5は縄文が施されるもので、1は0段多条LR、2は単節RL、3は附加条1種の羽状縄文、4は0段多条RL・LRの羽状縄文、5は単節LRである。1は上半部の1/2周が遺存し、

内面に凹凸が残されている。推定口径31.4cmを測る。6～8は沈線文が施されるものである。6は一本引き沈線で粗く葉脈文が描出される。7a～8は平行沈線で葉脈文が描出される。7a・7bは同一個体で、基幹線上に円形竹管刺突文が加えられる。9は胎土中に纖維が含まれず、雲母など細かな砂礫が多く含まれる。単節RLが施される。

以上は黒浜式で本遺構の帰属時期としたい。

SI-177 (17) SI-013 (第68図、図版10・49)

台地北端部のAA22-47・57グリッドに位置し、北西約半分が攪乱により失われている。遺存部からすると、形状は楕円形にならうか。規模は長径4.8m、短径1.9m以上、深さは最大でも15cmにすぎない。入口部は不明である。炉は北東壁寄りに位置し、規模は30cm×20cmほどに及ぶが、痕跡といったほうが適当である。ピットは8本確認された。P7・P8を除いて壁際近くに並んでいることから、柱穴群と思われるものの、半分のみの状況で断定はできない。いずれも深さ20cm～30cmまでの浅いものである。床面は概して軟弱かつ平坦であった。覆土は壁近くに黄褐色土が堆積後、明褐色土次いで褐色土が水平堆積する。

遺物は疎らで、量的にも少ない。図示できた土器は1点のみで、残りは小破片であった。石器類は石錐1点（第96図190）、磨石類3点、石皿2点、両極剥片1点、削片1点、碎片1点を出土した。

土器の1は花積下層式で、口縁端部に巡らされる隆起線と端部上に刻み目が付される。隆起線以下にはL+Rの異方向2本を一組とした撚糸側面圧痕文が、横位に密接して施される。内面には単節LRが施される。

出土位置は床面直上であるが、出土位置が記録され図示可能な土器が1点であるため、遺構の帰属時期は花積下層式の可能性があるという記載に止めておきたい。

SI-178 (17) SX-001 (第68図、図版10・49)

AA21-89・99グリッドに位置する。土器を作った炉を確認し、周辺を精査したところピット3本を確認したため、壁の立ち上がりを確認できなかったものの住居跡と判断した。炉は楕円形で長軸がほぼ南北を向く。長径72cm、短径60cm、皿状に窪み深さ20cmである。長軸の南側に深鉢の口縁部が埋め込まれ、北側に強く火を受けた径40cmの範囲が確認できる。ピットの深さはP1が44cm、P2・P3は16cmであった。

図示したのは炉出土の土器1点である。調査時には口縁部一周を確認できたが、火熱を受け脆くなってしまおり、破片の一部を図示できたにとどまる。1は反燃LLが施される。胎土中に纖維を含むことから前期前半に比定できるが、細別時期は特定できない。出土位置は炉内であるが、図示可能な土器がこの1点であるため、遺構の帰属時期は前期前半細別型式不明としておきたい。

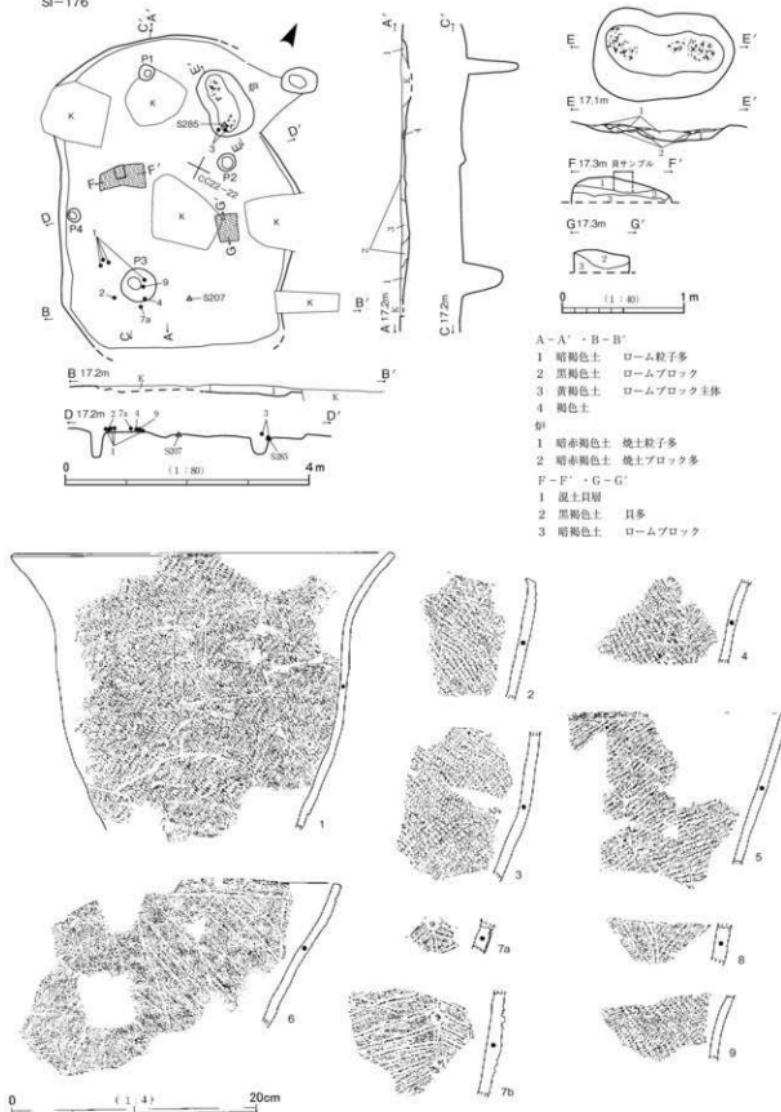
SI-179 (18) SI-014 (第68図、図版10・49)

台地北東部のCC22-06グリッドに位置する。形状は、攪乱により失われた部分があるが、歪んだ長方形である。規模は長軸長5.3m、短軸長は推定で3.4mにならうか。深さは壁の残りが悪く10cm以下であった。方位は不明で、炉は確認できなかった。ピットは4本確認され、深さはP1・P2が34cm・38cm、P3・P4が20cm・18cmと、位置関係や深さがまちまちで柱穴とは断定できない。このほかに中央西寄りに深さ約6cmの円形の窪みが認められた。床面はほぼ平坦であり、硬化は見られない。覆土はその遺存状況から記録に至らなかつた。

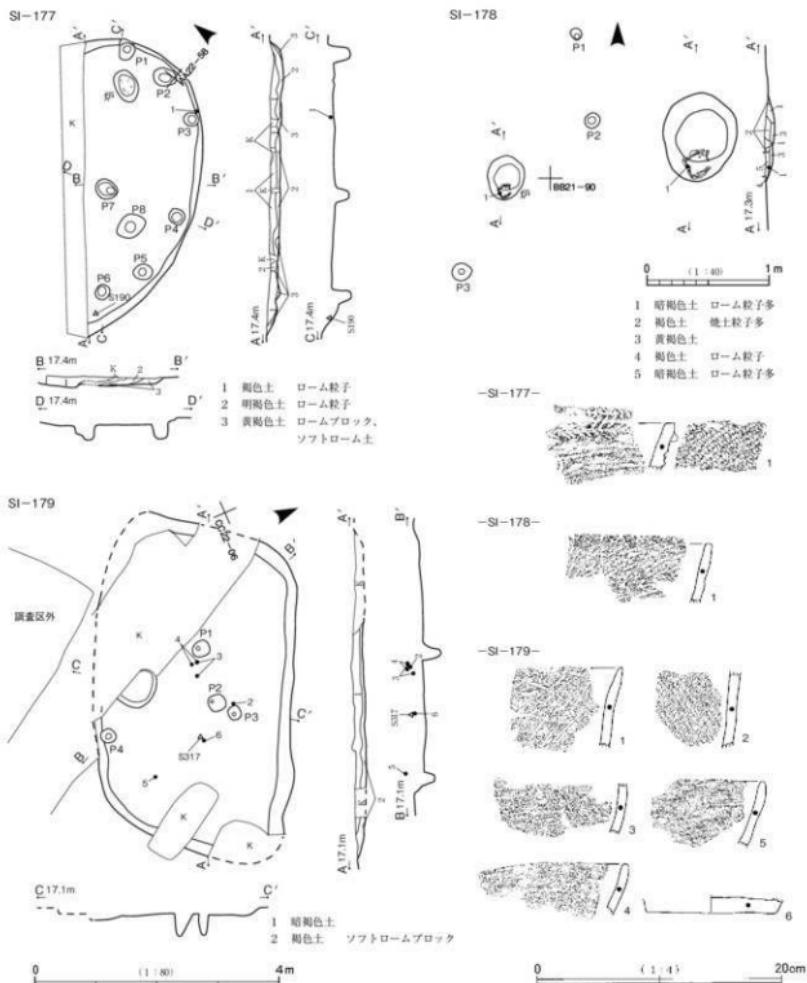
遺物は覆土上面から土器片が疎らに出土した。石器は側面調整蹠1点（第120図317）と剥片1点である。

図示できたのは破片6点である。1は一本引きの沈線により、口縁端部から粗い斜格子文が施される。2・

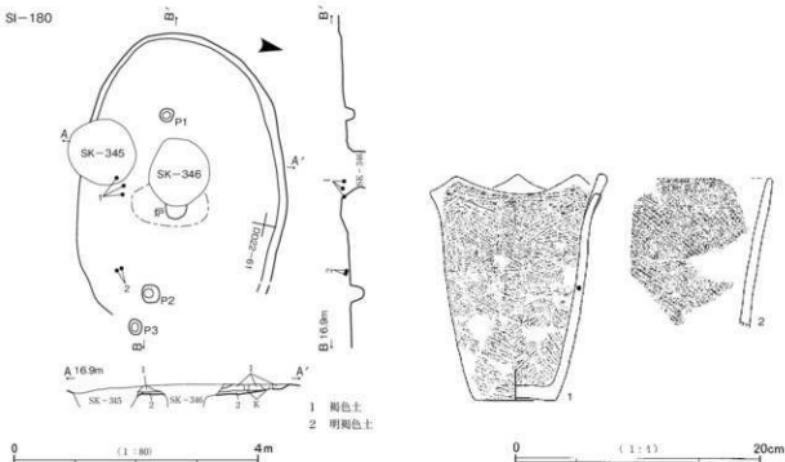
SI-176



第67図 SI-176



第68図 SI-177, SI-178, SI-179



第69図 SI-180

SI-180 (18) SI-015 (第69図、図版10・18・49)

台地北東部のDD22-60・61グリッドに位置する。中央部にSK-345・SK-346が重複し、いずれも当遺構より新しい。東側は攪乱により失われ、残存部や残存したピットなどから楕円形と推測される。規模は長径約5m、短径は推定で3.4mほどと推測される。深さは10cm前後すぎない。方位は不明で、炉は中央部にあり、規模は径約35cmである。ピットは3本確認されたが、その位置関係や深さが8cm・15cm・22cmとまちまちで柱穴とは断定できない。床面は多少凹凸があり、覆土は明褐色土次いで褐色土が堆積していた。

遺物は炉の南側床面上で遺存状態のよい土器を出土した。石器類は出土していない。

土器2点を図示した。1は2/3が遺存する深鉢である。4単位の外反する波状口縁で、底部はやや上げ底となる。全体的に平行沈線文による文様が施されるもので、胴部中位に巡らされる横位の平行沈線文によって分割された上下帯に、重疊する鋸歯状文が施される。波頂部における推定口径は14.5cm、底径6.6cm、器高18.5cmである。2は地文に附加条2種が施される。口縁部は平行沈線文と、一部C字結節沈線文によって区画され、内部に平行沈線による鋸歯状文が附加される。胎土中に纖維がほとんど含まれず、白色粒子と砂粒を多く含む。

以上は黒浜式で本遺構の帰属時期としたい。

第2節 土坑類

SK-281 (11) SK-001 (第70図、図版11)

台地北西端のAA24-49グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面は箱形である。規模は長径1.2m、短径1.0m、深さは最大で25cmである。覆土は四レンズ状に褐色土ないし暗褐色土が堆積後、中央に径約

40cm、厚さ10cm弱の貝層が形成されているが、サンプル採取していない。

図示できる土器はなく、時期は断定できない。

SK-282 (12) SK-001 (第70・81図、図版11・19)

台地北西端のAA23-74グリッドに位置する。北西の住居群外縁部からさらに8mほど西側先にあり、単独で存在する土坑である。平面形状はアーモンド形、断面は浅い箱形である。規模は長軸1.7m、短軸1.3m、深さは最大で20cmである。覆土は暗褐色土と暗黄褐色土が不規則に入り込んでおり、中央から破壊したような状態で土器が出土するなど、人為的な要素が窺える。

遺物は土坑中央の床面近くから土器1点を出土した。このほかに剥片1点を出土している。土器の1は大形の深鉢で、口縁部と底部を欠損し、胴部の2/3周が遺存している。最大径35.7cm、現高20.9cmを測る。一端がZ字状結節となる単節LRが施される。火熱を受け、器面の荒れが著しい。諸磯a式で、土坑中央の底面直上から出土していることから本遺構の帰属時期としたい。

SK-283 (12) SK-002 (第70図)

台地北西端のZ23-19グリッドに位置し、SI-116と近接する。平面形状は楕円形で断面は浅い椀形である。規模は長径1.7m、短径1.5m、深さは最大で18cmである。周縁部から隙々に埋没したものと思われる。

遺物は覆土中から縄文土器の破片2点を出土したが、図示できるような遺物はなく時期は確定できない。

SK-285 (12) SK-004 (第70図、図版3)

AA23-31グリッドに位置する。SI-113の調査で確認し、SI-113の施設とも考えたが、土層断面観察で本土坑が住居を壊しており、別遺構として取り扱うこととした。平面形状は楕円形で、長径1.1m、短径0.95m、深さ30cmである。覆土は上から黒色土、暗褐色土、褐色土がレンズ状に堆積していた。

出土した遺物はなく、時期は判断できなかった。

SK-286 (13) SK-001 (第70図、図版11)

台地北西側のBB24-14グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面は箱形である。規模は長径0.7m、短径0.6m、深さは17cmである。覆土の状況は不明である。

出土遺物はわずかな縄文土器の小片で図示できるものはなかった。黒浜式土器4点と諸磯式土器1点で、遺構の帰属時期を判断するのは難しい。

SK-287 (13) SK-002 (第70・81図、図版11・49)

台地北西側のBB24-25グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は箱形である。規模は長径1.15m、短径1.0m、深さは18cmである。覆土は壁際から底面、次いでその窪みに黄褐色土、ローム粒子を多量に含む褐色土、次いで暗褐色土、黒褐色土が堆積している。

遺物はわずかな縄文土器片で、このうち破片4点を図示した。土器の1・2は撲糸文が施されるもので、1は粗い撲糸文L、2は撲糸文Rである。3は附加条軸糸不明が施される。4は深く刺突した後に浅く押引く、広義の結節沈線文が施される。以上は黒浜式で本遺構の帰属時期としたい。

SK-288 (14) SK-001 (第71図、図版11)

台地北側のCC22-33グリッドに位置する。平面形状はほぼ円形、断面形状はU字形である。規模は径1.2m~1.1m、深さは65cmである。覆土下層は黒色土にも関わらずロームブロックを含み、次いで褐色土、黒褐色土が堆積している。

出土遺物は少なく黒浜式土器で占められていたが、いずれも小破片で図示できるものはなかった。この

ほか石核1点を出土しているが、遺構の帰属時期を判断するのは難しい。

SK-289 (14) SK-002 (第71・81図、図版11・19・49)

台地北東寄りのCC22-45・55グリッドに位置する。SI-146の東に隣接する。平面形状は多少歪んだ円形、断面形状は浅い椀形である。規模は径2.0m～2.2m、深さは25cmである。覆土は下層から褐色土、暗褐色土、黒色土の3層に分けられ、凹レンズ状の堆積を示す。

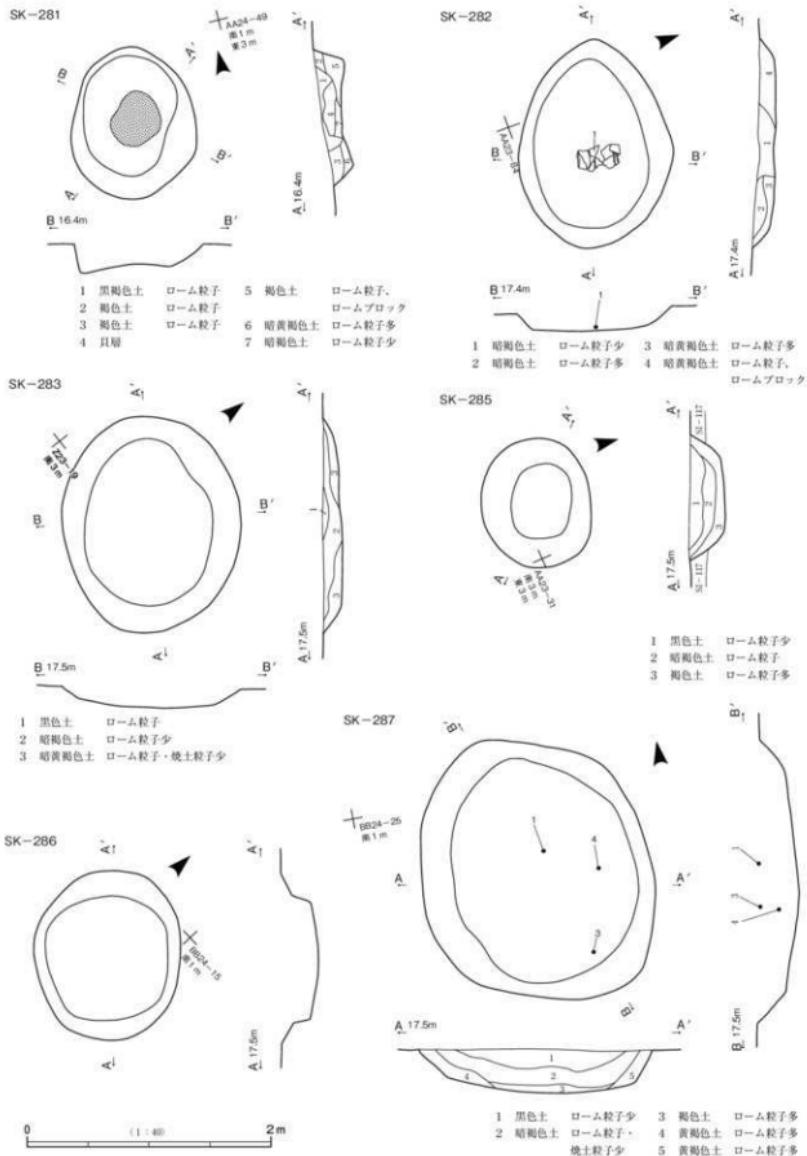
遺物は南西壁際に偏って出土した。このうち土器5点を図示した。1～4は縄文が施されるものである。1は附加条軸縄不明が施される。頸部から口縁部に向かって開く器形で、口縁から胴部の1/3周が遺存し、推定口径31.0cm、現高22.1cmを測る。2は胴下半部の1/3周で、無節しが施されるが、器面が軟らかい段階で施文されたために生じたミミズ腫れ状の粘土帯が認められる。3a～4は同一個体で単節LRが施される。以上は黒浜式で、出土位置は底面直上～覆土上層である。本遺構の帰属時期としたい。

SK-290 (14) SK-003 (第71・81・82図、図版4・11・19・50)

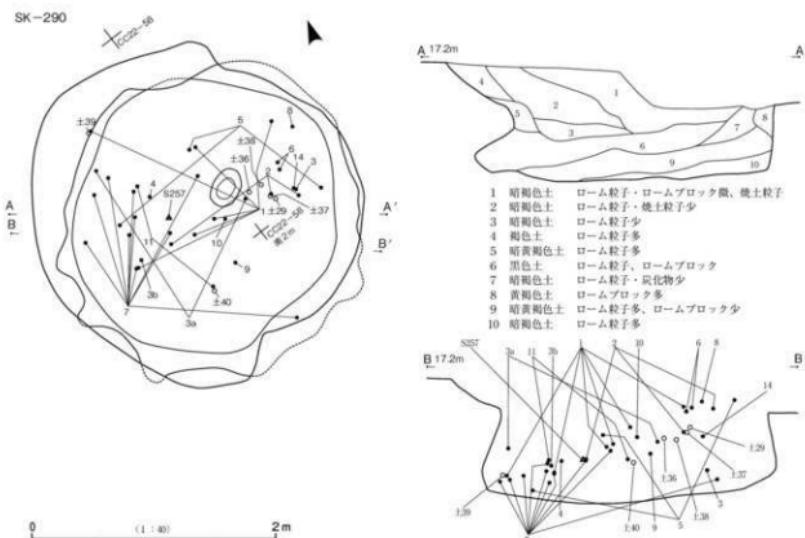
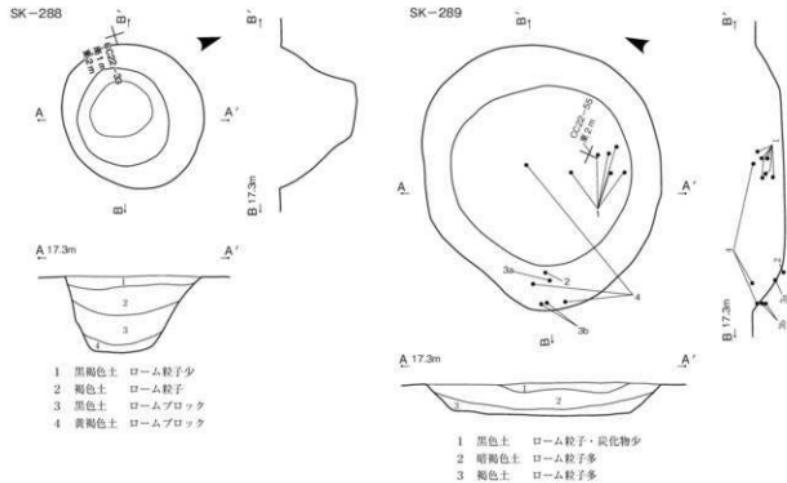
台地北東寄りのCC22-57・58グリッドに位置する。SI-133と重複し、本土坑が新しい。平面形状は円形、断面形状は箱形、規模は径2.3m、深さは最大で90cmである。覆土下層にロームブロックを多く含み、上層では焼土の混入が見られるなど、人為堆積と判断される。

遺物は覆土中から多数出土し、その多くはあたかも東側から西側の凹みへ投棄したような状況であった。土器のほか土器片錐12点（第89図29～40）、二次加工ある剥片1点、磨石類2点（第107図257）、剥片4点、原石1点を出土した。土器片錐は1点が黒浜式であるほかは阿玉台式・中壺式～加曾利E式を利用したものである。黒浜式のものはSI-133のものを利用した可能性も考えられよう。土器の1は口縁部に一对で付される把手の一方が欠損している。現存側は眼鏡状、欠損側は環状になると思われ、非対称となる。それほど幅広くはない口縁部が逆の字に屈曲するキャリバー形の深鉢で、口縁部には沈線により梢円と渦巻きを基調とした文様帶が形成される。口縁端部に狭小な無文帯があるが、以下は底面近くまで捲糸文しが施される。全体の2/3が遺存し、平縁部分で口径17.2cm、現高26.6cm、把手部分で器高30.4cmを測る。一部は北西に位置するSI-135から出土したものが接合した。2は口縁端部下に交互刺突文が巡らされ、以下には凹線を伴う隆起線によりS字状文が展開し、交互刺突文との間の余白には沈線による渦巻文と三叉文で玉抱き三叉が描出される。地文は単節RLで、口縁端部では横位、以下では縱位に施される。3a・3bは口縁端部に四線が巡り、以下の口縁部文様帶に粗形的なS字状文が展開するキャリバー形の深鉢である。S字状文は凹線を伴う隆起線により描出されるが、扁平で貼り付けが明瞭である。端部以下に単節RLが縱位に施される。口縁部の1/4周が遺存し、推定口径16.0cmを測る。4は狭小な口縁部が逆の字に屈曲し、下端を刻み目付きで蛇行する低平な隆起線で区画する。内部には縱位の沈線が連続的に充填される。5は口縁部に3段の交互刺突文が巡らされ、以下に単節RLが縱位に施される。6は口縁端部のみが残存する。狭小な交互刺突文と、刻み目付き隆起線文が巡らされよう。推定口径23.0cmを測る。7は深鉢の下半部で、ほぼ全周し、底部も遺存する。底径6.8cm、現高14.5cmである。胴部に単節RLを縱位に施し、一部ナデで磨り消す。胴部中位に垂下する隆起の痕跡が観察できる。8～11は胴部片で、8は単節RLを縱位に施し、下部を磨り消しているとみられる。9は単節RL、10は条線文を縱位に、11は単節RLを縱位に施する。12は底部で、推定底径8.6cmである。

13・14は無節Lと附加条軸縄不明を施文した纖維を含む土器片で、同一個体の可能性がある。黒浜式である。SI-133に帰属する可能性が高い。



第70図 繩文時代土坑（1）



第71図 繩文時代土坑（2）

以上のうち、13・14以外は、中期中葉から後葉で、2・5・6には中晩式の文様要素が含まれるが、全体的には加曾利E I式古段階に比定できる。出土位置からもこれらは分別されないため、本遺構の帰属時期としたい。

SK-291 (14) SK-004 (第72・81図・図版5・11・19)

台地北東寄りのCC22-35グリッドに位置する。SI-135内に位置し、本土坑が古い。2基の土坑が切り合っているようにも見えるが、土層断面の観察結果では明瞭な切り合い関係は認められず、8の字形の土坑であったと考えられる。規模は推定径80cm前後となる。深さは深いところで46cmである。覆土は全体にロームブロックを含み人為堆積であろうか。

遺物は覆土中から土器1点が出土した。1はほぼ完形品の深鉢で、口径16.4cm、底径7.5cm、器高17.3cmである。全体に貝殻腹縁文を施し、上半部は縦位、下半部は斜位に施文している。火熱を受け器面が荒れしており、口縁部から胴部中位にかけての上半部にススが付着する。黒浜式で、本土坑の帰属時期を示すものであろう。

SK-292 (14) SK-005 (第72・82図・図版5・50)

台地北東寄りのCC22-54グリッドに位置する。SI-137、SI-146と重複し、本土坑が新しい。平面形状は長方形で、断面形態は袋状となる。規模は長軸1.5m・短軸1.0m、底面長軸1.8m・短軸1.3m、深さは1.0mである。覆土は記録がなく不明である。

出土遺物は少なく、中央部中位で多少まとまって出土したのみである。土器片3点が図示できた。1・2は胴部片で、1は無節L、2は単節RLを施文している。1は内面にススが付着している。3は底部片で、推定底径10.2cmである。一本引き沈線により粗い格子目文が施される。いずれも黒浜式で、SI-146の混入品であろう。出土土器からは帰属時期を確定できないが、土坑の形状とSI-137、SI-146より新しいことから、大枠ながら中期に属する可能性が高い。

SK-293 (14) SK-006 (第72図・図版5)

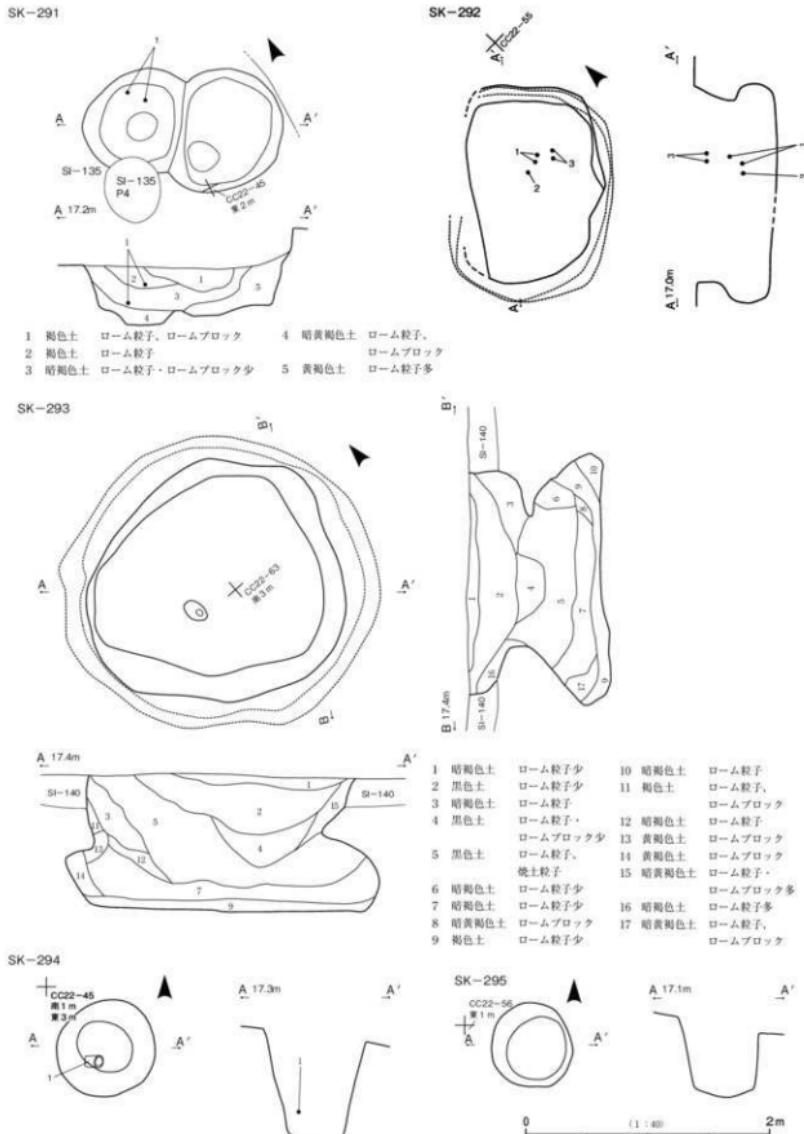
台地北東寄りのCC22-62・63グリッド、SI-140と重複し、本土坑が新しい。形状は楕円形であり、規模は長径2.3m、短径2.2m、深さ約1mである。覆土は先ずロームブロックを含む暗褐色～暗黄褐色土が底面を埋めた後、粘性はあるが縮まりに欠ける黒色土が括れ部付近まで堆積し、次いで同様ながら縮まりのある黒色土が上部まで覆うという状況であった。放棄後当初は入口周辺や壁の崩落土による埋積程度であったものが、その後流れ込んだ土砂によって埋没が進んだと思われ、時間的経過とともに、周囲の土の流失など開口部付近の環境変化があったかと推測される。

出土遺物は少なく土器片数点で、図示できるものはなかったが、切り合い関係や形状から中期の土坑である可能性が高い。

SK-294 (14) SK-008 (第72・82図・図版11・19)

台地北東のCC22-45グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は箱形で径0.8m、深さ80cmである。SK-295・296とともに近世の溝状遺構の底面から確認し、近世の所産とも考えられたが、本跡の覆土下層から完形品の縄文土器を出土したために3基とも縄文時代の遺構として扱った。

土器の1は完形の深鉢である。口径9.8cm、底径11.1cm、器高10.1cmの円筒形を呈する。外面には単節RLを丁寧に施文しており、内面は縦方向の磨きを施している。底部の周縁に木葉痕の痕跡がわずかに観察される。また、胴下半部にススが付着している。胎土中に纖維の混入は認められない。諸磯式で、本土坑の



第72図 繩文時代土坑（3）

帰属時期を示すと考えられる。

SK-295 (14) SK-009 (第72図、図版11)

台地北東のCC22-56グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は箱形で径0.8m、深さ78cmである。SK-294・SK-296とともに近世の溝状遺構の底面から確認し、覆土の状況は不明である。

出土遺物は縄文土器小片1点で、図示できるものではなく、帰属時期は断定できないが類似するSK-295、SK-296から前期に帰属する可能性が高い。

SK-296 (14) SK-010 (第73・82図、図版11・19)

台地北東のCC22-56グリッドに位置する。円形で径0.8m、深さ12mである。SK-294・SK-295とともに近世の溝状遺構の底面から確認し、覆土の状況は不明である。

出土したのは1の底部1点である。土坑の床面から出土した。推定底径11.4cmである。単節LRを施文する。黒浜式土器で、本土坑の時期を示すと考えられる。

SK-297 (14) SK-011 (第73・82図、図版6・50)

台地北東寄りのCC22-84グリッドに位置する。SI-141・SI-142と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は楕円形、断面形状は箱形となる。規模は長径2.2m、短径2.0m、深さは最大で30cmである。ただし、調査時の平面形と土層断面の記録を照合すると、重複部分は1.8mになる可能性があり、長軸は東西ではなく南北にあるのかもしれない。覆土は周囲から褐色土の埋没が始まり、中央部を黒色土が埋めるという状況であった。人為的要素になろうか。

遺物は覆土内から疎らに出土した。量は少ない。SI-141出土土器片と接合したものもある。石器類は打製石斧（第98図208）・磨石類（第108図258）・石皿・石核各1点が出土した。土器は2点を図示した。1は胴部片で、器面の荒れが著しく、文様が不明瞭であるが、沈線による施文を行っていたとみられる。2は底部片で、推定底径6.6cmである。沈線により縦に区画し、間を単節LRとRLを羽状に施文する。いずれも黒浜式土器であろう。接合関係などから同期の堅穴住居であるSI-141の混入品の可能性もあり、本土坑の帰属時期の確定は難しい。

SK-298 (14) SK-012 (第73・82図、図版11・50)

台地北側のCC22-70・71グリッドに位置する。形状は歪な楕円形で、規模は長径2.4m、短径1.7m、深さ45cmである。覆土は下から暗黄褐色土、暗褐色土、褐色土が凹レンズ状に堆積する。自然堆積であろう。

遺物量は少なかった。土器のほか中輪式～加曾利E式土器利用の土器片錐1点（第89図41）、石器類は楔形石器1点と削片1点を出土した。土器は4点を図示した。1～3は単節RLを施文する。1は口縁部、2・3は胴部片で3点とも胎土に纖維を含んでいる。1・2は纖維の量が少なめで、よく焼縮まっている。これらは黒浜式で、覆土上層から出土した。4は深鉢頭部の屈曲部にあたるとみられ、屈曲部上部には交互刺突文と刻みを巡らせ、屈曲部より下には燃糸文Lを施文する。胎土に白色粒子を多量に含む。中輪式で、床面から出土し、土器片錐とともに本土坑の帰属時期を示すものであろう。

SK-299 (14) SK-013 (第73・82図、図版11・50)

台地北側のBB22-79・CC22-70グリッドに位置する。形状は中央が括れる楕円形であり、規模は長径2.9m、短径1.9m（中央部1.5m）、深さは35cm（貝層底面55cm）である。底面中央に楕円形の径約80cmの小土坑があり、その南西端に底面から深さ約50cmに及ぶ小ビットが付属する。覆土の状況から判断すると、褐色土が底面から25cm付近まで覆った後に小土坑が掘られたように思われ、貝層は土坑底面からわずかな間

層を挟んで存在することから程なく投げ込まれたものと判断される。ハマグリを主体としている。なお、貝層の上には黒色土層が厚く堆積する。

遺物は覆土上層から出土している。土器のほかに土器片錐2点（第89図42・43）を出土した。中期の土器を利用したものである。土器は3点を図示した。1・2は口縁部で、1は単節RLを地文とし、C字結節沈線文3条を口縁部に沿って巡らせており、2は単節LRを地文としており、2条のC字結節沈線文を口縁に沿って巡らせる。どちらも波状口縁となろう。3は無文の胴部片である。いずれも胎土に纖維を含むが、1は少なめである。3点とも黒浜式土器と考えられ、本土坑の帰属時期を示す可能性が高い。土器片錐は混入品であろう。

SK-300 (14) SK-014 (第73・82図、図版12・50)

台地北側寄りのCC23-10・20グリッドに位置する。SI-146と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は歪な隅丸長方形、断面形状は箱形である。規模は長軸長3.3m、短軸長1.5m、深さは最大で45cmである。覆土は壁際や底面に薄くロームブロックを含む黄褐色土、次いで壁寄りをロームブロックや焼土をわずかに含む褐色土、最後に中央部が暗褐色土で占められるという様相ながら、土坑の形状や埋没状況からして墓坑の可能性が高いと思われる。黄褐色土で底面を均した上に遺骸を置き、周縁部から褐色土を寄せた後、最後に上から黒色土を掛けたかと解される。

土器片のほか中期土器利用の土器片錐1点（第89図44）、石鎚1点（第91図53）と削片1点を出土している。図示した土器は1の胴部片1点で覆土中から出土した。0段多条RLを施文している。関山式～黒浜式に比定されよう。遺物の出土量は多くなく、主体は黒浜式土器であるがこれ以外の時期の土器片も混入しており、土坑の時期を決定するのは難しい。

SK-301 (14) SK-015 (第73・82図、図版12・50)

台地北側寄りのCC23-20グリッドに位置する。SK-300と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は歪な隅丸長方形、断面形状は箱形である。規模は長軸長3.2m、短軸長1.6m、深さは最大で54cmである。覆土の様相は不明で、SK-300と同様、墓坑の可能性があるが、覆土中に散在する遺物との関係は不明である。

土器片3点を図示した。1は波状口縁の波頂部にあたり、附加条2種を施文する。2は無文の胴部片で縦方向のミガキが施される。3は眼鏡状把手の一部である。1・2は黒浜式、3は中鉢式～加曾利E I式とみられるが、いずれも覆土上層から出土し、遺構の時期決定の資料とするのは難しい。図示しなかった土器片もさまざまな時期のものが混入している。

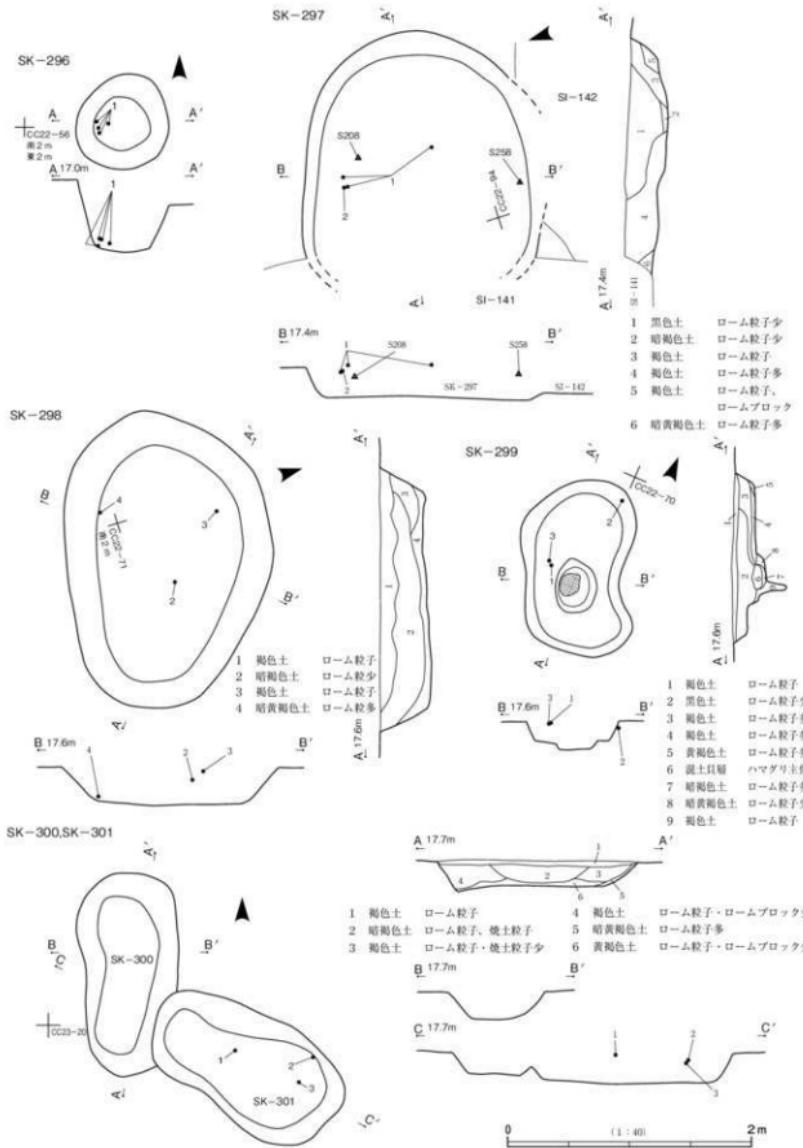
SK-302 (14) SK-016 (第74図、図版12)

台地北側寄りのCC23-21グリッドに位置する。平面形状は隅丸長方形、断面形状は箱形である。規模は長軸長2.9m、短軸長1.3m、深さは最大で40cmである。覆土は壁際や底面に薄く黄褐色土ないし暗褐色土、次いで中位南側に暗褐色土、一方北側には褐色土の順となり、最後に褐色土が全体を覆うという様相であり、これも墓坑の可能性が高いと思われる。黄褐色土はかで底面を均した上に遺骸を置き、南側、次いで北側から土を被せたのちに、褐色土で全体を覆ったかと解される。

覆土上層から縄文土器破片数点が出土したが、図示できる土器はなく、遺構の帰属時期は不明である。

SK-303 (14) SK-017 (第74・82図、図版6・50)

台地北東寄りのCC22-90グリッドに位置する。SI-148と重複し、本土坑が新しい。平面形状は歪な格



第73図 繩文時代土坑(4)

円形、断面形状は箱形となる。規模は縦横2.3m、深さは最大で45cmである。覆土は3層であり、自然堆積であろう。なお、土層断面の観察から住居かはほぼ埋没しかかっている段階で掘り込まれたことが窺える。

遺物は覆土内から疎らに出土した。土器片のほか削片1点を出土した。図示できたのは土器片1点である。1は口縁部片で、櫛歯状工具による縦位の沈線文が端部から施され、列点文が巡らされる。黒浜式である。このほかは小片10点ほどで、黒浜式が主体であったが、SI-148の混入品の可能性が高く本土坑の時期決定の資料とするのは難しい。

SK-304 (14) SK-018 (第74図、図版6)

台地北側寄りのCC23-00グリッドに位置し、SI-147と重複するが新旧関係は不明である。平面形状は橢円形、断面形状は箱形となる。規模は長径95cm、短径85cm、深さは最大で110cmである。覆土は上層から黒色土、褐色土、褐色土、黄褐色土が堆積し、ローム土中心から廃植土主体の土壤に変わっていた様子が窺える。自然堆積であろう。

出土土器はなく、時期は不明である。

SK-305 (14) SK-019 (第74図、図版12)

台地北側寄りのBB22-73グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は箱形となる。規模は径2.2m、深さは中央ピット底面で50cm、それ以外で30cmである。覆土の状況から土坑内ピットは土坑がある程度埋没した後に掘り込まれ、しかも黒色土で埋め戻されていることから、柱でも立てられたのであろうか。なお、土坑を埋めた黄褐色土、褐色土、暗褐色土が凹レンズ状の堆積を示し、粘性やしまりもあるなど、自然堆積と思われる。

遺物は少なくいずれも小破片であり、図示できる土器片はなかった。土器片のほか磨石類1点（第107図259）、両極剥片2点、碎片1点を出土している。資料が乏しく土坑の時期は不明である。

SK-306 (14) SK-020 (第74・82図、図版7・50)

台地北側寄りのBB22-87-88グリッドに位置する。SI-150と重複し、本土坑が新しい。平面形状はビーナツ形をなし、上部底面が多少高いことなど、あるいは土坑の重複の可能性もあろうか。規模は長軸長4.0m、短軸長上部1.3m・下部2.0m、深さは45cmである。覆土は北側から流れ込むように暗褐色土が斜めに埋めたのち、黒色土が全体に堆積しており、当遺跡では特異な堆積状況である。

出土遺物はわずかで、土器片2点を図示した。1は折り返し状の口縁部で、三角文を施す。2は無文の胴部である。1と胎土・焼成・色調が近似し、同一個体である可能性がある。浮島III式土器であるが、重複するSI-150からも同時期の遺物が出土しているため混入品の可能性も考えられ、本土坑の帰属時期は判断できない。

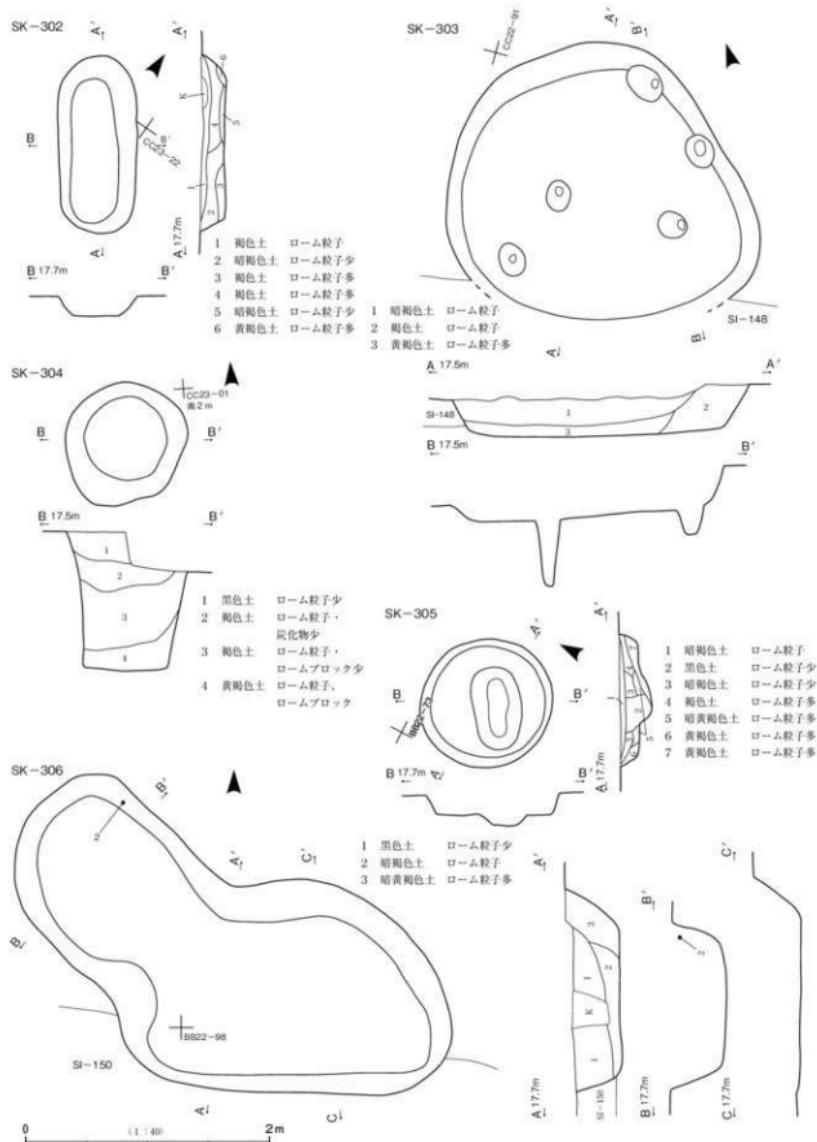
SK-307 (14) SK-021 (第75図、図版12)

台地北側寄りのBB22-74グリッドに位置する。平面形状は多少歪な円形、断面形状は緩やかな箱形となる。規模は径2.3m、深さは35cmである。覆土は壁下に黄褐色土・褐色土、次いで底面を暗黄褐色土が覆ったのち、暗褐色土が上まで水平堆積しており、自然堆積であろう。

図示できる土器はなく帰属時期は判断できない。

SK-308 (14) SK-024 (第75・82図、図版12・51)

台地北側のBB23-00・10グリッドに位置する。平面形状は隅丸長方形、断面形状は箱形である。規模は長軸長4.0m、短軸長2.0m、深さは最大で35cmである。覆土は底面に黄褐色土が一様に堆積したのち、



第74図 繩文時代土坑（5）

ハイガイ、マガキ、ハマグリなどからなる貝層が小ブロック状に6ブロック形成されており、それを埋めるように周縁部から褐色土が流れ込んでいる。

出土遺物は少なかった。土器片のほか二次加工ある剥片・疊・剥片が各1点出土した。土器の1は口縁部で、緩やかな波状口縁になるとみられる。単節RL・LRによる幅の狭い羽状縄文を等間隔に施文することから、花積下層式～二ツ木式になろう。このほかの土器片も花積下層式が主体であるので、本土坑の時期は前期初頭～前葉の可能性がある。

SK-309 (14) SK-025 (第75・82図、図版51)

台地北西側のBB22-57グリッドに位置する。SI-149・SI-155と重複しており、SI-149よりは新しいものの、SI-155との関係は不明である。北側約2/3の状況が不明であり、残存部からすると楕円形になろうか。規模は最大で長径2m、短径は50cm以上である。

遺物は少ないが、東側でまとめて出土している。土器の1は口縁部片で、大きく開いて立ち上がる形態になろう。波状口縁で、口端部に工具による押捺を施す。口縁部に沿って縱沈線、その下には横方向の沈線を不規則な間隔で数段巡らせている。白色粒子を多量に含み、器面が荒れている。2は磨消貝殻文を施文する。3は開いて立ち上がる口縁部片で、縦・横に集合沈線を施し、その上に棒状・円形の貼付文を並べる。また口縁部には耳状突起を貼り付けている。4は薄手の無文の土器片である。内外面に赤彩の痕跡が認められる。1・2は興津式、3は諸磯c式の土器片である。4は浮島・興津式あるいは諸磯式であろう。このほかに国示しなかったが、黒浜式土器が混入していた。これはSI-149からの混入品と考えられ、本土坑の時期は興津式と考えられる。SI-155の北に隣接するSI-156も出土土器から興津式が帰属時期とみられ、SI-156との関連がうかがえる土坑である。

SK-310 (14) SK-026 (第75図、図版7)

台地北西側のBB22-35グリッドに位置する。SI-156と重複するが、新旧関係は不明である。平面形状は楕円形、断面形状は箱形である。規模は長径1.3m、短径1.2m、深さは最大で住居床面から51cmである。覆土は東側から暗黄褐色土、次にロームブロックを含む暗褐色土、さらに同じくロームブロックを含む黒色土や暗黄褐色土が東側から投げ入れられたように堆積しており、明らかに人為堆積と思われる。ローム上面からは60cmほどの深さということになり、径に比して深い土坑といえよう。

出土遺物は少なく、国示できる土器はなかった。

SK-311 (15) SK-002 (第76図、図版12)

台地北東側斜面のDD22-37グリッドに位置する。平面形状は多少歪な楕円形、断面形状は浅い楕形である。規模は長径1.35m、短径1.1m、深さは最大で65cmである。覆土は暗褐色土ではあるが、下層が盛り上がったような堆積を示し、通常とは異なった様相といえる。壁面の段差や凹凸など、人為的なものかどうか判断しかねる。

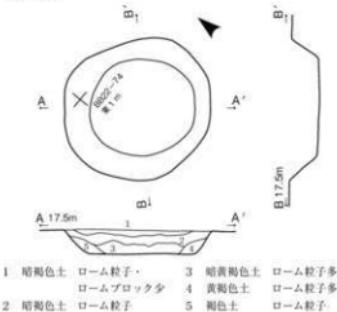
出土遺物は少なく、国示できるものはなかった。土坑の時期は不明である。

SK-312 (16) SK-001 (第76・83図、図版12・51)

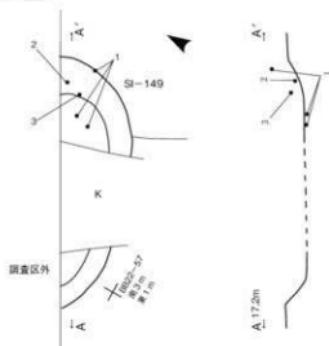
台地北東部のDD22-10グリッドに位置する。平面形状楕円形の袋状土坑である。規模は長径2.3（開口部1.2）m、短径2.1（開口部1.2）m、深さは最大で75cmである。覆土は東側から暗黄褐色土が流れ込み、最後に黒褐色土が堆積しているが、自然堆積か人為堆積かの判断は困難である。

遺物は上層から中層にかけて多数出土した。土器のほかに土製円板1点（第89図9）石器類は磨石類・

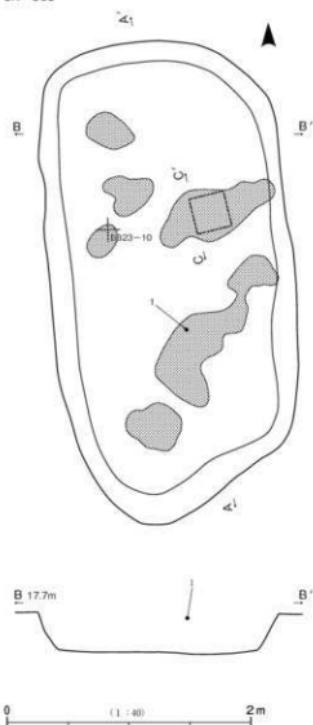
SK-307



SK-309

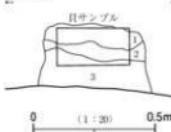


SK-308



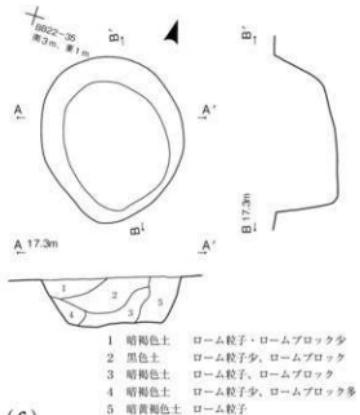
C 17.7m

C'



- A - A'
1. 暗褐色土 ローム粒子少
 2. 明褐色土 ローム粒子主体
 3. 混土貝層 黒色土。ハイガイ主体。マガキ、ハママグリ少
 4. 混土貝層 黑色土。ハイガイ主体。マガキ、ハママグリ少
 5. 下面はロームブロック
- C - C'
1. 黒色土 混土貝層。サルボウ主体、ハママグリ、マガキ、波紋貝少
 2. 黒色土 混土貝層。ハママグリ等の波紋貝少
 3. 明褐色土 ローム粒子主体

SK-310



第75図 繩文時代土坑 (6)

蔽石各1点と剥片4点を出土したが図示できる遺存状態のものはなかった。土製円板は中期の土器を利用したものである。土器のうち1・2は覆土中層、3~6は覆土上層から出土した。1は眼鏡状把手で、孔に沿って沈線を同心円状に重ね、縦位の単節RLを施している。2は内湾する口縁部片で、単節RLを地文とし、隆帶で渦巻文を描く。3は胴部片で、単節RLと無節Lを施し、沈線で意匠を描く。4は深鉢口縁部で、口縁部に単節RLを横位に施した幅の狭い縄文帯を交互刺突文により設ける。口縁以下には単節RLを縦位に施している。胎土に雲母を多く含む。5は筒状の器形で、口縁部の1/4周が遺存し、推定口径15.0cmである。口縁部に交互刺突文を2段巡らし、無文帯を作出する。胴部は単節RLを縦位に施し、沈線により対向弧線文を描く。白色粒子を含む胎土である。6は無文の胴下部で、底部外面に網代痕が観察される。胎土に雲母を混入する。以上は中峠式で、本土坑の帰属時期を示すものであろう。

SK-313 (16) SK-002 (第76・83図、図版12・51)

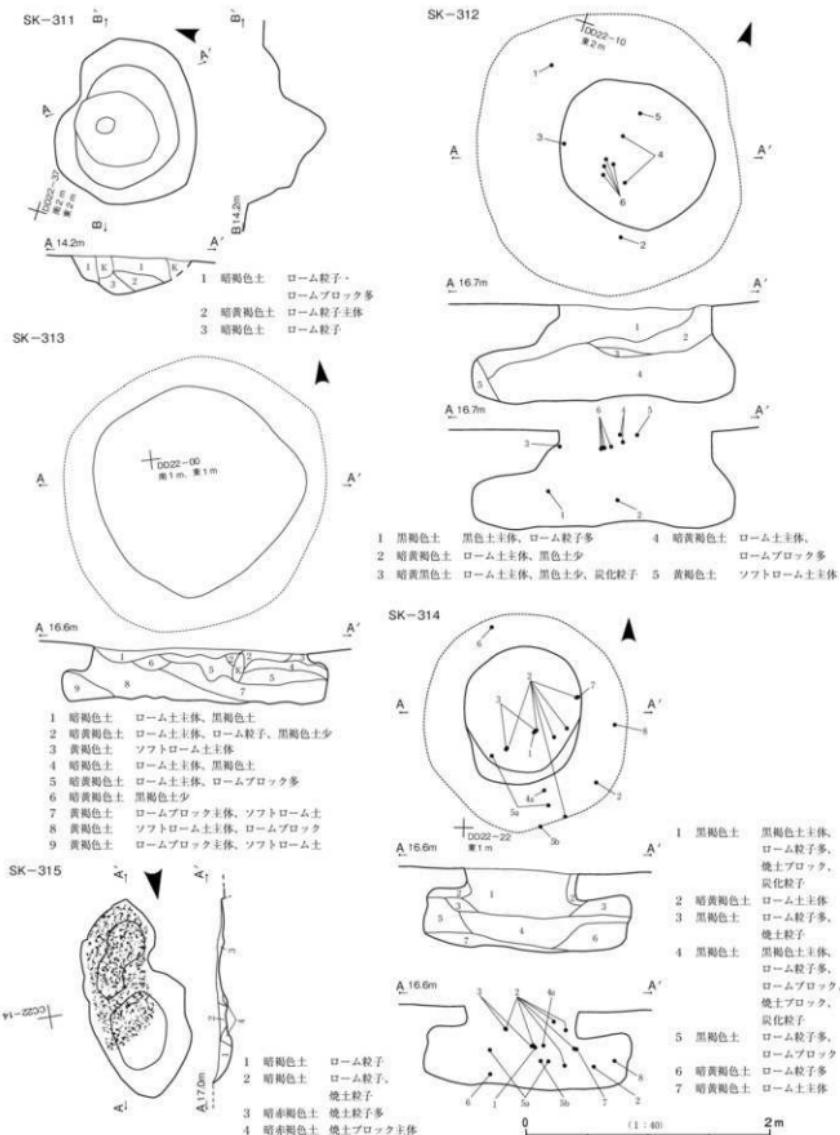
台地北東側斜面のDD22-00グリッドに位置する。平面形状楕円形の袋状土坑である。規模は長径2.2(開口部1.7)m、短径1.7(開口部2.1)m、深さは最大で40cmである。遺存状況からして上部が失われており、本来の開口部はさらに狭かったと思われる。覆土は西側から黄褐色土が流れ込んで底面が埋まったのち、暗黄褐色土がその上部を覆っている。壁を崩して埋め戻した可能性も考えられる。

遺物は土坑南側覆土内から数点の土器片が出土し、このうち1点を図示した。土器の1は口縁部に交互刺突文を2段巡らし、単節RLを縦位に施している。胎土に白色粒子を含む。中峠式である。出土遺物は少ないが、周辺には同時期の土坑が分布しており、土坑の形状などからも本土坑の帰属時期を示すものと考えられよう。

SK-314 (16) SK-003 (第76・83図、図版12・19・51)

台地北東側斜面のDD22-12グリッドに位置する。平面形状楕円形の袋状土坑である。規模は長径1.8m(開口部1.2m)、短径1.7m(開口部0.m)、深さは最大で65cmである。遺存状況から本来の開口部が失われたものと思われる。覆土はロームブロック混じりの暗黄褐色土、次いで同じく暗黄褐色土が底面を埋めたのち、黒褐色土が上部を覆っている。

遺物は土坑開口部付近から大形土器数点が出土した。その他は覆土内からの出土であった。土器のほかに阿玉台式土器を利用した土器片錐1点(第89図45)を出土した。土器の1は中層から出土した波状口縁の無文の浅鉢である。胎土に雲母粒子・白色粒子などを含む砂礫が多量に混入する。また、赤彩の痕跡が認められる。2は深鉢の胴下半部で、口縁部は欠損する。底径9.0cmで、胴部は円筒形に近く、頸部付近でわずかに外反する。縦位の単節RLを施し、下半部はナデ消す。胴部中位に沈線を伴う隆帶を4単位の波状に施する。隆帶上にも単節RLを横位に施している。底部の網代痕はミガキで磨り消す。胎土に白色粒子・雲母を多く含み、外面にススが付着する。3は上層から中層にかけて出土したキャリバー形深鉢の口縁部である。1/4周が遺存し、推定口径31.6cmである。外反気味に立ち上がる口縁部は無文で、口縁部とくびれ部に沈線を巡らし区画し、これと平行して交互刺突文が施された波状沈線文を巡らしている。間には地文縄文として単節LRを縦位施工し、沈線による渦巻文と蛇行する凹隆帶を横位に配する。凹隆帶の下半分を中心に刻みを施している。蛇行する凹隆帶の中軸上には沈線による縦長の抽象文が配される。4aは深鉢の口縁部である。内湾する形態で、口縁部に沿って交互刺突文を巡らし、以下には単節RLを縦位施工する。4bは頸部にあたり、単節RLを短い単位で縦横に施工する。5a・5b・6は内湾して立ち上がる形態の深鉢口縁部である。5a・5bは地文に撲糸文Lを施工し、文様帶を凹隆帶で横位に区画する。



第76図 繩文時代土坑（7）

区画内は凹隆帯による渦巻文を配する。6は単節RLを縦位施文する。口縁部区画には渦巻文が配されると思われる。7は深鉢の口縁部片である。口径を復元するのは難しい遺存状態であるが、比較的小型の土器であったと推定される。口縁部分は無文で、それ以下には0段多条RLを地文として、細い隆帯を貼り付けて弧線状の意匠とする。8は波状口縁深鉢の口縁部片である。隆帯で区画した中を斜行沈線で充填しているとみられる。隆帯には単節RLを施文している。9は深鉢の山形把手である。口縁部には凹文、単節RLを地文に施し、下端に沈線の一部がのこっている。胎土には白色粒子、雲母を混入する。出土土器は9が阿玉台IV式であるほかは中峠式から加曾利E I式古段階の土器が主体で、土坑の形状などを合わせてみても本土坑の帰属時期を示すものであろう。

SK-315 (17) SX-002 (第76図)

台地北東のCC22-03・13グリッドに位置する炉穴である。SI-134と重複する。南北に長い楕円形で、南側は攪乱により一部壊されており、遺存する規模は長径0.72m、短径は広いところで0.80mである。2段に落ち込んでおり、北側が深く南側が浅い。北側の深さは20cmである。浅い北側の底面は火然により硬化している。

出土した遺物はなかった。

SK-316 (17) SK-001 (第77・84図、図版12・51)

台地北側寄りのAA22-84グリッドに位置する陥穴である。平面形状は細長い楕円形、断面形状は短径側が狭いV字形、長径側は逆オーム形である。確認できる部分での規模は長径上部で2.8m（底部2.75m）、短径1.4m（中位鷹狩部1.3m）、深さは1.35mである。覆土は底面近くが褐色土、除々に黒みを増して上位で黒褐色を呈する。自然堆積である。

出土した遺物は少なく、土器片2点を図示した。石器類は楔形石器・石匙（第96図183）各1点を出土した。土器の1は波状口縁の破片で、折り返し状になっている。口縁部には無節R・Lの羽状繩文を施文し、その下には撫糸側面圧痕文が施文される。2は頸部がわずかにくびれる形態で、無節しにより施文される。頸部には半截竹管により、断続的な平行沈線が巡らされる。図示した土器片は花積下層式と黒浜式である。重複するSI-122からの混入品であろう。

SK-317 (17) SK-002 (第77・84図、図版12・13・51)

台地北側BB22-40グリッドに位置する炉穴である。平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿形である。規模は長径2.5m、短径1.8m、深さは最大で20cmである。底面東側に径50cm、厚み10cm弱の焼土ブロック混じり暗褐色土範囲があり、径約20cmの範囲に赤化面が確認された。また、その西には焼土を含む深さ10cmの小ビットがある。このほかに3本の小ビットがみられるが、径・深さともに小規模なものである。覆土は褐色土または暗褐色土である。

出土遺物は少なく土器片3点を図示した。石器類は台石1点（第114図294）、剥片4点、削片1点、碎片9点を出土した。1は深鉢胴部の大型片で、0段多条RLとLRにより菱形文を構成する。2は、深鉢の胴下半部で、無節しと貝殻背圧痕文を施文する。3は単節RL・LRによる羽状繩文を施文した胴部片である。いずれも花積下層式で、周辺の住居からの混入品の可能性が高い。

SK-318 (17) SK-004 (第77図、図版13)

台地北側端寄りのBB22-37・38グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は浅い楕形である。規模は径1m、深さは最大で15cmである。深さ16cmの小ビットが付属する。ビット内は褐色土、それ以外

は暗褐色土が堆積する。

出土遺物はなく、時期の確定はできない。

SK-319 (17) SK-005 (第77図、図版13)

台地北側端寄りのBB22-36・37グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は浅い椀形である。規模は長径1.5m、短径1.1m、深さは最大で20cmである。深さ13cmの小ビットが付属する。覆土は壁寄りに褐色土、それ以外は暗褐色土の単層である。

出土遺物は少なく、土器は出土しなかったが、石錐未成品1点、碎片1点を出土した。時期の確定はできない。

SK-320 (17) SK-006 (第77・84図、図版6・52)

台地北側寄りのBB22-46グリッドに位置する。平面形状はほぼ円形、断面形状は椀形である。規模は径1.0m、深さは最大で50cmである。覆土は壁～底面近くに褐色土がみられるほかは、暗褐色土の単層であった。

土器片2点を図示できた。1は口縁部片である。附加条2種を施し、口縁部に沿って半截竹管による結節沈線文を3段巡らせている。口縁部下に補修孔が1か所ある。2は無節Lを地文とする。図示した土器は黒浜式で、これ以外もほぼ縄文時代前期の土器で占められ、黒浜式が主体であるため、本跡の帰属時期とみられる。

SK-321 (17) SK-007 (第77・84図、図版52)

台地北側寄りのBB22-56・57グリッドに位置し、SI-155と重複する。土層断面の状況から本土坑が新しい。平面形状は楕円形、断面形状は椀形ないし箱形である。規模はいずれも推定で長径1.0m、短径0.8m、深さ28cm、覆土は黒褐色土であった。

出土遺物はわずかで、土器片1点を図示した。土器の1は胴下半部の破片で、器厚が12mmと分厚い。器面が荒れて不明瞭だが、単節RL・LRの羽状縄文を施しているとみられ、花積下層であろう。黒浜式のSI-155より新しい土坑とみられることから、出土土器は混入品で、本土坑の帰属時期は判断できない。

SK-322 (17) SK-008 (第78図)

台地北部のBB22-48グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は椀形であり、規模は長径1.5m、短径1.2mである。覆土は褐色土次いで暗褐色土が浅く土坑内を埋めたのち、黒褐色土が上面まで覆っている。自然堆積であろう。

遺物はわずかな土器小片で、図示できるものはなく、本土坑の帰属時期は判断できない。

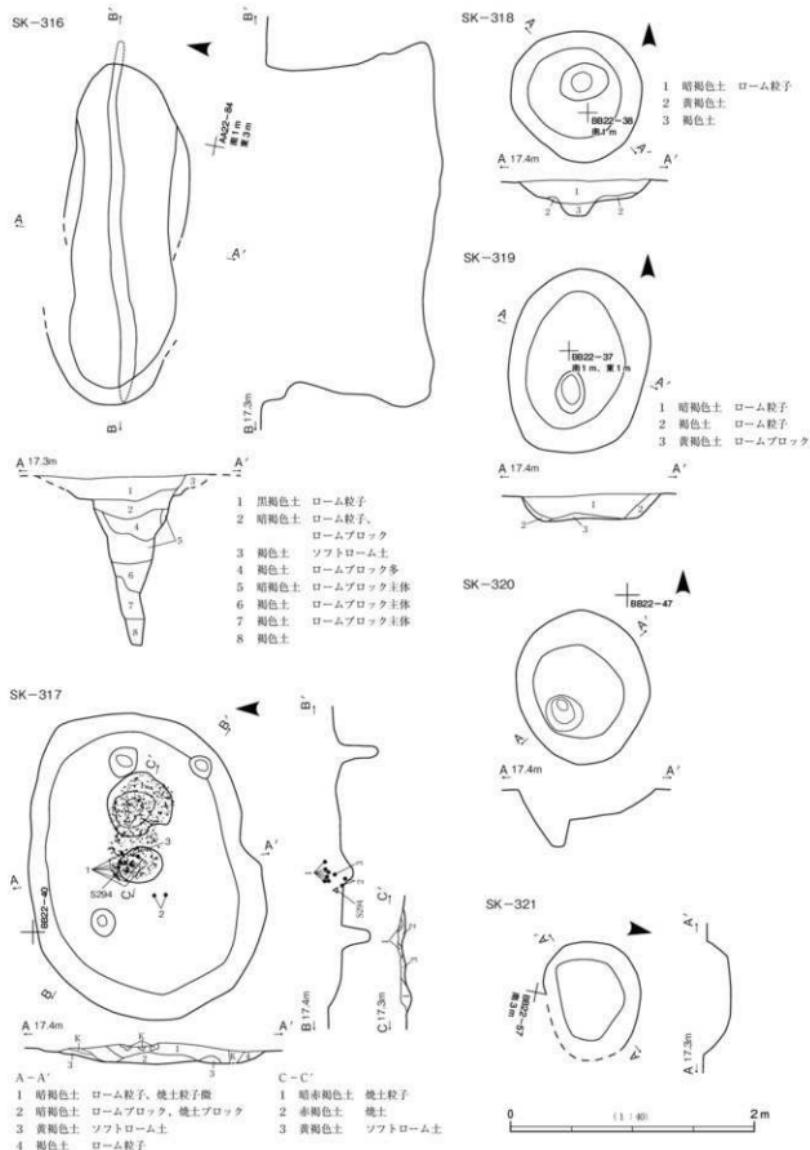
SK-323 (17) SK-009 (第78図、図版13)

台地北側端のBB22-13グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は皿形である。規模は長径1.3m、短径1.2m、深さは最大で10cmである。覆土は下から黄褐色土、少量の貝混入の褐色土が堆積していた。

出土遺物はなく、本土坑の帰属時期は判断できない。

SK-324 (17) SK-010 (第78・84図、図版13・52)

台地北側端のBB22-02グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は浅い箱形である。規模は長径1.2m、短径1.0m、深さ15cmである。覆土は壁際に暗褐色土が堆積したのち、黒褐色土に挟まれるようすに東西に幅15cm、長さ80cmほどのハイガイを主体とする貝層の形成が見られた。生活残滓とともに土坑窪みに貝が捨てられたと思われる。



第77図 繩文時代土坑（8）

出土した土器は1点で、ほかには剥片1点がある。土器の1は撲糸側面圧痕文で区画して、刺切文を充填している。花積下層式で、貝とともに廃棄されたもので、本土坑の帰属時期を示すとみられる。

SK-325 (17) SK-011 (第78・84図、図版13・52)

台地北側のCC22-03グリッドに位置し、平面形状は楕円形、断面形状は浅い箱形であり、規模は長径2.4m、短径2.0mである。覆土は壁寄りと底面に浅く褐色土が埋積し、中央部に混貝土が堆積する。ハマグリを主体とし、サルボウ、アサリを含む。

出土した遺物は土器1点である。単節RL・LRの羽状縄文を施文しており、上方に波状沈線文の波底部の一部が観察される。内面の調整が丁寧で、関山II式である。遺構の時期を示す可能性がある。

SK-326 (18) SK-012 (第78・84図、図版13・52)

台地北部のBB21-93・BB22-03グリッドに位置する。平面的には2基の円形土坑が一部重複した瓢箪形で、断面も北側がV字形、南側が皿形である。覆土全体に貝を含み、切り合いを示す状況が窺えないことから、同一のものとして報告する。規模は長径2.3m、短径は北側2.2m・南側1.5m、深さは北側70cm・南側30cmである。覆土は北側から褐色土または黒褐色土、南側から黄褐色土が底面を埋めた後にハイガイ主体の混貝層が北側中央に厚く形成された一方、南側ではブロック状に貝殻を含む暗褐色土が堆積するという状況であった。

遺物はこの北側貝層内およびその北西外側から多く出土した。土器のほかに石鏃未成品1点、楔形石器1点、打製石斧1点（第99図209）、磨石類1点、剥片1点、両極剥片・碎片各2点を出土した。土器は4点を図示した。いずれも羽状縄文を施文している。1～3は単節RL・LR、4は無節R・Lを原体としており、末端を閉じた瘤状部分の軌跡が施文帯の境に認められる。2・3は同一個体の可能性がある。これらは花積下層式で、貝とともに廃棄されたものとみられ、土坑の帰属時期の可能性がある。

SK-327 (18) SK-013 (第78図、図版13)

台地北側のBB21-82グリッドに位置する。SK-328と一部重複するが新旧関係は不明である。形状は楕円形であり、規模は径約1.6m、深さは5cmに満たない。覆土の状況は不明であるが、北東部にわずかに貝混じりの部分が確認された。マガキが主体で、ハイガイを含む。

遺物はわずかで、土器のほかに剥片1点を含む。図示できるものはないが、貝が廃棄された土坑で、周辺の花積下層式の土坑と同時期に存在した可能性が考えられる。

SK-328 (18) SK-014 (第78図、図版13)

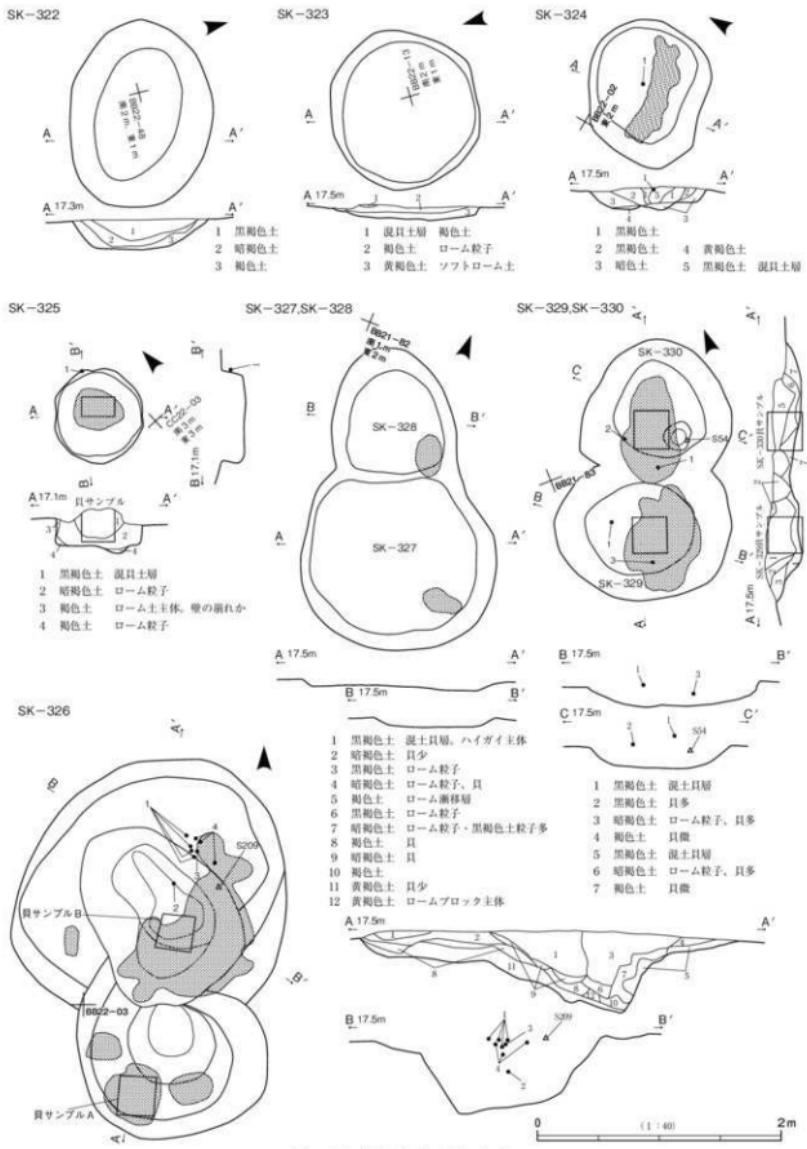
台地北側のBB21-82グリッドに位置する。SK-327と一部重複するが新旧関係は不明である。形状は歪な楕円形であり、規模は径約1m、深さは5cmに満たない。覆土の状況は不明であるが、北東部にわずかに貝混じりの部分が確認された。マガキが主体で、このほかにハイガイ・ハマグリなどを含む。

出土遺物はわずかで、図示できるものはなかった。土器のほかに剥片1点を出土した。図示できるものはないが、貝が廃棄された土坑で、周辺の花積下層式の土坑と同時期に存在した可能性が考えられる。

SK-329 (18) SK-015 (第78・84図、図版13・52)

台地北側のBB21-83グリッドに位置する。SK-330と重複し、土層断面では新旧関係は不明瞭ながら、貝層の遺存状況からすれば本土坑が古い。平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿形で、規模は長径1.9m、短径1.2m、深さは最大で15cmであった。覆土中央褐色土上に80cm×60cmの範囲で混貝層が存在した。

遺物はわずかで、このうち土器片3点を図示した。このほかに削片1点を出土した。土器の1は胴部、



第78図 繩文時代土坑（9）

2は胴下半部から底部の一部で、単節RL・LRの羽状繩文が施文される。3は底部外面に無節Rを縱横に施文している。内面は無文である。3点とも花積下層式と考えられ、他の時期の土器片の混入はなく本土坑の帰属時期を示すと考えられる。

SK-330 (18) SK-016 (第78・84図、図版13・52)

台地北側のBB21-73グリッドに位置する。SK-329と一部重複し、土層断面では新旧関係は不明瞭ながら、貝層の遺存状況からすれば本土坑が新しい。平面形状は歪な楕円形、断面形状は浅い箱形である。規模は長径1.3m、短径1m、深さは最大で15cmほどであった。覆土中央暗褐色土上に80cm×40cmの範囲で混土貝層が存在した。ハイガイ・マガキを主体とし、ハマグリ・オキシジミなどを含む。

遺物はわずかかな一括遺物のみで、土器のはかに石鎌（第91図54）・磨石類・剥片各1点を図示した。土器片は2点を図示した。1・2とも単節RL・LRの羽状繩文を施文している。2点とも黒浜式土器と考えられ、他の時期の土器片の混入はなく本土坑の帰属時期と考えられよう。

SK-331 (18) SK-017 (第79・84図、図版13・52)

台地北部のBB21-62グリッドに位置し、富士見遺跡との境界に当たったこともあり、北側半分の状況については不明である。平面形状は方形ないし長方形、断面形状は浅い皿形である。規模は長軸長1.2m以上、短軸長1.5m、深さは最大で17cmほどであった。覆土は底面付近を除き暗褐色で占められる。

遺物はわずかで、土器のはかに石鎌未成品1点を出土し、このうち土器1点を図示した。土器の1は器面が荒れており不明瞭であるが、単節LRを施文しているとみられ、花積下層式と考えられる。他形式の混入はなく、本土坑の帰属時期を示す可能性がある。

SK-333 (18) SK-019 (第79・84図、図版13・14・19・52)

台地北東部のDD22-40グリッドに位置する袋状土坑である。平面形状はほぼ円形、断面形状は巾着形である。底面中央に径30cm、高さ約3cmの掘り残した台がみられる。規模は径2.4m（開口部径1.1m）、深さは最大で1.2mである。覆土は下層に黄褐色土、次いで褐色土が中場まで水平に堆積したのち、ロームブロックを含む褐色土また褐色土が凸レンズ状に堆積する。遺物の出土状況からして自然堆積面に遺物を含む人為堆積があったのであろう。

出土遺物の点数は多くないが、土器大破片を含む。土器のはかに土製円板1点（第89図10）、土器片錐5点（第89図46～50）、石碎片1点を含んでいた。土製円板は中期の土器、土器片錐は阿玉台式・中峠式～加曾利E式を利用したものである。土器の1・2は突起部である。1は眼鏡状突起で、突起部の両脇に沈線により渦巻文が描かれる。2は円筒状で、中位に交互刺突文を巡らせていている。3は口縁部を欠損するが、胴下半部を中心全体の2/3が遺存する深鉢で、底径は8.0cmである。単節RLを縦位に施文するが、施文単位間のナデ消しが顕著で、底部から高さ4cmまでは無文である。内面下半部にススが付着している。4も口縁部を欠損するが全体の3/4が遺存する。底径6.9cmである。3と同様に単節RLを縦位に施文し、施文単位間のナデ消しが顕著である。底部から高さ4cmほどは無文で、横方向に磨いている。3・4ともに底部の網代痕が調整により消されているようである。5は深鉢下半部である。底部は欠損し、周縁部の剥離痕跡が観察できる。無文で白色粒子・雲母粒子を多量に含む。以上は中峠式を中心とした中期中葉の土器で、土坑の形状などを合わせてみても本土坑の帰属時期を示すものであろう。土製円板・土器片錐も土坑に伴うものと考えられる。

SK-334 (18) SK-020 (第79・85図、図版14・52)

台地北東部のCC22-39グリッドに位置する。平面形状はほぼ円形、断面形状は巾着形である。底面中央には多少の凹凸がみられる。規模は径2.1m（開口部径1.7m）、深さは最大で85cmである。覆土はロームブロックを含む黄褐色土が中場まで堆積したのち、暗褐色土が厚く堆積する状況であった。自然堆積であろう。

遺物は疎らに出土し、土器5点を図示した。1は把手部分で、太沈線で意匠を描く。2は胴部片、3は底部に近い胴下半部の破片である。どちらも撚糸文Lを施している。4は底部の破片で、推定底径9.0cmである。単節RLを縦位施し、底部付近は無文である。胎土に雲母を含む砂礫を少量混入する。5は単節RLを施す。黒浜式である。出土遺物の主体は時期の指標となる有文のものがないが、中期中葉中峠式～後葉加曾利E I式と考えられ、土坑の形状などからも本土坑の帰属時期を示すものであろう。

SK-345 (18) SK-031 (第79・85図、図版10・14)

台地北東側斜面のDD22-60グリッドに位置し、SI-180と重複する。住居より新しい。平面形状は円形、断面形状は箱型である。規模は径1.1m、深さは最大で40cmである。覆土は壁際に褐色土がわずかに堆積した後に、ロームブロックを含む暗褐色土でほぼ充たされる。

遺物は微量で、土器1点を図示した。1は口縁部片で、口縁に沿って四文を施し、以下に条線を施している。称名寺II式から堀之内I式である。土坑の時期は土層断面から黒浜式のSI-180より新しいことは確実なため、帰属時期である可能性がある。

SK-346 (18) SK-032 (第79・85図、図版10・14・52)

台地北東側斜面のDD22-60グリッドに位置し、SI-180と重複する。住居より新しい。平面形状円形の袋状土坑である。規模は径1.3m（開口部径1.0m）、深さは最大で90cmである。覆土は褐色土また暗褐色土が凹レンズ状に土坑底部を埋めた後、ハマグリを主体とする混土貝層が東側から流れ込んだように形成されていた。貝層は黒褐色土によって覆われており、自然堆積途上で貝の投棄がなされ、さらにその上に腐植土起源の土砂が自然堆積したものと思われる。

土器片のほか楔形石器、磨石類1点を図示した。土器は1点を図示した。胴下半部の破片である。無節Rを縦横に施している。中期中葉中峠式から後葉加曾利E I式と考えられる。黒浜式のSI-180より新しいことは確実であるため、土坑の帰属時期である可能性がある。

SK-347 (18) SK-033 (第80図、図版4)

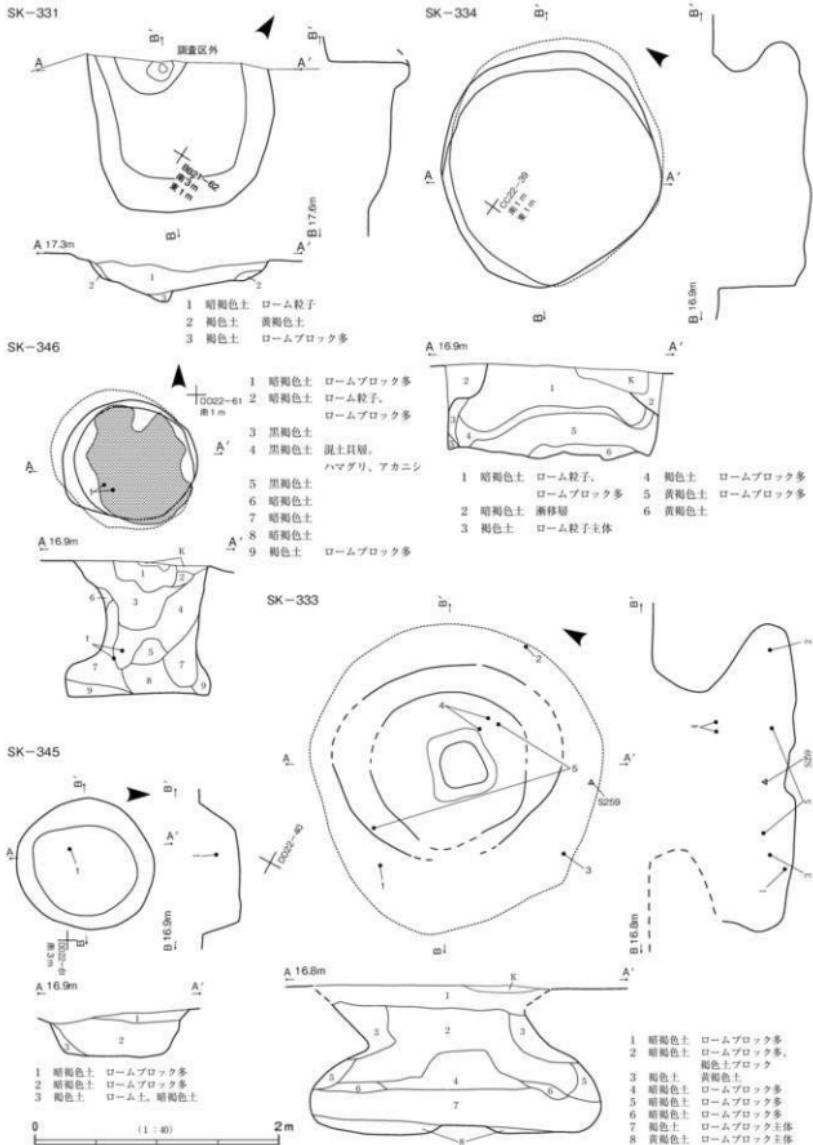
台地北東部のCC22-59グリッドに位置する。SI-133と重複し、より古いかと思われるものの、断定し得ない。西半分が重複しており、全体形状は不明であるが、残存部からして稍円形となろう。規模は径約1.3m、深さは25cmほどである。覆土はほぼ水平堆積であり、上から暗褐色土次いで褐色土が堆積していた。

遺物はわずかな一括遺物のみで、図示できる遺物はなく、黒浜式のSI-133との新旧関係も不明であるため帰属時期は確定できない。

SK-348 (18) SK-034 (第80図、図版4)

台地北東部のCC22-27グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿形である。規模は攢乱を受けているため推測ではあるが、径約1m、深さは約20cmである。覆土は暗褐色土次いで褐色土が堆積していた。

出土した遺物はなく、帰属時期は不明である。



第79図 繩文時代土坑 (10)

SK-349 (18) SK-035 (第80・85図、図版14・19・52)

台地北東部のCC21-94グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は縦長の箱形となる。規模は径約0.9m～1.0m、深さは60cmほどである。覆土は、褐色土が窪み状に堆積したなかに貝層が形成されており、その上に土器を含む暗褐色土が覆っている。

遺物は少ないながらも大きな土器片が見られた。土器の1・2は附加条縄文を施文する。1は、口縁部から胴下半部の1/4が遺存する。推定口径22.4cmである。口唇部に工具による凹文を巡らす。附加条2種を羽状に施文する。ミミズ腫れ状の粘土痕跡が観察される。2は底部で、底径8.8cmである。軸縄不明の附加条縄文を施文している。貝層中から出土し、器面が白っぽく変色している。図示した土器は黒浜式で、本跡の帰属時期を示すものであろう。

SK-350 (18) SK-036 (第80・85図、図版14)

台地北東部のCC21-94グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は椀形である。規模は径約1.2m、深さは35cmほどである。覆土は底面に褐色土が浅く堆積した上を暗褐色土が厚く占めている。

深鉢1点を図示した。1は口縁部を欠く以外は遺存状態がよく、全体の2/3が遺存し、現高19.0cm、底径10.9cmである。一本引き沈線で縦に6単位に区画し、葉脈文を施文している。黒浜式で本土坑の帰属時期を示すものであろう。

SK-351 (18) SK-037 (第80図、図版14・15)

台地北東部のDD22-52・62グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は全体に凹凸のある箱形である。規模は径1.1m、深さは60cmである。底面は2段となり、その段差は約20cmであった。覆土は壁付近を除きほぼ暗褐色土の單層である。

出土した遺物はなく、土坑の時期確定はできない。

SK-352 (18) SK-038 (第80図、図版14・15)

台地北東部のDD22-52グリッドに位置する。平面形状は円形、断面形状は幾分スロープをなす箱形である。規模は長径1.2m、短径1.0m、深さ約35cmである。覆土は壁～底面付近を除き暗褐色土の單層である。

出土した遺物はなく、土坑の時期確定はできない。

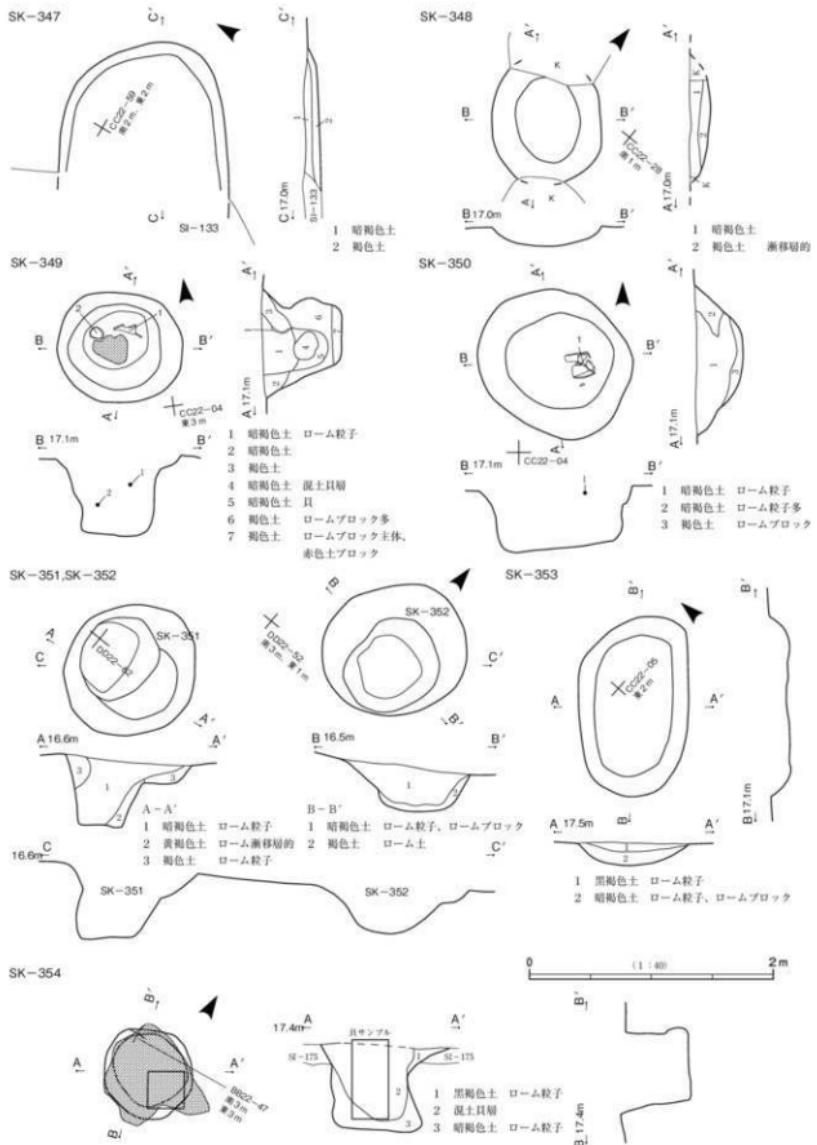
SK-353 (18) SK-039 (第80図、図版14)

台地北東部のCC21-95・CC22-05グリッドに位置する。平面形状は梢円形、断面形状は皿形である。規模は長径1.4m、短径0.9m、深さは最大で20cmほどである。覆土の状況は不明である。

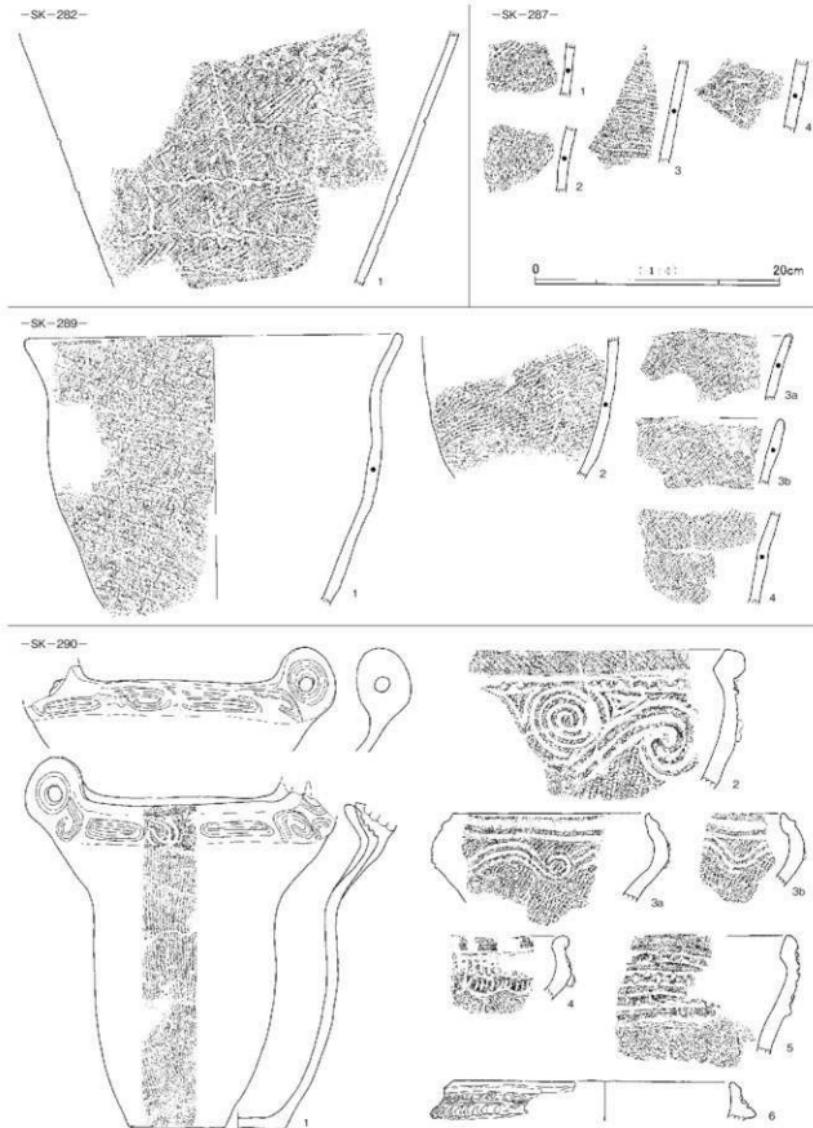
遺物はわずかな縄文土器片と剥片1点のみで、図示できる遺物はなく、土坑の時期確定は難しい。

SK-354 (17) SK-040 (第80図、図版6・10)

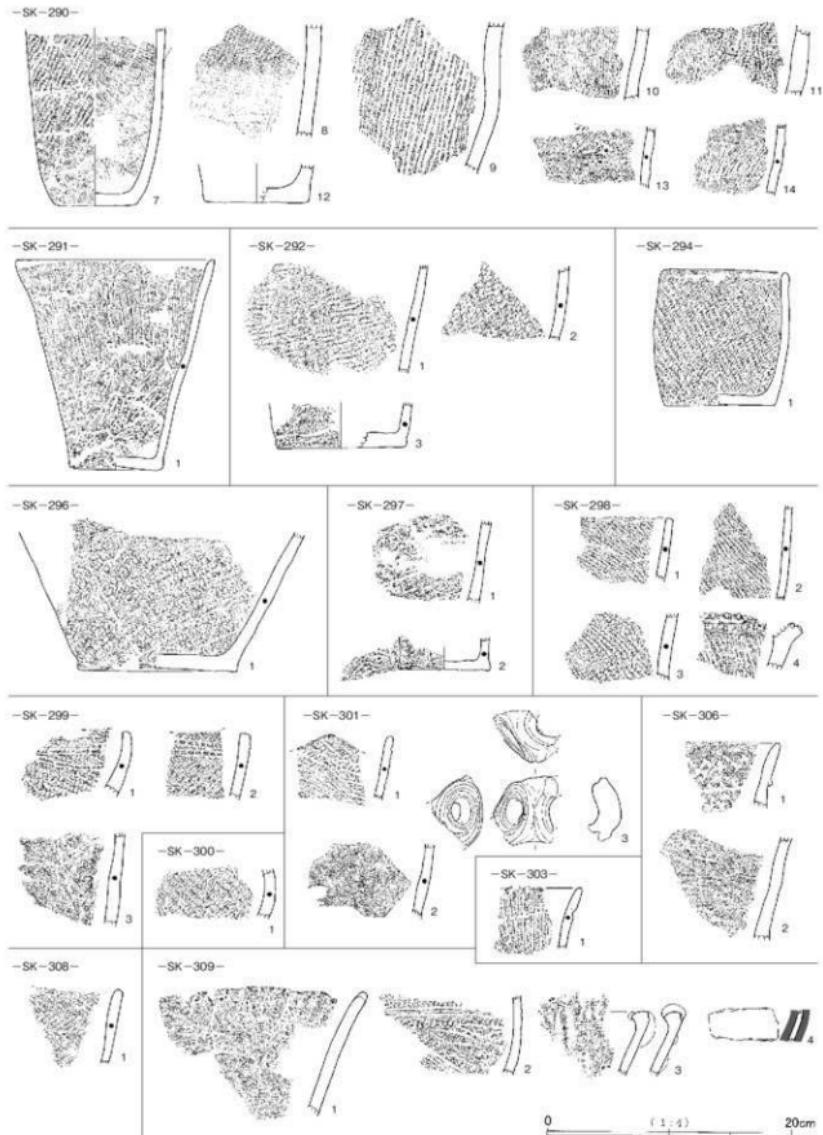
台地北東部のBB22-47グリッドに位置し、SI-175内に所在する。土層断面から住居廃絶後に掘り込まれたと判断され、土坑内に貝が廃棄されていた。平面形状は円形、断面形状は深い箱形である。規模は径70cm、深さ70cmであった。暗褐色土が土坑内に窪地状に堆積した上に混土貝層が上面まで形成されている。SI-175を壊して構築しているSI-149にも貝層が確認された。貝種組成が類似しているため、SI-149と本土坑の新旧関係は不明だが、SI-149への廃棄と同時に行われた可能性が高く、黒浜式が本土坑の帰属時期の可能性が高い。また、SI-175で呈示した土器に貝殻の付着痕跡が観察されるものがあり、本土坑に伴うものであった可能性がある。



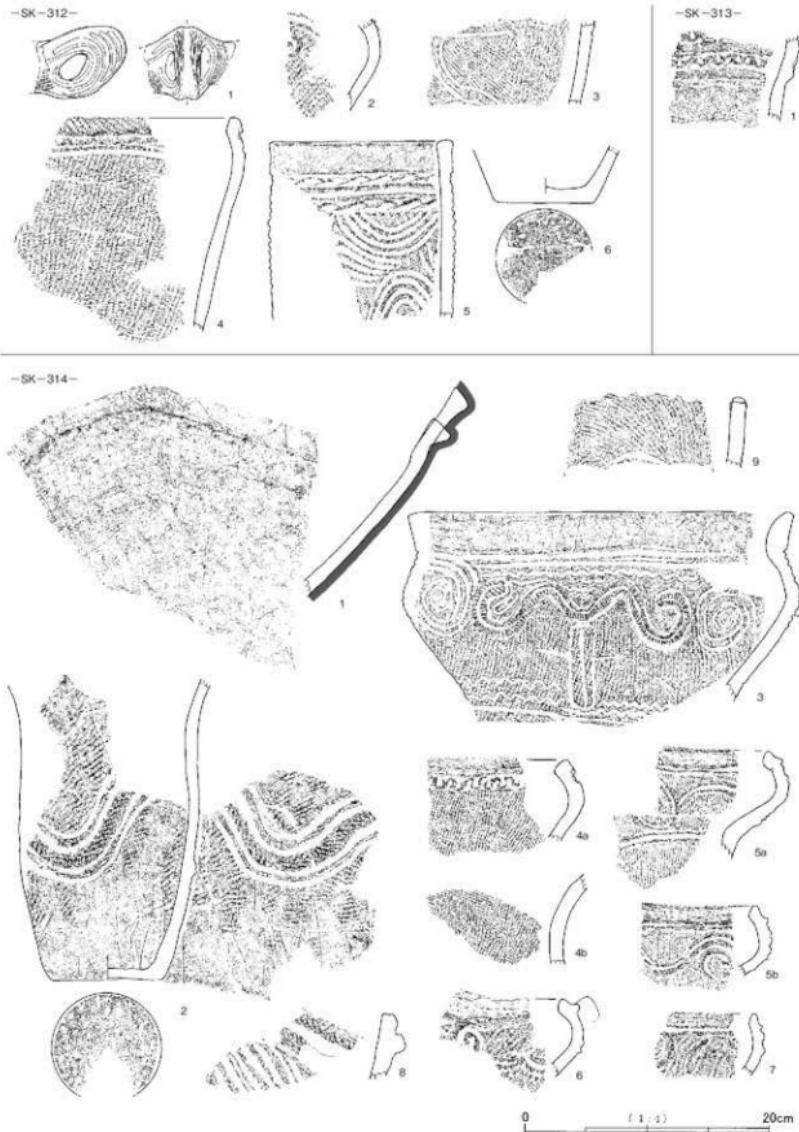
第80図 繩文時代土坑 (11)



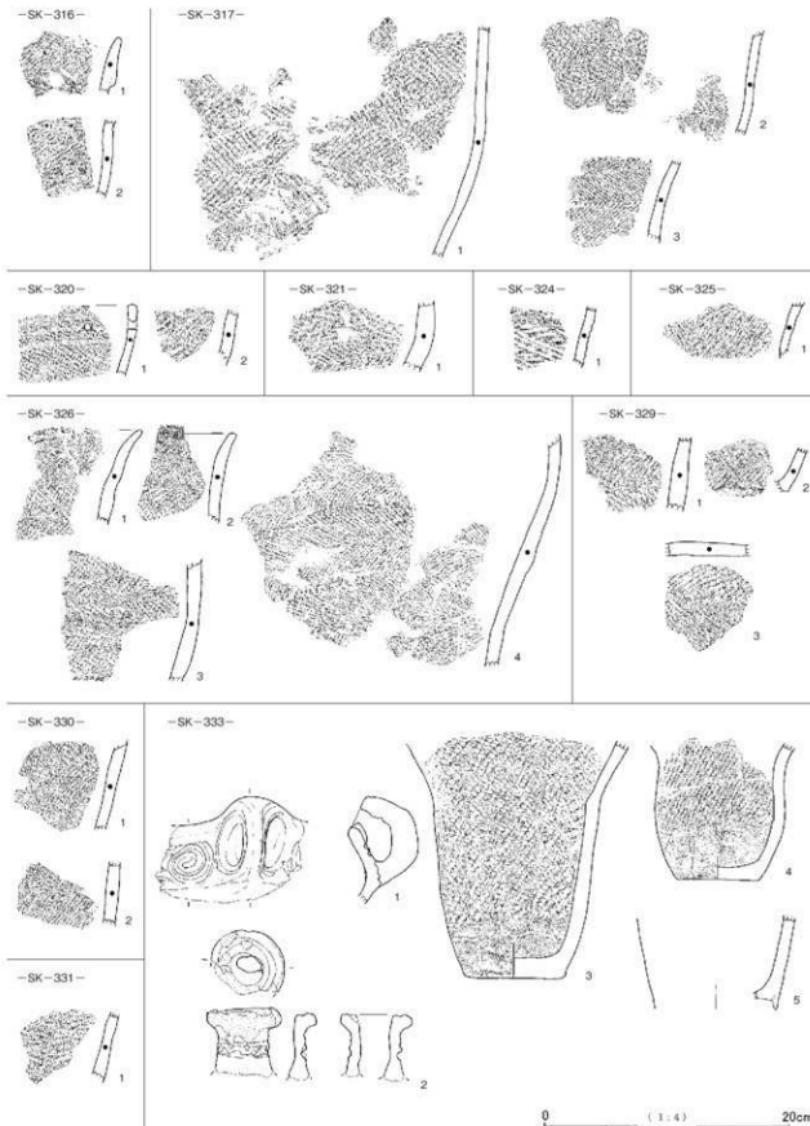
第81図 繩文時代土坑出土土器 (1)



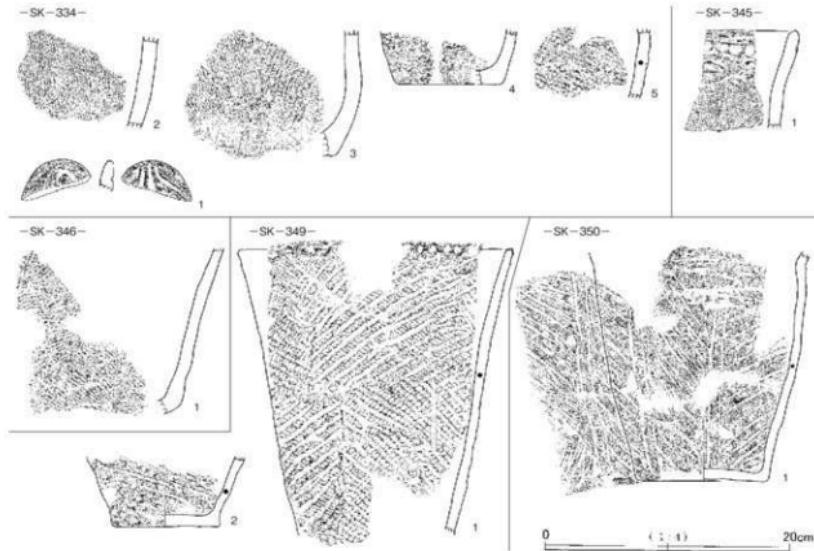
第82図 繩文時代土坑出土土器（2）



第83図 繩文時代土坑出土土器（3）



第84図 繩文時代土坑出土土器 (4)



第85図 繩文時代土坑出土土器（5）

第3節 遺構外出土縄文土器（第86～88図、図版53～55）

遺構外出土土器は遺構の時期を反映してそのほとんどが、花積下層式または黒浜式のいずれかであった。このため、花積下層式、黒浜式について大グリッドごとの重量計測を行った結果、BB22グリッドで花積下層式が52.4kg、黒浜式が24.6kgともっとも多く出土し、次ぎに集中するグリッドは花積下層式がAA22、黒浜式がCC22で、遺構の時期別分布と同様の状況がみられた。

条痕文系土器 1・2

1・2は、貝殻条痕文を施した土器で、表のみに観察される。

花積下層式 3～37

3～6は突帶で区画するものである。3は口縁部に沿って隆起線を貼り付け、撲糸側面圧痕文を付随させる。地文は無節Lである。4は口縁部を隆起線で縦横に区画する。末端処理を施した無節しを地文としS字状の痕跡を残す。被熱により荒れている。5は単節RL-LRによる羽状縞文を地文とし、口縁部に沿って貼り付けた隆起線の上下に連続刺突文を施す。6は突起部分で、横方向の隆起線を多段に重ね、これに沿って刺突を施している。

7～10は撲糸側面圧痕文と刺切文などの刺突文による意匠を施すものである。7～9は折り返し状の口縁部である。7は撲糸側面圧痕文で口縁部から頸部を横方向に区画し、棒状工具による連続刺突文を加える。区画内には径1cmほどの竹管状工具による円形文をコンバス文の手法により充填している。8は口縁部に撲糸側面圧痕文と連続刺突文を平行に巡らし、口唇部には撲糸側面圧痕文で三角形に区画した中を連続刺突文で充填している。また口唇部には押捺を巡らしている。9は撲糸側面圧痕と刺切文を口縁に沿って平行に巡らす。口端部にも刻みを施す。10は口縁部下を2条の隆起線で区画し、間に撲糸側面圧痕文に

よる麻手状文を施文する。また隆起線の下側には連続刺突文を施している。

11~16は折り返し状口縁のものである。11~15は口縁部断面が刃状になる。11は口端部と口縁部下端に刻み目を施し、口縁部には山形文を断続的に施文する。12は一本引き沈線により口縁部に入組鋸歯状文を施文する。11は口縁部下に単節LR・RLによる羽状繩文、12は単節RLを施文している。13は口縁部に鋸歯状に沈線を巡らす。また口唇部に刻み目、口縁部下端には縱方向の刺突を巡らしている。頸部は撫糸側面圧痕文を施文して刺切文を充填する。14は肥厚した口縁部片で、単節RL・LRを羽状に施文し、口縁部下端に列点状の連続刺突文を2段巡らす。15・16は単節繩文LRとRLで羽状繩文を施文し、16は節の大きさの違う原体を用いて羽状繩文に変化をつけている。17は無節RとLの羽状繩文を用いている。また、18は器面が磨耗しているため不明瞭であるが、やはり無節RとLの羽状繩文を施文しているようである。口唇部に押捺を刻み目状に巡らす。

19~25も羽状繩文を施文するものである。19は口縁部片で、0段多条RL・LRにより羽状繩文を等間隔に施文する。20~23は単節LR・RLの羽状繩文である。20は内面に条痕文がみられる。24は無節Lと無節L・Rの羽状繩文を交互に施文している。無節Lは末端を閉じた瘤状部分の軌跡がZ字状結節となる。裏面に条痕文様の強い擦痕が観察される。25は無節L・Rの結節羽状繩文を施した胴部片である。

26~35は貝殻による施文を行うものである。26~31はいわゆる貝殻背圧痕文を施文した口縁部片と胴部破片で、斜位に施したもののは擬繩文効果がある。31は貝殻の殻頂部で施文している。32は貝殻腹縁文を施す。33~35は底部で、3点とも底部には貝殻背圧痕文を施文する。33・35は胴部にも貝殻文を施していたものとみられる。34は胴部に単節RL・LRの羽状繩文を施文しており、単節RL末端を閉じた瘤状部分の軌跡がZ字状結節となる。

36は径の小さい底部で、先端部が窪む。

37は小破片であるが焼成が良好で、薄く仕上げた土器片である。外面に条線があり、指頭圧痕が観察される。木島式とみられる。

関山式 38~50

38は口縁部文様帶に粗雑な梯子状沈線で主幹文様を描出し、交点に瘤状貼付文を配する。また梯子状沈線間には刺切文を充填する。主幹文様の基本構図は不明である。

39は口縁部に集合角状突起をもち、附加条繩文を羽状に施文する。40は片口付深鉢の口縁部である。単節RLを施文する。41は単節LRを地文とし、口縁部に振り幅の大きいコンバス文を巡らす。

42・43は組紐繩文を地文とするもので、42はさらに半截竹管による平行沈線で意匠を施す。

44・46~48は環付末端繩文を羽状に施す。45は環付末端繩文帶の幅が異なる異間隔施文となる。

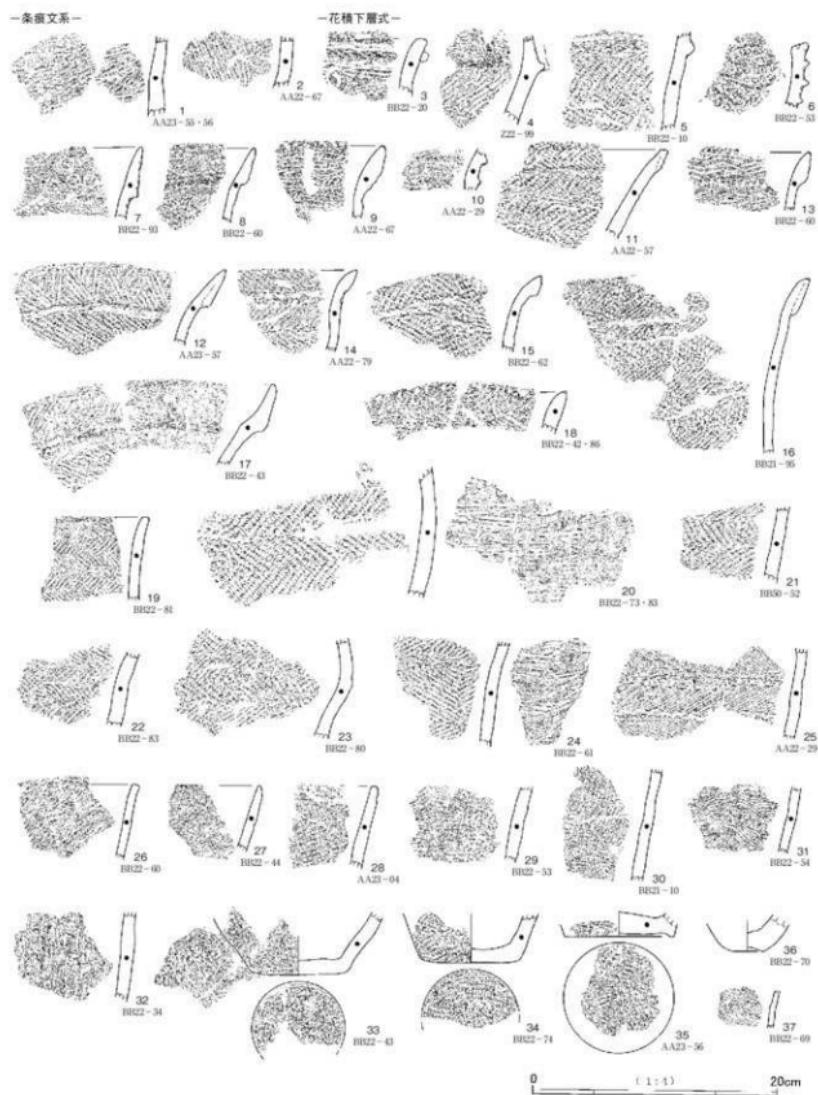
49は0段多条RL、50は0段多条RL・LRの羽状繩文を施している。

黒浜式 51~82

51は口縁部を無文帶とし、単節LRを施文する。

52~59は沈線による施文を主体とする。52は平行沈線文を口縁に沿って2段巡らし、縦位にも施す。53は口縁部に平行沈線で区画した間に緩やかなコンバス文を巡らしている。54・55は平行沈線で葉脈文を施したものである。56は平行沈線で鋸歯状、57は一本引きの沈線で斜格子状に施文しているとみられる。

60~63は地文繩文に押引文またはC字結節沈線文を波状口縁に沿って1段~3段巡らしている。63は口縁部を無文帶としている。地文は60が単節RL、61~63は軸繩不明の附加条繩文である。



第86図 遺構外出土縄文土器（1）

64は円形刺突文を垂下させる。地文縄文は単節RLである。

65・66は地文縄文に、横位の沈線による施文を多段に重ねる植房式系である。65は櫛歯状工具による波状文と平行沈線を交互、多段に重ねている。66は棒状工具による沈線である。

67は区画に沈線ではなく撚糸Rによる側面圧痕を使用し、地文に無節Lを施文している。68は纖維の混入が多く、施文も浅いため、無節L、単節LRのいずれか不明である。69は無節R・Lによる羽状縄文を施文している。70は附加条2種を羽状に施文する。71は緩んだ附加条縄文、反撚LLのいずれか不明である。72は単節LR、73は単節RLを施文する。

74は深鉢の胴下半部から底部が1/3周遺存する。底径6.0cm、現高16.6cmで、内面は磨いており、器壁が薄い。単節RLを施文している。

75・77・78・82は附加条縄文を施文した胴部片で、75・78は附加条1種、77は附加条2種、82は網目状の附加条3種である。

76は無節Lと単節RLで羽状縄文を施文しているとみられる。79は羽状縄文を施文し、裏面には貝殻条痕文と擦痕文がみられる。80は単節RLを施文する。

81は無文の口縁部片で、鉢形を呈すると思われる。

諸磯式 83~88

83は波状口縁で、地文単節RLに葉脈文を施文し、縦に円形竹管刺突文を垂下させている。

84は半截竹管による各種の文様が施される。横位の沈線間に刺突文を充填し、その上部には木の葉状の意匠を描出している。

85は口縁部片で、胎土に白色粒子と雲母粒子を含む。単節RLを施文する。86は単節RLを施文する。破片上端付近に横位のC字結節沈線を巡らし、その上は無文帯となっている。87は単節RL・LRの結束羽状縄文を施文している。88はC字結節沈線文による意匠を描く。

浮島式 89~96

89は撚糸文Rを施文する。90は口縁部を無文帯として2段の結節沈線文で区画し、その下は半截竹管による平行沈線を斜位に施文する。91は地文に撚糸文Rを施文しており、破片上端部にC字結節沈線文が観察される。92・93は沈線による施文を行うもので、92は平行沈線による波状文と2段の平行沈線文を横位に巡らす。93は横位に巡らした結節沈線文の上下に平行沈線による波状文を施文している。94は横位に刻み目を施した隆帯を巡らし、その上下に結節沈線を沿わせている。95は波状貝殻文を密に施文したものである。96は底部で、下端部が外方に張り出す形態である。

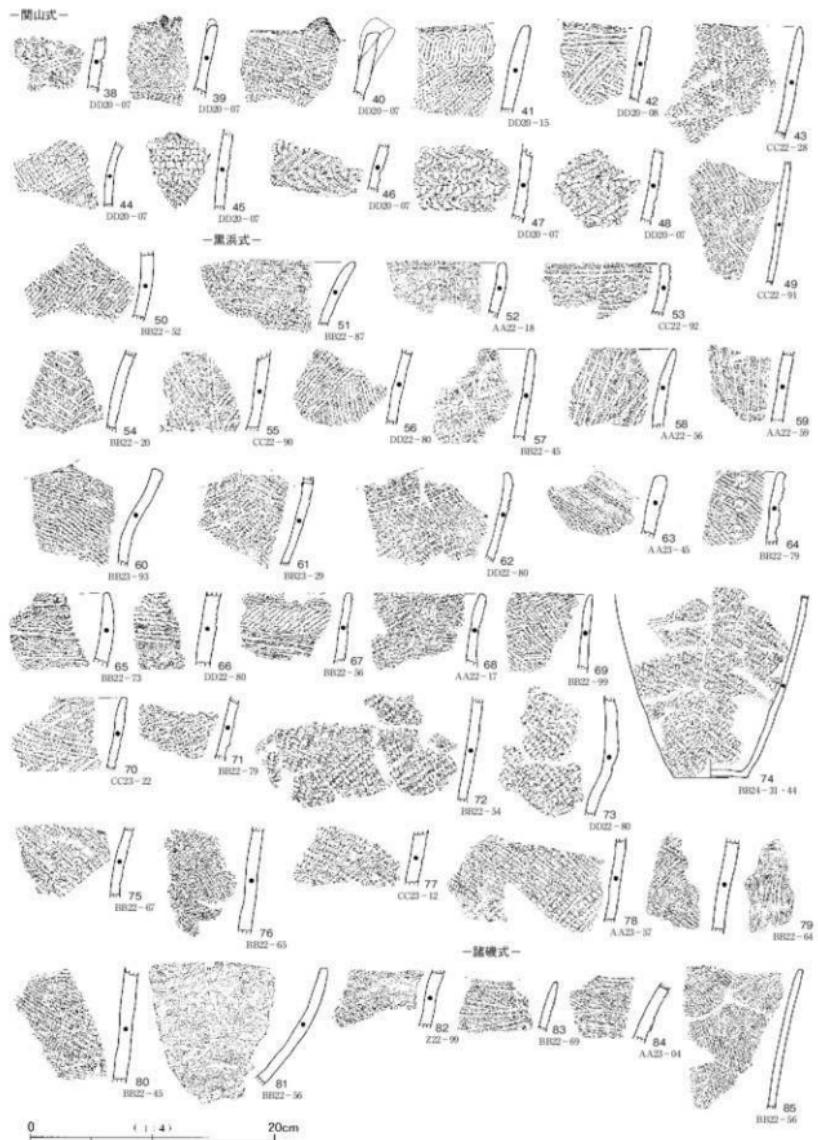
興津式 97~100

97は口縁部付近の破片で、口端部は欠損する。折り返し口縁部の下端に凹凸文を施文し、以下には細沈線による区画内に、貝殻腹縁刺突文を充填した磨り消し貝殻文を施文している。98は沈線による区画内に、貝殻腹縁刺突文を充填した磨り消し貝殻文を施文している。99は沈線による区画中に無節Lを充填している。100は平行沈線文で木の葉状の意匠を描き、貝殻背圧痕文を充填する。破片左下が磨耗しており故意の可能性も考えられる。

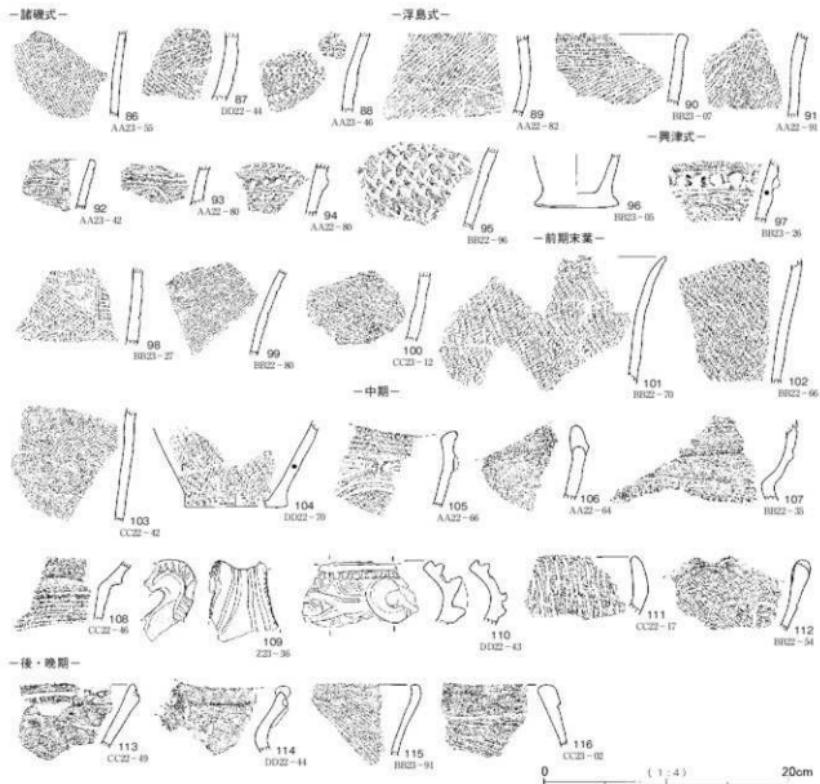
前期末葉 101~104

101・102は単節RLを施文する。103は単節RLのS字結節縄文だが、摩滅しているため不明瞭である。

104は胴下半部で、1/3周が遺存する。推定底径は7.0cmである。下端部が外方に張る形態で、単節RLを施



第87図 遺構外出土縄文土器（2）



第88図 遺構外出土縄文土器（3）

文している。

中期 105~112

105は波状口縁になるとみられ、口縁部に沿って2段の角押文を施し、口端部には刻みを巡らす。口縁部下を隆帯で、横位に区画しており、隆帯に沿って沈線を施している。隆帯区画の下には沈線で意匠を描く。地文は単節縄文LRである。雲母粒子と白色粒子を多量に含む胎土で、五領ヶ台式土器であろう。

106・107は阿玉台式土器、108は勝坂式土器でいずれも胎土に雲母粒子・白色粒子を多量に含んでいる。106は口縁部で、波状口縁になる。阿玉台 I a式である。107は括れをもつ頸部で、頸部付近に爪形文、肩部に隆帯区画を貼り付けていたとみられ、隆帯に沿って単列の角押文を施している。阿玉台 I b式である。108は口端部を欠損するが有段口縁の一部で、横位の角押文を多段に巡らしている。勝坂 1式である。

109は橋状突起の一部で、突起の形態に沿って沈線を沿わせ、側縁に刻みを施す。胎土に雲母・白色粒

子を含む。勝坂式・阿玉台式末葉の土器、あるいは中峠式土器と思われる。

110～112は加曾利E式土器である。110はキャリバー形深鉢の口縁部の一部で、口縁部に沿って隆帯を巡らし、押引文を沿わせている。その区画内には隆帯による渦巻文などの意匠を施すが、剣先状の意匠に大木8b式の影響がみられる。地文に単節RLを施している。111は縫位の集合沈線を施している。112は波状口縁の波頂部が双頭状を呈す。地文に単節LRを施し、胴部には磨消懸垂文が垂下する。110は加曾利E I式、111・112は加曾利E II式である。

後期・晩期 113～116

113は口縁端部の沈線上に、欠損しているが豚鼻状の突起が付されたと思われる。胴部には沈線と縫位の単節LRが施される。堀之内1式である。114は波状口縁で、欠損しているが波頂部下に凹隆帯によりC字状の意匠文が付されたと思われる。網取式系の称名寺II式あるいは堀之内1式土器である。

115・116は安行式土器の粗製土器で、116は内傾する器形となる。無文の口縁部以下には斜位の条線文が施される。

第4節 土製品（第89図、図版56・68、第4表）

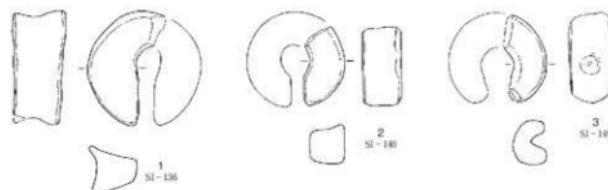
土製品は耳飾3点、円板8点、土器片錐49点を出土した。このほか粘土塊、貝化石については写真図版のみ掲載した。

1～3は土製块状耳飾である。いずれも1/2～1/3が欠損している。1は鈍い橙色で、側面中央部が窪んでいる。3は側面に穿孔途中的痕跡があり、垂飾品などに転用しようとしていた可能性がある。いずれも黒浜式の堅穴住居から出土し、遺構に伴うと考えられる。

4～11は土製円板である。黒浜式を利用したものと中期の土器片を利用したものがある。4～6は黒浜式で、遺構の時期と合致する。

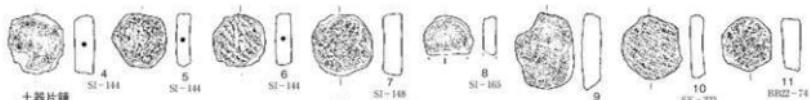
土器片錐は、49点中14点が黒浜式、35点が中期阿玉台式～加曾利E式で、中期土器を利用したもののが圧倒的に多かったが、黒浜式土器を利用したものも存在し、混入品と考えられるものも存在するが、概ね出土遺構の時期と合致し、その時期につくられたと考えられる。

土製耳飾

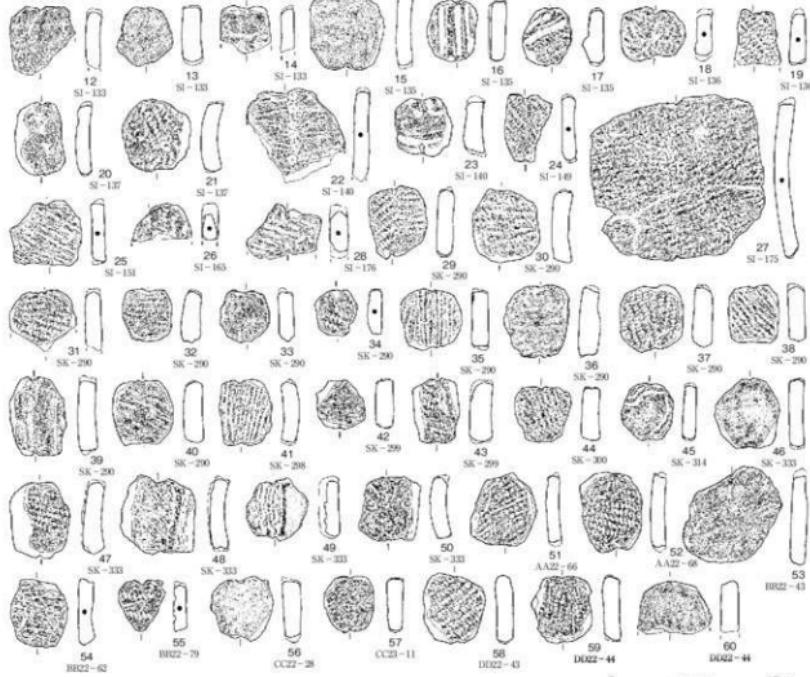


0 (1 : 2) 5cm

土製円板



土器片錠



0 (1 : 3) 10cm

第89図 繩文時代土製品

第4表 框文時代土製品類計測表（第89図、図版56・68）

番号	遺構	III遺構	遺物番号	種類	長mm	幅mm	厚mm	重量g	備考	番号	遺構	III遺構	遺物番号	種類	長mm	幅mm	厚mm	重量g	備考	
1	SI-136	14	SI-004	0017	耳飾	35.4	24.0	15.7	85	純S-銀色	35	SK-290	14	SK-003	0001	上器片鱗	37.0	37.3	106	18.7 中輪～加 曾利E
2	SI-140	14	SI-008	0096	耳飾	24.5	13.0	12.0	38	灰黃褐色	36	SK-290	14	SK-003	0066	上器片鱗	43.7	38.7	130	27.6 阿玉台
3	SI-149	14	SI-019	0001	耳飾	27.0	13.0	13.5	39	赤褐色	37	SK-290	14	SK-003	0072	上器片鱗	39.6	39.1	110	20.9 中輪～加 曾利E
4	SI-144	14	SI-012	0001	円板	36.4	33.7	12.8	17.6	黒済	38	SK-290	14	SK-003	0073	上器片鱗	35.6	36.9	107	15.3 中輪～加 曾利E
5	SI-144	14	SI-012	0001	円板	32.3	32.8	8.4	10.3	黒済	39	SK-290	14	SK-003	0065	上器片鱗	48.2	31.1	113	25.2 中輪～加 曾利E
6	SI-144	14	SI-012	0001	円板	32.0	31.2	10.8	11.9	黒済	40	SK-290	14	SK-003	0012	上器片鱗	38.5	36.4	122	23.6 中輪～加 曾利E
7	SI-148	14	SI-018	0001	円板	37.4	36.0	11.5	21.7	中期	41	SK-298	14	SK-012	0001	上器片鱗	40.2	32.5	96	17.3 中輪～加 曾利E
8	SI-165	14	SI-034	0001	円板	30.3	23.5	8.2	7.0	阿玉台	42	SK-299	14	SK-013	0001	上器片鱗	30.0	30.8	109	11.4 中期
9	SK-312	16	SK-001	0014	円板	46.3	36.0	11.4	18.6	中期	43	SK-299	14	SK-013	0001	上器片鱗	39.7	28.5	124	17.8 中輪～加 曾利E
10	SK-333	18	SK-019	0001	円板	37.4	35.3	8.2	13.3	加曾利E	44	SK-300	14	SK-014	0001	上器片鱗	33.8	34.7	103	15.9 中輪～加 曾利E
11	BB22-74	14	BB22-74	0001	円板	32.2	31.5	11.5	11.2	黒済	45	SK-314	16	SK-003	0001	上器片鱗	34.9	31.3	81	11.5 阿玉台
12	SI-133	14	SI-001	0001	土器片鱗	41.8	38.8	8.9	17.4	阿玉台	46	SK-333	18	SK-019	0001	土器片鱗	43.5	38.2	94	21.7 中輪～加 曾利E
13	SI-133	14	SI-001	0001	土器片鱗	35.7	32.1	12.8	16.4	加曾利E	47	SK-333	18	SK-019	0001	土器片鱗	47.5	35.5	116	25.1 中輪～加 曾利E
14	SI-133	14	SI-001	0001	土器片鱗	29.3	30.4	8.7	9.5	阿玉台	48	SK-333	18	SK-019	0001	土器片鱗	47.6	46.0	107	24.2 中輪～加 曾利E
15	SI-135	14	SI-003	0037	土器片鱗	49.6	45.6	9.2	27.6	中輪少部	49	SK-333	18	SK-019	0001	土器片鱗	38.3	37.3	123	15.7 阿玉台
16	SI-135	14	SI-003	0001	土器片鱗	37.6	29.8	11.9	14.7	加曾利E	50	SK-333	18	SK-019	0001	土器片鱗	39.6	36.1	101	19.7 中輪～加 曾利E
17	SI-135	14	SI-003	0001	土器片鱗	35.6	30.3	14.3	14.2	中輪中部	51	A2A2-66	17	A2A2-66	0001	上器片鱗	44.0	37.2	7.7	16.7 黒済
18	SI-136	14	SI-004	0001	土器片鱗	33.5	39.6	10.4	14.6	黒済	52	A2A2-68	17	A2A2-68	0001	上器片鱗	48.6	37.7	8.0	18.3 中輪～加 曾利E
19	SI-136	14	SI-004	0001	土器片鱗	33.8	28.2	10.0	10.3	黒済	53	BB22-43	14	BB22-43	0001	土器片鱗	56.9	52.1	91	35.1 黑済
20	SI-137	14	SI-005	0023	土器片鱗	44.9	29.2	8.8	15.7	阿玉台	54	BB22-62	14	BB22-62	0001	土器片鱗	40.7	35.2	92	14.9 黒済
21	SI-137	14	SI-005	0001	土器片鱗	43.5	41.5	9.9	23.2	中輪中部	55	BB22-79	14	BB22-79	0001	土器片鱗	31.2	28.2	7.5	6.7 黒済
22	SI-140	14	SI-008	0002	土器片鱗	53.3	61.2	9.8	31.4	黒済	56	CC22-28	18	CC22-28	0001	土器片鱗	40.3	38.1	113	20.1 中期
23	SI-140	14	SI-008	0001	土器片鱗	36.0	33.5	11.5	16.4	阿玉台	57	CC22-11	14	CC22-11	0001	土器片鱗	34.6	30.4	102	12.4 中輪～加 曾利E
24	SI-149	14	SI-019	0001	土器片鱗	41.8	27.0	8.4	10.5	黒済	58	D022-43	16	DD22-43	0002	土器片鱗	43.1	38.5	10.3	21.4 中輪～加 曾利E
25	SI-151	14	SI-021	0001	土器片鱗	40.3	43.4	8.1	15.9	黒済	59	DD22-44	16	DD22-44	0001	土器片鱗	41.0	35.3	10.5	19.3 中輪～加 曾利E
26	SI-165	14	SI-034	0001	土器片鱗	22.3	36.2	9.8	9.0	黒済	60	DD22-44	16	DD22-44	0001	土器片鱗	33.4	44.4	11.3	19.6 中期
27	SI-175	17	SI-010	0002	土器片鱗	94.5	105.3	9.9	121.9	黒済	61	SI-001	0155	二次加工片	32.9	42.0	12.5	26.0		
28	SI-176	17	SI-011	0001	土器片鱗	32.0	44.1	10.2	14.2	黒済	62	SI-150	14	SI-020	0001	土壤				4.1
29	SK-290	14	SK-009	0065	土器片鱗	43.0	35.1	10.5	18.5	中輪～加 曾利E	63		8	SI-001	0169	土壤				10.6
30	SK-290	14	SK-003	0001	土器片鱗	44.0	41.0	11.3	26.6	中輪～加 曾利E	64		8	SI-001	0109	土壤				3.6
31	SK-290	14	SK-003	0001	土器片鱗	37.3	40.3	9.7	14.4	中輪～加 曾利E	65		8	SI-001	0174	土壤				9.8
32	SK-290	14	SK-003	0007	土器片鱗	32.1	30.5	12.2	14.0	中輪～加 曾利E	66		8	SI-001		不明				13.5
33	SK-290	14	SK-003	0001	土器片鱗	31.9	31.2	8.9	10.3	阿玉台	67		14	不明		貝化石				18.5
34	SK-290	14	SK-003	0001	土器片鱗	28.8	26.1	9.0	6.8	黒済	68	SI-176	17	SI-005		貝化石				14.64

第5節 石器（第90～120図、第5～7表、図版57～67）

縄文時代の石器は合計2,650点（遺構内1,918点、遺構外732点）出土した。このうち礫や剥片に二次加工が施された狭義の石器（利器）は939点で、残りの1,711点は、剥片類（剥片・碎片・削片）・石核・軽石類である。

以上の石器の出土数量と内訳については、遺構と器種の関係を第5表に、石材と器種の対応関係を第6表にそれぞれ示したので、適宜、参照されたい。

1 有舌尖頭器 1

遺構外から1点出土した。石材は黒色頁岩である。上下両端の一部が欠損している。表裏は平坦な剥離面で被われ、縁辺部は鋸歯状を呈している。形態的には、細身の「小瀬ヶ沢型」に属する。

2 石鏃 2～68

遺構内から60点、遺構外から21点、合計81点出土した。基部に抉りのある凹基無茎鏃を主とするが、このほかに、菱形鏃1点（54）、トロトロ（異形部分磨製）石鏃1点（65）、雁股状の直剪鏃1点（41）、有茎鏃1点（64）、および基部が直線的な平基無茎鏃2点（43・61）がある。

菱形鏃の用材は無色透明の信州系であり、同種の資料としては、群馬県白井十二遺跡と埼玉県宮林遺跡がある（斎藤2008・宮井ほか1985）。このうち白井十二遺跡では蛍光X線分析の結果、「諏訪産」と認定されている（斎藤2008）。帰属時期については、おそらく縄文草創期後半（押圧縄文期）であろう。トロトロ石鏃は先端の欠損後に、表面が磨耗している。研磨痕は全くみられず、器面の凹凸にかかわらず均一にトロトロとしており、砥石等による通常の研磨とは一線を画している。時期は早期中葉（押型文期）と考えられる。県内の資料としては、この他に成田市天神峰最上遺跡（空港No64遺跡）がある（宮ほか2001）。直剪鏃は神津島産黒曜石製を用材としており完形品である。縄文前期に稀にみられ、類例としては福井県鳥浜貝塚や富山県向山島遺跡の出土例がある（鳥浜貝塚研究グループ1979、西井1973）。有茎鏃はチャート製であり比較的肉厚である。時期としてはおそらく後・晚期であろう。

主体となっている凹基無茎鏃は、抉りの深浅、長幅関係及び尖頭部周辺の形状により、さらに細分が可能であり、なかには先端が錐のように細長い「先端突出形」（25・29・34・62・63ほか）も7例ある。凹基無茎鏃の大きさ（完形品）は、長さ1.1cm～2.4cm、幅1.1cm～1.9cm、厚さ0.2cm～0.6cm、重量0.30g～1.58gの範囲にあり、平均値は長さ1.8cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重量は0.8gとなっている。ちなみに、隣接する富士見遺跡は、長さ1.2cm～3.3cm、幅0.5cm～2.0cm、厚さ0.2cm～0.6cm、重量0.1g～2.0gの範囲にあり、本遺跡の石鏃とよく調和する。

全体の遺存状況については、完形品が37点、欠損品44点となっており欠損率は約54%である。欠損部位は先端12点、片脚13点、両脚5点、先端+片脚8点、先端+両脚1点、上下両端1点のほか、破片4点（先端部片1点・片脚片2点・部位不明1点）となっており、石鏃などの刺突具に特有の衝撃剥離（先端部の使用痕）も、縱溝状剥離が6例（17・26・28・46・55ほか）、折れ+縱溝状剥離が1例（66）みられる。

石材にはチャートを主として、黒曜石、ガラス質黑色安山岩、トロトロ石、ホルンフェルス、メノウ、流紋岩質凝灰岩、緑色凝灰岩がある。この中で黒曜石の産地については、肉眼判定ではあるが、信州系（8例）と神津島産（1例）の二種がみられた。

調整技術については総じて両面加工を基調としており、押圧剥離により平坦な器面と直線的な二側縁が作出されている。

第5表 繩文時代石器遺構別器種組成表

第6表 繩文時代石器石材別器種組成表

3 石鏃未成品 69~117

計186点出土した。素材が判明したものは35点を数え、その内訳は楔形石器（84・92・109・117ほか）と両極剥片（85・88・93・97ほか）が各13点、円鏃が5点（86・114ほか）、角鏃4点（91ほか）となっている。

欠損品はわずか30点で遺存率が高い。完形品156点の大きさ（完形品）は、長さ0.9cm～4.9cm、幅0.8cm～3.8cm、厚さ0.2cm～1.6cm、重量0.34g～29.45gの範囲にあり、その平均値は、長さ2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm、重量3.65gである。平均値はいずれも石鏃を上回っており、特に厚さと重量の差異が顕著である。

石材は、チャートが圧倒的であり、全体の80%以上を占める。このようなチャート主体の構成は、石鏃等の剥片石器や楔形石器の石材傾向とよく符合する。

4 楔形石器 118~178

計224点出土した。平面形は四辺形を基本とする。完形品の中には、全長が幅の2倍を超えるものが13点（137・176ほか）あるが、少数派である。また、扁平なものが多く、上下両端ないしは左右両端は階段状の小剥離痕が対をなし、側面形は紡錘形を呈する。

素材は小円鏃110点と角鏃9点を識別し得た。このうち円鏃は遺跡近傍の砂礫層、角鏃はいずれもチャートであり栃木県南部の露頭からもたらされた可能性が高い。

長さは0.9cm～6.4cm、幅0.5cm～4.7cm、厚さ0.3cm～2.6cm、重量は0.20g～75.00gの範囲にあり、平均値はそれぞれ2.6cm、2.1cm、0.9cm、7.55gとなっている。

遺存状況は完形品が189点、破損品が35点を数え、比較的の遺存率が高い。

石材はチャートが8割を超え、他を圧倒する。このようなチャート偏重の傾向は石鏃と同様である。

本遺跡では、未完成のあり方から扁平なチャートの小円鏃をもとに石鏃の素材生産が行われたことは自明である。これら的小円鏃は通常の方法では割り取りが困難なため、両極打法が用いられたようである。そして、剥離の途上で生じた両極剥片・削片と最終的に残された扁平な石核（形石器）の双方が使われている。

なお、関連資料として、楔形石器から剥離された両極剥片164点と削片34点が出土した。石材は両者を併せて、チャートが約93%に達している。また、後述するように磨石類、台石には楔形石器の製作時に生じた損傷が垣間みられる。

5 石匙 179~183

遺構内から5点、遺構外から1点出土した。石匙は縄文時代草創期後半（爪形文期）に登場した後、早期末葉に一般化し前期に盛行するといわれているが、本遺跡では少数にとどまる。形態は縦型3点、横型2点、及び不明1点となっている。いずれも撮み状の小突起をもち、先端部は素材剥片の鋭利な縁辺をそのまま残している。石材はチャート4点、黒曜石・ホルンフェルス各1点となっている。

179・182・183は縦型の石匙である。179の表裏の中央部には自然面が残されている。信州系黒曜石の扁平な角鏃を素材としており、二次加工が全周を回る。179は明確な撮み部が作出されておらず石匙というよりも削器に近い。チャート製の縦長剥片を素材として表裏の一側縁に連続的な平坦剥離がみられる。183はメノウ製の石匙である。両面加工であり平坦な剥離で覆われている。先端部には欠損後再加工が部分的に施されている。

180と181は横型の石匙であり、いずれも側縁部の一端が欠損している。180はホルンフェルス製で横長

剥片を素材としている。二次加工により撮み部が作出されているが、そのほかは第一次剥離面をとどめている。181も横長剥片を素材としており、表裏に平坦剥離が施されている。石材はチャートである。

このほか図示しなかったが、先端部が欠損し、縦横の判別が不明な資料が1例ある。

6 石錐・石錐未成品 184~194

完成品が10点、未成品が2点出土した。石材はチャートを主としており、石材の使用傾向は石錐と同様である。二次加工は比較的急角度であり、先端部は、あまり尖銳ではない。186・189・190・192は完形であるが、184・185・187・188・191・193は先端部が欠損している。神津島産黒曜石製の189には、先端部に使用痕と考えられる顯著な磨耗痕が観察される。

194はチャート製の未成品である。先端部は製作途上のため鈍端をなす。

7 二次加工ある剥片・使用痕ある剥片

二次加工ある剥片とは二次加工が部分的であるため定形的な石器から除外されるものをいう。計23点出土した。大半は石錐の未成品の可能性が高いが断定はできない。石材はチャート10点、黒曜石3点、ホルンフェルス2点、ガラス質黒色安山岩・凝灰岩・頁岩・黒色頁岩・石英・ノジュール（團塊）・流紋岩・流紋岩質凝灰岩各1点である。

使用痕ある剥片には縁辺に連続的な刃こぼれが観察される。遺構外から3点出土した。いずれも石材はチャートである。

8 異形石器 195

「小形石匙様石製品」が1点出土した（久保田2012）。黒曜石製であり、図示したように一部が欠損している。

9 打製石斧 196~218

遺構内から16点、遺構外から12点出土した。石材はホルンフェルス16点、砂岩4点、流紋岩3点、安山岩2点、粗粒玄武岩・粘板岩・緑色凝灰岩各1点であり、ホルンフェルスの多用が特徴的である。

完成品の大きさは、長さ5.8cm~10.8cm、幅3.2cm~10.0cm、厚さ0.8cm~10.6cm、重量29.04g~490.00gの範囲にあり、平均値は長さ7.3cm、幅5.0cm、厚さ2.4cm、重量は105.80gとなっている。

石斧の調整剥片や未成品もないことから、基本的に完成品として遺跡内に搬入された模様である。

縄文時代の打製石斧の形態には、a 短冊形（長方形）、b 摊形（三味線の摺に似た形態のもの）、c 分銅形（上下両端が張り出し、中央部両側縁に抉りがあるもの）の3つの形態があり、短冊形は中期を中心前に期後葉から中期末葉に、摺形は早期後葉から前期中葉に、分銅形は中期中葉から晩期にかけて盛行する。

本遺跡では、摺形・分銅形各1点（200・208）のほか、扁平疊の一端に刃部を作出した疊石斧（196・197・204~206・210~212ほか）、鎧状石器に類似した片刃石斧（198・210・212・215）等がある。この中では、208の分銅形石斧が特筆される。この資料は縄文前期の土坑内から出土しており、周辺には同一時期の遺構が密集している。周知のとおり分銅形の出現の時期については二説あり、渡辺丈彦は前期中葉、芹沢清八は中期前半としている（渡辺2002、芹沢2012）。本遺跡の所見は前者を支持しているが、単体資料であること、覆土中の出土であることから、ここでは可能性の範囲にとどめておく。

全体的には本遺跡の打製石斧は定形化しておらず、縄文時代前期の一般的な特徴を備えているものといえる。また、扁平な疊を素材としており、二次加工は平坦剥離に近いものの、大半は素材の疊面や主要剥離面を大きく残しており、加工の範囲は両側縁と刃部に集中する傾向にある。このような疊石斧は基本的

に片刃であり範状石器を彷彿とさせ、分銅形・撥形・短冊形という3分類にもなじまない。

転用例は3例みられた。207と213は片面に研磨面が残されており、磨製石斧の転用例であることがわかる。石材は緑色凝灰岩と砂岩である。217は流紋岩製の磨石類の断片を再利用しており、片面に礫面を大きく残している。

10 磨製石斧・局部磨製石斧 219~233

磨製石斧は、都合24点出土した。やや下端部に向かって開く扁平石斧が大勢を占める。縄文時代前期(黒浜期)に特有の乳棒状磨製石斧は3点(229ほか)と、意外に少ない。

扁平石斧の中では、透閃石岩製の有孔磨製石斧(226)が特筆される。この資料の基部付近には貫通孔が穿たれており、表面は赤く変色している。ただし、劣化していないので、赤化は、被熱による焼成というよりも顔料が塗布された可能性が高い。刃部は器体に比べやや褪色しており、再研磨が施されたことが理解される。

石材は緑色岩が13点、その他が11点となっている。磨製石斧はホルンフェルスを主体とする打製石斧とは異なり比重が大きく、緑色岩などのより堅牢な岩石を多用しているが、このことは両者の機能的差異をよくあらわしている。

その一方で使用頻度の高さによりその多くは欠損しており、完形品は、わずか3点(225・226・229)にすぎない。この中の229は寸詰まりの形状から再加工品の可能性が高い。基部や刃部などの断片的な資料が大勢を占めている。

いずれの資料も刃部には、刃こぼれ、敲打痕、欠損などの損傷が認められるが、その中で228には刃部の表裏に線状痕がみられる。線状痕は刃部に対してやや斜めに交差しており、しかも両面にみられる。縦斧の機能を明確に示しており特筆される。

このほか関連資料として、局部磨製石斧が4点(230~233)出土した。いずれも「礫石斧」であり、小型の扁平礫を素材としており、一端を加工して刃部(片刃)を作り出し、研磨が施されている。石材には砂岩とホルンフェルスが使われている。

なお、本遺跡のような礫素材の局部磨製石斧については、かつては早期前半をピークとして、前期前半(黒浜期)をもって消滅するといわれていたが(小葉1983)、その後も数量を減じながらも存続していたようである。

11 磬器 234~236

計4点出土した。いずれも円礫を素材としており、一端に粗雑で部分的な加工が施されている。この中で石英製の235については、楔形石器の関連資料の可能性がある。刃部は片刃を基本とする。石材は、砂岩2点、安山岩・石英各1点となっており比較的多様である。なお、234については加工面が平坦でありスタンプ形石器の可能性もある。

12 磨石類 237~267

磨耗痕を有するものと、これに敲打痕や凹み痕が共存するものを抽出した。遺構内から106点、遺構外から84点出土した。礫石器のなかでは最も一般的な存在といえる。

完形品の平均的な大きさは長さ8.7cm、幅6.7cm、厚さ4.3cm、重量は363.60gである。素材は拳大の円礫であり、形態は隅丸方形(250・257・259・260ほか)、楕円形(244・246ほか)、円形(239・242・255・266ほか)の3種に区分される。石材は安山岩(多孔質安山岩を含む)が主体である。遺存状況は完形品

が35点、欠損品が155点となっている。このうち263は定角式磨製石斧、267は石皿の転用例である。

磨耗痕はほぼ全面に認められるが、凹み痕は表裏の中央、敲打痕は端部と表裏中央に偏在する傾向にある。

本遺跡の磨石類は、磨耗痕、敲打痕及び凹み痕の共存関係から以下のように分類される。

I類 器面に磨耗痕を残すもの（狭義の磨石）

II類 器面に磨耗痕と凹み痕を残すもの

III類 器面に磨耗痕と敲打痕を残すもの

IV類 器面に磨耗痕、敲打痕、凹み痕を残すもの

図示した資料のなかでI類は4点（249・254・255・263）、II類は5点（241・244・256・261・267）、III類は10点（237～239・243・247・248・258・264～266）、IV類は12点（240・242・245・246・250～253・257・259・260・262）となっており、狭義の磨石（I類）は僅少である。このことは、取りも直さず、磨く、敲くという行為が連続的な作業として成立していたことを物語っている。

なお、注目すべきことに239と266には表裏に楔形石器の製作痕跡をとどめていた。

13 敲石 268～280

磨耗痕や凹み痕がなく礫の一端ないしは両端に敲打痕が残存するものである。遺構の内外から26点、出土した。このなかには乳棒状磨製石斧の欠損品の転用例3点（269・277・279）が含まれている。石材は流紋岩7点、砂岩・石英斑岩各5点、ホルンフェルス・緑色岩各2点。石英安山岩（ディサイト）・チャート・斑楓岩・流紋岩質凝灰岩各1点となっている。この中で緑色岩と斑楓岩は乳棒状石斧からの転用例であるが、全体的には特定の岩種にあまり偏らず、握り易く、比較的入手が容易な石材を利用していたようである。

14 砥石 281・282

計5点出土したが、遺存率が低く、完形品は2点にとどまる。石材は砂岩とホルンフェルスが用いられている。

281は、扁平な礫を素材として、表裏が研磨されている。表面がやや凹面をなす。全体的に赤く変色した被熱資料であり、部分的に黒色付着物もみられる。石材は砂岩である。

282は手持ち砥石である。全体の形状はほぼ三角柱を呈し、各面はいずれもよく研磨されている。

15 石皿 283～285

遺構内から45点、遺構外から15点出土した。互いに接合せず、残余の個体は搬出されたものと考えられる。いずれも原型をとどめておらず、全体の形状は明確ではないが、格円形又は隅丸方形に近い形態が想定される。両面に磨面があり、両面とも凹んだもの（284・285）、片面のみ凹んだもの（283）の2種があり、一部に蜂の巣状の小孔が共存する例（283・285）もみられる。

石材は安山岩類（多孔質安山岩48点を含む）56点、斑楓岩2点、雲母片岩・泥岩各1点となっている。特に安山岩類に対する高い嗜好性が指摘される。石皿は対象物を磨り潰し、粉化する機能から比較的粗粒の石材が採用されている。特に多孔質安山岩は孔隙率が大きいために加工しやすく、しかも体積に比して軽量であるため重用されている。

16 台石 286～297

遺構の内外から計22点出土した。平坦面に研磨痕や敲打痕（中央部）がみられる。後者の多くは楔形石

器の製作時の損傷の可能性がある（290・291・297ほか）。これら2種の使用痕から砥石と台石の併用も想定される。主要石材は流紋岩であり、砂岩を頻用する砥石や磨石類とは、一線を画している。被熱資料が比較的多い（63.6%：14例）。

17 石錘 298・299

遺構内から2点、遺構外から1点出土した。うち2例は被熱の痕跡をとどめる。いずれも扁平疊の両端を打ち欠いた、いわゆる疊石錘である。疊石錘は、時代を通じて存在するが、漁網錘と編み物を編む際の二通りの用途が考えられており、いまだ決着がついていない。

18 スタング形石器 300・301

縄文早期の撲糸文土器の後半期、特に稻荷台式に伴出する石器である（小田1983）。遺構内外から2点出土した。石材はともに流紋岩である。300は比較的扁平な楕円形疊を素材としている。表面は被熱により赤化しており、被熱後に、平坦な底面と抉り込むかのような側縁部が作出されている。剥離面はシャープであり、磨耗痕等の使用痕は特に見受けられない。301は断面三角形の円疊を素材としており、被熱により赤化している。全体に磨耗痕がみられる。なお、先に記したように疊器とした234についても当該器種の可能性がある。

19 側面調整疊 302～319

遺構内から23点、遺構外から3点出土しており、遺構内出土が多いことが大きな特徴の一つである。隣接する同時期の富士見遺跡でも大量（123点）に出土した。形態は長方形や円形もあるが楕円形を基本としている。素材は扁平な小円疊であり、その側縁に敲打痕や磨耗痕がみられる。形態は長方形や円形もあるが楕円形を基本としている。大きさは長さ5.5cm～8.9cm、幅2.7cm～5.9cm、厚さ1.0cm～2.7cm、重量30.58g～155.23gの範囲にあり、平均値は、それぞれ6.8cm、4.8cm、1.8cm、88.50gとなっている。

いずれも表面が赤く変色（赤化）するまで焼成されており、なかには黒色タール状付着物もみられる。石材は砂岩を主体としており流紋岩がこれに次ぐ。

調整の部位には、ほぼ全周にわたる例（306・309・314・316・318）、二側縁（307・308・310～313・315・317）、及び一側縁（319）という3つのタイプがある。欠損率は約15%（4/26）であり比較的低い。

20 塗状耳飾 320～322

遺構内から2点、遺構外から1点出土した。いずれも平面形は円形、断面形はやや扁平である。石材はいずれも滑石である。

21 その他の石製品 323

遺構中から1点出土した。形態は角柱状で石材は滑石である。塗状耳飾の欠損品の再利用の可能性もあるが定かではない。

22 二次加工ある疊

二次加工ある疊とは二次加工が部分的であるため定形的な器種から除外されるものをいう。計4点出土した。石材はチャート10点、黒曜石3点、ホルンフェルス2点、ガラス質黒色安山岩・凝灰岩・頁岩・黒色頁岩・石英・ノジュール（团塊）・流紋岩・流紋岩質凝灰岩各1点である。

23 その他

（1）石核 324

計34点出土した。剥離面の状況から横長剥片が生産された模様である。石材はチャートを主としている。

数量が楔形石器（計224点）に比して極端に少ないが、このことは本遺跡における剥片生産技術の主体が両極打法にあったことを如実に物語っている。324も両極技法の所産のひとつではあるが、縦長剥片が生産されたことを示す希少な例として図化した。石材は角縞状のホルンフェルスであり、表面に4条の細長い並行剥離がみられる。

（2）剥片類（剥片660点、両極剥片164点、削片34点、碎片751点）

素材剥片と二次加工の際に生じる碎片（調整剥片）が都合1,609点出土した。石材はチャートが全体の71.8%（1,156点）に達している。剥片の大きさや形状に統一性がなく横長剥片が大半である。横長剥片の背面の剥離面は複数の方向から打撃された痕跡をとどめ、先端は主要剥離面向かって湾曲している。

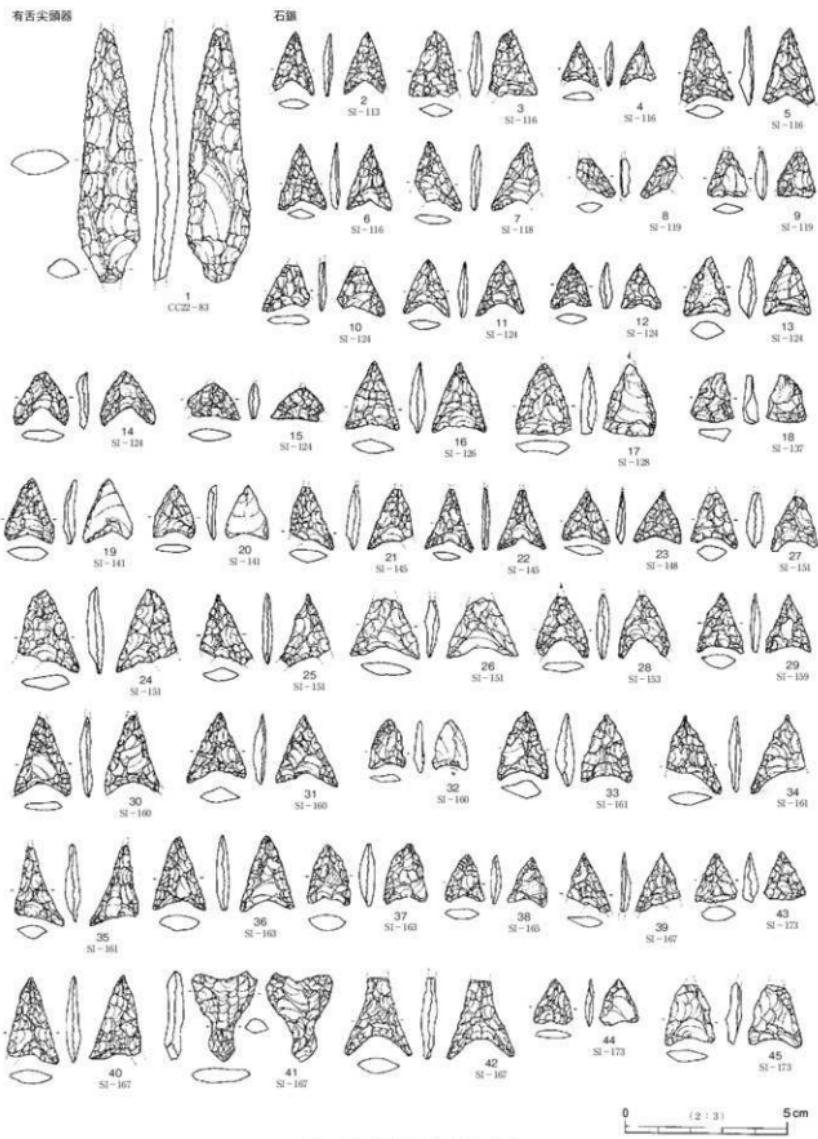
石材傾向にみられるように、主体は剥片石器の製作に関わるものであるが、石皿・磨石類・石斧関連の調整剥片（角閃石片岩・砂岩・多孔質安山岩・ホルンフェルス・緑色岩）も若干含まれている。

（3）原石

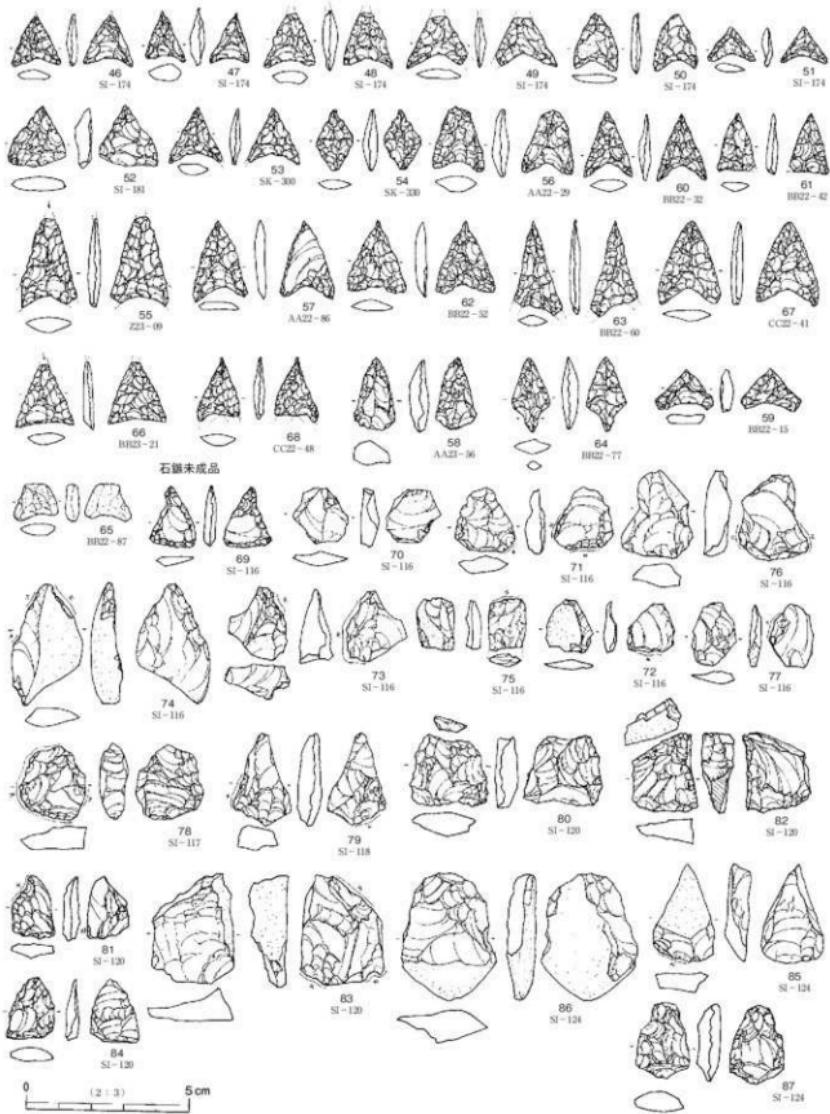
計66点出土した。チャートの扁平な小円盤を主体としている。これらの大半（84.9%：56点）は楔形石器関連であり、剥片石器の用材に供されたものと推定される。

（4）輕石

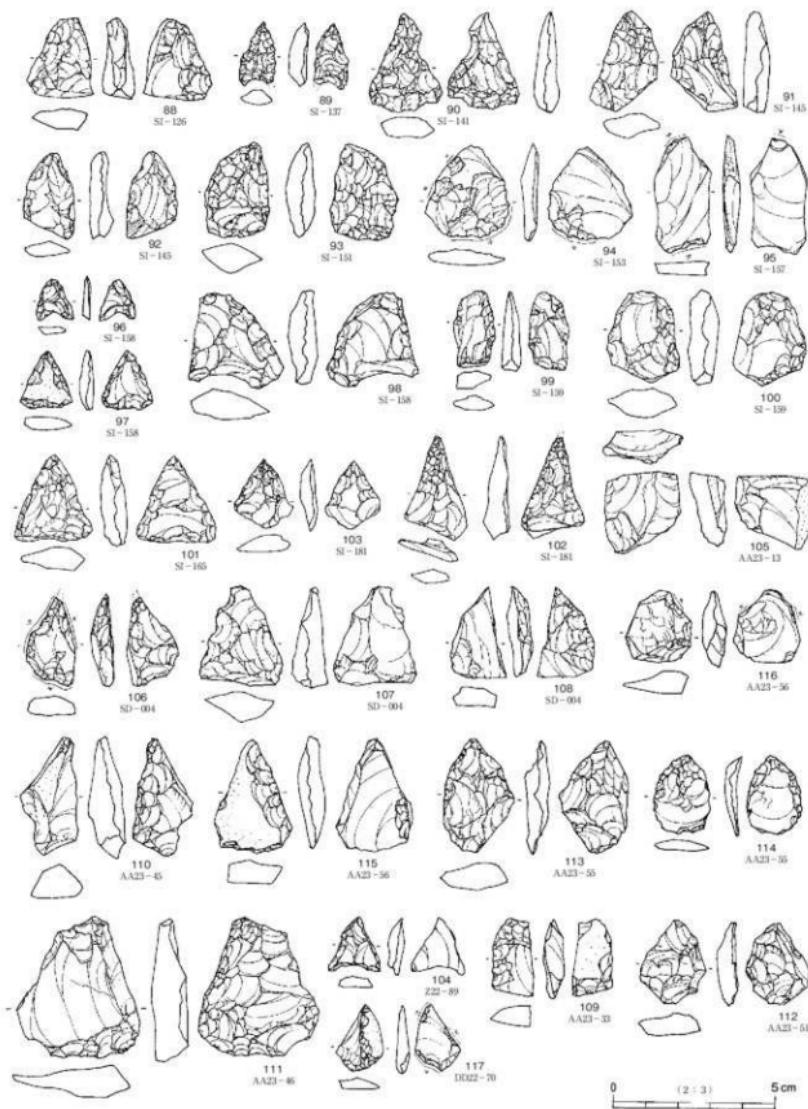
計2点出土した。浮標（浮子）の一部、あるいは、何らかの素材の可能性もあるが、断片的なため検討に堪えない。



第90図 繩文時代石器（1）



第91図 繩文時代石器（2）

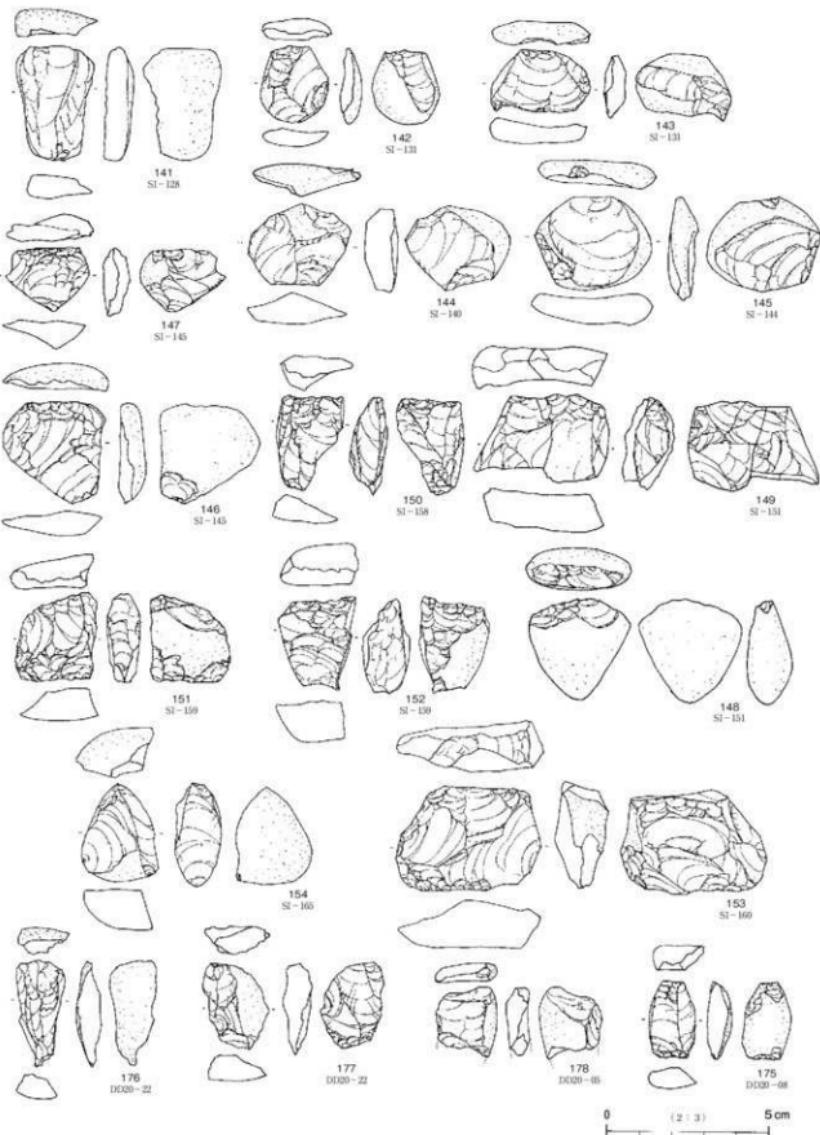


第92図 縄文時代石器（3）

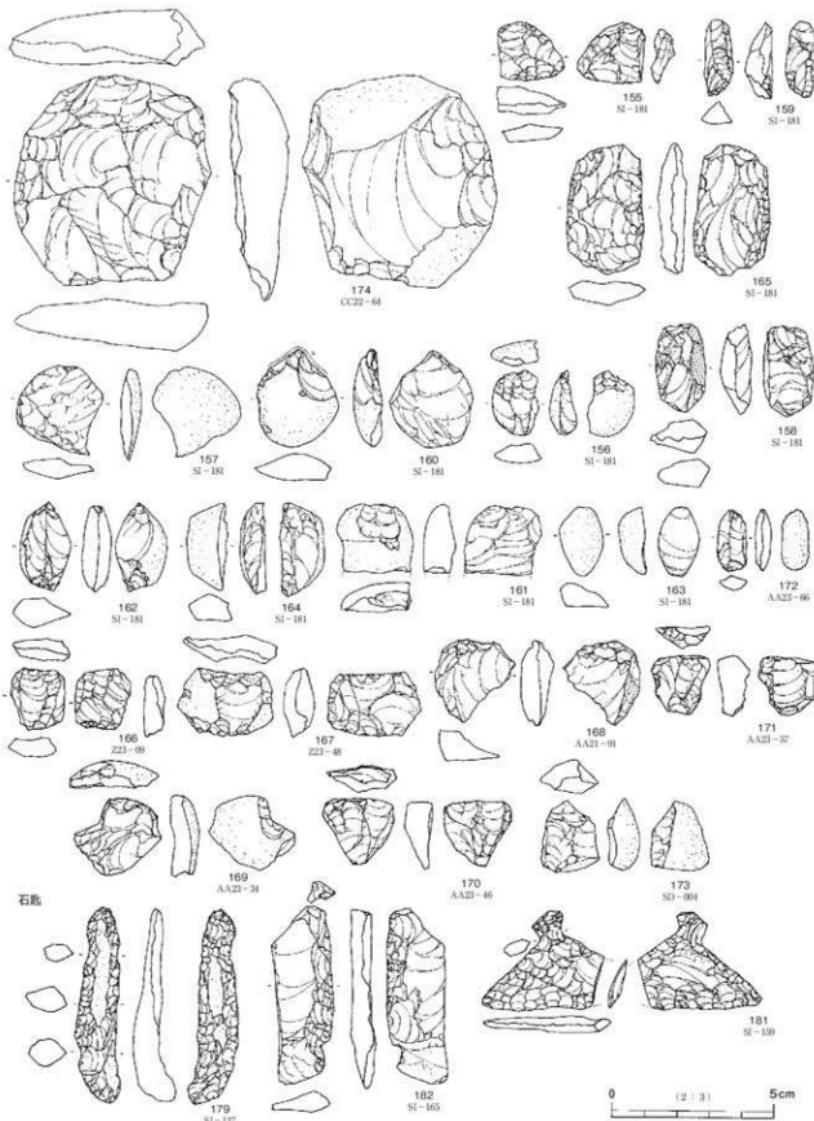
楔形石器



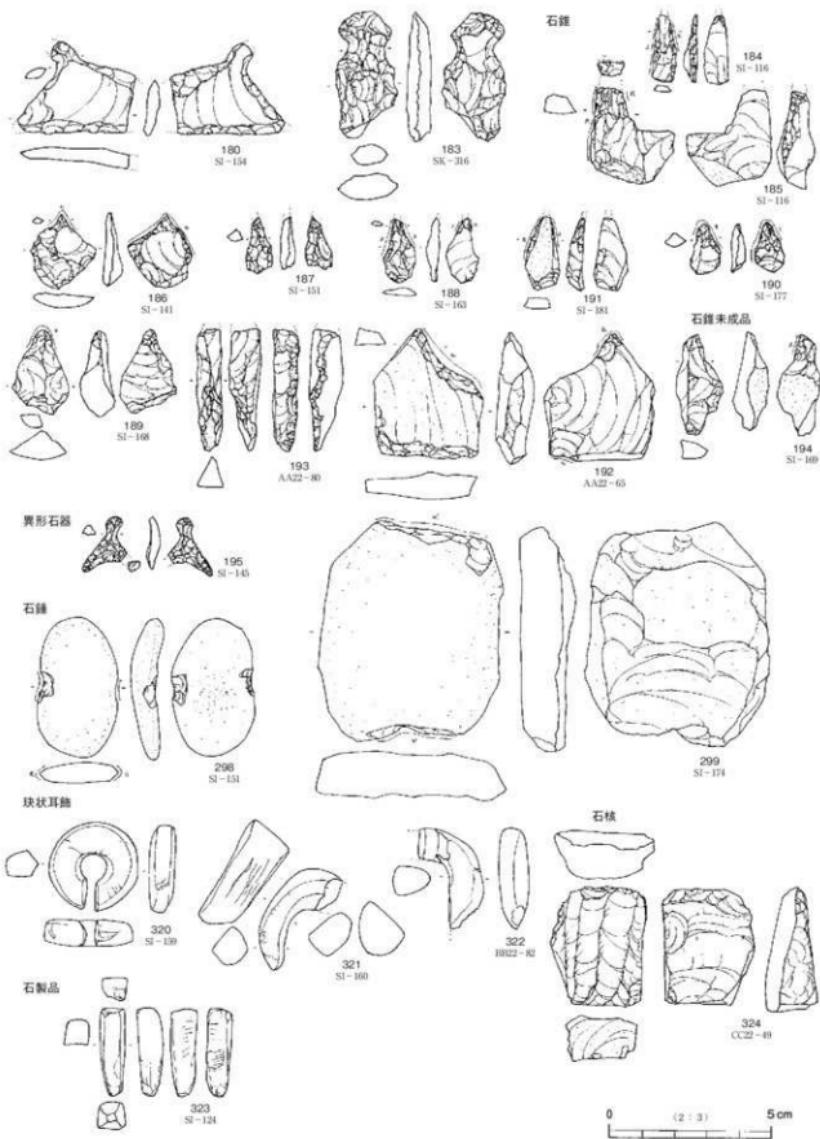
第93図 繩文時代石器（4）



第94図 繩文時代石器（5）

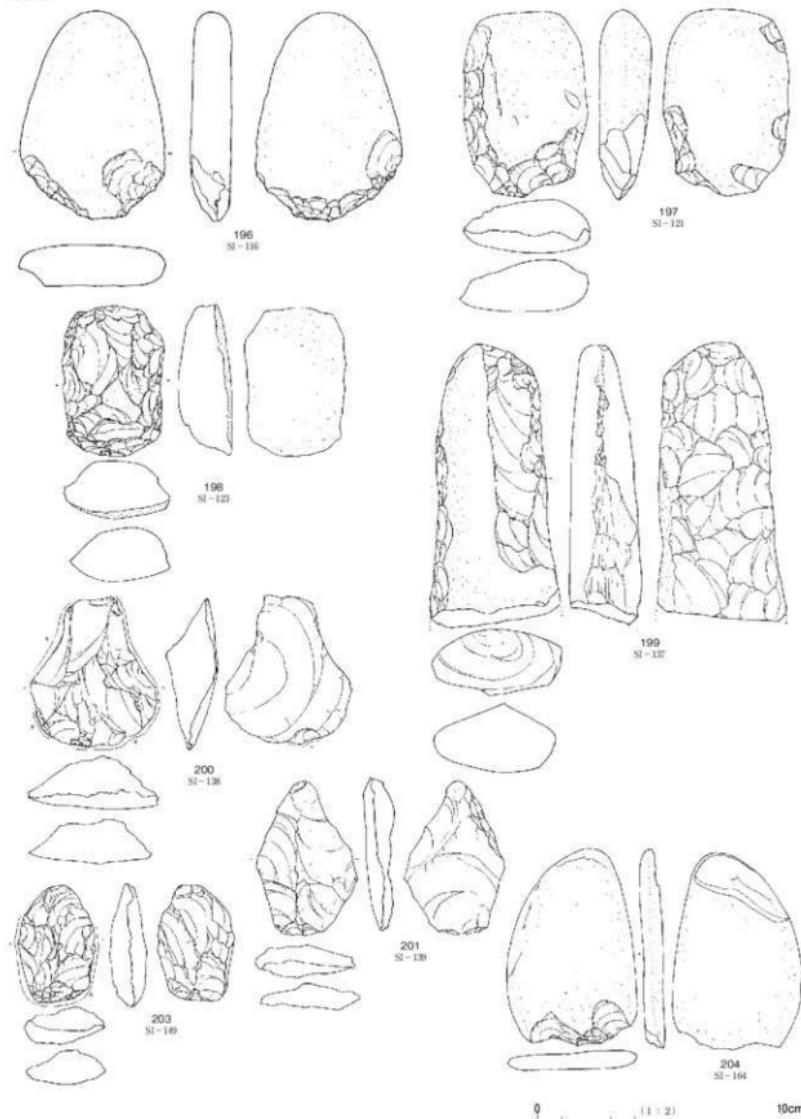


第95図 繩文時代石器（6）

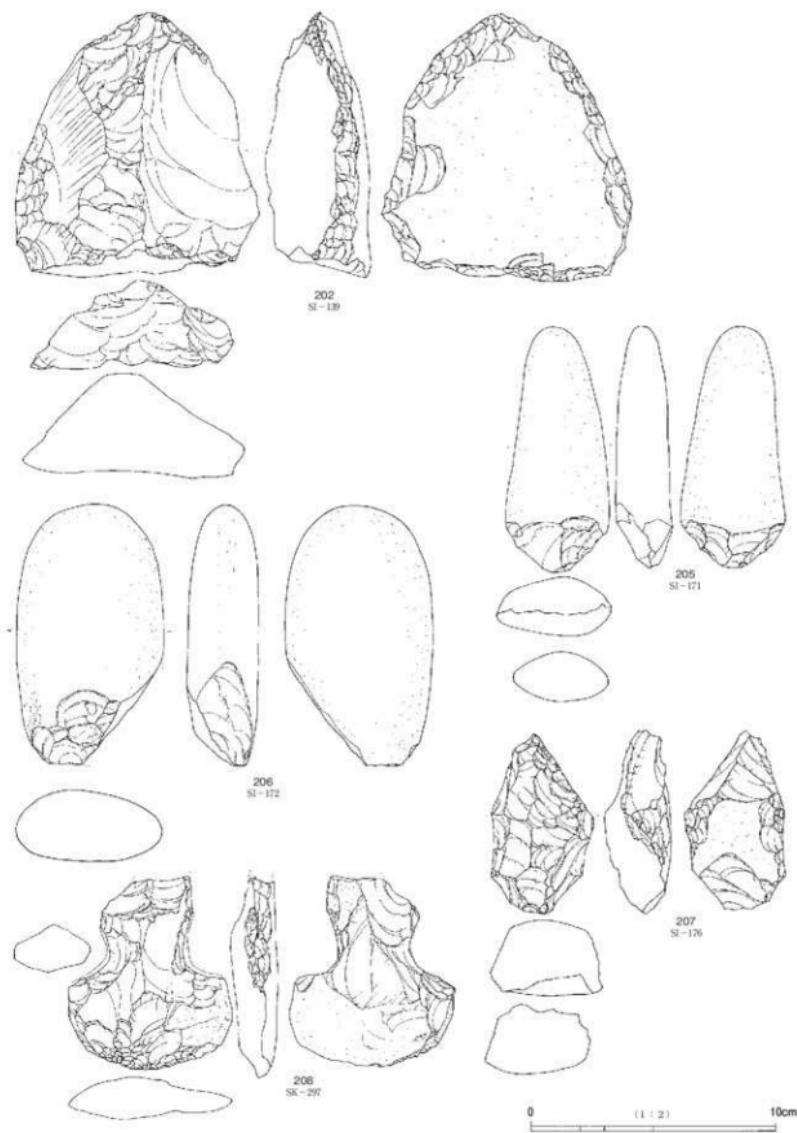


第96図 繩文時代石器（7）

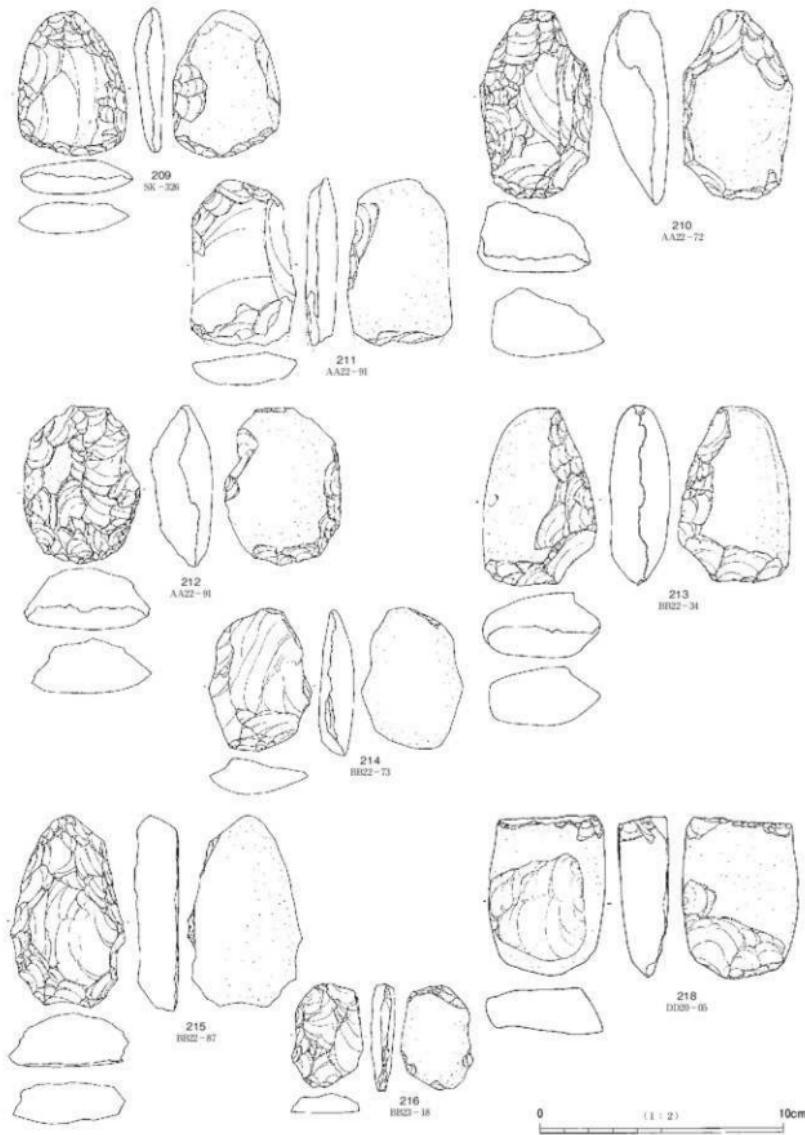
打製石斧



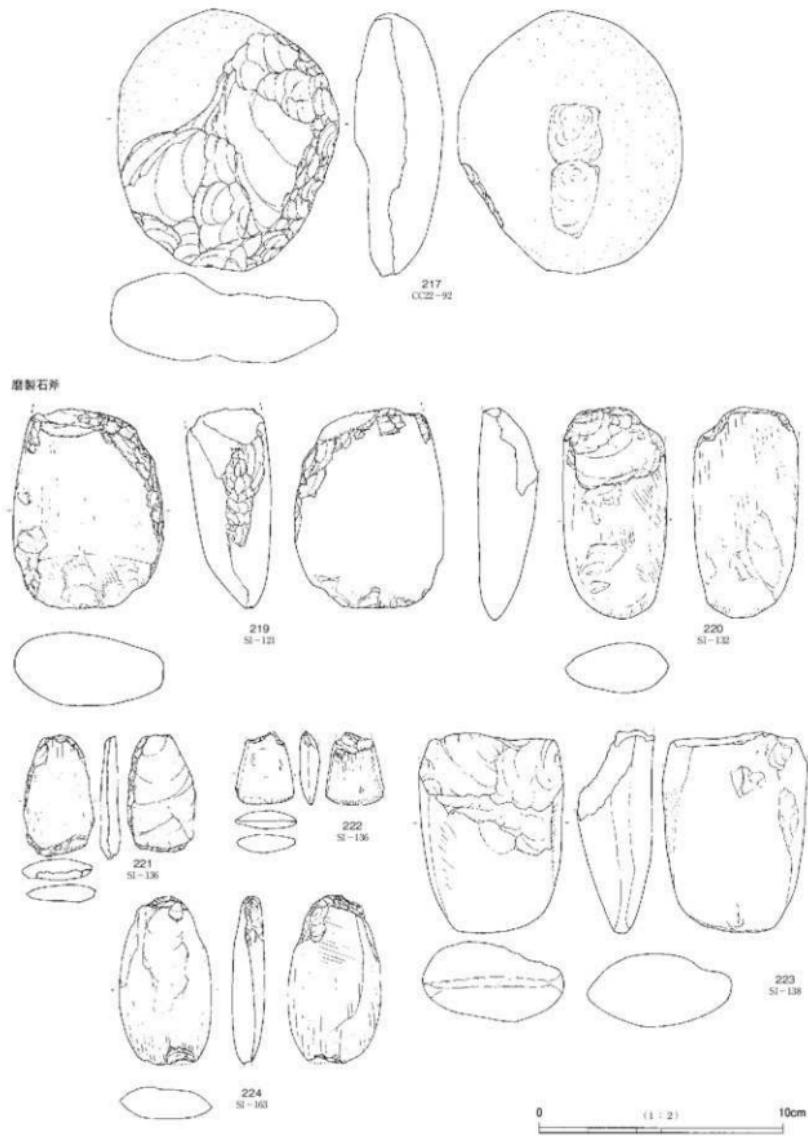
第97図 繩文時代石器（8）



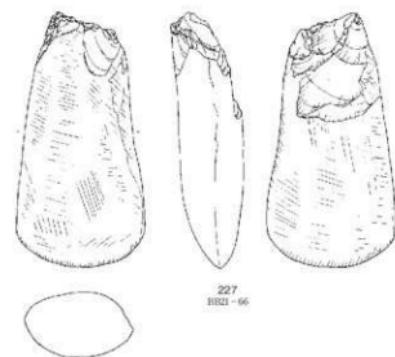
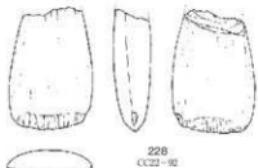
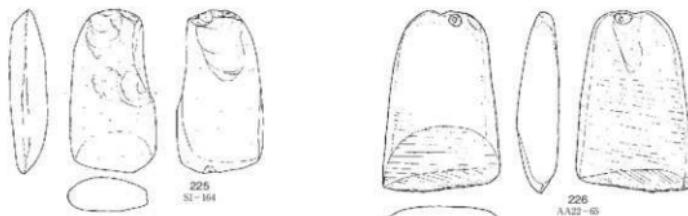
第98図 繩文時代石器（9）



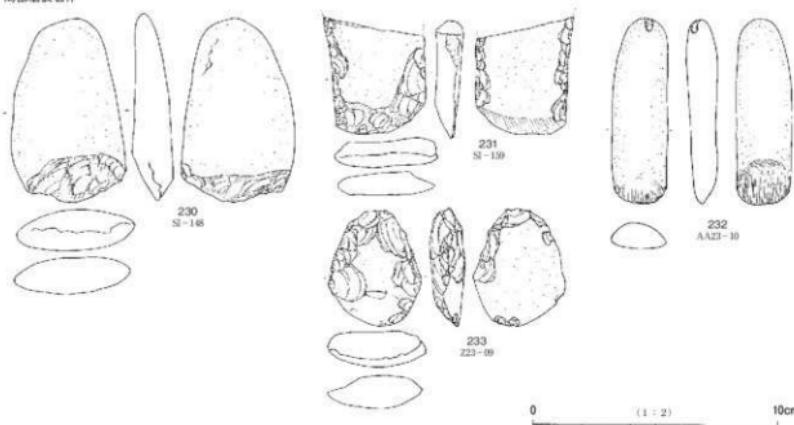
第99図 繩文時代石器 (10)



第100図 繩文時代石器 (11)



局部磨製石斧

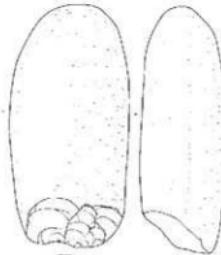
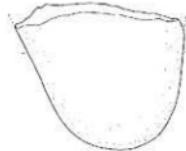


第101図 繩文時代石器 (12)

櫛器

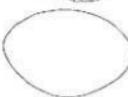
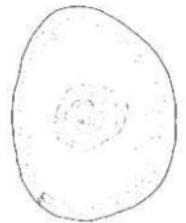
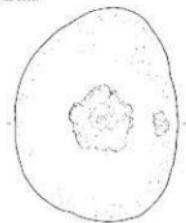


235
SI-124



234
SI-120

磨石類



236
AA22-16



237
SI-003



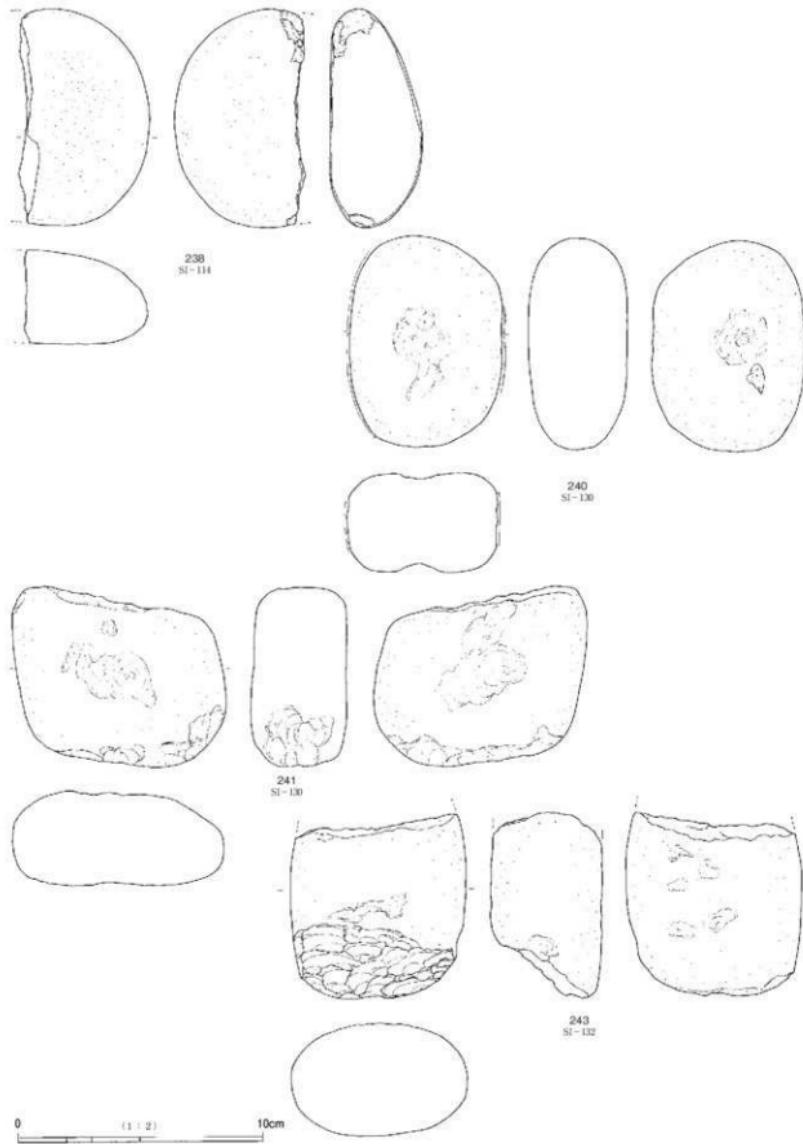
238
SI-123



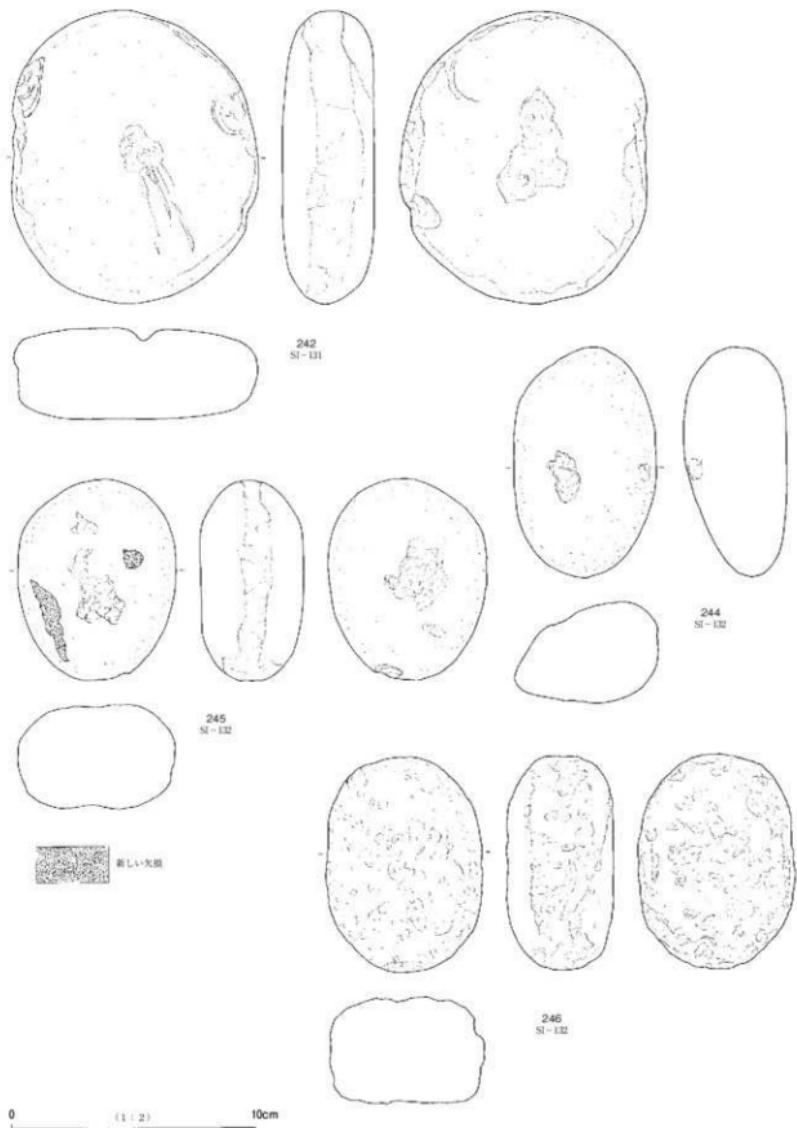
0 (1 : 2) 10cm

新しい次相

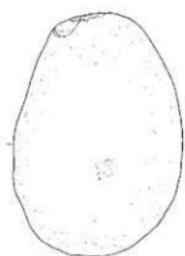
第102図 繩文時代石器 (13)



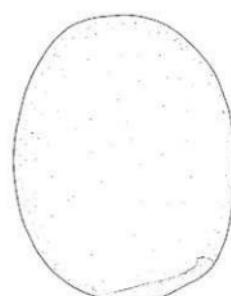
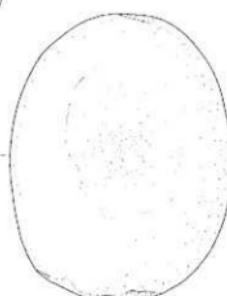
第103図 繩文時代石器 (14)



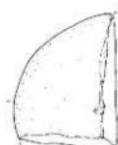
第104図 繩文時代石器 (15)



247
SI-135



248
SI-135



249
SI-136



250
SI-139

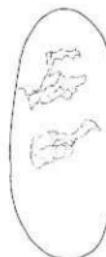


0 (1 : 2) 10cm

第105図 繩文時代石器 (16)



251
SI-140



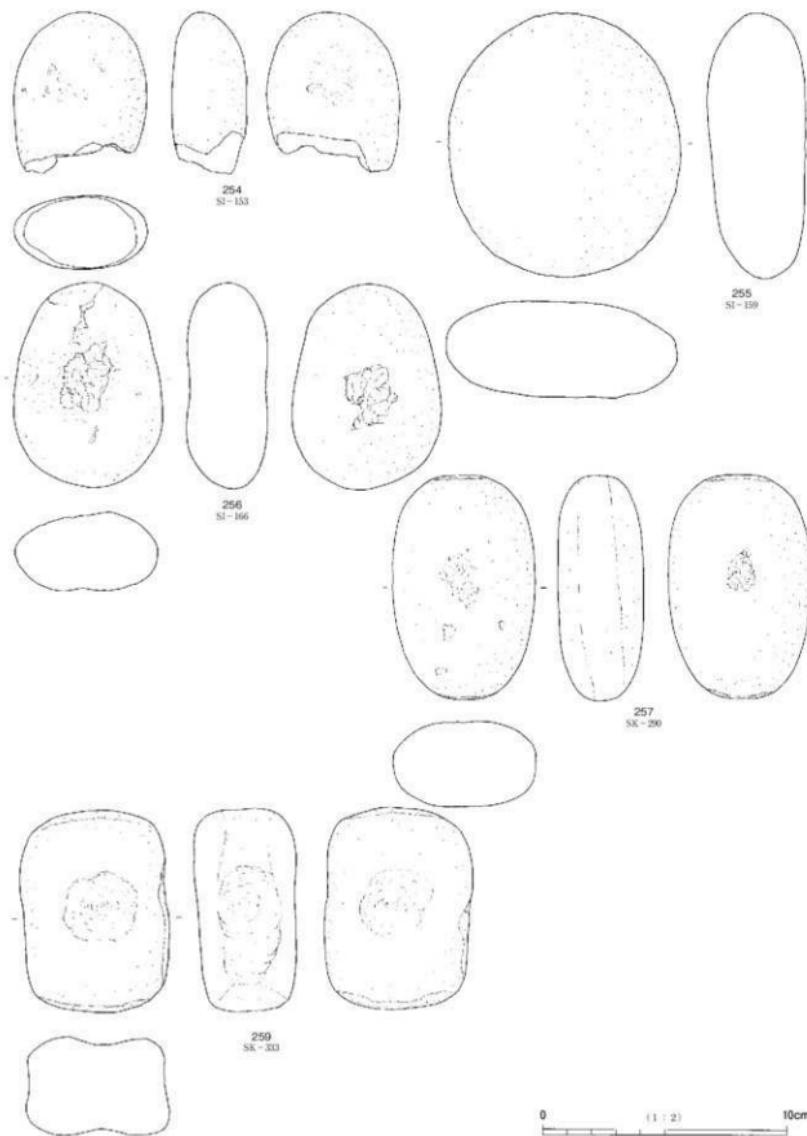
252
SI-142



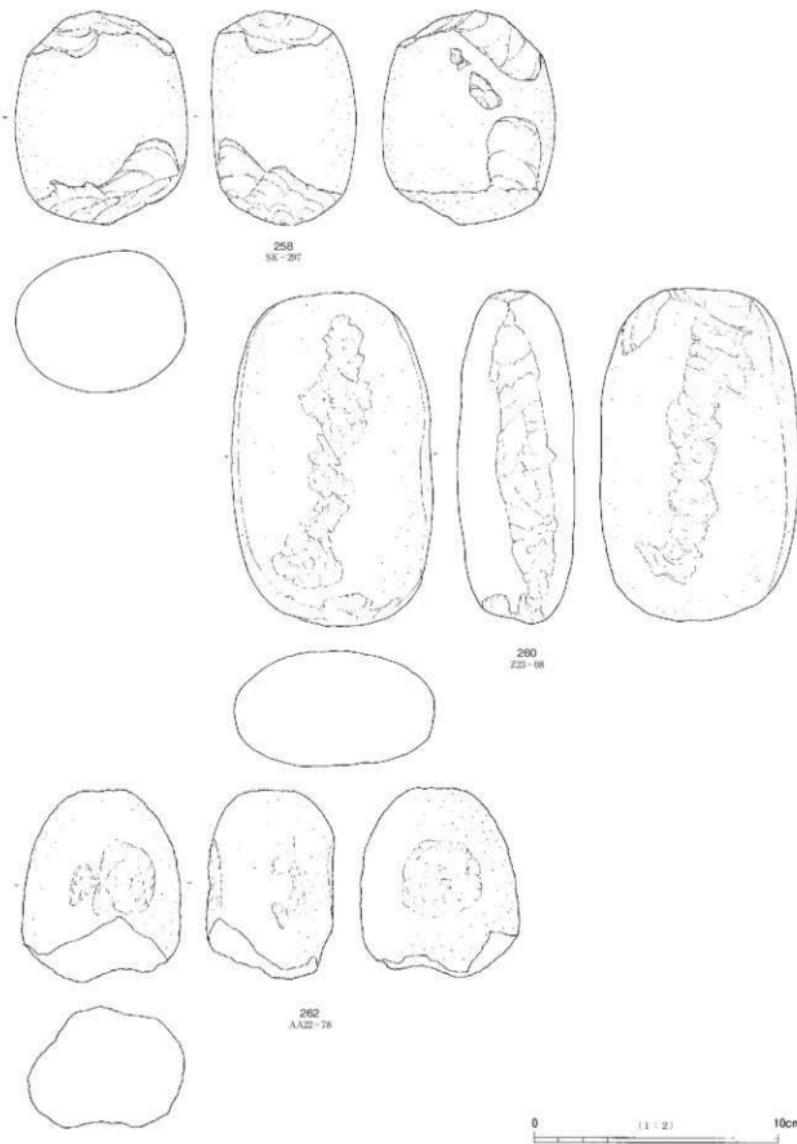
253
SI-149



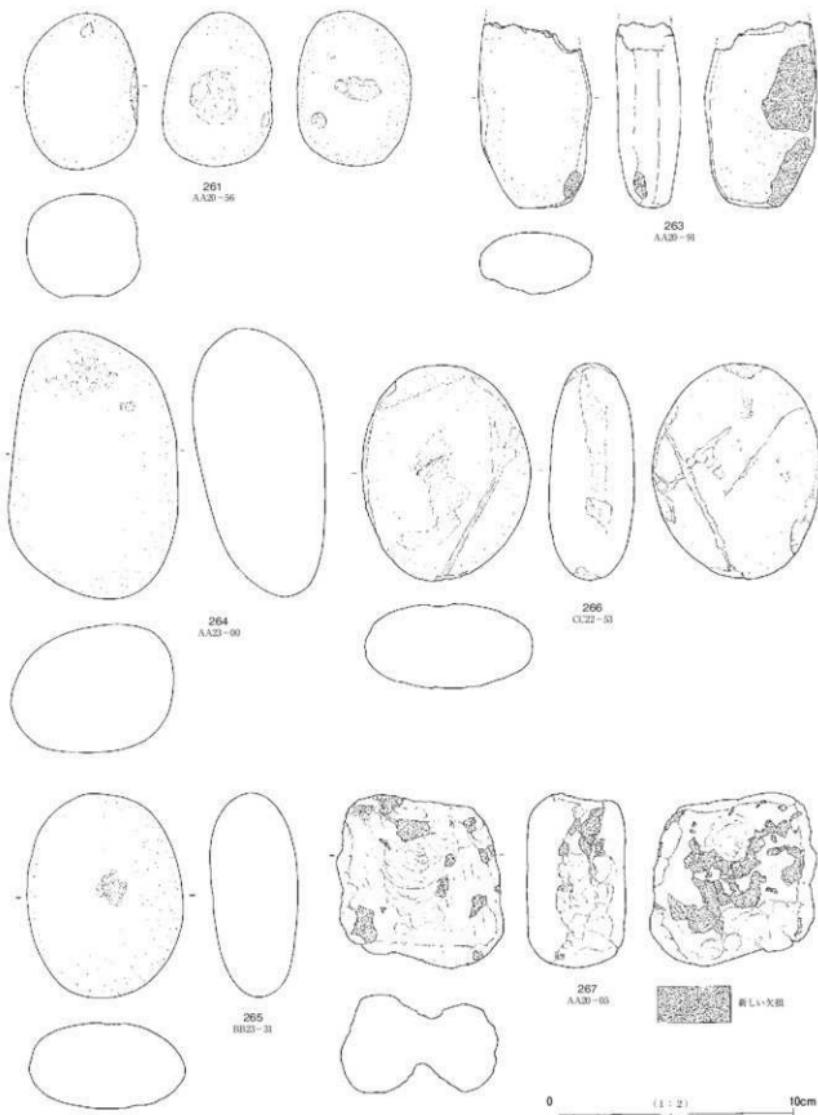
第106図 繩文時代石器 (17)



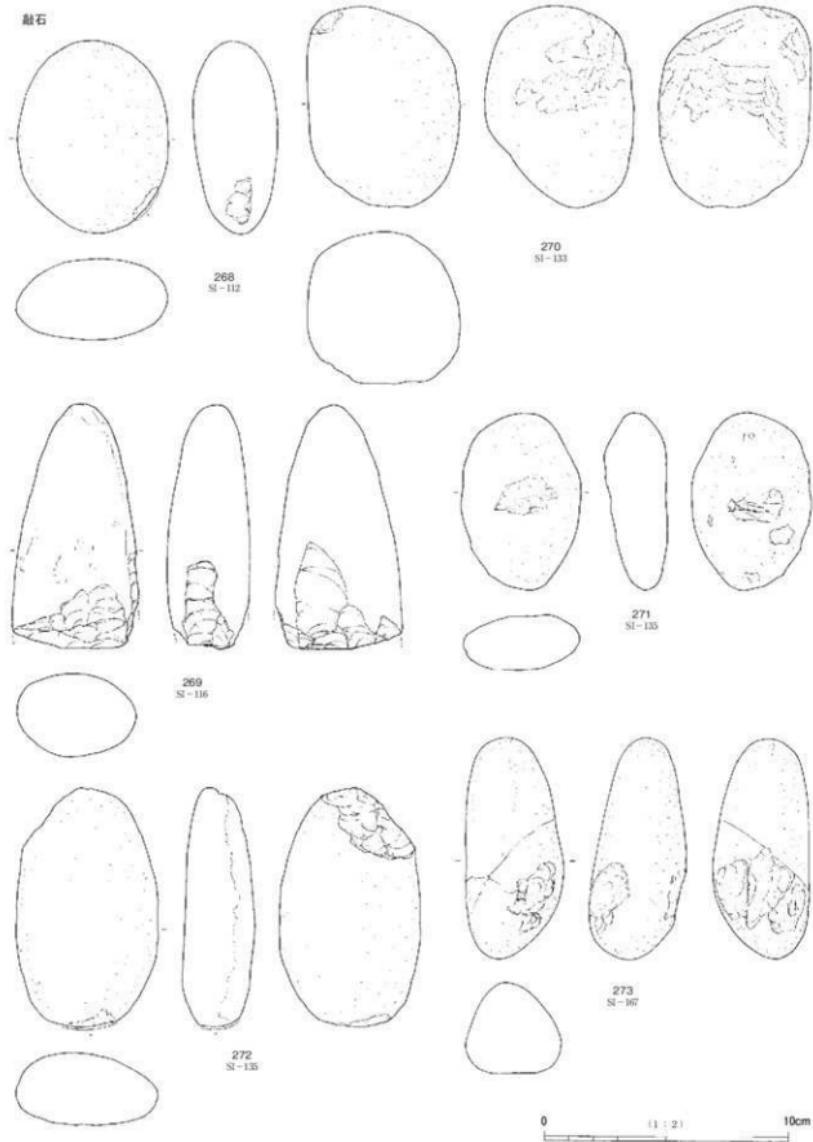
第107図 繩文時代石器 (18)



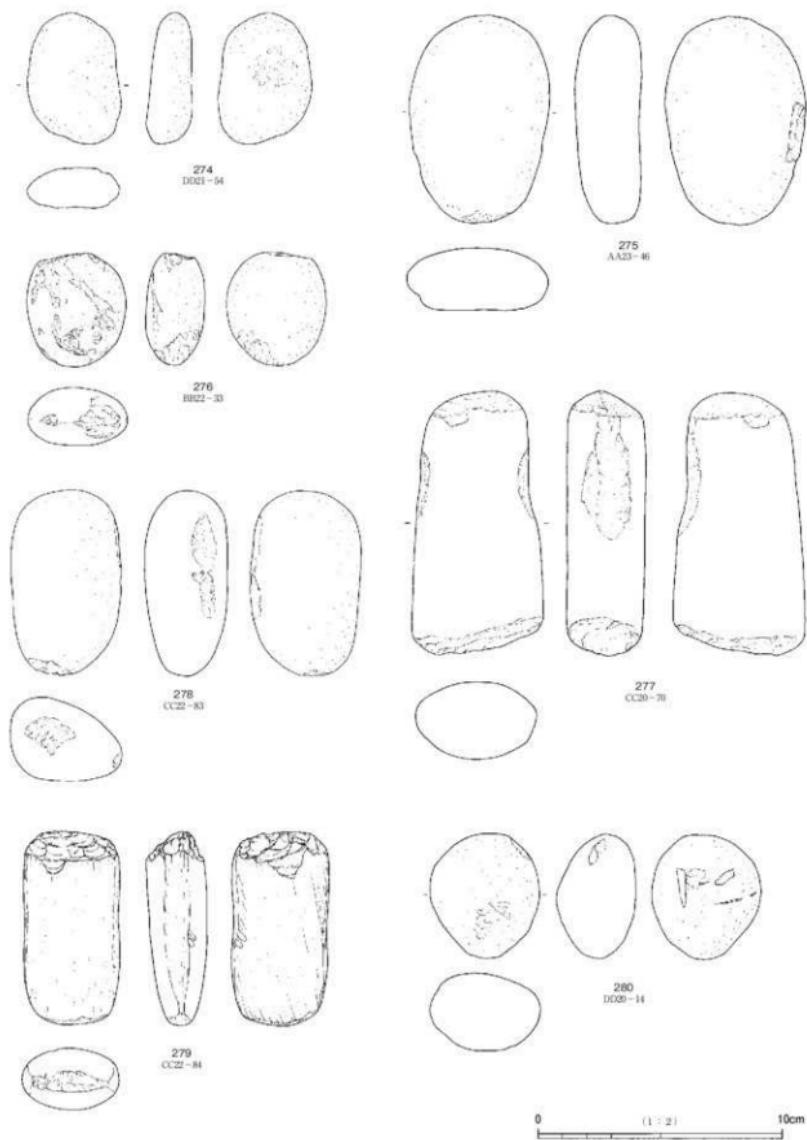
第108図 繩文時代石器 (19)



第109図 繩文時代石器 (20)

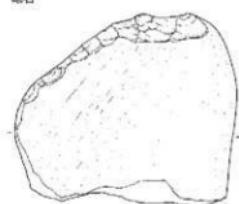


第110図 縄文時代石器 (21)



第111図 繩文時代石器 (22)

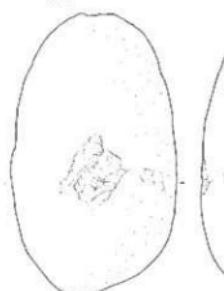
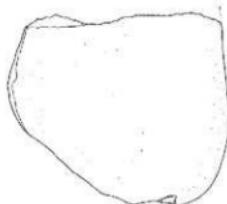
砾石



282
CC22-13

281
AA22-62

台石



286
SI-138



287
SI-146

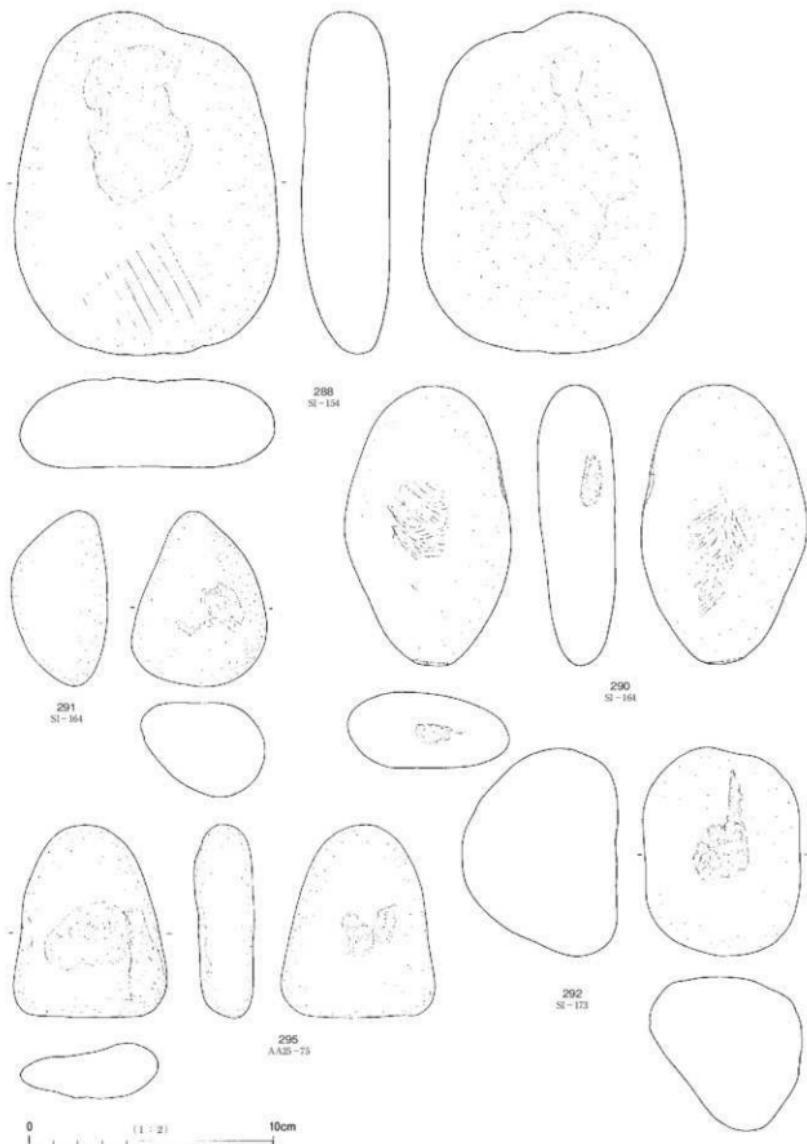


288
SI-163

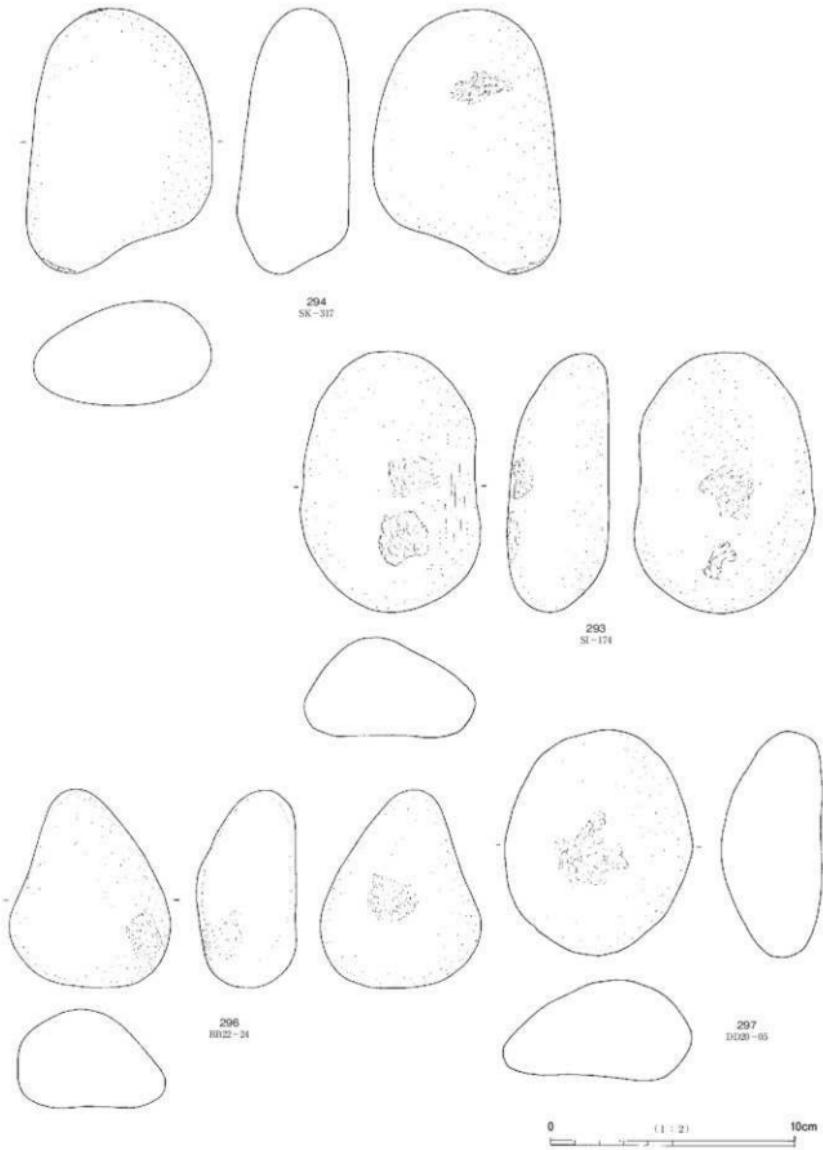


0 (1 : 2) 10cm

第112図 繩文時代石器 (23)

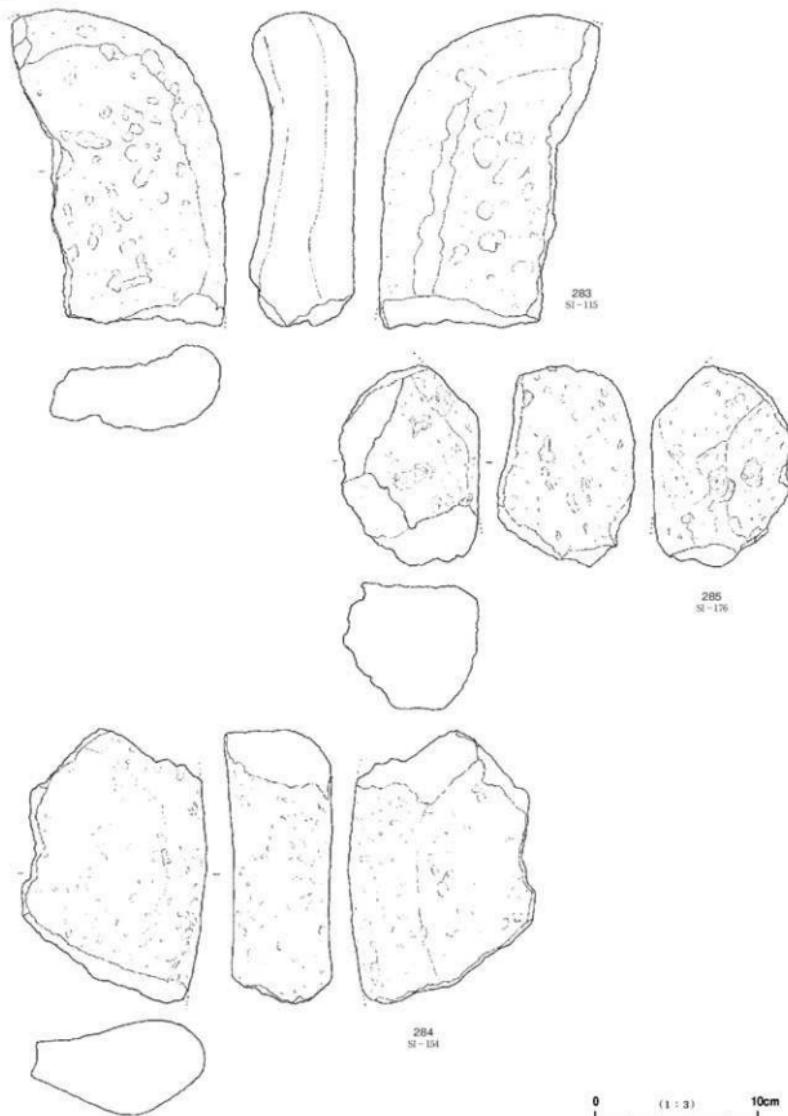


第113図 繩文時代石器 (24)



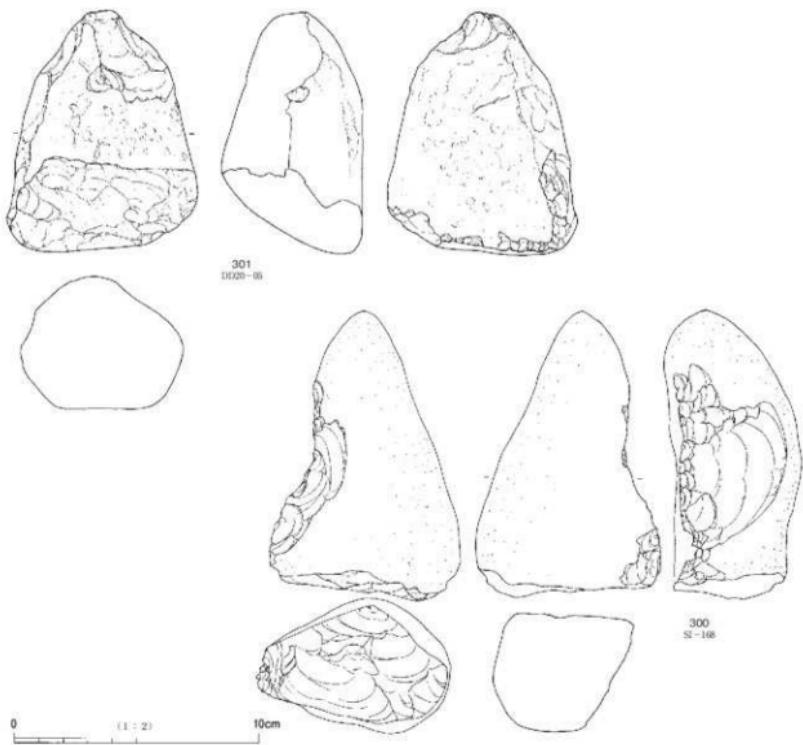
第114図 繩文時代石器 (25)

石皿



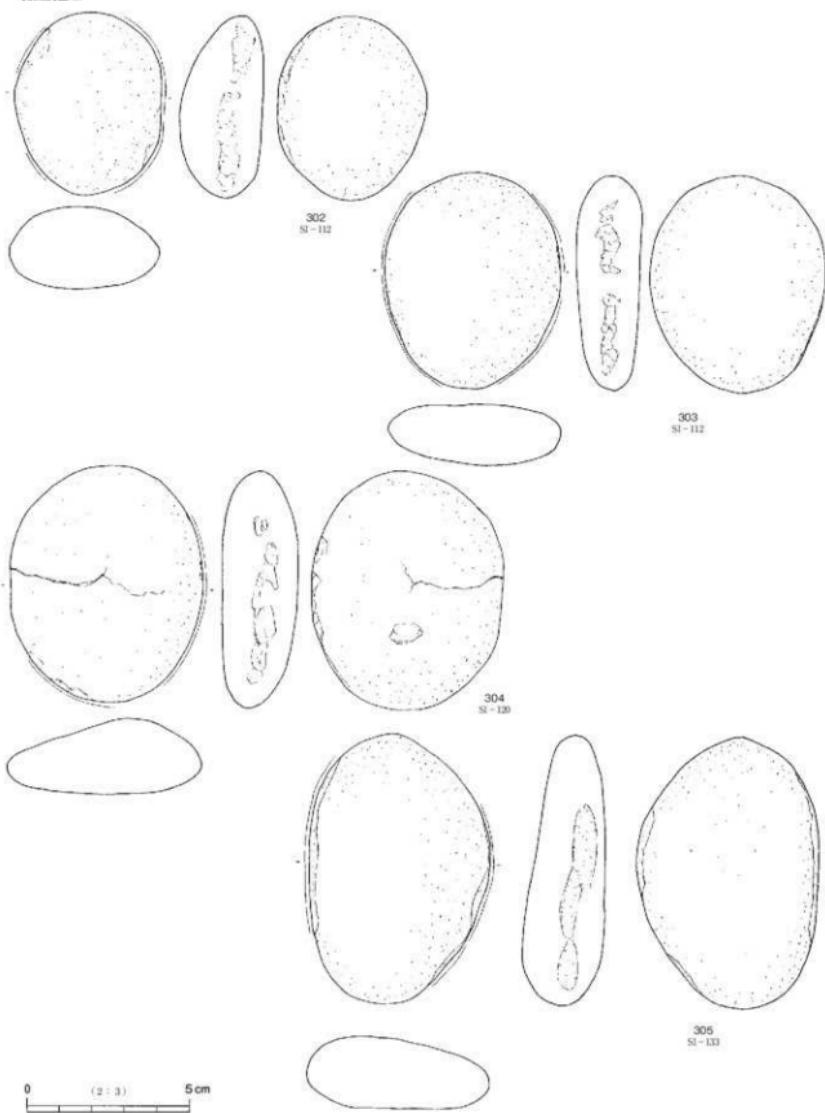
第115図 繩文時代石器 (26)

スタンプ型石器

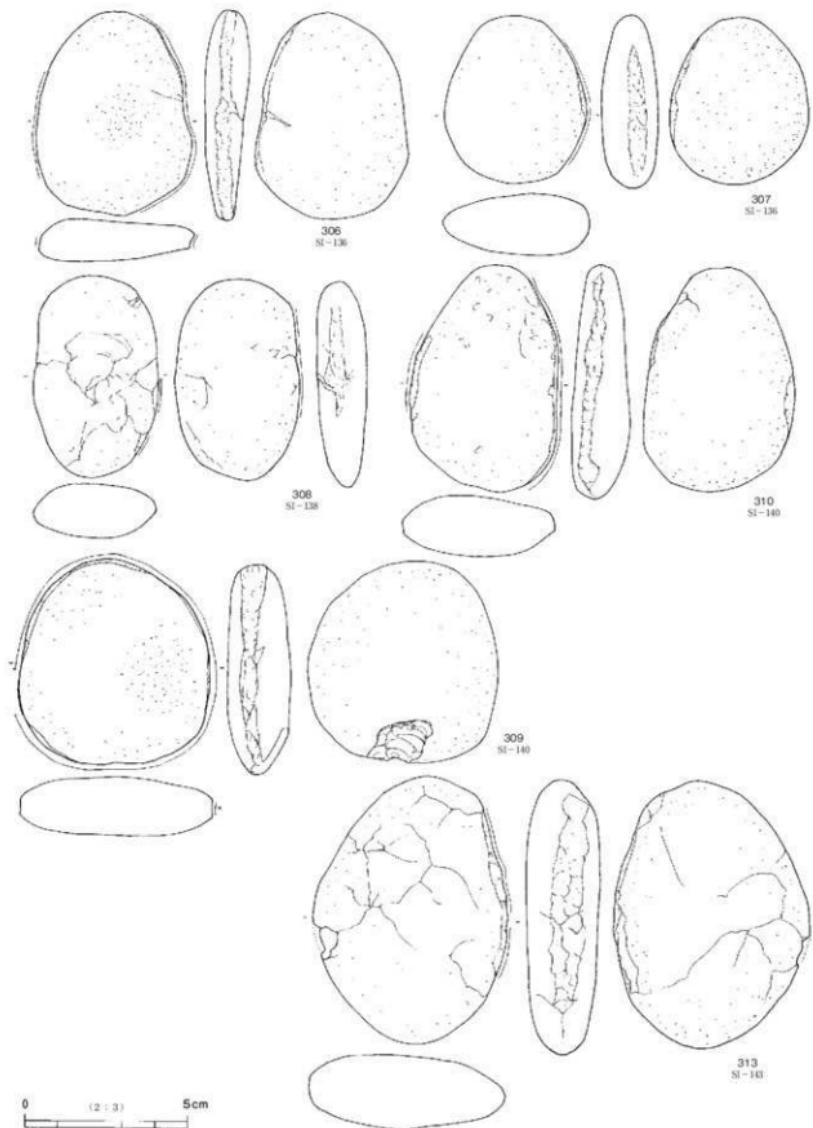


第116図 繩文時代石器 (27)

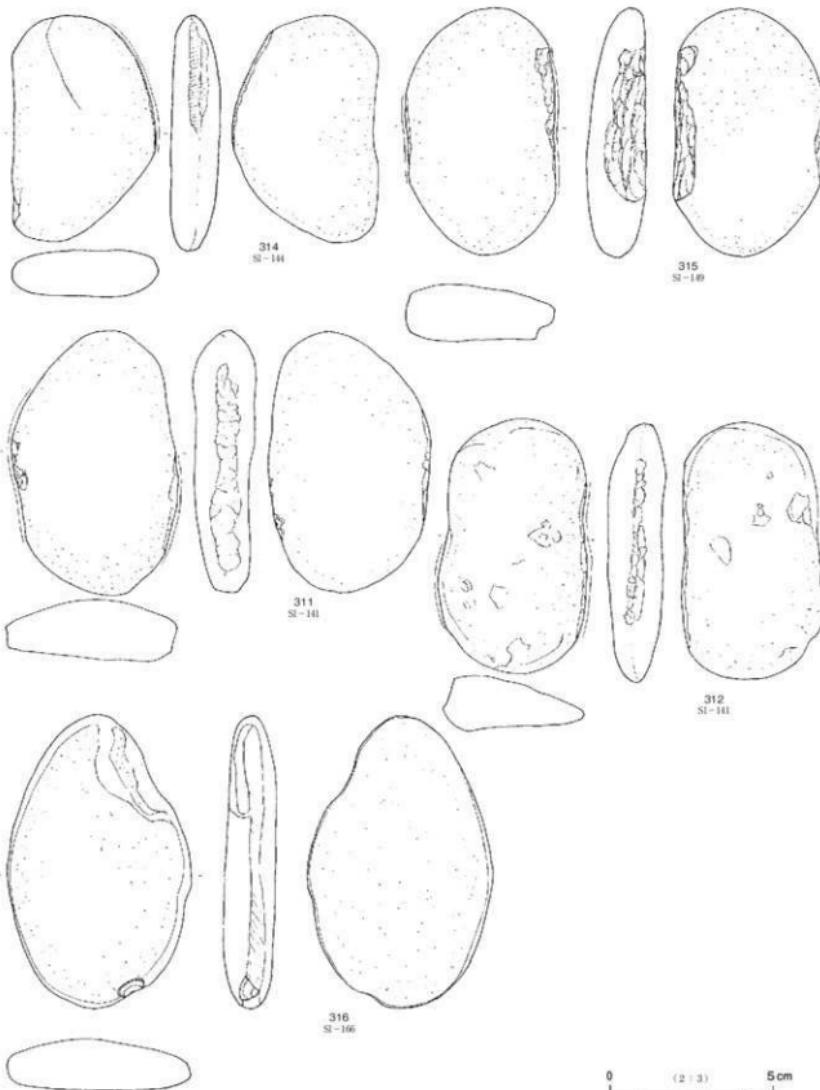
侧面調整棒



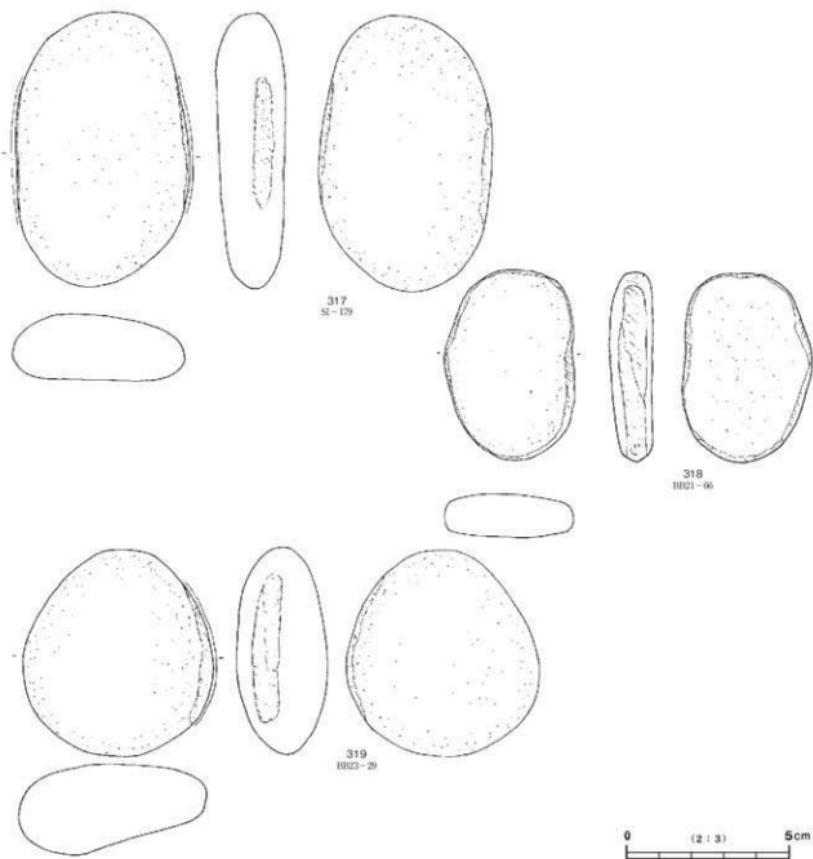
第117図 繩文時代石器 (28)



第118図 縄文時代石器 (29)



第119図 繩文時代石器 (30)



第120図 繩文時代石器 (31)

第7表 桶文時代石器属性表

単位: cm・g

国版	肆番	遺構	旧遺族	遺物	器種	石材	最大長	最大幅	重量	参考1	参考2		
1	37	90	1	CC22-83	14	LC22-83	八人	有刃圓頭器	黒色頁岩	7.8	2.0	0.8	12.36
2	37	90	7	SI-113	12	SI-009	29	石器	チャート	1.9	1.3	0.3	0.47
3	37	90	9	SI-116	12	SI-001	3	石器	チャート	1.9	1.4	0.3	0.86
4	37	90	4	SI-116	12	SI-001	119	石器	チャート	1.4	1.1	0.2	0.23
5	37	90	5	SI-116	12	SI-001	149	石器	チャート	2.3	1.6	0.4	0.98
6	37	90	6	SI-116	12	SI-001	272	石器	チャート	2.0	1.4	0.2	0.50
7	37	90	7	SI-118	12	SI-003	3	石器	チャート	2.2	1.3	0.3	0.69
8	37	90	8	SI-119	12	SI-004	29	石器	チャート	1.3	1.0	0.2	0.30
9	37	90	9	SI-119	12	SI-004	30	石器	チャート	1.3	1.1	0.2	0.31
10	37	90	10	SI-124	12	SI-007	35	石器	チャート	1.5	1.6	0.2	0.43
11	37	90	11	SI-124	12	SI-007	61	石器	トロドロ石	1.7	1.4	0.2	0.34
12	37	90	12	SI-124	12	SI-007	155	石器	黒曜石	1.3	1.1	0.3	0.33
13	37	90	13	SI-124	12	SI-007	158	石器	チャート	1.8	1.4	0.5	1.24
14	37	90	14	SI-124	12	SI-007	286	石器	チャート	1.6	1.7	0.3	0.73
15	37	90	15	SI-124	12	SI-007	319	石器	黒曜石	1.0	1.5	0.3	0.44
16	37	90	16	SI-124	12	SI-007	320	石器	黒曜石	1.5	1.1	0.4	0.88
17	37	90	17	SI-124	12	SI-007	347	石器	チャート	2.0	1.6	0.3	0.80
18	37	90	18	SI-124	12	SI-007	351	石器	チャート	2.1	1.6	0.4	1.42
19	37	90	19	SI-124	14	SI-009	113	石器	黒曜石	1.3	1.5	0.4	0.66
20	37	90	20	SI-124	14	SI-009	208	石器	黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.83
21	37	90	20	SI-141	14	SI-009	208	石器	チャート	1.6	1.3	0.3	0.55
22	37	90	21	SI-145	14	SI-013	59	石器	ガラス質黑色安山岩	1.8	1.4	0.4	0.74
23	37	90	22	SI-145	14	SI-013	60	石器	チャート	1.9	1.5	0.2	0.45
24	37	90	23	SI-148	14	SI-018	7	石器	チャート	1.6	1.4	0.3	0.45
25	37	90	24	SI-148	14	SI-018	10	石器	黒曜石	2.6	1.8	0.5	1.04
26	37	90	25	SI-151	14	SI-021	43	石器	チャート	2.3	1.5	0.3	0.78
27	37	90	26	SI-151	14	SI-021	119	石器	チャート	2.1	1.6	0.4	1.22
28	37	90	27	SI-151	14	SI-021	128	石器	黒曜石	1.7	1.4	0.5	0.79
29	37	90	28	SI-153-154	14	SI-021	90	石器	チャート	1.9	1.6	0.5	0.72
30	37	90	29	SI-159	14	SI-028	89	石器	チャート	1.8	1.4	0.3	0.64
31	37	90	30	SI-160	14	SI-029	72	石器	チャート	2.4	1.7	0.3	1.11
32	37	90	31	SI-160	14	SI-029	128	石器	チャート	2.1	1.8	0.4	0.93
33	37	90	32	SI-160	17	SI-006	8	石器	チャート	1.5	1.1	0.3	0.42
34	37	90	33	SI-161	14	SI-006	53	石器	チャート	2.0	1.7	0.4	1.04
35	37	90	34	SI-161	14	SI-006	57	石器	チャート	1.1	1.5	0.3	0.38
36	37	90	35	SI-161	14	SI-006	60	石器	チャート	2.0	1.5	0.6	1.30
37	37	90	36	SI-161	14	SI-006	65	石器	緑色顯微岩石	1.5	1.7	0.3	0.60
38	37	90	34	SI-161	14	SI-030	77	石器	チャート	2.5	1.7	0.3	0.81
39	37	90	35	SI-161	14	SI-030	190	石器	チャート	2.5	1.5	0.5	0.93
40			SI-161	14	SI-030	247	石器	チャート	2.1	1.4	0.2	0.62	
41	37	90	36	SI-163	14	SI-032	34	石器	チャート	2.2	1.6	0.4	1.20
42	37	90	37	SI-163	14	SI-032	34	石器	チャート	1.9	1.3	0.3	0.49
43	37	90	37	SI-163	14	SI-032	119	石器	チャート	1.8	1.3	0.5	1.04
44	37	90	38	SI-165	14	SI-034	121	石器	チャート	1.5	1.2	0.3	0.46
45	37	90	39	SI-167	17	SI-006	1才	石器	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.44
46	37	90	40	SI-167	17	SI-006	40	石器	チャート	2.6	1.6	0.5	1.28
47	37	90	41	SI-167	17	SI-006	43	石器	黒曜石	2.7	2.0	0.5	1.90
48	37	90	42	SI-167	17	SI-006	53	石器	チャート	2.4	2.1	0.5	1.39
49	37	90	43	SI-173	17	SI-007	1A	石器	チャート	1.5	1.3	0.4	0.60
50	37	90	44	SI-173	17	SI-007	9	石器	チャート	1.9	1.2	0.2	0.27
51	37	90	45	SI-172	17	SI-007	59	石器	ガラス質アクリル	1.9	1.5	0.4	1.04
52	37	90	46	SI-174	17	SI-008	1B	石器	チャート	1.5	1.5	0.3	0.56
53	37	91	47	SI-174	17	SI-008	2	石器	チャート	1.6	1.2	0.4	0.57
54	37	91	48	SI-174	17	SI-008	22	石器	黒曜石	0.6	0.8	0.2	0.10
55	37	91	48	SI-174	17	SI-008	41	石器	チャート	1.7	1.5	0.4	0.81
56	37	91	49	SI-174	17	SI-008	43	石器	チャート	1.5	1.9	0.3	0.63
57	37	91	50	SI-174	17	SI-008	49	石器	チャート	1.7	1.3	0.3	0.63
58	37	91	51	SI-174	17	SI-008	60A	石器	チャート	1.1	1.4	0.3	0.30
59	37	91	52	SI-174	17	SI-008	122	石器	黒曜石	0.9	1.1	0.3	0.47
60	37	91	51	SI-174	17	SI-008	176	石器	チャート	1.8	1.7	0.3	0.76
61	37	91	52	SI-174	17	SI-008	176	石器	ガラス質黑色安山岩	1.7	1.6	0.3	0.59
62	37	91	54	SI-174	18	SI-016	4	石器	黒曜石	1.8	1.1	0.3	0.53
63	37	91	55	Z23-99	12	Z23-09	1B	石器	チャート	2.7	1.7	0.4	1.54
64	37	91	56	AIA22-29	17	AIA22-29	1F	石器	チャート	2.0	1.5	0.5	1.22
65			AIA22-39	17	AIA22-39	1A	石器	チャート	1.7	1.4	0.3	0.50	
66			AIA22-39	17	AIA22-39	1F	石器	黒曜石	1.1	1.2	0.3	0.33	
67	37	91	57	SI-174	17	SI-008	86	石器	チャート	2.5	1.7	0.3	0.71
68	37	91	58	SI-174	17	SI-008	143	石器	ガラス質黑色安山岩	1.4	1.9	0.3	0.61
69	37	91	58	SI-174	17	SI-008	56-A	石器	透波岩質鐵灰岩	2.2	1.2	0.6	1.33
70	37	91	59	SI-172-15	17	HBE2-15	1A	石器	黒曜石	1.3	1.8	0.3	0.54
71	37	91	60	SI-172-32	17	HBE2-32	3J	石器	チャート	2.0	1.5	0.4	0.66
72	37	91	61	SI-172-42	17	HBE2-42	1B	石器	チャート	1.8	1.1	0.3	0.59
73	37	91	62	SI-172-32	17	HBE2-52	1A	石器	黒曜石	2.2	1.8	0.3	1.09
74	37	91	63	SI-172-60	17	HBE2-60	1F	石器	チャート	2.9	1.5	0.3	0.98
75	37	91	64	HBE2-77	17	HBE2-77	1A	石器	チャート	2.2	1.2	0.5	0.94
76	37	91	65	SI-172-81	17	HBE2-81	1A	石器	チャート	1.9	1.2	0.3	0.57
77	37	91	65	HBE2-81	17	HBE2-81	1A	石器	チャート	1.1	1.4	0.3	0.69
78	37	91	66	HBE2-21	14	HBE2-21	1A	石器	モノク	1.9	1.7	0.3	0.89
79	37	91	67	CC22-41	14	CC22-41	1	石器	チャート	2.5	1.9	0.4	1.58
80	37	91	68	CC22-48	18	CC22-48	1	石器	黒曜石	1.9	1.3	0.4	0.67
81			CC22-82	14	CC22-82	1C	石器	黒曜石	1.0	1.2	0.3	0.33	
82			DID22-42	16	DID22-42	1D	石器	黒曜石	1.4	1.6	0.4	0.74	
83			SI-115	13	SI-014	14	石器未成品	チャート	1.4	1.3	0.3	0.74	
84	37	91	69	SI-116	12	SI-008	20	石器未成品	チャート	1.8	1.4	0.3	0.67
85	37	91	70	SI-116	12	SI-008	21	石器未成品	チャート	1.7	1.3	0.3	0.56
86	37	91	71	SI-116	12	SI-008	25	石器未成品	透波岩	1.9	1.9	0.3	1.61
87	37	91	72	SI-116	12	SI-008	328	石器未成品	チャート	1.6	1.4	0.3	0.68
88	37	91	73	SI-116	12	SI-008	350	石器未成品	チャート	2.0	1.9	1.0	3.28
89	37	91	74	SI-116	12	SI-008	243	石器未成品	トロドロ石	3.4	2.2	0.9	6.39
90	37	91	75	SI-116	12	SI-008	252	石器未成品	チャート	1.5	1.2	0.4	0.88
91	37	91	76	SI-116	12	SI-008	261	石器未成品	透波岩	2.6	2.2	0.7	4.17
92	37	91	77	SI-116	12	SI-008	278	石器未成品	チャート	1.9	1.3	0.3	0.84

国別	邦國	番号	遺構	旧遺構番号	遺物番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2
93	57	91	78	SI-117	12	SI-002	7	石獅未成品	チャート	2.3	21	0.8	4.43
94			SI-117		SI-002	9	石獅未成品	チャート	1.7	0.8	0.3	0.47 破片	
95			SI-118		SI-003	6	石獅未成品	チャート	2.2	1.4	0.6	2.31 右半分欠損	
96	57	91	79	SI-118	12	SI-003	10	石獅未成品	チャート	2.8	1.8	0.7	3.18
97			SI-119		SI-003	28	石獅未成品	チャート	1.7	0.8	0.5	0.59	
98	57	91	80	SI-120	12	SI-003	29	石獅未成品	チャート	2.0	2.3	0.7	1.96 先端欠損
99	57	91	81	SI-120	12	SI-006	17	石獅未成品	チャート	1.7	1.7	0.5	1.37
100	57	91	82	SI-120	12	SI-006	64	石獅未成品	チャート	2.7	2.4	0.9	4.49
101	57	91	83	SI-120	12	SI-006	69	石獅未成品	チャート	3.5	2.9	1.1	9.91
102			SI-120		SI-006	93	石獅未成品	チャート	2.2	1.9	0.6	2.63	
103	57	91	84	SI-120	12	SI-006	115	石獅未成品	チャート	1.8	1.4	0.4	1.32
104			SI-121		SI-006	9	石獅未成品	チャート	2.0	1.8	0.4	1.61 横形石器素材	
105			SI-124		SI-007	12	石獅未成品	チャート	2.1	1.4	0.6	1.43 破片	
106	57	91	85	SI-124	12	SI-007	17	石獅未成品	チャート	3.0	1.9	0.6	5.02 横形石器素材
107			SI-124		SI-007	27	石獅未成品	チャート	3.1	2.5	1.0	6.66 修理用	
108			SI-124		SI-007	35	石獅未成品	チャート	2.4	2.3	0.9	3.00 修理用	
109			SI-124		SI-007	164	石獅未成品	チャート	3.2	1.3	0.9	3.60 横形石器素材	
110			SI-124		SI-007	180	石獅未成品	チャート	2.2	1.6	0.4	1.39	
111			SI-124		SI-007	210	石獅未成品	チャート	1.8	1.4	0.4	1.55 一部欠損	
112			SI-124		SI-007	235	石獅未成品	チャート	1.7	1.8	0.7	2.20	
113			SI-124		SI-007	254	石獅未成品	チャート	2.0	1.3	0.6	1.28 横形石器素材	
114			SI-124		SI-007	260	石獅未成品	チャート	4.1	2.2	1.3	10.54 破片	
115	57	91	86	SI-124	12	SI-007	283	石獅未成品	チャート	2.0	1.7	0.5	1.76 横形石器素材
116	57	91	87	SI-124	12	SI-007	285	石獅未成品	チャート	2.3	1.8	0.7	2.66
117	57	92	88	SI-126	12	SI-010	2	石獅未成品	チャート	2.5	21	1.1	5.04 横形石器素材
118			SI-127		SI-011	20	石獅未成品	チャート	2.3	1.3	0.6	1.69 破片	
119			SI-132	13	SI-003	67	石獅未成品	チャート	2.3	20	1.0	4.25	
120	57	92	89	SI-137	14	SI-006	292	石獅未成品	チャート	1.9	1.1	0.5	1.02 神津島産
121			SI-140	14	SI-006	45	石獅未成品	チャート	2.4	1.4	0.3	1.23	
122	57	92	90	SI-141	14	SI-009	80	石獅未成品	チャート	2.9	2.2	0.8	4.16
123			SI-142	14	SI-009	97	石獅未成品	チャート	2.5	1.8	0.6	2.34	
124	57	92	91	SI-143	14	SI-009	104	石獅未成品	チャート	2.3	1.7	0.6	2.08 横形石器素材
125			SI-145	14	SI-013	63	石獅未成品	チャート	1.7	1.2	0.4	1.14 破片	
126			SI-145	14	SI-013	95	石獅未成品	チャート	1.4	1.4	0.5	0.81	
127	57	92	92	SI-145	14	SI-013	131	石獅未成品	チャート	2.6	1.6	0.8	3.01 横形石器素材
128			SI-145	14	SI-013	134	石獅未成品	チャート	2.8	1.8	0.4	2.00 横形石器素材	
129	58	92	93	SI-151	14	SI-021	2	石獅未成品	チャート	2.9	2.1	0.8	3.35
130			SI-152	14	SI-021	57	石獅未成品	チャート	1.6	1.4	0.3	0.92 横形石器素材	
131	56	92	94	SI-152	15	SI-021	66	石獅未成品	チャート	2.5	2.6	0.5	3.58
132	58	92	95	SI-152	15	SI-021	67	石獅未成品	チャート	2.5	1.8	0.4	2.83
133	58	92	96	SI-158	14	SI-027	14	石獅未成品	チャート	1.2	1.3	0.5	0.35
134	58	92	158	SI-158	14	SI-027	2	石獅未成品	チャート	1.4	1.2	0.4	0.36 破片
135	58	92	97	SI-158	14	SI-027	57	石獅未成品	チャート	1.8	1.6	0.4	1.22 横形石器素材
136	58	92	98	SI-158	14	SI-027	63	石獅未成品	チャート	3.1	28	0.9	6.88
137			SI-159	14	SI-028	53	石獅未成品	チャート	3.0	1.8	1.0	3.16	
138	58	92	99	SI-159	14	SI-028	35	石獅未成品	メソウ	2.4	1.4	0.7	1.79
139	58	92	100	SI-159	14	SI-028	61	石獅未成品	チャート	2.9	23	0.9	6.79
140			SI-160	14	SI-029	71	石獅未成品	チャート	1.6	1.4	0.6	1.21	
141			SI-160	14	SI-029	72	石獅未成品	チャート	2.0	17	0.7	2.28 横形石器素材	
142			SI-160	14	SI-029	103	石獅未成品	チャート	2.6	17	0.6	2.99	
143			SI-160	17	SI-006	34	石獅未成品	チャート	0.9	15	0.5	1.36	
144			SI-161	14	SI-030	10	石獅未成品	チャート	2.7	22	1.0	4.77	
145			SI-161	14	SI-030	54	石獅未成品	チャート	3.0	19	0.6	4.83	
146			SI-161	14	SI-030	121	石獅未成品	チャート	2.1	1.6	0.7	2.48	
147			SI-161	14	SI-030	124	石獅未成品	トロット石	2.9	27	0.8	5.50	
148			SI-161	14	SI-030	130	石獅未成品	チャート	3.1	25	0.7	6.01	
149			SI-161	14	SI-030	154	石獅未成品	チャート	1.9	28	0.6	3.41	
150			SI-161	14	SI-030	228	石獅未成品	チャート	1.7	15	0.4	1.28	
151			SI-161	14	SI-030	228	石獅未成品	チャート	2.1	13	0.6	1.66 破片	
152			SI-161	14	SI-030	230	石獅未成品	チャート	2.6	14	0.7	2.91	
153			SI-161	14	SI-030	264	石獅未成品	メラントニルス	2.4	24	0.6	3.28	
154			SI-161	14	SI-030	268	石獅未成品	チャート	2.3	22	0.9	4.67	
155			SI-162	14	SI-031	2	石獅未成品	チャート	2.3	21	0.8	3.58	
156			SI-162	14	SI-031	9	石獅未成品	チャート	2.1	17	0.5	1.02	
157			SI-162	14	SI-031	16	石獅未成品	チャート	1.8	16	0.5	1.17	
158			SI-163	14	SI-031	2	石獅未成品	チャート	2.5	16	0.5	2.71 横形石器素材	
159			SI-163	14	SI-031	11	石獅未成品	チャート	2.1	31	1.0	8.37	
160			SI-163	14	SI-032	65	石獅未成品	チャート	2.1	14	0.5	1.65	
161			SI-163	14	SI-032	69	石獅未成品	チャート	1.6	13	0.4	1.04 横形石器素材	
162			SI-163	14	SI-032	129	石獅未成品	チャート	2.4	17	0.5	1.64	
163			SI-164	14	SI-033	118	石獅未成品	チャート	3.1	30	1.0	11.83	
164			SI-164	14	SI-033	163	石獅未成品	チャート	3.2	24	1.2	8.94 横形石器素材	
165	58	92	101	SI-165	14	SI-034	15	石獅未成品	チャート	2.6	23	0.7	4.15
166			SI-165	14	SI-034	6	石獅未成品	チャート	2.5	24	0.6	3.02	
167			SI-165	14	SI-034	19	石獅未成品	チャート	2.4	18	0.5	3.88	
168			SI-165	14	SI-034	23	石獅未成品	メジュー	2.1	15	0.5	1.59	
169			SI-165	14	SI-034	25	石獅未成品	白累	3.0	21	0.8	5.58	
170			SI-165	14	SI-034	45	石獅未成品	チャート	3.1	23	0.9	6.36	
171			SI-165	14	SI-034	52	石獅未成品	チャート	1.7	14	0.3	0.87	
172			SI-165	14	SI-034	96	石獅未成品	チャート	2.2	18	0.8	3.84	
173			SI-167	14	SI-036	5	石獅未成品	チャート	1.9	14	0.5	1.70	
174			SI-167	14	SI-036	10	石獅未成品	チャート	2.3	19	0.7	4.62 横形石器素材	
175			SI-167	14	SI-036	11	石獅未成品	チャート	1.8	12	0.5	1.77 破片	
176			SI-167	17	SI-006	62	石獅未成品	メラントニルス	2.2	17	0.5	1.87	
177			SI-167	17	SI-006	63	石獅未成品	チャート	2.1	20	0.8	3.53 横形石器素材	
178			SI-167	17	SI-006	82	石獅未成品	チャート	3.5	19	0.8	6.31	
179			SI-167	17	SI-006	140	石獅未成品	チャート	3.5	23	0.8	5.11	
180			SI-172	17	SI-001	7・34	石獅未成品	チャート	4.4	34	1.5	17.90	
181			SI-172	17	SI-004	15	石獅未成品	チャート	2.5	17	0.5	1.75	
182			SI-173	17	SI-004	13	石獅未成品	チャート	2.2	18	0.8	4.56	
183			SI-173	17	SI-004	21	石獅未成品	チャート	2.0	12	0.5	1.77	
184			SI-174	17	SI-005	59	石獅未成品	チャート	1.7	16	0.1	0.42 破片	
185			SI-174	17	SI-006	1F	石獅未成品	チャート	1.9	16	0.4	1.60	
186			SI-174	17	SI-006	8	石獅未成品	チャート	2.4	21	0.7	4.07	
187			SI-174	17	SI-006	50	石獅未成品	チャート	1.4	14	0.4	0.90 破片	

国別	邦国	番号	遺構	旧遺構番号	遺物番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2		
188		SL-174	17	SI-008	93	石獅頭成品	チャート	2.0	1.6	0.4	1.60	両側剥片素材			
189		SL-174	17	SI-008	129A	石獅頭成品	チャート	2.9	2.2	0.6	3.81	一部欠損			
190		SL-174	17	SI-008	150	石獅頭成品	チャート	2.4	2.0	1.0	4.13	両側剥片			
191		SL-174	17	SI-008	171	石獅頭成品	チャート	2.3	1.2	0.4	1.20				
192		SL-174	17	SI-008	189	石獅頭成品	チャート	3.0	2.0	0.8	4.78				
193		SL-174	17	SI-008	212	石獅頭成品	チャート	2.9	2.0	0.8	4.30				
194	58	92	102	D020	8	SI-008	213	石獅頭成品	チャート	3.2	1.9	0.7	2.66		
195				D020	8	SI-008	1-27	石獅頭成品	チャート	1.7	1.8	0.6	1.89	両側剥片素材	
196	58	92	103	D020	8	SI-008	132	石獅頭成品	チャート	2.1	1.7	0.5	1.53		
197				D020	8	SI-008	146	石獅頭成品	チャート	0.9	1.8	0.4	0.89	局部破片	
198				SK-319	17	SIK-005	1A	石獅頭成品	チャート	2.2	1.6	0.4	1.76		
199				SK-326	18	SIK-012	7	石獅頭成品	チャート	1.6	1.7	0.7	1.28	破片	
200				SK-331	18	SIK-017	1	石獅頭成品	メノワ	2.8	2.4	0.8	6.14		
201	56	92	104	Z020	12	SI-008	1-5	石獅頭成品	チャート	2.8	2.0	0.8	3.53		
202				Z020	12	SI-008	1-15	石獅頭成品	チャート	1.6	2.1	0.7	1.56		
203				Z020	12	SI-009	9	石獅頭成品	チャート	1.3	0.9	0.2	0.22		
204				Z020	12	SI-009	30	石獅頭成品	チャート	2.2	1.1	0.5	1.03		
205				Z020	12	SI-009	31	石獅頭成品	チャート	1.7	1.2	0.2	0.65		
206				Z020	12	SI-009	32	石獅頭成品	チャート	1.5	1.7	0.4	0.80	破片、前彎形漏斗器?	
207				Z020	12	SI-009	33	石獅頭成品	チャート	1.8	1.1	0.5	0.95	平欠、両側剥片素材	
208				Z020	12	SI-009	34	石獅頭成品	チャート	2.6	1.2	0.5	2.28		
209				Z020	12	SI-009	35	石獅頭成品	チャート	2.2	1.0	0.6	1.17	破片	
210				Z020	12	SI-009	36	石獅頭成品	チャート	1.6	2.1	0.7	1.00		
211				Z020	12	SI-009	37	石獅頭成品	チャート	2.0	1.1	0.4	0.86	破片	
212				Z020	12	SI-009	38	石獅頭成品	チャート	2.3	2.2	0.7	2.97		
213				Z020	12	SI-009	39	石獅頭成品	チャート	3.8	3.4	1.6	17.32		
214				Z020	12	SI-009	40	石獅頭成品	チャート	2.2	1.7	0.7	2.49		
215				Z020	12	SI-009	41	石獅頭成品	チャート	1.9	1.2	0.3	0.96		
216				Z020	12	SI-009	42	石獅頭成品	チャート	2.4	1.8	0.4	2.31	両側剥片素材	
217				Z020	12	SI-009	43	石獅頭成品	チャート	2.4	2.0	0.8	3.81		
218				Z020	12	SI-009	44	石獅頭成品	チャート	2.1	1.2	0.7	1.75		
219				Z020	12	SI-009	45	石獅頭成品	チャート	1.9	2.8	0.7	2.00	両側剥片	
220				Z020	12	SI-009	46	石獅頭成品	チャート	3.1	2.3	1.0	5.42		
221				Z020	12	SI-009	47	石獅頭成品	チャート	2.0	1.1	0.4	0.86	破片	
222				Z020	12	SI-009	48	石獅頭成品	チャート	2.3	2.2	0.7	2.97		
223				Z020	12	SI-009	49	石獅頭成品	チャート	3.8	3.4	1.6	17.32		
224				Z020	12	SI-009	50	石獅頭成品	チャート	2.2	1.7	0.7	2.49		
225				Z020	12	SI-009	51	石獅頭成品	チャート	1.9	1.2	0.3	0.96		
226				Z020	12	SI-009	52	石獅頭成品	チャート	2.5	2.0	0.8	4.12	両側剥片素材	
227				Z020	12	SI-009	53	石獅頭成品	チャート	2.7	2.1	0.7	2.67		
228				Z020	12	SI-009	54	石獅頭成品	チャート	1.8	1.3	0.4	0.87	両側剥片	
229				Z020	12	SI-009	55	石獅頭成品	チャート	2.4	1.4	0.5	4.47	両側剥片素材	
229	58	92	105	A022-13	12	SI-009	13	石獅頭成品	チャート	2.9	2.4	0.9	5.57		
230				A022-18	14	SI-009	18	石獅頭成品	チャート	3.1	2.5	0.8	5.97		
231				A022-19	14	SI-009	19	石獅頭成品	チャート	3.9	29	1.4	14.10	両側剥片	
232	58	92	106	A022-19	12	SD-002	10	石獅頭成品	チャート	2.6	1.6	0.6	2.70		
233	58	92	107	A022-19	12	SD-002	11	石獅頭成品	チャート	3.1	2.5	1.1	6.32		
234	58	92	108	A022-19	12	SD-002	12	石獅頭成品	チャート	2.8	1.7	0.6	3.20		
235	58	92	109	A022-19	12	SD-002	13	石獅頭成品	チャート	2.1	1.2	0.6	2.41	平欠、両側剥片素材	
236	58	92	110	A022-19	12	SD-002	14	石獅頭成品	チャート	3.6	3.7	0.8	10.00	両側剥片	
237				A022-19	12	SD-002	16	石獅頭成品	チャート	1.5	2.9	0.5	3.87	局部破片	
238	58	92	111	A022-19	12	SD-002	16	石獅頭成品	チャート	4.4	3.8	1.1	16.89		
239	58	92	112	A022-51	14	SI-009	51	石獅頭成品	チャート	2.5	2.0	0.6	3.13		
240	58	92	113	A022-55	12	SI-009	55	石獅頭成品	チャート	3.4	2.1	0.8	5.09		
241	58	92	114	A022-55	12	SI-009	55	石獅頭成品	チャート	2.4	1.7	0.5	1.70	両側剥片	
242	58	92	115	A022-56	12	SI-009	56	石獅頭成品	チャート	3.4	2.4	0.7	5.72		
243	58	92	116	A022-56	12	SI-009	56	石獅頭成品	チャート	2.2	2.8	0.7	2.91		
244				A022-56	12	SI-009	57	石獅頭成品	チャート	2.3	1.7	0.7	2.30		
245				A022-17	12	SI-009	57	石獅頭成品	チャート	2.1	1.3	0.5	1.44	平欠、傾斜系	
246				H022-71	16	HB1-71	16	石獅頭成品	チャート	3.2	3.0	0.9	11.36		
247				H022-87	18	HB1-87	18	石獅頭成品	チャート	2.0	1.5	0.5	1.24	両側剥片	
248				H022-87	18	HB1-87	07	石獅頭成品	チャート	2.7	2.3	0.7	4.35		
249				H022-11	17	HB1-11	17	石獅頭成品	チャート	1.5	0.9	0.2	0.34		
250				H022-15	17	HB1-15	17	石獅頭成品	チャート	2.2	1.7	0.3	1.23	部分的な二次加工	
251				H022-40	17	HB1-40	17	石獅頭成品	チャート	1.7	1.5	0.5	0.89		
252				H022-52	14	HB1-52	14	石獅頭成品	チャート	2.3	1.8	0.4	1.14		
253				H022-52	14	HB1-52	15	石獅頭成品	チャート	2.9	1.8	0.5	4.45	両側剥片素材	
254				H022-53	14	HB1-53	18	石獅頭成品	チャート	2.2	1.2	0.7	1.40	破片	
255				H022-34	14	HB1-54	14	石獅頭成品	チャート	3.0	21	1.1	6.60	両側剥片素材	
256				H022-60	14	HB1-60	10	石獅頭成品	チャート	2.0	1.8	0.4	1.50		
257				H022-60	14	HB1-60	10	石獅頭成品	チャート	3.2	2.5	0.4	3.11		
258				H022-60	14	HB1-60	11	石獅頭成品	チャート	1.8	1.1	0.6	1.14		
259				H022-65	14	HB1-65	11	石獅頭成品	チャート	1.6	2.5	0.8	3.29	局部破片	
260				H022-71	14	HB1-74	14	石獅頭成品	チャート	2.3	1.8	0.6	2.95		
261				H022-82	14	HB1-82	18	石獅頭成品	チャート	2.5	1.8	0.5	3.82		
262				H022-83	14	HB1-83	11	石獅頭成品	チャート	2.4	1.4	0.6	1.39		
263				H022-84	14	HB1-84	14	石獅頭成品	チャート	2.9	1.9	1.0	4.76		
264				H022-24	12	HB1-24	11	石獅頭成品	チャート	2.3	1.8	0.5	1.91	両側剥片素材	
265				CC-21-75	18	UC21-75	11	石獅頭成品	チャート	1.4	1.9	0.6	1.34	先端部欠損、傾斜系	
266				CC-22-72	14	CC-22-72	11	石獅頭成品	チャート	1.4	1.0	0.3	0.35		
267				HD022-11	16	HD022-11	13	石獅頭成品	チャート	1.2	1.5	0.5	0.58		
268	58	92	117	HD022-20	13	HD022-20	11	石獅頭成品	チャート	2.0	1.4	0.4	1.01	両側剥片素材	
269	58	92	118	SI-115	10	SI-115	13	石獅頭成品	チャート	2.2	1.5	0.7	2.72	両側剥片素材	
270	58	92	119	SI-115	11	SI-114	9	石獅頭成品	チャート	2.6	2.6	1.1	10.66		
271				SI-115	14	SI-114	11	石獅頭成品	チャート	3.1	1.6	0.8	4.51		
272				SI-115	14	SI-114	38	石獅頭成品	チャート	1.9	2.2	0.4	1.92	両側剥片	
273	58	93	120	SI-116	12	SI-116	1	石獅頭成品	チャート	1.5	1.4	0.4	0.88	両側剥片	
274	58	93	121	SI-116	12	SI-116	1	石獅頭成品	チャート	2.7	1.4	1.0	3.39		
275	58	93	122	SI-116	12	SI-116	1	石獅頭成品	ホルンシュラス	3.6	1.9	1.0	7.63		
276				SI-116	12	SI-116	1	石獅頭成品	チャート	0.8	1.7	0.5	0.91	両側剥片、磁片	
277	58	93	123	SI-116	12	SI-116	1	石獅頭成品	チャート	1.9	1.8	0.7	2.00	両側剥片	
278				SI-116	12	SI-116	1	石獅頭成品	チャート	1.2	1.5	0.5	1.10	磁片	
279				SI-116	12	SI-116	1	石獅頭成品	チャート	1.8	1.2	0.8	1.45	両側剥片、磁片	
280	58	93	124	SI-116	12	SI-116	1	石獅頭成品	メノワ	4.8	37	2.2	42.93		
281				SI-116	12	SI-116	1	石獅頭成品	チャート	1.8	0.6	0.4	0.49	両側剥片	

国版	牌國	番号	遺構	旧遺株	遺物 番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2		
283	58	93	125	SI-116	12	SI-001	101	楕円石器	ガラス黒色山田岩	2.4	22	0.5	3.45		
284		SI-116		SI-001	103	楕円石器	チャート	1.2	18	0.4	0.76	破片			
285	58	93	126	SI-116	12	SI-001	105	楕円石器	チャート	3.5	24	1.0	11.00	円錐素材	
286		SI-116		SI-001	107	楕円石器	チャート	1.7	23	0.7	2.33	円錐素材、破片			
287	58	93	127	SI-116	12	SI-001	121	楕円石器	チャート	3.7	20	1.0	6.30	破片	
288		SI-116		SI-001	122	楕円石器	チャート	1.7	21	0.7	2.77	破片			
289	58	93	128	SI-116	12	SI-001	171	楕円石器	チャート	2.6	17	1.1	4.62	円錐素材	
290	58	93	129	SI-116	12	SI-001	175	楕円石器	チャート	1.8	15	0.7	2.26	円錐素材	
291	58	93	130	SI-116	12	SI-001	188	楕円石器	泥灰岩	1.7	13	0.9	1.86		
292		SI-116		SI-001	191	楕円石器	チャート	1.2	13	0.4	0.57	破片			
293		SI-116		SI-001	197	楕円石器	泥灰岩質灰岩	2.2	27	0.8	4.95	破片			
294		SI-116		SI-001	227	楕円石器	メノワ	2.4	16	0.7	2.88				
295		SI-116		SI-001	246	楕円石器	チャート	1.2	12	0.5	0.59	円錐素材、破片			
296		SI-116		SI-001	268	楕円石器	チャート	2.7	22	0.8	4.20	破片			
297	58	93	131	SI-116	12	SI-001	289	楕円石器	チャート	3.0	14	1.2	5.09		
298	58	93	132	SI-116	12	SI-001	292	楕円石器	チャート	1.2	12	0.9	1.41		
299	58	93	133	SI-120	12	SI-006	12	楕円石器	チャート	3.0	21	0.4	3.61	円錐素材	
300		SI-120		SI-006	113	楕円石器	チャート	2.2	17	0.3	1.86	円錐素材			
301	58	93	134	SI-120	12	SI-006	114	楕円石器	チャート	2.7	26	1.3	10.59	円錐素材	
302		SI-120		SI-006	116	楕円石器	ホルンフェルス	1.9	16	0.4	1.41	円錐素材			
303	58	93	135	SI-121	12	SI-006	12	楕円石器	チャート	2.4	14	0.6	2.28		
304	58	93	136	SI-121	12	SI-006	27	楕円石器	チャート	3.3	26	0.8	8.41	円錐素材	
305	58	93	137	SI-121	12	SI-006	31	楕円石器	チャート	2.3	14	0.7	2.00		
306		SI-124		SI-001	13	楕円石器	チャート	1.0	14	0.2	0.38	破片			
307		SI-124		SI-001	86	楕円石器	チャート	1.1	19	0.3	0.39	破片			
308		SI-124		SI-001	72	楕円石器	チャート	0.6	13	0.4	0.35	破片			
309		SI-124		SI-001	123	楕円石器	チャート	1.3	15	0.3	0.61	破片			
310		SI-124		SI-001	133	楕円石器	チャート	3.9	12	0.8	3.69	円錐素材			
311	58	93	138	SI-124	12	SI-007	176	楕円石器	赤玉石	3.6	22	1.8	17.45	円錐素材	
312	58	93	139	SI-124	12	SI-007	203	楕円石器	チャート	2.7	28	1.2	11.69	円錐素材	
313		SI-124		SI-007	233	楕円石器	チャート	1.2	11	0.1	0.25	破片、櫛状			
314		SI-124		SI-007	250	楕円石器	チャート	1.9	14	0.7	1.97	破片			
315	58	93	140	SI-124	12	SI-007	287	楕円石器	チャート	2.3	27	1.3	9.85		
316		SI-124		SI-007	314	楕円石器	チャート	3.1	31	2.5	23.06				
317		SI-126		SI-001	53	楕円石器	チャート	3.2	29	1.1	9.06	円錐素材			
318		SI-126		SI-010	8	楕円石器	チャート	1.5	19	0.9	1.95	破片			
319	58	94	141	SI-128	12	SI-012	29	楕円石器	チャート	3.4	23	0.8	7.55	円錐素材	
320	58	94	142	SI-131	13	SI-001	1A	楕円石器	チャート	2.3	21	0.6	3.42	円錐素材	
321	58	94	143	SI-131	13	SI-001	1B	楕円石器	チャート	1.7	30	0.6	4.04	円錐素材	
322		SI-131		SI-001	60	楕円石器	チャート	1.7	13	0.7	2.00	手斧、円錐素材			
323		SI-135		SI-001	1B	楕円石器	チャート	2.0	15	0.7	1.57	破片			
324	58	94	144	SI-134	14	SI-009	11	楕円石器	泥灰岩質灰岩	2.5	31	0.9	6.03	円錐素材	
325		SI-134		SI-009	107	楕円石器	チャート	1.9	14	0.8	2.81	円錐素材			
326		SI-141		SI-009	207	楕円石器	チャート	2.2	12	0.7	1.76	破片			
327	58	94	145	SI-144	14	SI-012	1A	楕円石器	ホルンフェルス	2.8	34	0.8	11.31	円錐素材	
328		SI-145		SI-014	1B	楕円石器	石英	3.0	27	1.9	16.31	円錐素材			
329	58	94	146	SI-145	14	SI-013	27	楕円石器	チャート	3.1	32	0.7	8.26		
330	58	94	147	SI-145	14	SI-013	58	楕円石器	チャート	2.0	26	0.8	3.79	円錐素材	
331		SI-145		SI-013	69	楕円石器	チャート	2.4	34	0.7	4.74	円錐素材			
332		SI-145		SI-013	89	楕円石器	チャート	3.1	19	0.6	3.36	円錐素材			
333		SI-145		SI-013	145	楕円石器	チャート	3.0	15	0.7	3.31	円錐素材			
334		SI-149		SI-019	118	楕円石器	チャート	2.1	23	0.5	3.91				
335	58	94	148	SI-151	14	SI-021	21	楕円石器	チャート	3.1	31	1.4	16.05	円錐素材、76と接合	
336	58	94	149	SI-151	14	SI-021	71	楕円石器	チャート	2.8	21	1.1	8.69	円錐素材、76と接合	
337	58	94	150	SI-158	14	SI-027	16	楕円石器	チャート	2.2	23	1.4	7.07	円錐素材、74と接合	
338		SI-158		SI-027	21	楕円石器	チャート	2.9	21	1.1	7.07	円錐素材、74と接合			
339		SI-158		SI-027	25	楕円石器	チャート	2.1	23	0.9	3.66				
340		SI-158		SI-027	55	楕円石器	チャート	3.7	31	1.4	19.31	円錐素材			
341		SI-159		SI-028	5	楕円石器	チャート	3.0	39	1.5	15.19				
342		SI-159		SI-028	16	楕円石器	チャート	2.8	15	1.1	6.19	円錐素材			
343		SI-159		SI-028	17	楕円石器	チャート	1.7	15	1.0	2.73				
344		SI-159		SI-028	56	楕円石器	チャート	1.1	16	0.4	0.82	破片			
345		SI-159		SI-028	69	楕円石器	泥灰岩	3.5	47	1.8	29.26				
346	58	94	151	SI-159	14	SI-028	83	楕円石器	チャート	2.7	24	1.0	7.14		
347		SI-159		SI-028	99	楕円石器	チャート	2.2	24	0.6	2.57				
348	58	94	152	SI-159	14	SI-028	108	楕円石器	チャート	3.0	24	1.5	10.54		
349		SI-160		SI-029	23	楕円石器	チャート	3.4	27	1.2	10.16	円錐素材			
350		SI-160		SI-029	25	楕円石器	泥灰岩	1.7	21	0.4	1.39	手斧、櫛状			
351		SI-160		SI-029	31	楕円石器	チャート	1.8	17	0.6	2.27	角錐素材			
352		SI-160		SI-006	2	楕円石器	チャート	4.1	21	1.5	12.79				
353	59	94	153	SI-160	17	SI-006	3	楕円石器	チャート	3.1	4.4	1.4	24.61		
354		SI-161		SI-030	47	楕円石器	泥灰岩質灰岩	1.9	0.8	0.5	0.69	破片			
355		SI-161		SI-030	102	楕円石器	チャート	4.1	32	1.5	19.06	円錐素材			
356		SI-161		SI-030	106	楕円石器	チャート	1.0	0.5	0.3	0.20	円錐素材			
357		SI-161		SI-030	119	楕円石器	緑色泥灰岩	3.9	39	1.6	60.00				
358		SI-161		SI-030	203	楕円石器	チャート	3.0	11	0.9	4.14				
359		SI-161		SI-030	207	楕円石器	チャート	2.3	28	0.7	3.92	扁平錐素材、櫛状			
360		SI-161		SI-030	276	楕円石器	チャート	0.9	11	0.3	0.32				
361		SI-161		SI-030	281	楕円石器	チャート	2.0	18	0.6	2.34				
362		SI-162		SI-031	1	楕円石器	チャート	1.9	12	0.7	2.13				
363		SI-163		SI-032	1	楕円石器	チャート	2.4	18	0.9	3.48				
364		SI-163		SI-032	9	楕円石器	泥灰岩	2.7	24	0.7	1.98	下端部欠損			
365		SI-163		SI-032	15	楕円石器	チャート	2.0	15	0.4	1.98	円錐素材			
366		SI-163		SI-032	28	楕円石器	チャート	2.2	14	0.9	2.54				
367		SI-163		SI-032	89	楕円石器	チャート	3.3	21	1.3	9.44	円錐素材			
368		SI-163		SI-032	130	楕円石器	チャート	2.4	16	0.7	3.02	円錐素材			
369		SI-163		SI-032	138	楕円石器	チャート	2.2	12	0.7	1.95				
370		SI-164		SI-033	1C	楕円石器	黒色頁岩	3.8	21	0.9	8.69				
371		SI-164		SI-033	4	楕円石器	チャート	2.1	15	1.2	3.15				
372		SI-164		SI-033	42	楕円石器	チャート	1.1	12	0.2	0.74	円錐素材、破片			
373		SI-165		SI-034	1	楕円石器	泥灰岩	1.7	16	0.5	1.91				
374		SI-165		SI-034	88	楕円石器	チャート	3.2	27	2.0	16.25				
375		SI-165		SI-034	72	楕円石器	チャート	2.1	16	0.3	1.08	円錐素材			
376		SI-165		SI-034	94	楕円石器	チャート	2.0	22	0.5	2.84	円錐素材			
377	58	94	154	SI-165	14	SI-034	112	楕円石器	チャート	3.0	25	1.3	11.12	円錐素材	

国版	排回	番号	遺構	旧遺株	遺物 番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2		
378		SL-165	14	SI-034	108	楕円石器	麻糾石	2.5	1.3	0.5	21.0				
379		SL-167	17	SI-006	1B	楕円石器	チャート	3.6	3.3	1.4	17.89				
380		SL-167	17	SI-006	1C	楕円石器	チャート	2.9	1.4	1.1	4.29	円錐素材			
381		SL-167	17	SI-006	5	楕円石器	チャート	3.0	4.0	1.1	16.45				
382		SL-167	17	SI-006	24	楕円石器	チャート	2.4	1.1	1.0	4.46	円錐素材			
383		SL-167	17	SI-006	77	楕円石器	チャート	2.0	1.4	0.7	4.42				
384		SL-167	17	SI-006	28	楕円石器	チャート	4.3	2.9	1.5	18.50	円錐素材			
385		SL-171	17	SI-001	82	楕円石器	カルシフィカス	3.0	2.3	0.7	3.37	礫片、円錐素材			
386		SL-172	17	SI-004	1A	楕円石器	チャート	2.3	1.6	0.7	2.05				
387		SL-172	17	SI-004	27	楕円石器	チャート	3.7	3.7	1.9	37.11	円錐素材			
388		SL-173	17	SI-007	30	楕円石器	チャート	2.2	2.4	0.5	3.59	円錐素材			
389		SL-173	17	SI-007	62	楕円石器	チャート	3.1	4.1	0.7	12.81	円錐素材			
390		SL-173	17	SI-007	72	楕円石器	チャート	2.4	1.4	0.8	3.39				
391		SL-174	17	SI-008	1	楕円石器	チャート	3.0	2.8	1.0	11.70	円錐素材			
392		SL-174	17	SI-008	47	楕円石器	チャート	2.2	2.5	0.7	2.89	円錐素材			
393		SL-174	17	SI-008	64	楕円石器	チャート	1.4	1.3	0.7	1.69				
394		SL-174	17	SI-008	76	楕円石器	チャート	2.3	0.9	0.5	1.09	角錐素材			
395		SL-174	17	SI-008	95	楕円石器	チャート	2.4	1.6	1.5	7.20	円錐素材			
396		SL-174	17	SI-008	96	楕円石器	チャート	1.6	1.2	0.6	1.12				
397		SL-174	17	SI-008	99	楕円石器	チャート	1.9	2.0	0.8	2.87	円錐素材			
398		SL-174	17	SI-008	156	楕円石器	チャート	2.6	3.3	0.9	9.53	円錐素材			
399		SL-174	17	SI-008	190	楕円石器	チャート	1.6	1.1	0.4	0.78	円錐素材			
400		SL-174	17	SI-008	191	楕円石器	チャート	1.9	1.9	0.7	1.87				
401		SL-174	17	SI-008	196	楕円石器	チャート	2.8	1.5	1.2	2.17	円錐素材			
402		SL-174	17	SI-008	221	楕円石器	チャート	2.2	1.2	0.8	2.32	角錐素材			
403		SL-174	17	SI-008	247	楕円石器	チャート	2.7	3.9	1.3	15.54	角錐素材			
404	59	95	155	D0209	8	SI-001	1-(1)楕円石器	チャート	1.9	2.0	0.7	2.82			
405	59	95	156	D0209	8	SI-001	1-(1C)楕円石器	チャート	1.8	1.5	0.7	2.30	円錐素材		
406	59	95	157	D0209	8	SI-001	1-(1D)楕円石器	チャート	2.6	2.6	0.5	3.82	円錐素材		
407	59	95	158	D0209	8	SI-001	1-(1H)楕円石器	チャート	2.6	1.5	1.0	4.60	礫片		
408	59	95	159	D0209	8	SI-001	1-(1L)楕円石器	チャート	1.3	2.1	0.5	1.18	礫片		
409	59	95	159	D0209	8	SI-001	1-(1M)楕円石器	チャート	2.0	1.9	0.5	1.00	洛杉矶		
410	59	95	160	D0209	8	SI-001	1-(1N)楕円石器	チャート	2.5	2.9	0.8	6.31	円錐素材		
411		SL-175	17	SI-001	1-2	楕円石器	チャート	1.3	2.1	0.7	2.77	円錐素材、礫片			
412	59	95	161	D0209	8	SI-001	1-3-A)楕円石器	メノウ	2.1	2.4	0.9	5.67	円錐素材		
413	59	95	162	D0209	8	SI-001	1-3-D)楕円石器	チャート	2.6	1.6	0.9	4.25			
414	59	95	163	D0209	8	SI-001	1-(3)楕円石器	チャート	2.1	1.3	0.8	2.58	円錐素材		
415		SL-176	17	SI-001	1-(4C)楕円石器	チャート	1.3	1.5	0.5	0.86	礫片				
416	59	95	164	D0209	8	SI-001	1-(4D)楕円石器	チャート	2.7	1.3	0.8	4.19	円錐素材		
417	59	95	165	D0209	8	SI-001	1-(4E)楕円石器	ガラス質黒色岩山石	2.0	2.9	0.9	8.49			
418		SL-177	17	SI-001	21	楕円石器	碧玉質石	2.1	1.8	0.5	1.95	平矢			
419		SK-297	14	SI-021	32	楕円石器	チャート	2.0	1.6	0.5	1.49	円錐素材			
420		SK-316	17	SI-001	3B	楕円石器	碧螺石	1.7	1.2	0.6	1.20				
421		SK-326	18	SI-001	11	楕円石器	チャート	1.6	1.4	0.3	0.97	円錐素材			
422		SK-332	18	SI-018	2	楕円石器	チャート	1.8	2.1	0.6	2.80	円錐素材			
423		SK-332	18	SI-018	5	楕円石器	チャート	1.9	1.7	0.7	3.20	円錐素材			
424		SK-340	18	SI-032	15	楕円石器	チャート	2.8	2.1	0.6	3.34				
425		SK-340	18	SI-032	17	楕円石器	チャート	2.1	3.0	0.9	4.32				
426	59	95	166	D0209	9	SI-001	22	楕円石器	チャート	1.9	1.7	0.6	1.18		
427	59	95	167	D0209	9	SI-001	23-A)楕円石器	チャート	2.1	29	0.9	5.62	円錐素材		
428		ZG-28	12	ZG-33	8B	楕円石器	カルシフィカス	2.2	2.7	0.9	5.93	円錐素材			
429		AJ-22	28	AJ-22	28	楕円石器	メノウ	2.5	3.4	1.2	7.14	-部矢頭			
430		AJ-22	39	AJ-22	39	楕円石器	チャート	3.5	20	1.4	11.99				
431		AJ-22	48	AJ-22	48	楕円石器	チャート	2.0	2.2	0.5	2.11				
432		AJ-22	55	AJ-22	55	楕円石器	チャート	4.9	26	2.3	36.41				
433		AJ-22	56	AJ-22	56	楕円石器	チャート	2.0	1.2	0.5	2.00				
434		AJ-22	57	AJ-22	57	楕円石器	チャート	2.3	1.8	0.5	1.87	円錐素材			
435		AJ-22	65	AJ-22	65	楕円石器	チャート	2.4	2.1	1.3	2.87				
436		AJ-22	65	AJ-22	65	楕円石器	チャート	1.5	1.0	0.8	1.10	円錐素材			
437		AJ-22	66	AJ-22	66	楕円石器	チャート	3.4	25	0.4	5.00	円錐素材			
438		AJ-22	66	AJ-22	66	楕円石器	チャート	2.6	3.7	0.8	10.49	円錐素材、半矢			
439		AJ-22	79	AJ-22	79	楕円石器	チャート	2.7	2.3	1.2	7.74	円錐素材			
440		AJ-22	79	AJ-22	79	楕円石器	チャート	2.6	1.4	0.8	3.38	円錐素材			
441		AJ-22	79	AJ-22	79	楕円石器	チャート	2.7	1.7	1.0	5.03	角錐素材			
442		AJ-22	80	AJ-22	80	楕円石器	チャート	2.3	1.8	0.8	3.52	円錐素材			
443	59	95	168	AJ-22	91	楕円石器	チャート	2.6	25	0.9	3.74				
444		AJ-22	97	AJ-22	97	楕円石器	チャート	1.4	1.8	0.5	0.75	半矢、円錐素材			
445	59	95	169	AJ-23	34	楕円石器	チャート	2.4	26	0.8	4.56	円錐素材			
446		AJ-23	45	AJ-23	45	楕円石器	メノウ	2.8	25	1.1	7.86				
447		AJ-23	45	AJ-23	45	楕円石器	チャート	4.4	34	2.1	45.99				
448	59	95	170	AJ-23	46	楕円石器	チャート	2.0	21	0.7	2.75				
449		AJ-23	46	AJ-23	46	楕円石器	チャート	2.6	1.0	0.8	1.86	半矢、円錐素材			
450		AJ-23	55	AJ-23	55	楕円石器	チャート	1.5	1.2	0.3	0.52	円錐素材			
451		AJ-23	55	AJ-23	55	楕円石器	チャート	0.9	2.7	0.2	0.52	礫片			
452	59	95	171	AJ-22	57	楕円石器	メノウ	1.8	1.7	0.5	2.27				
453	59	95	172	AJ-22	66	楕円石器	チャート	1.8	0.9	0.5	0.79	円錐素材			
454	59	95	173	AJ-23	23	SD-002	1A	楕円石器	チャート	2.1	21	1.0	3.69	円錐素材	
455		H021	85	H021	85	楕円石器	チャート	2.9	19	1.2	7.73				
456		H022	05	H022	02	楕円石器	チャート	2.3	19	0.5	3.52				
457		H022	30	H022	20	楕円石器	チャート	3.7	32	2.6	34.42	-部に剥離痕			
458		H022	30	H022	30	楕円石器	チャート	1.4	19	0.6	1.34				
459		H022	31	H022	31	楕円石器	チャート	2.1	13	0.8	1.03	円錐素材			
460		H022	42	H022	42	楕円石器	チャート	2.5	21	0.7	2.03	円錐素材			
461		H022	43	H022	43	楕円石器	チャート	2.6	23	0.7	4.30	円錐素材			
462		H022	52	H022	52	楕円石器	チャート	2.8	13	0.4	1.90	円錐素材			
463		H022	52	H022	52	楕円石器	チャート	2.8	15	1.1	5.08	円錐素材			
464		H022	62	H022	62	楕円石器	メノウ	3.6	26	1.0	9.25				
465		H022	63	H022	63	楕円石器	チャート	2.1	26	0.7	4.11	円錐素材			
466		H022	69	H022	69	楕円石器	チャート	1.9	22	0.6	2.70				
467		H022	75	H022	75	楕円石器	チャート	3.1	18	1.1	8.71	円錐素材			
468		H022	83	H022	83	楕円石器	チャート	2.8	22	0.7	4.78	円錐素材			
469		H022	83	H022	83	楕円石器	チャート	2.9	27	0.7	6.90	円錐素材			
470		H022	83	H022	83	楕円石器	チャート	2.6	18	1.2	5.60	円錐素材			
471		H022	83	H022	83	楕円石器	チャート	2.8	19	0.7	4.08	円錐素材			
472		H022	83	H022	83	楕円石器	チャート	2.9	19	0.7	4.54	円錐素材			

国別	地図番号	遺構	旧遺構番号	遺物番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2	
473		H0322	17	SK-003	23 横形石器	チャート	3.0	1.7	0.6	3.61	円錐素材		
474		H0322	17	SK-003	23 横形石器	チャート	2.5	1.3	0.7	2.31	円錐素材		
475		H0322	17	SK-003	24 横形石器	チャート	1.4	0.7	0.3	0.28	破片、円錐素材		
476		H0322	17	SK-003	25 横形石器	チャート	2.3	1.9	0.9	4.55	円錐素材		
477		H0322	17	SK-003	26 横形石器	チャート	2.2	1.7	0.6	2.16	円錐素材		
478		H0322	17	SK-003	27 横形石器	チャート	4.3	3.2	1.1	1.67	円錐素材		
479		H0322-03	14	H0322-03	1B 横形石器	チャート	3.1	2.2	0.6	5.08			
480		H0322-04	14	H0322-03	1D 横形石器	チャート	2.7	1.8	0.9	3.31	円錐素材		
481		H0322-11	14	H0322-11	1B 横形石器	チャート	2.8	2.1	0.8	3.12	円錐素材		
482		H0322-33	14	H0322-33	1 横形石器	チャート	1.7	1.7	0.6	1.44			
483		CC-22-12	17	CC-22-12	1C 横形石器	チャート	2.8	1.4	0.6	2.58	円錐素材		
484		CC-22-12	17	CC-22-12	1D 横形石器	チャート	3.0	1.4	0.6	10.84	円錐素材		
485		CC-22-22	17	CC-22-22	1L 横形石器	チャート	3.0	3.2	1.7	24.06	円錐素材		
486		CC-22-82	17	CC-22-82	1L 横形石器	チャート	1.9	1.4	0.6	0.53	円錐素材		
487		CC-22-92	14	CC-22-92	1A 横形石器	石英	2.8	1.3	0.7	3.61	円錐素材		
488	59	174	CC-22-92	14	SK-007	2 横形石器	ホルンフェルス	6.4	6.0	1.6	75.00		
489	59	94	175	D020-08	8 横形石器	チャート	2.4	1.4	0.7	3.48	円錐素材		
490	59	94	176	D020-22	8 D020-22	22 横形石器	チャート	3.2	1.5	0.8	3.24	円錐素材	
491	59	94	177	D020-22	8 D020-22	22 横形石器	黒曜質玄武岩	2.5	1.9	0.8	4.64		
492	59	94	178	D020	8 SK-001	1L 横形石器	チャート	2.1	1.9	0.6	3.35	円錐素材	
493	59	97	179	SI-137	14 SI-006	328 石核	黒曜石	6.0	1.4	0.8	7.01	信州系、縦型	
494	59	98	180	SI-133-136	14 SI-021	44 横形石器	ホルンフェルス	3.3	3.8	0.5	5.87	盆地文化、横型	
495	59	98	181	SI-136	14 SI-021	45 横形石器	石英	2.8	2.4	0.6	4.24	盆地文化、横型	
496	59	98	182	SI-165	14 SI-021	45 石核	チャート	5.4	1.7	0.6	8.48	縦型	
497		A2A2-33	12	A2A2-33	33 BB	石核	チャート	3.5	2.6	0.9	6.85	光尾下遺伝、縦型不規	
498	59	96	183	S-216	17 SK-001	3A 石核	メノウ	3.7	1.8	0.7	5.96	光尾下遺伝、縦型	
499	59	96	184	S-216	12 SK-001	211 石核	チャート	2.0	0.8	0.4	0.65	光尾下遺伝	
500	59	96	185	S-216	12 SK-001	223 石核	流紋岩	2.9	2.6	0.9	4.77		
501	59	96	186	S-216	14 SK-009	125 石核	チャート	2.2	2.0	0.6	1.92		
502	59	96	187	S-216	14 SK-021	3 石核	チャート	1.6	0.8	0.5	0.61		
503	59	96	188	S-216	14 SK-021	66 石核	チャート	1.9	1.9	0.5	0.56		
504	59	96	189	S-216	14 SK-021	168 石核	黒曜石	2.6	1.7	0.6	4.99	光尾下に無孔机、神津山系	
505	59	96	190	S-217	17 SK-003	20 石核	チャート	1.5	0.9	0.5	0.58		
506	59	96	191	D020	8 SK-001	1-1(A) 石核	チャート	2.2	0.9	0.4	1.17		
507	59	96	192	A2A2-65	17 A2A2-65	11(B) 石核	チャート	3.9	3.4	0.9	14.60		
508	59	96	193	A2A2-80	12 A2A2-80	11(A) 石核	黒曜石	3.7	0.9	1.0	2.79	信州系	
509		SL-126	12	SI-010	45 石核	石英	チャート	3.1	1.4	0.6	2.28		
510	59	96	194	SI-169	16 SI-002	48 石核未成品	チャート	3.0	1.4	1.0	3.32		
511	59	96	195	SI-169	16 SI-002	49 大きな石核ある酒呑	ホルンフェルス	2.7	1.6	0.6	3.92		
512	59	96	196	SI-169	16 SI-002	50 大きな石核ある酒呑	チャート	1.9	1.4	1.0	2.69	破片	
513	59	96	197	SI-169	16 SI-002	52 大きな石核ある酒呑	チャート	2.5	0.9	0.5	1.11		
514	59	96	198	SI-126	12 SI-009	44 次細くある石核	石英	4.3	3.2	1.0	17.87	横形石器素材	
515	59	96	199	SI-126	12 SI-009	45 次細くある石核	黒曜石	3.2	3.0	0.9	7.73	神津馬鹿	
516	59	96	200	SI-126	12 SI-009	46 次細くある石核	白石英	2.4	2.7	1.3	6.03		
517	59	96	201	SI-126	12 SI-009	47 次細くある石核	チャート	2.9	2.0	0.5	2.58	石核未成品	
518	59	96	202	SI-126	12 SI-009	48 次細くある石核	流紋岩	2.0	1.6	0.4	1.17		
519	59	96	203	SI-126	12 SI-009	49 次細くある石核	チャート	1.5	1.0	0.3	0.48	石核未成品	
520	59	96	204	SI-126	12 SI-009	50 次細くある石核	黒曜石	1.9	1.5	0.5	0.78		
521	59	96	205	SI-126	12 SI-009	51 次細くある石核	チャート	4.9	2.5	1.0	14.76	神津馬鹿	
522	59	96	207	SI-014	29 次細くある石核	チャート	3.2	2.2	1.4	3.81	馬鹿頭山、無縫加工、右刃部?		
523	59	96	208	SI-014	29 次細くある石核	チャート	1.3	1.6	0.6	1.12	石核未成品?		
524		A2A2-53	11	A2A2-53	53(A)	次細くある石核	チャート	6.2	4.1	1.6	52.63		
525		A2A2-59	11	A2A2-59	51(A)	次細くある石核	チャート	1.9	1.6	0.4	1.47		
526		H0322-35	17	H0322-25	15(A)	次細くある石核	チャート	4.1	1.9	1.4	9.71		
527		H0322-31	14	H0322-51	1B	次細くある石核	チャート	2.1	2.0	0.9	4.21		
528		H0322-62	14	H0322-62	62(C)	次細くある石核	チャート	2.9	3.4	1.1	14.46	破片	
529		H0322-73	14	H0322-73	72(B)	次細くある石核	チャート	1.2	0.9	0.5	1.66	破片	
530		H0322-74	14	H0322-74	74(A)	次細くある石核	チャート	3.9	1.5	0.7	4.01		
531		H0322-74	14	H0322-74	74(B)	次細くある石核	流紋岩粗粒焼成块	3.6	2.7	1.2	13.54		
532		H0322-74	14	H0322-74	74(C)	次細くある石核	ホルンフェルス	4.1	4.4	1.5	23.82		
533		H0322-08	14	H0322-02	1C	次細くある石核	チャート	2.1	1.2	0.2	0.66	破片	
534		Z-23-09	12	Z-23-09	11(B)	次細くある石核	チャート	2.2	2.7	0.7	3.42	縫隙に月こぼれ、角錐素材	
535		H0322-92	12	H0322-92	91	次細くある石核	チャート	4.5	3.9	1.0	15.75	縫隙に月こぼれ	
536		H0322-01	16	H0322-01	2(A)	次細くある石核	チャート	3.9	2.7	1.2	10.12	縫隙に月こぼれ、角錐素材	
537		H0322-01	16	H0322-01	2(B)	次細くある石核	チャート	1.7	1.4	0.4	0.41	月刃一部石核	
538	59	96	196	SI-145	14 SI-001	174 刃物の斧	赤鉄鉱	8.5	6.0	0.6	106.77	櫛形刃物	
539	59	96	197	SI-121	16 SI-006	28 刃物の斧	ホルンフェルス	7.5	5.9	2.2	12.14	櫛形刃物	刃刀
540	59	96	198	SI-123	12 SI-006	17 刃物の斧	ホルンフェルス	6.1	4.2	2.3	75.95	櫛形刃物	刃刀
541	59	97	199	SI-137	14 SI-006	22 刃物の斧	砂岩	11.6	5.3	2.8	227.33	馬鹿破片	
542	59	97	200	SI-138	14 SI-006	40 刃物の斧	砂岩	6.1	5.3	2.0	52.97	縫隙	刃刀
543	59	97	201	SI-139	14 SI-006	24 刃物の斧	ホルンフェルス	6.3	4.1	1.3	29.04		
544	59	98	202	SI-139	14 SI-007	25 刃物の斧	安山岩	10.8	10.8	0.4	40.0000	スタンプ形刃物?	
545	59	98	203	SI-149	14 SI-009	197 刃物の斧	ホルンフェルス	4.3	3.2	1.4	25.71		
546	59	98	204	SI-161	14 SI-006	244 刃物の斧	ホルンフェルス	5.8	4.4	1.4	24.47		
547	59	98	205	SI-161	14 SI-006	25 刃物の斧	ホルンフェルス	4.4	4.5	1.8	47.80	馬鹿頭山、風化側面	
548	59	98	206	SI-172	17 SI-004	29 刃物の斧	ホルンフェルス	8.0	5.3	0.8	52.89	櫛形刃物	
549	59	98	207	SI-176	17 SI-011	8 刃物の斧	ホルンフェルス	9.8	4.3	2.1	128.16	櫛形刃物	刃刀
550	59	98	208	SI-176	17 SI-004	29 刃物の斧	ホルンフェルス	10.6	5.9	2.9	270.88	櫛形刃物、刃刀一部欠損	
551	59	98	207	SI-176	17 SI-011	8 刃物の斧	緑色凝灰岩	7.3	4.1	2.9	97.88		
552		I0020	8	SI-001	1-(1)	刃物の斧	砂岩玉	3.9	4.2	1.3	34.07	馬鹿破片	
553	59	98	208	SI-297	14 SK-001	4 刃物の斧	砂岩玉	7.8	6.8	1.9	92.15	分離形刃物	
554	59	99	209	SI-296	16 SK-001	55 刃物の斧	ホルンフェルス	6.0	4.4	1.4	46.40	分離形刃物	
555	59	99	210	SI-295	17 A2A2-65	1A 刃物の斧	ホルンフェルス	7.8	4.7	0.7	46.21	刃物櫛形	刃刀
556	59	99	210	A2A2-72	12 A2A2-72	1B 刃物の斧	ホルンフェルス	8.0	4.5	2.9	199.86	櫛形刃物	刃刀
557	59	99	211	A2A2-71	12 A2A2-91	1B 刃物の斧	ホルンフェルス	6.9	4.2	1.1	32.94	櫛形刃物	刃刀
558	59	99	212	A2A2-91	12 A2A2-91	1C 刃物の斧	成紋岩	6.5	4.8	2.4	92.01	櫛形刃物	刃刀
559	59	99	213	B2B2-34	14 B2B2-34	1C 刃物の斧	砂岩	7.1	4.6	2.5	106.18	櫛形刃物の軋用	
560	59	99	214	B2B2-73	14 B2B2-73	1A 刃物の斧	安山岩	5.8	4.0	1.4	38.81		
561	60	99	215	B2B2-87	14 B2B2-87	1D 刃物の斧	ホルンフェルス	7.8	4.7	1.9	90.01	画面直面	刃刀
562	60	99	216	H0322-16	14 H0322-16	1C 刃物の斧	ホルンフェルス	3.0	4.5	2.0	25.71		
563	60	99	217	H0322-16	14 H0322-16	1B 刃物の斧	ホルンフェルス	4.2	2.9	0.5	11.05	画面直面	刃刀
564	60	99	218	H0322-16	14 H0322-16	1A 刃物の斧	成紋岩	107	9.1	3.3	385.00	刃物櫛形の軋用	
565	60	99	219	D020	8 SK-001	1D 刃物の斧	砂岩	6.6	4.8	2.1	107.73	刃刀	
566	60	99	218	D020	14 SI-014	1A 刃物の斧	緑色岩	3.4	3.1	1.0	1261	破片	

国別	種別	番号	遺構	旧遺株	遺物 番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2		
567		SL-116	12	SI-001	377	骨製石斧	砂岩	3.5	2.5	1.6	14.87	砸片			
568		SL-116	12	SI-001	180	骨製石斧	砂岩	2.2	2.2	1.4	5.76	砸片			
569	61	100	219	SL-121	12	SI-006	23	骨製石斧	緑色凝灰岩	8.1	6.1	3.1	253.24	高部欠損	
570	61	100	220	SL-132	13	SI-003	81	骨製石斧	緑色岩	8.6	4.4	2.3	140.04	高部欠損	断面写
571		SL-132	13	SI-001	101	骨製石斧	緑色岩	11.0	4.7	2.3	2.2	高部欠損			
572		SL-133	14	SI-001	93	骨製石斧	青閃石岩質	2.2	2.2	0.7	8.32	底部片			
573		SL-133	14	SI-001	93	骨製石斧	青閃石岩質	4.6	2.2	1.3	22.00	底部砸片			
574	61	100	221	SL-136	14	SI-004	4	骨製石斧	鈍粒玄武岩	4.8	2.9	0.7	15.84	骨製石器片の再加工品	
575	61	100	222	SL-136	14	SI-004	92	骨製石斧	緑色岩	2.9	2.4	0.8	7.72	高部欠損、小型端子	両刃
576	61	100	223	SL-138	14	SI-006	121	骨製石斧	緑色岩	8.2	5.9	3.0	220.55	刃部分	
577		SL-160	14	SI-029	1A	骨製石斧	砂岩	3.9	2.0	1.5	15.80	底部片			
578	61	100	224	SL-163	14	SI-032	19	骨製石斧	緑色岩	6.8	3.8	1.3	53.26	扁平、刃部一部欠損	両刃
579	61	100	225	SL-164	14	SI-033	21	骨製石斧	ホルンフェルス	6.6	3.5	1.4	52.10	刃端素材	両刃
580		SL-164	14	SI-033	21	骨製石斧	ホルンフェルス	6.6	3.5	1.4	21.56	刃端素材	両刃		
581	61	100	226	SL-165	17	AA-225-65	1C	骨製石斧	透明白石	7.4	4.7	1.2	66.00	丸形、丸孔	
582		AA-225-57	17	AA-225-57	1B	骨製石斧	ホルンフェルス	3.0	2.0	0.5	5.57	砸片			
583		BB-221-64	18	BB-221-64	1A	骨製石斧	緑色岩	6.0	4.5	1.6	66.74	底部破片、扁平			
584	61	100	227	BB-221-66	1A	骨製石斧	緑色岩	10.4	5.2	2.6	211.34	高部欠損			
585		BB-221-52	1D	BB-221-52	1D	骨製石斧	砂岩	3.3	3.8	1.5	22.91	底部片			
586		BB-221-81	14	BB-221-81	1A	骨製石斧	緑色岩	13.8	4.5	3.1	299.89	丸形石、刃部・基部欠損			
587		CC-222-71	14	CC-222-71	1B	骨製石斧	緑色岩	4.7	4.1	1.2	21.25	骨製石器片の再加工品	両刃		
588	61	100	228	CC-222-92	1B	骨製石斧	緑色岩	5.0	3.4	1.5	41.99	刃部欠損、刃部に施設痕	両刃		
589		CC-222-92	1B	CC-222-92	1B	骨製石斧	緑色岩	5.0	3.4	1.5	29.70	刃部欠損	両刃		
590		CC-222-100	1A	CC-222-100	1A	骨製石斧	ホルンフェルス	6.5	3.5	1.6	66.00	丸形石器片の再加工品	両刃		
591	61	100	229	SL-148	14	SI-011	17A	骨製石斧	ホルンフェルス	2.5	4.7	1.2	27.70	砸片	
592		SI-011	17B	SI-011	17B	骨製石斧	砂岩	4.8	4.1	1.1	29.49	砸片、刃部に施設痕	両刃		
593	61	100	230	SI-159	14	SI-028	22	骨製石斧	ホルンフェルス	7.6	2.2	1.3	34.49	片刃、刃端素材	両刃
594	61	100	232	AA-232-10	12	IA-232-10	11	骨製石斧	ホルンフェルス	4.8	3.8	1.3	30.48	砸片	両刃
595	61	100	233	ZB-23-09	12	ZB-23-09	1E	骨製石斧	砂岩	6.0	6.7	3.3	171.26	底面に施設痕	被熱
596	61	100	234	SI-120	12	SI-006	101	鍔縫	砂岩	6.9	4.1	1.4	62.90	崩壊形	被熱
597	61	100	235	SI-124	12	SI-007	84	鍔縫	石英	8.6	3.9	1.9	90.37	上面に施設痕	被熱
598		SI-124	12	SI-007	84	鍔縫	安山岩	10.3	5.0	3.4	271.19	上面に施設痕	被熱		
599	61	100	236	AA-222-16	17	AA-222-16	1A	骨製石斧	石英	8.7	2.9	1.2	24.00	表面中央に凹み痕	被熱
600		AA-222-16	1B	AA-222-16	1B	骨製石斧	石英	8.9	5.3	3.8	262.40	側面打撃で平手			
601		SL-116	12	SI-001	194	骨製石斧	砂岩	1.4	1.5	0.5	0.86	砸片			
602		SL-116	12	SI-001	50	骨製石斧	石英斑岩	4.6	3.4	3.9	64.26	砸片	被熱		
603		SL-116	12	SI-001	63	骨製石斧	安山岩	2.2	2.2	2.5	15.89	砸片			
604		SL-116	12	SI-001	146	骨製石斧	砂岩	2.1	2.2	2.0	9.37	砸片			
605		SL-120	12	SI-001	26	骨製石斧	砂岩	2.6	5.9	1.2	1.2	砸片			
606		SL-120	12	SI-001	26	骨製石斧	安山岩	6.3	4.2	1.7	171.76	側面、底面中央に凹み痕	被熱		
607		SL-120	12	SI-001	121	骨製石斧	安山岩	5.1	2.9	2.2	72.99	側面、底面中央に凹み痕	被熱		
608		SL-120	12	SI-001	131	骨製石斧	石英斑岩	3.8	4.9	4.7	58.34	砸片	被熱		
609		SL-121	12	SI-006	25	骨製石斧	安山岩	3.4	5.5	4.0	86.94	砸片	被熱		
610		SL-121	12	SI-006	36	骨製石斧	砂岩	9.8	8.3	8.2	70.05	砸片	被熱		
611		SL-122	12	SI-006	13	骨製石斧	安山岩	9.6	5.8	5.6	43.00	砸片	被熱		
612	61	100	239	SI-123	13	SI-006	10	骨製石斧	砂岩	9.7	7.8	3.6	37.00	表裏中央に敲打痕	被熱
613		SI-123	13	SI-006	20	骨製石斧	安山岩	6.5	5.4	2.7	107.66	砸片	被熱		
614		SI-124	12	SI-006	6	骨製石斧	安山岩	6.7	4.7	5.2	172.91	砸片	被熱		
615		SI-124	12	SI-007	97	骨製石斧	砂岩	3.5	3.3	0.5	5.79	砸片			
616		SI-124	12	SI-007	302	骨製石斧	安山岩	5.1	3.8	1.8	32.28	砸片			
617		SI-124	12	SI-007	309	骨製石斧	砂岩	5.0	3.4	4.1	65.97	砸片	被熱		
618		SI-126	12	SI-010	22	骨製石斧	砂岩	4.0	6.7	1.8	66.26	砸片	被熱		
619		SI-126	12	SI-010	73	骨製石斧	安山岩	5.0	4.6	3.9	115.56	砸片	被熱		
620		SI-127	12	SI-011	14	16	骨製石斧	砂岩	7.0	5.7	4.9	187.52	砸合	被合	
621	61	100	240	SI-130	13	SI-003	4	骨製石斧	安山岩	8.6	6.2	4.1	365.00	表裏中央に敲打痕	
622	61	100	241	SI-130	13	SI-003	71	骨製石斧	透明白石	6.6	8.2	4.0	107.00	表裏打撃で平手	
623	61	100	242	SI-130	13	SI-003	92	骨製石斧	透明白石	12.0	20.9	3.5	74.00	表裏中央に凹み痕	被熱
624		SI-132	13	SI-003	9	骨製石斧	安山岩	6.9	6.2	3.5	196.84	砸片			
625	61	100	243	SI-132	13	SI-003	10	骨製石斧	ホルンフェルス	6.8	7.2	4.7	37.00	下端斜欠損	被熱
626	61	100	244	SI-132	13	SI-003	23	骨製石斧	ホルンフェルス	9.2	6.2	4.2	32.00	表裏中央に敲打痕	被熱
627	61	100	245	SI-132	13	SI-003	42	骨製石斧	安山岩	8.1	6.5	4.2	316.11	表裏中央に凹み痕	被熱
628	61	100	246	SI-132	13	SI-003	62	骨製石斧	安山岩	8.8	6.3	4.6	37.00	表裏中央に凹み痕	被熱
629		SI-133	14	SI-001	99	骨製石斧	砂岩	8.3	6.1	4.9	280.50	平手、背面中央に凹み痕			
630		SI-135	14	SI-002	58	骨製石斧	透明白石	4.2	4.9	3.1	64.21	側面打撃、側面崩			
631	61	100	247	SI-135	14	SI-002	58	骨製石斧	石英斑岩	9.8	8.0	2.0	313.00	側面打撃、側面崩	
632		SI-135	14	SI-002	15	骨製石斧	砂岩	6.7	6.4	4.3	270.13	平手、表裏中央に凹み痕			
633	61	100	248	SI-135	14	SI-003	81	骨製石斧	砂岩	11.7	9.1	4.1	62.00	背面中央上と側面打撃、側面崩	
634		SI-135	14	SI-003	102	骨製石斧	石英斑岩	6.0	3.7	4.5	114.99	砸片	被熱		
635	61	100	249	SI-136	14	SI-004	59	骨製石斧	砂岩	5.4	4.0	2.5	80.02	砸片	被熱
636		SI-136	14	SI-004	121	骨製石斧	砂岩	6.3	5.7	4.0	195.17	砸片	被熱		
637		SI-137	14	SI-006	124	骨製石斧	安山岩	5.5	8.7	4.2	268.53	#60%欠損	表裏中央に凹み痕		
638		SI-137	14	SI-006	141	骨製石斧	石英斑岩	4.2	4.6	2.6	58.03	平手			
639		SI-137	14	SI-006	218	骨製石斧	安山岩	5.1	8.0	3.6	201.40	#60%欠損	表裏中央に凹み痕		
640		SI-138	14	SI-006	29	骨製石斧	透明白石	2.5	5.4	2.2	24.00	側面打撃、側面崩			
641	61	100	250	SI-139	14	SI-006	28	骨製石斧	安山岩	8.4	6.5	3.9	259.30	表裏中央に凹み痕、側面打撃痕	
642		SI-140	14	SI-006	80	骨製石斧	石英斑岩	5.2	6.1	3.7	159.10	#60%欠損	表裏中央に凹み痕		
643	61	100	251	SI-140	14	SI-008	85	骨製石斧	安山岩	11.1	8.0	4.1	540.00	表裏、側面打撃痕	被熱
644		SI-141	14	SI-009	209	骨製石斧	砂岩	6.2	3.7	3.5	78.72	#30%側面崩			
645	61	100	252	SI-142	14	SI-010	13	骨製石斧	安山岩	10.1	8.0	4.3	570.00	表裏中央に凹み痕	被熱
646		SI-144	14	SI-012	1B	骨製石斧	安山岩	4.6	4.9	3.3	72.62	砸片、表裏崩			
647		SI-145	14	SI-013	1A	骨製石斧	透明白石	4.2	6.9	3.1	116.36	砸片	被熱		
648		SI-145	14	SI-013	9	骨製石斧	砂岩	5.3	5.1	2.2	39.65	平手			
649		SI-145	14	SI-013	140	骨製石斧	安山岩	0.5	8.0	2.0	23.00	側面打撃、側面崩			
650		SI-149	14	SI-019	65	骨製石斧	砂岩	6.0	5.8	4.6	172.77	砸片			
651	61	100	253	SI-149	14	SI-019	254	骨製石斧	透明白石	9.6	8.0	3.6	39.00	側面打撃、表裏中央に凹み痕	
652		SI-152-156	14	SI-023	1E	骨製石斧	砂岩	4.7	2.3	3.4	37.45	砸片			
653		SI-153-156	14	SI-023	1F	骨製石斧	砂岩	3.7	5.1	1.1	22.91	砸片			
654		SI-153-156	14	SI-023	13	骨製石斧	砂岩	4.3	3.0	2.6	34.40	砸片			
655		SI-153-156	14	SI-023	14	骨製石斧	安山岩	4.0	6.2	2.3	69.03	砸片			
656		SI-153-156	14	SI-023	12	骨製石斧	砂岩	4.5	6.1	3.0	37.00	砸片			
657		SI-153-156	14	SI-023	13	骨製石斧	白雲母岩	2.0	2.7	4.2	28.64	砸片			
658		SI-153-156	14	SI-023	20	骨製石斧	砂岩	2.8	3.4	4.3	50.53	砸片	被熱		
659		SI-153-156	14	SI-023	22	骨製石斧	安山岩	5.3	3.7	3.9	52.41	砸片			
660		SI-153-156	14	SI-023	31	骨製石斧	砂岩	5.7	3.8	4.7	109.68	砸片	被熱		
661		SI-153-156	14	SI-023	68	骨製石斧	砂岩	4.8	5.3	2.1	56.88	砸片	被熱		

国別	種別	番号	遺構	旧遺株	遺物 番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2		
662		SI-133-136	14	SI-021	89	磨石類	砂岩	6.7	3.2	3.8	100.50	破片			
663		SI-133-154	14	SI-023	113	磨石類	砂岩	11.5	3.7	3.3	205.68	破片	被熱		
664		SI-133-154	14	SI-023	124	磨石類	成枚岩	3.5	1.9	3.0	24.47	破片	被熱		
665		SI-133-154	14	SI-023	143	磨石類	安山岩	5.6	4.0	3.1	63.02				
666	63	107	Z54	SI-133-154	14	SI-023	150	磨石類	安山岩	6.8	5.8	3.1	100.00	表裏中央に鋸打痕	
667		SI-133-154	14	SI-023	157	磨石類	砂岩	2.8	4.3	2.1	18.30	破片	被熱		
668		SI-133-154	14	SI-023	260	磨石類	砂岩	4.4	5.9	3.3	119.05	破片、西みれ	被熱		
669		SI-133-154	14	SI-023	271	磨石類	砂岩	3.8	4.3	2.3	79.67	破片	被熱		
670		SI-133-154	14	SI-023	273	磨石類	砂岩	4.0	3.2	4.1	71.84	破片、西みれ	被熱		
671		SI-133-154	14	SI-023	288	磨石類	砂岩	3.3	6.6	3.1	81.37	破片、西みれ	被熱		
672		SI-133-154	14	SI-023	297	磨石類	砂岩	4.2	4.2	2.6	58.74	破片			
673		SI-133-154	14	SI-024	1C	磨石類	石英斑岩	4.2	4.3	2.8	75.96	破片			
674		SI-136	14	SI-025	14	磨石類	石英斑岩	3.9	6.1	4.4	108.97	破片	被熱		
675		SI-136	14	SI-025	15	磨石類	石英斑岩	3.9	6.1	4.4	108.97	破片	被熱		
676	63	107	Z55	SI-133-154	14	SI-028	67	磨石類	安山岩	10.8	9.5	4.0	545.00		
677		SI-133-154	14	SI-028	88	磨石類	砂岩	6.2	4.6	4.6	143.44	破片	被熱		
678		SI-133-154	14	SI-028	99	磨石類	成枚岩	4.5	3.1	3.9	53.19	破片	被熱		
679		SI-133-154	14	SI-030	9	磨石類	安山岩	5.6	3.6	3.8	102.44	破片			
680		SI-133-154	14	SI-030	58	磨石類	砂岩	6.1	2.8	5.3	77.91	破片	被熱		
681		SI-133-154	14	SI-030	95	磨石類	安山岩	4.6	3.7	4.5	75.77	破片	被熱		
682		SI-133-154	14	SI-030	164	磨石類	安山岩	4.5	4.8	4.5	110.29	破片	被熱		
683		SI-133-154	14	SI-030	212	磨石類	安山岩	6.7	7.7	3.7	231.56	平矢、表裏中央に凹み痕			
684		SI-133-154	14	SI-030	213	磨石類	安山岩	5.2	4.8	4.5	110.29	平矢、表裏中央に凹み痕	被熱		
685		SI-133-154	14	SI-031	33	磨石類	安山岩	8.5	8.2	3.7	280.00	#30%欠損、表裏中央に凹み痕			
686		SI-133-154	14	SI-033	85	磨石類	トロトロ石	7.1	4.4	2.8	82.07	破片	被熱		
687		SI-133-154	14	SI-034	20	磨石類	鈍粒玄武岩	5.8	6.6	2.2	260.46	破片			
688		SI-133-154	14	SI-034	96	磨石類	赤楓岩	5.6	5.2	3.4	112.43	破片	被熱		
689	63	107	Z56	SI-133-154	14	SI-035	1A	磨石類	成枚岩	8.4	6.1	3.4	245.38	表裏中央に凹み痕	
690		SI-173	17	SI-007	78	磨石類	安山岩	6.3	4.8	3.1	124.97	破片	被熱		
691		SI-174	17	SI-008	11	磨石類	安山岩	5.8	4.5	2.7	81.76	破片	被熱		
692		SI-174	17	SI-008	12	磨石類	ビーチ	3.4	4.0	3.5	50.30	破片、西みれ			
693		SI-174	17	SI-008	13	磨石類	瓦質砂岩	6.5	4.5	2.7	100.00	表裏中央に凹み痕	被熱		
694		SI-177	17	SI-033	19	磨石類	砂岩	8.7	7.1	3.0	225.87	部欠損	被熱		
695		SI-177	17	SI-033	23	磨石類	安山岩	5.6	7.5	3.9	221.63	約90%残存、表面に凹み痕			
696		DI-020	8	SI-003	1-J3-U	磨石類	砂岩	4.6	7.3	4.7	164.36	尖端部断面、麻状痕			
697	63	107	Z57	SI-133-154	14	SI-003	77	磨石類	安山岩	9.2	5.8	3.5	309.82	表裏中央に鋸打痕	
698		SI-133-154	14	SI-003	102	磨石類	安山岩	4.3	5.2	5.4	146.94	平矢、表面中央に鋸打痕	被熱		
699	63	108	Z58	SI-133-154	14	SI-011	19	磨石類	鈍粒玄武岩	8.6	6.9	5.8	580.00	両面に鋸打痕	
700	63	107	Z59	SI-133-154	14	SI-011	19	磨石類	安山岩	8.3	5.9	4.2	365.00	表裏両面に鋸打痕	
701		SI-133-154	14	SI-012	31	磨石類	砂岩	6.4	5.4	4.4	110.29	平矢、表面に鋸打痕	被熱		
702		SI-133-154	14	SI-012	37	磨石類	砂岩	5.7	4.8	4.0	126.35	破片	被熱		
703		SI-330	18	SI-016	16	磨石類	安山岩	6.5	31	3.0	62.07	破片	被熱		
704		SI-346	18	SI-032	3	磨石類	安山岩	7.3	7.9	6.5	435.00	平矢			
705	63	108	Z60	SI-133-154	14	SI-032	61	磨石類	安山岩	13.7	8.2	4.7	785.00	凹み痕・鋸打痕	
706		AA-22-18	17	AA-22-18	1A	磨石類	安山岩	11.1	4.0	2.5	165.70	破片	被熱		
707		AA-22-19	17	AA-22-19	1A	磨石類	砂岩	5.0	6.7	4.6	133.46	破片、西みれ	被熱		
708		AA-22-28	17	AA-22-28	1E	磨石類	砂岩	3.3	3.0	4.3	62.33	破片	被熱		
709		AA-22-37	17	AA-22-37	1B	磨石類	安山岩	5.6	7.8	2.9	131.00	約30%残存	被熱		
710		AA-22-37	17	AA-22-37	20	磨石類	砂岩	8.7	7.0	4.9	161.68	左側面に鋸打痕	被熱		
711		AA-22-55	17	AA-22-55	1A	磨石類	砂岩	6.3	6.3	3.3	172.91	破片	被熱		
712		AA-22-55	17	AA-22-55	1B	磨石類	安山岩	8.2	7.0	4.5	355.00		被熱		
713	63	109	Z61	AA-22-56	17	AA-22-56	1B	磨石類	安山岩	6.3	4.5	4.6	199.24	凹み痕	被熱
714		AA-22-58	17	AA-22-58	1A	磨石類	安山岩	8.9	4.8	4.2	195.14	破片	被熱		
715		AA-22-58	17	AA-22-58	1C	磨石類	砂岩	3.7	3.9	4.9	85.86	破片	被熱		
716		AA-22-65	17	AA-22-65	1D	磨石類	安山岩	4.3	8.4	3.9	196.77	約25%残存	被熱		
717		AA-22-66	17	AA-22-66	1A	磨石類	砂岩	2.9	2.5	2.3	27.00	破片	被熱		
718		AA-22-66	17	AA-22-66	1B	磨石類	瓦質砂岩	13.6	7.5	2.3	249.00	部分的に鋸打痕	被熱		
719		AA-22-66	17	AA-22-66	1B	磨石類	多孔質安山岩	6.9	5.4	3.6	81.03	右側面の軋出	被熱		
720		AA-22-76	17	AA-22-76	1C	磨石類	砂岩	2.0	6.2	4.1	71.64	破片	被熱		
721		AA-22-71	12	AA-22-71	11	磨石類	安山岩	3.6	3.6	3.6	43.53	破片	被熱		
722		AA-22-76	17	AA-22-76	1B	磨石類	成枚岩	5.2	6.5	4.1	133.54	破片	被熱		
723	63	109	Z62	AA-22-78	14	AA-22-78	1D	磨石類	安山岩	7.8	6.6	5.0	345.00	#30%欠損、表裏中央に凹み痕	
724		AA-22-78	14	AA-22-78	28	磨石類	安山岩	5.2	4.9	3.7	98.99	破片	被熱		
725		AA-22-79	14	AA-22-79	29	磨石類	砂岩	3.3	4.2	3.4	67.03	破片	被熱		
726		AA-22-86	14	AA-22-86	31	磨石類	成枚岩	9.0	7.8	4.9	380.00	平矢	被熱		
727		AA-22-86	14	AA-22-86	35	磨石類	砂岩	5.0	4.9	2.8	48.48	破片	被熱		
728		AA-22-89	14	AA-22-89	30	磨石類	安山岩	6.0	31	2.7	68.87	破片	被熱		
729	63	109	Z63	AA-22-91	14	AA-22-91	31	磨石類	砂岩	7.6	4.5	2.6	135.87	平矢	被熱
730		AA-22-97	14	AA-22-97	1D	磨石類	砂岩	3.6	1.6	1.8	6.88	破片	被熱		
731		AA-22-97	17	SI-001	1A	磨石類	砂岩	3.9	26	3.0	58.72	破片	被熱		
732	64	109	Z64	AA-22-00	12	AA-22-00	10	磨石類	砂岩	11.0	7.0	5.3	63.00	一部に鋸打痕	被熱
733		AA-22-08	14	AA-22-08	08	磨石類	砂岩	3.4	27	2.3	24.88	破片	被熱		
734		AA-22-13	14	AA-22-13	13	磨石類	瓦質砂岩	9.0	7.8	4.2	96.00				
735		AA-22-46	14	AA-22-46	1B	磨石類	成枚岩	5.8	2.8	2.8	32.07	破片	被熱		
736		AA-22-46	14	AA-22-46	11	磨石類	安山岩	3.2	6.9	2.5	56.05	破片	被熱		
737		AA-22-50	14	AA-22-50	1A	磨石類	石英斑岩	5.8	51	3.7	120.52	破片	被熱		
738		AA-22-51	14	AA-22-51	1D	磨石類	石英斑岩	5.1	46	4.2	137.12	鋸打痕	被熱		
739		AA-22-53	12	AA-22-53	1B	磨石類	砂岩	5.4	42	2.4	60.17	破片	被熱		
740		AA-22-57	12	AA-22-57	1C	磨石類	砂岩	3.6	27	2.2	27.65	破片	被熱		
741		BB22-66	18	BB22-65	11	磨石類	成枚岩	5.3	39	1.5	34.77	破片	被熱		
742		BB22-04	18	BB22-04	04	磨石類	砂岩	6.2	46	2.1	86.86	破片	被熱		
743		BB22-27	17	BB22-27	1A	磨石類	安山岩	5.4	43	2.2	53.10	破片	被熱		
744		BB22-30	17	BB22-30	3A	磨石類	砂岩	3.8	30	2.9	49.74	破片	被熱		
745		BB22-33	14	BB22-33	31	磨石類	石英斑岩	4.1	29	3.5	43.95	破片	被熱		
746		BB22-33	14	BB22-33	34	磨石類	石英斑岩	5.6	7.5	3.7	256.92	#30%残存、鋸打痕	被熱		
747		BB22-34	14	BB22-34	31	磨石類	成枚岩	4.2	58	4.1	108.62	破片	被熱		
748		BB22-46	17	BB22-46	11	磨石類	砂岩	5.4	40	3.9	99.98	破片	被熱		
749		BB22-32	14	BB22-32	1B	磨石類	成枚岩	5.3	35	4.9	92.08	破片	被熱		
750		BB22-32	14	BB22-32	1C	磨石類	安山岩	7.6	6.0	4.3	247.67	破片	被熱		
751		BB22-60	14	BB22-60	1B	磨石類	砂岩	3.8	23	4.3	80.00	破片	被熱		
752		BB22-60	14	BB22-60	1C	磨石類	安山岩	2.7	24	2.7	45.70	下両端欠損	被熱		
753		BB22-62	14	BB22-62	1A	磨石類	砂岩	4.7	36	2.8	50.96	破片	被熱		
754		BB22-66	14	BB22-66	1A	磨石類	成枚岩	3.5	53	4.2	60.55	破片	被熱		
755		BB22-67	14	BB22-67	1A	磨石類	砂岩	3.6	55	2.5	56.52	破片	被熱		
756		BB22-67	14	BB22-67	1B	磨石類	成枚岩	2.8	35	3.3	28.59	破片	被熱		

国別	地図番号	遺構	旧遺構番号	遺物番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2		
757		BH22-72	14	BH22-72	12	石斧頭	安山岩	7.1	8.5	4.5	223.68	#30%残存	被熱	
758		BH22-76	14	BH22-76	7	石斧頭	花崗岩	4.6	4.3	3.2	80.53	破片	被熱	
759		BH22-82	14	BH22-82	12	石斧頭	砂岩	4.4	3.4	2.3	39.44	破片	被熱	
760		BH22-83	14	BH22-83	12	石斧頭	石英斑岩	3.1	5.3	3.5	54.94	破片	被熱	
761		BH22-86	14	BH22-86	12	石斧頭	安山岩	3.1	5.1	3.0	60.20	破片	被熱	
762		BH22-90	14	BH22-90	12	石斧頭	石英斑岩	6.6	6.8	2.8	143.35	磨打、片面中央に敲打痕	被熱	
763		BH22-96	14	BH22-96	12	石斧頭	砂岩	5.7	5.0	2.1	61.14	破片	被熱	
764		BH22-96	14	BH22-96	12	石斧頭	安山岩	4.1	3.6	1.8	21.52	破片	被熱	
765		BH22-	17	SKR-003	36	石斧頭	安山岩	9.3	5.1	3.3	235.82	#30%欠損、一端に敲打痕	被熱	
766		BH22-	17	SKR-003	40	石斧頭	石英斑岩	5.4	4.4	2.8	82.53	破片	被熱	
767		BH22-	17	SKR-003	43	石斧頭	安山岩	6.8	6.1	4.2	175.65	破片	被熱	
768		BH22-07	14	BH22-07	12	石斧頭	安山岩	5.4	3.8	5.4	94.06	破片	被熱	
769		BH22-12	14	BH22-12	12	石斧頭	石英斑岩	4.0	3.0	3.2	42.69	破片	被熱	
770		BH22-12	14	BH22-12	12	石斧頭	花崗岩	6.2	6.0	2.2	114.00	破片	被熱	
771		BH22-17	14	BH22-17	12	石斧頭	砂岩	3.8	4.7	2.8	27.64	破片	被熱	
772		BH22-17	14	BH22-17	12	石斧頭	安山岩	3.9	4.3	2.7	70.00	破片	被熱	
773		BH22-18	14	BH22-18	12	石斧頭	石英斑岩	4.5	5.7	3.1	91.34	#30%欠損、一面に敲打痕	被熱	
774	64	109 205	BH22-31	BH22-31	12	石斧頭	花崗岩	8.3	6.3	3.5	270.81	片面中央一面に敲打痕	被熱	
775		CC-22	17	CC-22	12	石斧頭	砂岩	2.6	6.0	3.9	87.38	破片	被熱	
776		CC-22-46	14	CC-22-46	11	石斧頭	砂岩	3.9	2.7	3.8	43.63	破片	被熱	
777		CC-22-49	18	CC-22-49	12	石斧頭	砂岩	3.7	4.9	2.3	29.21	破片	被熱	
778	64	109 206	CC-22-33	CC-22-33	12	石斧頭	砂岩	8.8	6.8	3.5	307.96	表裏中央と上下両面に敲打痕	被熱	
779		CC-22-38	14	CC-22-38	12	石斧頭	砂岩	5.8	5.0	3.0	104.00	一面に敲打痕	被熱	
780		CC-22-81	14	CC-22-81	12	石斧頭	砂岩	5.9	5.3	3.4	63.97	破片	被熱	
781		SKR-001	14	SKR-001	12	石斧頭	砂岩	5.3	4.2	3.2	80.39	破片	被熱	
782	64	109 207	BH22-08	BH22-08	11	石斧頭	多孔質安山岩	6.7	6.8	4.1	189.26	凹凸面	被熱	
783		DH20	8	SKR-001	11	石斧頭	安山岩	6.9	8.0	3.9	244.43	半欠、凹凸、敲打痕	被熱	
785		DH22-00	16	DH22-00	11	石斧頭	砂岩	2.2	2.2	1.9	9.95	破片	被熱	
786		DH22-01	16	DH22-01	28	石斧頭	絞紋岩	3.7	3.2	2.5	38.68	破片	被熱	
787		DH22-11	16	DH22-11	11	石斧頭	ホルンフェルス	9.5	13.4	2.0	244.00	一面に敲打痕	被熱	
788		DH22-42	16	DH22-42	12	石斧頭	砂岩	4.6	5.8	5.0	244.00	一面に敲打痕	被熱	
789	64	110 208	CC-22-12	CC-22-12	10	石斧頭	砂岩	7.8	6.2	3.2	270.64	一面に敲打痕(部分的)	被熱	
790		SI-116	12	SI-116	9	石鉈	砂岩	4.3	4.1	1.7	36.37	調査	被熱	
790	64	110 209	SI-116	12	SI-116	33	石鉈	鷹嘴岩	10.0	5.1	3.8	266.87	乳棒状側面右肩の軋用	被熱
791		SI-120	12	SI-120	99	石鉈	鳥巣鷹岩	10.8	4.7	4.1	269.92	被熱	被熱	
792		SI-131	13	SI-131	92	石鉈	砂岩	10.7	4.9	3.3	243.49	被熱	被熱	
793	64	110 210	SI-131	13	SI-131	114	石鉈	石英斑岩	8.6	6.3	6.1	455.00	被熱	被熱
794	64	110 211	SI-135	13	SI-135	108	石鉈	チャート	7.3	4.9	2.5	122.27	表裏中央に敲打痕	被熱
795	64	110 212	SI-135	13	SI-135	72	石鉈	多孔質安山岩	9.7	5.8	3.0	244.00	一面に敲打痕	被熱
796		SI-136	13	SI-136	76	石鉈	砂岩	6.7	4.2	3.0	91.82	一面に敲打痕	被熱	
797	64	110 213	SI-137	13	SI-137	96	石鉈	砂岩	9.1	4.1	3.8	265.04	一面に敲打痕	被熱
798		SI-172	17	SI-172	17	石鉈	砂岩	4.7	5.6	1.7	68.04	引け、一面に敲打痕	被熱	
799	64	111 274	DH20	15	SK-001	11	石鉈	石英斑岩	5.4	3.8	1.9	51.80	片面中央に敲打痕	被熱
800		SK-312	16	SK-312	21	石鉈	ホルンフェルス	5.0	3.9	3.8	105.60	上下面に敲打痕	被熱	
801		AA22-56	14	AA22-56	11	石鉈	砂岩	6.1	4.0	2.2	73.18	表裏に細縫の敲打痕	被熱	
802		AA22-97	14	AA22-97	92	石鉈	砂岩	6.3	3.5	1.9	49.82	一面に敲打痕	被熱	
803		AA22-97	14	AA22-97	91	石鉈	砂岩	7.4	5.9	4.1	234.95	一面に敲打痕	被熱	
804	64	111 275	SI-135	46	SI-135	46	石鉈	石英斑岩	8.5	5.7	2.7	195.56	一面に敲打痕	被熱
805		SI-136	47	SI-136	47	石鉈	砂岩	3.9	4.4	2.0	49.82	一面に敲打痕	被熱	
806	64	111 276	SI-136	33	SI-136	12	石鉈	砂岩	4.6	4.0	3.2	68.82	一面に敲打痕	被熱
807		BH22-73	14	BH22-73	73	石鉈	砂岩	2.6	4.8	3.2	68.28	一面に敲打痕	被熱	
808		BH22-36	14	BH22-36	16	石鉈	砂岩	4.8	4.8	3.7	99.17	半欠	被熱	
809	64	111 277	CC-22-70	14	CC-22-70	10	石鉈	緑色岩	10.8	5.4	3.2	360.00	乳棒状側面右肩の軋用	被熱
810	64	111 278	CC-22-83	14	CC-22-83	18	石鉈	石英安山岩	7.5	4.7	3.2	171.51	一面に細縫に敲打痕	被熱
811	64	111 279	CC-22-84	14	CC-22-84	84	石鉈	緑色岩	7.9	4.0	2.5	144.60	乳棒状側面右肩の軋用	被熱
812	64	111 280	DH20	14	DH20	14	石鉈	多孔質安山岩	5.9	4.4	3.2	90.00	一面に敲打痕	被熱
813		SI-001	8	SI-001	11	石鉈	砂岩	3.0	3.0	3.0	11.47	破片	被熱	
814		SI-139	14	SI-139	27	石鉈	ホルンフェルス	7.2	7.2	5.2	256.39	破片	被熱	
815		SI-141	14	SI-141	99	石鉈	砂岩	12.4	5.8	1.7	160.58	破片	被熱	
816		SI-142	13	SI-142	13	石鉈	砂岩	4.3	4.4	3.7	99.41	破片	被熱	
817	64	112 281	AA22-62	14	AA22-62	18	石鉈	砂岩	8.1	9.0	3.6	316.46	被熱	被熱
818	64	112 282	CC-22-13	17	CC-22-13	13	石鉈	砂岩	5.9	5.7	3.4	117.97	被熱	被熱
819		SI-114	10	SI-006	40	石鉈	多孔質安山岩	5.3	3.5	4.1	48.28	破片、凹み板	被熱	
820	66	115 283	SI-115	14	SI-014	20	石鉈	多孔質安山岩	19.5	10.8	5.9	180.00	凹み板	被熱
821		SI-121	12	SI-121	99	石鉈	砂岩	2.9	4.7	4.0	34.24	破片	被熱	
822		SI-122	12	SI-122	96	石鉈	砂岩	24.6	5.6	2.6	229.00	被熱	被熱	
823		SI-122	12	SI-122	69	石鉈	多孔質安山岩	4.3	3.1	4.3	51.84	破片	被熱	
824		SI-122	12	SI-122	26	石鉈	多孔質安山岩	3.6	2.7	2.7	26.23	破片	被熱	
825		SI-122	12	SI-009	8	石鉈	多孔質安山岩	6.8	4.5	4.8	144.51	破片	被熱	
826		SI-124	12	SI-007	5	石鉈	多孔質安山岩	6.4	4.2	3.6	63.18	破片	被熱	
827		SI-130	13	SI-001	93	石鉈	砂岩	5.8	4.8	3.5	69.11	破片、凹平	被熱	
828		SI-135	14	SI-003	73	石鉈	多孔質安山岩	6.5	8.2	6.0	143.40	破片	被熱	
829		SI-140	14	SI-006	55	石鉈	砂岩	4.1	2.5	5.3	57.00	破片	被熱	
830		SI-142	14	SI-009	15	石鉈	多孔質安山岩	1.6	3.7	2.2	45.00	被熱	被熱	
831		SI-142	14	SI-019	11	石鉈	砂岩	4.2	2.4	5.1	48.62	破片	被熱	
832		SI-143	14	SI-011	15	石鉈	安山岩	2.9	6.5	6.0	93.68	破片	被熱	
833		SI-145	14	SI-013	126	石鉈	多孔質安山岩	3.4	2.0	3.2	12.03	破片	被熱	
834		SI-145	14	SI-013	136	石鉈	多孔質安山岩	7.2	4.2	2.7	49.17	破片、西凹	被熱	
835		SI-149	14	SI-019	11	石鉈	多孔質安山岩	4.3	2.4	2.3	13.42	破片	被熱	
836		SI-149	14	SI-019	15	石鉈	多孔質安山岩	3.8	7.6	3.8	94.60	破片	被熱	
837		SI-149	14	SI-019	35	石鉈	多孔質安山岩	2.1	3.3	4.7	40.29	破片	被熱	
838		SI-149	14	SI-019	55	石鉈	多孔質安山岩	3.0	2.4	2.8	12.10	破片	被熱	
839		SI-149	14	SI-019	61	石鉈	多孔質安山岩	7.4	3.1	4.3	137.72	破片	被熱	
840		SI-153-154	14	SI-021	14	石鉈	多孔質安山岩	3.6	2.6	3.0	11.07	破片	被熱	
841		SI-153-154	14	SI-023	13	石鉈	多孔質安山岩	2.6	3.3	1.2	4.69	破片	被熱	
842		SI-153-154	14	SI-023	15	石鉈	多孔質安山岩	2.7	2.3	1.4	6.13	破片	被熱	
843		SI-153-154	14	SI-023	11	石鉈	多孔質安山岩	2.2	2.9	0.9	3.67	破片	被熱	
844		SI-153-154	14	SI-023	9	石鉈	多孔質安山岩	5.1	3.1	3.0	47.84	破片	被熱	
845		SI-153-154	14	SI-023	18	石鉈	多孔質安山岩	5.4	4.9	3.0	34.16	破片	被熱	
846	66	115 284	SI-153-154	14	SI-023	106	石鉈	多孔質安山岩	16.0	11.0	5.8	133.70	凹平	被熱
847		SI-153-154	14	SI-023	164	石鉈	多孔質安山岩	4.3	3.5	3.3	45.56	凹平	被熱	
848		SI-153-154	14	SI-023	165	石鉈	多孔質安山岩	4.4	3.6	3.1	43.49	破片	被熱	
849		SI-153-154	14	SI-023	167	石鉈	多孔質安山岩	7.3	5.7	2.1	30.50	破片	被熱	
850		SI-153-154	14	SI-023	195	石鉈	多孔質安山岩	3.8	4.2	1.8	13.79	破片	被熱	
851		SI-153-154	14	SI-023	196	石鉈	多孔質安山岩	2.1	5.1	3.5	21.10	破片	被熱	

国別	邦國	番号	遺構	旧遺株	遺物 番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2	
852		SI-133-136	14	SI-021	228	石瓶	多孔質質山岩	4.9	6.2	3.1	49.60	破片、四面直		
853		SI-133-154	14	SI-023	264	石瓶	安山岩	5.5	3.7	3.1	68.34	破片、四面直		
854		SI-133-154	14	SI-023	307	石瓶	安山岩	4.9	5.4	4.2	111.31	破片、四面直		
855		SI-138	14	SI-027	53	石瓶	多孔質質山岩	6.2	7.5	4.6	129.91	破片		
856		SI-160	14	SI-027	62	石瓶	多孔質質山岩	6.4	5.3	4.1	70.40	破片		
857		SI-160	14	SI-027	69	石瓶	多孔質質山岩	6.8	4.8	3.4	52.21	破片		
858		SI-161	14	SI-029	145	石瓶	多孔質質山岩	4.0	3.1	4.0	32.95	破片、四面直		
859		SI-166	14	SI-036	11	石瓶	斑鷺岩	5.2	5.9	8.7	278.15	破片	被熱	
860	66	115-285	SI-176	17	SI-011	17	石瓶	多孔質質山岩	12.2	9.3	8.2	750.00	破片、四面	
861		SI-177	17	SI-013	12	石瓶	安山岩	9.1	5.2	4.7	206.85	破片	被熱	
862		SI-177	17	SI-013	13	石瓶	安山岩	13.2	11.5	6.4	95.00	破片	被熱	
863		SI-297	14	SK-011	12	石瓶	多孔質質山岩	8.8	6.8	7.0	247.38	破片、四面、圓面凹凸直		
864		AIA22-28	18	AIA22-28	1A	石瓶	多孔質質山岩	3.3	5.0	4.7	47.83	破片		
865		AIA22-62	18	AIA22-62	1C	石瓶	多孔質質山岩	11.6	8.5	2.0	73.96	破片、四面直		
866		AIA22-67	17	AIA22-67	65	石瓶	砂岩	10.0	7.6	2.2	62.96	破片、四面直		
867		AIA22-67	17	AIA22-67	65	石瓶	安山岩	5.8	5.9	4.3	234.27	破片		
868		AIA22-76	17	AIA22-76	7A	石瓶	多孔質質山岩	6.3	5.3	4.3	121.00	破片		
869		AIA22-86	17	AIA22-86	8A	石瓶	多孔質質山岩	5.0	5.4	5.3	149.85	破片、四面直	被熱	
870		AIA22-89	14	AIA22-89	1G	石瓶	多孔質質山岩	10.8	3.7	4.1	92.90	破片		
871		BHB21-96	18	BHB21-93	11	石瓶	多孔質質山岩	8.7	7.9	5.5	97.06	破片		
872		BHB22-09	14	BHB22-69	1A	石瓶	多孔質質山岩	3.9	4.3	3.3	41.72	破片		
873		BHB22-74	14	BHB22-74	7D	石瓶	多孔質質山岩	2.5	3.5	2.9	9.44	破片		
874		CAC-23	14	CAC-23	14	石瓶	多孔質質山岩	2.8	3.0	2.0	10.00	破片		
875		CAC-23	14	CAC-23	33	石瓶	多孔質質山岩	6.8	4.8	4.3	153.40	破片、平凸		
876		DUD20	8	SK-001	3C	石瓶	安山岩	5.4	7.4	2.6	276.45	破片		
877		DUD20	8	SK-001	3F	石瓶	多孔質質山岩	5.7	4.9	3.7	88.95	破片		
878		DUD20	8	SK-001	3G	石瓶	多孔質質山岩	8.5	4.6	5.4	196.79	破片		
879	65	112-286	SI-138	14	SI-006	128	石台	nou美瑛岩	11.2	6.7	5.4	490.00	円筒中央に凹門直	被熱
880	65	112-287	SI-145	14	SI-013	103	石台	波紋岩	8.7	6.8	2.5	209.14	橢形石台周辺、前面に削打痕	
881	65	113-288	SI-134	14	SI-023	107	石台	波紋岩	14.0	10.9	3.7	915.00	前面中央に凹門直	被熱
882	65	113-289	SI-134	14	SI-023	146	石台	波紋岩	7.5	5.8	2.3	115.04	前面中央に削打痕	被熱
883	65	112-289	SI-134	14	SI-023	147	石台	波紋岩	8.8	5.4	2.7	115.04	前面中央に削打痕	被熱
884	65	113-290	SI-164	14	SI-033	1A	石台	波紋岩	11.4	6.8	3.0	313.58	直筒中央に鋸切痕	被熱
885	65	113-291	SI-164	14	SI-033	15	石台	波紋岩	7.1	5.6	3.8	178.34	直筒中央に鋸切痕	被熱
886		SI-166	14	SI-035	4	石台	波紋岩	14.9	8.1	4.7	725.00	直筒中央部に鋸切痕	被熱	
887		SI-166	14	SI-035	35	石台	砂岩	10.9	7.4	4.1	440.00	直筒中央部に鋸切痕		
888		SI-172	17	SI-004	8	石台	波紋岩	5.6	6.1	3.5	166.61	破片、直筒中央に鋸切痕		
889	65	113-292	SI-173	17	SI-007	81	石台	波紋岩	8.6	6.3	4.1	475.00	直筒中央に鋸切痕	被熱
890	65	114-293	SI-174	17	SI-007	69	石台	波紋岩	10.6	7.2	4.1	450.00	直筒中央に鋸切痕	被熱
891	65	114-294	SI-174	17	SK-002	3A	石台	波紋岩	10.8	7.6	4.3	450.00	直筒中央に鋸切痕	被熱
892	65	114-295	SI-174	17	SK-002	75	石台	波紋岩	7.9	5.3	4.3	186.76	直筒中央に鋸切痕	被熱
893		AIA22-28	14	AIA22-28	21	石台	nou奥旗岩	8.0	7.8	5.5	410.00	平凸、直筒に削打痕	被熱	
894	65	114-296	BHB22-24	1B	石台	砂岩	8.3	6.4	4.1	252.77	直筒中央に削打痕	被熱		
895		BHB22-26	17	BHB22-26	21	石台	波紋岩	8.0	4.0	2.1	123.41	直筒中央に凹門直		
896		BHB23-94	14	BHB23-91	11	石台	nou美	5.4	4.1	4.2	127.94	破片、直筒中央に鋸切痕	被熱	
897		CC22-71	14	CC22-71	7A	石台	砂岩	6.7	6.5	4.7	312.73	直筒中央に鋸切痕		
898		CC22-82	14	CC22-82	8A	石台	波紋岩	9.1	5.2	2.3	173.00	直筒に削打痕	被熱	
899	65	114-297	DUD20	8	SK-001	1A	石台	nou奥旗岩	9.1	7.5	4.3	424.00	直筒中央に削打痕	被熱
900	65	114-298	SI-151	14	SI-001	15	石台	波紋岩	4.5	4.5	0.6	13.01	直筒中央に削打痕	被熱
901	59	96	SI-291	17A	SI-008	155	石瓶	波紋岩質底堅石	6.8	5.6	1.6	69.50	円筒表面	
902		AIA22-46	17	AIA22-46	1C	石瓶	波紋岩	6.0	5.8	2.8	99.07	被熱	被熱	
903	65	116-300	SI-168	16	SI-001	20	スクレープ石器	波紋岩	11.5	7.8	4.8	485.00	被熱	被熱
904	65	116-301	DUD20	8	SK-001	1B	スクレープ石器	波紋岩	9.5	7.7	5.8	515.00	被熱	被熱
905	66	117-302	SI-112	10	SI-001	4	側面凹型壓痕	チャート	5.5	4.6	2.6	93.86	側面	
906	66	117-303	SI-112	10	SI-001	5	側面凹型壓痕	砂岩	6.6	5.4	2.0	103.50	側面(部分)	被熱
907	66	117-304	SI-112	10	SI-002	21	側面凹型壓痕	砂岩	7.2	6.9	2.3	116.26	全面(部分)	被熱
908	66	117-305	SI-112	10	SI-002	22	側面凹型壓痕	砂岩	6.8	5.5	2.1	103.00	全面(部分)	被熱
909	66	117-305	SI-133	18	SI-016	12	側面凹型壓痕	砂岩	8.3	5.5	2.4	150.51	側面(部分)	被熱
910	66	118-306	SI-136	14	SI-004	5	側面凹型壓痕	砂岩	6.2	4.7	1.3	51.45	全面(部分)	被熱
911	66	118-307	SI-136	14	SI-004	84	側面凹型壓痕	砂岩	5.2	4.3	1.8	56.87	側面(部分)	被熱
912		SI-138	14	SI-006	41	側面凹型壓痕	砂岩	3.1	4.1	2.1	35.34	破片		
913	67	118-308	SI-138	14	SI-009	101	側面凹型壓痕	砂岩	6.2	3.8	1.5	53.76	側面(部分)	被熱
914	67	118-309	SI-140	14	SI-009	27	側面凹型壓痕	砂岩	6.4	5.9	1.8	96.69	全面(部分)	被熱
915	67	118-310	SI-140	14	SI-009	53	側面凹型壓痕	砂岩	6.7	5.1	0.9	59.00	側面(部分)	被熱
916	67	119-312	SI-141	14	SI-009	183	側面凹型壓痕	砂岩	7.8	4.5	1.7	93.94	側面(部分)	被熱
917	67	119-312	SI-141	14	SI-011	17	側面凹型壓痕	波紋岩	8.2	5.9	2.2	155.25	側面(部分)	被熱
918	67	119-314	SI-144	14	SI-012	16	側面凹型壓痕	波紋岩	7.0	4.8	1.4	73.67	側面(部分)	被熱
919		SI-148	14	SI-018	3	側面凹型壓痕	砂岩	5.3	4.4	1.3	36.01	側面(部分)	被熱	
920		SI-148	14	SI-019	6	側面凹型壓痕	砂岩	7.5	4.4	1.7	87.09	側面(部分)	被熱	
921	67	119-315	SI-149	14	SI-019	6	側面凹型壓痕	砂岩	5.5	3.8	1.0	30.58	側面(部分)	被熱
922		SI-159	14	SI-028	3	側面凹型壓痕	砂岩	7.5	4.4	1.7	87.09	側面(部分)	被熱	
923		SI-165	14	SI-034	61	側面凹型壓痕	ホルンフェルス	6.8	2.7	2.2	40.28	被熱		
924	67	119-316	SI-166	14	SI-034	103	側面凹型壓痕	波紋岩	8.9	5.6	1.6	89.16	全面(部分)	
925		SI-166	14	SI-034	134	側面凹型壓痕	砂岩	2.9	4.7	0.8	33.83	側面(部分)		
926	67	120-317	SI-179	18	SI-014	9	側面凹型壓痕	砂岩	8.4	5.2	2.1	150.21	側面(部分)	被熱
927	67	120-318	BHB21-66	16	BHB21-66	1B	側面凹型壓痕	砂岩	5.7	3.9	1.3	48.13	側面(部分)	被熱
928	67	120-319	BHB21-29	14	BHB21-29	11	側面凹型壓痕	砂岩	6.3	5.7	2.7	131.50	側面(部分)	被熱
929		DUD20	8	SK-001	1H	側面凹型壓痕	砂岩	5.1	4.2	2.2	61.62	平欠		
930	59	96	SI-159	14	SI-023	23	横状凹面	砂岩	2.6	2.7	0.8	8.73		
931	59	96	SI-160	17	SI-006	6	横状凹面	砂岩	3.4	1.5	1.6	10.32	平欠	
932	59	96	SI-162	22	BHB22-32	1D	横状凹面	砂岩	3.1	1.0	1.8	5.72	平欠	
933	59	96	SI-163	22	SI-001	1D	横状凹面	砂岩	2.9	0.9	0.8	3.45	側面凹面	
934		SI-169	14	SI-001	1D	横状凹面	波紋岩	7.0	6.0	1.6	82.40	側面凹面		
935		SI-169	16	SI-002	6A	二次加工した標	波紋岩質底堅石	7.0	2.4	1.6	33.13	側面凹面	被熱	
936		ZB3-09	12	ZB3-09	11	二次加工した標	チャート	4.1	2.9	1.5	25.28	側面凹面		
937		AIA22-29	17	AIA22-29	29	二次加工した標	チャート	8.0	5.4	2.4	91.33	未成品?		
938		AIA22-18	17	AIA22-18	1B	石核	チャート				41.37			
939		AIA22-67	17	AIA22-67	1B	石核	研磨質石核				5.01	チャート状の済品	被熱	
940		AIA22-26	17	AIA22-26	7E	石核	チャート				1.39			
941		AIA22-27	17	AIA22-27	12	石核	トロロイト				71.94			
942		AIA22-69	14	AIA22-89	1B	石核	チャート				4.11			
943		AIA22-18	14	AIA22-18	1A	石核	ホルンフェルス				31.45			
944		HBD21-64	18	HBD21-64	6	石核	チャート				5.96			
945		HBD21-72	18	HBD21-72	11	石核	黑曜石				0.28			
946		HBD21	18	HBD21	76	石核	黑曜石				1.80			

国別	博物館番号	遺構	旧遺構番号	遺物番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考文献	備考2
947		BH22-15	17	BH22-15	ID	石核	チャート			2.12	片側櫛齒	
948		BH22-73	14	BH22-73	ID	石核	チャート			7.00		
949		BH22-94	14	BH22-94	IA	石核	チャート			23.50	角椎素材	
950		BH22-94	14	BH22-94	IB	石核	チャート			1.52		
951		BH22-27	16	BH22-27	IA	石核	ガラス質黒色安山岩			62.40	チャート状の画面	絶熱
952	59 96	324	16	C22-49	IA	石核	ガラス質黒色安山岩			2.18		
953		122-50	18	D22-50	IA	石核	チャート			9.72	円錐素材	
954		D22-11	16	D22-11	3B	石核	チャート			0.65		
955		SI-113	13	SI-002	43	石核	ガラス質黒色安山岩	65	22	2.3	49.23	
956		SI-138	14	SI-006	75	石核	チャート			160.27		
957		SI-149	14	SI-019	51	石核	ガラス質黒色安山岩			25.97		
958		SI-149	14	SI-019	156	石核	チャート			215.74		
959		SI-151	14	SI-021	51	石核	チャート			46.95		
960		SI-151	14	SI-021	126	石核	チャート下の石			2.11		
961		SI-152	14	SI-022	28	石核	チャート			7.50	堆津島石	
962		SI-152	14	SI-022	111	石核	チャート			80.10		
963		SI-158	14	SI-022	41	石核	チャート			17.50	角椎素材	
964		SI-160	14	SI-029	39	石核	トロトロ石			14.46		
965		SI-160	14	SI-029	109	石核	チャート			8.10	角椎素材	
966		SI-161	14	SI-030	39	石核	チャート			9.30		
967		SI-163	14	SI-032	41	石核	チャート			7.02	角椎素材	
968		SI-174	17	SI-008	197	石核	チャート			3.35	角椎素材	
969		SI-175	17	SI-008	198	石核	チャート			0.90	角椎素材	
970		SI-257	14	SK-011	15	石核	チャート			14.39	鏡形石器	
971		AA22	17	SI-001	1D	石核	チャート			3.87		
972		SI-003	13	SI-004	34	両極鋸刃	チャート			1.26		
973		SI-113	10	SI-002	50	両極鋸刃	チャート			1.40		
974		SI-114	10	SI-009	13	両極鋸刃	チャート			0.75	円錐素材	
975		SI-114	10	SI-009	147	両極鋸刃	チャート			0.18	円錐素材	
976		SI-116	12	SI-001	29	両極鋸刃	チャート			2.49	円錐素材	
977		SI-116	12	SI-001	30	両極鋸刃	チャート			0.96		
978		SI-116	12	SI-001	114	両極鋸刃	チャート			0.11		
979		SI-116	12	SI-001	60	両極鋸刃	チャート			1.82		
980		SI-116	12	SI-001	62	両極鋸刃	チャート			1.29	円錐素材	
981		SI-116	12	SI-001	67	両極鋸刃	チャート			3.25	円錐素材	
982		SI-116	12	SI-001	91	両極鋸刃	チャート			0.29	円錐素材	
983		SI-116	12	SI-008	98	両極鋸刃	チャート			1.89		
984		SI-116	12	SI-001	108	両極鋸刃	チャート			3.51		
985		SI-116	12	SI-001	113	両極鋸刃	チャート			0.26		
986		SI-116	12	SI-001	117	両極鋸刃	チャート			0.17		
987		SI-116	12	SI-001	124	両極鋸刃	チャート			0.93		
988		SI-116	12	SI-001	125	両極鋸刃	チャート			1.49		
989		SI-116	12	SI-001	129	両極鋸刃	チャート	1.3	1.5	0.5	1.25	
990		SI-116	12	SI-001	130	両極鋸刃	チャート			0.27		
991		SI-116	12	SI-001	140	両極鋸刃	チャート			1.32		
992		SI-116	12	SI-001	148	両極鋸刃	チャート			0.39		
993		SI-116	12	SI-001	176	両極鋸刃	チャート			4.36	円錐素材	
994		SI-116	12	SI-001	217	両極鋸刃	チャート			3.15		
995		SI-116	12	SI-001	256	両極鋸刃	チャート			0.34		
996		SI-116	12	SI-001	245	両極鋸刃	チャート			0.54		
997		SI-116	12	SI-001	251	両極鋸刃	チャート			1.60		
998		SI-116	12	SI-001	264	両極鋸刃	チャート			1.01		
999		SI-116	12	SI-001	281A	両極鋸刃	チャート			0.39		
1000		SI-116	12	SI-001	281B	両極鋸刃	チャート			0.75		
1001		SI-116	12	SI-001	292	両極鋸刃	チャート			0.26		
1002		SI-117	12	SI-002	2	両極鋸刃	チャート			0.24		
1003		SI-117	12	SI-002	27	両極鋸刃	チャート			1.32		
1004		SI-117	12	SI-002	52	両極鋸刃	チャート			1.14		
1005		SI-120	12	SI-006	32	両極鋸刃	チャート			7.87		
1006		SI-123	12	SI-006	55	両極鋸刃	チャート			0.73		
1007		SI-124	12	SI-007	18	両極鋸刃	チャート			0.76		
1008		SI-124	12	SI-007	31	両極鋸刃	チャート			0.10	破片	
1009		SI-124	12	SI-007	41	両極鋸刃	チャート			13.12	円錐素材	
1010		SI-124	12	SI-007	47	両極鋸刃	チャート			0.35		
1011		SI-124	12	SI-007	52	両極鋸刃	チャート			0.15	円錐素材	
1012		SI-124	12	SI-007	53	両極鋸刃	チャート			0.94	破片	
1013		SI-124	12	SI-007	96	両極鋸刃	チャート			0.63		
1014		SI-124	12	SI-007	71	両極鋸刃	チャート			1.38		
1015		SI-124	12	SI-007	126	両極鋸刃	チャート			1.43		
1016		SI-124	12	SI-007	137	両極鋸刃	チャート			0.80		
1017		SI-124	12	SI-007	161	両極鋸刃	チャート			1.12	円錐素材	
1018		SI-124	12	SI-007	163	両極鋸刃	チャート			1.07	破片	
1019		SI-124	12	SI-007	165	両極鋸刃	チャート			0.94	破片	
1020		SI-124	12	SI-007	172	両極鋸刃	チャート			5.20		
1021		SI-124	12	SI-007	185	両極鋸刃	チャート			2.99		
1022		SI-124	12	SI-007	207	両極鋸刃	チャート			0.27	円錐素材	
1023		SI-124	12	SI-007	239	両極鋸刃	チャート			1.27	円錐素材	
1024		SI-124	12	SI-007	261	両極鋸刃	チャート			0.42		
1025		SI-124	12	SI-007	325	両極鋸刃	チャート			0.33		
1026		SI-126	12	SI-010	6	両極鋸刃	チャート			0.45		
1027		SI-126	12	SI-010	55	両極鋸刃	チャート			8.83	円錐素材	
1028		SI-126	12	SI-010	60	両極鋸刃	チャート			0.53		
1029		SI-126	12	SI-010	64	両極鋸刃	チャート			6.09		
1030		SI-128	12	SI-012	1	両極鋸刃	チャート			2.37	円錐素材	
1031		SI-131	13	SI-002	15	両極鋸刃	チャート			2.67		
1032		SI-136	14	SI-004	65	両極鋸刃	チャート			1.18		
1033		SI-145	14	SI-013	62	両極鋸刃	チャート			1.63		
1034		SI-145	14	SI-013	122	両極鋸刃	チャート			5.62		
1035		SI-145	14	SI-013	91	両極鋸刃	チャート			1.06	円錐素材	
1036		SI-152	14	SI-014	29	両極鋸刃	チャート			0.74		
1037		SI-152	14	SI-014	60	両極鋸刃	チャート	20	23	0.4	1.87	
1038		SI-152	14	SI-022	100	両極鋸刃	チャート			16.54	円錐素材	
1039		SI-156	14	SI-025	4	両極鋸刃	チャート			8.97	円錐素材	
1040		SI-158	14	SI-027	23	両極鋸刃	チャート			2.04		
1041		SI-158	14	SI-027	24	両極鋸刃	チャート			6.31	円錐素材	

国版	牌固	番号	遺構	旧遺株番号	遺物番号	器種	石材	縦大長	縦大幅	縦大厚	重量	参考1	参考2
1042		SI-159	14	SI-028	15	両極側面	チャート				1.40		
1043		SI-159	14	SI-028	36	両極側面	チャート				0.80		
1044		SI-160	14	SI-029	23	両極側面	チャート				1.18		
1045		SI-160	14	SI-029	4	両極側面	チャート				16.97		
1046		SI-160	14	SI-029	10	両極側面	チャート				0.76		
1047		SI-160	14	SI-029	11	両極側面	チャート				0.30		
1048		SI-160	14	SI-029	116	両極側面	チャート				0.69		
1049		SI-160	17	SI-006	7	両極側面	チャート				1.30		
1050		SI-160	17	SI-006	15	両極側面	チャート				1.43		
1051		SI-160	17	SI-006	32	両極側面	チャート				1.68	円錐素材	
1052		SI-161	14	SI-030	1C	両極側面	ホルンブリュルス				7.24		
1053		SI-161	14	SI-030	1D	両極側面	トロトロ石				10.21		
1054		SI-161	14	SI-030	86	両極側面	チャート				1.81	円錐素材	
1055		SI-161	14	SI-030	97	両極側面	チャート				0.60		
1056		SI-161	14	SI-030	246	両極側面	チャート				1.60		
1057		SI-162	14	SI-031	17	両極側面	チャート				2.32	円錐素材	
1058		SI-162	14	SI-031	42	両極側面	チャート				2.01	円錐素材	
1059		SI-163	14	SI-032	4	両極側面	チャート				0.59		
1060		SI-163	14	SI-032	131	両極側面	チャート				11.82		
1061		SI-163	14	SI-032	135	両極側面	チャート				1.96		
1062		SI-164	14	SI-033	14	両極側面	チャート				0.77	円錐素材	
1063		SI-164	14	SI-033	24	両極側面	チャート				2.11		
1064		SI-164	14	SI-033	45	両極側面	チャート				0.57		
1065		SI-164	14	SI-033	65	両極側面	チャート				1.36	円錐素材	
1066		SI-164	14	SI-033	67	両極側面	チャート				1.89	円錐素材	
1067		SI-165	14	SI-034	4	両極側面	チャート				1.86		
1068		SI-165	14	SI-034	15	両極側面	チャート				2.63		
1069		SI-165	14	SI-034	144	両極側面	チャート				12.83		
1070		SI-166	14	SI-036	1F	両極側面	チャート				1.68		
1071		SI-167	17	SI-006	1A	両極側面	チャート				0.56		
1072		SI-167	17	SI-006	2	両極側面	チャート				1.56		
1073		SI-167	17	SI-006	27	両極側面	チャート				2.15	円錐素材	
1074		SI-167	17	SI-006	59	両極側面	チャート				0.73	円錐素材	
1075		SI-167	17	SI-006	85	両極側面	チャート				3.07	円錐素材	
1076		SI-170	17	SI-002	1	両極側面	チャート				2.30		
1077		SI-172	17	SI-004	19	両極側面	エノカ				16.23		
1078		SI-172	17	SI-004	23	両極側面	チャート				1.60	円錐素材	
1079		SI-174	17	SI-006	59	両極側面	チャート				2.36	円錐素材	
1080		SI-174	17	SI-006	78	両極側面	チャート				1.10		
1081		SI-174	17	SI-006	80	両極側面	チャート				0.60	円錐素材	
1082		SI-174	17	SI-006	101	両極側面	チャート				0.54		
1083		SI-174	17	SI-006	104	両極側面	チャート				2.13		
1084		SI-174	17	SI-008	117	両極側面	チャート				1.39		
1085		SI-174	17	SI-008	140	両極側面	チャート				13.98		絶熱
1086		SI-174	17	SI-008	192	両極側面	チャート				3.42	円錐素材	
1087		SI-174	17	SI-008	225	両極側面	チャート				0.34		
1088		SI-174	17	SI-008	259	両極側面	チャート				4.89	円錐素材	
1089		SI-174	17	SI-008	257	両極側面	チャート				2.15	円錐素材	
1090		SI-174	17	SI-008	260	両極側面	チャート				0.60	円錐素材	
1091		D020	8	S1-001	1-(F)	両極側面	セメント				3.33	円錐素材	
1092		D020	8	S1-001	3-(G)	両極側面	チャート				2.37	円錐素材	
1093		D020	8	S1-001	3-(H)	両極側面	チャート				1.58		
1094		D020	8	S1-001	1-(I)B	両極側面	チャート				1.25		
1095		D020	8	S1-001	119	両極側面	チャート				2.63		
1096		SK-305	14	SK-019	2	両極側面	チャート				0.88		
1097		SK-305	14	SK-019	25	両極側面	チャート				0.35	円錐素材	
1098		SK-326	14	SK-019	26	両極側面	チャート				0.69	円錐素材	
1099		SK-326	14	SK-019	16	両極側面	チャート				3.5	29	0.9
1100		Z22-89	12	Z22-89	3C	両極側面	チャート				1.81		
1101		Z22-99	12	Z1-001	12	両極側面	チャート				1.19		
1102		Z22-99	12	Z22-09	1A	両極側面	成枚貝羽扇貝灰岩				5.59	円錐素材	
1103		A1A2-18	17	A1A2-18	18	両極側面	チャート				2.24		
1104		A1A2-29	17	A1A2-29	29	両極側面	チャート				4.33	円錐素材	
1105		A1A2-46	17	A1A2-46	1A	両極側面	チャート				1.08	円錐素材	
1106		A1A2-56	17	A1A2-56	1B	両極側面	チャート				0.50		
1107		A1A2-56	17	A1A2-56	5E	両極側面	チャート				1.79		
1108		A1A2-58	17	A1A2-58	1F	両極側面	チャート				1.17		
1109		A1A2-64	17	A1A2-64	1B	両極側面	チャート				6.32	円錐素材	
1110		A1A2-65	17	A1A2-65	1G	両極側面	チャート				15.97	円錐素材	
1111		A1A2-66	17	A1A2-66	1F	両極側面	チャート				1.78	円錐素材	
1112		A1A2-66	17	A1A2-66	1K	両極側面	チャート				4.21	円錐素材	
1113		A1A2-69	17	A1A2-69	69	両極側面	チャート				3.86		
1114		A1A2-93	12	A1A2-93	93	両極側面	チャート				1.04		
1115		A1A2-25	12	A1A2-25	25	両極側面	成枚貝				3.00		
1116		A1A2-45	12	A1A2-45	45	両極側面	チャート				1.15		
1117		A1A2-46	12	A1A2-46	1C	両極側面	チャート				1.56		
1118		A1A2-55	12	A1A2-55	1B	両極側面	チャート				4.52	円錐素材	
1119		A1A2-55	12	A1A2-55	1H	両極側面	チャート				0.45		
1120		A1A2-55	12	A1A2-55	1IN	両極側面	チャート				1.22	円錐素材	
1121		A1A2-17	12	A1A2-17	17	両極側面	チャート				0.56		
1122		B022-85	18	B022-85	1A	両極側面	チャート				2.35	磁片	
1123		B022-85	18	B022-85	85	両極側面	チャート				9.00		
1124		B022-53	14	B022-53	51	両極側面	チャート				10.70		
1125		B022-53	14	B022-53	53	両極側面	チャート				3.76		
1126		B022-61	14	B022-61	63	両極側面	チャート				6.37	円錐素材	
1127		B022-72	14	B022-72	72	両極側面	チャート				1.68	角錐素材	
1128		B022-82	14	B022-82	1B	両極側面	チャート				2.65	円錐素材	
1129		B032	17	SK-003	15	両極側面	チャート				2.88		
1130		B032	17	SK-003	16	両極側面	泥紋岩				0.91		
1131		B032	17	SK-003	28	両極側面	チャート				1.23	円錐素材	
1132		B032-06	14	B032-06	1B	両極側面	チャート				8.00	磁片	
1133		B032-20	8	SK-020	1K	両極側面	チャート				2.04		
1134		B032-20	10	B032-20	71	両極側面	チャート				0.72	円錐素材	
1135		B032-20	13	B032-20	81	両極側面	チャート				0.95		

第6節 貝層出土の動物遺体

柏北部東地区では、縄文早期後葉から前期後葉の遺構内貝層を多数調査している。今回報告する大松遺跡北部でも遺構内から貝層を確認した。

貝層サンプルの水洗・選別によって検出したものは貝類がほとんどであるが、魚類遺体と哺乳類遺体がわずかに混じっていた。これ以外にわずかながら現地採集資料がある。

1 見層サンプルの分析資料と分析方法

目層サンプルを採取したのは21遺構であった。

貝層サンプルは5ℓの計量カップを使って4.5ℓの容量を、4.5ℓ未満の貝層サンプルにおいては全量を取り出し、9.52mm・4mm・2mmメッシュの試験フルイによる水洗分離を経て、選別作業を行った。ただし水洗時の骨などの検出状況によっては1mmメッシュを使用している。

貝類は4 mm メッシュ以上を選別し、二枚貝類は殻頂部の鋸歯が約半分遺存するものを左右別に集計し、多いほうを最小個体数とした。巻貝類は殻軸の下端が遺存するものを集計した。計測作業は計測可能個体が多い種について実施し、左殻をデジタルノギスで計測した。

貝層サンプル出土内容と貝種内訳を第8表にまとめた。コラムサンプルを採取したものについては、貝種の同定をコラムサンプルごとに行っているが、紙数の関係で遺構ごとにまとめ掲載した。また、計測結果については、ハマグリ、ハイガイについて、時期が明確な遺構出土で、多数出土しているケースについて計測値分布を掲載した(第9表)。

第8表 貝層出土遺構一覧と貝種組成表

遺構	時期	採取法	出土内訳										目録内訳						その他の内訳		
			全量(%)					小分量(%)					細分量(%)					合計			
			手 探 し 方 法	手 取 り 方 法	手 持 ち 方 法	手 持 ち 方 法															
SI-114	黒浜	コラム	3	13.5	●			●	9	19	41	10	18	19.9	4	2	1,059	チトサガリゾ、マサギイ	1		
SI-130	黒浜	コラム	6	26.0				●	72	240	140	24	165	236	9	19	1,345	アキシム、マタムルン、キモガシワツク、ウ	1		
SI-134	鶴岡南側	柱	1	1.0					1	2	8			35		1	47	タヒシマガリ	1		
SI-145	黒浜	コラム	7	31.5	●			●	279		144	8	18	197	1130	4	33	1,793	イモキサガズ、アムニシ、アラムシムク、チミツガリゾ、マサギイ、ヤマトリシヨウ	1	
SI-149	黒浜	コラム	6	25.7	●			●	●	40	191	26	17	392	796	12	1,201	タヒシマガリ、アムニシ、アラムシムク、カギミガゼ、オオノギイ、ウキツリ	2		
SI-165	花屋下層	コラム	5	21.2	●	●	●	●	●	106	101	1	100	98		6	422	タヒシマガリ、アムニシ、アラムシムク、ノフヨリイ、マサギイ、タヒシマガリガ、ウキツリ	1		
SI-166	黒浜	柱	1	1.0					1	19		4	6	277		2	1,210	タヒシマガリ	1		
SI-176	黒浜	柱	2	8.6					1	24	24	5	19	414		5	485	アムニシ、アラムシムク、マサギイ	1		
SK-1	黒浜	柱	1	4.5					35		2	5	19	39		2	361	タヒシマガリ	1		
SK-208	石垣下層	コラム	2	13.5	●			●	15	94	95	1	1	29		1	1,279	アムニシ、マサギイ	1		
SK-321	石垣下層	柱	1	1.0					1	8	3	1	2	2		1	11	アムニシ	1		
SK-324	石垣下層	柱	1	1.4	●				●	2	125	10	6	42		1	1,156	アムニシ、マサギイ	1		
SK-325	石垣下層	柱	3	12.8	●					168	8	8	97	642	2	15	949	タヒシマガリ	1		
SK-326	石垣下層	コラム	15	44.4	●	●	●	●	●	123	665	343	1	7	133	245	47	1,555	イモキサガズ、スギヨリ、ササニシキ、タキアゲ、タヒシマガリ	1	
SK-327	石垣下層	柱	1	1.4					●	3	6	1	1	2	13	11	アムニシ、マサギイ	1			
SK-328	石垣下層	柱	1	4.5					●	3	11	41	14	6	1	26	タヒシマガリ	1			
SK-329	石垣下層	コラム	5	22.5	●	●	●	●	●	36	155	630		89	38	71	849	タヒシマガリ、アムニシ、スギヨリ、マサギイ	1		
SK-330	黒浜	コラム	4	18.0	●	●	●		●	93	31		64	43	26	321	タヒシマガリ、アムニシ、マサギイ、シンドウ、タヒシマガリ	2			
SK-346	中期	コラム	9	37.0	●			●	1	36	2	12	9	1360	8	1,632	アムニシ、マサギイ	1			
SK-349	黒浜	柱	1	4.5					●	2	24	12	19	222	1	290			1		
SK-354	黒浜	コラム	13	53.4	●				●	41	26	4	43	66	316	5	1,340	アムニシ、マサギイ、オオノギイ、ナシ	1		

第9表 貝類計測値分布

ハマグリ級長		黒浜	黒浜	黒浜	黒浜	中筋	ハイガイ級長		花輪下層	花輪下層	花輪下層	黒浜
mm		SI-114	SI-130	SI-145	SI-149	SK-346	mm		SI-165	SK-308	SK-329	SK-330
-5							-5					
-10							-10					
-15							-15					
-20		4	9	5			-20	1	1			
-25	52	28	86	60	11		-25	6	1	8	6	
-30	168	73	96	81	160		-30	22	4	31	9	
-35	120	86	61	77	248		-35	13	8	37	29	
-40	59	40	26	54	205		-40	9	2	13	11	
-45	37	6	14	36	138		-45	3	4	5	7	
-50	12	8	6	14	51		-50	1	2	3	3	
-55	4	1	3	1	21		-55				2	
-60				2	11		-60					
-65	1				6		-65					
-70					1		-70					
試料数	454	246	301	330	852		試料数	55	22	97	67	
平均	31.6	31.3	29.0	32.0	36.2		平均	30.8	34.1	31.8	34.5	
標準偏差	6.5	5.9	6.4	7.3	7.2		標準偏差	6.0	7.2	5.6	6.5	

2 脊椎動物遺体の分析資料と分析方法

(1) 分析資料

脊椎動物遺体の分析資料には、現地採集資料(発掘時に現場で目視確認され、手で拾い上げられたもの)および水洗選別資料(貝層サンプルの水洗選別によって回収された資料)の2種類がある。水洗用の貝層サンプルは計21箇所から採取され、基本的に9.52mm・4mm・2mm・1mmの4種類のメッシュを用いて水洗選別された⁽¹⁾。今回は時間の制約上、これらのサンプルの中から時期の明確な2遺構を選出し、さらに各サンプルのうち骨の検出量の比較的多いカットを抽出して分析対象とした。分析対象とした遺構はSI-165とSK-326である。各サンプルの詳細は第8表を参照されたい。

(2) 分析方法

同定対象とした部位は、魚類では主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、主鰓蓋骨、椎骨の全資料に加えて、分類群によって同定可能なその他の部位についても適宜同定対象とした。その他の脊椎動物については部位の判定可能なすべての資料を対象とした。残存状態が良好であるにも関わらず同定に至らなかった資料は「真骨類(未同定)」などとした。同定方法は現生骨格標本との比較によった。比較に用いた標本は分析者個人の所蔵標本である。

3 脊椎動物遺体の分析結果

(1) 水洗選別資料

軟骨魚綱3分類群、硬骨魚綱13分類群、哺乳綱2分類群が確認された(第10表)。爬虫綱、両生綱、鳥綱は確認されていない。

魚類

同定結果の詳細を第11表、同定標本数(以下、「NISP」)および最小個体数(以下、「MNI」)による組成を第12表、NISPによるメッシュ別の組成、同じくNISPによる遺構別の組成を第121図に示す。

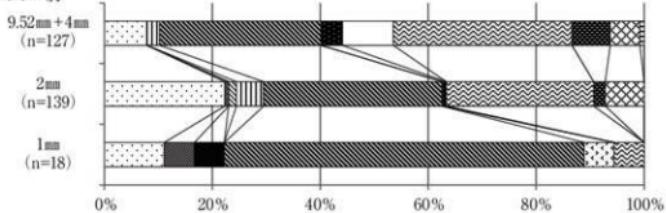
検出数・包含密度: 骨の検出数が多いサンプルを分析対象としたにもかかわらず、同定可能な魚骨は全般的に少ない。魚骨包含密度⁽²⁾はSI-165が6.6点、SK-326が7.3点といずれも低い値を示す。ただし、カットによってばらつきがあり、上層ほど魚骨包含密度がやや高くなる。

組成: まず全資料のNISPによる組成をメッシュ別にみると(第121図)、9.52mm+4mm資料ではタイ科と

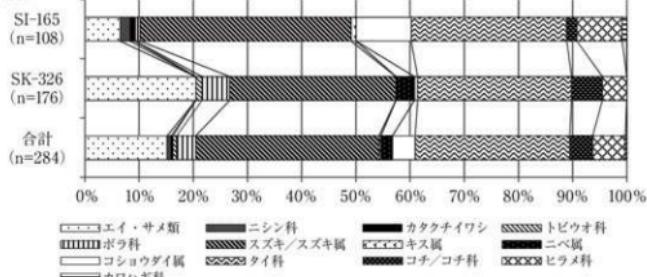
第10表 大松遺跡から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

和 名	学 名	現地 採集	水洗 選別
軟骨魚綱（板鰓亞綱）	CHONDRICHTHYES (Elasmobranchii)		
サメ類（ホシザメ型）	Elasmobranchii "Mustelus manazo" order et fam.indet.	○	
サメ類（メジロザメ型）	Elasmobranchii "Cercharhinus plumbeus" order et fam.indet.	○	
トビエイ科	Myliobatidae gen. et sp. indet.	○	
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES		
ニシン科	Clupeidae gen. et sp. indet.	○	
カタクチイワシ科	Engraulis japonicus	○	
トビウオ科	Exocoetidae gen. et sp. indet.	○	
ボラ科	Liza haematocheila	○	
スズキ科	Latrolobax japonicus	○	
キス科	Sillago sp.	○	
ニベ科	Sciaenidae gen. et sp. indet.	○	
イサキ科	Plectryichthys sp.	○	○
タイ科	Pagrus major	○	○
コチ科	Acanthopagrus sp.	○	
ヒラメ科	Platycephalus indicus	○	
カワハギ科	Paralichthyidae gen. et sp. indet.	○	
哺乳綱	MAMMALIA		
ネズミ科	Muridae gen. et sp. indet.	○	
シカ科	Cervus nippon	○	○

メッシュ別



遺構別



第121図 貝層サンプルから採集された魚類遺体のメッシュ別組成と遺構別組成 (NISP比)

第11表 大松遺跡の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体の同定結果

*同定対象となる資料が得られなかったサンプルは表示とする。

*残存位置（魚類）：w: 完存、a: 前端、m: 中間部、p: 後端、fr: 破片、+fr:「破片を含む」、fr+: MNI算定に有効な破片。

*残存位置（鳥類類）：w: 完存、p: 近位端、m: 骨幹部、d: 遠位端、fr: 破片、fr+: MNI算定に有効な破片。

(p)・(d)は未発合の骨端のみ、(p)・(d)は骨端未発合脱落、<p>・<d>は端部複合義端で欠損する骨端。<p>・<d>は骨端のみ欠損。

採取地点	层位	マッシュ	種類	部位	個体数	左右	直側	背側	備考
SI-105	9.52mm	スズキ	ミヅナギ	fr	7	L			
		スズキ	ヒラメ	w	7	L			
		サバ科(ホシザメ型)	ヒラメ	-	1				
		トビイ科	ミヅナギ	-	1				
		スズキ属	ミヅナギ	a	1				
	4mm	スズキ属	ヒラメ	m	1				
		スズキ属	ヒラメ	m fr	1				
		スズキ属	方骨	L	1				
		スズキ属	耳石		1				
		スズキ属	腹板	-	1				
145	4mm	スズキ属	尾端		3				
		スズキ属	尾端		2				
		スズキ属	尾端	a	2				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
	2mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
SI-106	9.52mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	a	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	p	1				
	2mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	L	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
148	4mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	a	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
	2mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
SI-107	9.52mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	a	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
	1mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m fr	1				
SI-108	9.52mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
	2mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
SK-326	9.52mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
	2mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
64	9.52mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
	4mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
68	9.52mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
	4mm	コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				
		コシロウカジカ属	ヒラメ	m	1				

第10表の結果								
採取地名	(cm)	マッシュ	種類	部位	NISP	左右	点数	備考
SK-326	4mm	スズキ	胸骨	-	3			
		アメダイ	胸骨	R	1			
		クロダイ	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	-	2			
		マダイ	胸骨	m	1			
		クロダイ属	胸骨	R	1			
		タイ科	胸骨/胸骨	m D	?	<20		
		タイ科	胸骨	-	?	<20		
		タイ科	胸骨	-	2			
		コチ科	胸骨	R	1			
60	60	スズキ	胸骨	m	1			
		ヒラメ科	胸骨	-	1			
		サメ科(ホシザメ型)	胸骨	-	2			
		サメ科(メジロザメ型)	胸骨	-	2			
		エイ科	胸骨	-	4			
		トリパウチ科	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	m-m	R	1		
		スズキ属	胸骨	R	1			
		スズキ属	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	-	1			
60	2mm	スズキ	胸骨	m D	?	<20		
		マダイ	胸骨	w	M	1		
		クロダイ	胸骨	-	1			
		タイ科	胸骨	-	1			
		タイ科	胸骨	-	2			
		タイ科	胸骨	-	1			
		ウツボ科(固定不可)	胸骨	-	1	ボウ特		
		ウツボ科(固定不可)	胸骨	-	1			
		マダイ	上顎骨	-	1			
		サメ科	胸骨	-	2			
60	4mm	スズキ属	胸骨	s	M	1		
		スズキ属	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	m	M	1		
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
SK-326	2mm	スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
		スズキ属	胸骨	m	D	?	<20	
72	9.52mm	マダイ	上顎骨	-	1			
		エイ・サメ科	胸骨	-	1			
		エイ・サメ科	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	-	1			
		スズキ属	胸骨	-	1			
72	2mm	マダイ	上顎骨	m D	?	<20		
		マダイ	上顎骨	m D	?	<20		
		マダイ	上顎骨	m D	?	<20		
		マダイ	上顎骨	m D	?	<20		
		マダイ	上顎骨	m D	?	<20		
		マダイ	上顎骨	m D	?	<20		
		マダイ	上顎骨	m D	?	<20		
		マダイ	上顎骨	m D	?	<20		
		マダイ	上顎骨	m D	?	<20		
		マダイ	上顎骨	m D	?	<20		

スズキ/スズキ属が全体の約6割を占め、両者ではややタイ科が多い。これにコショウダイ属、エイ・サメ類、コチ/コチ科が次ぐ。2mm資料ではスズキ/スズキ属が最も多く、タイ科、エイ・サメ類がこれに次ぐ。1mm資料ではスズキ/スズキ属が突出して多く、ニシン科やカタクチイワシ、キス属などの小形魚は1点ずつの検出に留まり、2mm資料までは普通に見られたタイ科も少なくなる。

次にNISPによる組成を遺構別にみると（第121図）、いずれもスズキ/スズキ属が最も多く、タイ科がこれに次ぐ。さらに、SI-165ではコショウダイ属が次ぎ、SK-326ではエイ・サメ類が次ぐ。以下、いずれの遺構もコチ/コチ科、ヒラメ科、ボラ科が普通に見られる。

哺乳類

シカ中節骨、ネズミ下顎切歯各1点が確認された。ネズミ科は自然の遺骸と思われる。

(2) 現地採集資料

硬骨魚綱2分類群、哺乳綱1分類群が確認された（第10表）。

魚類

SK-326の覆土内からコショウダイ属前上顎骨、マダイ主上顎骨、タイ科鱗棘が各1点検出されている（第13表）。マダイ主上顎骨は中間部のみの資料であるため復元体長を提示していないが、標準体長62.0cmの現生標本と比較しても明らかに大きく、極めて大型の個体である。

哺乳類

SI-165からニホンジカ1点、SK-326からニホンジカ5点が検出されている（第13表）。

まとめ

SI-165、SK-326のいずれもスズキ属（主鰓蓋骨はすべてスズキ）、マダイ、クロダイ属を中心とした大形魚が卓越しており、エイ・サメ類、ボラ科、コチ科（前鰓蓋骨はすべてコチ）、ヒラメ科なども普通である。一方で、ニシン科、カタクチイワシ、アジ科などの小形魚はわずかに検出されるのみか、もしくはまったく見られない。これらの様相は基本的には繩文前期湾奥部遺跡魚類相の一般的な傾向を示してお

第12表 大松遺跡の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体の組成 (NISP・MNI)

*1:「タイ科歯」、「タイ科前上顎骨/歯骨 m fr」は除外してNISPを算定した。

*2:自然の遺骸と考えられるネズミ科を除く。

種類	NISP												合計						
	143			146			147			148									
	9.52mm	4mm	2mm	1mm															
サメ類(ホシザメ型)	1												0	1	0	0			
サメ類(メジロザメ型)		1				1							0	0	2	0			
サメ類			1				1						0	0	0	2			
トビエイ科	1												0	2	0	0			
エイ科													0	0	0	0			
エイ・サメ類													0	0	0	0			
ニンニク		1						1					0	0	1	1			
カツラギナガワシ													0	0	0	0			
トビウオ科													0	0	0	0			
メダガ	1												0	0	1	0			
ボウズ													0	0	0	0			
スマズキスカモド	1	9	4	5	1	6	4	6	1	4	2		2	16	12	12			
ホタテ								1					0	0	0	1			
二八鰐													0	0	0	0			
コヨウウツギノミ		11											0	0	0	0			
アザラシ	1						1						0	11	0	0			
クロマグロ	2				1	1							0	0	0	1			
タチウオ	6	4		5	1		6	3	1	1	1		1	18	8	0			
コチ・コブ鰐					1	3							0	1	1	0			
ヒラメ科	5			6									0	4	5	0			
カサハラ鰐	1												0	1	0	0			
真骨魚(本回認)	1	2											1	0	0	2	2		
真骨魚(同定不可)	1	1			1	2		1					1	0	0	4	3		
ホタテ科													0	0	0	1			
シカ		1											1	0	0	0			
合計	2	31	18	9	2	18	9	12	0	5	8	3	1	4	2	0	55	37	24
目別サンプル分率量 (%kg)	4.5/28				45/35				43/35				45/35				18-1435		
魚骨NISP/1 (9.52mm-1mm)	13.2				89				23				69				6.6		
魚骨NISP/ (9.52mm-2mm)	11.3				62				2.9				69				5.3		
鳥類骨NISP/1 %2	0.0				0.7				0.0				0.0				0.06		
鳥類骨NISP 個体数	11				9				3				1				14		

種類	NISP												MNI						
	SK-320																		
	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74							
9.52mm	4mm	2mm	1mm	9.52mm	4mm	2mm	1mm	9.52mm	4mm	2mm	1mm	9.52mm	4mm	2mm	1mm				
サメ類(ホシザメ型)													0	2	3	-			
サメ類(メジロザメ型)													1	0	5	7			
サメ類	3				1			2					0	3	3	8			
トビエイ科	2		1	1									0	1	3	6			
エイ科			3		3	4		5		3	0	3	15	18	-				
エイ・サメ類													1	0	1	1			
ニンニク													0	0	2	1			
カツラギナガワシ													0	0	0	1			
トビウオ科	1						1						0	0	2	1			
メダガ													0	1	0	2			
ボウズ	4	1	1	1									0	2	6	8			
スマズキスカモド	7	14	5	3	4	9	4	6		2	0	20	24	96	4				
ホタテ													0	0	0	1			
二八鰐	1		1	1					2				0	5	1	1			
コヨウウツギノミ		1											1	0	12	3			
アザラシ			2		1	1	1	1	2				1	2	9	12			
クロマグロ	2		1	3		1	2	1					1	2	2	14			
ダイ科*	2	7	2	6	2	3	2	6	1	2	0	6	24	58	8				
コチ・コブ鰐	1	1			1	2		2	1		2	7	2	22	3				
ヒラメ科	3		2	2		1						0	3	5	17	1			
カサハラ鰐													0	0	0	1			
真骨魚(本回認)	1				1								0	2	0	0			
真骨魚(同定不可)					1	2		2					0	1	4	12			
ホタテ科													0	0	0	1			
シカ													0	0	0	1			
合計	0	14	35	4	17	19	1	17	26	1	14	23	1	2	9	64	112	304	26
目別サンプル分率量 (%kg)	28/24				40/36				45/42				45/36				38.3/ 31.8		
魚骨NISP/1 (9.52mm-1mm)	175				160				98				27				7.3		
鳥類骨NISP/1 %2	0.0				0.0				0.0				0.0				0.03		
抽出拒否数	9				9				10				5				16		

第13表 大松遺跡から検出された現地採取の脊椎動物遺体の同定結果

同定対象となる資料が得られなかったサンプルは非表示とする。

*残存位置（魚類）：w：完存、a：前端、m：中間部、p：後端、fr：破片、+fr：「破片を含む」。fr+MNI算定に有効な破片。

*残存位置（鳥獣類）：w：完存、p：近位端、m：骨幹、d：遠位端、fr：破片、fr+MNI算定に有効な破片。

(p)・(d)は未融合の骨端のみ。(p)・(d)は骨端未融合脱離、<p>・<d>は端部融合離由で欠損する骨端、<p>・<d>は骨端のみ欠損。

遺体	遺物番号	種類	部位	残存位置*	左右	点数	備考
SI-165	143	シカ	脛骨	<p>	L	1	
SK-326	46	シカ	中足骨	m fr	?	1	前位面
SK-326	50	コショウダイ属	前上顎骨	a	R	1	
SK-326	54a	シカ	中足骨	p	R	1	外側前位面
SK-326	54b	シカ	膝蓋骨		R	1	
SK-326	55	シカ	下顎骨	M3	L	1	
SK-326	56	マダイ	主上顎骨	m	R	1	無大型
SK-326	58	タイ科	鱗縫		-	1	
SK-326	60	シカ	下顎骨	歯突起	R	1	

り、マダイを除く魚種は、繩文海進定期に入って形成された湾奥干潟や汽水域とその周辺の浅海域で漁獲されたものと考えられる。マダイに関しては、近代以降の出現記録に基づく生息域から判断して、湾奥部まで侵入するとは考えがたく⁽³⁾、他集団との交換による間接入手の可能性も視野に入れる必要がある。小型・大型の区別無く検出されているスズキ属に対し、数は少ないが大型のマダイが目立つ点もこれと調和的と考えられるか。マダイは古東京湾側の松戸市幸田貝塚でも多数検出されているほか、隣接する柏市駒形遺跡でも検出されており、特に標準体長60cm以上の大型個体が目立つ。

一方、岩礁域やその付近に生息するコショウダイ属がSI-165でまとまって検出されている点⁽⁴⁾や、少数要素の中に外洋性の季節回遊魚であるトビウオ科がみられる点が特異的である。特にトビウオ科についてはマダイ同様に入手経緯が問題となるが、当時、湾内に回遊することがあったのか、あるいは湾外で漁獲または湾外の集団から間接的に入手したものかについては現状では明らかではない。

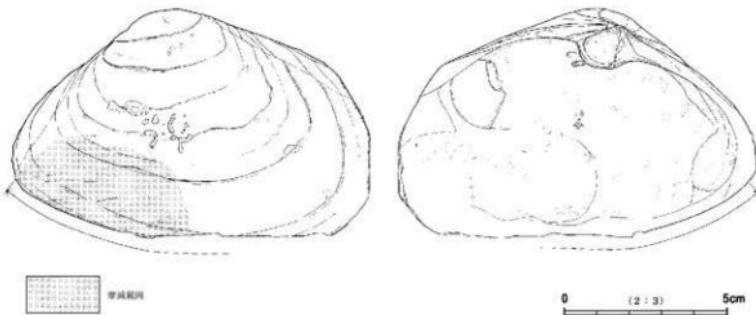
マダイやトビウオ科など、湾奥部周辺の水域では入手困難と考えられる魚類の入手経緯については、湾内の海底谷地形などの水域環境や過去の魚種出現記録を検証した上で、湾内直接入手の可能性と他集団からの間接入手の可能性を併せて検討すべきであり、分析サンプルの追加と併せて今後の課題としたい。

4 貝製品（第122図）

SI-141からミルクイガイ製（左殻）のヘラ状貝製品が1点出土している。残存殻長110mm、同殻高71mmを測る。腹縁の前端を中心に摩滅による変形がみられる（実測図の矢印部分）。摩滅箇所付近の殻外面は平滑で光沢を持ち（実測図の網掛部分）、僅かだが細かく弱い線状痕が付く。線状痕の方向は殻に対して横方向である。殻内面には、明瞭ではないが手擦れ痕と考えられる極めて弱く浅い線状痕が付く。図示できなかったが、殻内面腹縁中央部に横方向に残る。腹縁中央部～後端が欠損しているため使用による変形の範囲は不明だが、残存する腹縁後端の形状が大きく変形していないこと、殻外面の腹縁前端付近のみが平滑化し光沢を持つことから、殻外面の腹縁前端が主に使用されたと推定される。貝殻は水摩が明瞭で、食痕が貫通しており、海岸などで打ち上げられた死貝を採取して使用したことを示す。類例に千葉市有吉北貝塚（繩文中期）や千葉市六通貝塚（繩文後期）のヘラ状貝製品や磨貝があるが、そのうちのA型（アリソガイ型）に相当するものと考えられる⁽⁵⁾。

注

(1)一部のサンプルについて、水洗時の骨の検出状況から2mmメッシュまでの水洗選別に留めた経緯がある。今回、分析



第122図 SI-141出土貝製品

- 対象としたSK-326もその1つである。
- (2) 貝層サンプル1リットルあたりに含まれる魚骨同定標本数を表す。
 - (3) 渥内海底谷での生息状況の記録検証が不十分であり、今後の課題としたい。
 - (4) 同一個体の可能性があり、見かけ上の偏りとも捉えられる。MNIではSI-165は2個体、SK-326は1個体（現地採集資料を含めると2個体）であり、大差ない。
 - (5) 貝製品の観察および貝層出土の動物遺体の同定・分析については服部智至氏の指導・協力を得た。

参考文献

- (財) 千葉県教育振興財團 2009 「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2 - 柏市胸形遺跡 - 繩文時代以降編1」
- (公財) 千葉県教育振興財團 2014 「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6 - 柏市富士見遺跡 - 繩文時代以降編1」
- (財) 千葉県文化財センター 1998 「3 貝製品」「千葉東南部ニュータウン19-千葉市有吉北貝塚1 (旧石器・繩文時代) - 第1分冊 (本文)」 p479-p509
- 西野雅人 2002 「繩文時代中・後期のヘラ状貝製品について」『研究連絡誌』第62号 (財)千葉県文化財センター
- 西野雅人 2002 「繩文時代中・後期のヘラ状貝製品(2)」「往還する考古学1」近江貝塚研究会
- (財) 千葉県教育振興財團 2007 「第5節 貝製品」「千葉東南部ニュータウン37-千葉市六通貝塚-」 p294-p305



第123回 古墳時代、中・近世遺構分布図

第3章 古墳時代以降の遺構と遺物

大松遺跡で確認した古墳時代以降の遺構は、古墳時代の竪穴住居1軒と中・近世とみられる溝群6条、土坑12基、ピット群1か所とわずかであった。

第1節 古墳時代

SI-181 (8) SI-001 (第124図、図版15・68)

台地北東端のDD19-97・DD20-07・08グリッドに位置し、北側の一部は駒形遺跡にまたがっている。谷の付け根に単独で存在する。南壁は斜面に掛かっているために遺存が悪い。形状は隅丸方形で、規模は長軸長・短軸長共に5.4m、深さは最大で55cmである。主軸の方位は北北西をとる。カマドは北壁際中央にあり、煙道のみ壁外に設けている。袖・天井部とも遺存状態は良好で、天井部には甕の据口かと思われる円形の落ち込みが認められた。規模は長さ1.0m、幅1.3mである。柱穴は四隅に対応する4本が明瞭(深さ約50cm~70cm)であり、中位で段をなす。また、貯蔵穴P6は北東隅、梯子穴P5は南壁中央壁寄りにある典型的な配置をなす。この他、北西隅にP7~P8の3本のピットがみられる。この内、P9は斜めに深く掘り込まれており、方向が屋根の中心部に向いていることを考えると、補強を目的としたものであろうか。床面はほぼ平坦であり、全面的に踏み締められている。土層断面で確認されている床面上の山砂は意図的に敷かれたものであろう。壁溝は途切れなく巡っているが、貯蔵穴付近では浅くなっている。覆土は締まりに欠ける黒色土ないし褐色土であり、住居周囲(とりわけ北側)からの流れ込みであろう。

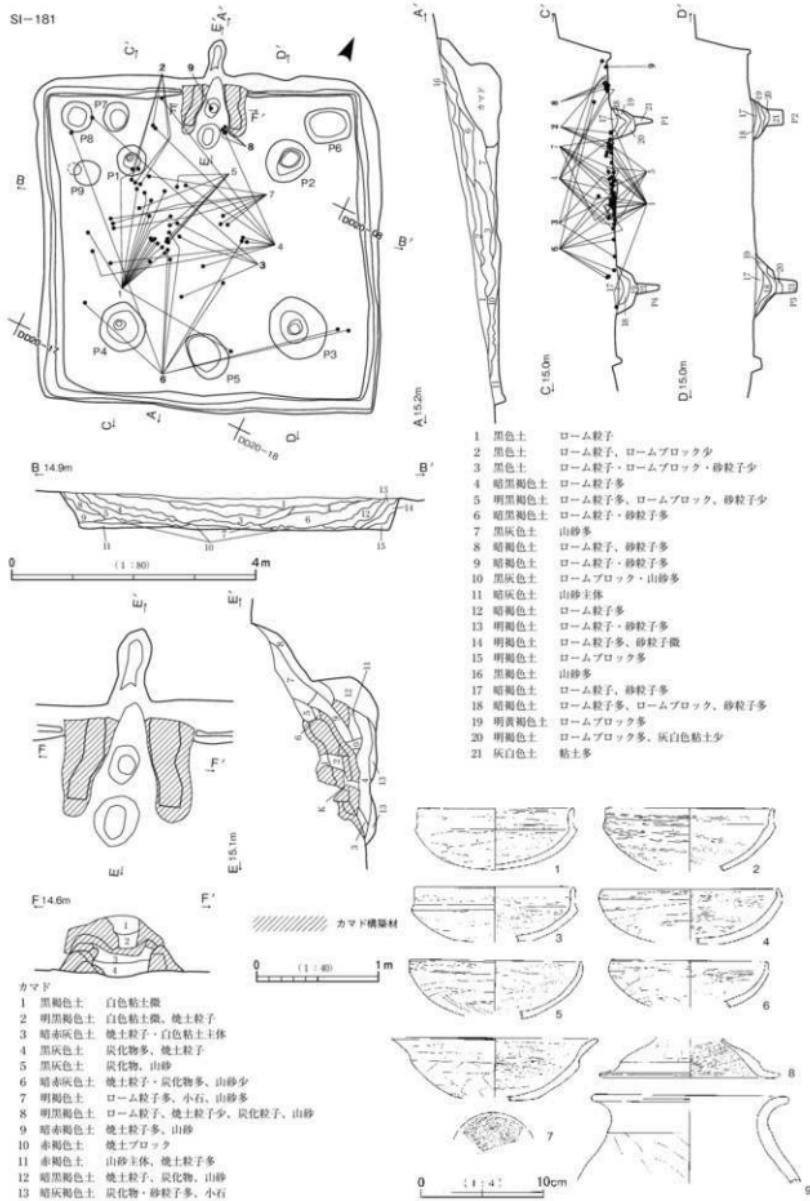
遺物は西側中央また東側壁際中央にまとまった分布域があるものの、縄文土器や縄文時代の石器類も多数含んでおり、住居廃棄後の再堆積であろう。また本跡に伴うと考えられる土器も多数出土しているが、遺存状態がよくないため、図示できたのはそのうちのごく一部である。

1~7は土師器壺で、1~6は須恵器壺を模倣したものである。6点とも白色粒子を含む近似した胎土で、焼成が良好である。また内面から口縁部外面は横方向に磨いて仕上げておらず、器面に光沢をもつ。いずれも小片に割れて出土しているなど共通点が多く、同時に使用されて、その後廃棄されたものと考えられる。1~3は口縁部外面に明瞭な稜をもつ形態である。1は3/4が遺存し、口径12.8cm、器高5.1cmである。2・3は1/3が遺存し、2は復元口径13.8cm、遺存高5.1cm、3は復元口径13.2cm、遺存高4.5cmである。体部外面はヘラケズリ後ナデで仕上げる。4~6は口縁部がわずかに内傾する形態である。4は3/4が遺存し、口径14.6cm、器高4.5cmである。5は2/3が遺存し、口径14.2cm、遺存高4.7cmである。6は口縁部の2/3周が遺存し、底部は欠損する。口径12.9cm、遺存高3.8cmである。7は外面に明瞭な稜をもち、口縁部が外反して立ち上がる。1/3が遺存し、口径は16.9cm、遺存高は5.1cmである。1~6の壺と同様に内外面を磨いており、底部外面はヘラケズリにより、平底に近い状態に仕上げ、工具痕が残っている。

8は柱状の脚部をもつ高杯脚部の裾部と思われ、端部がわずかに外反する。口径は16.9cm、内面は横方向のミガキ、裾端部はヨコナデ、外面は縦方向にヘラケズリする。

17は土師器甕の口縁部である。甕はこれと同一個体ではないが、底部片も存在した。火熱により遺存状態が悪く図示していない。

以上の出土土器から古墳時代後期の竪穴住居と考えられよう。



第124図 SI-181

第2節 中・近世

1 概要 (第125図、図版68・69、第14~16表)

大松遺跡では中・近世に属する遺構・遺物は希薄かつ乏しい状況であった。台地続きの富士見遺跡では中世の掘込構造群が検出されているものの、位置的には北西にあり、大松遺跡寄りの一帯では該期の遺構は皆無であった。また、近世に至ってもしばらくは牧の隣接地という条件もあって、この台地群に開発の手が入ったのは富士見遺跡の報告にみえるとおり18世紀も後半以降であった。大松遺跡はさらに谷奥にであることから、その開発は一段と遅れたものになったと思われる。

中世の遺構は皆無で、遺物は陶器片が3点と板碑と思われる破片2点のみであった。陶器は1点が富士見遺跡と同様、古瀬戸後期Ⅲに属するのはその外縁部の様相とみてよいが、残りの2点が大窯期に属するのは注目される。谷を隔てた東側に位置する小山台遺跡との関連を示唆するものかもしれない。板碑片は1点が基部、また1点は小片であり、年代等の推測にまでは至らなかった。

近世では、北側に接する富士見遺跡と駒形遺跡からそれぞれ南進する道沿いの溝と、両者に挟まれた北東端の土坑群には限定される。道自体は台地南端で合流し、台地を下って小山台遺跡や原畠遺跡に至っているので、台地群を連絡する幅2間の道と考えられる。両遺跡との境界ラインに並行して、両道に挟まれた平場内にそれぞれ40mと70m南に小溝が並行して走っており、近世の遺物はそのほとんどがこれより北側で出土していることから、この小溝は畑地の境界溝と思われる。また、北西端の繩文時代住居SI-116内では近世と思われる土坑も見られ、これも斜面にかかる位置ではあるが富士見遺跡の延長にある遺構と捉えられよう。ただし、北東部の土坑群は単純に耕作にかかる遺構とも断じがたいが、その性格を追求しうるまでには至っていない。

これら遺構の年代については18世紀後半以降の日常使われる陶器・土器・玩具・遊具類、なかでも熔融が多くを占めており、ほぼそれに準じて考えてよいであろう。錢貨6点も矛盾しない内容である。それに次ぐ砥石も多くは折損品であり、しかも使い込まれたものがほとんどである。壊れやすい遺物や現地での農作業が出土した遺物の様相に反映されたのである。

2 溝群（第125図）

検出された溝は調査区両端を南北に走る溝とその間の空間を東西に区切る溝の2種類である。前者はSD-001・SD-002またSD-003・SD-004であり、後者はSD-005・SD-006である。

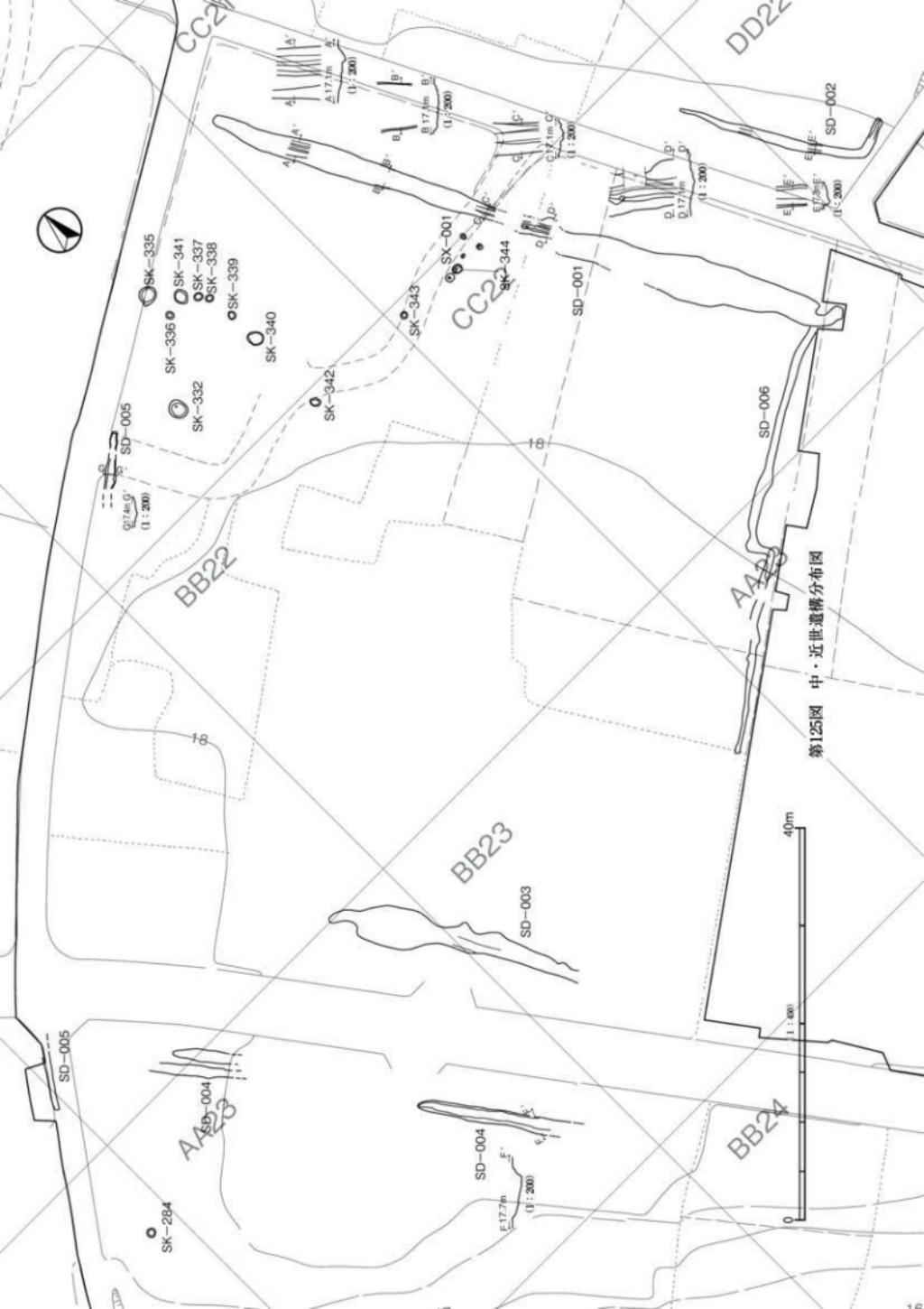
SD-001 (18) SD-001

台地北東部を台地の向きに従って走る近世以降の溝であり、約10數m南には丁度13mほど東へスライドするようにSD-002が並行する。共に同一の性格ゆえであろう。一部分の発掘ではあるが、2条の溝が並行し、あたかも1本の溝のように見える。溝幅は1.0m～1.2m、深さは共に10cm前後であり、約6.5mの長さで終わっているのは、前後が失われたに過ぎず、本来はさらに南北に延びていたのだろう。覆土は記録なく不明である。SD-004と同様に道路に並行して設けられた溝で、また地境を兼ねたと判断される。

SD-002 (18) SD-004 (図版15)

台地北東部を台地の向きに従って走る近世以降の溝である。北北西から南南東に約20m走り南端は鍵の手のように曲がり谷に下りながら約4mで消滅する。一部分の調査ではあるが、幅1.0m、深さ20cmの溝であったことが確かめられた。覆土は黒褐色土で占められ、調査記録によれば地境の溝であろうとする。時期的に伴う遺物はない。

第125図 中・近世遺構分布図



SD-003 (14) SD-003

台地北西部を台地の向きに従って走る近世以降の溝である。北側は消滅したようになっているが、掘り込み自体が浅いために確認できなかったのであろう。幅約2mの平面的には波打ったような形状の溝である。おそらく、SD-001と対応する性格の溝であろう。

SD-004 (12) SD-002 (図版3)

台地北西部を台地の向きに従って走る近世以降の溝である。間が消滅したようになっているが、本来一続きの溝であろう。幅1.0m~1.5mの浅い溝であり、恐らく、SD-002と対応する性格の溝であろう。

SD-005 (18) SD-003

台地北側富士見遺跡との境界に沿うように走る近世以降の溝である。約6m確認されたにすぎないが、本来はさらに西側へ延びていたものと思われる。幅1m、深さ15cmに満たない皿状の溝であり、一部分の検出ではある。また、SD-006と対応するように北側を限る地境の溝としてよいであろう。なお、覆土は暗褐色土であり、時期的に伴う遺物はない。

SD-006 (14) SD-002 (図版5)

台地北側を台地の向きに直交して走る近世以降の溝であり、途中で1箇所屈曲する。幅は1m弱、深さは浅いものと思われる。南側が畠地の境界に当たっていることから地境の溝と判断される。

3 土坑群

SK-284 (12) SK-003 (第126図、図版2)

台地北西端のZ23-29グリッドに位置し、SI-116と重複する。土層断面の状況から当遺構が新しい。平面形状は楕円形、断面は浅い椀形である。規模は径0.95m、深さは最大で28cmである。覆土は凹レンズ状に底面から褐色土、暗褐色土と推移しており、自然堆積であろう。

遺物はわずかな一括遺物のみで、図示できるものはなかった。

SK-332 (18) SK-018 (第126図、図版15)

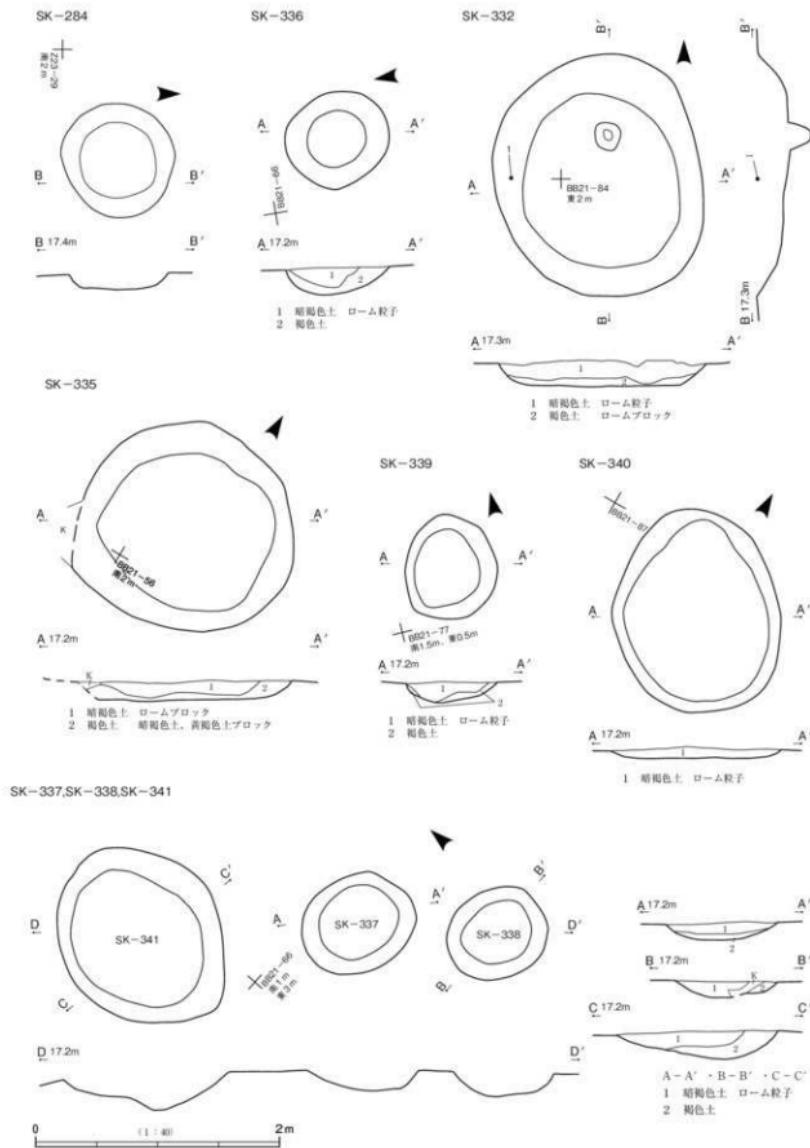
台地北部のBB21-74・84グリッドに位置する。平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿形である。底面に小ピット（深さ16cm）がみられる。規模は長軸長2.0m、短軸長1.8m、深さは最大で23cmほどであった。覆土は上から暗褐色土次いで褐色土の水平堆積である。遺物はわずかな一括遺物のみであった。

SK-335~342 (18) SK-021~028 (第126・127図、図版15)

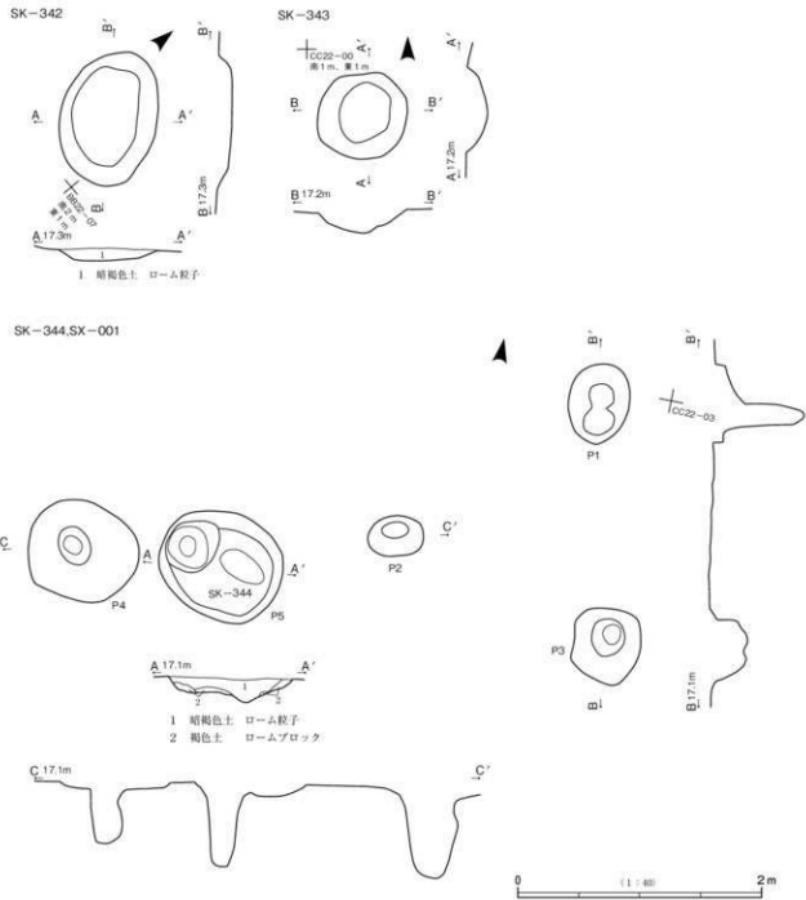
調査記録に近世の土坑と記してあったことや、近世熔岩片が出土していることから近世の土坑群と判断した。台地北部のBB21-55~87グリッド間に位置する。SK-335とSK-340の間には約15mの距離があるが、この間を埋めるように土坑SK-337~SK-341が縦に連なるように分布する。また、SK-340から約7m南のSK-342も一連のものであろう。いずれも平面形状は円形ないし楕円形で、また断面形状も浅い皿形であり、覆土も共通していることから、一連の遺構の可能性が高いと判断され、一括して扱った。規模は最大で径1.7m、最小で70cm、深さは最大で20cm、最小で10cm以下である。覆土は自然堆積と思われる褐色土または暗褐色土で占められる。遺物は熔岩片（第14表に未掲載遺物として記載）のみである。

SK-343 (18) SK-029 (第127図、図版15)

台地北東端のCC22-00グリッドに位置する。浅いこともあって、時期の断定はできないが近世以降の可能性が高い。平面形状はほぼ円形、断面形状は浅い椀形である。規模は径70cm、深さは最大で25cmである。覆土の状況は不明である。



第126図 中・近世土坑（1）



第127図 中・近世土坑（2）

SK-344・SX-001 (18) SK-030・SX-003 (第127図、図版15)

台地北東寄りのCC22-01・02・12グリッドに位置する。土坑として取り扱われているが、土坑自体はごく浅い反面、ピットは深いことから壁面が失われたか平地住居の可能性もあるため、ピット群として報告する。SK-344またその西側に隣接する土坑は既述した理由により、むしろピットの一つ（P5）として捉えられ、そうすると計5本のピット群とみられる。これらはP4・P5・P2がほぼ直線に並ぶが、残りに何らかの規則性は窺えない。しかし、P3（深さ30cm）を除き深さは50cm～70cmとある程度揃っており、一連の遺構の可能性が高いと思われるものの、その可能性を指摘するにすぎない。

第14表 中・近世陶磁器、土器、土製品一覽（第128図、図版69）

卷之三

第15表 板碑・砥石一覧（第128図、図版68）

単位：cm

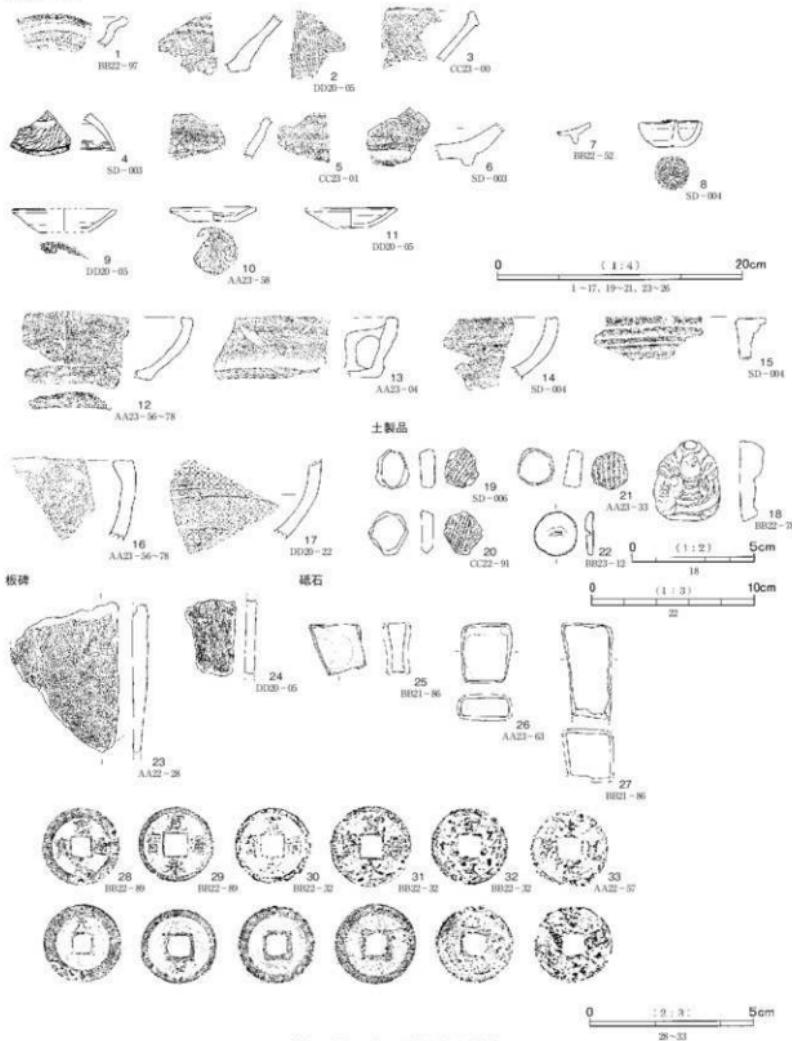
番号	出土遺構	遺物 番号	出土地区	石質	種類	時期	道存度	法集（括弧付値は推定）			色調	備考
								長さ	幅	厚み		
23	(17) AA22-28	1	AA22-28	緑色片岩	板碑	中世	道存部少			L3	灰緑色	
24	(8) SK-001	1	D120-05	緑色片岩	板碑	中世	道存部少			0.7	黒灰緑色	
25	(18) SK-122	1	BB21-93	砂岩	砥石	中世	道存部少	(3.4)	(4.1)	1.3	灰緑色	
26	(12) AA23-63	1	AA23-63	緑灰岩	砥石	中世	完全存	4.8	4.1	1.7	明灰褐色	
27	(18) BB21-86	1	BB21-86	緑灰岩	砥石	近世	完全存	(7.5)	3.7	3.6	明暗灰色	下部発見時既折損
非規則1	(12) Z23-09	1	Z23-09	緑灰岩	砥石	近世	完全存	(6.5)	3.5	1.8	暗灰色	下部既発見時既折損
非規則2	(14) SI-001 (磯2SI-133)	56	CC22-59	緑灰岩	砥石	近世	破片	(5.8)	5.0	1.6	暗灰色	両頭部発見時既折損
非規則3	(14) SI-013 (磯2SI-145)	1	BB23-22	緑灰岩	砥石	近世	端部	(2.5)	3.3	0.6	灰色	
非規則4	(12) Z23-09	1	Z23-09	緑灰岩	砥石	近世	破片	(3.3)	3.4	1.2	暗灰色	両頭部発見時既折損
非規則5	この他。(8) SK-001, (12) SI-006, (14) CC22-46, (14) SI-013, (14) BB22-75で岩盤(以降)小砾石片無土, 石質は砂岩1, 緑灰岩4											

第16表 銭貨一覧（第128図、図版68）

単位：mm・g

番号	出土遺構	遺物 番号	出土場所	銭種	年代	縦直径	横直径	縦内径	横内径	厚	道存度	青文	備考
28	(14) BB22-89	1・5・ 31	BB22-89	寛永通寶	18世紀	23.5	23.5	5.5	6.0	1.0	2.87	完存	元新寛永
29	(14) SI-013 (磯2SI-145)	1	BB23-32	寛永通寶	18世紀	22.5	23.0	6.5	7.0	0.8	2.71	完存	新寛永
30	(14) SI-013 (磯2SI-145)	1	BB23-32	寛永通寶	18世紀	24.5	24.0	6.0	6.0	1.0	2.21	完存	新寛永
31	(14) SI-013 (磯2SI-145)	1	BB23-32	寛永通寶	18世紀	22.5	22.5	6.5	6.5	1.0	3.29	完存	新寛永
32	(14) SI-035 (磯2SI-166)	1	BB23-40	寛永通寶	18~19世紀	23.0	22.5	7.0	6.5	1.0	2.49	完存	鉄銭、道存不良
33	(17) AA22-57	1	AA22-57	寛永通寶	18世紀	24.1	23.9	6.1	6.0	1.0	2.19	完存	新寛永、道存不良

陶器·土器



第128図 中・近世出土遺物

第4章　まとめ

第1節　大松遺跡の縄文時代集落について（第129・130図）

大松遺跡は柏北部東地区の中央部に位置する遺跡である。柏北部東地区は利根川南岸、常磐自動車道の南東に広がる台地一帯にあたり、台地の標高は16m～18mで、利根川低地との比高は5m～10mである。周辺は、利根川東遷以前は小貝川に合流していた古常陸川水系にあり、古鬼怒湾に属する古常陸川湾の柏・我孫子低地に面していた。また、南西から入り込む奥東京湾との接点にもあたる。

大松遺跡が立地する台地は、現在、利根川から入り込む支谷により東西を挟まれた舌状を呈し、枝分かれする小支谷によって、いくつかの遺跡に分けられている。大松遺跡は台地の南側に位置し、その北東側は駒形遺跡、北西側は富士見遺跡と呼称されるが、各遺跡が接する部分については一連の集落としてとらえられる。

大松遺跡はすでに報告を行った南部と合わせて全容がほぼ明らかとなった。今回報告する北部調査区で古墳時代後期の竪穴住居が1軒、中・近世の土坑・溝、既報告の南部調査区で平安時代の竪穴住居1軒とこれらに伴うわずかな遺物を出土したほかは、北部・南部調査区とも縄文時代の遺構・遺物で占められていた。ここでは今回新たに詳細な内容が明らかになった北部地区的縄文時代の概要をまとめる。

今回報告した縄文時代の遺構は竪穴住居70軒、炉穴2基、陥穴1基、土坑59基である。

時期別の竪穴住居数は前期62軒、中期3軒、不明が5軒であった。前期の内訳は花積下層式期が14軒、黒浜式期が31軒、諸磯・浮島式期が1軒、興津式期が1軒である。このほか重複や掘り込みが浅いために、前期前半ではあるが細別時期を判断できない竪穴住居が15軒になる。これらは調査区北西の谷に面した台地肩部に立地するものが多く、覆土の流出などの要因があるとみられ、出土している土器は花積下層式もしくは黒浜式で、いずれかの時期と考えられるものである。土坑は竪穴住居周辺に分布しており、関連性が考えられるものの遺物を伴うものが少なく時期や用途を明らかできたものは少ない。59基のうち、前期21基、中期10基、後期1基で、時期の確定ができない土坑は27基であった。

花積下層式期の竪穴住居は、大松遺跡・富士見遺跡・駒形遺跡を画する谷の奥部でそれぞれ確認され、大松遺跡では北西部のAA22～BB22にある部分に集中している。ここと接する富士見遺跡南東のC地区で6軒、同じく駒形遺跡E地区で9軒の遺構が検出され、3遺跡で確認されたこれらでひとつの集落を形成していたと考えられ、すべてが同時に存在したわけではないが、合わせて29軒になる。これらは径40m程の範囲に環状に分布している。柏北部東地区内の同期の竪穴住居はこのほか駒形遺跡北東のA地区で6軒がほぼ1列に並んでいる。大松遺跡では2軒が重複している場合が多く、近接して作り替えをしていたようである。

関山式期の竪穴住居は、南部に4軒がまとまって検出されているが、今回報告の北部では確認されなかつた。遺構の覆土中に土器の多少の混入はあったものの、駒形遺跡と接する北東端のDD20グリッドに位置する古墳時代後期の竪穴住居SI-181の覆土中に混入していた資料がもっとも良好なものであった。駒形遺跡の南東に同期の数軒のまとまりが確認されており、これらとの関連が考えられるものである。

黒浜式期の竪穴住居は飛躍的に増加し、大松遺跡の今回の調査範囲では32軒、既報告部分では13軒確認され、合わせて44軒となった（1軒は両調査にまたがっている）。北部調査区ではその南寄りを中心に、

南部調査区ではその北寄りを中心に分布し、台地中央から南では確認されておらず、大松遺跡の台地基部から中央にかけてこの時期の集落が展開していたようである。花積下層式期と同様に、近接して位置する例が多く見られる。富士見遺跡で84軒、駒形遺跡で32軒が確認され、合わせて160軒ほどが台地縁辺部を中心に散漫に分布している。

大松遺跡では、富士見遺跡・駒形遺跡と同様に花積下層式・黒浜式期の遺構から貝層を検出し、既報告分でも黒浜式期の堅穴住居13軒中8軒、土坑24基中5基で確認されている。今回報告分では堅穴住居8軒、土坑13基で貝ブロックを確認した（第8表）。時期が判断できるものは花積下層式期では堅穴住居1軒、土坑6基、黒浜式期では堅穴住居6軒、土坑4基である。花積下層式期の堅穴住居、土坑ではハイガイを含むのに対し、黒浜式期の堅穴住居ではハマグリを主体とし、サルボウ・アサリを含むなど貝種組成に違いが見られる。また、貝ブロックを出土した遺構はその分布にまとまりがみられ、廃棄場所に多少の決まりがあった可能性も考えられよう。花積下層式期の住居群の北東端にあたるBB21グリッドに位置する土坑群、黒浜式期の住居群の北東端にあたるCC21グリッド北側の土坑群が該当する。

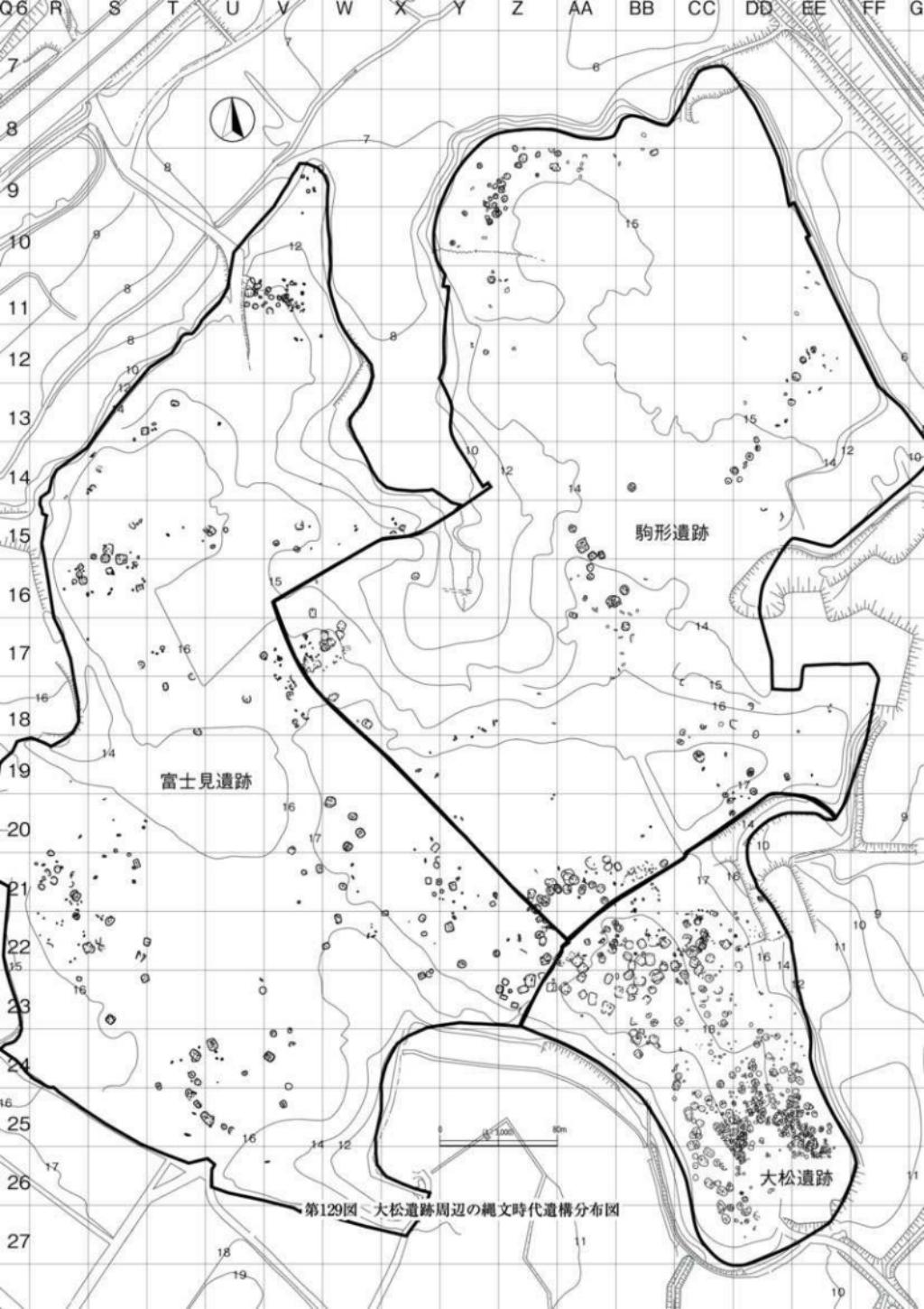
前期後葉の遺構は堅穴住居2軒、土坑3基が確認された。大松遺跡南部では堅穴住居4軒、土坑5基で、遺構外からの出土遺物もほとんどなかった。富士見遺跡・駒形遺跡も同様に稀薄な分布状況であった。

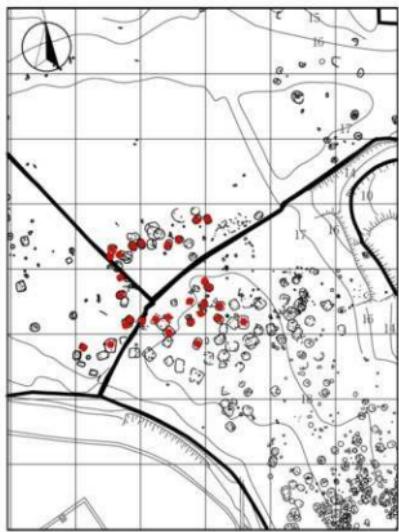
3軒確認された中期の堅穴住居は南東のCC22～DD22グリッドに位置し、10基の土坑群もその周辺に位置していた。いずれも中期中葉の中峠式～加曾利E式期に帰属する。この時期は大松遺跡南部においては集落の最盛期にあたり、環状集落を形成している。今回報告した分はそれらとは離れ、環状集落の外縁部に位置する一群であるといえる。

以上が大松遺跡の概要である。大松遺跡の東側の対岸にある小山台遺跡、富士見遺跡西側の谷を挟んだ台地上の矢船I遺跡、矢船II遺跡は現在整理中である。現状では、花積下層式期の遺構は、大松遺跡北部を含む富士見遺跡・駒形遺跡で確認されているのみである。一方、黒浜式期の集落は、もっとも谷奥部になる原畠遺跡で19軒が確認されているほか、常磐道関連の花前I遺跡で黒浜式期9軒、浮島式期2軒がすでに報告され、小山台遺跡北部で黒浜式期～諸磣・浮島式期、矢船I遺跡では黒浜～浮島・興津式期、矢船II遺跡でも前期の堅穴住居・土坑が確認されている。これらの遺跡の整理作業の進展によって、周辺の縄文時代前期の集落の動向がさらに明らかになっていくものと考えられる。

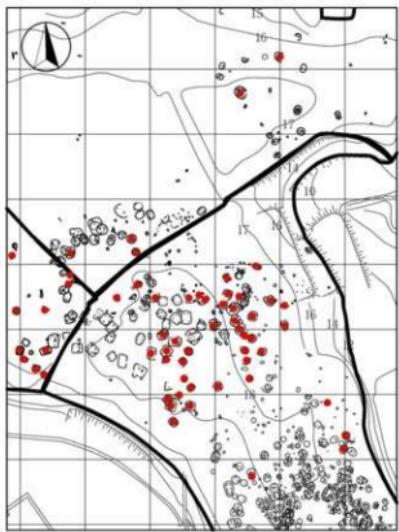
参考文献

- (財) 千葉県教育振興財団 2009『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編1』
(財) 千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3－柏市原畠遺跡－縄文時代以降編1』
(財) 千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4－柏市大松遺跡－縄文時代以降編1』
(公財) 千葉県教育振興財団 2013『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書5－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編2』
(公財) 千葉県教育振興財団 2014『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編1』
(公財) 千葉県教育振興財団 2015『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書7－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編2』

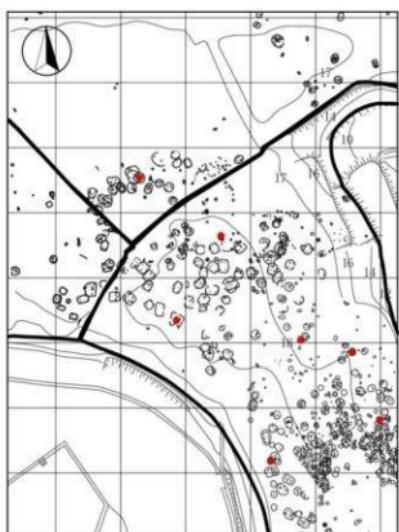




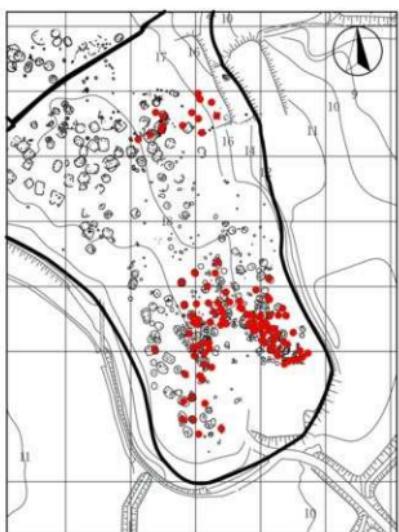
花積下層式期



黒浜式期



諸磯・浮島・舞津式期



阿玉台層・中峰・加曾利 E1 (古) 式期

第130図 大松遺跡時期別遺構分布図

第2節 繩文時代の石器と生産活動

1 石器群の様相

(1) 石器組成

縄文時代の石器は合計2,650点出土した。そのうち利器は大別22種、計939点を数える。

内訳は、有舌尖頭器1点、石錐（石錐未成品含む）267点、楔形石器224点、石匙6点、石錐（石錐未成品含む）12点、二次加工ある剥片23点、使用痕ある剥片3点、異形石器1点、打製石斧28点、磨製石斧24点、局部磨製石斧4点、砾器4点、磨石類190点、敲石26点、砥石5点、石皿60点、台石22点、石錐3点、スタンプ形石器2点、側面調整砾26点、及び二次加工ある砾4点のはか石製品が4点（玦状耳飾3点とその他1点）となっている。

ちなみに、本遺跡の石器組成は隣接の富士見遺跡の調査成果（A～E区）と、ほぼ同様である。

これらの利器のうち石錐、石錐、及び楔形石器等については、遺跡内で製作された痕跡をとどめるが、他の石器群、特に砾石器は搬入品である。製作地は、おそらく採取地もしくは近傍の河原であろう。砾石器のうち磨製石斧は破損後、しばしば再加工され、他の器種に転用されている。これに対して石皿には完形品は皆無であり、転用例もほとんど認められない。また、破損した石皿の器厚を考慮すれば使い減りによる破損の可能性は低い。したがって、使用による破損ではなく、意図的な打撃による破碎の可能性が高い。おそらく、その行為の背景には廃棄に伴う祭祀・儀礼があろう。

一般的に、関山式期には磨製石斧が欠落するが、本遺跡の主体である次期の黒浜式期には、磨製石斧（乳棒状磨製石斧）が登場する。このことに関連して神野恵は、伐採斧である縦斧の出現を黒浜期に求め、このころ竪穴住居の構築方法が、壁柱穴から4本の太い主柱で支える竪穴住居に一変することから、「縦斧の出現と、竪穴住居の構造ないし住居の構築に用いられる柱材の大きさは画期を同じくする」とした（神野2002）。

これに対して、大工原豊はこの乳棒状磨製石斧の出現は、「縄文海進のピークと一致しており、木材利用の拡大、具体的には丸木舟の製作と連動するものであろう」という（大工原2004）。

本遺跡の石器組成は、房総における前期前半（花積下層～黒浜期）の典型例といえ、漁撈具は非常に貧弱であり、主体は、あくまでも狩猟具（石錐）と植物の伐採・加工や工具として使用された磨製石斧・石皿・磨石類である。このことから本遺跡における生業は狩猟・採集を中心としていたことが窺われる。

以上の生業活動を念頭におけば、神野説により妥当性があるものと考える。

(2) 技術的特徴

剥片生産には両極打法が主体をなす。素材は小型で扁平なチャート砾である。両極打法（楔形石器と両極剥片の生産）に伴う損傷が、側面調整砾、磨石類、台石に観察され、ハンマーや台石に砾石器が、器種を問わず広く使用されていることがわかる。

どうやら石核が剥離の進行に伴い小型化した場合や、原材料が小型で、通常の方法では剥片の剥離が困難な場合に両極打法が用いられたようである。そして、剥離の途上で生じた両極剥片・削片と最終的に残された扁平な石核（楔形石器）の双方が石錐等の剥片石器の素材として有効利用されている。

このような小型扁平な在地産のチャート砾から素材剥片を生産する技術は、後期旧石器時代前半期（「遠山技法」）からみられ、良好な石材に乏しい下総の伝統的な技術といえる。

一方、二次加工（調整）技術に関する再加工率の高さが指摘される。すなわち限られた資源を有効活

用するために、たとえ破損しても再加工や転用を繰り返し執拗に使い続けた当時の人々の強い思い（節約志向）が伝わるのである。なお、礫石器は基本的に被熱し、表面が赤色に変色している例が多く、特に砥石類に顕著である。今のところその理由は定かではないが、ひとつの可能性としては焼成により平滑な面をあえて劣化させ砂粒を浮き立たせることによって研磨効果を高めたことが考えられる（千葉1987）。

（3）石器石材

石鎚等の剥片石器はおしなべてチャートを主体としているが、礫石器は個性的であり、打製石斧にはホルンフェルス、磨製石斧には緑色岩、磨石類・石皿には安山岩、側面調整盤には砂岩がそれぞれ多用されている。このことはそれぞれの機能に応じた石材の使い分けがあったことを物語っている。

これらの石器石材の産地は緑色岩・粗粒玄武岩・黒色頁岩が埼玉・群馬方面、チャート・黒雲母片岩・斑鰐岩・花崗岩・メノウ・トロトロ石・石英斑岩・流紋岩は栃木・茨城方面、黒曜石は長野方面（信州系）と東京都神津島、チャートを主体とした小型扁平礫は近傍の礫層から採取されたものと推定される。産地は基本的に北関東方面を中心とした関東一円であるが、磨製石斧に使われている透閃石岩は糸魚川方面、硬質頁岩は東北地方と推定される。

ちなみに旧石器時代の石器石材は、東北、中部・東海などから搬入され、比較的広範囲であるが、縄文時代は現地調達が基本であり、石材産地はほぼ関東一円に限られる。

さて遺跡内で製作された石器は石鎚をはじめとした剥片石器であり、未成品もみとめられる。これに対して磨製石斧・打製石斧・石皿・石棒などの礫石器は、完成品として遺跡内に搬入されているが、おそらく、各地の専業集団により集中的に生産され、当地へ生活財として供給されたのであろう。また、破損後は再加工され、中には他の器種に転用されているものもある。特に磨製石斧や石皿については徹底的に使い尽くされており、下総という石材消費地の特性がよくあらわれている。

なお軽石については、伊豆新島産のものと群馬県赤城山及び榛名山のものがあるが、新井重三氏によれば、後者は純度が低く、本遺跡で使用されているような白色で純度が高く比重の小さい軽石は伊豆新島産であるという（新井1983）。新井の言に従えば、これらの軽石は新島から海流に乗って最寄りの海岸に漂着したものと推定される。

2 生産活動

本遺跡の石器組成は、第17表に示したとおり、主体は、狩猟具の石鎚と植物の伐採・加工具の磨製石斧・石皿・磨石類である。これに対して打製石斧は少量で、漁撈具は非常に貧弱である。このことから本遺跡における生業は狩猟・採集を中心としていたことが窺われる。

縄文時代石器研究のスペシャリストの小林康男によれば、当該期は縄文海進による地域間の違いが際立っており、太平洋岸の那珂川・利根川下流域や東京湾西岸では釣針や石錘等の漁撈具や礫器の出土が顕著であるのに対して、本遺跡の位置する東京湾東岸や奥東京湾では、漁撈具はほとんどなく、石鎚・石匙・石皿・凹石・磨製石斧などの狩猟採集関連の組成を示しているという。また、この時期の当該地域を特徴づけるものとして磨製石斧の一般化と乳棒状磨製石斧の定形化が指摘されている（小林1983）。

以上の小林の見解に照らし合わせると、本遺跡の石器組成は下総における前期前半（花積下層～黒浜期）の典型例といえる。

ちなみに、下総における中期後半の典型例である飯積原山遺跡では、第18表に示したとおり定角式磨製石斧・分銅形打製石斧・石棒がある一方で、本遺跡（前期前半）にみられた片刃打製石斧・乳棒状磨製石

斧、側面調整器、石匙及び軽石石製品が欠落ないしは減少し、本遺跡とは好対照である（木原ほか2014・2015）。

第17表 大松遺跡縄文前期石器の機能・用途別組成

(小林1983を改変)

使用目的等	生産用具			工具	非実用的石器
	狩猟具	植物採集・加工具	漁撈具		
直接生産用具	石鏃	打製石斧 穢器の一部	石鍬 浮標（浮子） (軽石石製品)	石鍬 砥石 磨石類の一部 敲石の一部 台石の一部	石棒 祭祀・儀礼
	間接生産用具	石匙 磨片石器の一部	石匙 磨石類の一部 敲石の一部 台石の一部	石匙 乳棒状磨製石斧 側面調整器 穢器の一部 磨片石器の一部	块状耳飾 裝身具

*ゴチャク体は比較的数量が多いもの。

第18表 飯積原山遺跡縄文中期石器の機能・用途別組成

(小林1983を改変)

使用目的等	生産用具			工具	非実用的石器
	狩猟具	植物採集・加工具	漁撈具		
直接生産用具	石鏃	分銅形打製石斧	浮標（浮子）	石鏃 砥石 磨石類の一部 敲石の一部 台石の一部 定角式磨製石斧	石棒 祭祀・儀礼
	間接生産用具	磨片石器の一部	石匙 磨石類の一部 敲石の一部 台石の一部	磨片石器の一部	块状耳飾り 鏡玉製大珠 琥珀玉 裝身具

*ゴチャク体は比較的数量が多いもの。

引用参考文献

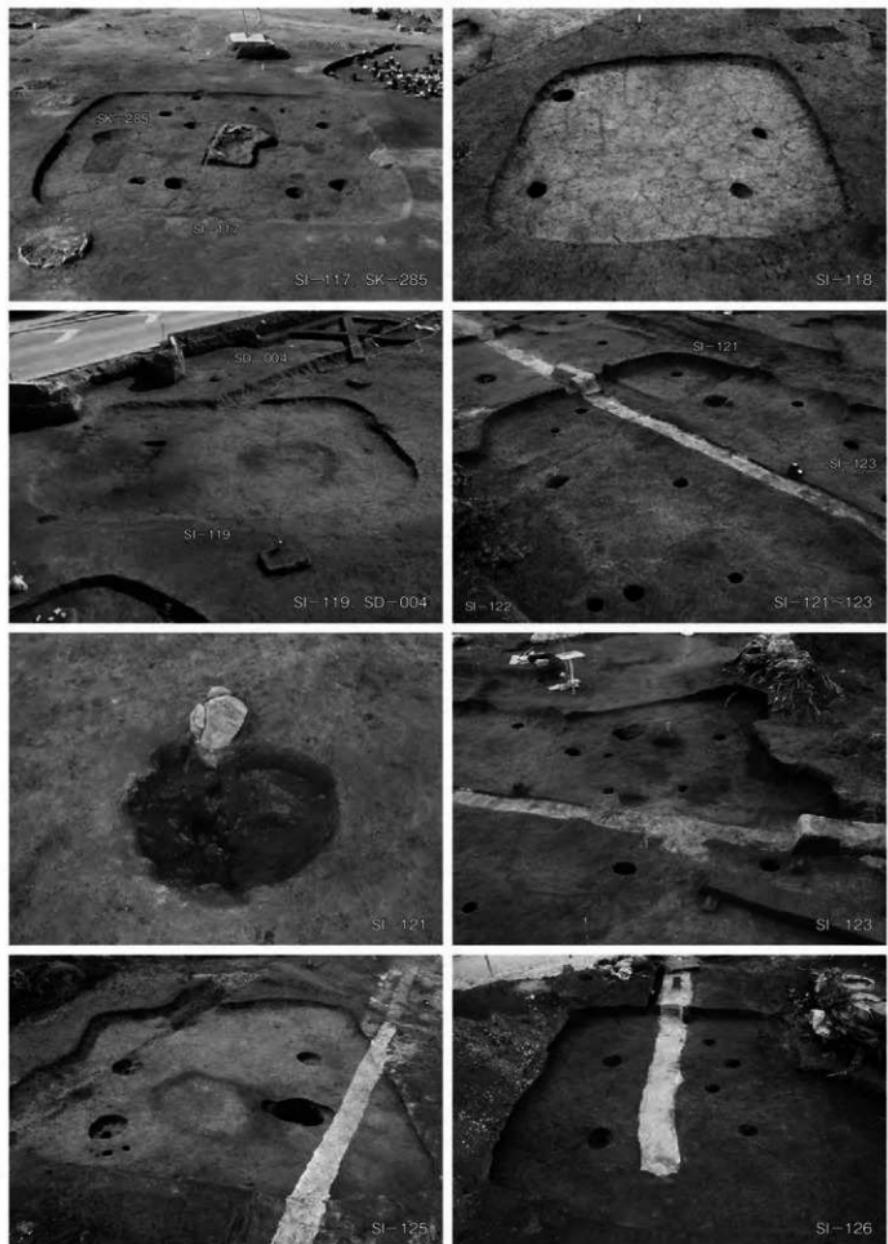
- 大野康男・倉内郁子・橋本勝雄・山口典子 2014 「柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書6－柏市富士見遺跡－縄文時代以降編1」 公益財団法人 千葉県教育振興財團
- 岡村道雄 1983 「ピエスエスキュー、楔形石器」「縄文化の研究7 道具と技術」 pp.106-116 雄山閣出版株式会社
- 小田静夫 1976 「縄文中期の打製石斧」「季刊どるめん」10号 pp.44-57 JICC出版局
- 小田静夫 1983 「スタンプ形石器」「縄文化の研究7 道具と技術」 pp.149-163 雄山閣出版株式会社
- 神野 恵 2002 「伐採斧の出現とその背景－先史社会の用途論－」「文化財論叢」Ⅲ pp.19-30 奈良文化財研究所
- 久保田健太郎 2012 「異形石器研究の一視点」「季刊考古学」第119号 pp.41-54 雄山閣出版株式会社
- 小糸一夫 1983 「縄文時代早期後半における石器群の様相－南関東地方を中心に」「東京都埋蔵文化財センター研究論集 II」 pp.1-23 財団法人 東京都埋蔵文化財センター
- 小林康男 1978 「縄文時代の磨石」「中部高地の考古学」 pp.136-158
- 小林康男 1983 「組成論」「縄文化の研究7 道具と技術」 pp.16-27 雄山閣出版株式会社
- 齋藤 啓 2008 「白井十二遺跡」 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・津島秀章 「4. 白井十二遺跡出土の黒曜石製石器群について」 pp.314-319
- ・齋藤 啓 「5. 白井十二遺跡出土の縄文時代草創期土器及び黒曜石製石器について」 pp.320-324
- 柴田 徹 2004 a 「石器に使われている石材について」「下水道跡第1地点発掘調査報告書」 pp.267-276 松戸市遺跡調査会
- 柴田 徹 2004 b 「(7) 石器の石材と産地」「千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）」 pp.412-423 財団法人 千葉県史料研究財團編 千葉県
- 柴田 徹 2008 「剥片石器に利用可能な石材の比重値について－関東地方を中心として－」「石器に学ぶ」第10号 pp.149-162 石器に学ぶ会
- 鈴木次郎ほか 1977 「尾崎遺跡 酒匂川総合開発計画に伴う調査」 神奈川県教育委員会
- 鈴木徳雄 1997 「縄紋前期の石製研磨具－側面に擦痕のある扁平礫を巡って－」「群馬考古学手帳」7 pp.27-34 群馬土器観会
- 鈴木道之助 1983 「石器」「縄文化の研究7 道具と技術」 pp.88-95 雄山閣出版株式会社
- 芹澤清八 2012 「分銅形打製石斧の出現と拡大」「季刊考古学」第119号 pp.55-60 雄山閣出版株式会社
- 大工原 豊 2004 「(6) 生活用の石器」「千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）」 pp.398-411 財団法人 千葉県史料研究財團編 千葉県
- 千葉基次 1987 「No.116遺跡」「多摩ニュータウン遺跡 昭和60年（第3分冊）」 財団法人 東京都埋蔵文化財センター
- 鳥浜貝塚研究グループ編 1979 「鳥浜貝塚－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1－」 福井県教育委員会
- 中村由克 2013 「後期旧石器時代前半期における石斧石材の特質と意義」「考古学ジャーナル」No.640 pp.27-31 ニューサイエンス社
- 西井龍儀 1973 「富山県福光町鉄砲谷・向山島・是ヶ谷遺跡発掘調査報告書」 富山県教育委員会
- 宮 重行・鳴田浩司・麻生正信・永塚俊司 2001 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XV 天神峰最上遺跡（空港No.64）遺跡」 財団法人 千葉県文化財センター
- 宮井英一ほか 1985 「大林I・II 宮林 下南原」 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 矢島國雄・前山精明 1983 「石器」「縄文化の研究7 道具と技術」 pp.117-128 雄山閣出版株式会社
- 渡辺彦彦 2002 「北関東における分銅形打製石斧の出現と展開」「文化財論叢」Ⅲ pp.3-17 奈良文化財研究所
- 木原高弘・西川博孝・橋本勝雄 2014 「酒々井町飯積原山遺跡2 縄文時代編－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書3－」 公益財団法人 千葉県教育振興財團
- 木原高弘・沼澤 豊・西川博孝・橋本勝雄 2015 「酒々井町飯積原山遺跡2・飯積原山遺跡3・柳沢牧墨木戸境野馬土手－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書4－」 公益財団法人 千葉県教育振興財團

写 真 図 版



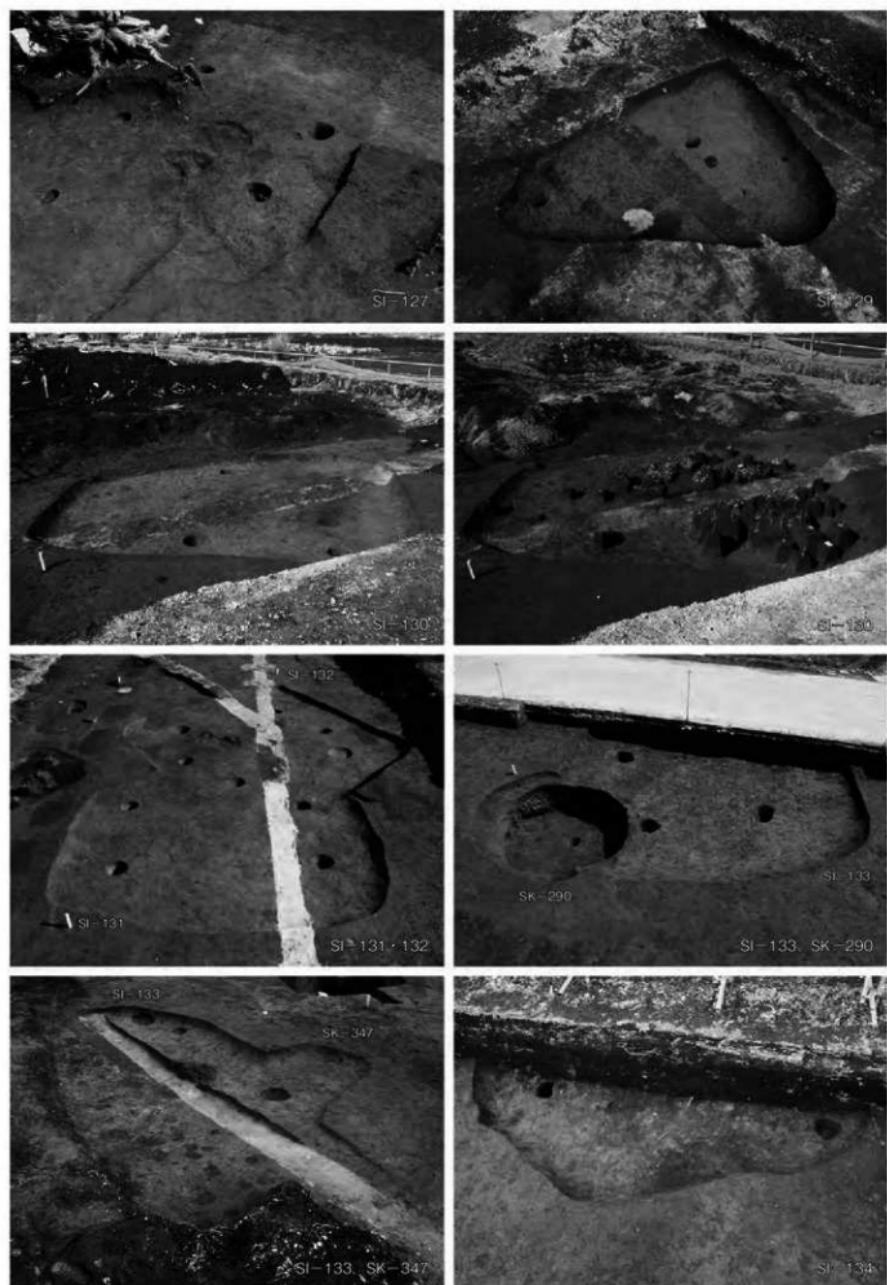


縄文時代竪穴住居（1）

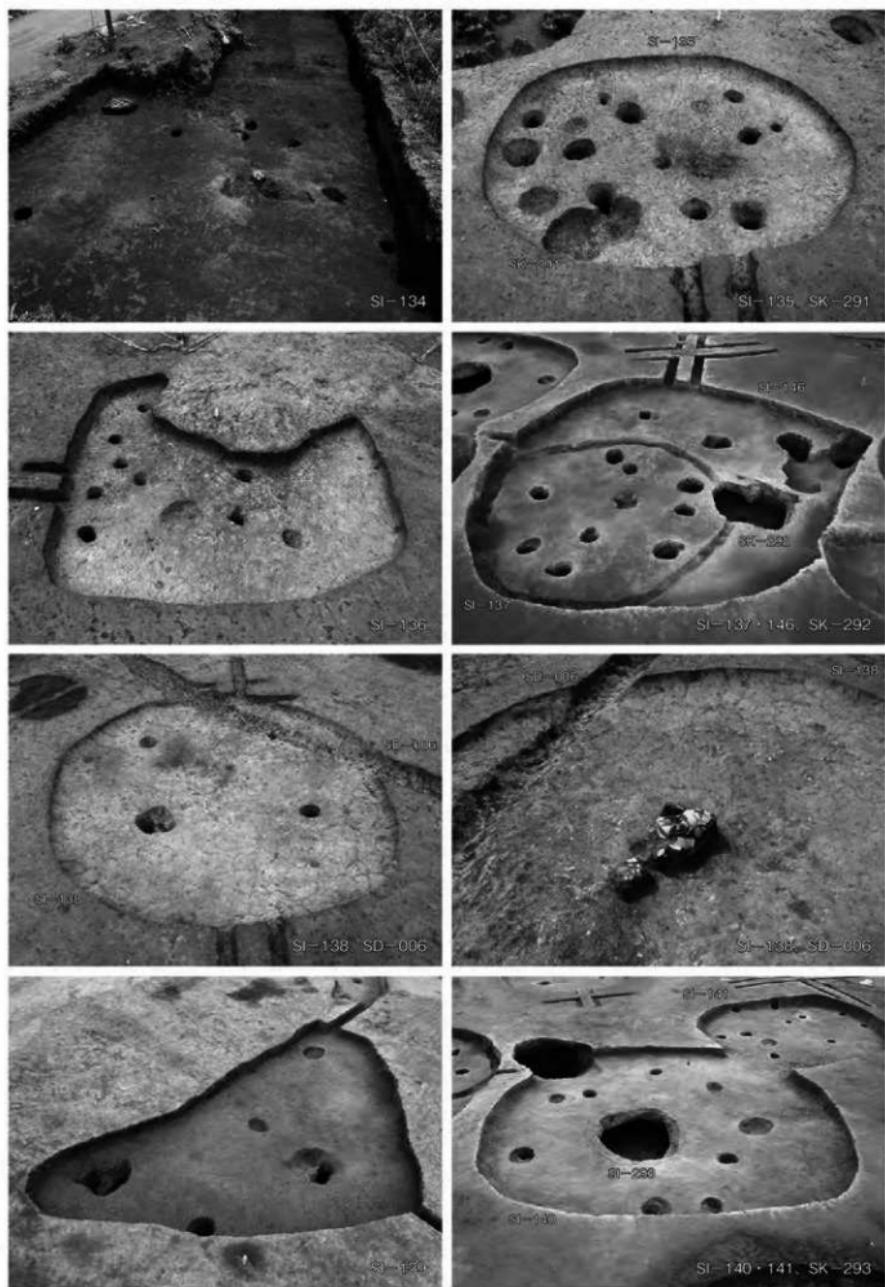


縄文時代竪穴住居（2）

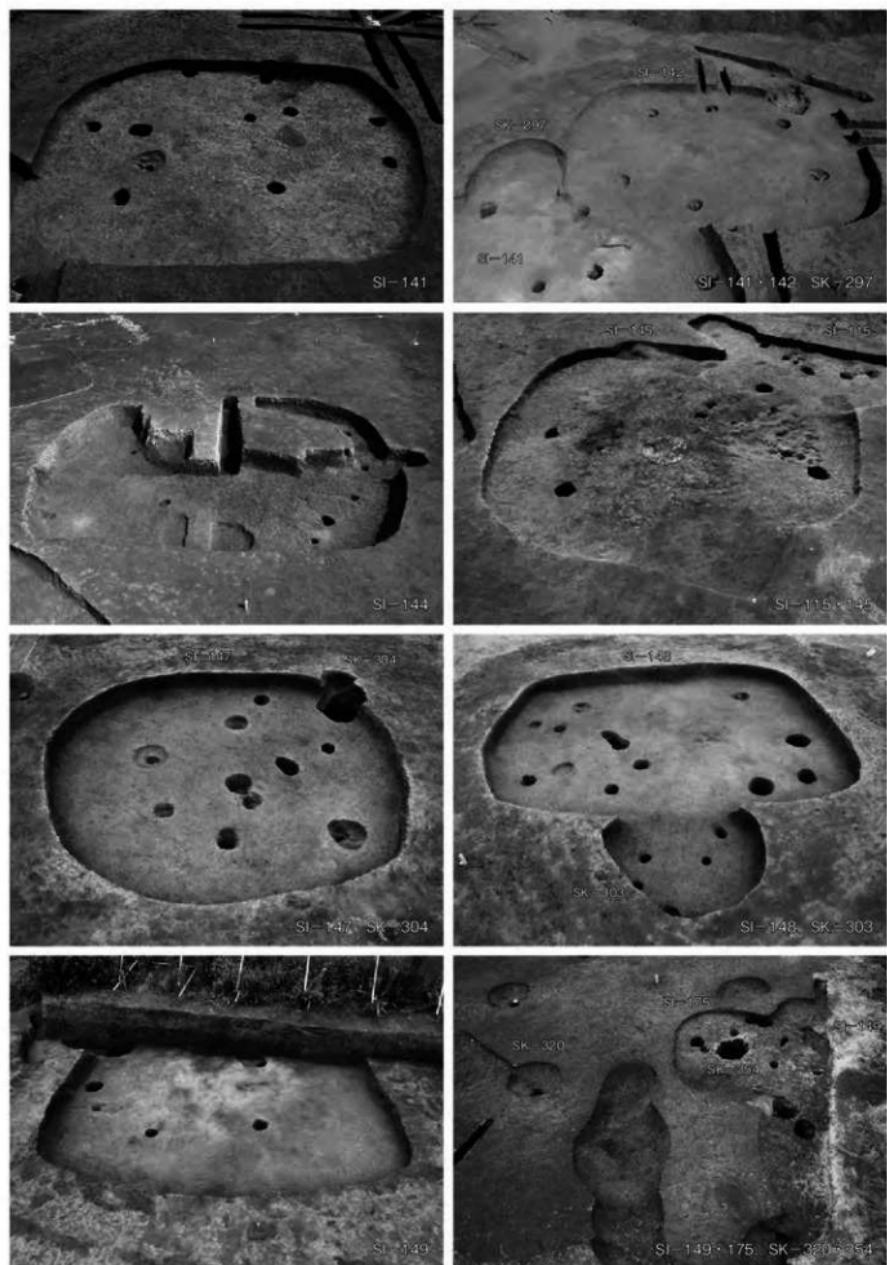
図版4



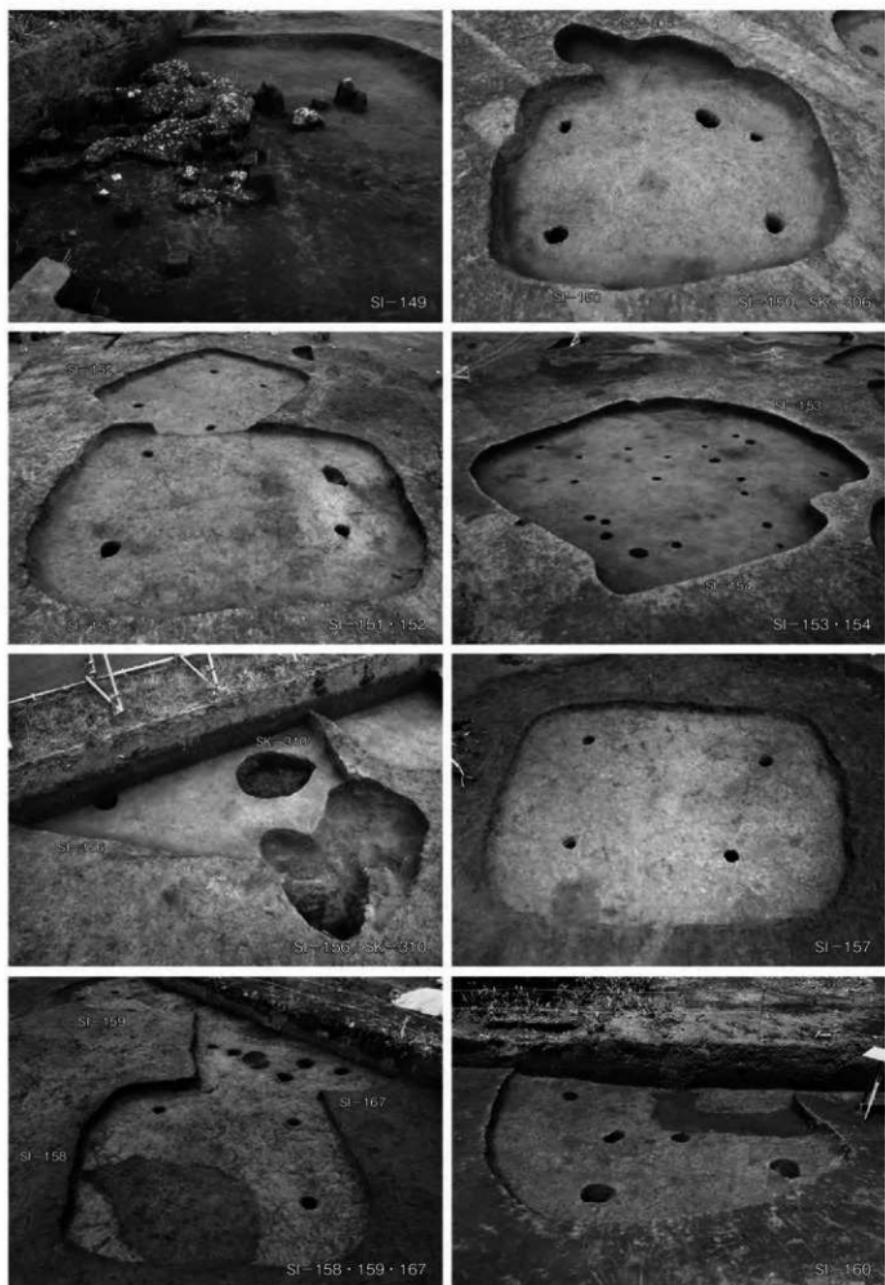
縄文時代堅穴住居（3）



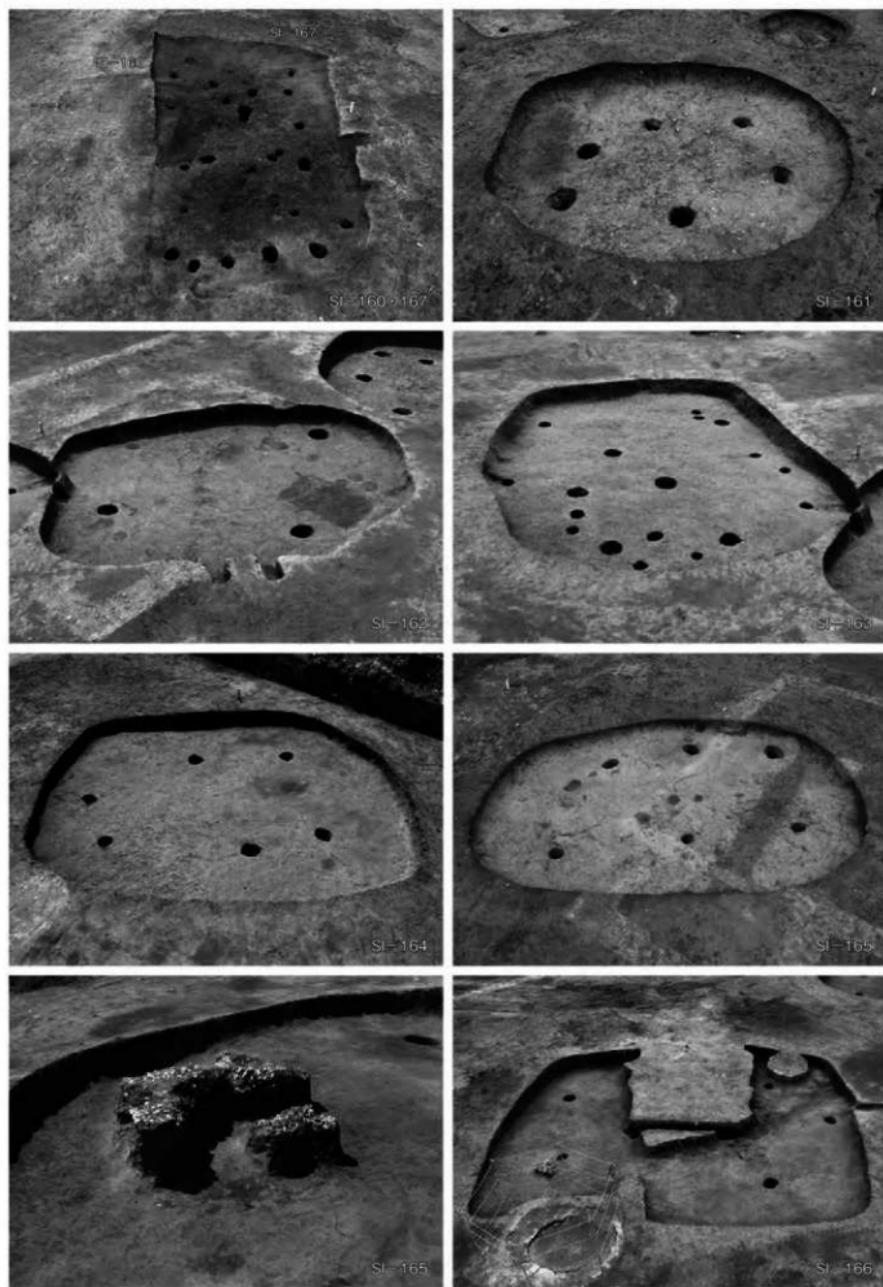
縄文時代竪穴住居（4）



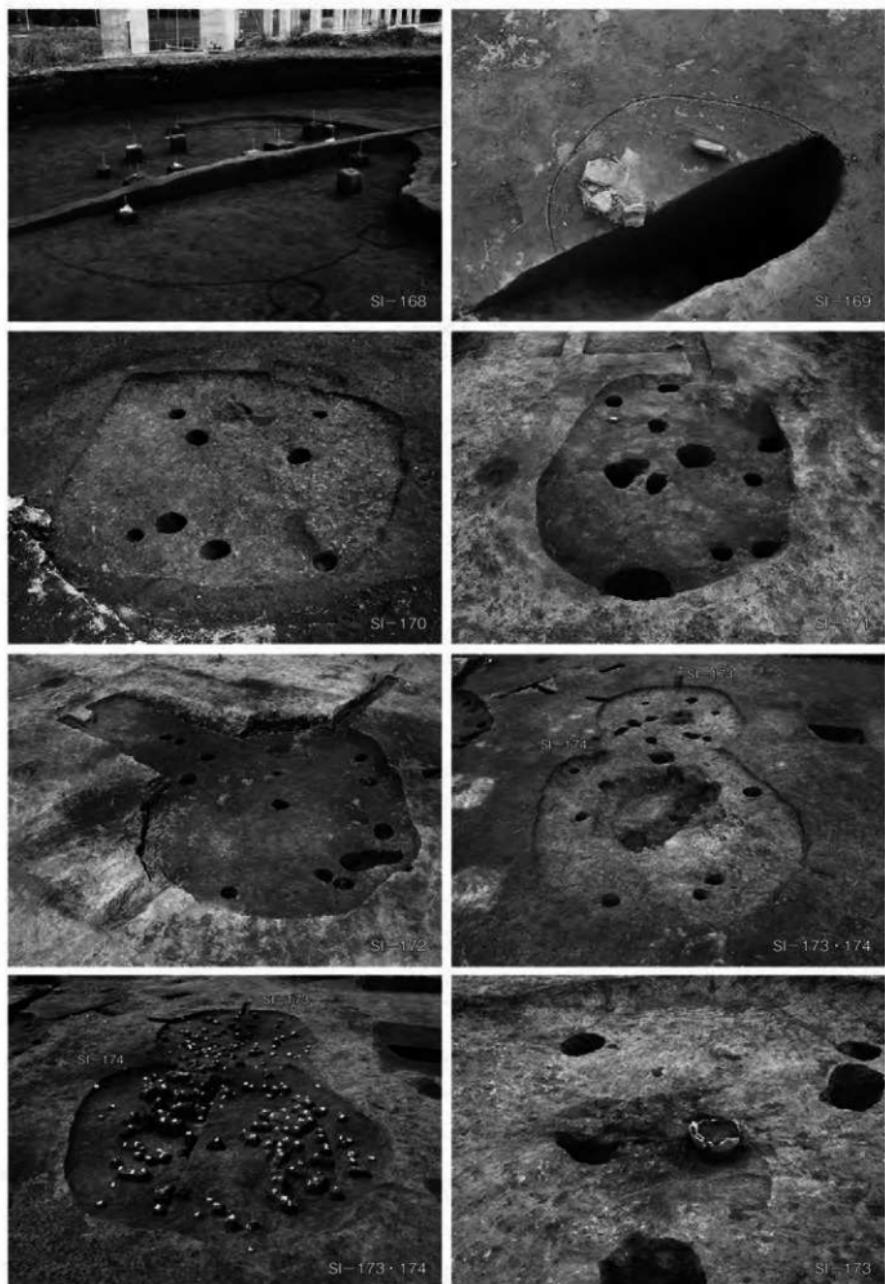
縄文時代竪穴住居（5）



縄文時代竪穴住居（6）

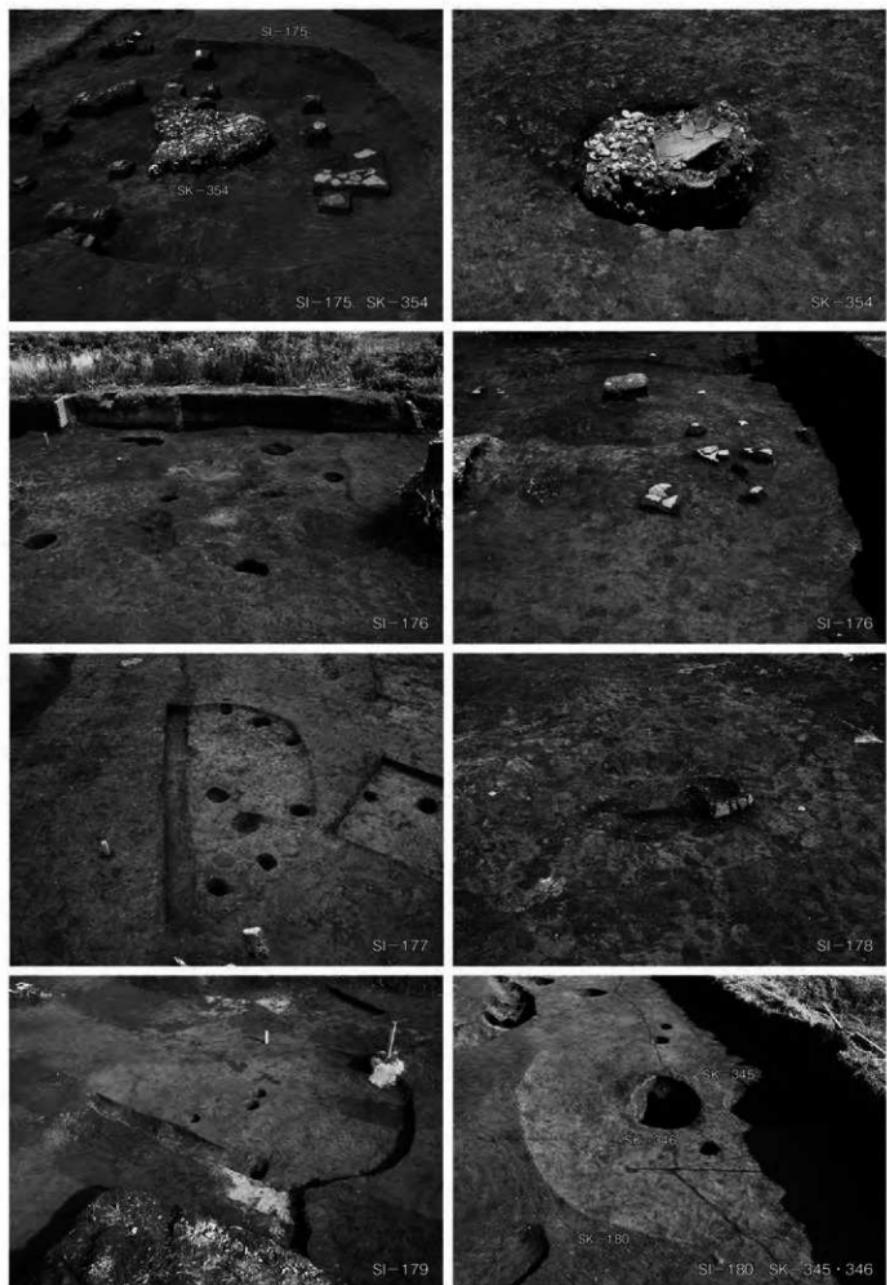


縄文時代竪穴住居（7）

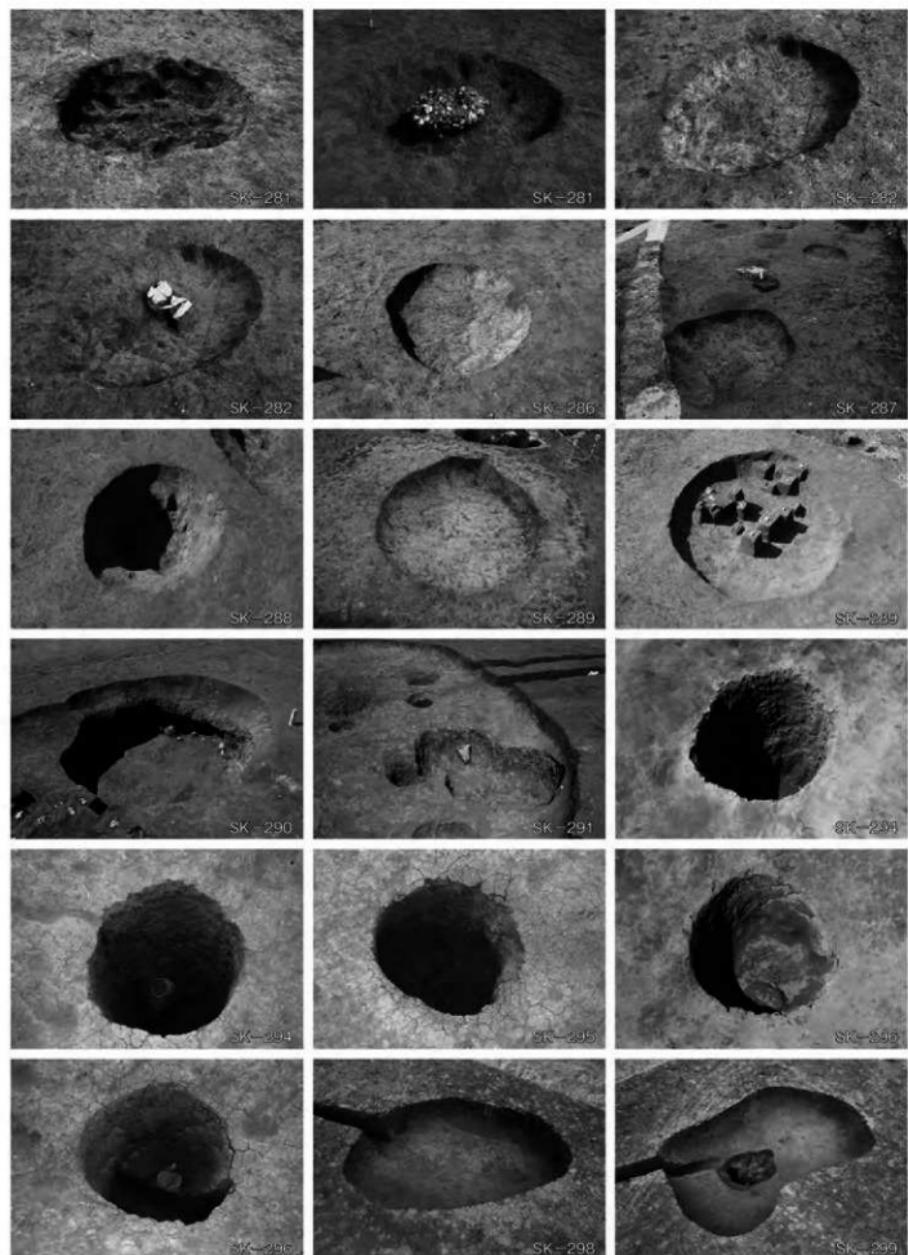


縄文時代竪穴住居（8）

図版10

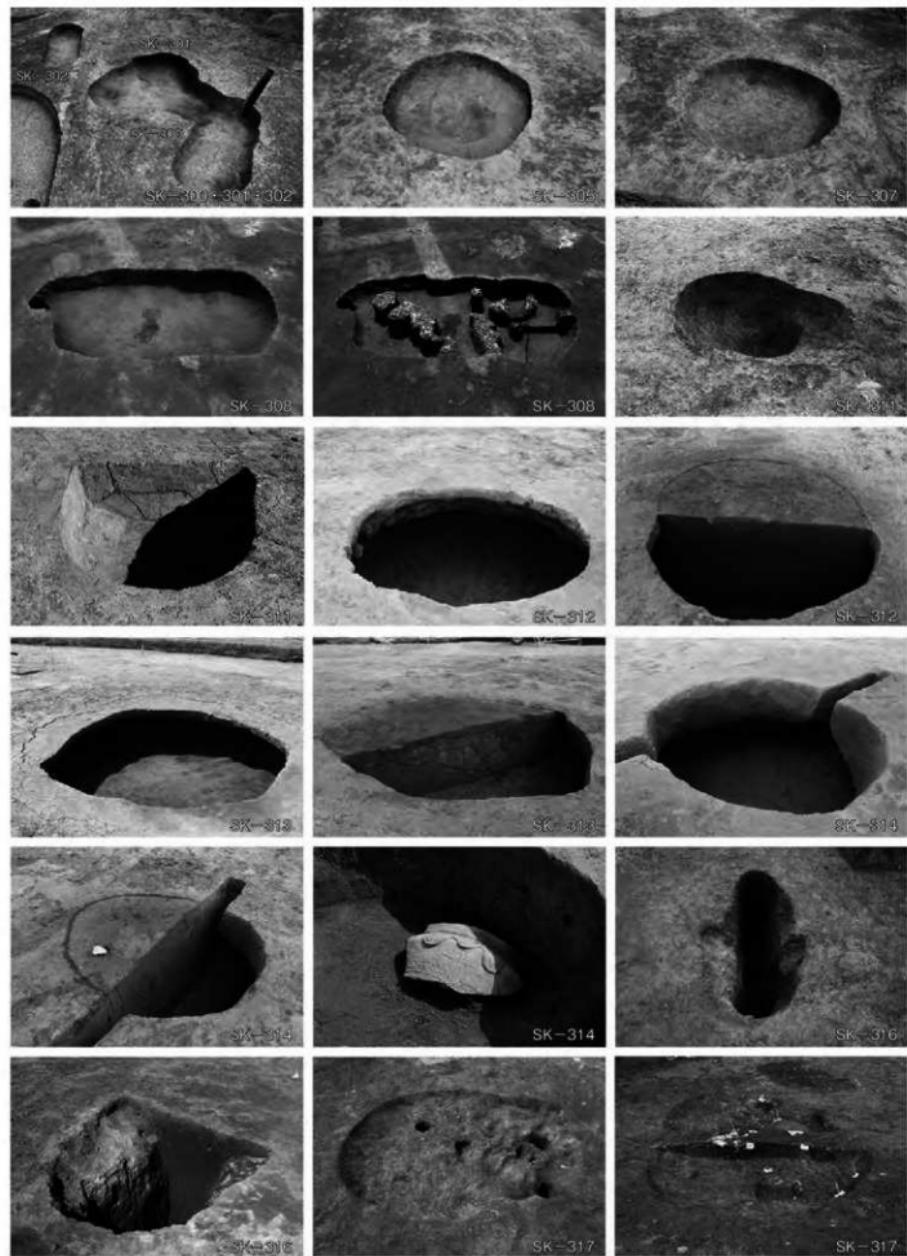


縄文時代竪穴住居（9）

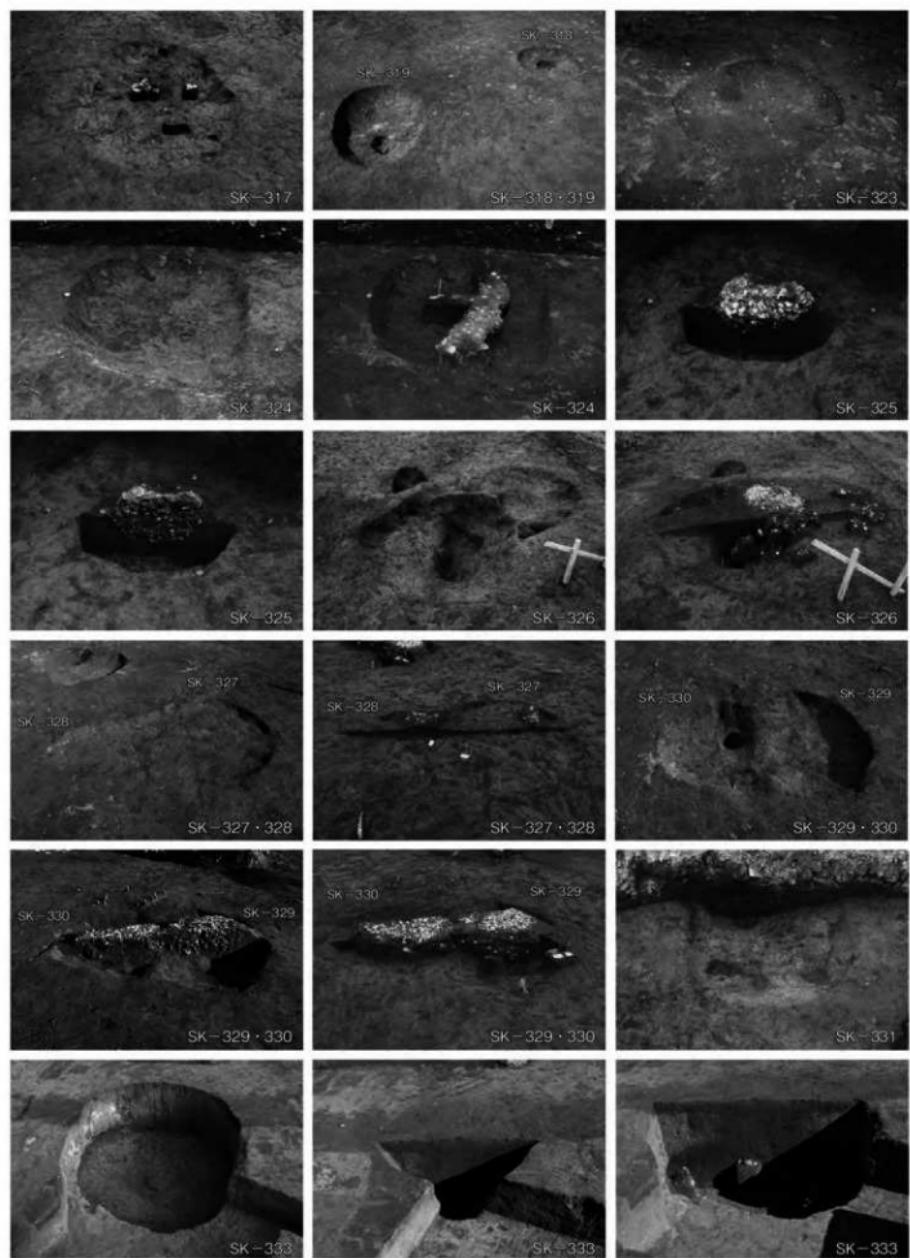


縄文時代土坑（1）

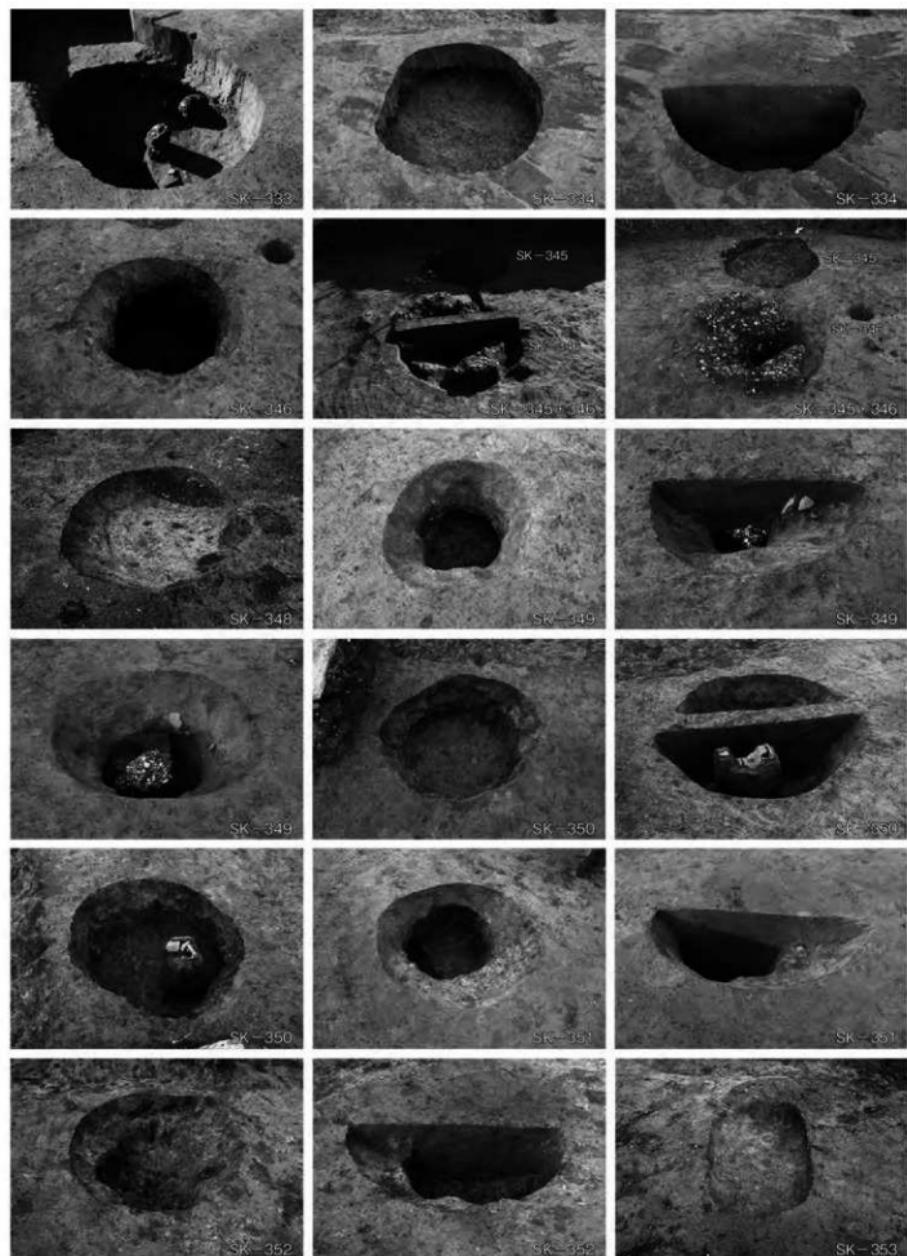
図版12



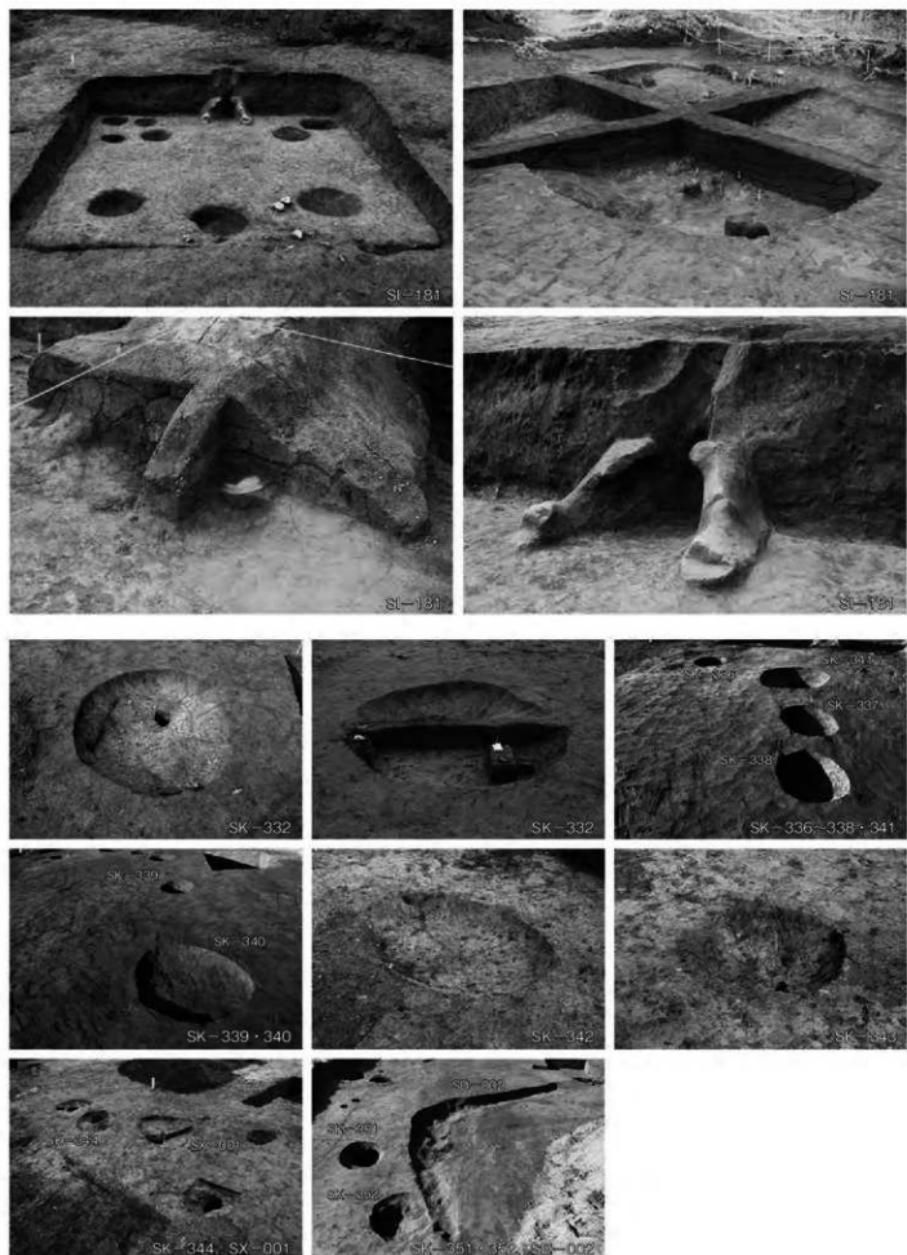
縄文時代土坑（2）



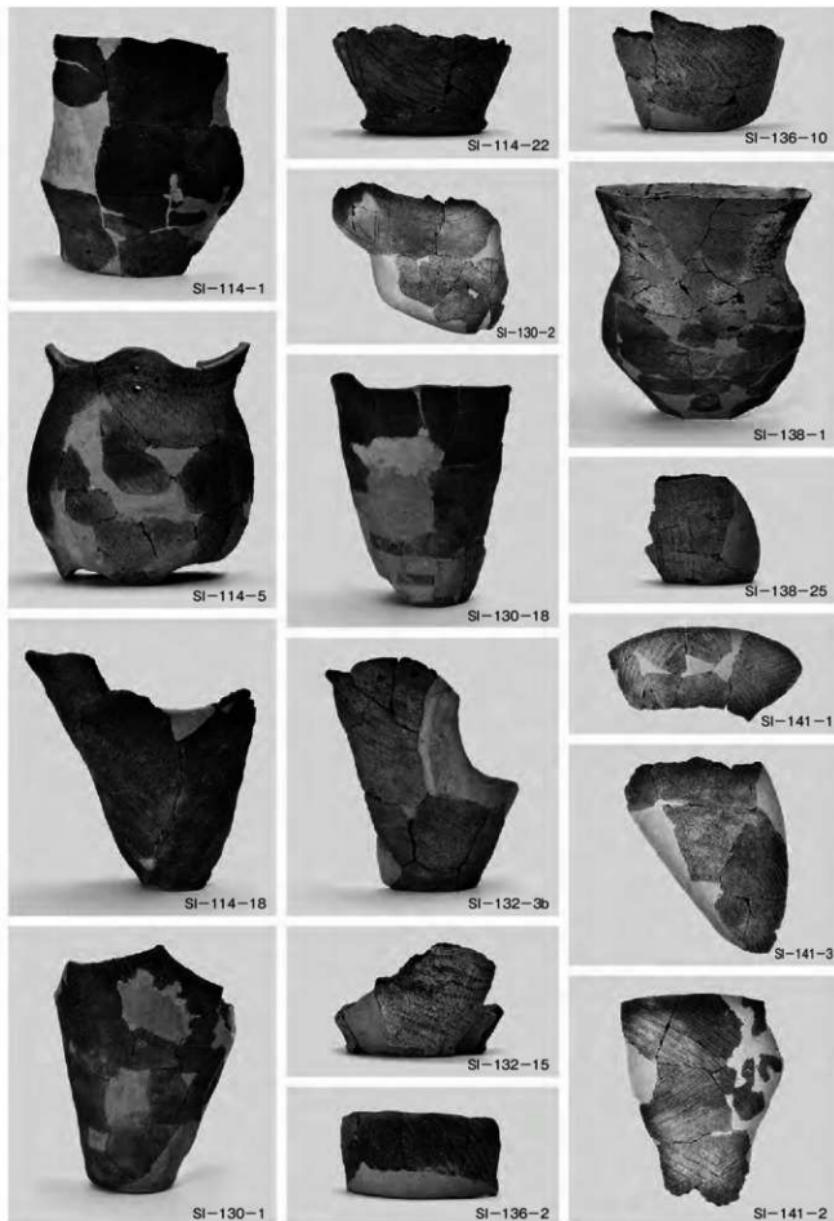
縄文時代土坑（3）



縄文時代土坑（4）



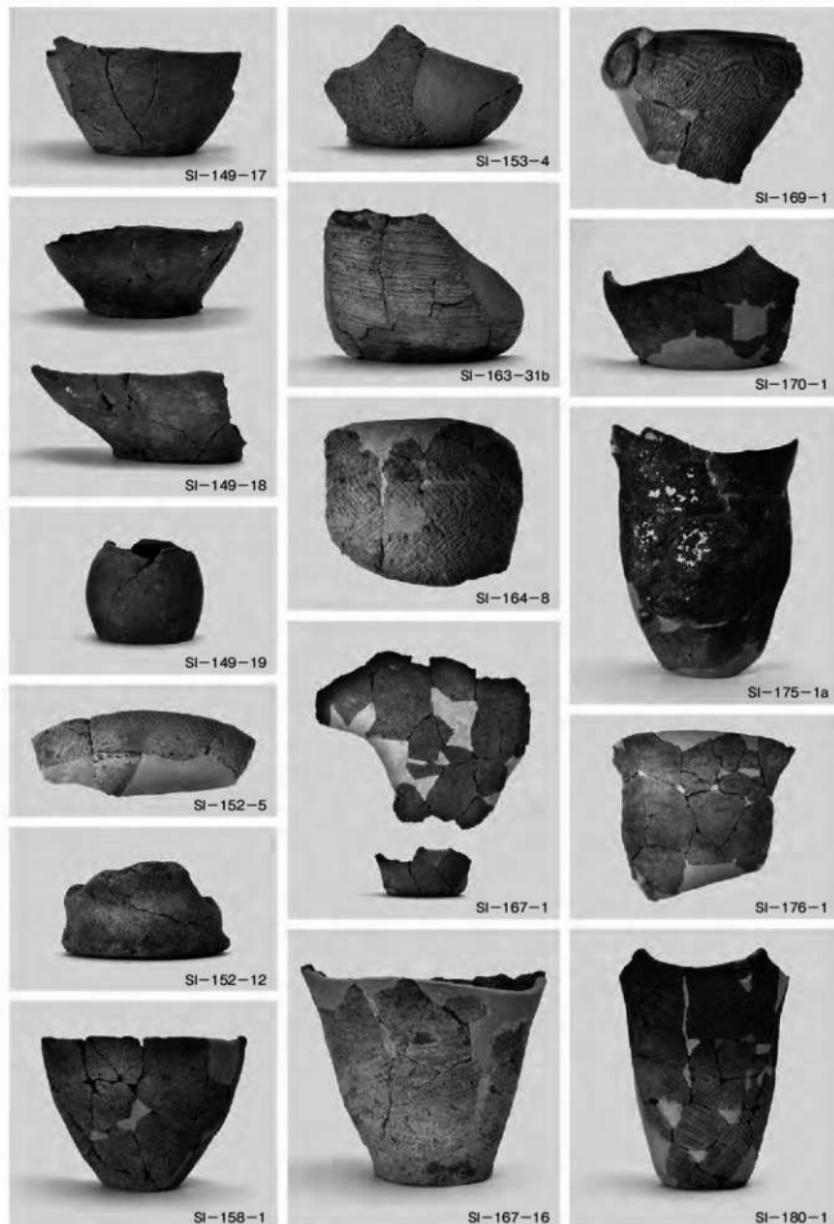
古墳時代～中・近世遺構



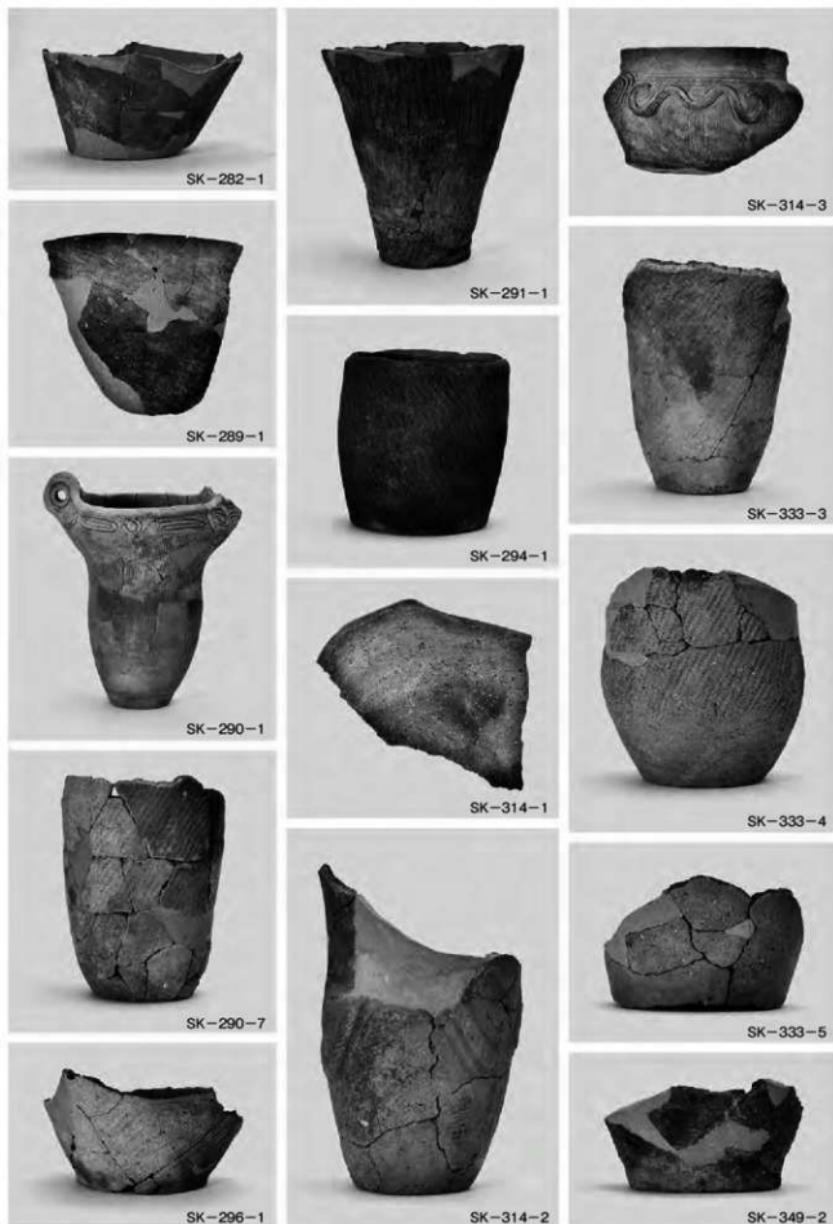
縄文土器（1）



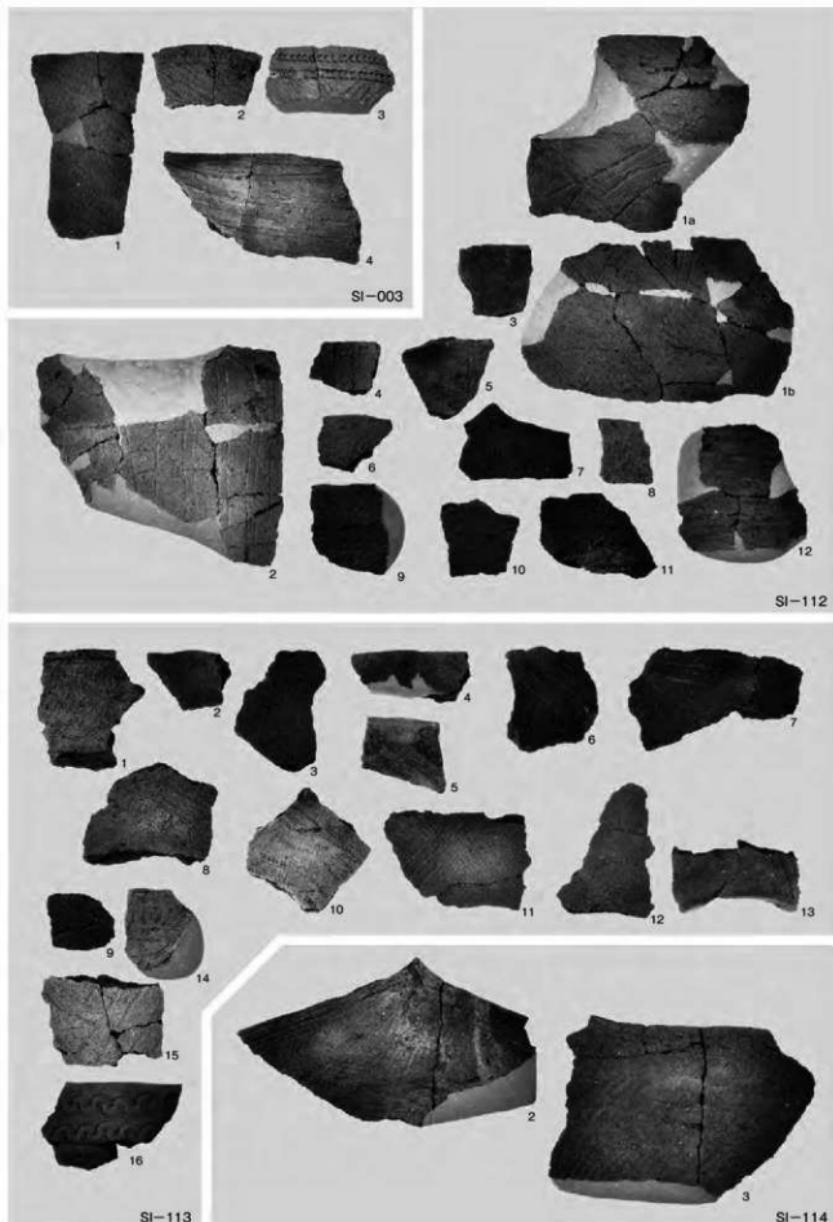
縄文土器（2）



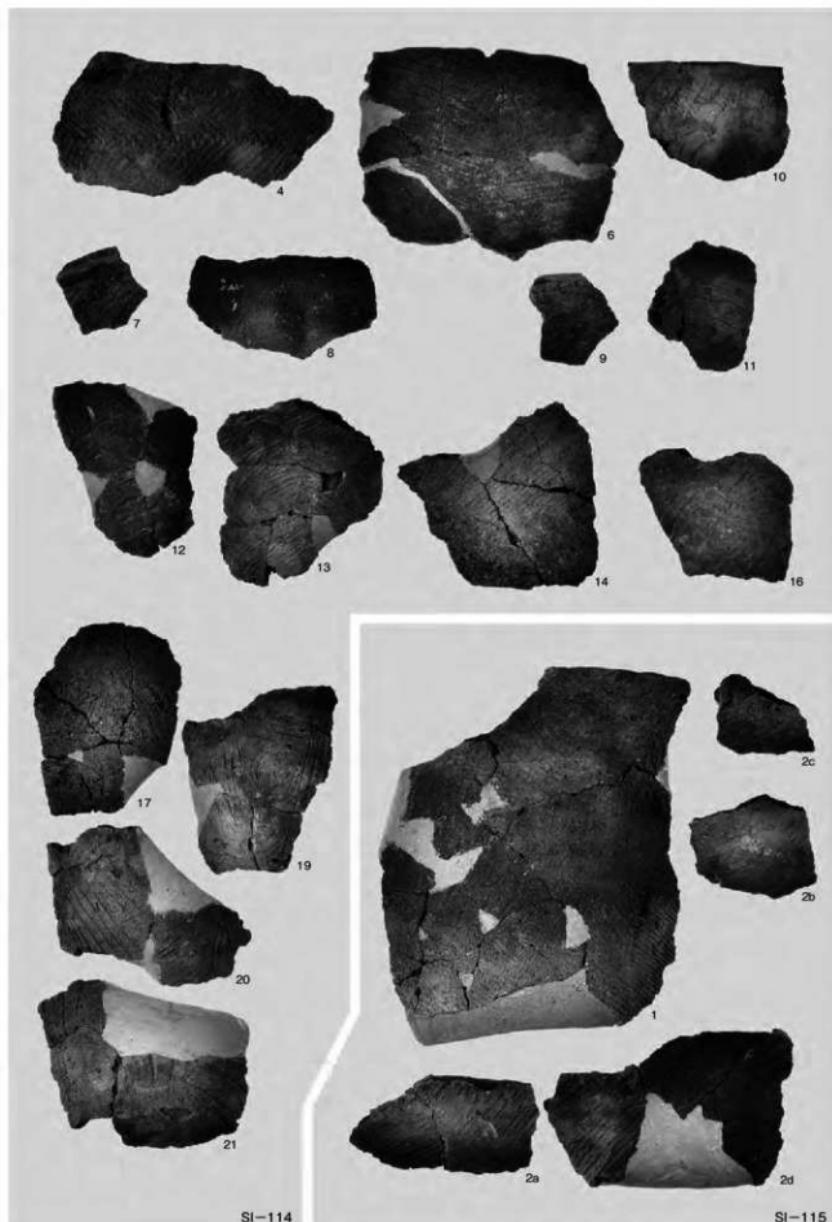
縄文土器（3）

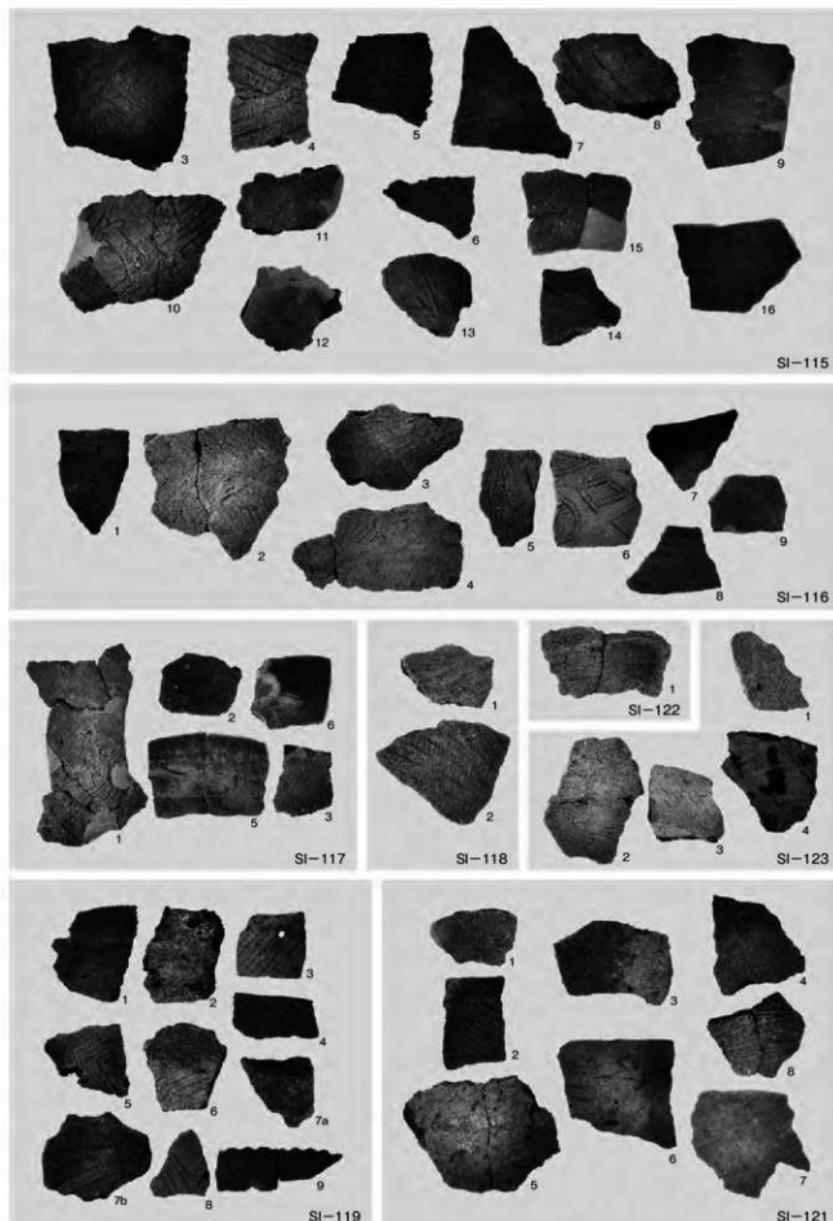


縄文土器（4）

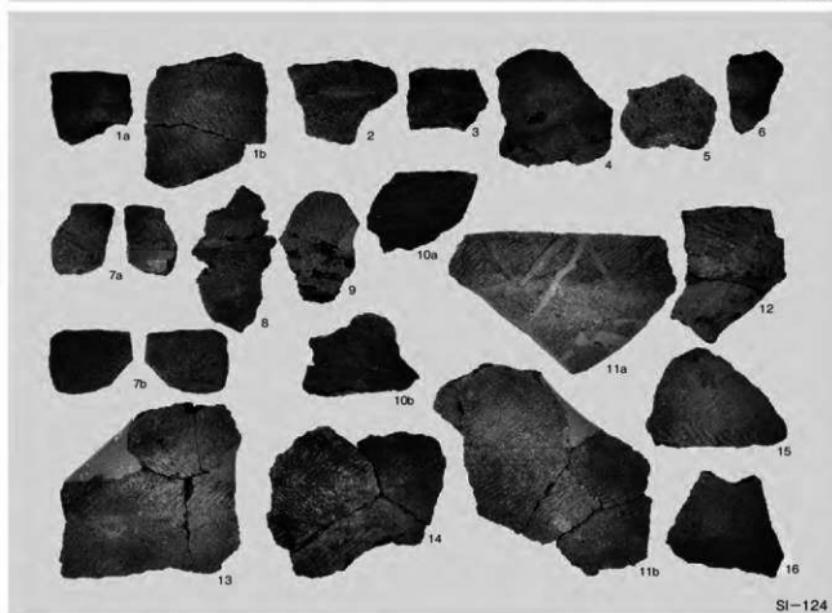
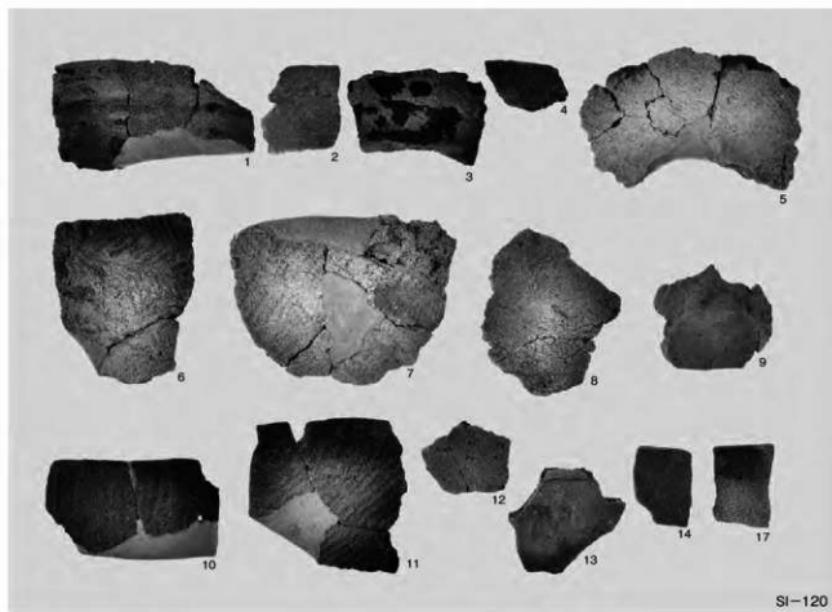


縄文土器（5）

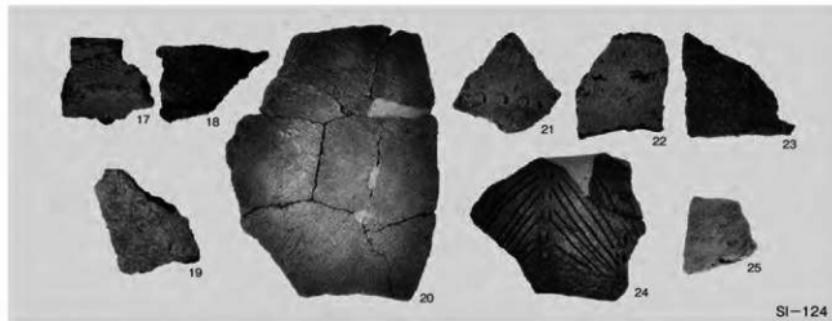




绳文土器 (7)



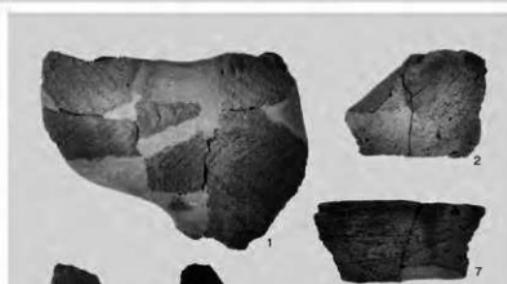
縄文土器（8）



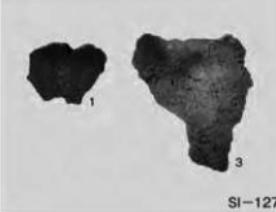
SI-124



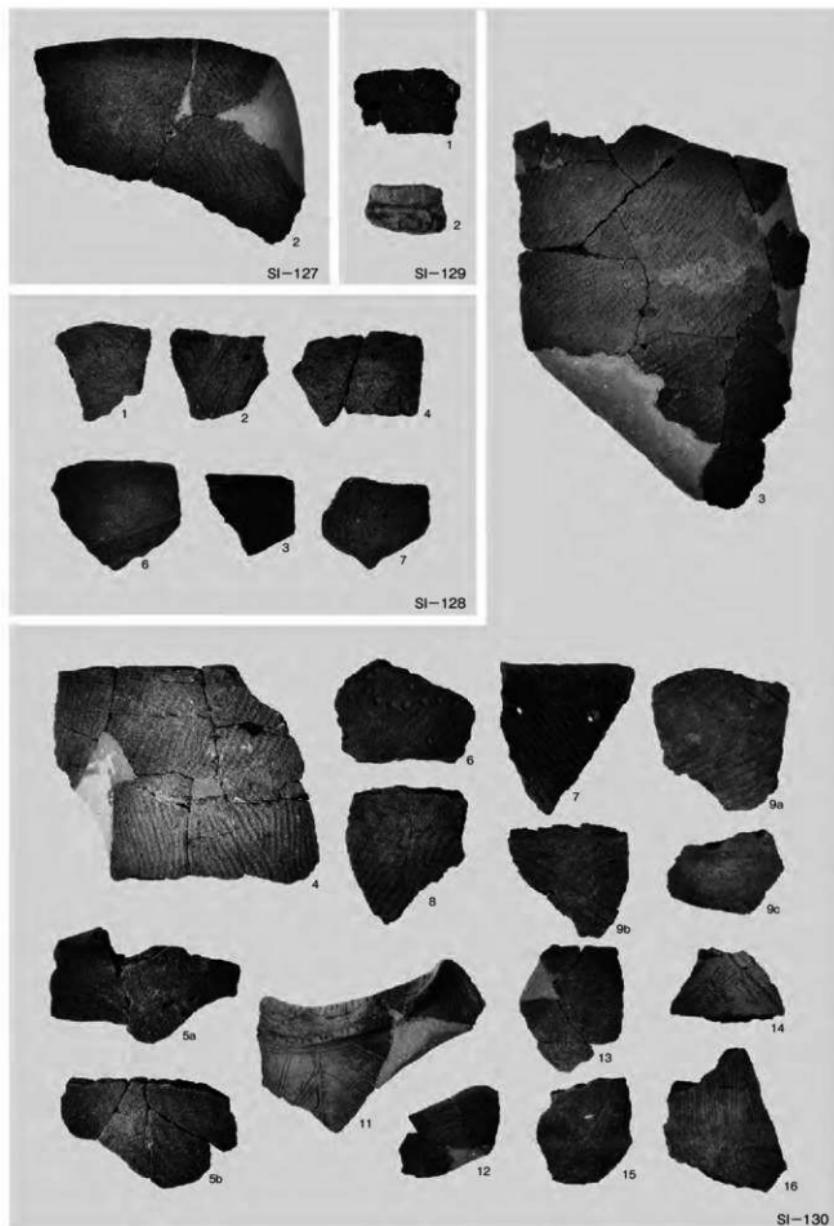
SI-125



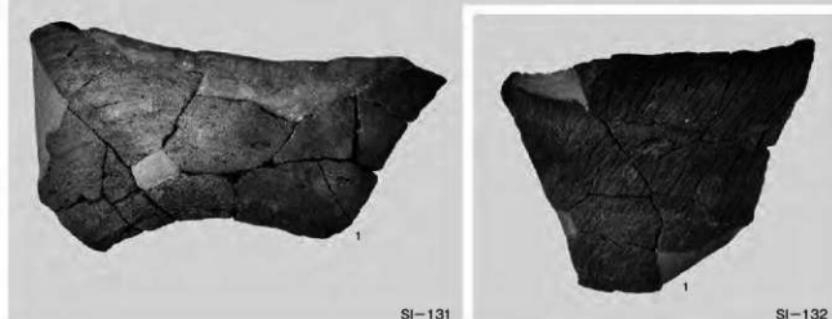
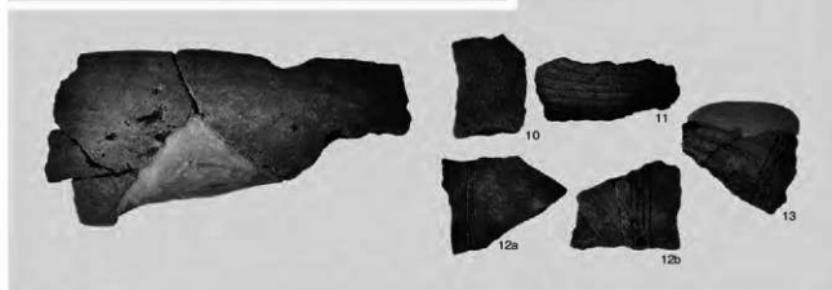
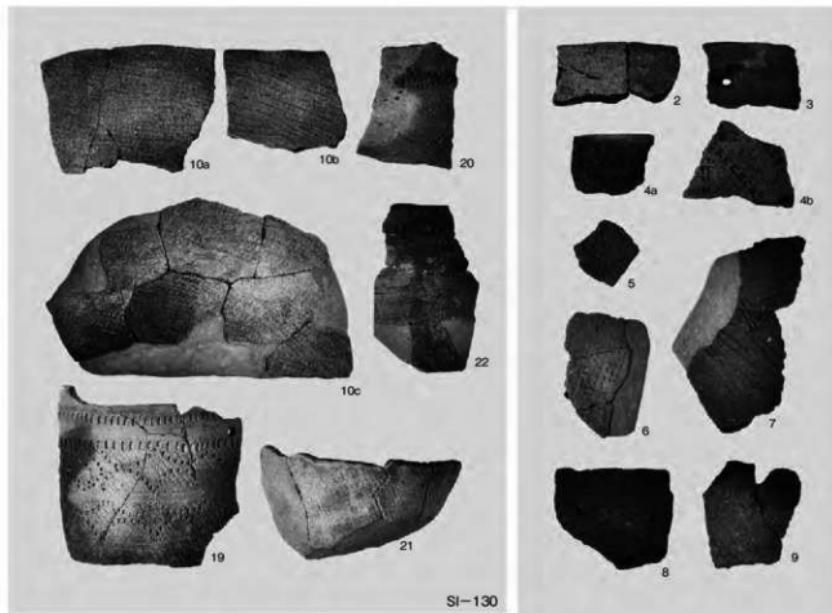
SI-126



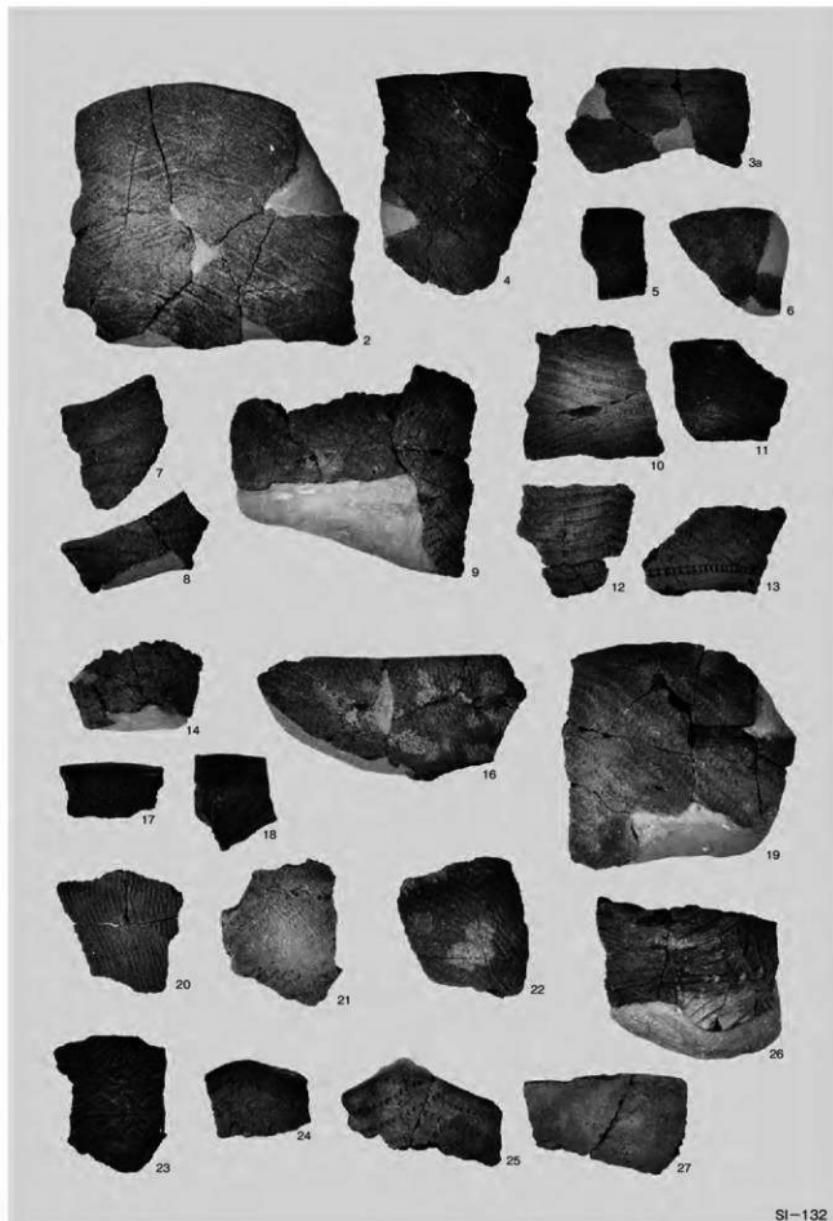
SI-127



绳文土器 (10)

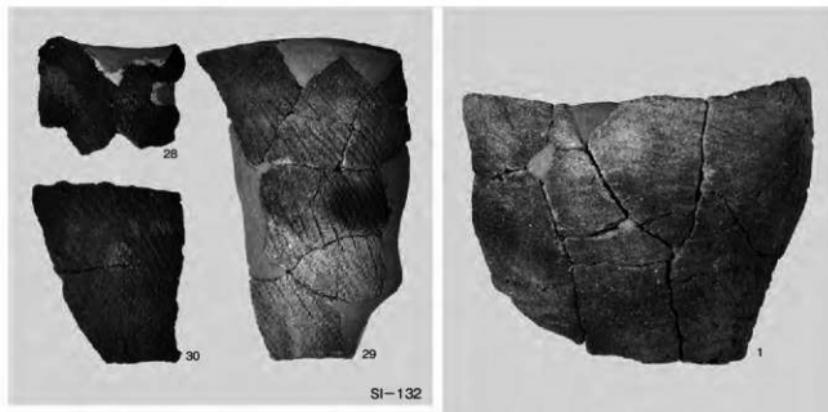


縄文土器 (11)

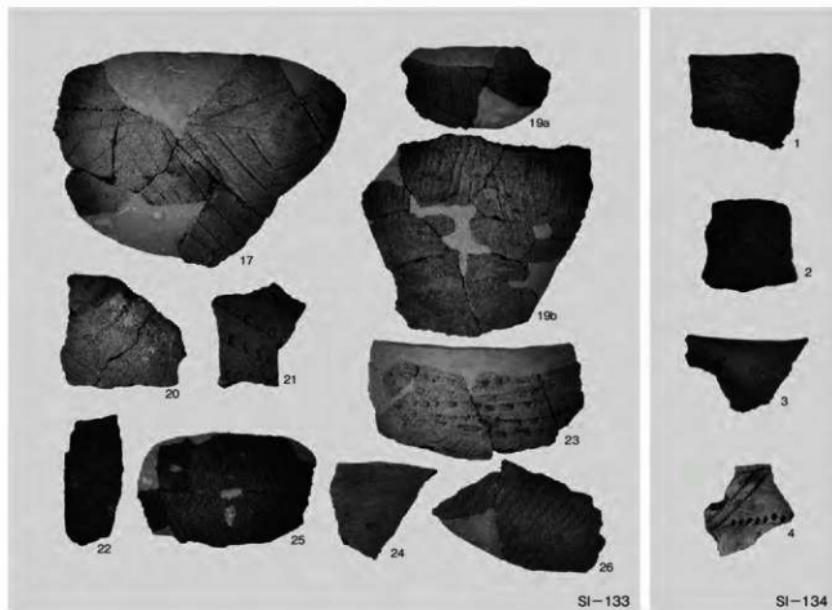


縄文土器 (12)

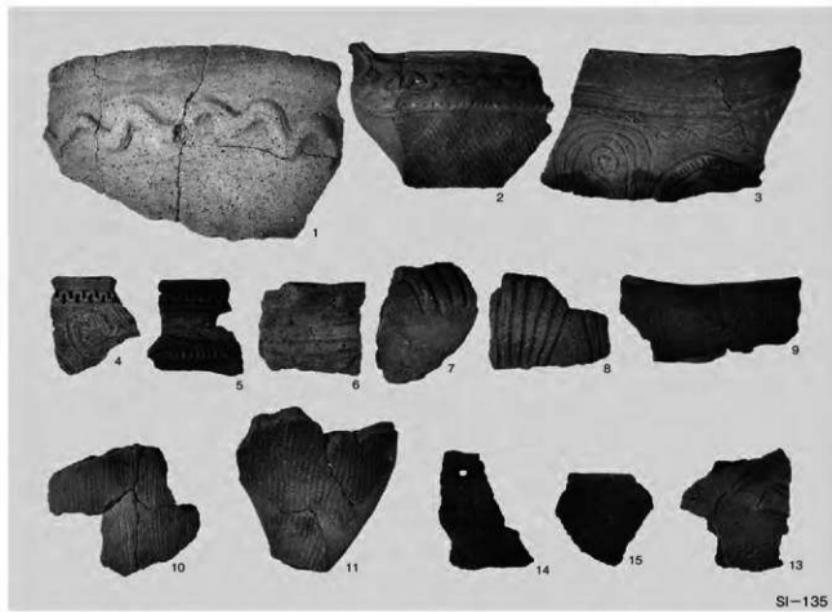
SI-132



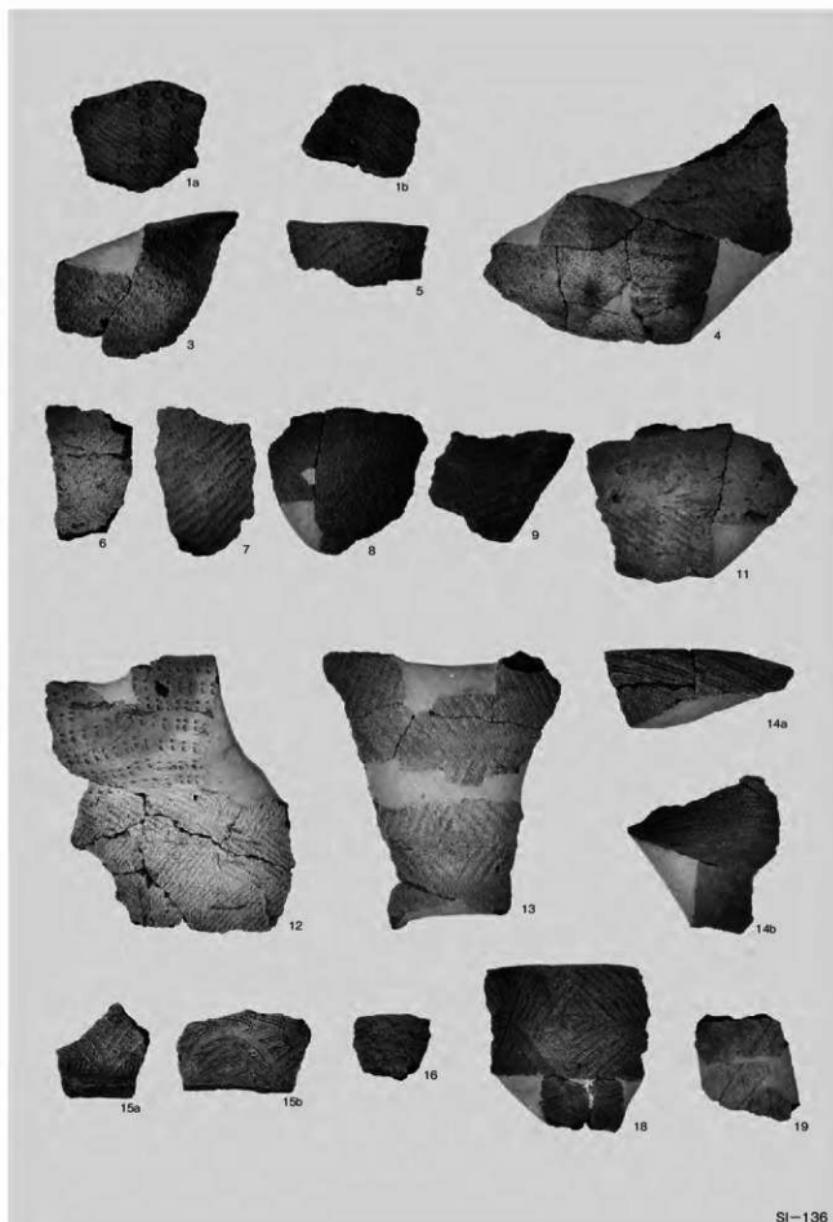
縄文土器 (13)



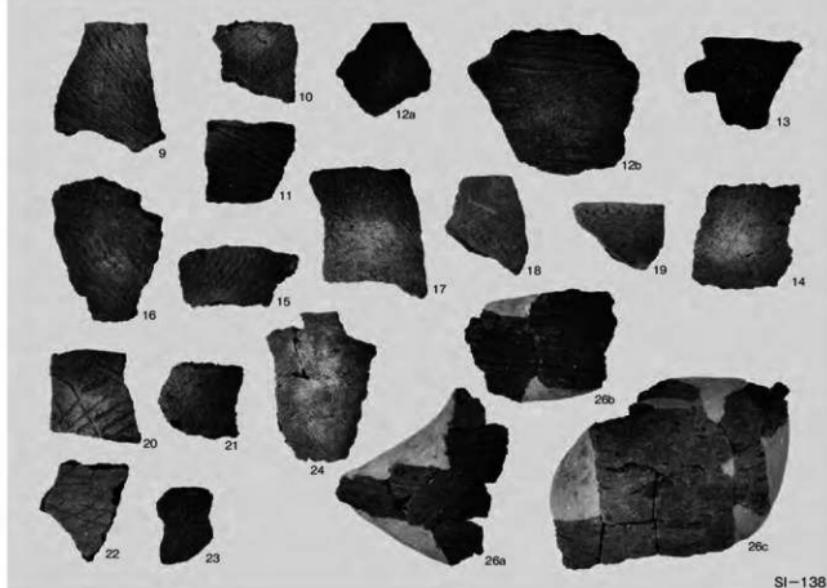
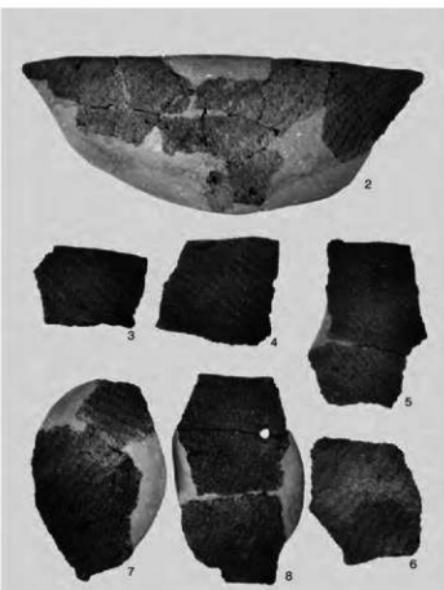
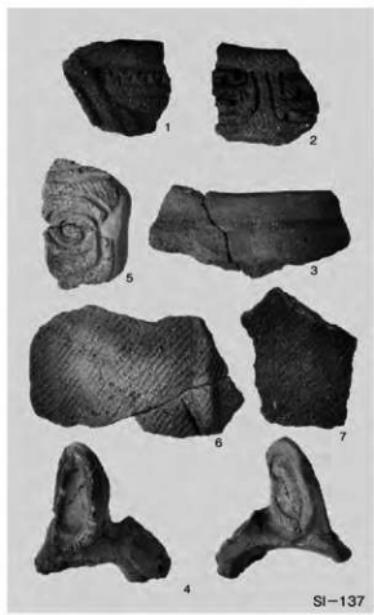
SI-134



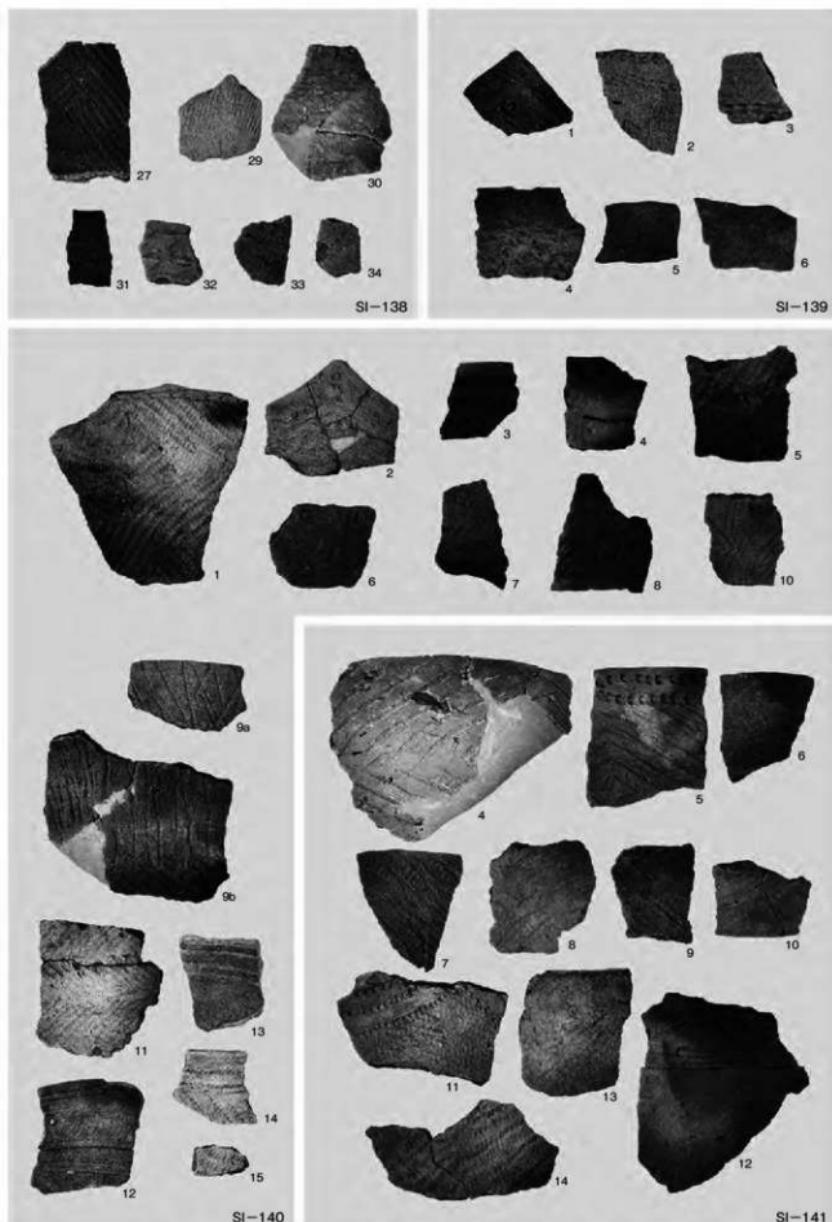
縄文土器 (14)



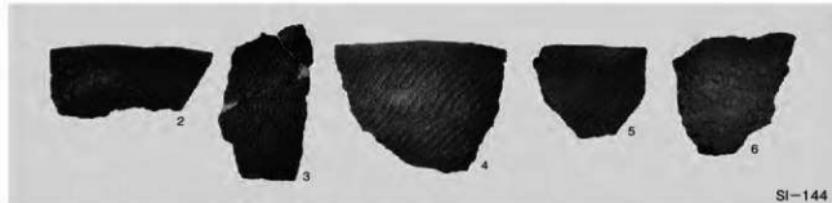
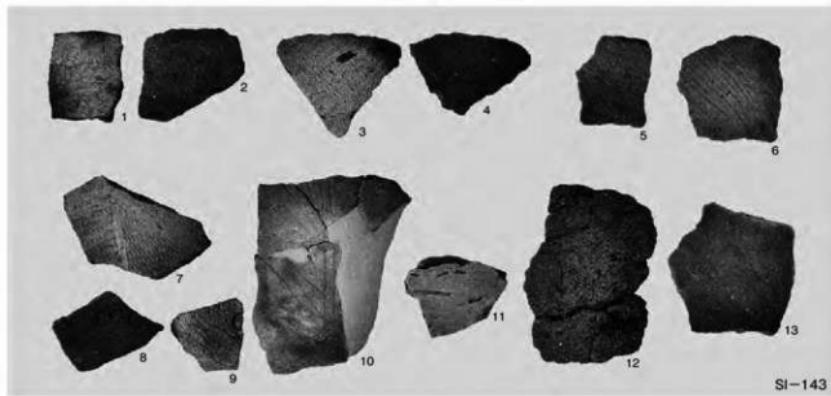
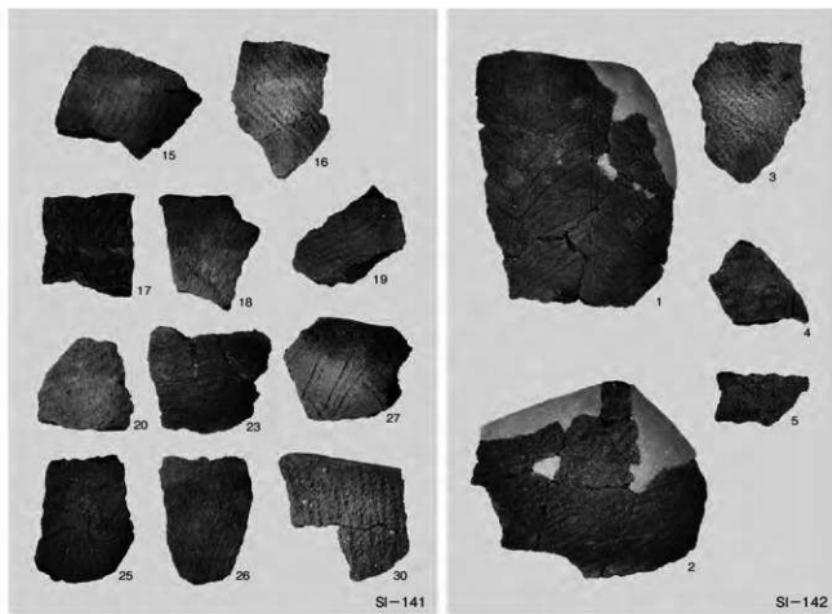
縄文土器 (15)



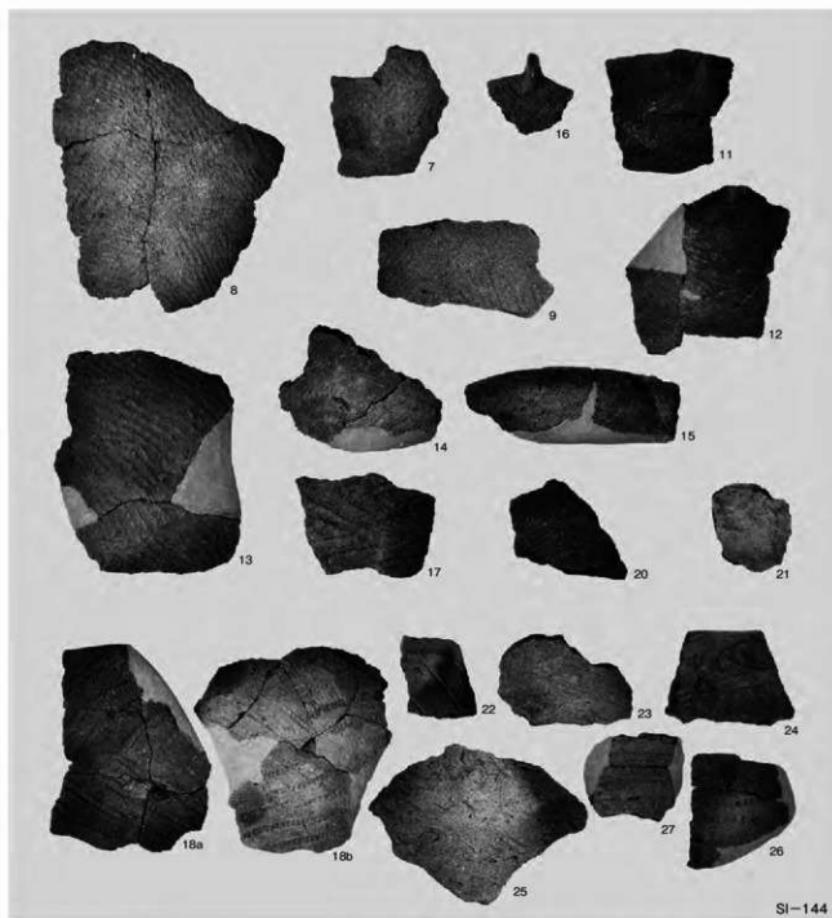
縄文土器 (16)



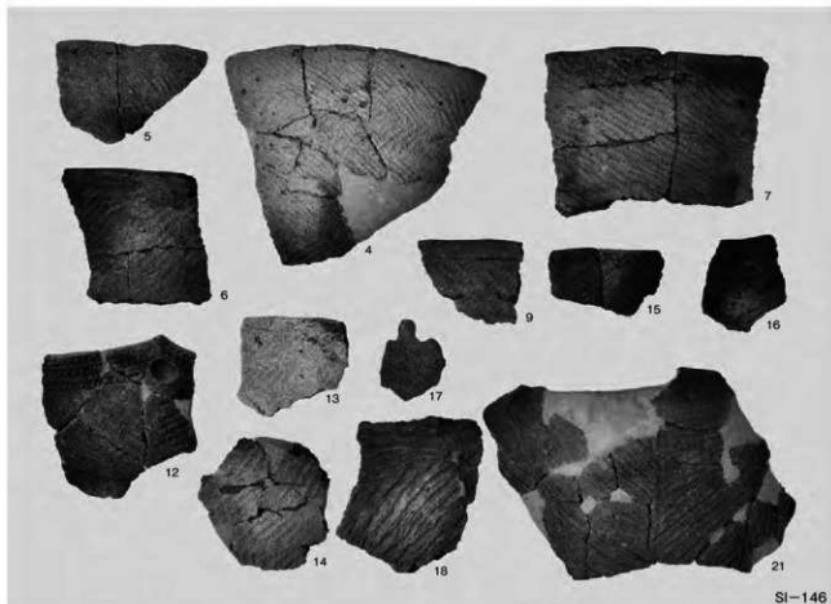
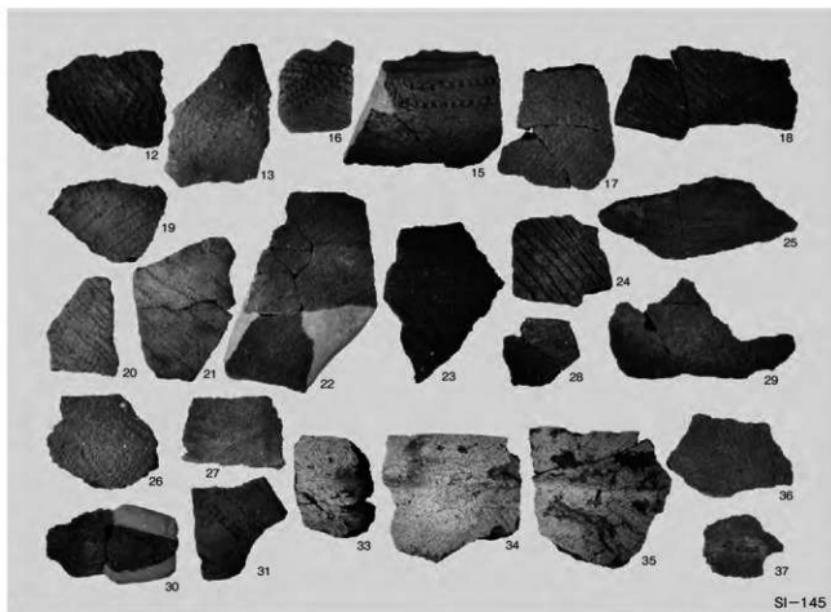
縄文土器 (17)



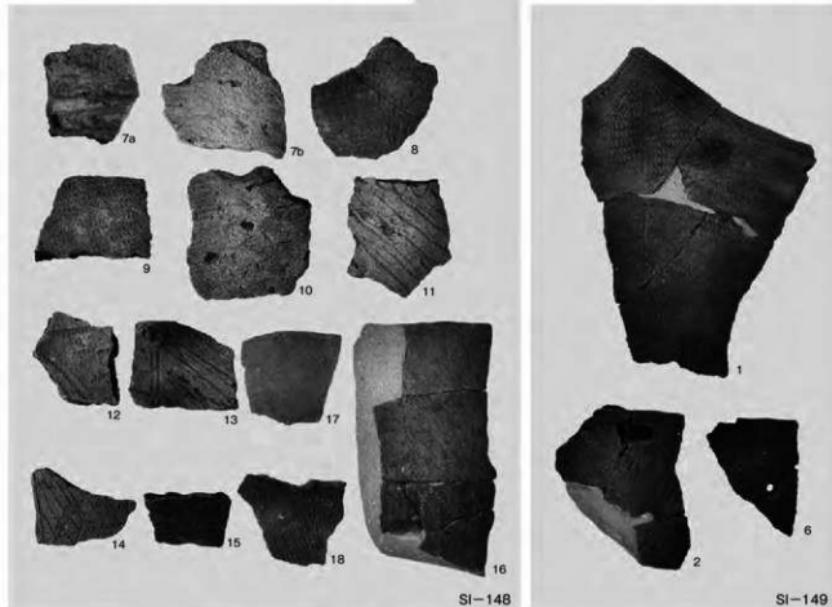
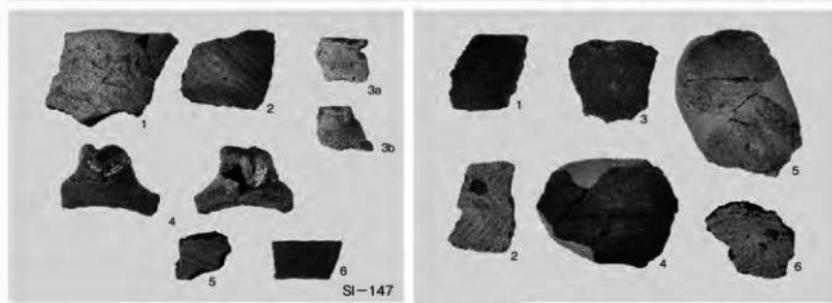
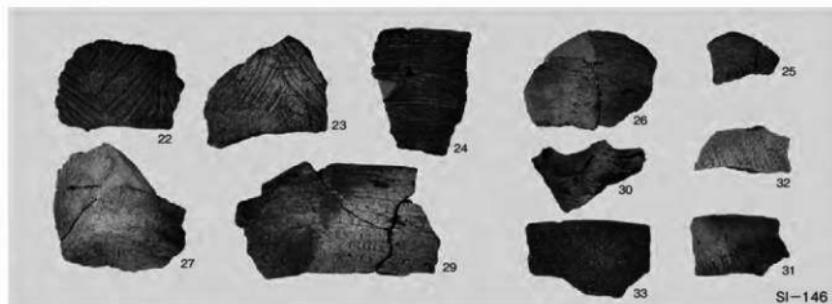
縄文土器 (18)



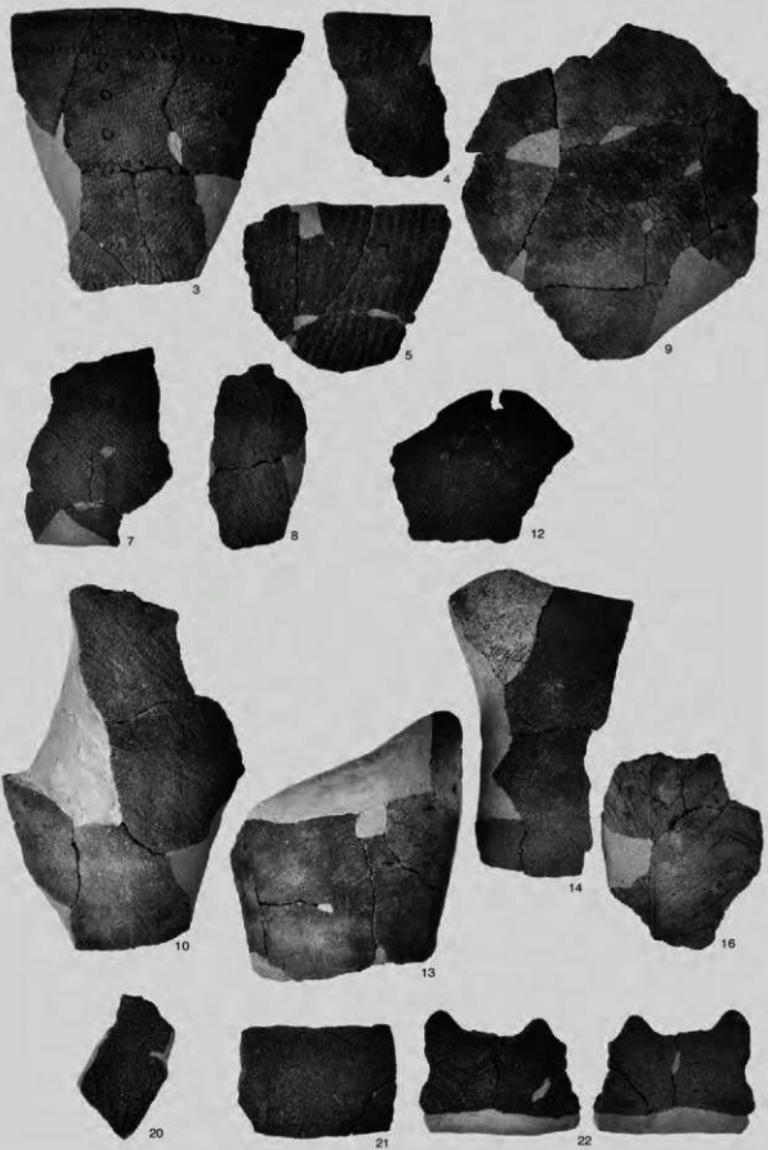
縄文土器 (19)



縄文土器 (20)



縄文土器 (21)

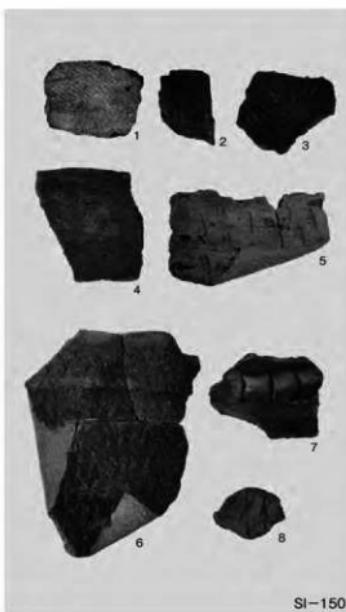


縄文土器 (22)

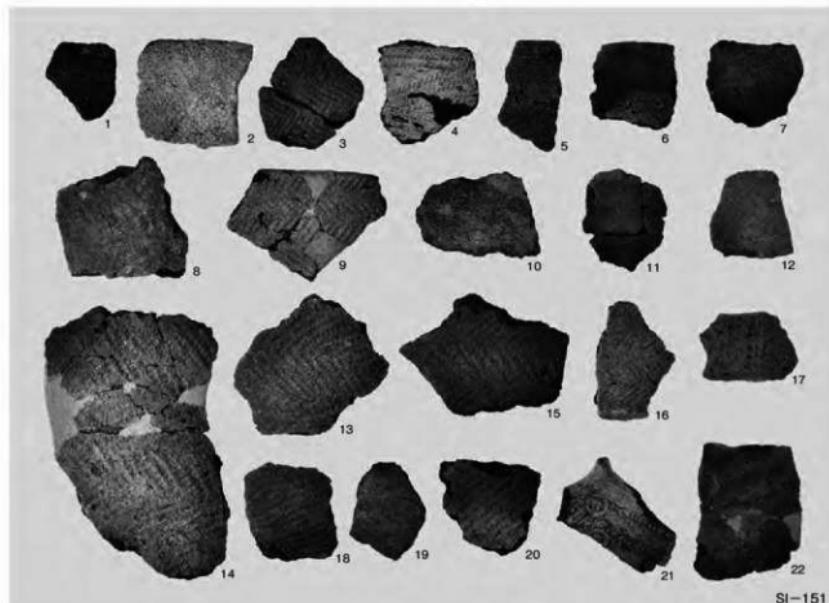
SI-149



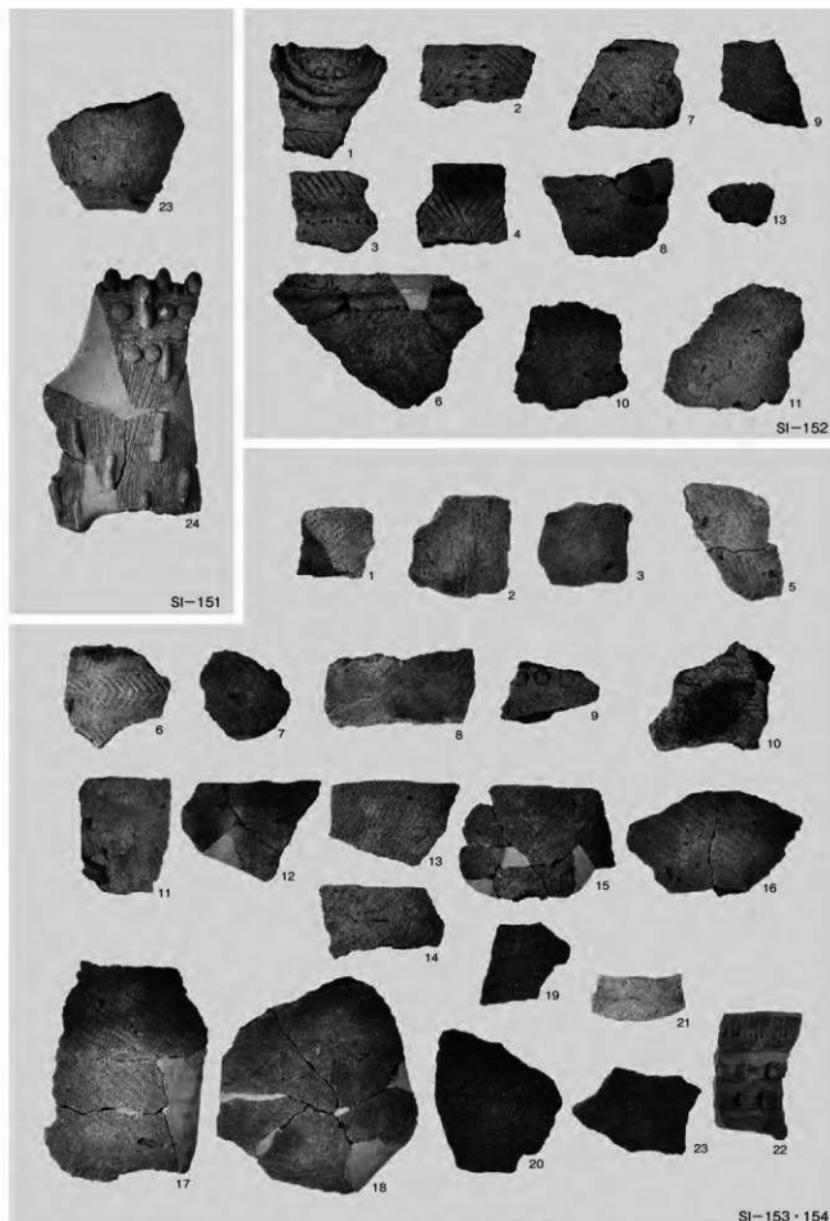
SI-149



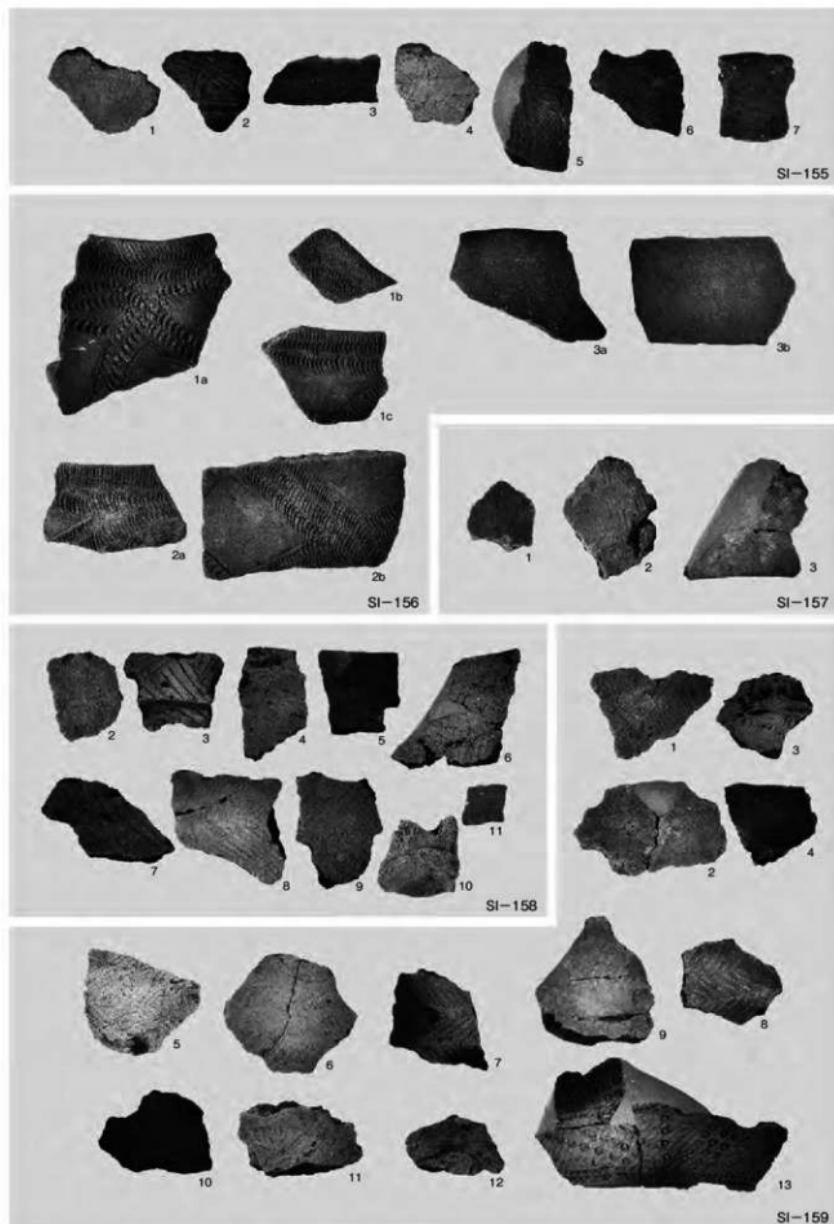
SI-150



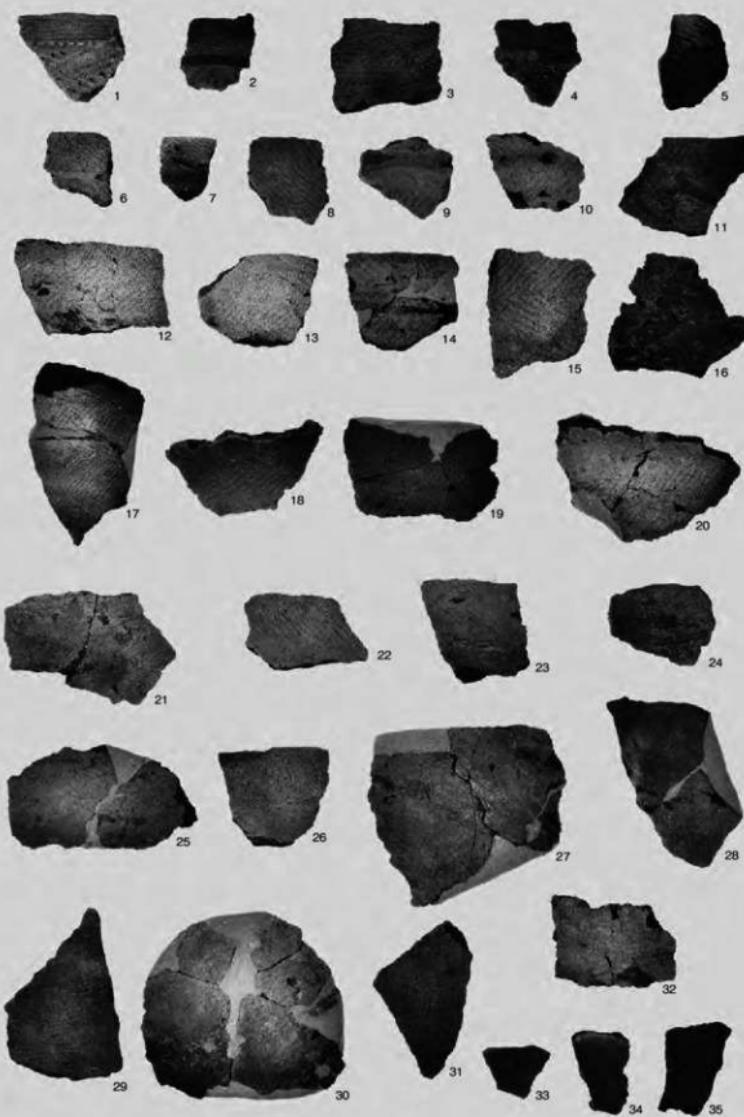
縄文土器 (23)

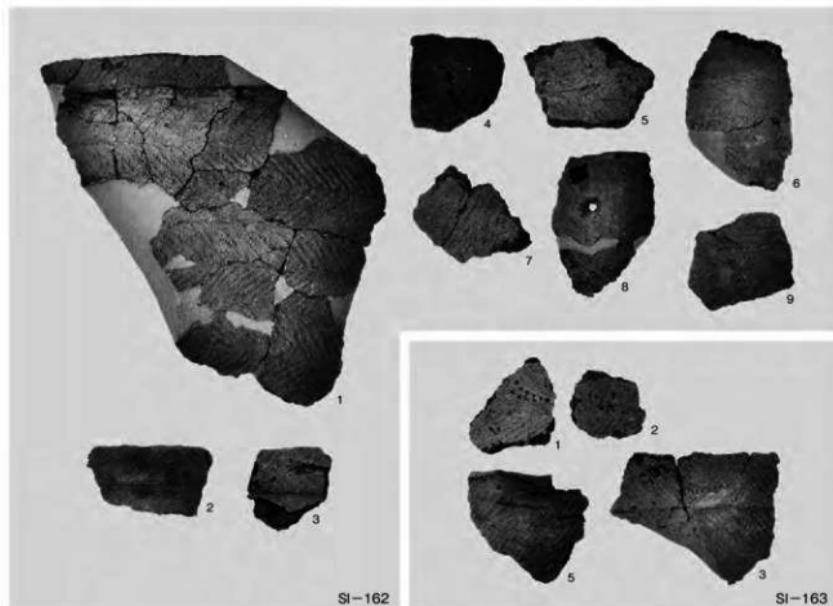
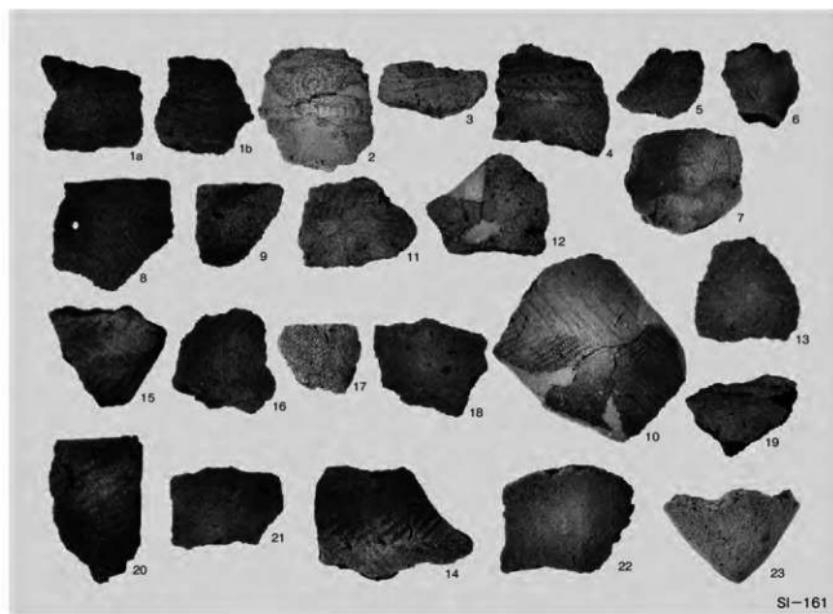


縄文土器 (24)

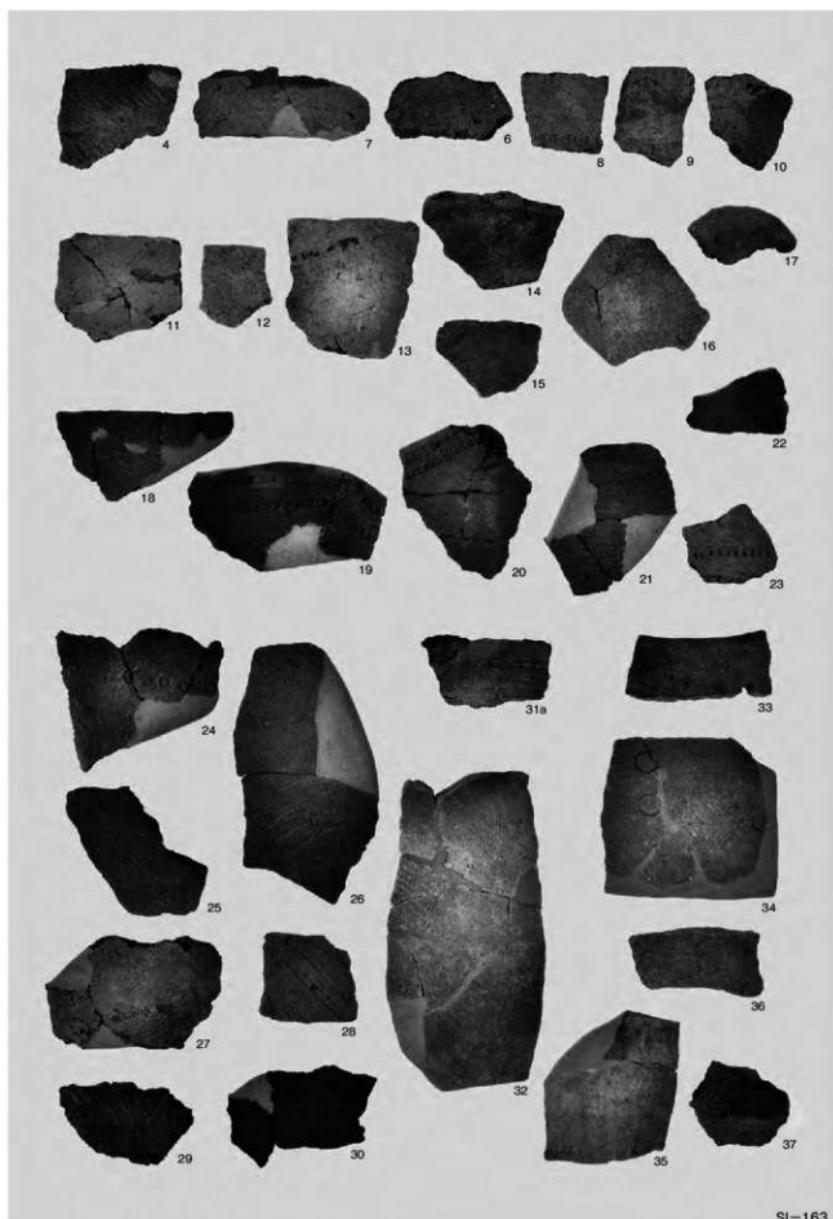


縄文土器 (25)

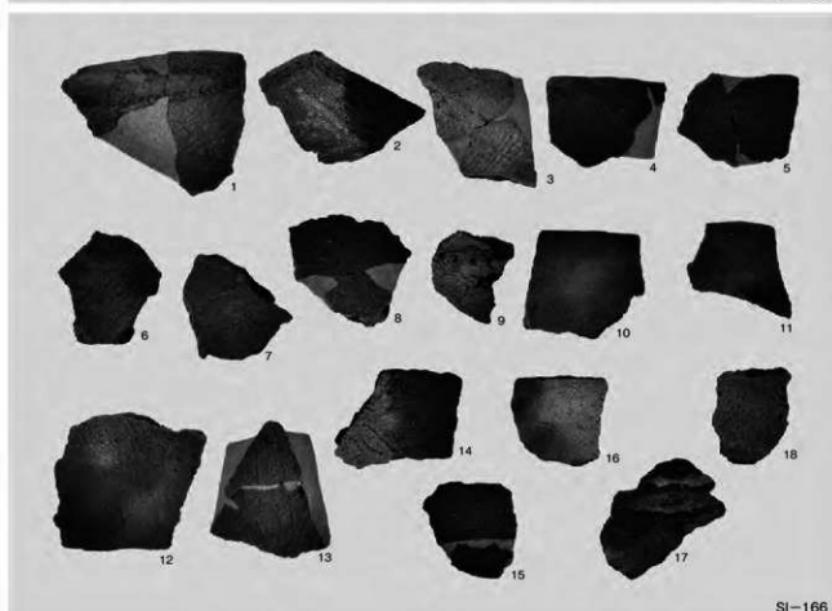
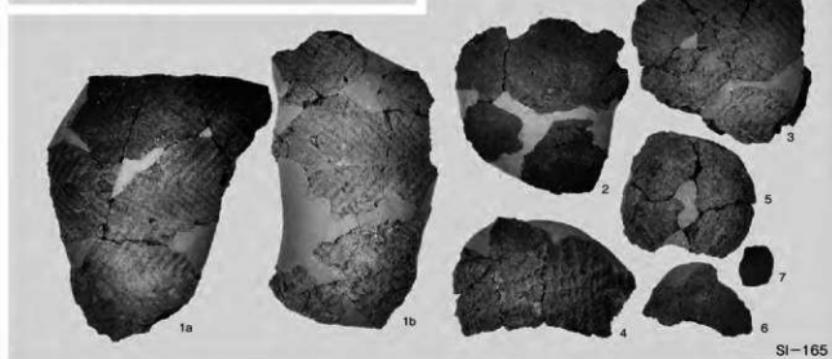
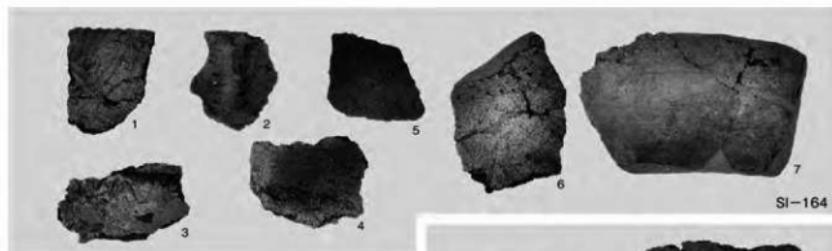


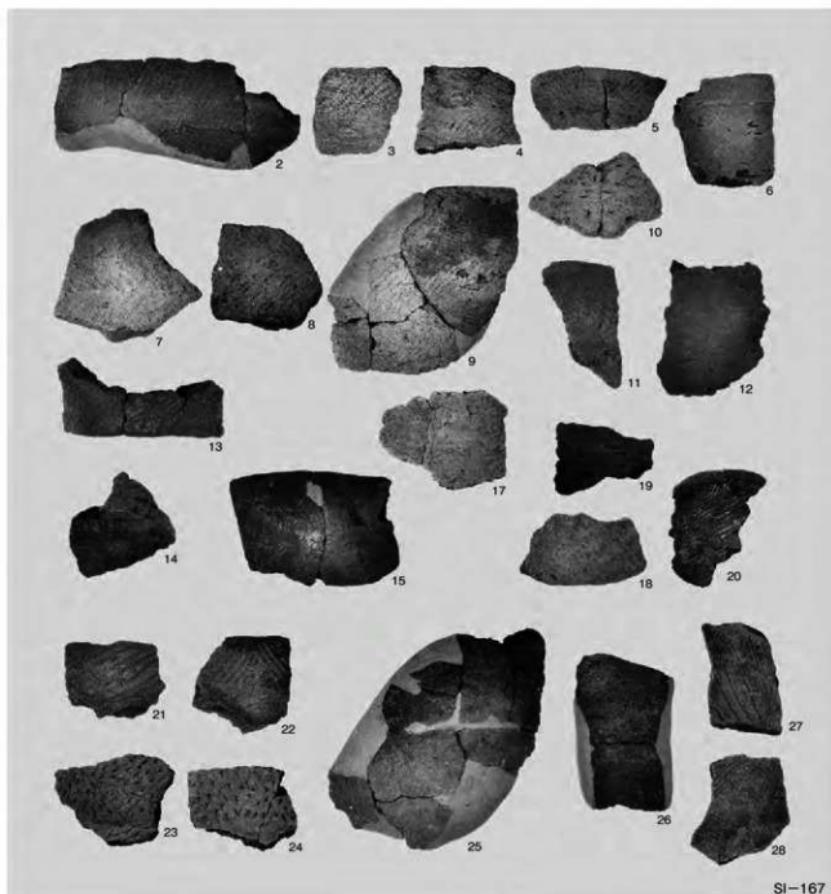


縄文土器 (27)

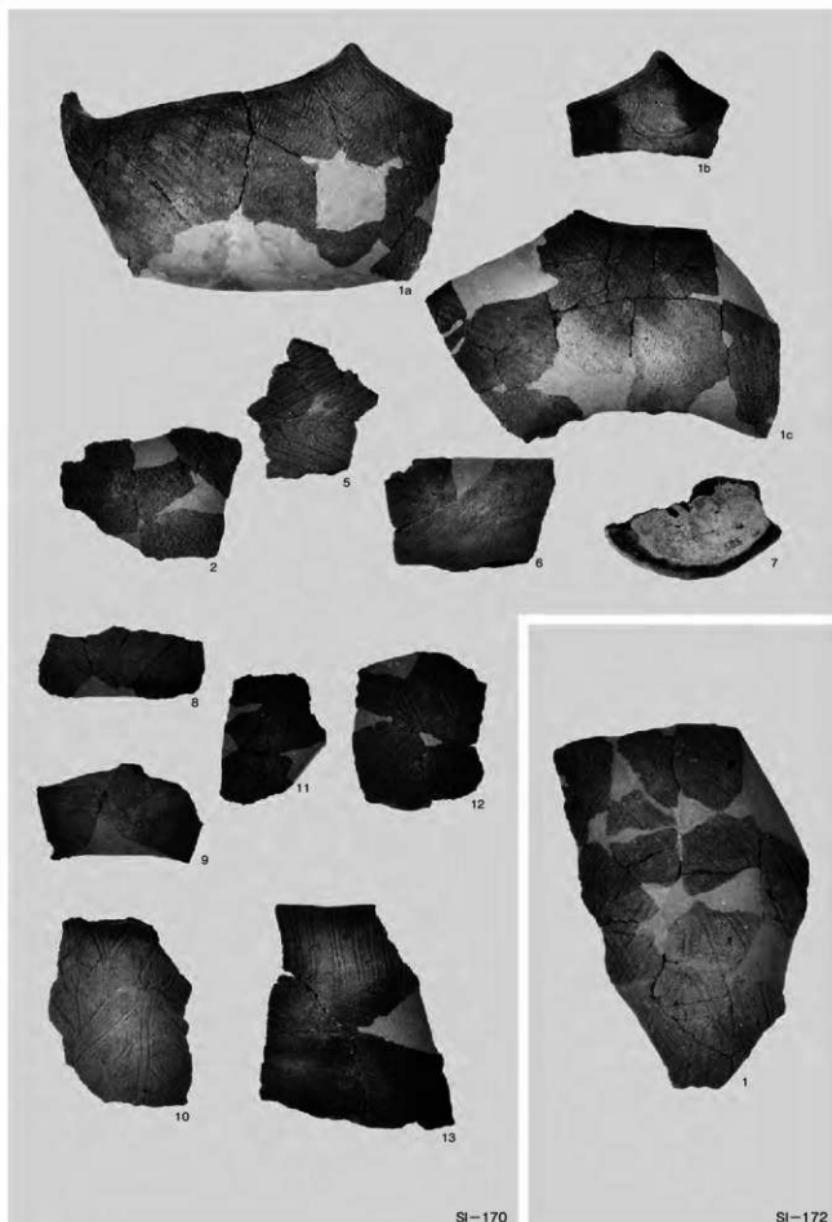


縄文土器 (28)

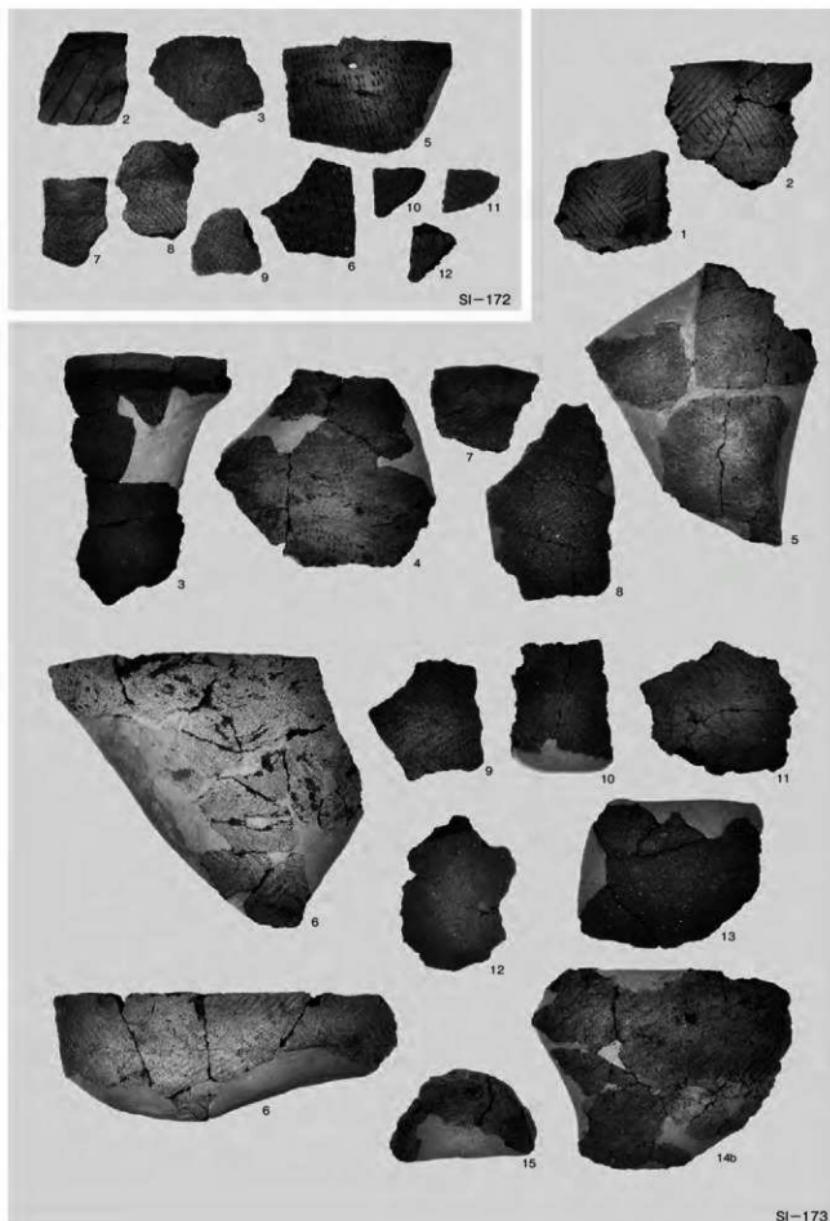




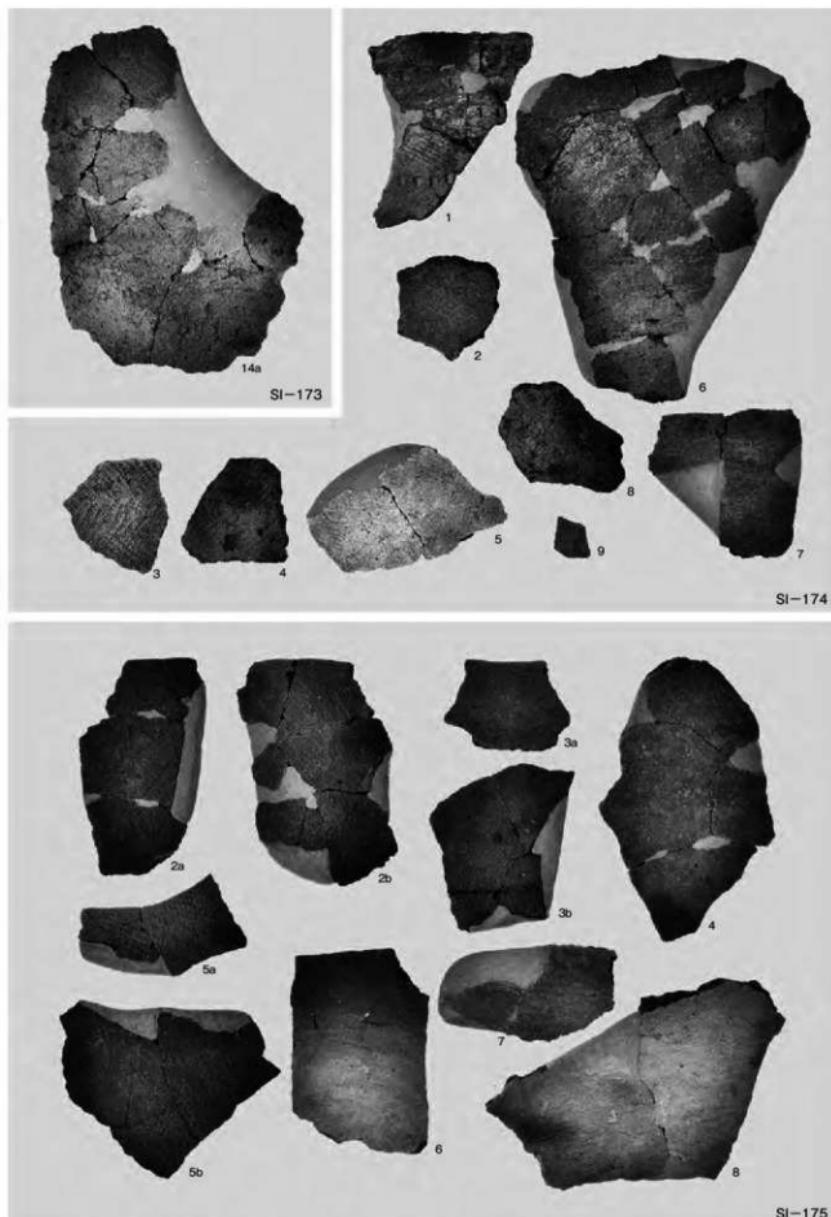
縄文土器 (30)



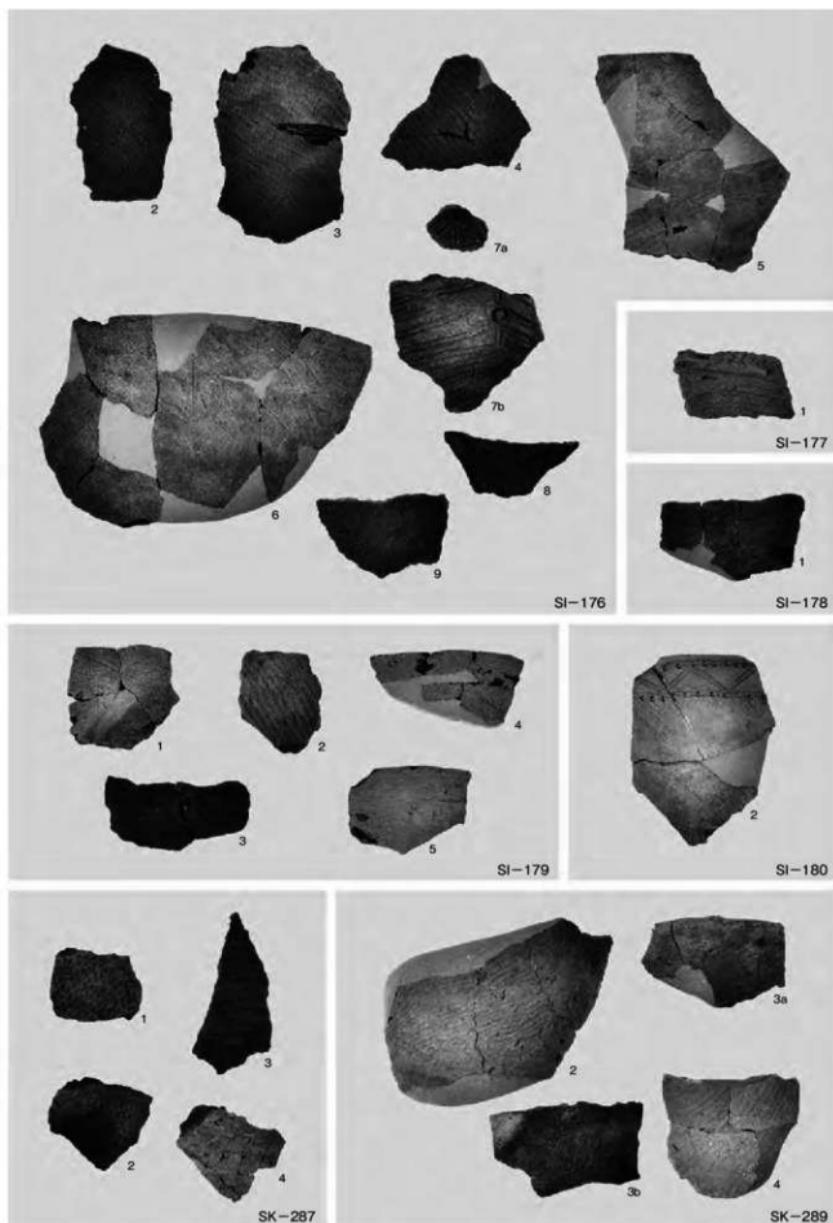
縄文土器 (31)



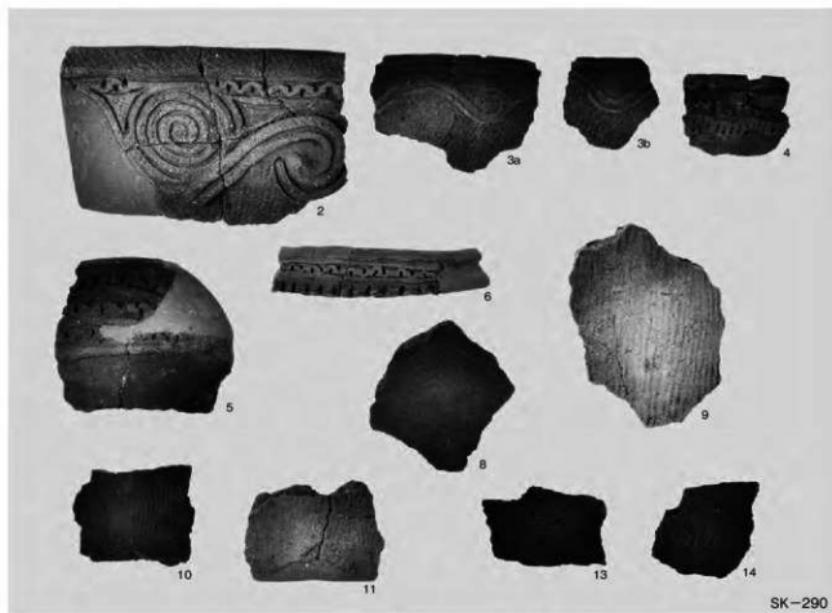
绳文土器 (32)



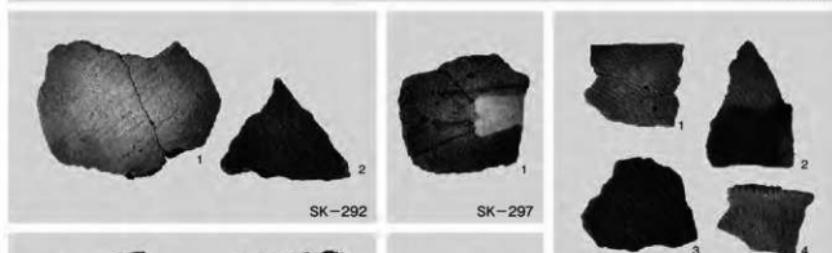
縄文土器 (33)



縄文土器 (34)



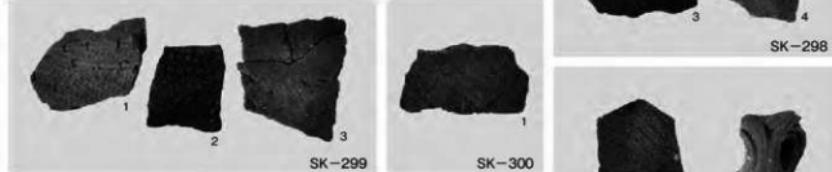
SK-290



SK-292

SK-297

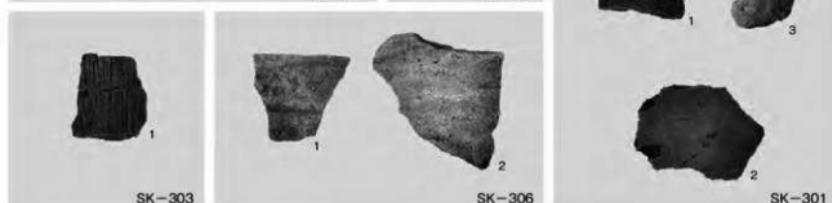
SK-298



SK-299

SK-300

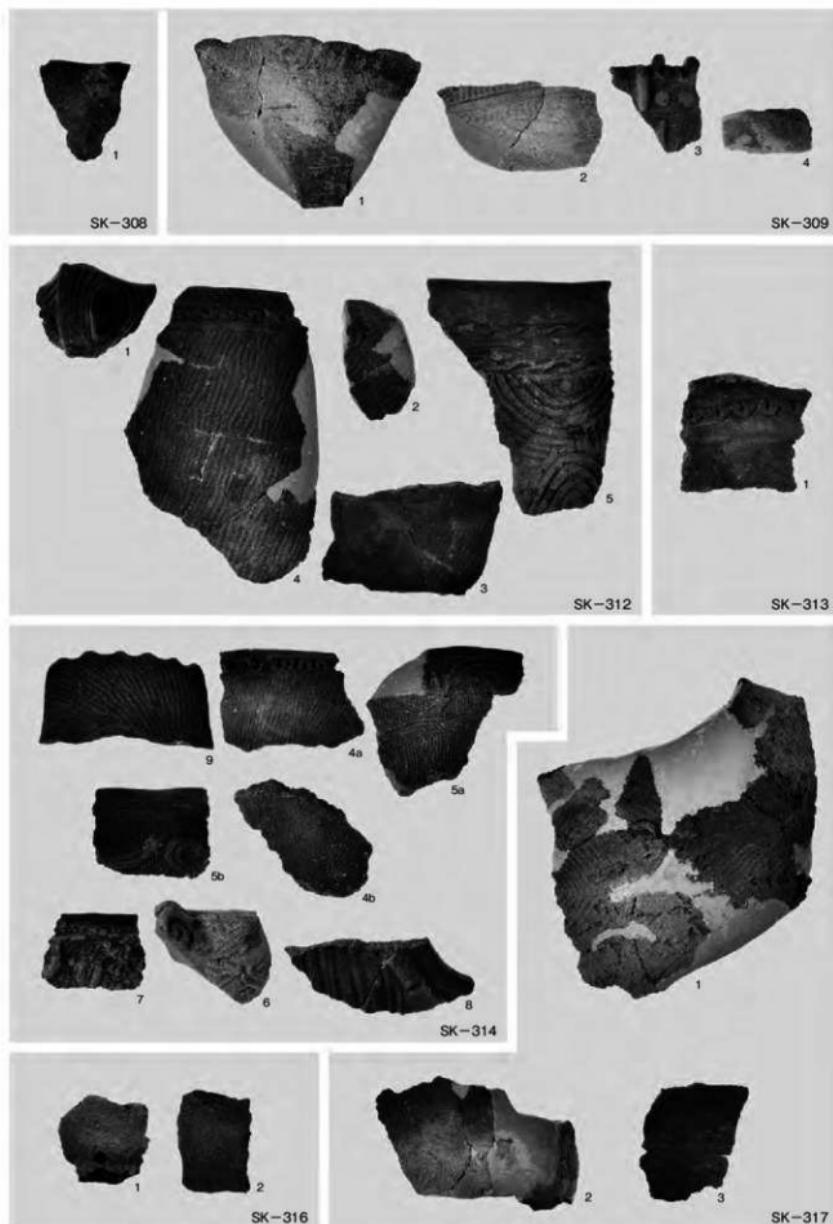
SK-298



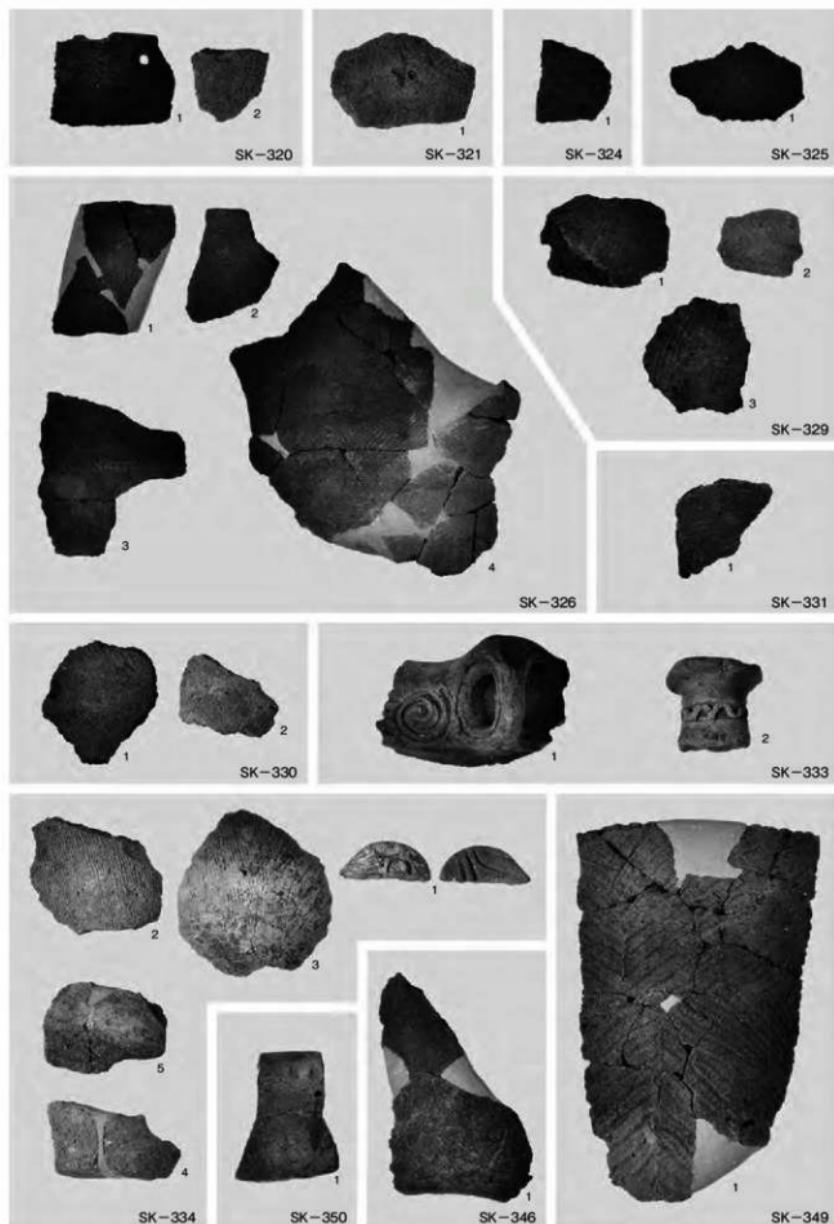
SK-303

SK-306

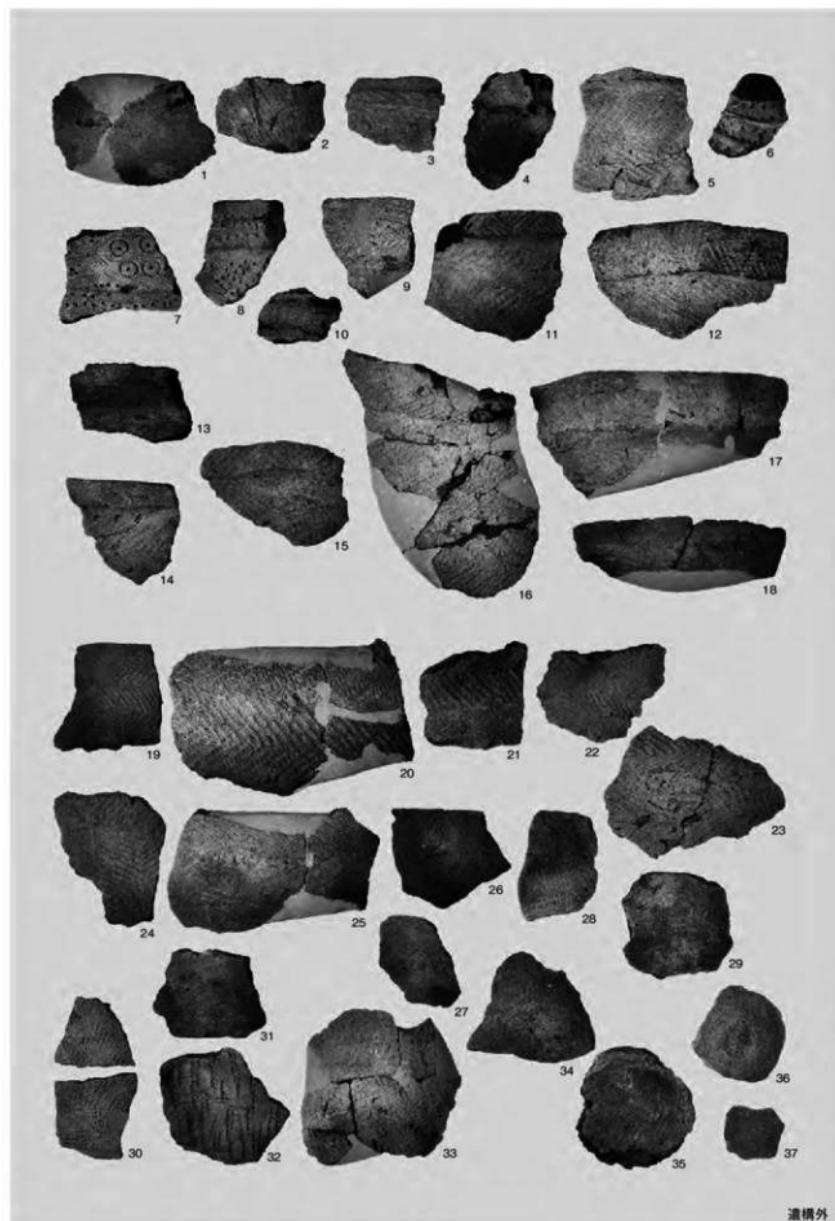
SK-301



縄文土器 (36)

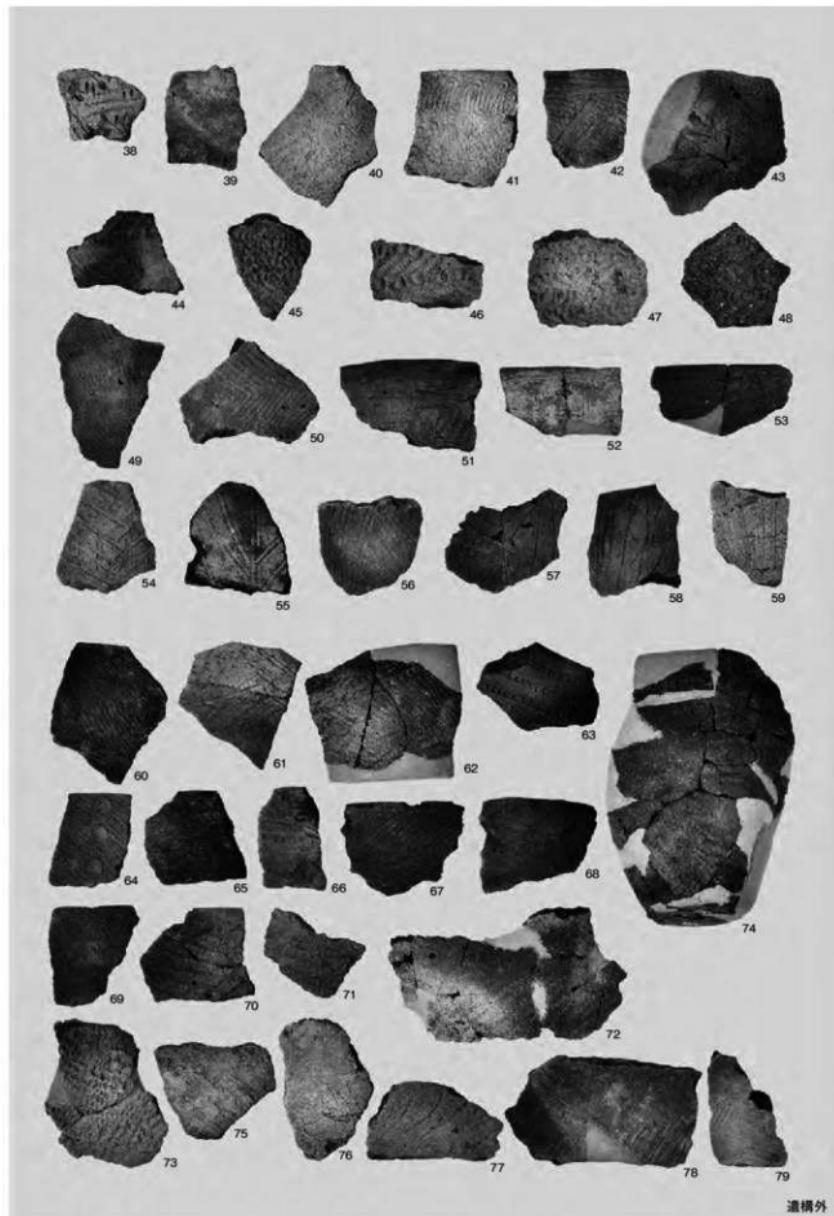


縄文土器 (37)



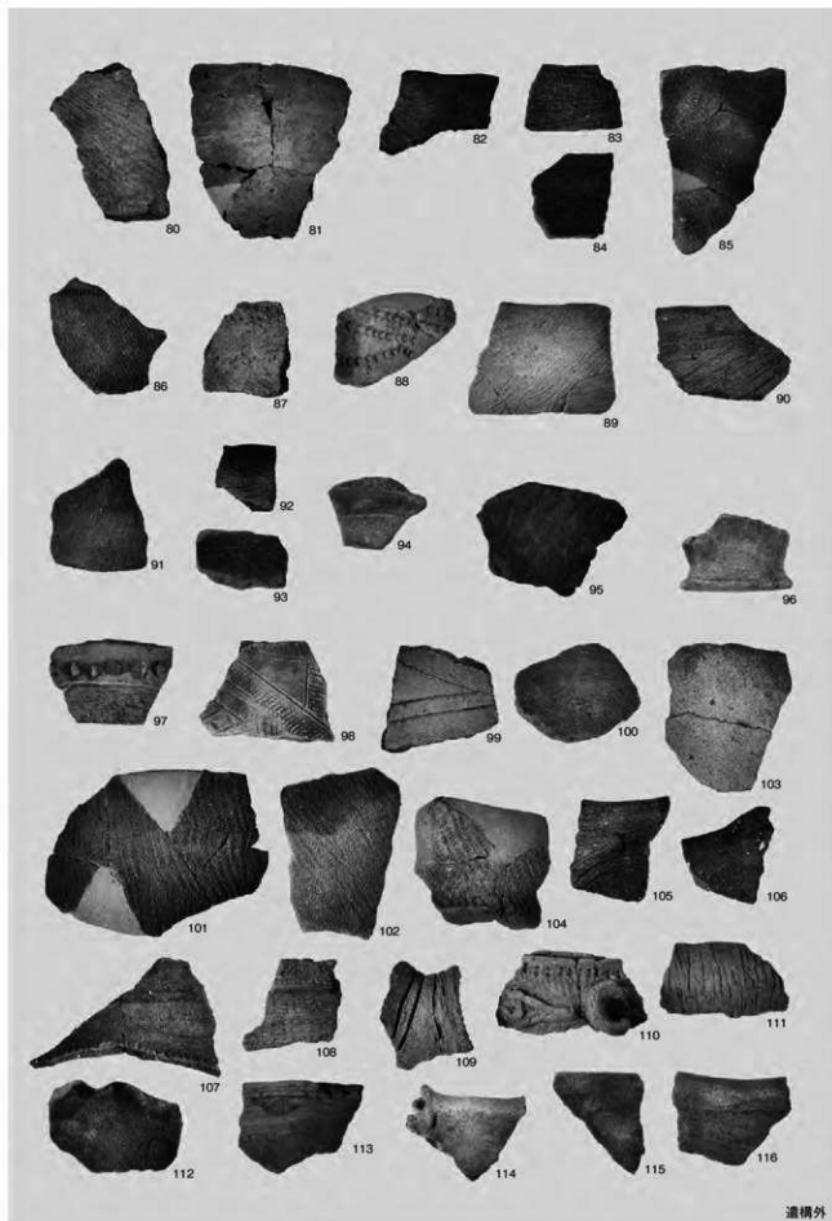
縄文土器 (38)

遺構外



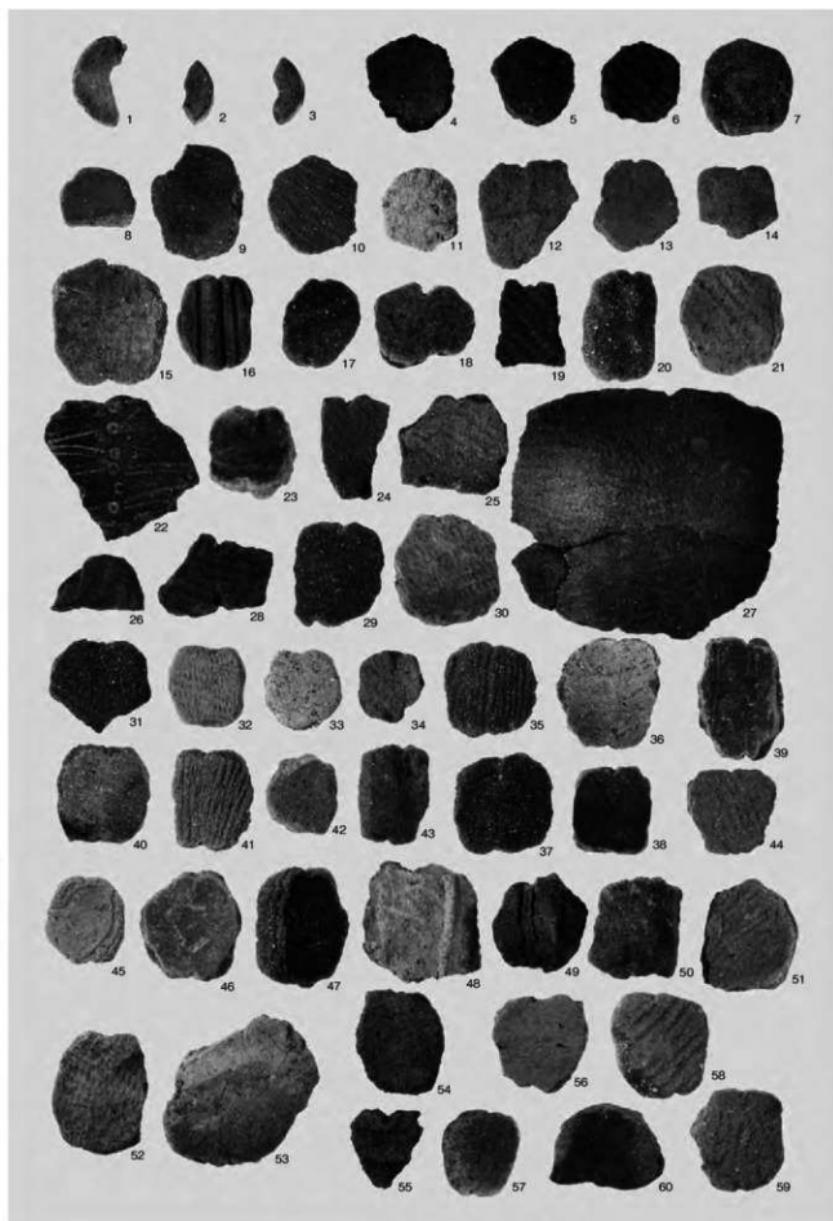
縄文土器 (39)

遺構外

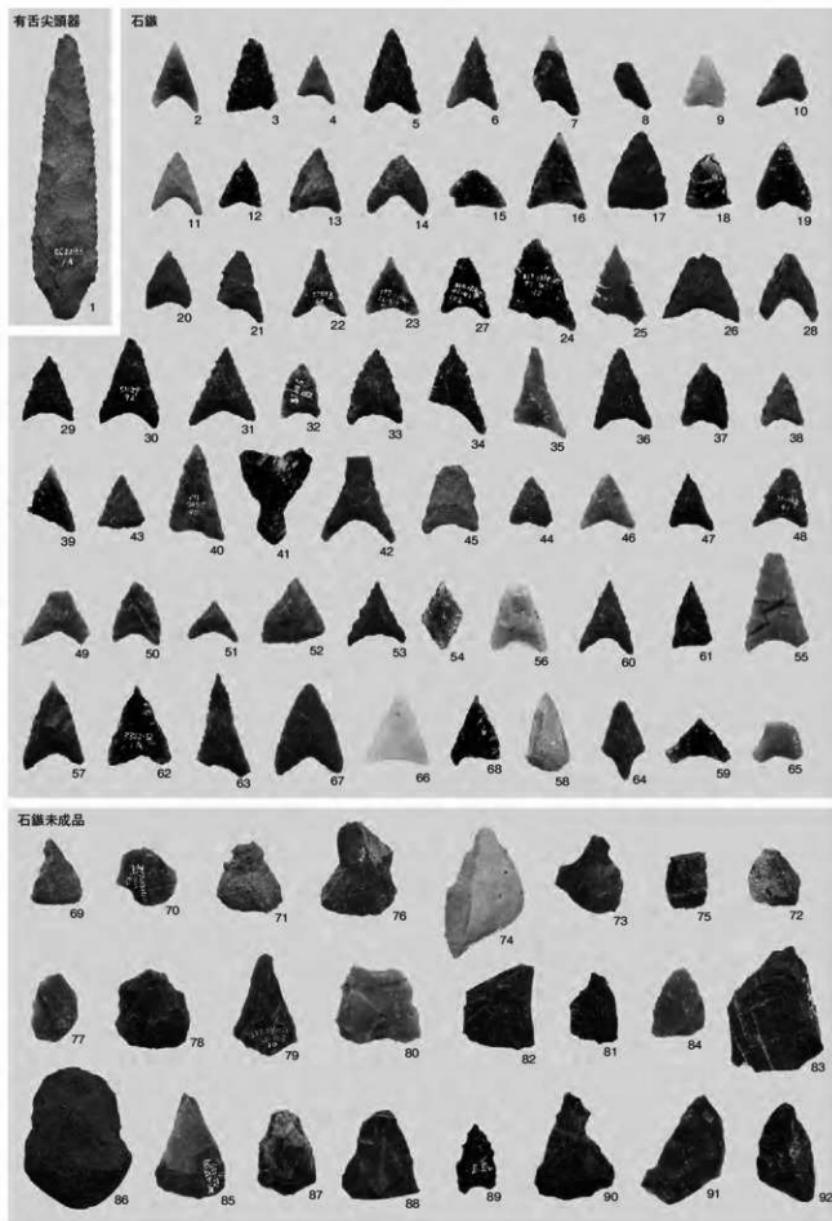


縄文土器 (40)

遺構外

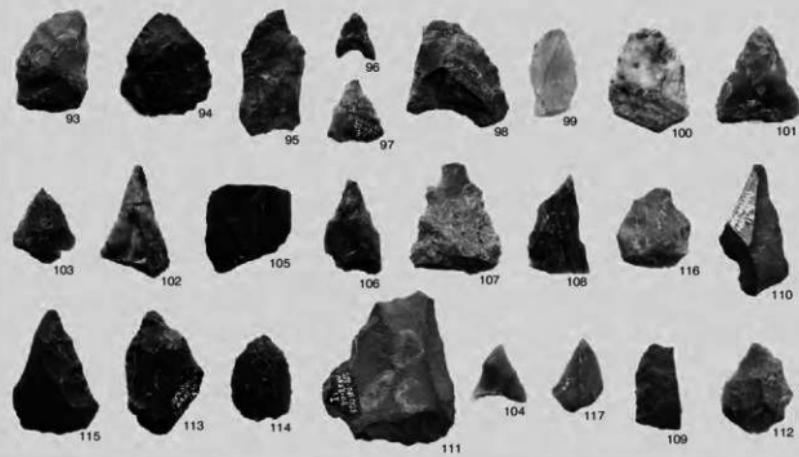


縄文時代土製品



縄文時代石器（1）

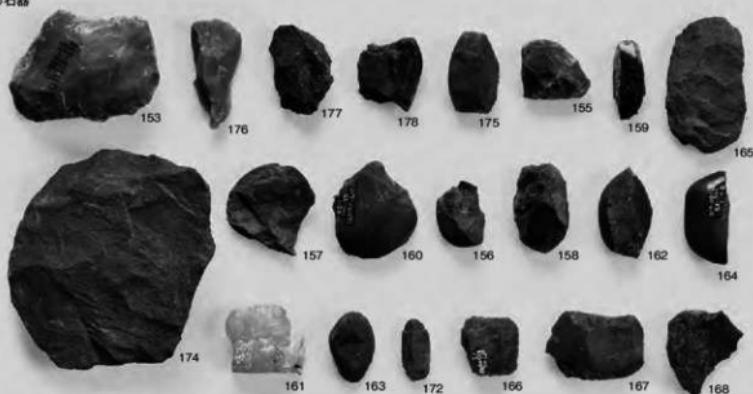
石器未成品



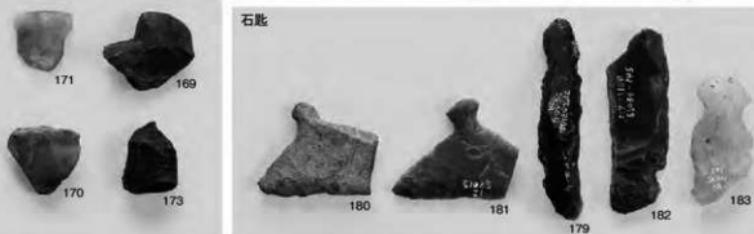
楔形石器



楔形石器



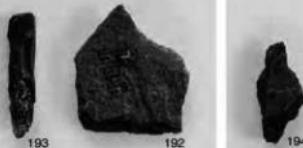
石匙



石锥



石锥未品



石錐



異形石器



块状耳飾



石製品

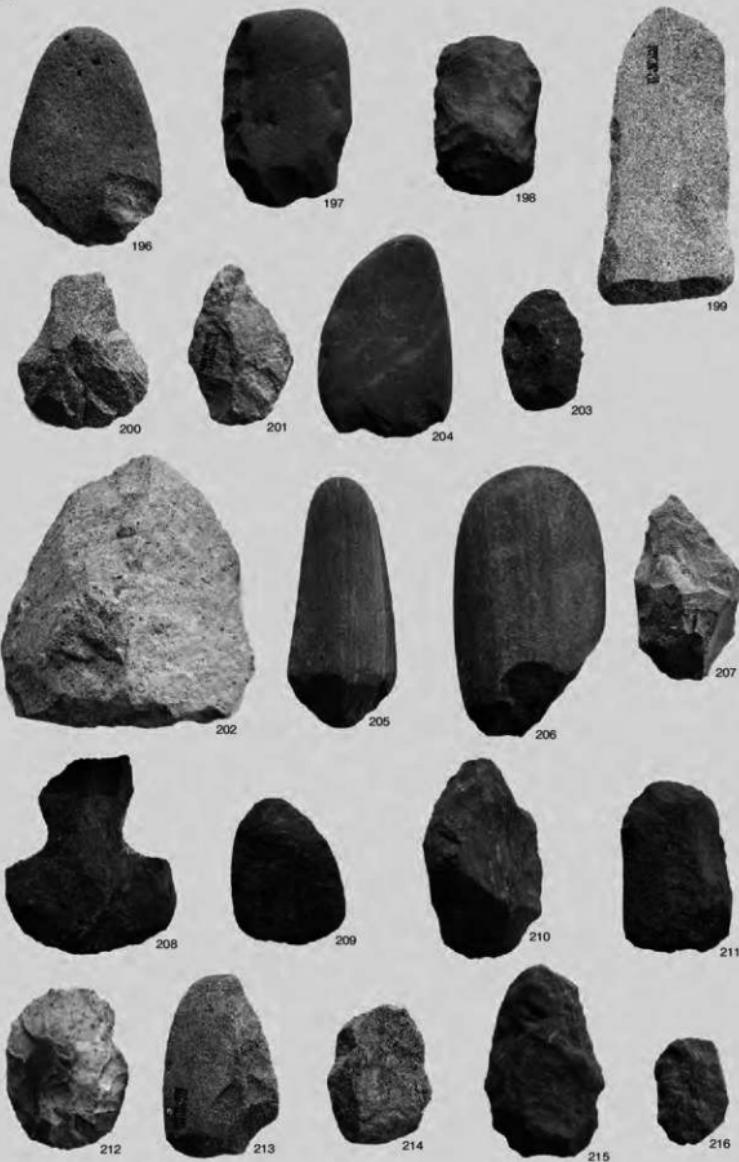


石核



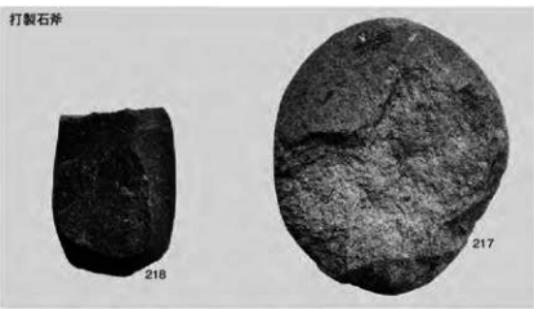
縄文時代石器（3）

打製石斧



縄文時代石器（4）

打製石斧



磨製石斧



局部磨製石斧



226

228



227



229

砾器



234



235



236



231



232



233

磨石類



237



239



238



240



241



243



242



244



245



246



247



248

磨石類



縄文時代石器（7）

磨石類



敲石



砧石



縄文時代石器（8）

台石



スタンプ形石器



石皿



283



284



285

侧面調整棒



302



303



304



305



306

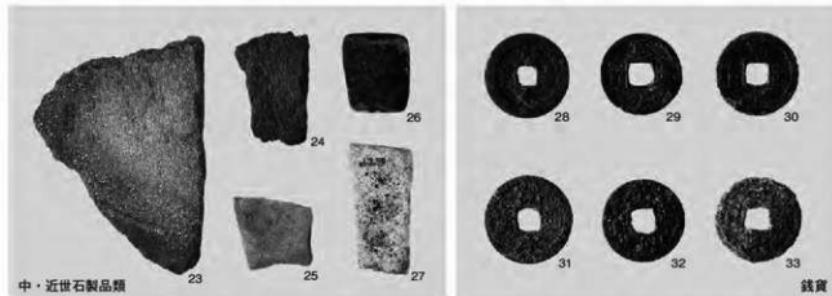
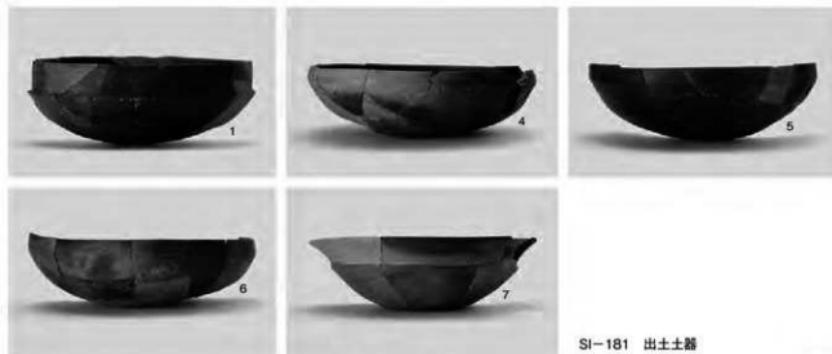
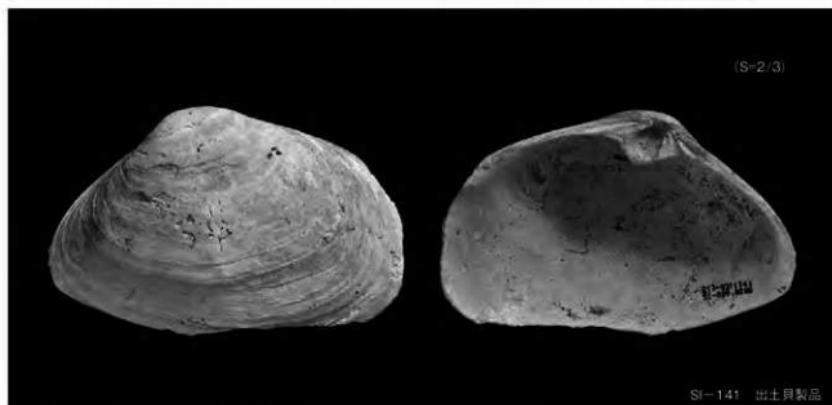
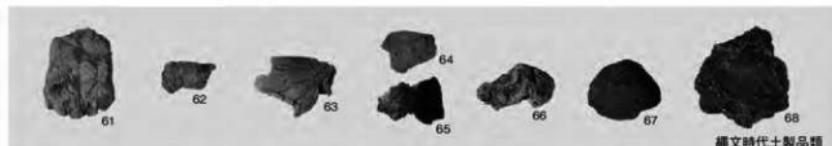


307

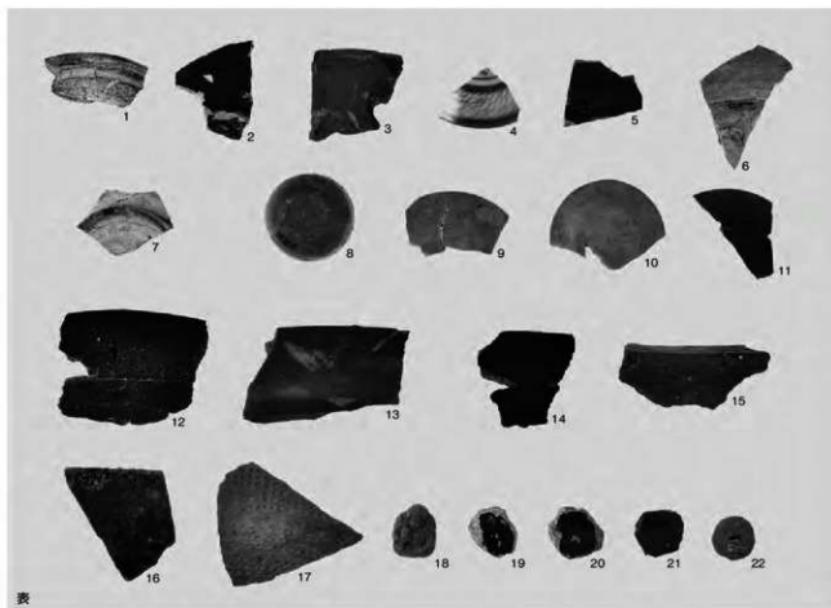
側面調整標



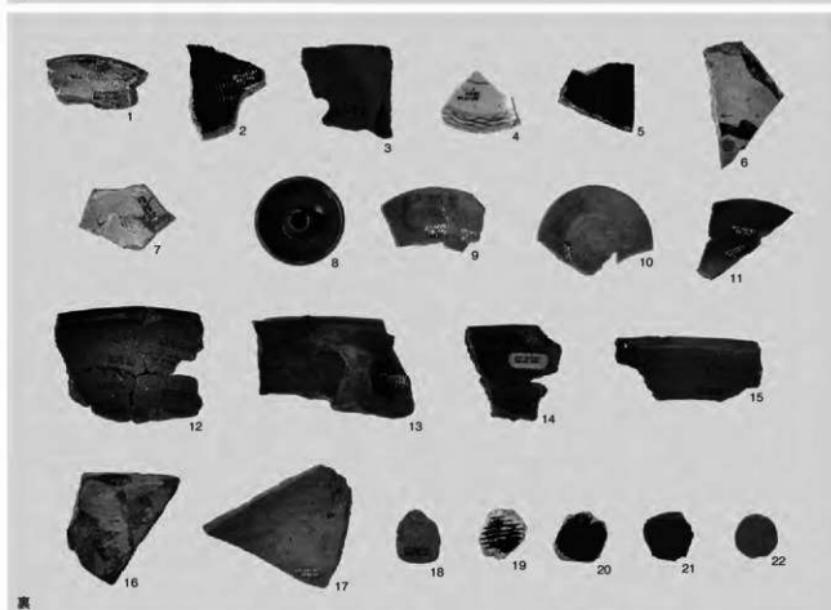
縄文時代石器 (11)



縄文・古墳時代遺物、中・近世遺物（1）



表



裏

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かわほくぶひがしちくまいぞうぶんかざいはくつちょうさはうこくしょ							
書名	柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名	柏市大松遺跡 縄文時代以降編2							
巻次	9							
シリーズ名	千葉県教育振興財團調査報告							
シリーズ番号	第754集							
編著者名	森本和男・山口典子・小高春雄・橋本勝雄							
編集機関	公益財団法人千葉県教育振興財團							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦2016年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村		遺跡番号						
大松遺跡 (8)~(18)	千葉県柏市小青田字 大松334-1ほか	12217	031	35° 54' 11"	139° 57' 25"	20030623 ~ 20101129	8,947m ²	柏北部東地区土地区间 整理事業に伴う埋蔵文化財調査
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大松遺跡 (8)~(18)	集落跡 包蔵地	縄文時代	竪穴住居	70軒	縄文土器・土製品(块状耳飾・土製 円板・土器片鍾)、石器(石錐・石 錐未成品・楔形石器・石匙・石錐・ 石錐未成品・打製石斧・磨製石斧・ 磨石類・敲石・石皿・側面調整櫛など) 、石製品(块状耳飾)			
			炉穴 陶窓 土坑	2群 1基 59基				
		古墳時代	竪穴住居	1軒	土師器			
要約			中・近世	溝群 土坑 ピット群	6条 12基 1群	陶磁器・土器・板碑・砥石・錢貨		

千葉県教育振興財団調査報告第754集

柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書9

- 柏市大松遺跡 -

縄文時代以降編2

平成28年3月25日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
発 行 独立行政法人 都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿6-5-1
公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市施渡809番地の2
印 刷 株式会社 弘文社
市川市市川南2-7-2
